豊岡市 出石町

宮内堀脇遺跡 I

（一）町分久美浜線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

（此隅山城下遺跡の発掘調査報告）

［本文編］

平成21（2009）年３月

兵庫県教育委員会

豊岡市 出石町

宮内堀脇遺跡 I

（一）町分久美浜線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

（此隅山城下遺跡の発掘調査報告）

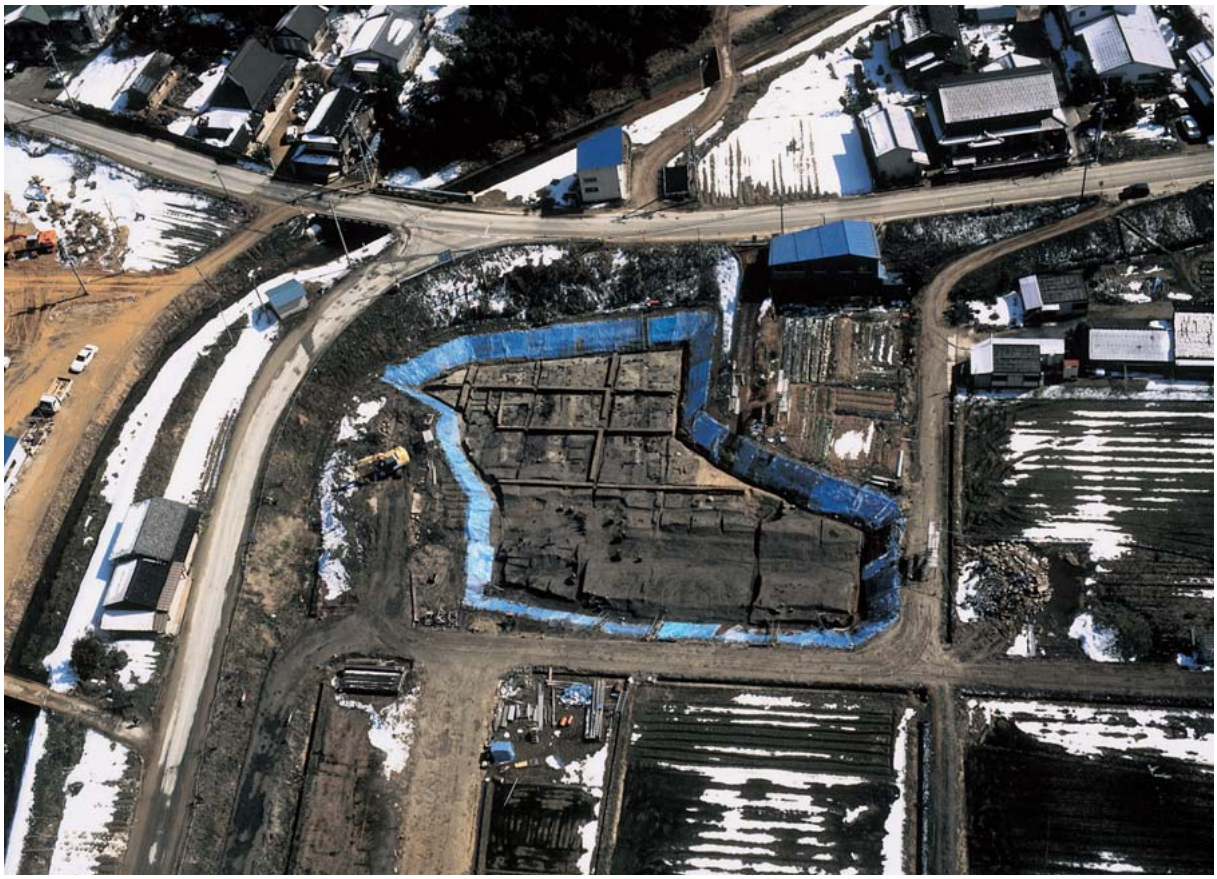
［本文編］

平成21（2009）年3月

兵庫県教育委員会

調査区遠景（南から）

調査区遠景（西から）



95年度調査区（西から）

96年度調査区（西から）

97年度調査区（西から）

95年度 2 面遺構の状況

96年度 7 面遺構

97年度 4 面遺構

位牌出土状況

墨書土器出土状況

三宝出土状況

ざる出土状況

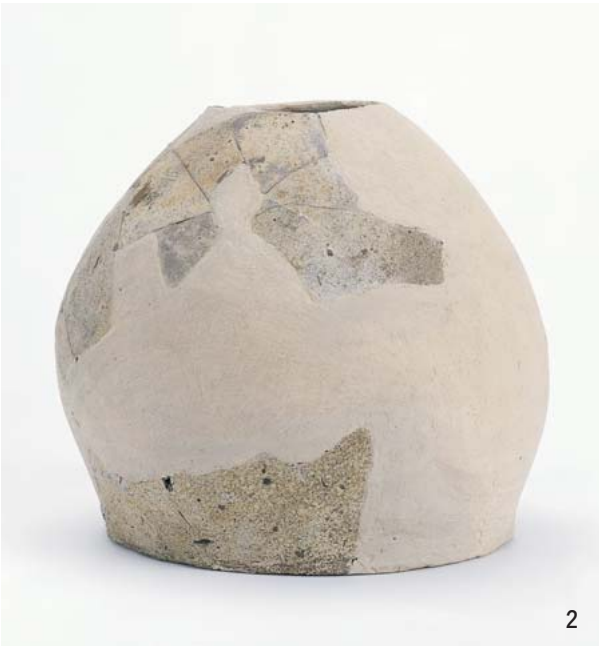
武家屋敷の主要遺物

各地の擂鉢

輸入陶器

輸入磁器

1


2

3

4

1　華南産四耳壷
2　李朝陶器壷
3　華南三彩水滴
4　金箔付陶器
5　碁石・双六駒石

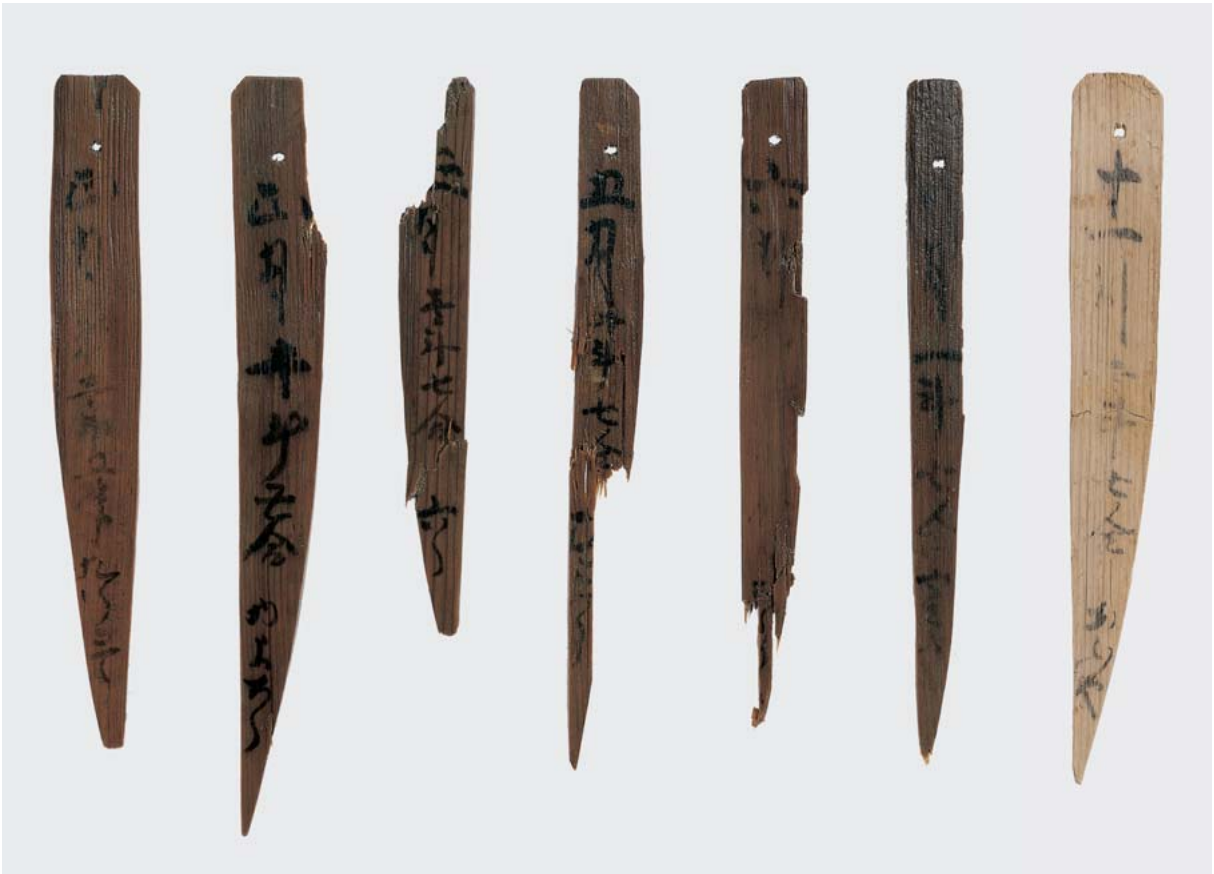
5

出土した金属製品（生活具）

出土した刀装具・武具

灰匙

兜　鍬形台



位牌

彩色木彫猿

人名墨書土器

例　　言

1．本書は兵庫県豊岡市出石町宮内に所在する、宮内堀脇遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、一般県道町分久美浜線建設事業に伴うもので、兵庫県但馬県民局県土整備部豊岡土木事務所の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が平成７年度から５ヵ年をかけ本発掘調査を実施した。

3．出土品整理は、平成13年度～平成18年度については兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が、平成19年度・平成20年度は兵庫県立考古博物館が実施した。

4．遺構全体の航空写真撮影を平成７年度は㈱アジア航測、平成８年度は㈱ジェクト、平成９年度は㈱ワールド航測コンサルタントに委託して行った。

5．写真は、遺構を調査員が担当し、遺物については㈱谷口フォトに委託した。

6．本書の挿図第１図は、国土地理院発行の1/200,000地勢図［鳥取」を、第２図、第３図は1/50,000「城崎・出石」を第４図は豊岡市発行の1/10,000地形図を使用した。

7．本書に使用した方位は、国土座標（第Ⅴ系）の座標北を示す。また、標高値は東京湾平均海水面（Ｔ．Ｐ．）を基準とした。

8．出土品の自然科学分析は、動物遺存体分析を奈良文化財研究所の松井　章氏・橋本裕子氏と京都大学大学院の丸山真史氏に、種実同定を㈱古環境研究所に、木製品の樹種同定を京都大学名誉教授の伊東隆夫氏に、漆製品分析を東京文化財研究所の北野信彦氏に依頼した。

9．本書の執筆は、第Ⅷ章第１節を奈良文化財研究所の松井　章氏・橋本裕子氏と京都大学大学院の丸山真史氏に、第２節を㈱古環境研究所に、第３節を京都大学名誉教授の伊東隆夫氏に、第４節を東京文化財研究所の北野信彦氏に、第Ⅸ章を立命館大学の青木哲哉氏に依頼し、玉稿を賜った他は、西口圭介・岡田章一・篠宮　正・岡本一秀・鈴木敬二・岡昌秀が行った。

10．本書の編集は、嘱託職員の岡田美穂の補助を得て西口が行った。

11．本書にかかる写真・図面などの記録や出土した遺物などは、兵庫県立考古博物館に保管している。

12．発掘調査および報告書の作成にあたり、楢崎彰一、藤澤良祐、亀井明徳、鋤柄俊夫、水野和雄、小野正敏、長尾充、舘野和巳、渡辺晃宏、臼井洋輔、小栗栖健治、小林基伸、小寺誠、豊岡市教育委員会（旧出石町教育委員会）・奈良文化財研究所（旧奈良国立文化財研究所）・兵庫県立歴史博物館・国立歴史民俗博物館・大阪市文化財協会の各機関にご援助・ご指導・ご教示をいただいた。記して深く感謝の意を表する。

目　次

第Ⅰ章　はじめに
　第１節　調査に至る経緯……(西口)…… 1
　第２節　調査の過程……(西口)…… 1
　第３節　調査の体制……(西口)…… 1
第Ⅱ章　遺跡をとりまく環境
　第１節　地理的環境……(岡本)…… 3
　第２節　歴史的環境……(岡本)…… 4
第Ⅲ章　各年度の調査
　第１節　平成６年度確認調査……(西口)…… 9
　第２節　平成７年度の本発掘調査……(西口)…… 9
　第３節　平成８年度の本発掘調査……(西口)……10
　第４節　平成９年度の本発掘調査……(西口)……11
第Ⅳ章　層序と遺構面
　第１節　層序と遺構面の設定……(西口)……13
　第２節　遺構面の時期設定……(西口)……14
　第３節　遺構面及び遺構・包含層の表記について
　　……(西口)……15
第Ⅴ章　遺構
　第１節　近世の遺構（近世Ⅰ面～近世Ⅲ面）
　　……(西口・岡本)……17
　第２節　武家屋敷に伴う遺構（中世Ⅰ面～中世Ⅶ面）
　　……(西口・岡本)……17
　第３節　武家屋敷成立以前の遺構（中世Ⅷ～古代Ⅴ面）
　　……(西口・岡本)……37
　第４節　平安～奈良時代の遺構……(岡本)……38
　第５節　古墳時代前期～弥生時代の遺構
　　……(岡本)……38
　第６節　人名墨書土器群……(西口)……38
第Ⅵ章　遺物
　第１節　土器・陶磁器……(岡田・篠宮)……41
　第２節　金属製品……(岡本)……62
　第３節　漆製品・木製品・竹製品……(西口)……66
　第４節　骨角製品……(岡本)……80
　第５節　石製品……(岡本)……80
　第６節　石造品……(岡本)……81
　第７節　宮内堀脇遺跡Ⅱ出土の刷毛について
　　……(鈴木)……82
第Ⅶ章　文字資料
　第１節　墨書土器類……(西口)……83
　第２節　木簡類……(西口)……91
第Ⅷ章　自然科学分析
　第１節　宮内堀脇遺跡から出土した動物遺存体
　　……(松井・橋本・丸山)… 103
　第２節　宮内堀脇遺跡出土の種実同定…(古環境)… 122
　第３節　宮内堀脇遺跡Ⅰ出土木製品の樹種
　　……(伊東)… 128
　第４節　宮内堀脇遺跡出土漆器の材質､技法の調査
　　……(北野)… 139
第Ⅸ章　宮内堀脇遺跡における地形環境と土地改変
　　……(青木)… 155
第Ⅹ章　遺構・遺物の考察
　第１節　出土土器・陶磁器の検討……(岡田)… 163
　第２節　出土木製品について……(西口)… 186
　第３節　出土金属製品について……(岡本)… 188
　第４節　遺構面の変遷……(西口)… 189
　第５節　遺構の配置と性格……(西口)… 192
第Ⅺ章　文字資料について
　第１節　人名墨書土器群について……(西口)… 197
　第２節　出土木簡について……(西口)… 203
第Ⅻ章　まとめ……(西口)… 205

巻頭写真図版目次

巻頭図版１　調査区遠景（南から）
　　調査区遠景（西から）
巻頭図版２　95年度調査区（西から）
　　96年度調査区（西から）
巻頭図版３　97年度調査区（西から）
　　95年度２面遺構の状況
巻頭図版４　96年度７面遺構
　　97年度４面遺構
巻頭図版５　位牌出土状況
　　墨書土器出土状況
巻頭図版６　三宝出土状況
　　ざる出土状況
巻頭図版７　武家屋敷の主要遺物
　　各地の擂鉢
巻頭図版８　輸入陶器
　　輸入磁器
巻頭図版９　1．華南産四耳壷　　2．李朝陶器壷
　　3．華南三彩水滴　　4．金箔付陶器
　　5．碁石・双六駒石
巻頭図版10　出土した金属製品（生活具）
　　出土した刀装具・武具
巻頭図版11　灰匙
　　兜　鍬形台
巻頭図版12　付札　木簡類
巻頭図版13　位牌
　　彩色木彫猿
巻頭図版14　人名墨書土器

本文写真

写真１　遺物写真…… 82
写真２　鹿角及び牛角…… 116
　　貝類・爬虫類
写真３　魚類・爬虫類・鳥類…… 117
写真４　イヌ・ネコの頭骨（１）…… 118
　　イヌ・ネコの頭骨（２）
写真５　小型哺乳類…… 119
写真６　大型哺乳類…… 120
写真７　病変のある人骨…… 121
　　人骨
　　炎症を起こした部分
写真８　宮内堀脇遺跡種実Ⅰ…… 126
写真９　宮内堀脇遺跡種実Ⅱ…… 127
写真10　宮内堀脇遺跡Ⅰ出土木製品顕微鏡写真（１）…135
写真11　宮内堀脇遺跡Ⅰ出土木製品顕微鏡写真（２）…136
写真12　宮内堀脇遺跡Ⅰ出土木製品顕微鏡写真（３）…137
写真13　宮内堀脇遺跡Ⅰ出土木製品顕微鏡写真（４）…138
写真14　漆膜断面試料写真…… 142

挿図目次

第１図　遺跡の位置…… iv
第２図　出石町地形図…… 3
第３図　周辺の遺跡（1／50,000）…… 7
第４図　此隅山城　縄張図…… 8
第５図　調査区配置図…… 16
第６図　骨角製品…… 80
第７図　遺物実測図…… 82
第８図　動物遺存体の組成…… 104
第９図　鹿角および牛角…… 107
第10図　近世以降の漆器（挽き物類）の木取り方法… 141
第11図　漆塗り構造の分類…… 141
第12図　蛍光Ｘ線分析スペクトル図…… 143
第13図　地形分類図…… 158
第14図　97年度調査区の東壁断面図…… 159
第15図　95年度調査区の北壁断面図…… 160
第16図　模式的な地形環境と土地改変１…… 161
第17図　模式的な地形環境と土地改変２…… 162
第18図　遺構の配置Ⅰ…… 194
第19図　遺構の配置Ⅱ…… 195
第20図　遺構の配置と小字名…… 196

表目次

第１表　宮内堀脇遺跡関連年表…… 6
第２表　遺構面対照表…… 14
第３表　文字資料（墨書土器）釈読一覧…… 95
第４表　文字資料（木簡）釈読一覧…… 101
第５表　種名表…… 103
第６表　貝類集計表…… 104
第７表　魚類集計表…… 104
第８表　爬虫類集計表…… 105
第９表　鳥類集計表…… 105
第10表　哺乳類集計表…… 106
第11表　歯式…… 107
第12表　鳥類四肢骨計測値…… 114
第13表　イヌの計測値（㎜）と推定体高（㎝）……114
第14表　哺乳類の四肢計測値（㎜）……115
第15表　宮内堀脇遺跡における種実同定結果…… 124
第16表　宮内堀脇遺跡Ⅱにおける種実同定結果…… 125
第17表　宮内堀脇遺跡Ⅲにおける種実同定結果…… 125
第18表　宮内堀脇遺跡Ⅰ樹種同定試料一覧…… 131
第19表　ろくろ挽き物の用材分類一覧表…… 140
第20表　漆器観察表…… 144
第21表　土師器皿・瓦質擂鉢・越前擂鉢　分類表…… 177
第22表　土器・陶磁器　変遷表（１）……178
第23表　土器・陶磁器　変遷表（２）……179
第24表　土器・陶磁器　変遷表（３）……180
第25表　土器・陶磁器　変遷表（４）……181
第26表　土器・陶磁器　変遷表（５）……182
第27表　土器・陶磁器　変遷表（６）……183
第28表　土器・陶磁器　変遷表（７）……184
第29表　土器・陶磁器　変遷表（８）……185
第30表　墨書土器属性分類表Ⅰ…… 199
第31表　墨書土器属性分類表Ⅱ…… 200
第32表　出土土器・陶磁器観察表…… 207
第33表　出土石製品・石造品観察表…… 258
第34表　出土金属製品観察表…… 260
第35表　出土木製品観察表…… 264
第36表　出土骨角製品観察表…… 274

宮津
至網野
至網野
至にしまいづる
至峰山
至野田川
至加悦
竹野郡
竹野町
城崎町
久美浜町
久美浜湾
網野町
熊野郡
豊岡市
豊岡盆地
丹後山地
出石郡
出石町
但東町
日高町
円山
崎郡

第１図　遺跡の位置

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

一般県道町分久美浜線は豊岡市（旧出石郡）出石町の北側に位置する町分から北上し、和田山麓をかすめ、出石神社と宮内の集落のある谷を横切り、さらに此隅山の山麓を縫い袴狭を経由している。宮内集落内では道幅が狭隘であることからバイパスによる道路改良が、兵庫県但馬県民局県土整備部豊岡土木事務所によって計画された。計画路線内は周知の遺跡である宮内堀脇遺跡を通過する。このため、兵庫県教育委員会では平成６年12月に確認調査を実施し、全域において遺構、遺物の確認と出土をみた。この結果を受けて豊岡土木事務所長より、平成７年５月22日付けで依頼（豊土第418号）を受け、５カ年にわたる発掘調査を実施した。

第２節　調査の過程

確認調査の経過

確認調査は、平成６年12月12日から14日に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所によって実施された。調査の結果、計画路線内の全域において、遺構・遺物の出土を見た。

本発掘調査の経過

以上の結果により、兵庫県但馬県民局県土整備部豊岡土木事務所より平成７年５月22日付けで依頼（豊土第418号）を受け全面調査を実施した。

第３節　調査の体制

確認調査

遺跡調査番号　940274
調 査 期 間　　平成６年12月12日～12月14日
調査担当者　　調査第３班　主　　任　山田清朝
　　事務職員　高井治巳
　　研 修 員　三原慎吾

１次本発掘調査

遺跡調査番号　950223
調 査 期 間　　平成７年８月23日～平成８年３月27日
調 査 面 積　　2035㎡
調査担当者　　調査第３班　主　　査　西口圭介
　　研 修 員　岡　昌秀
現場事務員　　山本陽子
室内作業員　　福井英子　岡田千恵　橋本まり子　中瀬俊子　長谷川英子

2次本発掘調査

遺跡調査番号　960362
調 査 期 間　平成8年11月21日～平成9年3月21日
調 査 面 積　637㎡
調査担当者　調査第3班　主　　査　西口圭介
　　技術職員　岡本一秀
室内作業員　中瀬俊子
現場事務員　長谷川英子
現場補助員　牛谷好伸　前川直美

3次本発掘調査

遺跡調査番号　970351
調 査 期 間　平成9年10月9日～平成10年2月21日
調 査 面 積　644㎡
調査担当者　調査第3班　主　　査　西口圭介
　　技術職員　岡本一秀
室内作業員　中瀬俊子
現場事務員　長谷川英子
現場補助員　中村真也

整理作業

整理作業は、発掘調査時に宮内遺跡現場事務所にて水洗いと台帳作成を実施した。それ以降の作業を平成13年から18年は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で、平成19年から20年までは兵庫県立考古博物館で実施した。

整理作業工程

平成13年度　水洗い、ネーミング、接合復元
平成14年度　実測（土器、石器、木製品）、拓本
平成15年度　実測（木製品）、復元
平成16年度　実測（木製品）
平成17年度　分析鑑定、保存処理（金属製品、木製品）
平成18年度　実測（金属製品）、写真撮影、写真整理、図面補正、トレース、保存処理（木製品）
平成19年度　レイアウト、保存処理（木製品）
平成20年度　報告書印刷、保存処理（木製品）

整理作業担当嘱託職員

長谷川洋子、伊藤ミネ子、衣笠雅美、江口初美、家光和子（水洗い・ネーミング）
喜多山好子、眞子ふさ恵、早川亜紀子、中田明美、前田千栄子、横山キクエ、小寺恵美子、
岡井とし子、前田恭子（接合・復元）
岡田美穂、杉本淳子、柏木明子、黒岩紀子、高橋朋子、尾崎比佐子（実測・トレース・レイアウト）
栗山美奈子、大前篤子、藤井光代、清水幸子（金属製品保存処理）
今村直子、小林俊子、渡辺二三代、村上令子、川上啓子（故人）、川上緑

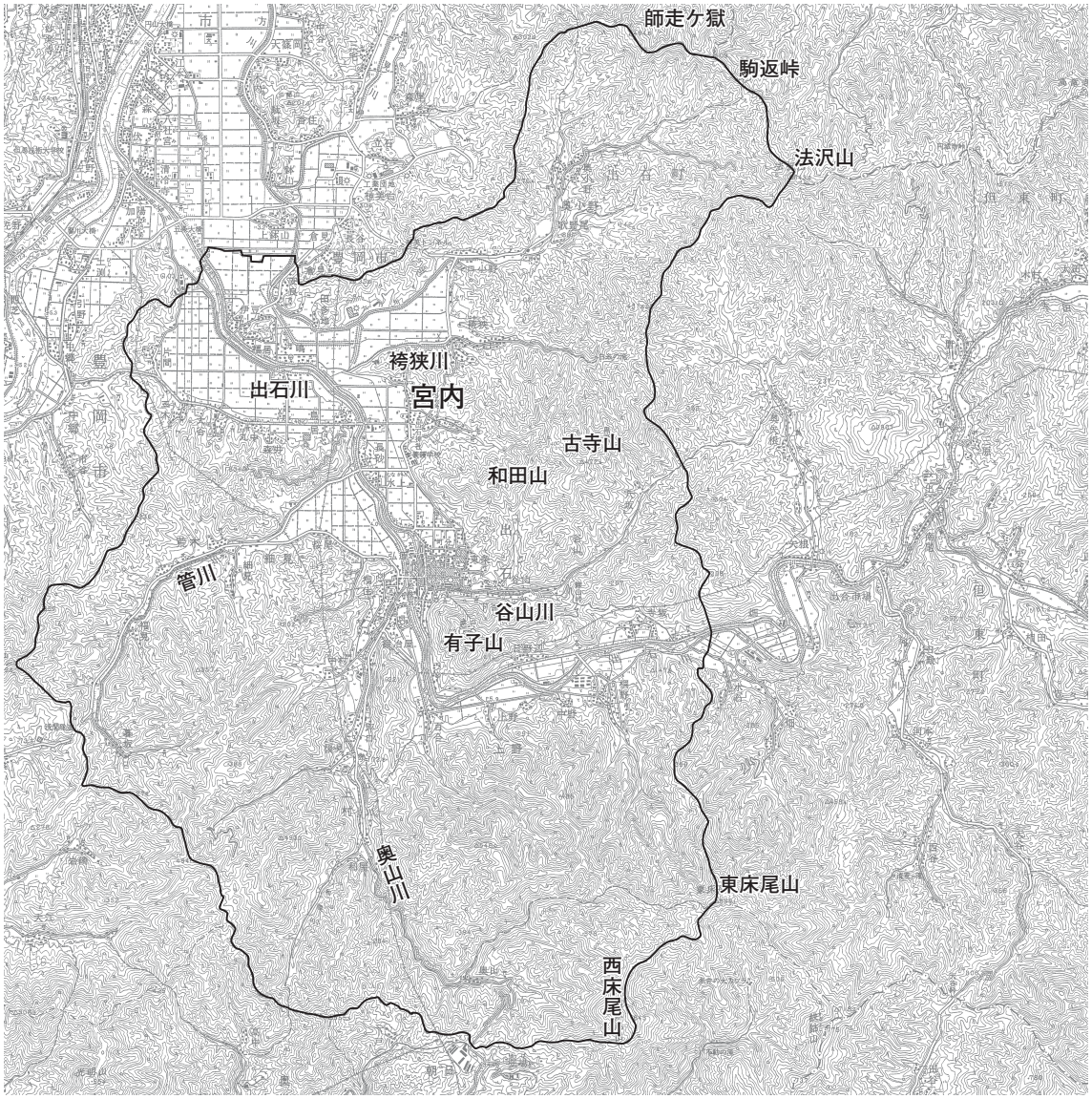
（作業年次等順不同）

第Ⅱ章　遺跡を取り巻く環境

第１節　地理的環境

宮内堀脇遺跡は、豊岡市出石町宮内（旧出石郡出石町）に所在する。豊岡市は平成17年４月に１市５町（豊岡市、出石町、但東町、城崎町、竹野町、日高町）が合併してできた。総面積は697.66㎢、人口約８万６千人の市である。旧出石町は豊岡市の東部に位置し、合併以前の行政区分では、北が豊岡市、京都府久美浜町、東は出石郡但東町、南は養父郡養父町、同郡八鹿町と、西は日高町と接する。

地形的には、出石町の北東には京都府久美浜町、出石郡但東町との接点となる法沢山(標高643.5m)を頂点とし、西へ駒返峠（標高385m)、師走ヶ嶽（標高494.8m）と連なる北部山地北側と古寺（標高472.4m）を主峰とし、東に権現山、西に和田山（標高307.6m)、南に有子山（標高324.8m）と連なる連峰がある。また町の南側には東床尾山（標高839.1m)、西床尾山（標高845.4m）を主山とする南部山地（出石山地)の険しい山並みが町域の1/3を占めている。町の西側には500～200m級のやや緩やかな山並みが連なっている。この東西の山地の間を円山川水系の出石川がＬ字状に貫流している。宮内堀脇遺跡は、豊岡盆地に属する出石川流域の標高約５mの沖積低地に位置している。出石町内宮内堀脇遺跡の北側には、円山川水系出石川支流の入佐川が旧但東町境を起点として流れている。



第２図　出石町地形図（1／100,000）

第２節　歴史的環境

旧石器時代

旧出石町内では、今のところ旧石器時代の遺跡は確認されていない。

縄文時代

砂入遺跡からは北白川下層Ⅰｂ式もしくは羽島下層Ⅱ式の特徴をもつ土器が包含層や土坑より出土している。宮内堀脇遺跡から北に約３㎞離れた長谷貝塚や北に約5.5㎞離れた中谷貝塚がある。中谷貝塚は標高10ｍの沖積地に位置し、１ｍ程の貝層中にカワニナ、アカガイ、オキシジミ、セタシジミなど貝類、鹿、猪などの獣骨、土錘、石匙などの石器が出土している。貝類の種類から湖が汽水であったことがわかる。出石神社境内とその付近から石斧と土器片が採取されており、付近に縄文時代の遺跡があると推定される。

弥生時代

宮内黒田遺跡より前期の甕や壺の破片が出土している。このころの出石の平野部は湿潤であるため、人々は高台となっている現在の出石神社付近に住居を構えていたと推定される。宮内堀脇遺跡の南西約800ｍの鳥居遺跡からは、破鏡とともに中期から庄内併行期の土器が出土している。また、出石神社遺跡から太型蛤刃石斧、扁平片刃石斧、石槍、把手付壺などが出土している。後期を代表する出石神社遺跡からは木製品、土器が出土しているが、木製品には、高床式倉庫に使用されたと考えられる梯子や蹴放材、曲物底等、鉄器を使用しないと制作できないものが含まれていた。ただし、集落遺跡や集団墓地などの生活跡の調査はこれまで行われておらず、解明されるのは先のこととなる。

古墳時代

豊岡市森尾に所在する森尾古墳は、但馬最古の古墳と考えられている。南北径９ｍ、東西径６ｍの小円墳で、並列する３基の石室を有する。内部主体は割石を用いた小型の竪穴式石室である。出土遺物の中は三角縁神獣鏡、□始元年陳是作銘神獣鏡、方角規矩鏡が特筆される。この□始元年陳是作銘神獣鏡の不明の年号について様々な見解があるが、近年では魏の時代の「正始」元年（西暦240年）であると考えられている。その他の出石町内の古墳には、茶臼山古墳、入佐山１号墳、鶏塚、下安良古墳がある。旧豊岡市域には、前述の森尾古墳の他、納屋ホーキ古墳、見手山古墳、大師山古墳、矢立古墳群、立石古墳群、鎌田古墳群、七ツ塚古墳群、下陰古墳群がある。入佐山３号墳からは、四獣鏡が出土している。

古代

但馬には開拓祖神としての天日槍（アメノヒボコ）の伝承が伝えられている。但馬国一宮の出石神社は天日槍とその子孫を祭神としている。

『日本後記』延暦13年（906）正月壬寅（26日）条には「但馬の国治を気多郡高田郷に遷す」と記されている。この地は豊岡市日高町大字府市場あたりと比定されている。それ以前の国府の場所はやはり、気多郡内に有るという説が『兵庫県史』第１巻で記されているが、『出石町史』第１巻では、袴狭字限図に字国分寺が残っており、出石町内に国府もあったとする説が述べられている。昭和63年から平成８年にかけて、兵庫県教育委員会及び出石町教育委員会によって調査された砂入遺跡、荒木遺跡、袴狭遺跡、入佐川遺跡からは、７世紀末より９世紀に至る建物跡が調査された。中でも最も古いと考えられる荒木

遺跡からは11棟の大型掘立柱建物や井戸が見つかっている。一方、袴狭遺跡からは、木簡や墨書土器などの文字資料、石帯や帯金具などの役人が用いる装身具の類や銅印、多量の人形や斉串などの祭祀具など官衙関連すると考えられる遺物が出土している。

中世

出石神社の旧祝職家であった神床氏に伝来する神戸郷絵図は、絵図に描かれている鳥居や出石川に架かる橋の形などから鎌倉時代のものと推定される。この絵図によると鳥居から橋に至る参道が基準線となり、宮内堀脇遺跡の一帯も一宮領神戸郷として条里型地割で区画されていたことがわかる。

再び出石が歴史の舞台に出てくるのは、南北朝時代になり山名氏が台頭してきてからである。山名時氏は、新田氏庶流の武士で上野国多胡郡山名郷が本貫地であった。足利尊氏に従い各地を転戦する中で認められ、幕府の侍所職となり因幡、伯耆の守護となった。さらに丹波、若狭と守護国が広がり幕府の有力守護大名としての地位を確立する。康永２（1343）年丹波守護仁木頼章の代官荻野朝忠が反乱を起こしたが、時氏は是を鎮圧し、さらに翌年には三開山城（豊岡市）を攻め陥とし、ここを本拠として但馬守護を僭称し北但、南但方面へと勢力を伸ばしていった。

但馬が山名氏に正式に与えられたのは、応安５（1372）年、師義の代になってからである。永和２（1376）年、師義が病死すると嫡子義幸が家督を継ぐが、若年であったため、師義の末弟で師義に養われていた時義が後見となった。伝承では時義は、文中年間（1372～1374年）に此隅山に城を築き、以後祐豊が有子山城に移城するまで代々山名氏の本拠地となった。

時義が病没した跡を継いだ時煕の時、山名氏の勢力の強大を嫌った足利義満は、山名家の内紛に乗じて介入した（明徳の乱）。山名時煕は弟の氏幸と共に但馬、伯耆の守護を分割したため、満幸はこれを不満として叔父の氏清と結んで時煕を足利義満に讒訴する。義満は時煕らを但馬に討たしめた。満幸と氏清は時煕を討伐し、時煕は剃髪して出家し、備後に蟄居した。満幸は山名一族の中で頂点に立ち、さらには仙洞御所を占拠したので、義満は満幸を処分した。さらに、満幸は敗れた時煕と氏幸が密かに義満を訪れ許しを請い、この訴えが聞き入れられようとするのを聞いて憤激し、氏清と兄の義理と共に叛旗を掲げた。義満は時煕と氏幸の領地を復し氏幸と氏清、義理を討たせた。時煕はこうして守護職を回復し、総領になると徐々に勢力を回復し、さらには備後、安芸、伊賀の三国の守護になった。山名氏は統治する分国により、伯耆山名、因幡山名、但馬山名の三国に分立したが主流は但馬であった。

時煕の子、持豊の代になると山名氏の勢力は頂点に達した。持豊は兄の常煕との家督争いに勝利すると嘉吉の乱において赤松氏を播磨から駆逐し、支配下に置いた。応仁・文明の乱後、持豊（宗全）は没し、その子政豊は但馬に帰国する。文明15（1483）年には播磨に出兵するが失敗し、これをきっかけに山名家に内紛が起こる。この時山名政豊は九日市を、俊豊は此隅山城を拠点として対峙する。永正元（1504）年には山名致豊と垣屋続成の内紛の兵火のために出石神社、総持寺が全焼する。永正２（1505）年、山名、垣屋の両氏は和解を見る。永正９（1512）年には、山名致豊が家督を弟の誠豊に譲る。

誠豊は播磨の守護赤松義村が家臣浦上村宗に暗殺されたことをきっかけとする内乱に乗じて播磨へ侵攻する。しかし、対立していた赤松勢が和議を結んで山名に対抗すると、播磨より撤兵する。誠豊が大永８（1528）年に没した後、祐豊が後を継いだ。

天文４（1535）年には、先の兵火で全焼した総持寺本尊が山名祐豊らによって造立される。奉加帳には山名祐豊の千疋を筆頭に山名氏被官層や出石神社関係者約70名、在地有力者や農民約600名、また現物

寄進の者が10数名、名前や生年月日を書き連ねた者約860名の総計約1500名を超す人々の名前が書き記されている。

天文11（1542）年、生野で銀山の採掘が本格的に始まり、天文23（1554）年に祐豊は朝廷に白銀300両、翌年には200両を献上している。祐豊は銀山経営のため、生野城を築城する。銀山の存在は、織田信長の目にとまり、以後たびたび、その侵攻を受けることとなり、結果として山名氏を滅亡へと導く。毛利元就は最初は織田信長に積極的に接近しようとしており、目下の障害となっていた山名祐豊と宇喜多直家を打ち、但馬と播磨を制圧するよう要請した。永禄12（1569）年に織田信長の命を受けた木下秀吉は但馬に侵攻し、此隅山城は落城、山名祐豊は堺に逃れる。天正２（1574）年には信長の御用商人である今井早久らの援助により、祐豊は堺から帰国が許されると、根拠地を此隅山城から有子山城へ移す。天正５（1577）年に羽柴秀長が但馬に侵攻し南但馬を制圧する。翌年には但馬全域が秀長に帰順する。天正８（1580）年には有子山城が落城する。

天正13（1585）年、山名氏に変わり有子山城には前野長康が入る。しかし、文禄４（1595）年に前野長康は謀反の罪に問われた豊臣秀次に連座して死罪を命じられる。その後、小出吉政が有子山城主となる。吉政の子吉英は拠点を有子山城より出石城に移す。以後、出石藩の政庁は出石城となる。藩主は小出氏がその後５代続いた後に松平忠徳を経て、仙石氏に代わり幕末の版籍奉還まで統治することになる。

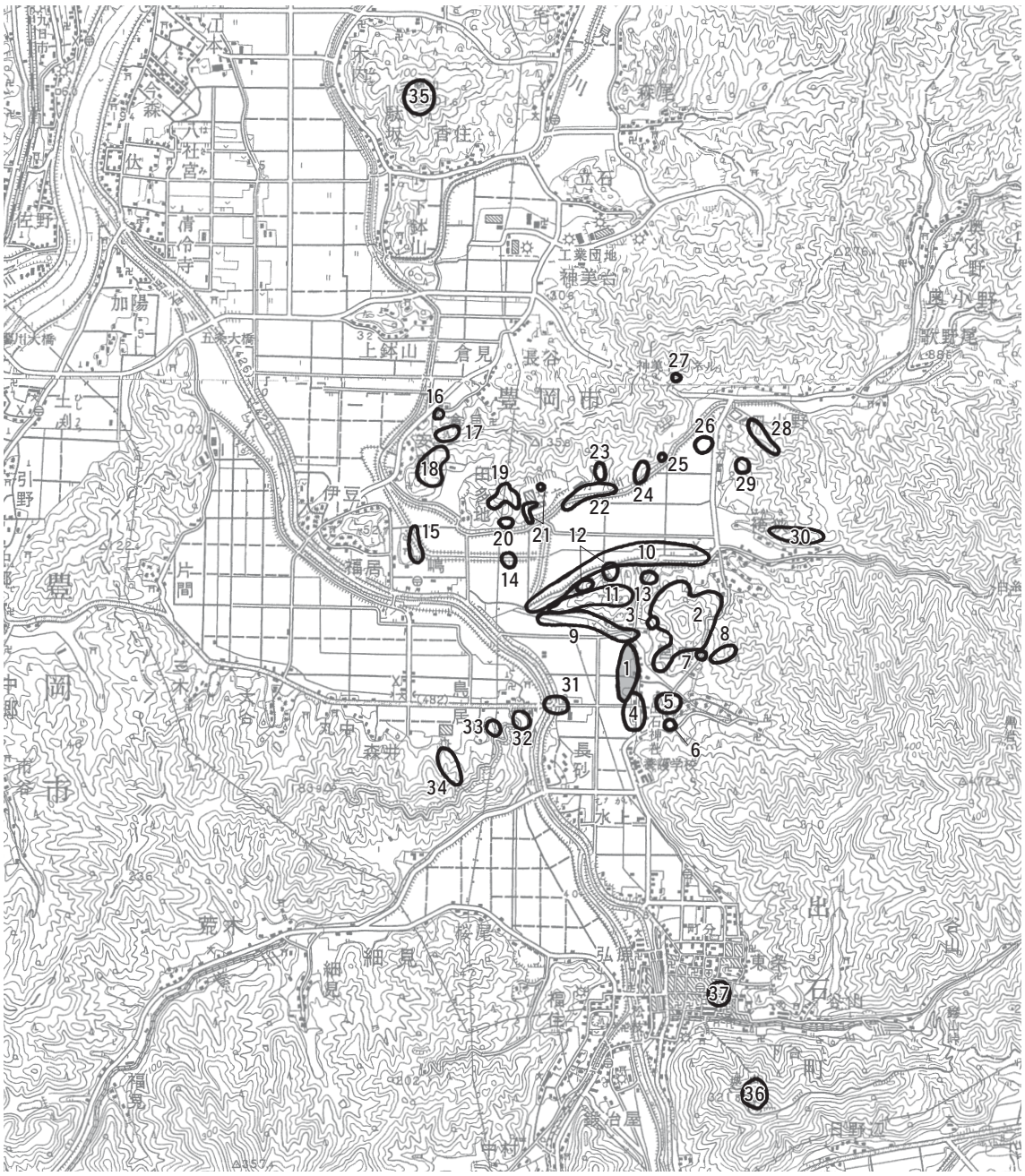
参考文献

「出石町史」第１巻

「神美村史」

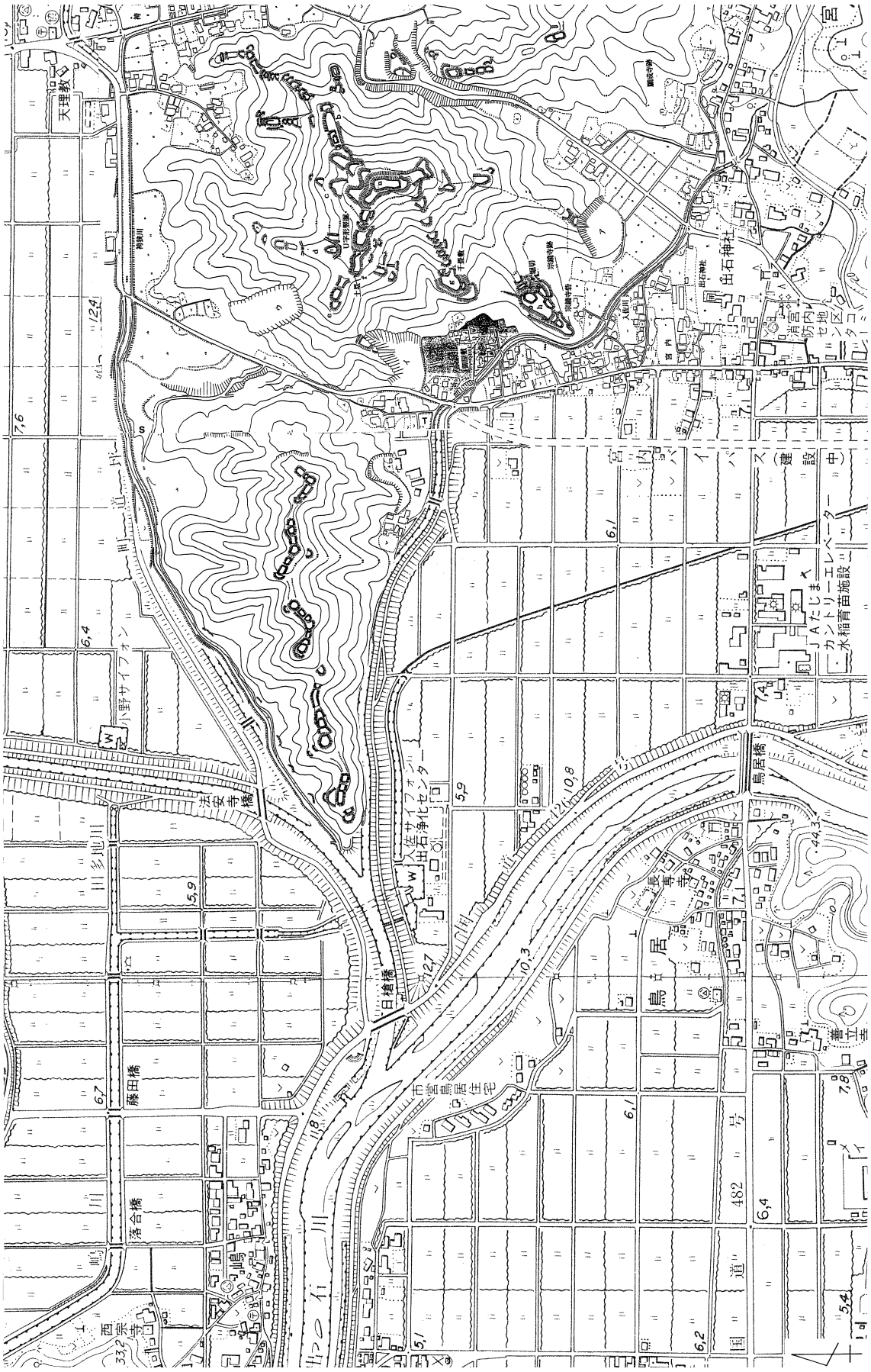
明徳１年	1390	山名氏清　ほぼ但馬を制圧、此隅山城を手中に収める。 但馬守護に補任される。
明徳２年	1391	明徳の乱　氏清敗死する。
明徳３年	1392	山名時熙、明徳の乱の功に但馬守護に補任される。
応永11年	1404	山名持豊（宗全）生まれる。
嘉吉１年	1441	嘉吉の乱、山名持豊、赤松満祐を討伐。
応仁１年	1467	応仁の乱
文明１年	1473	山名宗全、没する。
文明11年	1479	山名政豊、但馬に帰る。
文明15年	1483	山名政豊、播磨に出兵する。
長享２年	1488	播磨出兵の失敗により、山名家内紛（山名と垣屋の対立） 山名政豊は九日市に、山名俊豊は此隅山城にある。
明応２年	1493	政豊と俊豊、但馬で戦う。
明応８年	1499	山名政豊、没する。
永正１年	1504	垣屋続成、此隅山城の山名致豊を攻める。出石神社、総持寺焼失。
永正２年	1505	山名、垣屋の両氏が和解。
永正４年	1507	出石神社、再建にかかる。
天文４年	1535	総持寺本尊、山名祐豊以下の奉加によって造立される。
永禄12年	1569	木下秀吉の但馬侵攻。此隅山城他18城を攻略。 山名祐豊は堺へ逃亡。
天正２年	1574	山名祐豊、此隅山城から有子山城へ移る。
天正５年	1577	羽柴秀長、第１次但馬侵攻。南但馬を制圧。
天正６年	1578	但馬全域が羽柴秀長に帰服する。
天正８年	1580	羽柴秀長、第２次但馬侵攻。有子山城落城。
天正13年	1585	前野長康、出石城に入部。
文禄４年	1595	小出吉政、出石城に入部。

第１表　宮内堀脇遺跡関連年表



1.宮内堀脇遺跡　2.此隅山城跡　3.御屋敷遺跡　4.宮内黒田遺跡
5.出石神社　6.宮内遺跡　7.上坂遺跡　8.上坂古墳群
9.入佐川遺跡　10.袴狭遺跡　11.坪井遺跡　12.大谷墳墓群
13.下坂横穴群　14.嶋遺跡　15.虫生山遺跡　16.下安良城山古墳
17.安良古墳群　18.田多地古墳群　19.田多地小谷古墳群　20.田多地小谷遺跡
21.田多地引谷墳墓群　22.砂入遺跡　23.カヤガ谷古墳群　24.カヤガ谷墳墓群
25.カヤガ谷横穴　26.荒木遺跡　27.篠谷2号墳　28.岩谷古墳群
29.小野小学校裏山遺跡　30.新宮谷古墳群　31.鳥居遺跡　32.鳥居城跡
33.東谷遺跡　34.小坂古墳群　35.三開山城　36.有子山城
37.出石城

第3図　周辺の遺跡（1／50,000）



第４図　此隅山城 縄張図（此隅山城を考える第５集の縄張図をもとに作成）

第Ⅲ章　各年度の調査

第１節　平成６年度確認調査（遺跡調査番号940274）

工事範囲について、試掘坑（トレンチ）を21箇所設定した。設定範囲は、計画道路センター杭№13～№57の区間の延長約880ｍである。

各試掘坑の規模は幅２ｍとし、全長は掘削深度によって変更を加えた。それぞれの試掘坑において、遺構・遺物の有無及び土層の堆積状況を確認した。

調査の結果、６～８トレンチから遺構・遺物を確認し、12～21トレンチにおいて遺物の包含を確認した。

第２節　平成７年度の本発掘調査（遺跡調査番号950223）

旧建設省関連の入佐川遺跡と近接して実施した。両者は幅約３ｍの土手を挟んで連続しており、考古学的には一連の遺跡である。調査区は、此隅山城の西南側の山裾に位置しており、君主の居館『御屋敷』推定地の西隣に当たる。現況では『御屋敷』とは県道を挟み約５ｍの落差が認められた。

調査区の形状は南北68m・東西最大50mの多角形を呈しており、西辺は現農道に並行して設定した。調査面積は約2035㎡である。

土層堆積の層序は、現耕作土下に圃場整備に伴う盛土・19世紀代の入佐川から供給された洪水砂・若干の土壌層をへて、現地表より約１ｍ～1.5mの深度において、戦国･室町時代の整地面となる。この整地面直上までは機械力によって掘削し、以下を人力掘削とした。

整地土の厚さは約１ｍに及び、遺構面は大きくは５枚、それぞれの間に炭層（一部では焼土面）･土壌層が確認できる。また、それより下層には、調査区の南東方向より供給された洪水砂層を挟み、鎌倉時代荘園絵図（神床文書）に対応する水田面を確認し、溝・畦畔を検出した。更に下層からは平安～古墳時代前期にかけての水田土壌を検出した。

調査は戦国・室町時代の整地面５枚（第１面～第５面）については全面調査を行い、それより下層の鎌倉時代及び平安～古墳時代前期の水田については、上層の遺構の保護を考慮し、調査区南半の一部分において断面観察を中心に実施した。

戦国・室町期の遺構は堀・土塁の内側（東側）に建物群が存在する武家屋敷遺構を検出している。

武家屋敷遺構は大きくは堀・溝・土塁・植栽から構成される遺構群（武家屋敷群）の西側を区画する防御の色彩の強い部分（調査区西半部）と、整地土を厚く敷き、礎石・根太・建物を区画した溝から構成される生活空間（調査区中央から東半部）に分かれる。これらの遺構は16世紀代前半に入る４・５面と16世紀代後半の１～３面では大きくレイアウトを違えている点が特徴である。各面の概要を述べる。

第１面ー調査区北西半部に入佐川遺跡に連なる方形の大きな堀状の窪みが存在し、土橋状の遺構を介して南へ延びる幅約３ｍの溝を検出している。第２面以下において顕著に盛り上がる土塁は第１面においては居住区側からの盛り上がりが埋没し、ほぼ平坦化している。整地土は調査区の北東半部に顕著に検出されている。整地面上に掘立柱建物（５間×４間 10m×６ｍ）１棟・溝・建物の壁下の基部の可能性の高い石列が存在する。第１面の時期は永禄12年以降慶長年間までと考えられ、天正期と推定される。

第２面ー遺構は調査区の西半において幅約３～５ｍの土塁及びその西側に堀状の窪地及び窪地から南へ

延びる幅約３ｍの溝が存在しており、建物群はその内側（東側）に存在している。礎石建物及び建物を区画する溝・建物の壁下の基部の可能性の高い石列・根太・網代垣等の遺構を検出している。溝内には多量の土壁材が含まれており、焼土・土壌層中には木簡・釘・紅皿等が多量の土師器皿・輸入陶磁器とともに出土している。礎石建物の上面からは『永録拾弐年』の記年銘のある木簡が出土している。

第３面ー調査区全面に広がる整地及び溝区画は基本的にはこの時期に施されたと考えられる。土塁は高まりをもち、内側には幅1.5m程度の溝をもつ。また、土塁上・堀肩・溝肩には樹木が点在している。

第４・５面ー礎石もしくは柱穴がサブトレンチにおいて確認されている。

遺物は、土師器皿・瀬戸美濃・備前・越前・輸入陶磁器（染付・天目・交趾三彩）・瓦（少量）・渡来銭・釘・飾金具・錐・小柄・小刀・切羽台・火箸・漆碗・箸・折敷・羽子板・紀年銘木簡・木簡・双六駒石などの他、畳が検出されている。土師器皿はすべて手捏ねである。陶器類の内、擂鉢については越前焼・備前焼の他、瓦質の産地不明のものがある。

本事業における航空写真撮影は１回実施している。加えて、同時期に隣接して実施した入佐川遺跡における２度の航空写真を今回の報告では援用している。また、第２面において現地説明会を実施した。

第３節　平成８年度の本発掘調査（遺跡調査番号960362）

平成７年度調査区の農道を挟んだ南側において調査を実施した。東西24m・南北24.5mの平行四辺形の調査区である。調査面積は約637㎡である。

幕末～古墳時代前期にわたる遺構・遺物を検出した。調査の主な部分は前年度に引き続き、此隅山城に伴う武家屋敷遺構である。

遺構は前年度調査区からのびる戦国時代の堀・土塁・建物跡、鎌倉時代の水田畦畔、平安時代の人形や斎串が流れ込んだ水田、奈良時代～古墳時代の田下駄や加工材が多量に入った水田が検出されている。

遺物は、人名墨書土師器皿や中国製陶磁器のほか、鍍金された陶器片、永禄・天正の両合戦で使用された鉄砲玉・金銅製の小柄や鉄製の挙先などの金属製品に加え、位牌や三宝、折敷、将棋の駒（銀将）などの珍しい木製品が出土した。また、戦国期より下層からは祭祀遺物・古墳時代前期と考えられる土師器、弥生時代中期土器片、縄文時代と考えられる石英製石鏃が出土している。

〔江戸時代の遺構･遺物　第０～３面〕　機械掘削によって除去した洪水砂の直下より、幅１ｍ程度の小区画畦畔を検出している（０面）。洪水砂中には出石焼碗片が多量に混入しており、明治時代に入って埋没したものと考えられる。小区画畦畔は畠もしくは苗代と考えられるが性格は不明である。

第１～３面は江戸時代を通じての水田であったと考えられるが、部分的に残存する溝肩には人頭大の川原石が散見される。第３面では下層の堀の窪みが現れてきており、第４面の石組み・礎石が若干顔を出している。また、この層からは17世紀代の丹波焼き擂鉢片が出土している。

〔戦国時代の遺構・遺物　第４～10面〕　第４～10面は此隅山城武家屋敷遺構に伴うものである。

第４面は慶長期に比定できる。性格不明の石組と建物根太に伴う石の並びが検出されている。

第５面は、前年度の第１面に相当する。時期は天正期である。東半部には整地面があり、上面に部分的に炭が被覆する。また、整地面上からは転ばし根太跡が検出されている。中央部では下層の堀の窪みが顕著に現れ、根太・礎石・根固めに使用された川原石・玄武岩が沈下した状態で検出されている。

第６面は、前年度の第２面に相当する。時期は永禄後期と考えられる。東半部には整地面があり、上

面には部分的に炭が被覆する。整地面部分は基本的には建物跡にあたり、土坑・転ばし根太跡とともに柱穴が検出されている。また、整地面の切れ目には南北に走る幅１ｍ前後の溝がある。

第７面は前年度の第３面に相当する層である。整地面直下にあり、時期は永禄前～中期と考えられる。

東半部には溝・土坑が検出され、調査区中央には幅２ｍ前後の溝が南北方向へ走っている。溝は下層の堀（SD68001）が埋没する最終段階とも理解できる。溝内には沈下した根太石・礎石・根固めに使用されたと考えられる川原石が散乱するほか、南端からは人名が書かれた墨書土器群が検出されている。

墨書土師器皿は、半ば埋没した堀に投棄されており、時期は天文年間の末期から永禄年間の初期と考えられ、位牌より少し新しい。60点以上出土した。追善供養にともなって使用されたものと考えられる。

第８面は前年度の第３面・第４面間に位置する層である。時期は天文期から永禄前期にかけてと考えられる。遺構は、西半部は水田、中央部には幅約７ｍの堀（SD68001）が南北に走り、東半部では高さ１ｍ前後の土塁がコの字形に巡り、一辺の幅約15mの方形区画を造りだす状況にある。土塁の内側は盛土によって徐々に嵩上げされており、細かくは３面に細分される。土塁の内側がほぼ埋没した段階から位牌・将棋の駒『銀将』・三宝が、また、SD68001からは墨書土器・折敷・鉄製挙先・金銅製の小柄が出土している。

第９面・第10面は前年度の第４面・第５面に対応する。16世紀前半～15世紀後半にかけての時期と考えられる。調査区西半部は水田、調査区の中央部には幅約７ｍの堀（SD69001）が南北に走り、調査区東半部では土塁を挟んでSD69001と並行してほぼ同規模の堀（SD69002）が検出されている。SD69001内からは墨書折敷が出土している。

〔鎌倉時代から古墳時代前期の遺構・遺物　第11面～第13面〕　戦国時代以下の遺構はすべて水田遺構（畦畔）である。第11面は鎌倉時代の水田遺構（畦畔）である。杭列の間に柴を編み込み、敷き並べて畦畔の基礎を造っている。畦畔は東西方向に走っており、『出石神社神領田絵図』に描かれた条里地割りに沿うものと考えられる。水田耕土中からは土師器皿・椀片の他、鑿根鉄鏃が出土している。

第12面は平安時代（９世紀代）の水田畦畔である。部分的に南北方向の畦畔の痕跡が確認される。水田耕土中からは人形・斎串・土師器片が出土している。

第13面は奈良時代から古墳時代前期の水田遺構（畦畔）である。第13面を形成する水田土壌はアシ科の植物が厚く堆積してできたもので、多量の構造材・田下駄を内包している。この層は入佐川遺跡において調査を実施してきた層と同一層である。畦畔の芯には多量の構造材が使用されており、畦畔の方位はN48°Wを測る。遺物は上記の木製品の他、古墳時代前期の土師器甕片、呪符木簡が出土している。

航空写真撮影は２回実施している。また、調査終了後地元説明会を実施した。

第４節　平成９年度の本発掘調査（遺跡調査番号970351）

平成９年度の調査対象地は平成８年度調査区の南隣である。調査区の北辺は平成８年度調査区の南壁安全勾配部分を含めて調査範囲としたため、約７ｍ分を前年度の調査範囲と重複して設定した。南辺は現用水路までである。調査区の西側は民家に接するため４ｍ以上の控えをとった。東側についても民地と接しているため控えをとった。このため、当初の予定に比べ、実質的な調査面積は大幅に縮小することとなった。調査区の形状は、東西18m・南北34.5mの長方形を指向している。調査面積は644㎡である。

前年度の調査結果を受け、機械掘削を実施し、江戸時代初頭以下を人力掘削した。10面の遺構面を精査対象とし、江戸時代初頭～弥生時代末にわたる遺構・遺物を検出した。

遺構では前年度の調査区からのびる戦国時代の堀・土塁・建物跡、鎌倉時代の水田畦畔、平安時代の人形や斎串が流れ込んだ水田、奈良時代から古墳時代の田下駄や加工材が多量に入った水田、弥生時代末と考えられる水田が検出されている。

遺物では、人名を墨書した多量の土師器皿や中国製陶磁器のほか、非常に遺存状況が良好な鉄鎌などの金属製品に加え、墨書のある三宝、木簡、杓子などの木製品が出土した。また、下層からは馬形等の祭祀遺物・古墳時代前期と考えられる土師器、弥生時代後期土器片が出土している。

武家屋敷遺構は、調査区東半部に堀が検出され、堀の内側（東側）と外側（西側）の一部から整地面が検出された。堀は古い時期には調査区南半で直角に曲がり、屋敷地の南西隅を確定した。

調査区の制約から堀の内側（東側）の居住区にあたる部分は調査できなかったが、屋敷地の拡張などの変遷が明らかになった。以下に、２～７面について、変遷を述べておく。

〔第７面－15世紀後半〕 調査区内に堀はまだなく、調査区の東側に古い時期の堀が存在する。96年度12面に対応。調査区内全域は畠もしくは水田であったと考えられる。

〔第６面－16世紀前半〕 調査区東半に堀が掘られる。堀は幅約７m、深さ約1.5m。調査区南半で直角に曲がり、東側へ延びる。堀には２か所の陸橋部が設けられている。堀の外側は畠もしくは水田であったと考えられる。堀のコーナーは堀に区画された屋敷地の南西隅のコーナーにあたると考えられ、平成７年・８年度の調査結果を勘案するならば堀の内法で南北105m以上の規模となる。

〔第５面－天文～永禄年間〕 堀の内側（東側）に整地が施され、堀は若干埋没するが機能しており人名墨書土器を含む多量の土師器皿・箕・獣骨が投棄される。堀の外側は畠もしくは水田である。

〔第４面－永禄年間〕 堀の内側（東側）には整地が厚く施され、堀は徐々に埋没する。陸橋部は半ば埋没し、壊され、機能しない。堀内には人名墨書土器を含む多量の土師器皿が引き続き投棄される。堀の南側には幅１m程度の溝が東西方向に掘られる。堀の外側は畠もしくは水田であったと考えられる。

〔第３面～第２面－永禄年間〕 堀の内側に整地が厚く施され、幅約５m程度に縮小する。堀は半ば埋没し、コーナー部より東側（堀の南辺）は整地部分の拡大によって完全に埋められる。また、堀内の陸橋部は完全に埋没する。

堀の肩部の整地面上には礎石が置かれ、塀（板塀と考えられる。）が巡らされ、最終的には焼失する。

堀の外側にも盛土が施され（整地面Ｂ）、建物が建つようになる。屋敷地Ｄの北辺には石塁が造られている。石塁は、屋敷地Ｄを北側と仕切る機能があったと考えられる。堀の外側・屋敷地Ｄの北側は畠もしくは水田であったと考えられる。

平成９年度の調査では、①堀のコーナー部を検出し、武家屋敷の南西隅が確定できた点。②時期が新しくなるにしたがい、整地の範囲が拡大し、堀を埋め、屋敷地の範囲が拡大していくことが判明した点。③堀の外側にも整地（建物）が時期が新しくなるにしたがって営まれることが判明した点が成果となった。16世紀も下るにしたがって屋敷地が拡大して行き、屋敷地を区画していた南北方向の堀を越えて西側へ拡大して行くという変遷を追うことができた点である。下層の調査では、今回の調査中初めて最下面より弥生時代末期の水田（畦畔）を検出した。

遺物では、人名墨書土師器皿が前年度に引き続き出土した。前年度は一時期に土師器皿が投棄されたものと考えられていたが、今回の調査では少なくとも２時期・５グループに分かれて投棄されたことが判明しており、追善供養が複数回行われたことが判明した点が大きな成果となった。

航空写真撮影は２回実施している。また、調査終了後、地元説明会を実施した。

第Ⅳ章　層序と遺構面

第１節　基本層序と遺構面の設定

平成７年度（1995年度）・平成８年度（1996年度）・平成９年度（1997年度）の基本的な堆積層序はほぼ同じである。ここでは、各年度の概要を述べる前に３調査区を包括した層序関係について述べておく。

堆積は大きく３つの要素に分けることができる。１．宮内堀脇遺跡の主要部分を占める中世末期の武家屋敷遺構群が廃絶した後、現代まで。２．武家屋敷遺構群が機能している期間。３．武家屋敷遺構群が成立する以前である。

今回の調査では、２．中世末期の武家屋敷遺構群の調査に主眼をおいたため１・３については精緻な調査を実施してはいない。

武家屋敷廃絶後の状況については、1996年度において幕末より調査を実施しているが、1995年度・1997年度については慶長年間を前後する層位までは機械力によって除去し、断面観察に留めている。

また、武家屋敷成立以前については、1995年度は遺構面を盛土下に保存したため、部分的な断ち割りにとどめ、96年度については、下層への掘削が、軟弱地盤を逆に隆起させる兆候を引き起こしたため、早急な埋め戻しを実施し、精査を行うことはなかった。1997年度は、安定したベース面が出現したことによりほぼ最終面までの調査を実施できた。

上記の理由から基本層序は各年度の成果を補完して作成していることをお断りしておく。

各年度間の遺構面の整合は、各年度の調査において設定、実施した遺構面（遺構検出面）を主に以下の鍵層、遺構を検討し連結した。

１．**幕末洪水砂層**　出石焼磁器片を含む洪水砂層が各年度において確認されている(②層)。この洪水砂を遺跡の下限を押さえるカギ層とする。1996年度第１面（畠状遺構）を被覆する。

２．**火災層と整地層**　95年度の調査では、大きく５回の地業（整地）が確認できた。各整地面は火災によって遺構が焼失したのち、火事片付けを行い、更に新たな地業（整地）を行う。これによって遺構面は順次嵩上げされてゆく。1996年･1997年では、礎石を覆う火災層と整地層を挟む下層の火災層が確認できた。この２回の火災層が、1995年度に於ける第２・第３火災層と推断できた。

３．**整地層と武家屋敷遺構の拡大**　95年度における第４面（第４整地面上）では、南北に走る２本の堀が存在するが、第３面に至る過程で、内側の堀が地業によって埋められ（SD54001）、外側の堀（SD54002）についても地業によって幅が狭くなることが判明している。1996・1997年度についても同様の過程を辿る遺構面が続いており、SD69002が埋め立てられていることから、1996年度の第７・９面間が1995年度における第３・４面間と推断した。また、1995年度第３・４面間には洪水砂が堆積しており、1996・1997年度においても対応する洪水砂を確認している。

４．**鎌倉時代水田面と洪水砂**　1996・1997年度において中世前期の遺物を含む、水田土壌・畦畔を検出し、上面に被覆する洪水砂を確認した。95年度においても洪水砂及び洪水砂によって埋没した溝を確認したことから同一層と推断した。

５．**下層水田土壌**　最深部には入佐川遺跡・袴狭遺跡において調査を実施している木製品を含む腐植質シルトが各調査区において確認できた。

以上の鍵層をもとに各年度の遺構面を関連付け、層序・遺構面の整理を行った。各面の相関関係は以

下の通りであり、各層序の概要は別表の如くである。

遺構面区分	95年度調査	96年度調査	97年度調査	遺　構	時　期
近世Ⅰ面		第１面		畠	19世紀
近世Ⅱ面		第２面		水田土壌	(江戸)
近世Ⅲ面		第３面		水田土壌	(江戸)
中世Ⅰ面	第０面	第４面	第１面	水田土壌	慶長年間
中世Ⅱ面	第１面	第５面	第２面	建物・溝	天正年間（1580年まで）
中世Ⅲ面	第２面	第６面	第３面	堀・土塁・屋敷地	永禄後期（1569年まで）
中世Ⅳ面	第３面	第７面	第４面	堀・土塁・屋敷地	永禄年間
中世Ⅴ面	第３・４面間	第８面	第５面	堀・土塁・屋敷地	天文後期～永禄前期 (1550年代～)
中世Ⅵ面	第４面	第９面	第６面	堀・土塁・屋敷地	天文年間（1554年以前）
中世Ⅶ面	第５面	第10面	第７面	堀・土塁・屋敷地	16世紀前半
中世Ⅷ面	断面観察	第11面	第８面	水田畦畔・溝	鎌倉
古代Ⅰ面		断面観察	断面観察	水田土壌	平安時代後期
古代Ⅱ面	断面観察	第12面	第９面	水田畦畔	奈良～平安時代前期
古代Ⅲ面				水田畦畔	古墳時代前期
古代Ⅳ面	―	―	第10面	水田杭列	弥生時代

第２表　遺構面対照表

第２節　遺構面の時期決定

各遺構面の時期決定は出土遺物と共に、２点の紀年銘木簡と火災層の文献との照合、更に墨書土器に記された人名の文献との照合を加味して推定した。

近世Ⅰ面は畠状遺構③層を検出しているが、上面に被覆する洪水砂②層中に19世紀代の出石焼を含んでいることから19世紀代と想定した。

近世Ⅱ・Ⅲ面については詳細に時期を決定する遺物はないが、中世Ⅰ面と近世Ⅰ面（19世紀）の間であり18世紀を中心とする時期であろう。

中世Ⅰ面は、武家屋敷が終焉を迎えたあとの水田土壌⑤層であり、慶長期の遺物が出土している。

中世Ⅲ面は95年度の調査において礎石建物を検出しており、火災によって焼失している。この面を被覆する火事片付け土⑧層からは永禄12年（1569年）の紀年銘木簡が出土しており、火災層が永禄12年の合戦によるものと推定できる。

以上の２点から武家屋敷遺構が終焉を迎える中世Ⅱ面を被覆する火災層⑥層を天正８年（1580年）の合戦によるものと推定した。

中世Ⅴ面はⅣ面以降の大規模な整地（地業⑭・⑬層）によって堀が埋められてゆく過渡期にあたる。

Ⅴ・Ⅵ面間の遺構面からは、天文23年（1554年）の紀年銘木簡（位牌　道祐禅門霊位）が出土しており、1554年を前後する時期が与えられる。

また、中世Ⅳ面・Ⅴ面の堀から出土した人名墨書土器には位牌に記載された道祐の名があり、道祐が死後に追善供養されたことが分かる。Ⅳ・Ⅴ面は、位牌に記された天文23年以降に形成された遺構面であることが明らかである。そして位牌よりも下層に存在する内堀（SD54001やSD69002）に伴う第Ⅵ面（⑱層上面）は天文23年以前の可能性が極めて高い。

Ⅵ・Ⅶ面の時期を考古遺物以外から確定できる資料はないが、両面共に火災層を伴っており、その何れかが、山名・垣屋氏による永正元年（1504）年の内乱による火災である可能性は高く、遺物の時期か

らはⅦ面⑲層が相当する可能性が高い。

中世Ⅷ面は、武家屋敷形成以前の遺構面である。溝・畦畔を検出している。対応する層序㉓層からは、須恵器甕が出土しており、中世前期と捉えられる。

以下は、古代の遺構面である。中世面以上は比較的灰色の土壌層によって形成されていたが、以下は腐植物を多量に含む腐植土層によって構成され、周辺の入佐川・砂入・袴狭遺跡と同じ状況となる。

古代Ⅰ面は断面観察を主とした為、詳らかではないが、黒色土器を含む土壌層㉔層よって形成される水田面である。平安時代後期に入る時期であろう。

古代Ⅰ面を形成する㉔層の下層。㉕層の上半には祭祀遺物（馬形）が含まれており、下半には8世紀代の須恵器杯Bが入っている。奈良時代から平安時代前期の水田土壌と認識できる（古代Ⅱ面）。

古代Ⅱ面と古代Ⅲ面は土壌化によって不可分な部分が多いが、㉖層には古式土師器が含まれていること、96・97年度では㉕層との間に腐植土層が入り、古墳時代前期の水田土壌と認識できた（古代Ⅲ面）。

㉘層は白色粘土によって構成される無遺物層である。堆積する㉗層には弥生時代中期の土器の大型破片が入っている。このこと及び杭列の存在から、弥生時代中期の水田土壌と認識できた（古代Ⅳ面）。

第3節　遺構面及び遺構・包含層の表記について

[各年度調査時]

1．遺構面は各年度において、最初の調査対象面を第1面とし、以下下層の遺構面に対して第2面・第3面と表記をした。

2．遺構番号を4桁とし、頭の番号に各面の面数をつけ管理した。即ち、SD4001は第4面の1番目の溝を示すものである。

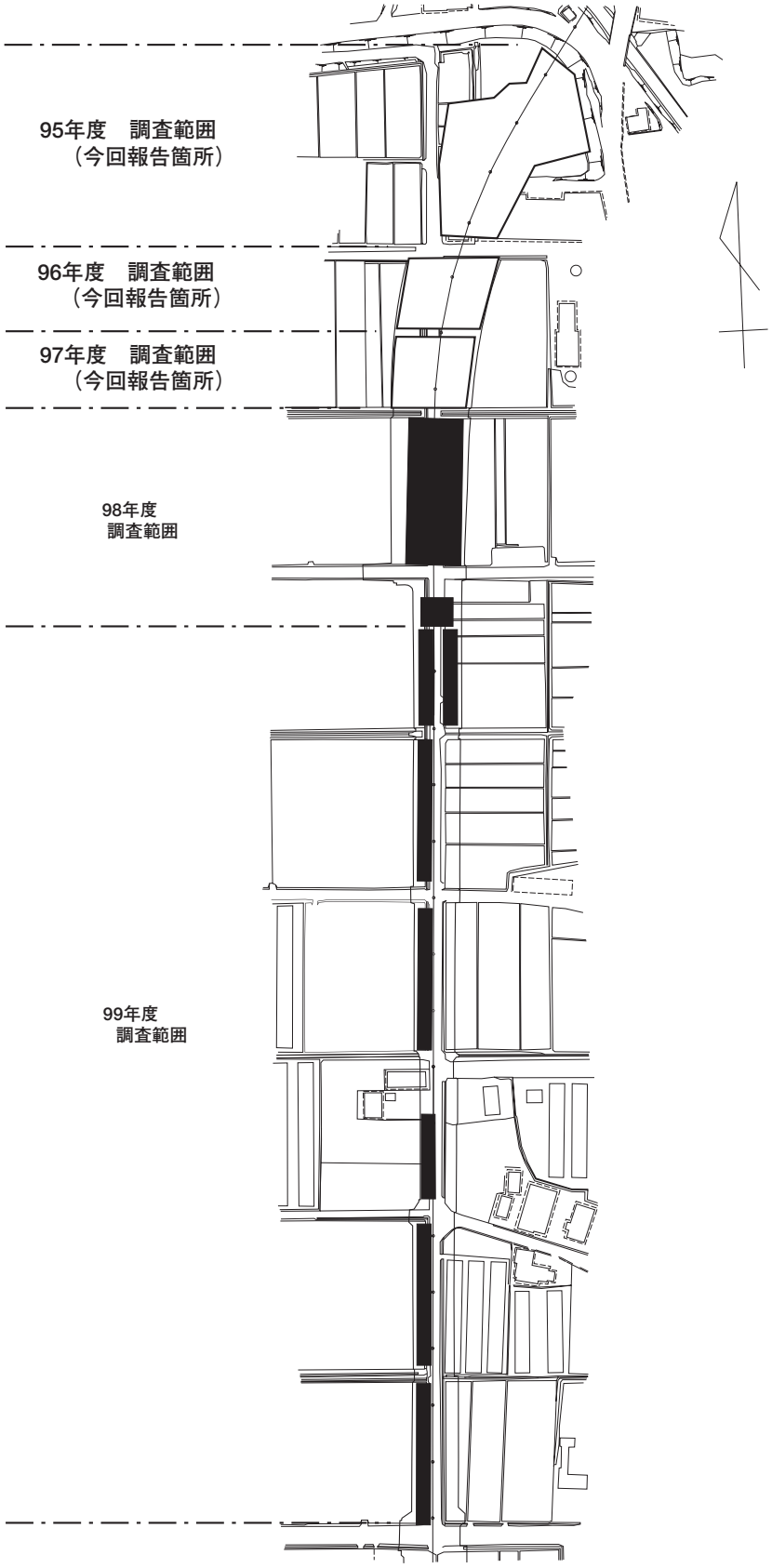
3．本遺跡の遺構面・包含層は、火災層（及び火事片付け層）・土壌層（旧地表）・整地層（山土による造成）から構成されているため、基本的には包含層の表記をせず、火災層・土壌層・整地層及び面上の分類によって遺物の取り上げにつとめた。

　この場合、火災層（及び火事片付け層）はK層、土壌層（旧地表）をa層、整地層をS層と略表記し、遺構同様、頭に遺構面数を冠した。即ち、第2面上を被覆する火災層は2K層、第2面を構成する整地層を2S層、生活面を構成する第2面の旧地表を2a層として遺物の取り上げを行っている。

4．各遺構面の把握に際し、局地的に遺構面が出現する場合は枝番号を振ることとし、例えば、第3・4面において出現した遺構面については、第3＋1面、更に古く第4面より新しい遺構面が出現する場合には＋2面の表記を行い、あるいは第4面精査中に新しい遺構面を確認した場合には第4－1面として遺物の取り上げを実施した。この場合、遺構については冒頭より2番目に枝番号を記入している。即ち第8＋2面の溝では、SD8201とした。

[調査報告書刊行に伴う遺構番号表記等について]

4．上記の調査時の遺構番号管理に加え、報告書刊行に伴い、遺構番号の冒頭に各年度西暦年の末尾番号を加え表記した。即ち、1995年度ではSD4001はSD54001、1996年度のSD8201では、SD68201、1997年度SD4001ではSD74001と表記する。また、以下、調査番号・遺構番号についての呼称と統一させるため、調査年度の呼称については元号ではなく西暦（1995年度・1996年度・1997年度）を使用し、文章中では95年度・96年度・97年度と省略して説明してゆく。



第 5 図　調査区配置図（縮尺＝1：2,500）

第Ⅴ章　遺　　構

第１節　近世の遺構　（近世Ⅰ面～近世Ⅲ面）

近世の遺構面は、96年度調査区において調査を実施している。層序からは大きく３面に分けることができる（近世Ⅰ面～近世Ⅲ面）が、遺構として認識できたものは、近世Ⅰ面の畠状遺構（96年度調査）のみである。以下の２面は何れも水田土壌であり、95年度～97年度にかけて広がっている。

畠状遺構（図版16）

96年度調査区の北東区画において検出した。

幅５～７㎝、高さ４㎝の畦に区画された、幅１m、検出長12～13mの短冊状の区画である。畠は黄褐色粗砂の洪水砂によって埋没している。出石焼片が上面を覆う洪水砂中に混入している。

第２節　武家屋敷に伴う遺構（中世Ⅰ面～中世Ⅶ面）

此隅山城武家屋敷に関連する遺構は、中世Ⅰ面～中世Ⅶ面の遺構が対応する。

以下各面ごとに概要を述べることとする。

武家屋敷遺構は、95・96・97年度にわたり、複数年度に跨る遺構も存在する（堀）。また、武家屋敷遺構が成立した中世Ⅶ面から廃絶する中世Ⅱ面、更に廃絶後のⅠ面を通じ、遺構配置の基本的なレイアウトはあまり変化がないため、冒頭において、少し整理を行い、以下その整理に従って述べてゆく。

武家屋敷遺構は堀・土塁・屋敷地で構成されている。調査区の西端を南北に流れる堀があり、堀の東肩に造られた土塁を会し、東側（山裾側）には整地土を敷いた屋敷地が広がっている。

Ⅰ　堀

堀は屋敷地の形状に従って屈曲部を造りながら、各年度を通じ南北方向に流れ、当初は、２本の堀が存在し、中世Ⅴ面にいたって内側の堀が埋められ、１本となる。

以下、便宜的に武家屋敷遺構からみて外側の堀（SD54002・SD68001・SD75001等）を外堀と呼び、内側の堀（SD54001・SD69002）を内堀と呼んでおく。96年度・97年度において主に調査が可能であった堀は調査範囲の制約から外側の堀である。

Ⅱ　土塁

土塁は外堀・内堀間、内堀・屋敷地（居住区）間にあり、以下に述べる各屋敷地を区切って存在する。

Ⅲ　屋敷地

土塁の内側の居住区を屋敷地とする。屋敷地は土塁の位置・建物の配置・堀の屈曲から95年度において調査した屋敷地A、96年度調査範囲にある屋敷地B、97年度において調査を行った部分の屋敷地Cの３か所に分けることができる。また、堀の西側に展開する整地面が97年度に確認されており、石塁において区切られた整地面を屋敷地Dとして、小規模な屋敷地と認識しておく。

以下、堀・土塁・屋敷地A～Dに主に項目を分けて各面ごとに記述してゆく。

1．中世Ⅰ面（図版17・18　写真図版58・67）

中世Ⅰ面は、95年度の第０面、96年度の第４面、97年度の第１面である。

武家屋敷遺構は廃絶している。遺物から慶長年間の遺構面と考えられ、中世面の範疇で述べておく。

95年度の第０面は水田土壌であり、遺構面の検出は行っていない。96年度の第４面では性格不明の石組と絡み、下層の外堀の痕跡である凹部内には建物の根太に伴う可能性のある石の並びが検出されている。97年度では、外堀が埋没し幅を狭めた溝が検出されている。

溝（埋没した外堀）

SD64001・SD71001（図版18）

96年度調査区中央より97年度調査区東区画側で検出された。幅3.4～1.8m、深さ70～60㎝を測り、方位は南北方向（Ｎ３°Ｗ）にとる。

その他の溝

SD64002（図版18）

Ⅻ区より検出された。幅0.7m、深さ15～10㎝、方位は北西から南東方向（N60°Ｗ）にとる。

2．中世Ⅱ面（図版19～25　写真図版５・６・59・68）

中世Ⅱ面は、95年度の第１面、96年度の第５面、97年度の第２面である。天正年間（1580年まで）の遺構面と考えられる。

中世Ⅱ面は、中世Ⅲ面が（永禄12年の）火災にて焼亡した後に火事片付けを行った上に形成された遺構面である。特徴として、検出される遺構が極端に少ない点があげられる。また、Ⅱ面上にも炭層が被覆しており、遺構面の形成が、火災に始まり、火災に終わる点があげられる。

95年度調査区北西半部には入佐川遺跡に連なる方形の大きな堀状の窪みが存在し、土橋状の空間を介して南へ延びる幅約３ｍの堀を検出している。

95年度第２面以下において顕著に盛り上がる土塁は95年度の第１面においては居住区側からの盛り上がりが埋没し、ほぼ平坦化している。

整地土は調査区の北東半部に顕著に検出されている（屋敷地A）。整地面上に掘立柱建物SB51001（５間×２間 10m×６m）・溝・建物の壁下の基部の可能性の高い石列などが存在するが大半は中世Ⅲ面の痕跡と考えられる。時期は永禄12年以降、慶長年間までと考えられ、主に天正期と推定される。

96年度調査区東半部には整地面があり、上面には部分的に炭が被覆する。また、整地面上からは転ばし根太跡が検出されている。

調査区の中央では下層の堀の窪みが顕著に現れ、根太・礎石・根固めに使用されたと考えられる川原石や玄武岩が沈下した状態で検出されている。土塁はほぼ平坦化していて存在しない。

97年度では堀の内側（東側）に整地が厚く施され、堀幅約５ｍ程度に縮小している。堀は半ば埋没し、コーナー部より東側（堀の南辺）は整地の拡大によって完全に埋められた状態である。また、下層において確認できる堀内の陸橋部は完全に埋没している。

堀の肩部の整地面上には礎石が置かれ、塀（板塀と考えられる。）が巡らされていたが、第Ⅱ面では散乱した状態で検出されており、下層―中世Ⅲ面において焼失し、放置された可能性も高い。

堀の外側（調査区の南西半部）にも盛土が施されており（屋敷地D）、建物が建っていたと考えられる。屋敷地Dの北辺には石列が東西方向に存在している。石列は石塁様のもので、屋敷地D部分を北側と仕切る機能があったと考えられる。堀の外側・屋敷地Dの北側は畠もしくは水田であったと考えられる。

ただし、堀の外側の施設は中世Ⅲ面において造られた可能性も高く、Ⅱ面まで継続したと考えたい。

堀

（１）SX51001・堀101（図版20）

調査区北西端において検出した。中世Ⅳ面のSX53002が中世Ⅲ面をへて埋没した窪みである。

入佐川側を含め、南北長24m以上・幅８m以上・深さ0.8mを測り、湿地状を呈している。

95年度側の調査区では図示できる出土遺物はない。

（２）SD51005・SD65001・SD72001（図版20・22～25）

95年度調査区端を南北に貫通し、96年度調査区中央より97年度調査区東区画を南北に貫通している。北端傾斜面において検出した。SK014Aの南側に位置する。95年度調査区の西よりL字に屈曲し、南側に延び、97年度調査区の中央の東側で東方向にL字型に屈曲する溝である。浅い皿状の断面をもち、規模は幅4.8～3.8m、検出長35.5mを測る。

越前焼擂鉢、瀬戸・美濃系椀、明染付碗などが出土している。

出土遺物は、SD51005から瀬戸・美濃系碗（35）・土師器皿（36～39）・白磁皿（40・41）・明染付碗片（42）を図示した。

また、埋土の黄褐色洪水砂からは鉄砲玉が出土している。

土塁（図版19）

（１）SF51001（図版20）

屋敷地Ａに伴う。居住区側からの盛り上がりが埋没し、ほぼ平坦化している。上面の幅約5.5m・堀底（基底面）の幅約8.0m、検出全長約11.0m・高さは堀底から約1.0m、屋敷地側から0.2mを測る。

屋敷地A（図版20・26）

SB51001とその北側に入佐川遺跡において検出された畝状遺構がある。一軒屋と家畠が屋敷地内に存在すると考えられる。武家屋敷としての屋敷地が廃絶あるいは衰退した姿と考えられる。

（１）SB51001 （図版20・21）

調査区北東端に位置している。桁行方位をＮ８°Ｗにとる建物跡である。桁行南北５間（10.00m）・梁行東西２間（6.00m）床面積約60㎡の規模である。

柱間は、桁行１間2.00m・梁行１間3.00mと捉えられる。内側に５個の柱穴があり、４面庇あるいは上屋・下屋の区別をもつ近世家屋の形態であった可能性が高い。その場合、下屋の幅は約1.0mである。

建物の周りには幅0.90m・深さ0.2m前後の雨落ち溝の痕跡があり、南北12.00m・東西7.00mの長方形の範囲が約20㎝高くなっている。

柱穴は円形を基本とし掘方径40cm～50cm、柱痕は径約25㎝、深さは約20㎝～50cmである。

柱穴からは土師器皿が出土している。

屋敷地C（図版22・23・24）

97年度調査区東側の黄褐色粗砂で整地された面より検出された。堀SD72001と併行に並ぶ柵列SA72001、SA72002、SA72003とN11°Wに振ったSA72004、SA72005と多数の柱穴からなる。

（１）柵列SA72001（図版24）

97年度調査区の東側の屋敷地Cの東端より検出された。南北方向に延びる。幅15～10㎝、深さ５㎝ほどの溝と直径20㎝の柱穴より構成される。

（２）柵列SA72002（図版24）

97年度調査区の東側の屋敷地Cの東端より検出された。南北方向に延びる。幅20㎝、深さ５㎝ほどの

溝と直径60～40cmの柱穴より構成される。

（３）柵列SA72003（図版24）

97年度調査区の東側の屋敷地Cの東端より検出された。南北方向に延びる。直径50～20cmの柱穴が連なって構成される。

（４）柵列SA72004（図版24）

97年度調査区の東側の屋敷地Cの東端より検出された。南北方向に延びる。直径40～20cm の柱穴より構成される。

（５）柵列SA72005（図版24）

97年度調査区の東側の屋敷地Cの東端より検出された。南北方向に延びる。直径40～15cm の柱穴より構成される。

（６）石列72001（図版24）

SD72001の南端部の東側より検出された。北西から南東方向に延びる。拳大から人頭大の石が敷き並べられている。

屋敷地D（図版22・23・26）

97年度調査区の南西隅より検出された。暗褐色粗砂の面より検出された。

（１）石塁72001（図版23・25）

XⅦ区より検出した。SD72002の南側を東西に延び、東端はSD72001にぶつかりとぎれている。西側は調査区外へと延びている。整地面と北側部分を区画している。幅1.5m、高さ60cmほどで拳から人頭大の石が敷き詰められている。

（２）SD72002（図版23～25）

XⅦ区の石塁の北側より検出された。規模は幅2.4～3.0m、深さ20cm、検出長5.3mを測る。

その他の溝

SD72003（図版23）

SD72001の南側より検出された。規模は幅0.5～0.4m、深さ10cm、検出長2.8mを測る。

3．中世Ⅲ面（図版26～33　写真図版７～24・69～72）

中世Ⅲ面は、95年度の第２面、96年度の第６面、97年度の第３面である。

中世Ⅲ面は、中世Ⅳ面が火災を受けた後に建て替えられた建物を含み、一部に活発な地業もみられるが、基本的にはⅣ面のレイアウトを引き継ぐ点が特徴である。

Ⅲ面は焼亡しており、95年度の調査ではⅡ面形成にいたる火事片付け土内から殆んど破損していない永禄12年銘の木簡が出土している。Ⅲ面はその紀年銘が示す永禄12年（1569年）の合戦によって焼け落ちた遺構面と考えられる。

95年度の遺構は、調査区の西半において幅約３～５mの土塁が南北方向に走り、その西側に大きく掘り広げられた堀と、土橋を挟んで、L字に南へ延びる幅約３mの堀が検出されている。

この堀は96年度・97年度調査区まで続き、東へ直角に曲がり調査区外へと出てゆくが、コーナー部の内側は、整地土の盛り出しと塀の基部となる石列の構築によって多角形に構築されている。

中世Ⅲ面では、中世Ⅳ面に引き続き活発に山土による地業を行っており95年度調査区において確認できる土塁の痕跡は明らかではなく、97年度調査区では礎石を据えた塀と柵列が廻っている。

堀

中世Ⅲ面の堀は調査区の西側を基本的には南北に流れており、97年度調査区において東へ曲がる。

（１）SX52002・入佐川遺跡堀201（図版27）

95年度調査区北西端において検出した。中世Ⅳ面のSX53002が中世Ⅲ面に継続して使用されている。

入佐川側を含め、南北長24m以上・幅８m以上・深さ1.00mを測り、湿地状を呈している。

（２）SD51005下層・SD66001・SD73001（図版26）

95年度調査区のSD51005下層は中世Ⅳ面から中世Ⅱ面に続く堀である。調査区西端において検出したSD51005下層は南へ延びSD66001・SD73001へと続く。北端はL字に屈曲し、95年度調査区では、浅い皿状の断面をもつ。溝幅は約2.5m・深さ約35㎝を測る。95年度調査区端を南北に貫通し、96年度調査区中央より97年度調査区東区画を南北に貫通している。北端傾斜面において検出した。SK014Aの南側に位置する。95年度調査区の西よりL字に屈曲し、南側に延び、97年度調査区の中央の東側で東方向にL字型に屈曲する溝である。浅い皿状の断面をもち、規模は幅4.80～3.80m、検出長35.50mを測る。濁灰色シルト・灰黄褐色シルト～中砂が堆積している。96年度調査区の堀の肩部には、直径40㎝の玄武岩が据えられていた。また、栗と思われる木の株が検出された。

土塁（図版27・28・37　写真図版22）

土塁は堀と屋敷地の間を基本的は南北方向に通っているが、全体に平坦化していて屋敷地側からの高さは高い部分で30㎝前後であり南半部ではほとんど認識できない。堀・溝等に挟まれた空間について土塁とした。屋敷地Aの北端部では中世Ⅳ面のSD53012が半ば埋まり（SD52001）、SF53001の北端は細い二股のSF52001となり、中ほどより南側については、SD52009・SD52039とSD51005下層の間が土塁と認識されるが、下面の畠状遺構部分が埋没し、形状は不明確となっている。

（１）SF52001（図版27・28）

屋敷地Aに伴う。居住区側からの盛り上がりが埋没し、ほぼ平坦化している。SD52001によって北端は二股に分かれる。SF52001の規模はSB52004西側では、上面の幅約7.5m・堀底（基底面）における幅10.00m・堀底からの高さ約0.35mを測る。

屋敷地A（図版28）

屋敷地Aは土塁の東側に山土を敷き述べた整地面を溝によって区画された建物群から構成されており、その北限は、入佐川遺跡の西側から堀を渡る土橋・通路状の空間にあたると考えられる。東限は調査区のすぐ東側が約５mの比高差をもつ現県道の法裾にあたることから、数mに収まると考えられる。

屋敷地内からは、礎石建物及び建物を区画する溝・建物の壁下の基部の可能性の高い石列・根太・網代垣等の遺構を検出している。溝内には多量の土壁材が含まれており、焼土・土壌層中には木簡・釘・飾金具等が多量の土師器皿・輸入陶磁器とともに出土している。

建物群は溝によって区画されているが、溝と溝の間は通路状の空間として機能していたと考えられる。以下、溝・空間によって区分される部分を区画とし、区画ごとに述べてゆく。

〔区画A〕

屋敷地の中央北側に位置する。SF52002の東隣、SB52001をSD52002・SD52007が囲む部分である。

溝の内法で測るならば、南北11m以上・東西８mを測る。南北の方位はＮ５°Ｗにとっている。区画内にはSB52001のみ存在している。南側を区画するSD52002は土塁外のSD52004とも連結しており、東隣に接する区画Bの南を画するSD52035に延びるものと考えられる。また、南側の区画Cの北側を画する

SD52003との間に幅１ｍ～2.5mの通路状の空間を造り出している。

（１）建物SB52001（図版27～29）

桁行方位をＮ４°Ｗにとる礎石建物跡である。SD52002・SD52007によって３方を区画されている。建物は北端が調査区外にある可能性があり、また礎石が原位置を離れ乱れていること、柱間の間隔が一定でない点など、規模の確定は慎重にならざるを得ないが、桁行南北８間（9.70m）以上・梁行東西５間（7.50m）総床面積約72.7㎡以上の規模と考えられる。

柱間は、桁行き（南北方向では、北端１間が約2.00m・南端１間が約1.80mを測り、中央の６間については、南北３間が各３mに分かれている。３間の内部はほぼ1.00m間隔であるが、若干ばらつきがある。東西方向については東１間は約0.65m、他は1.93m・1.06mを測る。

建物は径40㎝前後の玄武岩の礎石上に柱を据えており、部分的に径20㎝程度の礎石が柱間間に存在し、束柱を据えていたことが分かる。また、東端桁行きには木杭が伸びず、比較的小型の礎石が含まれることから、縁束の礎石であった可能性が考えられる。

この建物の特徴として、礎石間を結び木杭列が打ち込まれている点があげられる。径２㎝程度の木杭が10㎝前後の間隔で、基本１列に並んでいる。この施設の性格は不明であるが、この建物の周辺に限り土壁片が出土している点から、床下までを区切る土壁の存在を考えてもよいかもしれない。

〔区画B〕

屋敷地の北東端に位置する。区画Aの東隣、SD52035・SD52007・SD52034が囲む部分である。

北側の区画が判然とせず、内部の遺構についても不明であるが、溝にある程度規定された空間として区画としておく。区画の東西幅は約６mを測る。南北は不明である。区画の北端からは畳が出土しており、近接する溝状落ちが北を画する東西方向の溝であった可能性も残る。

〔区画C〕

屋敷地の中央に位置する。複雑に溝が廻っているが、SB52002を囲繞する部分を考えるならば、SD52003・半ば埋没したSD52008と考えられ、東側については明確ではないがSD52003の末端までと推測する。

溝の内法で測るならば、南北７m前後･東西９mを測る。南北の方位はＮ０°Ｗにとっている。区画内にはSB52002のみ存在している。北側を区画するSD52003は北側の区画Aの南側を画するSD52002との間に幅１ｍ～2.5mの通路状の空間を造り出している。

（１）建物SB52002（図版30　写真図版14～16）

桁行方位をＮ０°Ｗにとる建物跡である。東西6.00m・南北4.80m、床面積約28.80㎡の規模である。建物には主柱穴がなく、桁行きにはSD52027、両妻には東西両側共に石列があり、いわゆる地桁建物であったと考えられる。

建物の内部からは南北３列の根太材、根太を置いたと推定される石列が検出されており、その他に整地面上に２本の根太痕跡が検出されている。根太間の間隔は約1.20mを測り、根太材に残る桁束の痕跡は約60㎝を測る。

建物は中世Ⅳ面から続くSD52003・SD52008によって３方を限られており、ある程度溝を埋め、地業をして建物を構築している。SD52003は幅約60㎝～１mに幅を狭め、全面に杭列を打ち込んだと考える。

SD52008は建物の南東隅部分がコの字に拡張されており建物区画を現していると考えられる。

〔区画D〕（図版28）

区画Cの東隣に位置する。囲炉裏の基部と考えられるSX52001の存在から、建物が南北方向の区画が

詳らかではないが、区画を想定した。北側のSD52035・南のSD52008の間と考えられる。

溝の内法で測るならば、南北12m前後・東西６m以上を測る。軸の方位は詳らかではない。区画内にはSX52001のみ存在している。

（１）囲炉裏跡ＳＸ52001（図版28）

SD52008上に集石を検出している。一辺70㎝四方の２つの集石が連結したもので、径20㎝前後の河原石によって構成されている。上面が平坦であることから、囲炉裏の基部である可能性が高い。

〔区画E〕（図版28）

区画Cの南隣に位置する。SD52008が埋没した上に建物SB52003を構築した部分を区画Eとした。区画の規模は詳らかではない。東をSD52017、西を区画Fの東を限る部分と考えるならば、東西約13.6m、南北は区画Cとの境から、南はSB52003の南側あたりとしておく。

（１）建物SB52003（図版31）

調査区中央南東端に位置する礎石建物である。桁行方位をN89.5°Eにとる。SD52008が埋められた後に構築されたと考えられる。

建物の南東部が調査区外にでていることもあり、構造・規模については不明な部分が多い。本稿では、図示した部分の中で、北東部分の東西方向の石列・東側の南北方向の石列とSD52017・西側のL字の溝SD53013を含めた範囲を建物と考え、その中でもSD52008の南肩より南側を主たる建物部分と考え、１辺40㎝前後礎石で構成される桁行き東西６間（11.80m）・梁行き南北６間（6.00m）床面積約70.80㎡の規模の身舎を想定した。桁行きの１間は約1.96mを測り、間に束柱を支える一辺20㎝前後の礎石が存在する。梁行きの１間はばらつきあるが、桁行き同様1.96m間隔の部分がある。また、中央北側には３条のころばし根太痕が検出されており、簡易な床板が貼られていた部分の存在が想定される。

身舎部分に付随して南側には半間の間隔をあけ、庇が存在した可能性が高い。また、北桁行きの北側には幅約50㎝ 前後（１／４間）の間隔をあけ小規模な礎石が東西に走っている。この部分は縁と考えられ、北東端において桁行き東西３間（3.30m）・梁行き南北２間（1.50m）床面積約4.95㎡の小規模な礎石建物と連結している。

網代垣遺構（図版31　写真図版19）

SB52003内に位置する長辺約２m・短辺約0.9mの規模をもつ平行四辺形の区画である。幅２㎝ほどの細い有機質の帯状痕跡が廻っている。断面観察により帯は籠状のものの下端（残欠）であることが判明した。建物の柱通りにそって存在することから屋内に籠あるいは網代による区画を設けたと考えられるが性格は不明である。帯に沿って３か所に径10㎝の杭跡があり、区画を固定していたと考えられる。

（３）転ばし根太建物（図版31　写真図版19）

SB52003の南西に位置する建物である。厳密には区画Eには入らないが、近接するためここで述べる。

整地面上に幅約0.40m・全長約2.80m・深さ約３㎝の溝を３条検出している。

規模は明確ではないが、根太を地面に並べ床を貼ったいわゆる転ばし根太建物と考えられ、小規模な建物の存在が推測される。

〔区画F〕（図版28）

屋敷地の南西端に位置する。区画C・Eの西隣、SD52009が西側に向かって突き出る部分である。

SD52009以外の区画が判然とせず、区画内にはSB52004のみ存在しているが、溝にある程度規定された空間として区画としておく。区画の南北幅は約9.50mを測る。東西は不明であるがSD52008・SD

52011までの間とすれば、約８ｍを測る。

（１）建物SB52004（図版28　写真図版21）

桁行方位をＮ０°Ｗにとる掘立建物跡である。桁行南北３間（7.90m）・梁行東西２間（5.80m）床面積約45.82㎡の規模である。

建物の柱間は、桁行１間2.30m・3.30m、梁行１間3.00m・2.80mと捉えられる。内側にSK52006が存在するが、先後関径は不明である。東桁行きには計６個の柱穴があるが機能は不明である。

〔区画溝〕

（１）SD52002・SD52007（図版28）

区画A、SB52001をコの字に囲む区画溝である。

SD52002は幅2.0m・深さ約35㎝、浅い皿状の溝である。溝の北端には玄武岩の礎石や木片、土師器皿などが固まって投棄されている。SD52002は土塁外のSD52004とも連結しており、東隣に接する区画Bの南を画するSD52035に延びるものと考えられる。SD52007はSD52002から分岐し建物の東辺を区画する溝である。幅0.6m・深さ約10㎝、断面は逆台形の溝である。

（２）SD52003・SD52008（図版28）

区画C、SB52002をコの字に囲む区画溝である。

SD52003は逆コの字型に走り、SD52008と合流する。中世Ⅳ面のSD53014が埋め立てられ、幅が狭くなった溝である。溝幅約60㎝～１ｍ・深さ約30㎝、断面形は浅い皿状溝である。溝の北肩を中心に杭列が検出されている。

SD52008は中世Ⅳ面のSD53012が埋め立てられ、幅が狭くなった溝である。SD52003に切られ先後関係をもつが、C字形に区画Cを廻り区画の南側ではSD52003と合流している。幅は約２ｍ～３ｍ・深さ約15㎝、を測る浅い皿状の溝である。溝は木片・角石などによって埋まっており、SB52002構築時には北肩のごく限られた幅が雨落ちとして機能していたと考えられる（北溝）。

（３）SD52009・集石遺構（図版27・28　写真図版21）

SD2009は区画F・SB52004の西側を区画する溝である。溝の北端は明確ではないが、東方へ曲がりSD52008と繋がっていた可能性が高い。溝底はやや南に低い。

区画の南側では幅約4.1m・深さは区画内側からは約50㎝・外側からは約15㎝を測る。

集石遺構はSD52009内にあり、径10㎝ 前後の礫が約３ｍ×２ｍの範囲で敷かれている。SD52009は集石以南では明確ではなく区画Eの西端際あるいはSD52039と合流して流れたものと考えられる。

（４）その他の溝（図版28）

SD52001はSF52001の中央を割って北側に流れだす舌状の溝である。幅４ｍ・深さ0.5mを測る。中世Ⅳ面のSD53012が埋め立てられ、屋敷内の区画溝（SD52008）と分離した溝である。

柵

柵列SA73004（図版33）

屋敷地Cの南東端より検出された。南北方向に延びる。直径50～40㎝の５つの柱穴からなる。

柵列SA73005（図版33）

屋敷地Cの東南端より検出された。南北方向に延びる。直径20㎝の柱穴２つと直径60～50㎝の柱穴３つからなる。

石列SA73002（図版33）

SD72001の南端部の東側より検出された。北西から南東方向に延びる。拳大から人頭大の石が敷き詰められている。

4．中世Ⅳ面（図版34　写真図版25～33・60・73～78）

中世Ⅳ面は、95年度の第３面、96年度の第７面、97年度の第４面である。

中世Ⅳ面は、中世Ⅵ面が火災を受けた後に構築された遺構面である。活発な地業によって整地層厚みは50cmを超える部分もあるが、中世Ⅴ面を経て、ある程度の時間をかけて形成された遺構面である。基本的にはⅢ面にレイアウトを引き継ぐ点が特徴である。Ⅳ面もまた焼亡している。

遺構面の特徴としては、中世Ⅵ面に存在した内堀が整地層によって埋められ、外堀の内側が土塁を挟み屋敷地となる点であるが、おそらく中世Ⅴ面にはそのレイアウトは出来上がっていたものであろう。

95年度の遺構は、調査区の西半において幅約３～５mの土塁が南北方向に走り、その西側に大きく掘り広げられた堀と、土橋を挟んで、L字に南へ延びる幅約３mの堀が検出されている。

この堀は96年度・97年度調査区まで続き、東へ直角に曲がり調査区外へと出てゆく。外堀の幅は、中世Ⅴ面では幅7.5～6.5mを測るが、Ⅳ面では徐々に幅を狭め、４m程度になっていたものと考えられる。

96年度・97年度調査区の堀からは墨書土器群が出土している。

堀（図版34・35）

中世Ⅳ面の堀は調査区の西側を基本的には南北に流れており、97年度調査区において東へ曲がる。

（１）SX53002・入佐川遺跡堀201（図版35）

95年度調査区北西端において検出した。中世Ⅲ面に継続して使用されている。

入佐川側を含め、南北長24m以上・幅８m以上・深さ1.00mを測り、湿地状を呈している。

（２）SD51005下層・SD67001・SD74001（図版34）

SD51005下層は中世Ⅳ面から中世Ⅱ面に続く堀である。中世Ⅳ面とⅢ面においての形状の違いは判別できなかった。SD51005下層は下層のSD54002のレイアウトを踏襲しているが、やや東よりに開削し直している。95年度調査区の西端よりL字に屈曲し、南側に延び、SD67001・SD74001へと続き更に、東方向にL字型に屈曲する。97年度調査区では部分的に塀が伴っていたと考えられる。浅い皿状の断面をもち、規模は幅7.5～6.5m、延長約39mを測る。

墨書土器が多数出土した。出土状況から６カ所にまとまって廃棄されている様子がうかがえる。

土塁（図版37）

土塁は堀と屋敷地の間を基本的は南北方向に通っているが、全体に平坦化していて屋敷地側からの高さはほとんど認識できない。堀・溝等に挟まれた空間について土塁とした。屋敷地Aの北端部では中世Ⅵ面の土塁は、整地土によって埋められ、SF54002は細いSF53001aとなって残り、SF54001は区画A西側に細いSF53002となって残る。中ほどより南側は、SF53001bはSD53001・SD53011によって不明確あるいは細くなる。SF54001は調査区の南端では畠遺構の東側にやはり細くなって残る（SF53003）。

（１）SF53001（図版37）

屋敷地Aに伴う。居住区側からの盛り上がりが埋没し、ほぼ平坦化している。SD53012によって南北に分かれる。SF53001aの規模は上面の幅約2.00m・下底では3.50m・堀底からの高さ約0.80mを測る。SF53001bの規模は南端では幅約1.3m、畠からの高さ約15cmを測る。

（２）SF53002（図版37）

SD53014の西肩に位置する。居住区側からの盛り上がりが埋没し、区画Aとの比高差はなくほぼ平坦化している。規模は上面の幅約1.00m・高さ約15㎝を測る。

（３）SF53003（図版35・37）

畠状遺構の東側、区画Eの西側にある。盛り上がりが埋没し、ほぼ平坦化している。規模は幅約1.0m・畠側からの高さ約15㎝を測る。

屋敷地A（図版35）

屋敷地Aは土塁の東側に山土を敷き述べた整地面を溝によって区画された建物群から構成されており、その北限は、入佐川遺跡の西側から堀を渡る土橋・通路状の空間にあたると考えられる。東限は調査区のすぐ東側が約５mの比高差をもつ現県道の法裾にあたることから、数mに収まると考えられる。

屋敷地内からは、掘立柱建物及び建物を区画する溝・建物の壁下の基部の可能性の高い石列・根太跡等の遺構を検出している。溝内からは土師器皿・輸入陶磁器などが出土している。

建物群は溝によって区画されているが、溝と溝の間は通路状の空間として機能していたと考えられる。

空間が明瞭な部分は、後述する区画A・C間に顕著である。

溝はA～Fの各区画を限って掘られているが、最終的には土塁SF53001の中央を割って流れるSD53012が屋敷地の南北を二分するようになる。

以下、溝・空間によって区分される部分を区画とし、区画ごとに述べてゆく。

〔区画A〕（図版37）

屋敷地の中央北側に位置する。SF53002の東隣、SB53001をSD52006・SD53015・SD53017が囲む。

溝の内法で測るならば、南北8.70m・東西8.0mを測る。南北の方位はＮ０° Wにとっている。区画内にはSB53001のみ存在している。南側を区画するSD53015は土塁外のSD53016とも連結しており、東隣に接する区画Bの南まで延びていたものと考えられる。また、南側の区画Cの北側を画するSD53014との間に幅0.5m～1.0mの通路状の空間を造り出している。

（１）建物SB53001（図版36）

調査区北東端に位置している。桁行方位をN89.5° Eにとる掘立柱建物跡である。桁行東西３間（5.00m）・梁行南北２間（4.00m）床面積約20㎡の規模である。

建物の柱間は、桁行１間2.00m及び１間1.00m、梁行１間2.00mと捉えられる。内側に関わりのある柱穴がなく、２間・２間の母屋の西側に幅半間の庇がついた建物であったと考えあれる。

建物の周りには幅2.00m前後の雨落ち溝があり、南北9.00m・東西8.00mの長方形の範囲がやや高くなる。

〔区画B〕（図版37）

屋敷地の北東端に位置する。区画Aの東隣に位置する空間である。南側をSD53015から延びる溝に限られていたと考えられる。区画の東西幅は約７m前後と考えられる。南北は不明である。

内部には土坑SK53002・SK53003が存在する。

区画が判然とせず、内部の遺構についても不明であるが、南北方向に走る溝・溝痕跡や根太材・石列が部分的に残っており、直交する東西方向の根太痕跡が存在することから、地桁･根太をもつ建物が建っていた可能性は高い。また、東側については柱穴列が柵となる可能性もある。

（１）土坑SK53002（図版37）

長径1.90m・短径0.90m・深さ約20㎝を測る卵形の土坑である。土師器小皿（283）が出土している。

（２）土坑SK53003（図版37）

長径1.3m以上・短径1.30m・深さ約15㎝を測る卵形の土坑である。西側を損壊し形状・規模は詳らかではない。土坑内より明染付碗底部（284）が出土している。

（３）柱穴列（図版37）

全長７m、６個の柱穴によって構成される。柵列もしくは掘立柱建物跡の桁行きと考えられるが、詳らかではない。柱穴は径30㎝前後、ほぼ１m間隔で、方位をＮ８°Ｗにとる。

〔区画C〕（図版37）

屋敷地の中央に位置する。SD53014・SD53012によって西・北・東側を限られているが、南半の大半を重複する区画D・区画Eによって消失している。

溝の内法で測るならば、南北４m以上・東西16.00mを測る。南北の方位はＮ３°Ｗにとっている。区画内には建物は確認できない。北側を区画するSD53014は北側の区画Aの南側を画するSD53015との間に幅１m～2.5mの通路状の空間を造り出している。

〔区画D〕（図版37）

区画Cの南東に位置し区画Cの南東部分と切り合い後出する。また、南半部を区画Eによって切られ消失している。

区画は溝ではなく石列によって構成されており、径20㎝前後の石材によって区画されている。

石列の内法で測るならば、南北3.5m以上･東西10m以上を測る。南北の方位はN3.5°Wにとっている。区画内には根太などに使用されたと考えられる木材・石材が散乱している。

〔区画E〕

区画Cの南側に位置する。S53012（SD52008下層）によって屋敷地Aを南北に２分した中の南半部を区画Eとした。

区画の規模は詳らかではない。東端は不明であるが、調査区のすぐ東側が約５mの比高差をもつ現県道の法裾にあたることから、調査区端から数mに収まると考えられる。西側は、区画Fの東を限る部分及び溝SD53013と考えられる。南端については遺構の途切れる撹乱孔周辺と考える。

区画内の建物規模は詳らかではないが、第Ⅲ面に継続して営まれる礎石建物が存在した可能性が高い。

（１）建物SB53003（図版37）

中央南端に位置している。桁行方位をN89.5°Eにとる礎石建物跡である。中世Ⅳ面SB52003に継続する建物と考えられるが、中世Ⅳ面時の規模は詳らかではない。南北をSD53012南肩の礎石列から根太溝までの7.0m、東西を根太石列間の9.0m、床面積約63㎡の規模と考えておく。

柱間は、南北・東西とも１間2.00mと1.00mである。東端東西１間及び南端の南北１間が1.00mの柱間となる。

〔区画F〕（図版37）

屋敷地の南西端に位置する。区画C・Eの西隣、SD53001bが西側に向かって突き出る部分である。

SD53001b以外の区画が判然とせず、区画内にはSB53004のみ存在しているが、溝にある程度規定された空間として区画としておく。区画の規模は中世Ⅲ面に拡張されているため詳らかではないが、南北幅は約11m、東西は不明であるがSD53013までの間とすれば、約10mを測る。

（１）建物SB53004（図版37）

桁行方位をＮ１°Eにとる掘立建物跡である。桁行南北５間（10.50m）･梁行東西３間（8.50m）床面

積約89.25㎡の規模である。

柱間は、桁行１間1.75m・2.00m、梁行１間3.50m・2.50mと捉えられる。SB52004に先行する建物である。

〔区画G〕（図版37）

SD53012（区画E）・区画C・溝SD53012によって囲まれた南北５m・東西３mの空間が残るが、各区画で囲まれる以前には区画として面積をもっていた可能性が考えられる。

〔区画溝〕

（１）SD52006・SD53015・SD53017（図版37）

区画Aを廻る区画溝である。SD52006は区画の北側を限る。SD52006は中世Ⅲ面によって検出されているが、SB52001と切り合い先行することから、中世Ⅳ面区画に伴うものとした。幅2.0m以上・深さ約14㎝、浅い皿状の溝である。SD53015・SD53017との間に2.50m、1.00mの空間をもつ。SD53015・SD53017は区画A、SB53001をコの字に囲む区画溝である。

SD53015は幅2.6m・深さ約90㎝、断面V字状の溝である。SD53015は土塁SF53002外のSD53016とも連結しており、東隣に接する区画Bの南側へも延びるものと考えられる。SD53017はSD53015から分岐し建物の東辺を区画する溝である。SD52007と重複するため規模は詳らかではないが幅1.5m・深さ約50㎝、断面はU字形の溝であったと考えられる。

（２）SD53014（図版37）

区画Cの北・西側を区画する溝である。SD53014は逆L字型に走り、SD53012と合流する。溝幅約2.0m・深さ約40㎝、皿状の溝である。溝の東端は方形になっているが、幅30㎝程度の区画Cの北東部分を区画する溝が東側から流れこんでいた可能性がある。また、コーナー部分から西へ溝が分岐していた可能性もある。

（３）SD53012（SD2008下層）・SD53013（図版35）

SD53012（SD2008下層）は屋敷地Aを南北に２分し、クランクしてSX53002・入佐川遺跡堀201に流れ込む溝である。また、土塁SF53001部分を２つに割って北側へ溝は分岐している。溝の規模は幅1.5m～2.0m・深さ約70㎝、断面V字状の溝である。土塁部分から分岐した部分は幅3.00m・深さ40㎝を測るが、約19m先で終わっている。

SD53013は調査区の東端からSB53003の北桁行きと重複して東西方向に走り、西端は南へ屈曲している。区画Eの北・西を画する溝である。幅0.50m・深さ15㎝を測る。

（４）SD53001・土坑53001（図版35・37）

SD53001は区画F・SB53004の西側を区画する溝である。溝の北端は明確ではないが、北へ直進しSD53012と繋がっていた可能性が高い。溝の高低はやや南に向かって低い。

区画の南側では幅約2.0m・深さは区画内側からは約30㎝・外側からは約23㎝を測る。

SK53001はSD53001内にあり、先後関径は不明である。径1.70m前後・深さ20㎝の不整円を呈する。土坑内からは、土師器皿（280・281）瓦質火舎香炉（282）が出土している。

〔畠状遺構〕（図版35）

SD53011の東側に位置する。東西方向の溝４条と南北方向の溝３条が検出されている。形状から畠が存在した可能性が高い。

東西方向の溝SD53002～SD53005は幅約40㎝・深さ約５㎝の浅い皿状の溝であり、各溝の間隔は80㎝前後を測る。何れも南北方向の溝SD53007に連結している。

南北方向の溝SD53008～SD53010の３条は幅約20cm・深さ約４cmの浅い皿状の溝である。各溝は90cm前後の間隔をあけて存在する。

これらの溝の間には幅約１m・高さ10cm 前後の畦畔状の高まりが東西方向にあり、SD53011とSD53010・SD53007の間の幅１mの空間に連結している。畦畔を挟み２区画の畠が存在したと考えられる。畠の規模は１区画が６m四方程度であったと考えられる。

溝

SD74002（図版38）

97年度調査区南端を東西に貫通している。幅2.00～1.50m、長さ13.50m、深さ62cmの溝である。箱型の断面をもつ。

SD74003（図版38）

97年度調査区西端より東西に延び、外堀SD4001の南側で途切れる。幅1.00m、長さ9.50m、深さ10cmの溝である。浅い皿状の断面をもつ。

5．中世Ⅴ面（図版46・61～63・79・81）

中世Ⅴ面は、95年度の第３・４面間、96年度の第８面、97年度の第５面である。

中世Ⅴ面は、中世Ⅵ面が火災を受けた後に構築された遺構面である。活発な地業を行い、中世Ⅳ面を形成してゆくまでの間に形成された遺構面である。

遺構面の特徴としては、中世Ⅵ面に存在した内堀が整地層によって埋められ、外堀の内側が土塁を挟み屋敷地となる点であるが、屋敷地Aでは面を全域で確認することはできず、部分的に確認された。屋敷地内のレイアウトは判然としない。このため、ここでは屋敷地Aについては述べない。

96年度・97年度調査区では外堀の幅は、中世Ⅴ面では幅4.8mを測り２か所に土橋状の施設がある。

97年度調査区の堀からは墨書土器群が出土している。

堀

（１）SD68001・SD75001（図版47・48）

95年度調査区の西よりL字に屈曲し、南側に延び、97年度調査区の中央の東側で更に東方向にL字型に屈曲する。浅い皿状の断面をもち、規模は幅7.50～6.50m、延長約39mを測る。灰黄褐色シルト～中砂が堆積している。97年度調査区より土橋状遺構が２カ所検出された。また、97年度調査区の一部では塀が伴っていたと考えられる。

墨書土器が２カ所にまとまって出土している。また、箕類もまとまって出土している。両者は土橋によって別れており、土橋を境に堀で行われた祭祀に関わる役割が異なっていた可能性が考えられる。

土橋１

SD75001内より検出された。上場の幅1.0m、基底部の幅2.0m、長さ5.0m、高さ40cmを測る。

土橋２

SD75001内より検出された。上場の幅0.5m、基底部の幅1.0m、長さ2.5m、高さ15cmを測る。

土塁

SF68001（図版47）

Ⅻ区の北東隅より検出された。遺構は東西に延びるが、東側が調査区外に伸びるため、全体の規模は不明である。検出長は上場で5.5mを測る。

SF68002（図版47）

Ⅻ区の北東隅より検出された。遺構は南北に延びSD68001と併行に伸びる。

SF68201（図版47）

SF68001の下層より検出された土塁である。

SF68202（図版47）

SF68002の下層より検出された土塁である。

溝SD68002（図版52）

96年度調査区東端を南北に貫通している。幅3.0m、長さ12.5m、深さ1.0mの溝である。将棋の駒等が出土している。

溝SD68003（図版47）

SD68001とSD68002をつなぐ。幅4.0m、長さ5.0m、深さ50㎝の溝である。調査区北東隅の肩部より「天文廿三年七月廿三日」銘の位牌（W950）、土師器皿（865～870）将棋の駒（W954）等が出土している。

その他の溝

溝SD75002（図版47）

97年度調査区南端を東西に貫通している。幅1.0m、深さ30㎝の溝である。

溝SD75003（図版47）

97年度調査区南端を東西に貫通している。幅1.6m、深さ60㎝の溝である。

6. 中世Ⅵ面（図版54・55　写真図版34～44・64・65・82）

中世Ⅵ面は、95年度の第4面、96年度の第9面、97年度の第6面である。

遺構のレイアウトは屋敷地A内では中世Ⅶ面から大半が引き継がれているが、大きな違いは堀・土塁の状況である。2本の堀、外堀・内堀が出現し、土塁についても2重に巡る点が中世Ⅵ面の特徴である。

外堀は95年度の調査区の西半、96・97年度調査区の東半を南北方向に走る。入佐川遺跡堀401とそれに繋がるSD54002aが95年度調査区の北端にあり、土橋を挟んで、L字に南へ延びる堀SD54002bが検出されている。この堀は96年度（SD69001）・97年度（SD76001）へと続き、97年度調査区南端において東へ直角に曲がり調査区外へと出てゆく。

外堀中には、クランク部分に杭列、97年度SD76001には2か所に土橋状の遺構がある。上面において検出されているSD75001端の杭列は、SD76001に遡るか否かは不明である。

また、内堀においてもSD69002内に土橋状遺構が検出されている。

外堀に伴う土塁SF54002はSD54002a・bの東肩に造られており、SD54002aとSD54002bが途切れた部分でクランクし堀肩にそってSD69001とSD69002の間、さらにSD76001へと伸びている。

内堀は入佐川遺跡SD401とそれに繋がるSD54001が95年度調査区にあり、96年度(SD69002)へと続く。97年度については調査区外となり内堀の行方は判然としない。

内堀に伴う土塁SF54001a・bはSD54001の東肩に造られており、堀のクランクにそって南へと伸びている。96年度・97年度の調査では調査区外となり状況は判然としない。

外堀（図版54・58）

（1）SD54002a・SD54002b・入佐川遺跡堀401・SD69001・SD76001（図版54）

SD54002aは幅2.2～3.6m、深さ50㎝を測る。南端は西側へ屈曲を見せながら収束する。

SD54002bは大半が調査区外にあるため幅・深さについては不明である。調査区の西側からL字に曲がり調査区内へ入り、南へ延びる。深さは0.8m以上である。

SD69001・SD76001は、96年度調査区中央より97年度調査区東端を南北に貫通している部分である。幅6.0～5.0m、長さ38.0m、深さ1.40m前後の溝である。墨書土器、折敷が出土している。

土橋 1

SD76001より検出された。幅0.6m、長さ4.2m、高さ40㎝を測る。

土橋 2

SD76001内より検出された。幅1.0m、長さ2.4m、高さ15㎝を測る。

内堀（図版54・58）

（2）SD54001・SD69002（図版54）

SD54001は土塁SF54001を介して屋敷地Aの西側を区切る内堀である。南から北へ延び屋敷地Aの中央部付近で内側へクランクし更に北へ延びる。幅は土塁SF54001・SF54002上面間で約7.50m、深さはSF54001上面から約1.30mを測る。

クランク部分には杭列が存在している。

外堀SD54002と並行して南北に走っており、埋没はSD54002よりも先行している。

SD54001からは頭蓋骨のほか多量の土師器皿・木製品などが出土している。

SD69002は96年度調査区東端を南北に貫通している。幅6.00m、検出長14.00m、深さ90㎝の溝である。

杭列

SD54001クランク部北よりに堀を横断する形で１辺10㎝程度の角杭列が打ち込まれている。杭は全て北側へ倒れた状態で検出されている。

頭蓋骨出土地点（図版58　写真図版44）

SD54001クランク部南肩近くから頭蓋骨２点が出土した。個々の頭蓋骨の分析については丸山氏の項に譲る。出土状況から推して頭部を堀肩から投棄した可能性が高い。

土橋 3

96年度調査区SD69002より検出された。幅1.60m、検出長3.00m、高さ15㎝を測る。

土塁（図版54・58）

SF54002a・SF54002b

SD54001・SD54002間に位置する。堀のクランクに伴いクランクする。大半は削平を受け上面が平坦化している（SF54002b）が、北端部については盛土が残り上部に竹株が数か所確認できた（SF54002a）。

盛土が残る部分は堀底から急激に立ち上がっており、基底部（両堀底）での幅は約4.5m・上部での幅約1.0m、高さ約1.0mを測る。

SF54002b部分の幅は基底部（両堀底）の幅は4.00m、上部での幅約2.40m、高さ約0.70mを測る。

SF54001a・SF54001b

屋敷地Aに伴う。居住区側からの盛り上がりは埋没し、ほぼ平坦化している。SD54001・屋敷地A間に位置する。堀のクランクに伴いクランクする。削平を受け上面が平坦化しているが、屋敷地側へ盛り出した盛土が残る。

SF54001aの基底部（両堀底）での幅は5.20m、上部での幅約1.30m、屋敷地側からの高さ約50㎝を測る。

SF54001bの基底部（両堀底）での幅は5.40m、上部での幅約2.60m、屋敷地側からの高さ約70㎝を測る。

SF69002

Ⅻ区より検出されたSD69001とSD69002の間を区画するように南北に延びる土塁である。基底部の幅は4.5m、上部で2.0～1.5mを測る。

屋敷地A（図版56）

屋敷地は土塁の東側に山土を敷き述べた整地面を溝によって区画している。北限は、明確ではないが、入佐川遺跡ではほとんど遺構が検出されていない点から推して、屋敷地の端に近いものと考える。

東限は上面においても現在の県道からの比高差を論拠としてきたが、調査区の南東端にSD54012が存在しており区画C及び区画Bの東端にある南北方向の石列が区画もしくは建物の東端である可能性が高い。区画Hとした部分が中世Ⅶ面における通路状空間を踏襲したものである可能性も高い。

屋敷地の南限については土塁に沿って南へ延びるSD54003からSD54011が調査区南端において東へ分岐しており、その部分が南限と考えておく。屋敷地の規模は南北55m前後・東西25m前後と考えられる。

堀については先述した。土塁は区画に伴ってクランクをみせ、96年度の調査区へと向かっている。

区画はA～Hに細分される。しかし、大きくはクランク部分（東西に走るSD54004･SD54009）を境に区画A･CとEに２分される。この２区画の内部が更に溝によって細分されている。このレイアウトは区画Fを加えて変形しながらⅣ面・Ⅲ面へと踏襲されている。

〔区画A〕

屋敷地の中央北側に位置する。SF540012aの東隣、SD54005･SD54006の北肩に検出されたコーナー部分が囲む部分である。東側は区画Bとの間には通路状の空間が存在する。

区画の規模は、東西幅は9.00m、南北6.00mと考えられる。

区画Aの内部の遺構は判然としない。また、南側の区画Cとの関連は明確ではないが、SD54008がコーナーをもって東へ曲がり、SD54005と接続せずに切れ目があり、通路状に空間をもつことから、区画A･Cが幅４m近い通路を挟んで南北に階段状に並んでいた可能性が高い。両区画の比高差は西半部で対比すると区画Cが約25㎝低い。但し東半部はC区では土間敷きの盛り土などがあり判然としない。

〔区画B〕

屋敷地の北東端に位置する。区画Aの東隣に位置する。区画A・Iと通路状空間を挟み位置する。南側をSD54006限られていたと考えられる。東限は現在の県道からの比高差を考慮すれば、調査区東端からほど遠くないものと考えられる。

内部には石列、木組みが存在する。通路状空間に沿って存在する根太・石列、東端の石列が建物を構成する可能性がある。

区画の東西幅は6.0m以上、南北10.0m以上と考えられる。

〔区画C〕

屋敷地の中央に位置する。SF54001aの東隣、SD54008、区画Hとの境にある石列が囲む部分である。

南側は区画Eの北側を区画するSD54004によって限られており、区画内を東西に流れるSD54009についてはSD54008と切り合い古い。

区画の規模は、東西幅は約17.50m、南北は8.50mと考えられる。

区画Cの内部の遺構は判然としないが、東半部には土間を形成したと考えられる敷き土があり、その切れ目が建物の東端を現している。

中央北よりにある集石遺構は四角形の木組を伴っており、囲炉裏であった可能性が高い。

区画Cの中央付近の面上からは、兜の前立てが出土している。

また、北側の区画Aとの関連は明確ではないが、南北に階段状に並んでいた可能性が高いことは先述した通りである。

（1）集石遺構

70㎝四方の間に径15㎝前後の河原石が集中している。石の西・北肩を中心に60～70㎝の棒材が4本検出されている。棒材は集石の四周を廻っていた可能性もあり、囲炉裏の痕跡である可能性が高い。

〔区画E〕

区画Cの南側に位置する。SD54003・SD55001によって屋敷地Aを南北に2分した中の南半部を区画Eとした。区画の東・北はSD54004によって、西側はSD54003、南端はSD54011によって限られている。

SD54004は溝南肩が2つあり、クランクせずに東へ延びる部分をSD54004b、西端から約4.5mの地点においてクランクし2m前後の張り出しを造る場合をSD54004aとした。

想定される規模は、SD54004aの場合、南北18.00m・東西20.00mである。SD54004bの場合は東西22m以上・南北16.00mを測る。

区画内の遺構は明確ではない。南壁際を中心に礎石列を検出しているが、中世Ⅳ面に構築された建物礎石の下部の可能性が高い。

礎石の南側の遺構面に華南産の四耳壺片が出土している。また、SD54004a際において五芒星を墨書した土師器小皿が出土している。

〔区画H〕

SD54012及び区画C東端にある南北方向の石列によって南･西側を限られる空間を区画Hとした。中世Ⅶ面における通路状空間を踏襲したものである可能性も高い。

〔区画Ⅰ〕

調査区北端、区画Aの北側に位置する。区画の西及び南側はSD54005によって限られ、東側は区画Bとの間に幅1.5mの空間を持つ。区画内には遺構はなく、SD54010が切り合う。区画の幅は東西約8.0m、南北は不明である。

〔区画溝〕

（1）SD54005

区画Aの北・西を限る溝である。下層のSD55005を踏襲する。幅1.50m・深さ20㎝を測る。SF54001に面する部分には杭列と杭間に植物を編み込んだシガラミが検出されている。

（2）SD54008

区画Cの北西を区画する溝である。下層のSD55004・SD55008を踏襲する。幅1.50m・深さ12㎝を測る。

（3）SD54006・SD54009

SD54006は区画Aの南側を区切る溝である。幅1.50m・深さ20㎝を測る。SD54005・SD54008と比べ走行がやや南西に振り、N85°Wにとる。区画Cとの間の空間が均一でないことから、区画との間に時期差が存在する可能性がある。

SD54009はSD54004aから分岐あるいは重複し、土塁SF54001を横切りSD54001に取りついている。走行がSD54006と同じくやや南西に振り、N88°Wにとる。溝肩に杭列を打ち込んでいる。

（4）SD54003・SD54004・SD54011

区画Eの区画溝である。SD54003はSF54001bの内側を南北に走り、東へ曲がりSD54004となる。SD

54004は溝南肩が２つあり、クランクせずに東へ延びる部分をSD54004b、西端から約4.50mの地点においてクランクし２m前後の張り出しを造り、屈曲して南へ曲がる溝をSD54004aとした。

また、溝の北端付近からSD54011が分岐しており、区画Eの南側を画している。

SD54003は幅1.50m・深さ17㎝、SD54004aは幅1.50m・深さ20㎝、SD54004bは幅0.80m・深さ27㎝、SD54011は幅1.50m・深さ20㎝を測る。SD54003は区画Eを超えて南へ延びることから、SD54011の南側に更に１区画存在する可能性が考えられる。

・土師器皿集中部

SD54004から土師器皿が集中して出土している。

・折敷群

SD54004南肩から10点以上の方形折敷が集中して出土している。その殆んどが隅落としの方12㎝前後の折敷で占められている。土坑などの施設はなく、遺構面に張り付いた状態で出土した。

その他の遺構

SD69003（図版59）

XⅢ区を東西に貫通している。幅2.30～1.20m、深さ50㎝の溝である。

畦畔69001（図版59）

XⅢより検出した。幅1.50m、高さ30㎝の畦畔である。

7．中世Ⅶ面（図版61　写真図版45～51・65）

中世Ⅶ面は、95年度の第５面、96年度の第10面、97年度の第７面である。

中世Ⅶ面は武家屋敷遺構が成立した時期と捉えている。

遺構のレイアウトは中世Ⅵ面に大半が引き継がれており、中世Ⅶ面に遡るものを析出することにはやや困難な点がある。ことに中世Ⅵ面において外堀と認識するSD54002・SD69001・SD76001については中世Ⅶ面成立当初に遡る根拠がなく、存在していなかった可能性が高いと考えている。

Ⅶ面成立当初には、入佐川遺跡SD401・SD54001下層・SD61001と南北に走る堀（内堀）が存在し、その東側に土塁を介して屋敷地が形成されたと考えられる。但し、堀は97年度には調査区外になっており、96年度のⅦ面では屋敷地は調査区外に位置しており、存在の有無は不明である。

土塁・屋敷地は95年度の調査においてのみ確認できる。堀は95年度の調査区ではⅥ面の土塁SF54002の下層を通っていることが確認されており、Ⅵ面のSD54001で検出されたクランクは当初存在しなかった可能性が高い。但し、後述する屋敷地Aと堀の間に存在する土塁SF55001は区画A・Eの形状に伴ってクランクしていることから、Ⅶ面形成中に堀の一部を拡張もしくは、土塁SF54002を造営し、クランク部を設け、更に外堀を穿った可能性も考えられる。今回の調査ではその点は明らかにはできなかった。

ここではⅦ面において確認できる外堀はないものとして記述してゆく。

内堀（図版61）

（２）SD54001下層・SD61001

SD54001下層は上層の堀SD54001がクランクせず、土塁下へ直進することから時期差を認識した。

SD54001と重複するため、規模は詳らかではないが、当初はSD54001と同等規模の堀がクランクせずに直進していた可能性が高い。幅6.5m、深さは1.0m以上の規模であったと考えられる。

出土遺物は、土塁SF55002の下層から、土師器小皿（640・641）が出土している。この堀は96年度調査区中央を南北に貫通している（SD61001）。全掘できていないため幅は不明、長さ13.5m、深さ１m以上の溝である。浅い皿状の断面をもつ。

土橋３

SD61001を東西に横断している。幅1.6m、高さ55cmを測る。

土塁（図版62）

堀がクランクする以前の状態は不明である。

（１）SF55001a・SF55001b（図版63）

上面は削平を受け平坦。SF55001aは屋敷地AとSD54001下層を隔て、区画Eの形状に合わせクランク、SF55001bとなる。SF55001a部分の規模は上面の幅約3.5m、屋敷地A側からの高さは約60cmを測る。

SF55001b部分の規模は上面の幅約1.8m、屋敷地E側からの高さは約30cmを測る。

屋敷地A（図版63）

屋敷地は土塁の東側に山土を敷き述べた整地面を溝によって区画している。屋敷地の北限は、明確ではないが、入佐川遺跡ではほとんど遺構が検出されない点から推して、屋敷地の端に近いと考えられる。

東限は上面においても現在の県道からの比高差を論拠としてきたが、調査区の南東端にSD5015が存在しており、SD55014との間には南北に通る幅1.2m以上の通路状空間が見い出せることから、SD5015が屋敷地の東を限る溝である可能性が高い。

屋敷地の南限については土塁に沿って南へ延びるSD55003が調査区南端において東へ屈曲を見せており、その部分が南限と考えられる。屋敷地の規模は南北55m前後・東西25m前後と考えられる。

堀については先述した。土塁は区画に伴ってクランクをみせ、96年度の調査区へと向かっている。

区画はA～E、更に更に小区画に細分される。しかし、大きくはクランク部分（東西に走るSD55001）を堺に区画A～CとEに２分される。この２区画の内部が更に溝によって細分されている。このレイアウトはⅥ面に踏襲され、更に区画Fを加えて変形しながらⅣ面・Ⅲ面へと踏襲されている。

〔区画A〕

屋敷地の中央北側に位置する。SF55001の東隣、SD55005・SD55008・SD55004、更に東端の通路状空間が囲む部分である。溝の内法で測るならば、南北10.40m･東西16.50mを測る。南北の方位はN２°Wにとっている。区画内はSD55006などによって小区画に分けられている。また、東半には根太材が検出されているが、建物復元には至らなかった。

（A－1）

SD55006aの北側、区画Aの北半部を占める。区画の中央で区画Bを構成するSD55002と重複するため区画の想定以外に分かることは少ない。対応するSD55008部分には杭列と杭間に植物を編み込んだシガラミが検出されている。区画の規模は南北5.70m・東西16.50mを測る。

（A－2）

SD55006aの南側、区画Cの北側にあたり、区画Aの南半部を占める。区画の規模は南北4.70m・東西16.50mを測る。東半には根太材が検出されているが、建物復元には至らなかった。また、テーブル状に１段高い部分が存在するが性格は不明である。

〔区画B〕

区画Aと重複し、方位を違える区画をBとした。区画Aに先行する。西をSD55009・SD55010、東側を

通路状空間、南をSD55002・55011によって限る。

溝の内法で測るならば、南北13m以上・東西9.50mを測る。

区画の北半部には石材等が散乱するが、遺構の復元には至らなかった。また、SD55009・SD55010間、SD55011北側には幅50cmの通路状空間が存在する。区画をコの字に巡るものと考えられる。

〔区画C〕

屋敷地の中央南側に位置する。SF55001の東隣、SD55001・SD55008・SD55004・SD550014、更に東端の通路状空間が囲む部分である。溝の内法で測るならば、南北8.50m・東西17.50mを測る。南北の方位はＮ１°Ｗにとっている。区画内には土坑SK55001・SK55002、集石や根太材が検出されているが、建物復元には至らなかった。

区画の東端にはSD55014と共に径20cm前後の石を使用した石列が南北に延びており、東側の通路状空間との間を区切っている。

（１）土坑SK55001（図版57）

幅1.90m・深さ10cm・全長２m以上の浅い皿状の土坑である。北半部をサブトレンチによって損壊したため形状・規模は詳らかではない。土坑内からは、曲物・土師器皿・赤漆椀・黒漆椀が出土した。

また、やや上層から出土した二器についても土坑内にあたると考えられる。

土師器皿・赤漆椀・黒漆椀については伏せた状態で出土している。

（２）土坑SK55002（図版63）

SD55004の南側に位置する隅丸長方形土坑である。長辺約3.00m×短辺約1.90m・深さ約20cmを測る。

土師器小皿（644・645）・明染付皿片（646）が出土している。

〔区画E〕

区画C南側に位置。SD55003・SD55001によって屋敷地Aを南北に２分した中の南半部を区画Eとした。

区画の東端はSD55014、北側はSD55003・SD55001及び石列、西及び南端はSD55003によって限られている。想定される規模は南北約20.00m・東西約23.00mである。

区画の中には東西方向の溝SD55012・SD55013があり、南北間で小区画に分かれる可能性もあるが、ここでは、囲炉裏が集中する東半（Ｅ－2）と、広い空間をもつ西半（Ｅ－1）に小区画を設定しておく。

（E－1）

北東端に囲炉裏基部と考えられる木材が検出されている。その他にはSD55012・SD55013が存在するが、建物などは復元できない。

（１）囲炉裏跡（図版63）

全長75cm・幅８cmの木材が直角に配置されている。囲炉裏の基部の可能性が考えられる。

（E－2）

SD55014と北側の石列によって限られたごく狭い空間である。囲炉裏跡と考えられる方形の炭土坑２基を検出している。

（１）囲炉裏跡（図版63）

一辺70cm×60cm及び一辺70cm×70cmの炭が充満した土壙を検出している。土壙の深さは共に約６cmと浅い。上部を失った囲炉裏跡と考えられる。

砂利敷き（図版63）

調査区南東隅より検出した。SD55014とSD55015間の通路状空間に位置する。全長3.70m・最大幅

1.00m・最小幅約0.40mの瓢箪形をした砂利敷きである。径約５～10㎝の礫を厚さ10㎝前後で敷いている。用途は不明である。

区画溝

区画溝は大きく屋敷地の西側を限るSD55008・SD55003、東側を限るSD55014、東西方向に流れ、屋敷地を東西方向に区切るSD55001・SD55004・SD55005・SD55006・SD55012・SD55013、やや東に軸を振る区画Bに伴うSD55002・SD55009・SD55010・SD55011に分かれる。

SD55008・SD55003・SD55007（図版63）

SD55008はSF55001aに沿って区画A・区画Cの西側を限る。幅1.20m・内側からの深さ15㎝を測る。

SD55003・SD55007はSF55001bに沿って区画Eの西を限る。SD55003は北端が東西方向に向き大きな溜まりを造りだす。南端についても東側へ曲がりをみせる。溝幅は約1.40m・深さ20㎝ を測る。SD55007はSD55003と重複し、SD54001へと取りついている。溝幅は約0.90m・深さ23㎝を測る。

SD55014（図版63）

区画C・区画Eの東側を限る。溝幅は約0.40m・深さ５㎝を測る。

SD55001・SD55004・SD55005・SD55006a・SD55012・SD55013（図版63）

SD55001は区画Eの北側を限る。溝幅は約1.50m・深さ30㎝を測る。

SD55012・SD55013は区画Eの内部を区切る。SD55012の溝幅は約1.50m・深さ13㎝を測る。

SD55013の溝幅は約0.70m・深さ５㎝を測る。

SD55004・SD55006aは区画A・Cの内部を区切る。SD55004の溝幅は約0.70m・深さ12㎝を測る。

SD55005の溝幅は約0.2m～0.9m、一部更に拡張された部分をもつ。深さは21㎝を測る。

SD55006aは区画A－１・区画A－２を区切る溝である。溝幅は約1.00m・深さ20㎝を測る。

SD55002・SD55009・SD55010・SD55011（図版63）

区画Bの３方を限る。SD55002・SD55011は東西方向、SD55009・SD55010は西側を区切る溝である。

SD55002の溝幅は約0.70m・深さ15㎝、東端において南へ屈曲する。

SD55011の溝幅は約0.70m・深さ12㎝、東端において南へ屈曲する。

SD55009の溝幅は約0.70m・深さ10㎝、SD55010の溝幅は約0.80m・深さ６㎝を測る。

溝SD61002（図版64）

96年度調査区南西区より東西に延びる。幅1.50m、検出長9.00m、深さ90㎝の溝である。

第３節　武家屋敷成立以前の遺構（中世Ⅷ面～古代Ⅴ面）

１．中世Ⅷ面

畦畔61101（図版65）

畦畔61001の下層より、東西方向に伸びる畦畔を検出した。幅は1.2m、残存高は30㎝を測る。両側に60～20㎝間隔で杭が打ち込んであり、その間を柴で編み込み畦畔の基礎の構造にしている。97年度調査区からも東西方向に伸びる畔と溝を検出した。

溝SD78001（図版65）

XⅢ区より検出した。幅60㎝、深さ10㎝の溝である。

第４節　平安～奈良時代の遺構

古代Ⅱ面

奈良～古墳時代水田（図版66）

96年度調査区からは北西から南東方向へ伸びる畦畔を検出した。木材が多量に敷き詰められ、畦の基礎としている。97年度調査区からは北東から南西へ延びる畦畔を検出している。畦の内側には幅0.40m、深さ10㎝の溝が通る。畦の基礎部分には木材が敷かれている。

畦畔61201（図版66）

XⅢ区より検出された。N50°Wに延びる。幅1.80m、残存する高さ約20㎝の畦畔である。

畦畔61202（図版66）

XⅢ区より検出された。N19°Wに延びる。畦畔の基礎である。残存する高さ約20㎝を測る。

畦畔79001（図版66）

97年度調査区より検出された。N41°Eに延びる。幅1.80m、残存高15㎝の畦畔である。

第５節　古墳時代前期～弥生時代の遺構

古代Ⅴ面

弥生時代水田（図版67）

97年度調査区において検出された。木の株とN16°W方向に伸びる杭列を検出した。

第６節　人名墨書土器群

人名墨書土器群は、96年度SD67001・97年度SD74001、97年度　SD75001及びSD76001の一部に亘って検出されている。このため、新に節を設けて説明する。

墨書土器群は中世第Ⅳ・Ⅴ面の外堀を中心に一部第Ⅵ面に対応する堀底からも出土している。主な出土は、第Ⅳ・Ⅴ面に対応する堀からであり、第Ⅳ面に対応する96年度SD67001・97年度SD74001（上層とする）と第Ⅴ面に対応する97年度SD75001（下層とする）からの出土に大きく分けることができる。

墨書土器群はその出土状況から大きくA～F群に分かれ、更に主に上下２層で構成されている。

即ち、A群・B群・C群・F群が中世Ⅳ面に対応する上層に投棄されたグループ。

B群下層・C群下層・E群が中世Ⅴ面に対応する下層に投棄された墨書土器群である。

D群は、A群とF群の間に投棄された散漫な土師器皿群であるが、精査の結果、墨書土師器皿は含まれていないことが判明した。しかし、D群の土師器皿は明らかにA･F群の間にあり中世Ⅳ面に対応する同時期に廃棄されていること、加えて下層では多量の箕が投棄されていることから、墨書土器群が形成された宗教行事に密接に結びついていると考えられるため、この項で触れることとする。

〈上層の人名墨書土器群の状況〉

堀SD67001・SD74001から出土している。土器群はSD67001では１群（F群）、SD74001では大きくはA～D群の４群に分かれて投棄されている。このうちD群は墨書を伴わない土師器皿群である。

これらの土師器皿群は堀の東肩から投棄されたと考えられ、A群では堀の上部を頂点に扇形に開いて滑り落ちる様が検出状況から見て取れる。

F群は小規模な土器群であり、投棄された土器群は比較的水平に堆積している。このことに加え、土層断面の検討からF群が形成される時点では、SD67001は埋没し、幅が狭く、溝底が浅くなっていたことが判明している。SD67001は北半部では幅が狭い状況が確認されており、平面的には南半まで同様に堀が埋没し、幅の狭い状況になっていたと考えられる。

A～D群が投棄された時点の堀幅については極端に狭くなっている状況は確認できなかったが、墨書土器の大半が堀の中央部に流れださず、堀の東岸沿いに留まっている状況から推して、SD67001部分と同様にかなり埋没し堀幅が狭くなっていた可能性も高い。

投棄されたものは墨書土師器皿だけではなく、無地の土師器小皿・皿が同時に多量に投棄されている。これらの土師器皿は殆んど使用痕跡が見られない。これはD群を除く各グループとも同じである。また、径20㎝～30㎝前後の河原石も多く、墨書土師器皿が投棄される前後に河原石が投棄・混入しやすい環境であったことは明らかである。

A群の人名墨書土器群　（図版41・42）

A群はSD74001内で投機された墨書土器群の中では最も北側で投棄されたグループである。整理に際して投棄状況から２小グループに分割した。

A－１群（図版41）

径20㎝～30㎝の河原石と共に検出されている。墨書土師器皿と共に無地の土師器小皿・皿が同時に多量に投棄されている。墨書土器を含め、堀肩直下付近から堀底にかけて南北約２ｍ・東西約２ｍの扇形に遺物が広がっている。

墨書土器の傾向として複数の人名が記載された皿が南よりにまとまって落下している。

A－２群（図版42）

A－１群の南隣に位置しており、堀底付近では重複する。径20㎝～30㎝の河原石と共に検出された。墨書土器を含め堀肩直下付近から堀底にかけて南北約２ｍ・東西約1.5ｍの扇形に遺物が広がる。

墨書土器の傾向として複数の人名が記載された皿が北よりに落下している。これはA－１群側の複数名土師器皿の一部がA－２群側に入ったためと考えられる。

B群の人名墨書土器群（図版43）

A－２群の南隣に位置しており、コーナーまでの土器群をB群とした。堀肩近くの高いレベルには土器がない。堀底近く南北約３ｍ・東西約１ｍの範囲に遺物が広がる。

C群の人名墨書土器群（図版44）

コーナーから調査区東壁までの土器群をC群とした。堀肩近くの高いレベルには土器が少ない。堀底近く東西約1.8m･南北約0.5ｍの範囲に遺物が広がる。C群は東壁までは伸びておらず、コーナー周辺に投棄されたものと考えられる。

F群の人名墨書土器群（図版40）

やや小規模な土器群であり、投棄された土器群は比較的水平に堆積している。径20㎝～30㎝の河原石や木片と共に検出されている。墨書土師器の多数は重なった状態で検出されており、重ねまとめて投棄した状況が見て取れる。墨書名には同一名のものが多いが、同一名同士が至近で出土している点を勘案するならば、同一名のものを重ね、一括して投棄したものと考えられよう。また、F群はD群との間で堀

幅が急激に狭まる部分にある。この部分は下層では土橋状の施設によってD群以南と隔てられていることが明らかとなっている。何らかの境界を意識した地点に投棄されたグループとも考えられる。

D群の土師器皿（図版45）

径20㎝～30㎝の河原石と共に検出されている。墨書土器を含まず、堀肩直下付近から堀底にかけて南北約３ｍ・東西約２ｍの範囲に散漫に遺物が広がっている。遺物には、漆椀があり、土師器皿には灯明皿に使用されたものも混じっている。

〈下層の人名墨書土器群の状況〉

下層の墨書土器群はB群及びＡ－２群の南半部とC群の下層及び堀の西岸寄りのE群に分かれて投棄されている。下層の土器群の特徴は、上層では埋没する土橋状の施設によって土器群の投棄場所が限られていることである。即ち、上層のＡ－１群の下層に土橋状の施設が存在しており、土橋より南のコーナー周辺に投棄場所が限られ、C群の東側（調査区東壁）には堀内に密に打ち込まれた杭列が存在しており、墨書土器の幾つかは杭に絡んで出土している。このことから、C群下層の土器群は杭列によって東を限られていたと推測でき、調査区内に限定されて投棄された可能性が高いことも推測できる。

また、上層では投棄行為がない堀の西岸周辺においてE群が存在することから、上層では可能性を指摘した堀幅の狭まりは下層ではないことが明らかである。

B群下層の人名墨書土器群（図版49）

Ａ－１群の下層に存在する土橋より南側、コーナー部分までの土器群をB群下層の土器群とした。

堀肩近くの高いレベルには土器がない。堀底近く南北約３ｍ・東西約１ｍの範囲に遺物が広がっている。遺物は土師器皿だけではなく、曲物・部材が出土している。また、堀肩からは柿経の一部であるW952が出土している。『妙法蓮華経常不輕菩薩品第二十』の文言を記したものである。

C群下層の人名墨書土器群（図版50）

調査区東壁には堀内に密に打ち込まれた杭列が検出されており、墨書土器の幾つかは杭に絡んで出土している。C群下層の土器群はコーナー東側にあり、壁際の杭列に規制されている可能性については前述した。土器群は堀肩の高いレベルには少なく傾斜中程に多く更に堀底近くの東西約２ｍ・南北約２ｍの範囲に広がっている。

E群の人名墨書土器群（図版51）

SD75001堀底の西側立ち上がり付近より纏まって出土している。堀の西寄りから出土する土器群はE群のみである。土器群は、重なる個体はあるものの堀底から水平の状態で検出されており、投棄時に堀内に水がなく、現地に直に置いたか、極めて静穏に水中に入れたかのどちらかと考えられる。

E群が堀底の西端にある点は、下層の投棄時には堀幅が一杯に開いていたことを示しており、上層で投棄された一群とは堀の埋没度合が明らかに違っていたことを示している。

A群・D群下層の箕類（図版48）

SD75001の中で土器群が検出されないA群・D群の下層からは、竹製の箕・籠類がまとまって出土している。これらは２か所の土橋の間に限られており、意図的にこの地点に投棄されたものと考えられる。

第Ⅵ章　遺　　物

第１節　土器・陶磁器

１　武家屋敷遺構に伴う土器・陶磁器（中世Ⅰ面～中世Ⅶ面）

宮内堀脇遺跡から出土した土器・陶磁器には種別では土師器、瓦質土器、無釉陶器、施釉陶器、磁器などが含まれ、器種も碗、皿、鉢、壷、甕、擂鉢、火舎香炉、火鉢、桶形容器など多岐に及んでいる。ここでは、包含層、遺構ごとに、出土遺物の概要を述べる。なお、記述に際しては、末尾に記した参考文献によった他、執筆者が行った分類基準については、第Ｘ章第１節（１）「土器・陶磁器の分類」の項に詳述している。

Ⅰ面上層出土遺物（図版68）

Ⅰ面上層から出土した土器・陶磁器には、土師器皿（１～10）、瓦質土器火鉢（11）、無釉陶器擂鉢（12～14）、施釉陶器皿（15）・椀（16～18）、青磁碗（19）・皿（20）、白磁皿（21～25）・碗（26・27）、青花磁器皿（28・30・31）・碗（29・32）がある。

土師器皿　皿はいずれも非ロクロ成形である。ＢⅠ類（１）が１点含まれる他は、いわゆる京都系土師器のA類で占められている。Aa1Ⅱ類（２・６）、Aa2Ⅱ類（３・４）、Ab1Ⅱ類（５）、Ab1Ⅲ類（７）Aa1Ⅳ類（８・９）、Ab1Ⅴ類（10）に分類される。

瓦質土器　11は平底で体部が内彎する擂鉢である。内面は下から上に向かって粗いハケ目調整が施される。EA３類に分類される。

無釉陶器　無釉陶器には内面に櫛描きの擂目をもつ擂鉢（12～14）がある。いずれも体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は上面に水平に端面をもち、口縁部内面には凹線が１条巡る。形態及び成形・調整技法の特徴から、いずれもＢ２類と分類した越前焼擂鉢で16世紀代の製品と考えられる。

施釉陶器　15は高台を浅く削り出し、内外面に施釉する、瀬戸・美濃系灰釉陶器皿である。Ⅰ類に分類され、大窯Ⅲ期相当の製品である。16・17は天目茶椀である。17は浅く削り出す内反高台をもち、口縁部は若干屈曲して、端部は僅かに外方にひらく。16は小天目茶椀で高台を浅く輪高台状に削りだす。いずれも瀬戸・美濃系で、17は大窯Ⅱ期、16は大窯期の製品であろう。18は平底で、低い高台をもち、外面に褐釉が施釉されている。華南産褐釉陶器壷の底部と考えられる。

青磁　19は外面に剣頭と体部が一致しない雑な線描き蓮弁文を施す碗である。ⅠＢ２類に分類され上田分類青磁碗BⅣ’類に相当する。20は体部に型押しで花弁文を施文する皿で、龍泉窯系青磁である。

白磁　22～25は細く低い高台をもち、平底で、口縁部は大きく外方にひらく皿である。いずれも森田分類白磁皿Ｅ－２群相当の華南産白磁の端反皿である。15世紀後半～16世紀代に比定される。

21は型打ちで花弁状に成形する菊花皿で、森田分類のＥ－４群相当で16世紀代に比定される。26･27は底部内面の釉を輪状にかきとるいわゆる輪禿の小碗で、27は小碗A類に分類される。16世紀代の華南産白磁と考えられる。

青花磁器　28・29・30・31は皿である。28は低い輪高台をもつ。30は体部中央で屈曲するつば皿で、内面の文様は芙蓉手である。31は碁笥底を呈し、口縁部は外方にひらく。32は碗底部である。饅頭心碗で、B類に分類される。いずれも16世紀後半～17世紀初頭の景徳鎮産青花と考えられる。

第１面柱穴内出土遺物（図版69）

Pit520　33は非ロクロ成形の土師器皿である。いわゆるへそ皿の系譜をひくもので、底部は若干指おさえする。内面には煤が附着する。Aa1Ⅱ類に分類される。

Pit519　34も33同様、底部を若干指押さえして、あげ底風に成形する。Aa2Ⅲ類に分類される。

第１面溝内出土遺物（図版69）

SD51001　35は青磁碗底部である。外面の高台脇以下は露胎で底部内面には砂目跡が４箇所認められる。形態・製作技法の特徴から朝鮮製青磁の可能性が考えられる。

SD51005　土師器皿（36～39）、白磁皿（40・41）、青花磁器碗（42）がある。

土師器皿　土師器皿にはB類（36）とA類（37～39）がある。36はＢⅠ類に分類される。37･39はそれぞれAb1Ⅱ類・Ab1Ⅲ類に分類される。

白磁　40は器壁が薄く、型押しで花弁状に成形する。内外面とも透明釉を施釉し、青味を帯びた白色に発色する。景徳鎮窯産の青白磁皿の可能性が考えられる。41は内外面とも透明釉を施釉し、灰白色に発色する華南産白磁皿である。

青花磁器　42は外面に芭蕉文を施文する青花磁器碗である。B類の饅頭心碗である。

第１面上出土遺物（図版69）

第１面上からは土師器皿（43～47）、瓦質土器壷（48）・擂鉢（49）、無釉陶器擂鉢（50）、施釉陶器碗（51・53～56）・水滴（52）・小壷（57）、白磁壷（58）・皿（60～63・65）・碗（64）・杯（66）、青磁香炉（59）、青花磁器碗（67・69）などが出土している。

土師器皿　土師器皿はいずれも非ロクロ成形で、Aa2Ⅱ類（43・44）、Aa２Ⅲ類（45）、Aa1Ⅳ類（46）、Ab1Ⅳ類（47）に分類される。

瓦質土器　48は体部が直立し、口縁部はやや内傾するもので、火消し壷と考えられる。49は内面に６条１単位の擂目を施文する擂鉢である。Aa1類に分類される。

無釉陶器　50は口縁部内面に凹線が１条巡り、体部内面に11条１単位の櫛描きの擂目を施す擂鉢である。B3類に分類される越前焼擂鉢で16世紀代の製品である。

施釉陶器　51は碗の底部である。内外面とも鉄釉を施し、底部内面に砂目跡が見られる。朝鮮陶器の可能性が高い。53～56はいずれも天目茶椀である。いずれも口縁部が僅かに外方にひらく。胎土・焼成状況から、53・55は瀬戸・美濃系大窯期の製品で16世紀代に比定される。また、54・56は中国製の天目茶碗と考えられる。

水滴（52）は外面に割菱文を型押し施文するもので、全面に鉄釉を施釉する。古瀬戸中期段階の製品で14世紀代に遡る可能性が考えられる。57は小壷で、内外面とも灰釉を施釉し、淡緑灰色に発色する。52と同様に古瀬戸中期段階に遡る可能性が考えられる。

白磁　58は蓋である。断面形状は山笠形で上面中央に扁平なつまみをもつ。外面は透明釉を施釉し青味を帯びた灰色に発色する。内面は露胎である。華南産白磁小壷の蓋と考えられる。60は型押しで菊花状に成形する森田分類E－４群相当の菊花皿である。61は華南産白磁で、森田分類皿E－２群相当の皿である。16世紀代に比定される。62・63は華南産白磁皿の底部と考えられる。64は碗の底部で高台裏には砂が多く附着する。華南産の製品である。65は皿で、口縁部～体部上半は透明釉を施釉するが、体部下

半以下は内外面とも露胎である。朝鮮製の可能性が高い。66は杯である。底部内面を輪状に釉ハギする。16世紀後半代の華南産白磁杯と考えられる。

青磁　59は青磁香炉である。体部は直立し、口縁端部を内側に引き出す。龍泉窯系青磁と考えられる。

青花磁器　67は口縁部が外方にひらくⅡ類の碗で、外面には細かい草花文を施す。69は口縁部をそのまま上方に引き出すタイプで、外面には細かい草花文を施す。ⅠC類に分類される。いずれも16世紀代の明青花磁器である。

68は底部外面に「□□年製」銘をもつ杯で、景徳鎮窯産と考えられる。

2面溝内出土遺物（図版70）

SD52002

土師器皿　いずれも非ロクロ成形の京都系土師器で、Aa2Ⅱ類（72・77）、Aa1Ⅱ類（73・74・75・78・79）、Aa2Ⅱ類（76・77）、Ab1Ⅱ類（80）、Ab1Ⅲ類（81）、Ab1Ⅳ類（82・83）、Aa1Ⅳ類（84・85・88）、Ab2Ⅳ類（86）、Aa2Ⅳ類（87）、Aa1Ⅴ類（89）に分類される。また、71は体部から口縁部にかけての2ヶ所を内側に折り曲げた耳皿で、色調はにぶい黄橙色を呈する。

瓦質土器　70は体部が直立する桶形容器である。体部外面に箍を模した凸帯が1条巡る。Ⅰ類に分類される。

無釉陶器　90は擂鉢である。口縁部内面に凹線が1条巡り、体部内面には10条1単位の櫛描きの擂目を施文する。B2類相当の越前焼擂鉢で、16世紀代の時期が考えられる。91は頸部が直立し口縁部は大きく外方にひらく徳利である。備前焼Ⅴ期相当で16世紀代の製品である。

白磁　白磁には型押し成形で口縁部～体部を花弁状に成形する森田分類E－4群相当の菊花皿（92）、口縁部が外方にひらくE－2群相当の皿（93・94）、及び皿の底部片（95）がある。いずれも華南産白磁で16世紀代に比定される。

青花磁器　97は外面に牡丹唐草文を描く碗である。16世紀代の明青花磁器である。

SD52003

土師器皿　いずれも非ロクロ成形の京都系土師器で、Ab2Ⅱ類（98）、Ab1Ⅱ類（99・100・101）、Ab1Ⅳ類（102・103）、Aa2Ⅴ類（104）に分類される。

瓦質土器　105・106は同タイプのⅡ類の火鉢である。平底で体部は大きく内彎し、体部外面上位に横耳状の把手を2ヶ所貼り付ける。内外面とも密にヘラミガミし、器面は平滑に仕上げる。107は椀形の小型擂鉢である。体部は大きく内彎し、片口を1ヶ所作り出す。体部内面には5条1単位の櫛描きの擂目を施文する。

施釉陶器　108は口縁部を内側に引き出す香炉である。内外面とも灰釉を施釉する。瀬戸・美濃系陶器で、大窯Ⅲ期段階、すなわち16世紀後半の製品と考えられる。

白磁　110は華南産の白磁碗の底部を人為的に打ち欠いており、面子の未成品と考えられる。

青花磁器　109は外面に芭蕉文を描くB類の蓮子碗である。16世紀代の明青花磁器である。

SD52005

111は非ロクロ成形の土師器皿である。Aa1Ⅱ類に分類される。

SD52006

いずれも非ロクロ成形のAa2類の土師器皿で、法量からAa2Ⅱ類（112）、Aa2Ⅲ類（113）、Aa2Ⅳ類（114）

に分けられる。

SD52007

土師器皿　115は非ロクロ成形のAa2Ⅱ類の皿である。

施釉陶器　116は施釉陶器の壷である。口縁部は内傾し、体部外面に横耳を貼り付ける。内外面とも鉄釉を施釉し、暗茶褐色に発色する。華南産の鉄釉四耳壷と考えられる。

SD52008（図版71、72　写真図版93～95）

土師器　117～157は皿である。いずれも非ロクロ成形で、ＢⅠ類（117）、Aa2Ⅱ類（118・120・122・129）、Ab1Ⅱ類（119・132・135）、Aa1Ⅱ類（121・123・124・125・126・128・130・133・134）、Aa2Ⅲ類（136・139）、Aa1Ⅲ類（137）、Ab1Ⅲ類（138）、Aa1Ⅳ類（140）、Ab1Ⅳ類（141・142・143・144・146・149・150）、Ab2Ⅳ類（145）、Aa1Ⅴ類（151・152・153）、Ab1Ⅴ類（154・155）、Ab1Ⅵ類（156）、Aa1Ⅵ類（157）に分類される。

158は耳皿である。体部～口縁部にかけての２ヶ所を折り曲げて成形する。色調はにぶい橙色を呈する。159は脚付皿でおそらく三足皿に復原される。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。160は型作り成形の壷の底部である。内面に布目痕が認められる。

瓦質土器　161・162は体部が内彎し、口縁部は短く内傾する壷と考えられる。体部外面は丁寧にナデて、器面を平滑に仕上げる。

163はⅣ類の火鉢の底部である。外面には印花文を施し、凸帯が１条巡る。164はⅠ類の火舎香炉である。内外面とも密にミガキ調整を施して、器面を平滑に仕上げる。165は火鉢である。体部は大きく内彎し、口縁部は短く直立する。内外面とも回転ナデ調整を施し、器面は平滑に仕上げる。

166・167は擂鉢である。166は体部が内彎し、内面に７条１単位の擂目を施文する。Eb1類に分類され16世紀代に比定される。167は体部が直線的に外上方に延び、内面に、７条１単位の縦方向の擂目の上位に波状の擂目を施文する。Ca2類相当で同じく16世紀代に比定される。

無釉陶器　168は擂鉢である。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成し、外面に凹線が２条巡る。備前焼Ⅴ期相当で16世紀代の所産である。169は甕の口縁部片である。口縁部は上下に拡張して、断面楕円形状を呈する。備前焼Ⅳ期相当で、15世紀代の製品である。

170～173は越前焼擂鉢である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は170のみ上面に水平に端面をもつが、その他は端部を若干上方に引き上げる。いずれも口縁部内面に凹線が１条めぐる。170はB2類、171～173はC2類に分類され、いずれも16世紀代の製品と考えられる。

施釉陶器　174は外面に印花で輪違い文・花文を施文し、内外面とも鉄釉を施釉する。瀬戸・美濃系の茶入れと考えられる。175は内外面とも灰釉を施釉する瀬戸・美濃系灰釉陶器皿で、大窯Ⅰ期段階の製品と考えられ、16世紀前半代に比定される。

176は胎土から中国製天目茶碗と考えられる。177・178は鉢で体部は内彎し、口縁部は断面長方形状に肥厚する。177は口縁部内面～体部外面にかけて褐釉を、また、178は内面に褐釉を施釉する。華南産の褐釉陶器と考えられる。

青磁　179は口縁部を輪花状に成形する碗である。内外面とも青磁釉を施釉し、明オリーブ灰色に発色する。俗に砧手と称される龍泉窯系青磁碗の高級品で、13世紀代に比定される。

白磁　180・181は口縁部が外方にひらく森田分類E－２群相当の華南産白磁皿である。16世紀代に比定される。182は体部が僅かに外反気味に外上方に延びる碗である。森田分類D群相当の碗で15世紀代の

製品と考えられる。

青花磁器　183・184は皿である。口縁部はそのまま上方に延びるⅠ類（183）と外方にひらくⅡ類（184）がある。183は外面に鮮やかな呉須で瑞果文を184は外面に蔦唐草文をそれぞれ描く。

185は口縁部が外方にひらくⅡ類の杯である。外面に草花文を描く。186～189は碗である。底部の形からⅠB類の蓮子碗（188・189）とⅠA類の饅頭心碗（187）に分類される。186は底部を欠失するが、体部が直線的に外上方に延びるタイプの碗である。外面には幾何学文（186）・線描きの草花文（187）、草花文（188）、牡丹唐草文（189）などを描く。いずれも16世紀代の明青花磁器である。

SD52009（図版72）

土師器皿　190～197は非ロクロ成形の京都系土師器で、Aa1Ⅱ類（190）、Ab2Ⅱ類（191）、Aa2Ⅲ類（192）、Aa1Ⅲ類（193）、Aa1Ⅳ類（194・196）、Ab1Ⅳ類（195）、Aa1Ⅴ類（197）に分類される。

青花磁器　199は皿で内面に牡丹文を施文する。200はB類の蓮子碗で外面に芭蕉文を描く。いずれも16世紀代の明青花磁器である。

色絵磁器　198は色絵磁器の小壺の破片と考えられる。外面に赤絵・緑釉で彩絵する。

SD52010（図版73）

201は非ロクロ成形の京都系土師器皿である。Aa1Ⅱ類に分類される。

SD52012

202は瓦質土器擂鉢である。口縁部は若干外方にひらく。体部内面に縦方向に７条１単位の擂目を施し、さらにその上位に４条１単位の波状の擂目を施文する。Ca2類に分類される。

SD52015

203は口縁部が上下に拡張して縁帯をもち、体部内面に７条１単位の擂目を施文する。備前焼Ⅴ期相当で16世紀代の所産である。

SD52019

204は非ロクロ成形の京都系土師器皿である。Ab1Ⅲ類に分類される。

SD52027

205は非ロクロ成形の京都系土師器皿である。Aa1Ⅱ類に分類される。また、206は体部が僅かに外反する森田分類E－２群の白磁杯で、華南産白磁と考えられる。

２面土塁中（図版73）

207・208はいずれも施釉陶器皿である。体部は内彎し、口縁部は僅かに外方にひらき、内外面とも灰釉を施す。Ⅲ類に分類される。瀬戸・美濃系灰釉陶器皿で、いずれも大窯Ⅰ期のもので、16世紀前半代に比定される。

２面まで包含層中（図版73、74）

土師器皿　209～224は非ロクロ成形の京都系土師器皿で、Aa1Ⅱ類（209）、Aa2Ⅱ類（210・211・212・213・215）、Ab1Ⅱ類（214）、Aa1Ⅳ類（216・219・222）、Ab1Ⅳ類（220）、Aa2Ⅳ類（221）、Aa1Ⅴ類（223）、Aa1Ⅵ類（224）に分類される。

瓦質土器　225は壷の蓋である。円盤状でかえりは短く直立する。上面中央につまみの貼り付け痕が残る。226は体部が内彎し、口縁部は短く直立する壷である。焼成は堅緻である。

227～229は擂鉢である。227は体部が直線的に外上方に延び、口縁部内面に凹部をもつもので、越前焼擂鉢を模倣したものである。229は体部が大きく内彎するもので、内面に５条１単位の擂目を施文する。228は形態は227に類似するが、内面に擂目を施文しないこね鉢である。227はAa類、228はAb1類、229はEa2類に分類され、いずれも16世紀代の産品である。

施釉陶器　231は内外面に灰釉を施釉する肥前系唐津皿で17世紀前半代に比定される。232は低い脚をもち、内外面に灰釉を施釉する瀬戸・美濃系灰釉陶器香炉である。大窯Ⅱ期の製品で、16世紀前半に比定される。

233・234は口縁部が備前焼の擂鉢状に肥厚し、内面に褐釉を施釉する鉢である。華南産の褐釉陶器と考えられ、16世紀代に比定される。

青磁　235～238は碗である。口縁部が残存する235～239はいずれも剣頭と身の一致しない線描きの蓮弁文を外面に施文する。ⅠB2類に分類される龍泉窯系細蓮弁文碗で、16世紀代の所産である。238は碗もしくは鉢の底部片で、器壁は非常に厚い。239は口縁端部を内外方向に引き出す香炉である。いずれも龍泉窯系青磁である。

白磁　240～246・249は皿である。口縁部の残るもの（240～244）はいずれも口縁部が外方にひらく森田分類E－２群相当の端反皿である。華南産白磁で16世紀代に比定される。245は端反皿の底部と考えられる。また、249も華南産白磁であるが、底部の形態から14世紀代の皿と考えられる。247・248はいずれも底部内面の釉を輪状に釉ハギする輪禿げの小碗で、小碗B類に分類される。16世紀代の華南産白磁と考えられる。

青花磁器　250・255は皿である。250は外面に牡丹唐草文、255は内面に牡丹文を描く。いずれも16世紀代の明青花磁器である。251・256～257は碗である。251はⅡ類の端反碗で、外面に草花文を描く。256はA類の饅頭心碗で内面に草花文を、257はC類の碗で高台裏に「大明年製」銘をそれぞれ描く。いずれも16世紀代の景徳鎮窯の製品である。また、252は色絵磁器の碗、254はⅡ類の杯である。

２面焼土層中（図版74）

土師器皿　258～260は非ロクロ成形の京都系土師器で、Aa1Ⅱ類（258）、Aa2Ⅱ類（259）、Aa1Ⅳ類（260）に分けられる。

施釉陶器　262は口縁部が僅かに外方にひらく天目茶碗である。瀬戸･美濃系の大窯Ⅰ期の製品で16世紀前半代のものである。

白磁　261・263は華南産の森田分類E－２群相当の端反皿である。16世紀代に比定される。

青花磁器　264はⅡB類に分類される端反皿である。外面に宝相華文を描く。16世紀代の製品である。

青磁　265は龍泉窯系青磁碗の底部を打ち欠いて作った面子である。

２＋１面層中（図版74）

土師器皿　266～273は非ロクロ成形の京都系土師器である。Aa1Ⅱ類（266・267）、Aa2Ⅱ類（268）、Ab2Ⅲ類（269）に分類される。

青花磁器　274はC類の碗底部である。外面に竹葉文、底部内面に「壽」を描く。16世紀代の製品である。

2面整地層中（図版74）

無釉陶器　275は徳利である。体部は大きく内彎する。備前焼Ⅴ期相当で、16世紀代の製品であろう。

施釉陶器　276は体部が直線的に外上方に延び、口縁部は僅かに外方にひらく瀬戸･美濃系天目茶椀である。大窯Ⅲ期の製品と考えられ、16世紀後半代に比定される。

青花磁器　277は体部内外面を型打ちで花弁状に成形するⅠB類の皿である。内面に牡丹唐草文を施文する。278はA類の饅頭心碗で、底部内面に人物文、底部外面には「富貴長春」銘を描く。

3面遺構面中（図版75）

SK53001

土師器皿　279～281は非ロクロ成形の京都系土師器で、Aa2Ⅱ類（280）、Ab1Ⅳ類（279・281）に分類される。

瓦質土器　282は口縁部が短く直立するⅠ類の火鉢である。ナデとミガキによって器面を平滑に仕上げる。

SK53002

土師器皿　283はAa2Ⅱ類に分類される非ロクロ成形の京都系土師器である。

SK53003

青花磁器　284はB類の蓮子碗である。外面に芭蕉文、内面に草花文を描く。16世紀代の景徳鎮民窯の製品である。

SD53001・SD53012

土師器皿　285～287は非ロクロ成形の京都系土師器で、Ab1Ⅳ類（285）、Aa2Ⅱ類（286）、Aa2Ⅲ類（287）に分類される。

無釉陶器　288は口縁部が上下に拡張して縁帯をつくり、口縁部外面に凹線が2条巡る擂鉢である。備前焼Ⅴ期相当で16世紀代に比定される。289は体部が大きく内彎し、口縁部は外方にひらく甕である。越前焼Ⅴ期相当で、16世紀代に比定される。

施釉陶器　290は体部内面に青海波状の当具痕が残る徳利である。外面に灰釉を施釉し黄灰色に発色する。李朝陶器と考えられる。

SD53002

291はⅠB類の蓮子碗で外面には葡萄文を描く。16世紀代の所産である。

第3面までの整地層中（図版76～78）

土師器　292は器壁が厚く、内面に附着物が見られる。坩堝片の可能性が高い。

293～309は非ロクロ成形の京都系土師器皿で、Ab1Ⅱ類（294・295・297・298）、Aa1Ⅱ類（293・296）、Aa1Ⅲ類（299）、Aa1Ⅳ類（300・301・302）、Ab1Ⅳ類（303・304・305・306）、Aa1Ⅴ類（307・308）、Aa1Ⅵ類（309）に分類される。293は底部に錐状工具による穿孔が2ヶ所見られる。

瓦質土器　310は壷である。体部は内彎し、口縁端部は尖り気味に収める。色調は暗灰色を呈する。

311はⅡ類の桶形容器で体部は直立し、外面に箍を模した凸帯が巡る。器面は平滑に仕上げる。

312～317は擂鉢である。312は内面に波状と縦方向の2種類の擂目を施す。体部は直線的に延びる。Ca2類に分類される。また、同様の成形を行う瓦質擂鉢は、口縁部の残る313・314はAb類に、316・317はCa1類にそれぞれ分類される。

無釉陶器　318～320は越前焼擂鉢である。口縁部の形態から318はB2類、319はC1類に、320はB1類にそれぞれ分類される。いずれも16世紀代の製品である。

322は体部が内傾し、口縁部は上下に拡張し、外方にひらく甕である。口縁部外面には凹線が１条巡る。備前焼Ⅴ期の製品で16世紀代に比定される。323は甕の底部である。外面には縦方向のヘラケズリ痕が見られる。胎土・成形技法の特徴から備前焼と考えられる。

施釉陶器　321は口縁部が玉縁状に肥厚し、外面に褐釉を施釉する壷である。華南産の褐釉壷と考えられ、16世紀代に比定される。324は灰釉陶器皿である。口縁部内面に浅い沈線が３条巡る。龍泉窯系青磁皿を模倣したもので、瀬戸・美濃系の製品である。325は内外面とも白濁釉を施す碗で器面には虫喰い、貫入が目立つ。産地は不明である。326は瀬戸・美濃系天目茶椀の底部である。327は底部内面に印花で簡易な花弁文を施文する灰釉皿である。大窯期の瀬戸・美濃系の灰釉陶器皿で、ⅡA2類に分類され、16世紀代に比定される。

青磁　328は青磁輪花皿である。水挽きロクロ成形の後、型打ちで体部を花弁状に成形する。口縁端部には鉄釉を施釉する。329・330は碗である。329の外面には線描きの細蓮弁を施文する。ⅠB2類に分類される。330はⅠA類に分類される無文碗である。331は香炉で内面は露胎である。いずれも龍泉窯系青磁である。

白磁　332～335は口縁部が外方にひらく森田分類E－２群相当の端反皿である。華南産白磁で16世紀代に比定される。336は体部が直線的に外上方に延びる杯である。337は器壁が非常に薄い杯である。いずれも16世紀代の華南産白磁であろう。

青花磁器　338は口縁部が外方にひらくⅡ類の杯である。外面には牡丹文を描く。339～341はC類碗の底部である。341は内面に霊芝文を描く。いずれも16世紀代の明青花磁器である。

３面整地土層中（図版78）

土師器皿　342～354は非ロクロ成形の京都系土師器で、ＢⅠ類（342）、Aa1Ⅱ類（344）、Aa2Ⅱ類（345・347・348・350）、Ab1Ⅱ類（346・349・351）、Ab1Ⅳ類（352・353）、Ab2Ⅷ類（354）に分類される。

355は体部を内側に折り曲げて成形した耳皿である。底部内面に赤色顔料が附着しており、紅皿として使用された可能性が高い。

施釉陶器　356は口縁部が外方にひらく瀬戸・美濃系灰釉陶器皿である。大窯Ⅰ期の製品と考えられ、16世紀前半代の製品である。ⅡA1類に分類される。357は口縁部をそのまま上方に引き上げる灰釉丸椀である。大窯期のもので、16世紀代の製品である。

青磁　358は口縁部をそのまま上方に引き上げ、内外面とも施文しないⅠA類の龍泉窯系青磁無文碗である。

青花磁器　359～361は碗である。口縁部が外方にひらくⅡ類の端反碗（359）と、口縁部をそのまま上方に引き上げ、底部が下方に突出するⅠB類の蓮子碗（360・361）とがある。いずれも16世紀代の明青花磁器である。

３＋１面包含層（図版78～79）

土師器皿　362～384は非ロクロ成形の京都系土師器で、Aa1Ⅱ類（362・363・368）、Ab1Ⅱ類（364・365・366）、Aa2Ⅱ類（367・369）、Aa1Ⅲ類（370・371・375）、Ab1Ⅲ類（372）、Ab2Ⅲ類（373・374）、

Aa2Ⅲ類（376）、Ab1Ⅳ類（377・378・379）、Ab1Ⅴ類（380・381・382・384）、Aa1Ⅴ類（383）に分類される。

瓦質土器　385は擂鉢である。口縁端部を僅かに外方につまみ出し、内面には7条1単位の櫛描きの擂目を施文する。Ba類に分類され、16世紀代の製品である。386は擂鉢の底部片で内面に擂目が僅かに残る。

無釉陶器　387は備前焼Ⅴ期の擂鉢で口縁部外面に凹線が2条巡る。16世紀代の所産である。

施釉陶器　388は肩が大きく張り、口縁部下に横耳を4箇所貼り付け、外面に褐釉を施釉する褐釉四耳壺である。胎土・形態の特徴から華南産のいわゆる呂宋壺と考えられ、16世紀代に位置づけられる。

389は天目茶椀である。内反り高台をもち、口縁部は屈曲して僅かに外方にひらく。大窯Ⅲ期相当の瀬戸・美濃系の製品で、16世紀後半代の製品である。

青磁　390～393は龍泉窯系青磁である。390はⅡA類の輪花皿である。体部内面に浅い沈線を波状に描き、ヘラ状工具でくずれた草花文を施文する。16世紀代の所産である。391～393は碗である。391は底部内面に「壽□」銘を印花で施文する。15世紀代の製品である。392は外面に剣頭と身が不一致の線描きの蓮弁文を施文するⅠB2類の細蓮弁文碗である。16世紀代に比定される。393は器面に細かい貫入が見られ、畳付の釉はかきとる。

青花磁器　394は器壁が非常に薄く、口縁部は若干外方にひらく皿である。外面には草花文を描く。16世紀代の明青花磁器である。

SD54001（図版79）

土師器皿　395は非ロクロ成形であるが、口縁部が直立する、京都系土師器の範疇には入らないタイプである。BⅢ類に分類される。396～419は非ロクロ成形の京都系土師器で、Aa2Ⅱ類（396・397・398・399・400）、Aa1Ⅱ類（402・403、404、405）、Ab1Ⅱ類（406）、Ab1Ⅲ類（407）、Aa1Ⅲ類（408・409）、Ab2Ⅲ類（410）、Ab1Ⅳ類（411・414・415）、Aa2Ⅳ類（412）、Ab2Ⅳ類（413・416）、Ab1Ⅴ類（417）、Aa1Ⅴ類（418）、Aa1Ⅵ類（419）に分類される。

土錘　420～426は土錘である。いずれも棒状のものに粘土を巻きつけて成形し、円柱状を呈する。

瓦質土器　427は鉢である。口縁部内面に沈線が1条巡る。外面は縦方向、内面は斜め横方向のミガキ調整を施す。Bc1類に分類される。428～431は擂鉢である。口縁部の形態から428はCa2類に、429はAb類に、431はCa1類に分類される。いずれも16世紀代に比定される。

無釉陶器　432は擂鉢である。体部は直線的に外上方に延び、口縁部内面に凹線が1条巡る。内面には9条1単位の櫛描きの擂目を施文する。越前焼擂鉢でB1類に分類され、16世紀代に比定される。

施釉陶器　433は瀬戸･美濃系天目茶椀である。大窯期の製品で16世紀代に比定される。434は口縁部が外方にひらき、底部内面に印花で菊花文を施文するⅡA2類の灰釉皿である。大窯期の瀬戸･美濃系灰釉陶器皿で16世紀代の製品である。

青花磁器　435は碁笥底のⅠA類の皿である。内面には蘇鉄を描き、底部外面は蛇の目状に釉ハギする。436はC類、437はⅠC類の碗である。436は外面に芭蕉文、437は唐草文を描く。いずれも粗製の明青花磁器で16世紀代に比定される。

SD54002

土師器皿　438～442は非ロクロ成形の京都系土師器で、Aa1Ⅱ類（438・439・440）、Aa1Ⅳ類（441）、Ab1Ⅳ類（442）に分類される。

無釉陶器　443は体部が直線的に外上方に延び、口縁部内面に凹線が１条巡る擂鉢である。16世紀代の越前焼で、B1類に分類される。

白磁　444は体部が内彎気味に外上方に延びる皿である。森田分類E－１群相当で、16世紀代の華南産白磁である。

青花磁器　445～447は碗である。445・447はいずれも底部外面に「福」の銘文をもつ。445はⅠA類の饅頭心碗に、447はⅠC類にそれぞれ分類される。446はⅠ類の碗で外面に水龍と唐草文を描く。445・446は16世紀代、447は16世紀後半～17世紀初頭の時期が考えられる。

SD54003

土師器皿　448は非ロクロ成形の京都系土師器である。Ab2Ⅳ類に分類される。

土製品　449は土鈴である。型作り成形で中央部に接合痕が残る。彩色は全て剥落する。

SD54004

土師器皿　450～484は非ロクロ成形の京都系土師器で、Aa1Ⅱ類（450・451・454・455・456・457・458・459）、Aa2Ⅱ類（452・460・461）、Aa1Ⅲ類（453・462・463）、Ab2Ⅲ類（465）、Ab1Ⅳ類（466・469・471）、Ab2Ⅳ類（468・470・472）、Ab1Ⅴ類（469・473・474・477・478・479・482）、Ab2Ⅴ類（475）、Aa1Ⅴ類（476・480・481）に分類される。483・484にはヘラ状工具痕が残る。

施釉陶器　485は灰釉陶器椀で、器面には細かい貫入が見られる。大窯期の瀬戸・美濃系灰釉陶器丸椀で、16世紀代の産品である。

青磁　486はⅠA類の無文碗である。口縁部に１ヶ所飛び青磁風に鉄釉を施す。

白磁　487は内外面とも透明釉を施し、灰白色に発色する。外面の体部下半以下は露胎である。華南産白磁皿と考えられる。

４面　集石部（図版81）

土師器皿　488から492は非ロクロ成形の京都系土師器で、Ab1Ⅱ類（488）、Aa2Ⅱ類（489）、Ab2Ⅲ類（490）、Ab1Ⅱ類（491）、Aa1Ⅲ類（492）に分類される。

施釉陶器　493は底部内面に印花で菊花文を施文するⅡA類の瀬戸・美濃系灰釉陶器皿である。大窯期の製品で、16世紀代に位置づけられる。

４面までの整地土層中（図版81～84）

土師器皿　494～496は体部が直立する深めの皿で、いずれも非ロクロ成形である。ＢⅠ類に分類される。

497～544は非ロクロ成形の京都系土師器で、Ab1Ⅱ類（498・503・505・507・514）、Aa1Ⅱ類（499・500・501・502・504・506・509・510・511・512・513・517）、Ab2Ⅱ類（508・515）、Aa2Ⅱ類（516）、Aa1Ⅲ類（518・521）、Ab1Ⅲ類（519・520・523）、Ab2Ⅲ類（522）、Aa2Ⅳ類（525・527）、Ab1Ⅳ類（526・529・530・533）、Ab2Ⅳ類（528・532）、Ab1Ⅴ類（534・535・536・537・542）、Ab2Ⅴ類（538・539）、Aa1Ⅴ類（540）、Aa2Ⅴ類（541）、Ab2Ⅵ類（543）、Ab1Ⅵ類（544）に分類される。

土師器壺　546は体部が内彎し、口縁部は短く直立する壺である。焼成は堅緻でにぶい黄橙色を呈する。

土製品　547は土錘である。棒状のものに粘土を巻き付けて成形する。色調はオリーブ黒色を呈する。548は鞴の羽口である。外面は灰色、内面はにぶい橙色を呈する。

瓦質土器　545はⅠ類の蓋である。体部は扁平で上面の中央に切頭円錐状の短いつまみを貼り付ける。

壷の蓋であろう。549は燭台である。脚部は短く直立し、皿部は器壁が厚く、緩やかに外上方に延びる。脚部を貫いて穿孔が見られる。釘穴と考えられる。550は火鉢もしくは火消し壺の底部である。内面に指頭圧痕が顕著に見られる。551はⅢ類の桶状容器で体部の最下部に箍を模した凸帯が１条巡る。火消し壷と考えられる。552は火舎香炉の脚部と考えられる。ヘラ状工具で成形される。553・554はいずれも扁平な把手をもつⅢ類の火鉢である。低い高台をもち、体部は大きく内彎する。内外面とも横方向のミガキを加え、器面を平滑に仕上げる。

555から561は擂鉢である。いずれも体部が直線的に外上方に延びる。口縁部の形態から、Ab類（555）、Ba類（559）、Bb類（556・557・558・560）、Ca1類（561）に分類される。

562は瓦磚の破片と考えられ、外面にはケズリ調整が見られる。

無釉陶器　564・565はいずれも口縁部が断面楕円形状に肥厚する甕である。いずれも備前焼Ⅳ期相当で、15世紀代に比定される。

施釉陶器　563は体部が内彎し、口縁部は断面長方形状に肥厚する鉢である。体部の内面以下に褐釉を施釉し褐灰色に発色する。華南産の褐釉陶器と考えられ、16世紀代に比定される。

566～576は灰釉陶器皿である。いずれも大窯期の瀬戸・美濃系灰釉陶器皿で16世紀代に比定される。口縁部の形態から、口縁部をそのまま上方に引き上げるⅠ類（574）、口縁部が外方にひらくⅡ類（566～571）、口縁部が僅かに外方にひらくⅢ類（572・575・576）、口縁部を波状に成形するⅣ類のいわゆるひだ皿（573）、に大別される。また、569は底部内面に施文しないⅡA1類に、566・568・570は底部内面に印花で菊花文を施文するⅡA2類に細分される。

577は口縁部が若干外方にひらく天目茶碗である。大窯期の瀬戸･美濃系の製品で16世紀代の製品である。

578は龍泉窯系青磁細蓮弁文碗を模倣した瀬戸・美濃系灰釉陶器椀である。色調は淡黄緑色を呈する。

579は三彩の鳥形水滴である。型作り成形で、緑釉をベースに黄釉、褐釉で彩色する。華南三彩と考えられる。

青磁　580は体部外面に線描きの粗雑な細蓮弁文を施文するⅠB2類の碗である。龍泉窯系青磁細蓮弁文碗で16世紀代の所産である。

白磁　581～586は皿（581・582・584～586）及び杯（583）である。いずれも華南産白磁と考えられる。口縁部まで残存するものは、森田分類の皿E－１群（582）、E－２群（584･585･586）、杯E－２群（583）に分類される。

587は碗の底部である。底部の器壁は比較的厚く、内面に線描きの草花文を描く。華南産白磁と考えられ、森田分類碗B群に相当する可能性が高い。14世紀代に比定される。

青花磁器　588・589は皿である。588は碁笥底で外面に鋸歯文を描き、底部外面の釉は蛇の目状に釉ハギする。589は口縁部が外方に大きくひらくⅡB類の皿で、外面に牡丹唐草文を施文する。いずれも16世紀代の明青花磁器である。

590～593は碗である。口縁部が残るものはいずれも口縁部が直口するⅠ類碗で、底部まで残る593はⅠB類の蓮子碗に細分される。外面には人物文（591）、草花文（592・593）などを描く。いずれも16世紀代の明青花磁器である。

４面焼土層中（図版84）

土師器皿　594～596は非ロクロ成形の京都系土師器で、Ab2Ⅵ類（595）、Ab1Ⅱ類（594）、Aa1Ⅱ類（596）に分類される。

白磁　597は口縁部が僅かに外方にひらく小碗B類で、底部内面は輪状に釉ハギする。華南産白磁と考えられる。

４面土壌層中（図版84、85）

土師器皿　598～615は非ロクロ成形の京都系土師器で、Aa1Ⅱ類（598・601・602）、Ab2Ⅱ類（599・600）、Ab2Ⅲ類（603）、Ab1Ⅲ類（604・605・606・607）、Ab2Ⅳ類（608）、Ab1Ⅳ類（609・611）、Ab2Ⅴ類（612）、Ab1Ⅴ類（613）、Ab1Ⅵ類（614）、Ab2Ⅶ類（615）に分類される。

施釉陶器　616は口縁部が外方にひらくⅡ類の瀬戸・美濃系灰釉陶器皿である。大窯期の製品で16世紀代の所産である。

青磁　617は外面に縦方向の櫛描き文を施文する蓋である。龍泉窯系青磁で、酒会壺の蓋と考えられる。

青花磁器　618～621はいずれも皿である。碁笥底で口縁部が直口するⅠA類（618）と輪高台をもち、口縁部が外方にひらくⅡB類（619～621）に分類される。外面の文様には無文（618）、草花文（619）、牡丹唐草文（620）、蓮弁文（621）などがある。いずれも16世紀代の明青花磁器である。

４＋１面までの包含層中（図版85）

土師器皿　622は非ロクロ成形の京都系土師器である。Ab2Ⅱ類に分類される。

青花磁器　623は口縁部が外方にひらく碗片である。

SD5001

土師器皿　624～631は非ロクロ成形の京都系土師器で、Aa1Ⅱ類（624･627）、Ab1Ⅱ類（625）、Ab2Ⅱ類（626）、Ab2Ⅲ類（628）、Ab1Ⅲ類（629）、Ab1Ⅳ類（630）、Ab1Ⅴ類（631）に分類される。

瓦質土器　632は擂鉢である。平底で体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は若干外方に引き出す。内面に６条１単位の櫛描きの擂目を施文する。Bb類に分類される。

青花磁器　633は口縁部が外方にひらく皿片、634は口縁部が直口する碗片、635はⅠ類の杯の破片である。635の外面には馬が描かれる。

SD55002

土師器皿　636～638は非ロクロ成形の京都系土師器である。Aa1Ⅱ類（636）、Ab1Ⅲ類（637）、Ab1Ⅳ類（638）に分類される。

施釉陶器　639は高台裏にツクの痕跡の残る瀬戸･美濃系灰釉陶器丸椀である。大窯期の製品で、16世紀代に比定される。

95－５面土塁部下（図版85）

土師器皿　640・641は非ロクロ成形の京都系土師器である。Ab1Ⅱ類（640）、Aa1Ⅱ類（641）に分類される。

根太内（図版85）

土師器皿　642は非ロクロ成形の京都系土師器皿である。

施釉陶器　643は口縁部が外方にひらき、底部外面に輪トチン跡が残るⅡB1類の灰釉陶器皿である。大窯Ⅰ期の瀬戸・美濃系灰釉陶器皿で、16世紀前半代の製品と考えられる。

SK55002（図版85）

土師器皿　644・645は非ロクロ成形の京都系土師器である。いずれもAa1Ⅱ類に分類される。

青花磁器　646は口縁部が大きく外方にひらき、外面に牡丹唐草文を描くⅡ類の皿である。16世紀代の明青花磁器である。

95－5面包含層（図版85～88）

土師器　647～690は土師器皿である。これらは、いずれも非ロクロ成形で体部が直立するBⅠ類（647・648）、BⅢ類（649）の在地系皿と体部が直線的に外上方に延びる京都系土師器皿に大別される。京都系土師器皿は、Ab1Ⅱ類（650・652・653・656・657・659・660・661・662）、Aa1Ⅱ類（651・654・655・658）、Aa1Ⅲ類（663・665）、Ab1Ⅲ類（664・666）、Ab2Ⅲ類（667）、Ab1Ⅳ類（668・669・672）、Ab2Ⅳ類（670・673）、Ab1Ⅴ類（674・675・676・677・679・681・682・685）、Ab2Ⅴ類（684）、Ab2Ⅵ類（686・689）、Ab1Ⅵ類（687・688・690）に分類される。693は脚付皿、694は小壷である。

瓦質土器　瓦質土器には蓋（691・692）、桶形容器（695）、火舎香炉蓋（696）・身（697・698）、こね鉢（699）、擂鉢（700～707）がある。

蓋　691・692は蓋である。691はⅠ類、692はⅡ類にそれぞれ分類される。

桶形容器　695は平底で、体部は直立、口縁部は短く内傾する。体部外面の上・中・下位に箍を意識した小さい凸帯が1条巡る。Ⅲ類に分類される。

火舎香炉　696は釣鐘形をしたⅢ類の火舎香炉の蓋である。体部中央に透かしが見られる。697は高い高台をもち、体部は僅かに内彎して短く直上に延び、口縁部は内傾する。内面には被熱の痕跡が残る。696とセットと考えられる。Ⅲ類に分類される。698も同様のⅢ類の底部と考えられる。

捏鉢　699は体部が直線的に斜め上方に延び、口縁部は直口する。内外面とも横方向のミガキ調整を加える。Ab1類に分類される。

擂鉢　擂鉢は、Bb類（700）、Ba類（702）、Ca1類（703～706）、Db1類（701・707）に分類される。いずれも、16世紀代に比定される。

無釉陶器　708～710は擂鉢である。いずれも体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は尖り気味におさめる。いずれも越前焼で、A類に分類される。16世紀前半代の製品である。

施釉陶器　711～713は低い輪高台をもち口縁部が外方にひらく施釉陶器の皿で、大窯Ⅰ期の瀬戸・美濃系灰釉陶器皿である。711はⅡB2類に、712はⅡA1類に、713はⅢ類にそれぞれ分類される。

714～720は椀である。714～717は瀬戸・美濃系の灰釉丸椀で、715～717には縦方向に櫛描き施文が見られる。718は外面に線描きの蓮弁文を施す。同時期の龍泉窯系青磁細蓮弁文を模倣したものである。719・720は灰釉丸椀片である。いずれも大窯Ⅰ期及びⅡ期の瀬戸・美濃系の製品で16世紀前半代に比定される。

721は椀で内外面とも透明釉を施し、白濁色に発色する。底部内面に砂目跡が4箇所見られる。朝鮮

製陶器の可能性が高い。728は外面に簡略化された線描きの蓮弁文を描く。龍泉窯系青磁細蓮弁文碗を写した瀬戸・美濃系灰釉陶器椀である。

青磁　722～725は皿である。口縁部が直口するⅠ類（722）と外方にひらくⅡ類（723～725）がある。722は畳付まで施釉し、高台裏は露胎である。15世紀代の龍泉窯系青磁である。723は体部外面には彫りの浅いヘラ彫りの広形連弁を施文し、釉は、722同様畳付まで施釉し、高台裏は露胎である。ⅡB類に分類される。15世紀代の龍泉窯系青磁である。724・725は口縁部を輪花状に成形し、口縁部内面に沈線（724）、波状の沈線を3条（725）施し、高台裏は露胎である。いずれもⅡA類に分類される。16世紀代の龍泉窯系青磁である。

726～736は碗である。口縁部が外方にひらくⅡ類（727）と直口するⅠ類（726・728・729・732・736）に大別される。

726は外面にヘラ描きでくずれた雷文帯を施文するⅠC類の碗である。727は内外面とも無文の無文碗である。いずれも16世紀代の龍泉窯系青磁である。729は外面に剣頭と身の一致した線描きの蓮弁文を描くⅠB1類の細蓮弁文碗である。732は器面に灰被りの見られるⅠA類の無文碗である。736は内面に雷文帯と神獣文を印花で施文するⅠD類の碗であるが、文様は不鮮明である。いずれも龍泉窯系青磁で、729・736は15世紀代、その他は16世紀代にそれぞれ比定される。731・733・734・735はいずれも底部内面に印花文を施文する。文様はくずれた草花文（731・733・735）、花文（734）などがある。龍泉窯系青磁で15世紀代に比定される。

白磁　737・738は体部が直線的に外上方に延び、口縁部は僅かに外方にひらく小碗B類である。底部内面は輪状に釉ハギする。16世紀代の華南産白磁である。

青花磁器　739～743は皿である。いずれも口縁部は外方にひらくⅡ類皿である。外面の文様は牡丹唐草文（739・741）、草花文（740・743）、宝相華文（742）などがある。いずれも16世紀代の明青花磁器である。底部まで残る739・741・742はⅡB類に細分される。

744～749は碗である。口縁部が直口するⅠ類（744～747・749）と外方にひらくⅡ類（748）がある。外面の文様には芭蕉文（744・745）、草花文（746・747・749）、牡丹唐草文（748）などがある。底部まで残る744・745はⅠB類の蓮子碗に分類される。いずれも16世紀代の明青花磁器である。

土製品　750は鞴の羽口片である。外面は被熱の影響でガラス質化する。色調はにぶい橙色を呈する。

95－5面上層（図版88）

土師器　751～753は非ロクロ成形の京都系土師器皿である。Aa1Ⅱ類（751）、Aa1Ⅲ類（752）、Ab1Ⅳ類（753）に分類される。

無釉陶器　754は擂鉢である。口縁部内面に凹線が1条巡り、体部内面に6条1単位の擂目を櫛描きで施文する。褐灰色を呈する。越前焼で、A類に分類される。16世紀代の製品である。

青花磁器　755は口縁部が外方にひらくⅡB類の皿である。外面には牡丹唐草文を施文する。16世紀代の明青花磁器である。

95－5面下層（図版88）

756・757はいずれも施釉陶器皿である。756は低い輪高台、757は浅く削り出す内反り高台をそれぞれもつ。いずれも大窯期の瀬戸・美濃系灰釉陶器皿で16世紀代の製品である。

その他（図版88）

施釉陶器　758・759・760は天目茶椀である。758は口縁部が僅かに外方にひらく。内外面とも鉄釉を施釉し、ガラス質で暗茶褐色に発色する。759は低い輪高台を浅く削り出す。内面に鉄釉を施釉し、外面の高台脇以下は露胎である。760は、形態は759と同形であるが、全面に鬼板を塗布する。いずれも16世紀代の瀬戸・美濃系天目茶椀である。761は口縁部が外方にひらくⅡA2類の施釉陶器皿である。底部内面に菊花文を印花で施文する。瀬戸・美濃系灰釉陶器皿で、大窯Ⅰ期に位置づけられる。

白磁　762は小碗A類である。体部は内彎気味にほぼ直上に延び、内外面とも透明釉を施釉し灰白色に発色する。

青花磁器　763～765は碗である。763はB類の蓮子碗で、外面には芭蕉文を施文する。764・765は口縁部が直口するⅠ類碗である。764は外面にくずれた草花文を施文する。いずれも16世紀代の明青花磁器である。

96－1面（図版89）

青磁　766は体部が直立し、口縁部は水平に端面をもつ香炉である。外面に浅い凹線を施文する。龍泉窯系青磁である。

青白磁　767は高台が蛇の目高台風に畳付の幅が広く、体部は内彎気味に外上方に立ち上がる杯である。内外面に化粧土をハケ塗りした後、透明釉を施釉する。景徳鎮窯産の青白磁の可能性が高い。

白磁　768は皿である。内外面とも透明釉を施釉し、畳付の釉はかきとる。16世紀代の華南産白磁であろう。

青花磁器　769～771は碗である。外面に細かい草花文を描き口縁部が直口するⅠ類（769）と外面に草花文を描き口縁部が外方にひらくⅡ類（771）がある。770は内面に草花文を描くB類の蓮子碗の底部片である。

772は鉢である。体部は内彎してほぼ直上に延びる。外面にはやや滲んだ釉で施文する。漳州窯系の製品と考えられる。いずれも16世紀代の明青花磁器である。

96－4面（図版89）

瓦質土器　773は擂鉢である。体部内面に凹線1条・波状文4条・6条1単位の櫛描きの擂目を施文する。Db2類に分類される。

774はⅠ類の火鉢である。口縁部は短く直立し、端部は上面に水平に端面をもつ。口縁部内面にヘラミガキ調整を施す。777はⅢ類の火鉢片である。外面に巴文を印花で施文する。

無釉陶器　776は桶形容器の破片である。体部外面に箍を模した凸帯が1条巡る。胡麻状の灰被りが見られ、色調は暗赤褐色に発色する。備前焼で、建水として用いられたものと考えられる。

778は擂鉢である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。内面に9条1単位の櫛描きの擂目を施文する。越前焼擂鉢で、C2類に分類される。

779は壷である。頸部は短く直立し、口縁部は玉縁状に僅かに肥厚する。色調は暗赤褐色を呈する。備前焼と考えられる。780は甕である。体部は内傾、頸部はほぼ直立して、口縁部は断面楕円形状に肥厚する。備前焼Ⅳ期相当で、15世紀代の製品である。

SD65001（図版89）

瓦質土器　781は擂鉢である。口縁部は若干外方にひらき、端部は玉縁状に肥厚する。体部内面に８条１単位の擂目を櫛描き施文する。Ca1類に分類される。16世紀代の製品である。

施釉陶器　782・783はいずれも瀬戸・美濃系陶器の天目茶椀である。色調はガラス質の強い極暗赤褐色に発色する。瀬戸・美濃系大窯Ⅰ・Ⅱ期の製品で16世紀前半代に位置づけられる。

青花磁器　784・785・787は碗である。口縁部が若干外方にひらくⅡ類（784）、体部が内彎し、口縁部が直口するⅠ類（785）、体部が直線的に外上方に延び、口縁部が直口するⅠ類（787）がある。786はⅠA類の皿である。碁笥底で、外面には芭蕉文を描く。

SD66001（図版90）

瓦質土器　788はⅢ類の火鉢である。体部は直立し、体部外面には印花で巴文を連続して施文する。789は体部が僅かに内彎気味に外上方に延びるAa2類の鉢である。色調は暗灰色を呈する。

無釉陶器　790・792は口縁部が上下に拡張し、縁帯を形成する擂鉢である。922の口縁部外面には凹線が３条巡る。790は備前焼Ⅳ期相当、792はⅤ期相当で、それぞれ15世紀代、16世紀代に比定される。791は体部が直線的に斜め上方に延び、口縁端部は尖る。口縁部内面は僅かに窪み、体部内面に12条１単位の擂目を櫛描き施文する。越前焼擂鉢で、C2類に分類される。16世紀代に比定される。

施釉陶器　793は碁笥底で、高台裏に卜巾が残る皿である。内外面とも灰釉を施釉し、やや青味を帯びた灰白色に発色する。高台脇以下は露胎である。朝鮮製陶器の可能性がある。

青磁　794は碗である。内外面とも青磁釉を施釉し、畳付、高台裏は露胎である。ⅠA1類に分類される。龍泉窯系青磁無文碗で13世紀代に比定される。

白磁　795・796は皿である。口縁部は大きく外方にひらく。森田分類ⅢE－２群相当で、いずれも16世紀代の華南産白磁である。

青花磁器　797・798は碗である。いずれも口縁部が直口するⅠ類碗で、797は外面に雷文帯、798は外面に牡丹文をそれぞれ描く。底部まで残る798はⅠA類の饅頭心碗に分類される。いずれも16世紀代の明青花磁器である。

SD67001（図版90、92）

土師器皿　799～834は非ロクロ成形の京都系土師器である。Aa1Ⅱ類（799・800・801・802・807・809・810・811・812・813・814・815・816・817・818・820・822・823・824）、Ab1Ⅱ類（803・804・805・806・808・821）、Aa2Ⅱ類（819）、Aa1Ⅲ類（825・826・829）、Aa2Ⅲ類（827）、Ab1Ⅲ類（828）、Aa1Ⅳ類（830・832・833）、Ab2Ⅳ類（831）、Aa1Ⅴ類（834）に分類される。

瓦質土器　835は擂鉢である。体部は直線的に斜め上方に延び、体部内面に６条１単位の櫛描きの擂目を施文する。Aa類に分類され、16世紀代に位置づけられる。836はⅡ類の火鉢である。体部は大きく内彎し、外面に扁平な把手を貼り付ける。内外面とも丁寧なナデ調整を加える。837は瓦磚の破片である。灰色を呈し、器面には板ナデ調整が見られる。

無釉陶器　838は越前焼の擂鉢である。体部は直線的に外上方に延び、口縁部内面に10～12条１単位の擂目を施文する。B１類に分類される。16世紀代の製品である。

施釉陶器　839は天目茶椀である。内外面とも鉄釉を施釉するが、外面の高台脇以下は未施釉で、鬼板を

塗布する。美濃焼窖窯期の製品で15世紀代に比定される。840は天目茶碗の底部である。削りだしの浅い内反り高台で、外面には鬼板を塗布する。瀬戸・美濃系の大窯期の製品である。841は四耳壷の破片と考えられる。内面は部分的に褐釉を、外面には全面に褐釉を施釉する。16世紀代の華南産の褐釉四耳壷と考えられる。

白磁　842は口縁部が外方にひらく皿である。内外面とも透明釉を施釉するが、高台裏は露胎で橙色に発色する。森田分類皿E－2群相当で、16世紀代の華南産白磁である。

青花磁器　843は杯である。外面には草花文・内面には界線2条のみ施文する。844～846は碗である。844は「富貴長春」銘を、845は底部内面に唐人文をそれぞれ描く。C類に分類される。846は口縁部が直口するⅠ類碗で、外面には唐草文を描く。いずれも16世紀代の明青花磁器である。

SD67002（図版91）

青磁　847は碗である。外面に剣頭と身が一致しない線描き蓮弁文を描く、ⅠB2類の龍泉窯系青磁細蓮弁文碗である。16世紀代に比定される。

白磁　848は杯である。体部は外反し、内外面とも透明釉を施釉し、灰白色に発色する。底部内面は輪状に釉ハギする。16世紀代の華南産白磁である。

SD68001（図版91）

土師器　849～861は非ロクロ成形の京都系土師器皿である。Aa1Ⅱ類（849・850・852）、Ab1Ⅱ類（851・853）、Aa2Ⅱ類（854）、Ab1Ⅲ類（857）、Aa1Ⅲ類（855・856・858）、Aa1Ⅳ類（859・861）に分類される。

無釉陶器　863は擂鉢である。口縁部内面に凹線が1条巡る。体部内面には10条1単位の擂目を櫛描きで施文する。越前焼でB1類に分類され、16世紀代に比定される。

青磁　864は碗である。器壁は比較的薄く、無文である。断面に漆継痕が見られる。龍泉窯系青磁と考えられ、ⅠA類に分類される。

SD68002（図版92）

土師器　865～874は非ロクロ成形の京都系土師器皿である。Ab1Ⅱ類（865・871・872）、Aa1Ⅲ類（866）、Ab1Ⅳ類（867・869・874）、Aa1Ⅳ類（868）、Ab1Ⅴ類（870）、Aa2Ⅱ類（873）に分類される。

瓦質土器　875は火舎香炉の蓋である。体部は内傾し、外面に透かしが見られる。ミガキにより器面は平滑に仕上げる。

無釉陶器　876は擂鉢である。口縁部は上下に拡張し縁帯を形成し、口縁部外面に凹線が3条巡る。備前焼Ⅴ期相当で、16世紀代に比定される。

白磁　877は壷である。頸部は外反気味に直上に延び、口縁部は外方に折り曲げる。形態･色調などから12世紀後半～13世紀前半代の華南産白磁の四耳壷と考えられる。

青花磁器　878は碗の底部で外面に幾何学文を描く。879は口縁部が外方にひらくⅡ類の碗で、外面には草花文を描く。いずれも16世紀代の明青花磁器である。

SD69001（図版92）

土師器　880～896は非ロクロ成形の京都系土師器皿である。Aa1Ⅱ類（880・881・882・885）、Ab1Ⅱ類（883・884・886・887・888・889）、Ａb1Ⅲ類（890）、Ａa1Ⅳ類（894・895・896）、Ａb1Ⅳ類（892）、Aa2Ⅳ類（893）に分類される。

SD69002

瓦質土器　897は擂鉢である。口縁部は僅かに外方にひらき、端部は若干肥厚する。体部内面に８条１単位の櫛描きの擂目を施文する。Db1類に分類される。

96－９面（図版92）

瓦質土器　900・901は火鉢である。900はⅡ類で体部が大きく内彎し、外面に扁平な把手を貼り付ける。901はⅣ類で体部が直線的に外上方に延び、口縁部は水平に外方に折り曲げる。色調は灰白色を呈する。

施釉陶器　898は体部が内彎し、外面に横耳を貼り付ける壷（四耳壷？）である。内外面とも鉄釉を施釉し、黒褐色に発色する。華南産の鉄釉四耳壷の可能性が高い。

青花磁器　899は碗である。外面に非常に淡い呉須で施文する。16世紀代の明青花磁器と考えられる。

その他

無釉陶器　904は甕である。頸部は若干外方にひらき、口縁部は断面楕円形状に肥厚する。口縁部外面には凹線が２条巡る。備前焼Ⅴ期相当で、16世紀代に比定される。

青磁　902は青磁碗である。底部の器壁は非常に厚い。内外面とも施釉するが、底部外面の釉は輪状にかきとる。ＩA2類に分類される。龍泉窯系青磁で15世紀代の製品である。

青花磁器　903はⅡ類の杯で体部は直線的に斜め上方に延びる。外面に草花文を施文する。16世紀代の明青花磁器である。

97－１面整地層（図版93）

無釉陶器　905は甕の破片である。口縁部は断面楕円形状に肥厚し、外面に凹線が１条巡る。備前焼Ⅴ期相当で16世紀代に比定される。

SD72001（図版93）

瓦質土器　906は平底で体部が直立するⅠ類の火舎香炉である。体部外面に縦方向のヘラミガキ調整を施す。

無釉陶器　908は壷の底部である。体部外面には回転ヘラケズリが見られる。色調はにぶい褐色を呈する。備前焼と考えられる。

施釉陶器　907はⅠ類の灰釉陶器皿である。碁笥底で底部の器壁は厚い。内外面とも灰釉を施釉し、外面の体部下半以下は露胎である。瀬戸・美濃系で、Ⅱ期～Ⅲ期の製品と考えられ、16世紀前半～中頃に比定される。

97－２面包含層（図版93）

瓦質土器　909はⅡ類の火鉢である。体部は大きく内彎し、体部外面に把手を２ヶ所貼り付ける。炭素

の吸着はほとんど見られず、浅黄色を呈する。

910～913は擂鉢である。口縁部の形態から、Db2類（910）、Bc類（911）、Db1類（912・913）に分類される。いずれも16世紀代に比定される。

無釉陶器　914は擂鉢である。口縁端部は尖り気味に収め、体部内面に８条１単位の擂目を施文する。越前焼で、C2類に分類され、16世紀代に比定される。915は甕片である。形状から備前焼Ⅴ期相当で16世紀代に比定される。916も甕の底部である。外面に縦方向のヘラ削り調整を加える。越前焼と考えられる。

施釉陶器　917は天目茶椀である。高台脇以下は未施釉で鬼板を塗布する。瀬戸･美濃系大窯Ⅰ期の製品で16世紀前半に比定される。

青花磁器　918･919は碗である。いずれも口縁部が直口するⅠ類碗で、底部まで残る918はⅠC類に分類される。外面に草花文（918）、馬文（919）を描く。いずれも明青花磁器で、918は16世紀代、919は16世紀後半～17世紀初頭に位置づけられる。

97－３面整地層（図版93）

無釉陶器　920は甕である。体部は内傾し、口縁部は大きく外方にひらく。口縁部内面に浅い凹線が１条巡る。丹波焼で16世紀代に比定される。

SD74001（図版94）

土師器　921～931は非ロクロ成形の京都系土師器皿である。Aa1Ⅱ類（921・922・923・924・925・926・927）、Aa1Ⅲ類（928）、Ab1Ⅳ類（729）、Ab1Ⅳ類（730・731）に分類される。

瓦質土器　932は型作り成形のⅡ類の火舎香炉である。平面形状は楕円形を呈し、体部は直立し、口縁部は上面に水平に端面をもつ。933は擂鉢である。口縁端部は上面に水平に端面をもつ。内面に８条１単位の櫛描きの擂目を施文する。Aa類に分類される。

無釉陶器　934は甕の底部である。外面に縦方向の板ナデ調整痕が見られる。備前焼と考えられる。

施釉陶器　935は天目茶椀である。高台脇以下は未施釉で、鬼板を塗布する。大窯期Ⅲ期の瀬戸･美濃系天目茶碗で16世紀前半～中頃の製品と考えられる。

青磁　937は外面に剣頭と身が不一致の蓮弁文を施文するⅠB2類の龍泉窯系青磁細蓮弁文碗である。16世紀代に比定される。

白磁　936は碗の底部である。碁笥底で体部は内彎気味に外上方に延びる。底部外面は未施釉で鬼板状のものを塗布し、暗茶褐色に発色する。朝鮮製白磁の可能性も考えられる。938・939は口縁部が外方にひらく皿である。いずれも森田分類皿E－２群相当で、16世紀代の華南産白磁である。

青花磁器　940は皿である。内外面に牡丹文を施文する。941・942は口縁部が直口するⅠ類の碗である。外面には草花文を描く。いずれも16世紀代の明青花磁器である。

97－４面包含層中（図版95）

白磁　943は杯である。内外面とも透明釉を施釉する。底部外面は露胎である。漆継ぎの痕跡が認められる。

SD75001（図版95）

土師器　944～955は非ロクロ成形の京都系土師器皿である。Aa1Ⅱ類（944・945・947・948・949・

950)、Aa2Ⅱ類 (946)、Aa1Ⅲ類 (951)、Ab1Ⅳ類 (952)、Aa1Ⅳ類 (953・954)、Aa1Ⅴ類 (955) に分類される。

956は蓋である。山笠形で、上面の中央部にナデ上げてつまみを貼り付ける。

土製品　957は土鈴である。手づくね成形で上面に棒状の工具で紐孔を穿孔する。

瓦質土器　958・959は擂鉢である。口縁部が直口するCa2類（958）と口縁端部を外方に引き出すBc類（959）とがある。958は内面に7条1単位の波状文と縦方向の擂目を施す。959は内面に7条1単位の縦方向の擂目のみを施文する。

青磁　960は碗である。内外面とも青磁釉を施釉し、淡黄緑灰色に発色する。断面に漆継ぎの痕跡が見られる。色調から13世紀代の砧手青磁と考えられる。ⅠA類に分類される。961は皿の破片である。内面に片切彫りで草花文を施文する。ⅡA類に分類される。16世紀代の龍泉窯系青磁と考えられる。

青花磁器　962・963は碗である。962は外面に幾何学文帯と草花文を描く。963は底部はやや上げ底気味で、高台裏に「大□□□□」銘をもつ。A類の饅頭心碗である。いずれも16世紀代の明青花磁器である。

SD76001（図版95）

青花磁器　964は碗である。器壁は比較的薄く。内外面とも界線のみを描く。965はB類の蓮子碗である。内外面とも呉須で施文する。いずれも16世紀代の明青花磁器である。

97－6面（図版95）

瓦質土器　966はⅤ類の火鉢である。体部は内彎し、口縁端部は内側に引き出し、上面は水平に端面をもつ。器面はミガキ調整により比較的平滑に仕上げる。967はⅣ類の桶形容器である。体部は直立し、口縁部は上面に水平に端面をもつ。体部外面の下位に印花で花文を連続して施文する。さらに箍状の凸帯を3条貼り付ける。内外面ともヘラミガキ調整を加え、色調は灰色を呈する。

青磁　968は外面に剣頭と身が一致した線描きの蓮弁文を施文するⅠB1類の碗である。15世紀代の龍泉窯系青磁細蓮弁文碗である。

下層出土の土器・江戸時代水田層出土の土器（図版188）

江戸時代水田層

無釉陶器　982は甕の口縁部片である。口縁部は断面楕円形状に肥厚し、外面に凹線が2条巡る。備前焼Ⅴ期相当で15世紀代に比定される。986は擂鉢である。体部は直線的に外上方に延び、口縁部は小さい玉縁状に若干肥厚する。体部内面に12条1単位の擂目を施文し、内外面とも鬼板を塗布し、にぶい橙色に発色する。近世の瀬戸・美濃系の製品の可能性が高い。

白磁　984は口縁部が外方にひらく皿である。近世の肥前系白磁と考えられる。985は体部が直立する杯である。器面に光沢があり、近世の製品と考えられる。

染付磁器　987・988は皿である。987は底部の器壁は比較的厚い。内面は五弁花文、外面は草花文、底部外面には渦福銘をそれぞれ描く。肥前系波佐見産のくらわんか手で、18世紀後半代の所産である。988は内面に山水楼閣文を描く。底部内面には針支え痕が見られる。

989・990は碗である。989は体部が内湾してほぼ直上に延び、外面に丸文・斜格子文を描く。肥前系の半球形碗で19世紀前半代に比定される。990は高台が「ハ」の字状に外方にひらき、外面に草花文を描

く。瀬戸・美濃系と考えられ、19世紀前半代の製品である。

青磁　981は碗の底部片である。底部の器壁は厚く、内外面とも施釉するが、高台裏は露胎である。13世紀代の製品と考えられる。

黒色土器　983は椀の底部である。平高台で高台側面はナデ調整し、体部内面には不定方向のヘラミガキ調整を施す。黒色土器A類である。

977～981・983は遊離した遺物である。時期は古代～中世前期である。

須恵器杯　977は須恵器杯Gの底部である。周囲を打ち欠き、円盤状土製品としている。詳細な時期は定かではないが7世紀前半か。978は短脚の高杯である。時期は7世紀か。979は杯B底部である。平安時代前期を前後する頃か。

須恵器甕　980は口縁部を水平に開く大型製品である。時期は鎌倉時代と考えられる。

弥生時代・古墳時代前期の遺物（図版188）

古墳時代以前の遺物は弥生時代中期・弥生時代後期・古墳時代前期の土器が出土している。該当する遺構に伴って出土したものは存在していない。ここでは図化した遺物の概略を記述する。

弥生時代中期（969）

弥生時代中期中葉の土器は広口壺（969）が出土している。96年度調査の古墳時代前期の水田・弥生時代の水田層（26・27層）から出土している。

弥生時代後期（970～973）

弥生時代後期後半の土師器は器台（970）、甕（971～973）が出土している。971は96年度調査の古墳時代前期の水田・弥生時代の水田層（㉖・㉗層）から出土している。973は97年度調査の第4整地面層（㉓層）から出土している。970は97年度調査の第3整地面層（⑬層）から出土している。972は95年度のサブトレンチから出土している。

古墳時代前期（974～976）

古墳時代前期の土師器は壺（975）、甕（974･976）が出土している。976は96年度調査の古墳時代前期水田・弥生時代水田層（㉖・㉗層）から出土している。974・975は97年度調査の第4整地面層（㉓層）から出土している。

小結

弥生時代および古墳時代前期の土器は少量であり、当該時期の遺構から出土しているものはない。遺物は完形のものはなく、小破片である。このことから生活領域はやや離れた地点に存在すると考えられる。

引用・参考文献

1　森田　勉　1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No 2　日本貿易陶磁研究会

2　上田秀夫　1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No 2　日本貿易陶磁研究会

3　小野正敏　1982「15～16世紀の染付碗､皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No 2　日本貿易陶磁研究会

4　木村孝一郎　2008「越前焼の編年的研究ノート」『吾々の考古学』和田清吾先生還暦記念論集刊行会

5　岩田　隆　1997「越前」『中・近世の北陸―考古学が語る社会史－』北陸中世土器研究会

6　井上喜久雄　1985「美濃焼の研究（一）」『東洋陶磁』第15・16号　東洋陶磁学会

7　太宰府市教育委員会　2000『大宰府条坊跡ⅩⅤ－陶磁器分類編－』

第２節　金属製品

武器

刀（図版104、写真図版157　Ｍ１～３）

Ｍ１は鋒を欠いているが、残存長は32.5cm、刃部は片刃で、長さ25.5cm、幅2.5cm、厚さは４㎜、茎長は7.8cmを測る。Ｍ２は鋒部まで残存している。長さは33.8cm、刃部は片刃で、長さ24.5cm、幅1.8cm、厚さは３㎜、茎長は10.5cmを測る。Ｍ３は鋒部を欠いており、残存長は25.1cm、刃部は片刃で長さ15.5cm、幅1.7cm、厚さ２㎜である。茎長は10cmを測る。柄部には目釘孔が１カ所開けられている。孔の直径は５㎜を測る。

刀装具

鎺（図版104、写真図版157　Ｍ４）

Ｍ４は鎺で長さ3.3cm、幅３cm、厚さ１㎜を測る。装着されていた刀は、内径から刃幅2.2cm、棟幅0.6cmであったと考えられる。

切羽（図版104、写真図版157　Ｍ５）

Ｍ５は切羽で長径4.2cm、短径2.3cm、厚さ１㎜の楕円形の板で、縁に約0.2㎜間隔で細かな刻みが施されている。装着されていた刀は、刃幅2.7cm、刃棟厚７㎜の刀であったと考えられる。

鏃（図版104、写真図版157　Ｍ６～７）

Ｍ６は鏃の茎部分で先端が欠落しているため、形式は不明である。Ｍ７は鑿刃式の鏃である。

鉄砲玉（図版104、写真図版157　Ｍ８～10）

Ｍ８は直径1.3cm、重さ10gである。Ｍ９は直径1.5cm、重さ15.8gである。M10は直径1.1cm、重さ8.5gである。

小柄（図版105、写真図版158　M11～20・図版106、写真図版158　M21～26）

M11は完存しており、全長23.4cm、刃部の最大幅1.2cm、厚さ２㎜、茎長は9.1cmを測る。柄部の地板部分には魚子文と草花の模様が施されている。M12は全長20.2cm、刃部の最大幅は1.3cm、厚さ２㎜、茎長は8.2cmを測る。柄部には目釘孔が１カ所開けられている。孔の直径は２㎜を測る。柄部は半分が残存しており、刀の茎部の周りには木質が残存している。M13は刀身のみ残存している。全長21.3cm、刃部の最大幅1.3cm、厚さ３㎜、茎長は7.9cmを測る。M14は鋒部が欠落している。残存長は20.8cm、刃部の最大幅1.3cm、厚さ３㎜、茎長は8.4cmを測る。M15は鋒部がわずかには欠落している。残存長は20.5cm、刃部の最大幅1.2cm、厚さ２㎜、茎長は９cmを測る。M16は刀身部のみが完存しており、全長20cm、刃部の最大幅1.3cm、厚さ３㎜、茎長は8.2cmを測る。M17は鋒部が欠落しており、残存長16.3cm、刃部の最大幅は1.2cm、厚さ２㎜、茎長は8.3cmを測る。地板部分には草花の模様が施されている。M18は鋒部が欠落しており、残存長19.3cm、刃部の最大幅は1.5cm、厚さ３㎜、茎長は6.3cmを測る。M19は茎部を折り曲げられた状態で出土している。全長14.8cm、刃部の最大幅1.2cm、厚さ３㎜、茎長は4.5cmを測る。M20は鋒部と茎部の大半が欠落している。残存長は12.5cm、刃部の最大幅は1.1cm、厚さ2.5㎜を測る。M21は完存しているが、かなり使い込まれた状態で、刃部がすり減って入る。全長12.3cm、刃部の最大幅は1.4cm、厚さ３㎜、茎長は5.5cmを測る。M22は鋒部がわずかには欠落している。残存長は13.5cm、刃部の最大幅1.4cm、厚さ３㎜、茎長は8.2cmを測る。M23は柄部のみ残存している。全長9.8cm、幅1.4cm、厚さ５㎜を測る。目釘孔が穿たれている。M24は柄部のみ残存している。全長9.3cm、幅1.6cm、

厚さ４㎜を測る。中に茎部のみが残存する。M25は柄部のみ残存している。全長9.7㎝、幅1.5㎝、厚さ４㎜を測る。底部付近に×字状の孔が穿たれている。M26は柄部の底部のみが残存している。内部には茎部が残っている。残存長は4.2㎝、幅1.3㎝、厚さ４㎜を測る。

笄（図版106、写真図版158　M27～28）

M27は竿部のみが残存している。残存長は11.9㎝、最大幅は1.1㎝、厚みは２㎜を測る。M28は完存している。全長は21.1㎝、胴部の最大幅は1.3㎝、厚みは３㎜を測る。地板部分には透かし状の溝が有る方形区画が有り周囲に魚子文を施している。

前立（図版106、写真図版159　M29）

三鍬形前立の立剣部で全長７㎝、最大幅2.6㎝、厚み１㎜を測る。茎部分に甲へ取り付け用の方形の孔が穿たれている。孔の１辺は２㎜を測る。

鍬形台（図版106、写真図版159　M30）

三鍬形の鍬形台で長さ10.9㎝、幅３㎝を測る。真ん中には祓立を固定するための長辺７㎜、短辺５㎜の方形の孔が穿たれ、左右には鍬形固定用の直径５㎝の孔が穿たれている。全体は唐草様の枝菊の透かし文が施されている。鍬形台に関しては吉備国際大学文化財学部文化財修復国際協力学科の臼井洋輔教授にコメントをいただいているので第Ⅹ章を参照されたい。

建築材

釘（図版107　M31～48、図版108　M49～74、図版109　M75～91、図版110　M92～108、M111～114、写真図版160・161）

分類は安田善三郎氏、金箱文夫氏の分類によった。M31からM74までは頭巻釘である。M75からM103までは巻頭釘である。M104からM108までは切り釘である。M111は皆折釘である。M112、M113は相釘であるが、M112は錐の先端の可能性もある。M113は扁平な形状の物が真ん中で90度にねじ曲げられた特殊な形状である。M114は飾釘である。頭部が４つの峰を持つ傘型の形状である。

鎹（図版110、写真図版161　M115）

全長11.6㎝、最大幅0.7㎝、厚み３㎜を測る。両端が尖った形状であることから鎹と考えられる。

飾金具（図版110、写真図版161　M116、117）

M116は直径3.2㎝の菊花型で、中心に直径７㎜の孔が穿たれている。M117は一辺1.5㎝の菱形で一辺あたり２条の沈線が中心より周囲に延びる。中心には直径２㎜の孔が穿たれている。

その他金物（図版110　M118～120）

M118はL字型の留め金具である。頭部は六角形の断面で先端部は断面が長方形である。M119は煽り止め、M120は肘坪金物である。

生活具（仏具・香道具・化粧道具　他）

毛抜き（図版111、写真図版161　M121～124）

M121～124は完存している。全長は5.3㎝でほぼ同一の大きさである。

二器（図版111、写真図版161　M125）

口径5.9㎝、高さ2.8㎝、高台は高さ0.4㎝、直径2.8㎝を測る。三条の突帯が巡る。

灰匙（図版111、写真図版161　M129、130）

M129は復元長は15.7㎝、匙部の長さは3.9㎝、最大幅2.8㎝を測る。材質は真鍮である。M130は全長14.7㎝、匙部の長さは3.5㎝、最大幅は1.7㎝を測る。材質は真鍮である。但し年代は不明である。

五徳（図版111、写真図版161　M126）

１／４が残存している小型の五徳である。推定される底径は８㎝、脚の高さは3.3㎝である。

紅皿（図版111、写真図版161　M127）

体部は菊花状で、見込み部を半球状に作り、抉りのある高台と鋲によって留めている。直径は4.8㎝、高さは1.0㎝を測る。

油差し（図版111、写真図版161　M128）

直径7.2㎝、深さ4.2㎝を測る。口縁部が外反する。片口がついている。

火箸（図版112、写真図版162　M131～138・図版113　M139～152）

M131は扁平のC字状の金具をS字状の金具で結んで２本の箸を固定するタイプである。M140は中程より先端近くに、M141は半分ほどに捻りが施されている。M149は断面が六角形で綾杉状の線刻が施されている。M150とM151は全長が15.3㎝と短く帯状の金具から鎖で２本の箸がつながっていたと考えられる。M152は全長15.8㎝で断面が円形の短い目の箸で片方の端部が折り返してある。

調理具・紡績具・工具

鍋（図版114、写真図版163　153～158）

M153は把手である。中央から反対方向に捻りが施されている。M155は端部が外反している。M156は端部が拡張されている。M157は底部に平坦面のあるタイプである。M158は脚がつくタイプであるが本数は不明である。

包丁（図版115、写真図版164　M159、160）

M159は全長28㎝刃部の最大幅4.5㎝、厚さ2.5㎜、茎長6.4㎝を測る。両側に関がつくタイプで茎部に直径５㎜の目釘孔が穿たれていることから腰刀の可能性も考えられる。M160は、全長22.5㎝、刃部の最大幅3.1㎝、厚さ1.5㎜、茎長2.6㎝（残存長）を測る。関は刃の部分のみの片関で、棟がそっている。

火打金（図版115、写真図版164　M161）

M161は全長6.1㎝、高さ、2.3㎝、打撃部の厚さは４㎜を測る。

錐（図版115、写真図版164　M162）

全長20.4㎝、柄の部分の直径は1.3～0.8㎝を測る。先端部は全長2.5㎝で最大幅４㎜の四ツ目錐である。

紡錘具（図版115、写真図版164　M163、164）

M163は先端の鉤状の部分以外はほぼ完存している。棒の部分は全長21.6㎝。傘部の直径は5.5㎝、高さ1.7㎝である。164は傘部のみが残存している。直径は5.2㎝、高さ1.5㎝を測る。

鋏（図版115、写真図版164　M165）

全長14.2㎝、刃部の長さは5.5㎝、握り部分の幅1.6㎝でほぼ完存している。

不明工具（図版115、写真図版164　M166、167）

M166は釣り鐘型の形状をした扁平な鉄製品である。柄の部分に木質が残存することから、ヘラの可能性が考えられる。M167は残存長31.1㎝、柄の部分の長さは17㎝、直径が0.8㎝を測る。鍵の可能性も考えられる。

農耕具

鋤先（図版116、写真図版165　M168、169）

M168は全長29.6cm、幅22.2cmを測り、ほぼ完存していた。平面部に直径２cmの孔が穿たれている。唐鋤の鋤先である。

鎌（図版116、写真図版165　M170）

M170は刃先のわずかを欠損するだけで、ほぼ完存している。刃の長さは18cm、柄の長さは8.3cmを測る。柄の部分には固定用の環と目釘が残存している。

環状製品（図版116、写真図版165　M171、172）

M171は直径2.9cmを測る。M172は直径3.2cmを測る。鎌などの刃部の固定用金具と考えられる。

漁労具

釣針（図版116、写真図版165　M173）

全長7.9cmを測る。糸かけ部が扁平に広がり、針の先端にはアグがつく。

その他

不明品（図版117、写真図版166　M174～190）

M174は片側の端部が曲がり、もう片方の端部は二股に分かれている。全長8.5cm、最大幅1.1cmを測る。M175は片方の端が鉤状に屈曲し、もう一端がヘラ状に平たい形状をしている。全長は13.8cm、ヘラ状部分の最大幅は1.0cmである。M176は片方がヘラ状で孔が穿たれており、反対側の端は柄のような形状である。ヘラ状部の長さは4.5cm、最大幅は1.8cm、孔の直径は0.5cm、柄の部分は長さ8.4cm、幅0.7cm、厚さ0.4cmを測る。M177は針状製品で、折れている。長さは10.3cm、直径２㎜を測る。M178は銅製の棒状製品で全長9.2cm、直径４㎜、断面の形状は円形である。M179、180は棒状製品で、火箸の可能性がある。M179は残存長28.8cm、最大直径は５㎜を測る。断面形は円形である。M180は全長21.9cm、最大径５㎜を測る。M181は用途不明品で全長5.4cm、幅1.1cm、厚さ0.4cmを測る。M182、183は鍋の破片の可能性が考えられる。M184は棒状製品で全長20.3cm、直径６㎜で片方の端部が斜めに整形されている。M185は板状製品で長さ8.0cm、幅2.4cm、厚さ２㎜を測る。長辺の中央の片側にくびれがある。M186は用途不明品で厚さ１㎜の鉄板を鏨状の工具で曲線状に切断して作られている。M187は方形の板に柄のついた形状の製品で、方形部分は長さ2.6cm、幅1.5cm、厚さ４㎜で直径0.9cmの孔が穿たれている。柄の部分は幅、厚さが４㎜を測る。M188は銅製の管状製品である。直径は1.0cm、長さ4.5cmで厚さ1.5㎜の板を巻いてつくられている。M189は銅製の板が曲げられており、復元長は4.3cm、幅1.5cm、厚さ１㎜を測る。飾金具の可能性がある。M190は銅製の細長い板で長さ18.2cm、幅0.9cm、厚さ１㎜を測る。５～６cm間隔で直径３㎜の孔が穿たれている。

銭貨

（図版118　M191～222・図版119　M223～257・図版120　M258～283、写真図版167・168）

銭貨のうち、拓本で図化できたのは93枚である。

開元通寶（M191～204）は唐銭であり、初鋳年は621年である。太平通寶（M205～206）は北宋銭であり、初鋳年代は976年である。淳化元寶（M207）は北宋銭であり、初鋳年は990年である。至道元寶（M208～210）は北宋銭であり、初鋳年は995年である。咸平元寶（M211）は北宋銭であり、初鋳年は998年である。祥符元寶（M212～215）は北宋銭であり、初鋳年は1008年である。天禧通寶（M216）は北宋銭であり、初鋳年は1017年である。天聖元寶（M217～221）は北宋銭であり、初鋳年は1023年である。明道元寶（M222）は北宋銭であり、初鋳年は1032年である。景祐元寶（M223）は北宋銭であり、初鋳年は1034年である。皇宋通寶（M224～227）は北宋銭であり、初鋳年は1038年である。至和元寶（M228～229）は北宋銭であり、初鋳年は1054年である。嘉祐通寶（M230～233）は北宋銭であり、初鋳年は1056年である。治平元寶（M234～235）は北宋銭であり、初鋳年は1064年である。治平通寶（M236）は北宋銭であり、初鋳年は1064年である。熙寧元寶（M237～241）は北宋銭であり、初鋳年は1068年である。元豊通寶（M242～249）は北宋銭であり、初鋳年は1078年である。元祐通寶（M250～257）は北宋銭であり、初鋳年は1086年である。紹聖元寶（M258～260）北宋銭であり、初鋳年は1094年である。元符通寶（M261）は北宋銭であり、初鋳年は1098年である。聖宋元寶（M262～264）は北宋銭であり、初鋳年は1101年である。政和通寶（M265～268）は北宋銭であり、初鋳年は1111年である。宣和通寶（M269）は北宋銭であり、初鋳年は1119年である。淳熙元寶（M270）は南宋銭であり、初鋳年は1174年である。紹熙元寶（M271）は南宋銭であり、初鋳年は1190年である。慶元通寶（M272～273）は南宋銭であり、初鋳年は1195年である。紹定通寶（M274）は南宋銭であり、初鋳年は1228年である。皇宋元寶（M275）は南宋銭であり、初鋳年は1253年である。開慶通寶（M276）は南宋銭であり、初鋳年は1259年である。永楽通寶（M277～280）は明銭であり、初鋳年は1408年である。宣徳通寶（M281）は明銭であり、初鋳年は1433年である。洪順通寶（M282）は後黎銭であり、初鋳年は1509年である。寛永通寶（M283）は本邦銭であり、いわゆる古寛永に分類される。初鋳年は1636年である。

第３節　漆製品・木製品・竹製品

漆製品（図版121～127　写真図版169～178）

椀・皿類（Ｗ１～W170）

①朱漆を内外面に塗布するものA類（Ｗ１～W20）

底部外面は黒漆、以外の内外面に朱漆を施す。Ｗ１は直線的に外方に開くb類の杯である。

Ｗ２～Ｗ９は口縁部が端反りするC類。Ｗ３は全体に厚手の製品である。以外のものは造りが薄く、特にＷ２・４～８は口径・器高の違いを除けば形態は等しく、根来系の漆器と考えられる。Ｗ１～Ｗ４は①３寸、Ｗ５・Ｗ６は③４寸の口径をもつ。底部に『一』・『重』とあることから複数脚でセットになるものであろう。Ｗ７についても同じと考えられる。Ｗ８は⑤５寸の口径をもつ。Ｗ９は高台が踏ん張る。W10～W12は口縁端部を小さな玉縁とするd類である。W10・W11は低い高台に内湾して立ちあがるα形の体部をもつ椀。Ｗ９・W10は④４寸半、W11・12は⑤５寸の口径をもつ。W13は仏具を模倣したと考えられ、体部に凸帯を巡らせる筒型の椀である。W15～W20は内湾するα形の体部に直口するa類の口縁をもち、概ね外側に踏ん張る高台をもつ。W15・W16、W18・19はそれぞれ器高の違いを除け

ば形態は等しく器壁の薄い造りである。W20は高台が低く、口径⑥6寸を測る大振りの椀である。

②黒漆を内外面に塗布するものB類（W22～W31）

W22～W27は内湾する体部に直口する口縁をもち、短い高台をもつ。W28・W29・W30は深く内湾する腰が張ったβ形の体部に直口するa類の口縁をもち、高台は高く、外側に踏ん張る。W28・W29は底部が厚く、高台のロクロ目が顕著な点が特徴である。W31は高台がなく平底、杯（つき）形を呈する。

③内面は朱、外面には黒漆を塗布するものC類（W32～W170）

W32～W37は外方へ直線的に開く体部をもつ個体である。W32はb類の口縁端部上面に面をもつ径3寸の杯である。（皿杯Ⅰ）。W33は外方へ開くb類の口縁部に短い高台1をもつ径5寸の椀である。（椀Ⅲ Ⅰ）。W36・W37は外方へ開くb類の口縁部に短い高台1をもつ径5寸を超える椀である（椀Ⅲ・Ⅳ）。

W38～W103は主に内湾するα形の体部に直口するa類の口縁をもち、短い高台1をもつ個体である。

（皿杯Ⅰ）W38は径3寸半、W39・W40は口径3寸の杯（皿杯Ⅰ）である。W41・W42は径4寸の杯（皿杯Ⅰ）である。

（椀Ⅰ）W43･W44は径4寸の椀Ⅰである。W45～W51は4寸半の椀Ⅰである。W51は腰が張る筒型（β形）の器形をもつ。W52～W55は5寸及び5寸半の椀Ⅰである。

（椀Ⅱ）W57～W74は何れもやや深さのある椀Ⅱである。W57･W58は3寸半、W59～74は5寸の口径をもつ。W65は高台を再加工し削り落している。W74は高台径が小さくやや緩やかに内湾する。W75は5寸半の椀Ⅱである。

（椀Ⅲ）W76～W97は何れも深さのある椀Ⅲである。W76～W88は4寸半、W89～W93は5寸、W94～W97は5寸半の口径をもつ。

（椀Ⅳ）W99～W101は何れも深さのある椀Ⅳである。何れも4寸半の口径をもつ。W104～169は高い高台2をもつ個体である。いずれもa類の口縁をもち、内湾する体部（α形）をもつW104～W132と、腰が張った筒形の体部（β形）をもつW133～W169に分かれる。

（皿杯Ⅰ）W104～107は高台2をもつ杯である。径3寸半を測る。W104は高台外側面にロクロ目が顕著である。

（椀Ⅱ）W108～W111は何れもやや深さのある椀Ⅱである。W108は4寸半、W109～W111は6寸前後の大振りの椀である。W108・W109は高台外側面にロクロ目が顕著である。

（椀Ⅲ）W112～W117は何れも深さのある椀Ⅲである。W112･W113は5寸、W114･W115は5寸半、W116・W117は6寸前後の大振りの椀である。W113は高台外側面にロクロ目が顕著である。

（椀Ⅳ）W118～W126は何れも深さのある椀Ⅳである。W118は3寸半、W119～W121は4寸半、W122～W124は5寸、W125・W126は5寸半である。

（椀Ⅳ～Ⅴ）W127～W132は何れも深さのある椀である。W127～W131は何れもW118～W126に比べ更に深い器形をとる。W127は4寸半、W128は5寸、W129～W131は5寸半の口径である。W132は口径の6割近い深さをもつ4寸半の椀Ⅴである。

W133～W169は腰が張った筒形の体部（β形）をもつ。

（皿杯Ⅰ）W133は高台2をもつ杯である。径3寸半を測る。W134はやや深さのある杯。3寸半の口径を測る。

（椀Ⅲ）W135～W138は何れも深さのある椀Ⅲである。W135･W136は5寸、W137･W138は5寸半、の椀である。W138は高台外側面にロクロ目が顕著である。

（椀Ⅳ）W139～W151は何れも深さのある椀Ⅳである。W139～W142は3寸半、W143は4寸半、W144～W151は5寸の口径である。W146～W153は椀Ⅴに近く、殊に深さのある椀である。

（椀Ⅴ）W152～W154は何れも深さのある椀である。W152・W153は5寸の口径である。W152は高台部分を再加工し、削り落している。W154は高台部分に3方の刳り込みをもつ。4寸足らずの口径をもつ。

W155～170は主に口縁部を欠く個体である。

その他の漆製品

W171は朱漆を塗る。身の可能性を残すが、香合の蓋と考えておく。W172・W173は柄杓である。W172は胴部半ばに凸帯が巡る。いずれも黒漆を塗布しており、茶道具と考えられる。W174は樽形の容器である。底部を欠く。内外面ともに黒漆を塗布する。茶道具の棗と考えられる。W175は漆が認められないが、W174と近似している。ここに含めたW176は竹の節を使用した漆製品である。内外面ともに黒漆を塗布する。茶道具の蓋置きと考えておく。W177は黒漆塗りの注ぎ口の破片である。銚子あるいは湯桶に伴うものと考えられる。W178は黒漆塗り容器の破片と考えられるが、詳らかではない。W179は台座に使用された板と考えられる。極一部に黒漆が残る。用途は不明である。W180は黒漆塗りの杓子の先端である。W181は桶の側板片と考えられる。W182･W183は内外面に黒漆を塗布した桶の底板である。W184～187は箱材の一部である。内外面に黒漆を塗布している。

なお、Ⅷ章北野氏の分析ではW31・W165・W179については漆膜は確認出来なかった。

工具類（図版128～131　写真図版179～182）

漆工具類（W188～W201）

W188～W201は漆工に関わる工具をあげた。W188は刷毛幅が1㎝足らずの細身の刷毛である。W189は刷毛幅が1.5㎝足らずの細身の刷毛である。柄が非常に短く造られている。W191は身を方形に造りだす形状である。刷毛幅が4㎝足らずの製品である。190･191は刷毛を止める糸かがりの孔が先端近くの一列である。W192は身の背を円形に造りだす、刷毛幅が4㎝足らずの製品である。刷毛を止める糸かがりが先端近くと更に内側の2か所で留められている製品である。※印の刻書を施す。W193～W199は身の背を円形に造りだす、刷毛幅が5㎝を測る製品である。刷毛を止める糸かがりが先端近くと内側の2か所で留められている製品である。W200は漆ヘラである。一端に鈍い刃部を造りだしており、中央部付近には糸を巻いた痕跡が黒漆によって残っている。W201は漆が付着した漉し紙である。

ヘラ類（W202～W217）

W202～W204は先端を撥状に加工したヘラである。W205・W206は小刀様の形状をもつ。共に刃部と柄の境を表現している。W207・W208は先端を剣状に尖らせている。W209は一端を細く尖らせており、墨引きの形状をもつ。W210～W214は先端を針状に尖らせている。W210は根元にかえりをもつ木針状の個体である。214は曲物等の再利用と考えられる。W215～W217は先端を針状に尖らせているが、W210～W214と比べ厚みのある材を使用している。W217は根元に穿孔があり、柄杓の柄の先端を加工したものと考えられる。

槌　ヤリガンナ・刀子の鞘・柄他（W218～W230）

W218・W219は木槌の頭もしくは柄頭と考えられる。W220は工具もしくは庖丁などの柄である。W221は手斧などの柄と考えられる。W222･W223は先端に工具等を装着した痕跡がない。W223は下半に握痕があり、2点は太鼓の撥や拍子木の可能性が考えられる。W224は刀子の柄、W225･W226はともに

刀子の鞘である。W227は神奈川県佐助ヶ谷遺跡の例から槍鉋の鞘と考えられる。W228は箱材を再利用したと考えられ、片方に木片を打ちつけ傾斜した台を造り出している。砥石等の台と考えられる。W229･W230は民俗例から鉦たたきの撞木の柄と考えられるものである。W229の先端にある2孔の部分に弓形の木を括りつけ鉦をたたく。

雑具・灯火具（W231～W236）

W231は内面に4個のかまぼこ状の隆起が造り出されている。型押しによって製品を作成するものか。使用目的は不明である。W232～W234は灯明皿の台である。W234は柱のほぞに差し込み使用する。

W235は不明であるが、W232・W233と同様に燈明皿の台と考えられる。W236は火錐臼である。

農具類（図版132・133　写真図版183・184）

横槌（W237・W238）

W237・W238は横槌である。

鍬（W239～W247）

W239～W242は平鍬、W243・W244は馬鍬の頭である。W245・W246は鎌の柄である。刃部を装着する先端には縦に切り込みを入れ、W246には目釘孔があく。W247は形状から鎌などの農・工具の柄と推定されるが、刃部装着の切り込みはなく目釘孔があく。

木槌（W248～W253）

W248～W252は木槌と考えられる製品である。W250は縦に孔があいており糸巻など別用途も考えられる。W253は丸太材を乱雑に加工したもので、一部に孔をあけていることから木槌に加えた。

たが状木製品（W254・W255）

W254・W255は枝を加工し円形あるいは弧状に撓ませた製品である。いずれも両端を薄く削り厚みを減ずる作業を行っている。田下駄の外周に巡らすカンジキ用の部材と考えておく。

紡績具（図版134　写真図版185・186）

綛・糸巻（W256～W259）

W256～W258は綛の部材である。W258は形が小さく芯を通す孔がない。実用品の一部とは考え難い。W259は五角柱の一端に刻み目を入れている。簡易な糸巻と推定しておく。

紡錘車（W260～W270）

円盤様の板の中央に穿孔する物である。W260～W265は円形の円盤の中央に孔があく。紡錘車の一部と考えられる。W262は放射状に墨書きがあり、車輪を象っている。W266は片面には五芒星が刻まれており、他の個体に比べ厚く、中央の孔が大きい。W267・W268は隅丸方形の盤の中央に孔があく。また、W269・W270は8角形に面取りがあり中央に穿孔する。これらは、紡錘車ではなく別用途に使用された可能性も高い。

武具（図版134　写真図版187）

W271は白木の柄、腰刀の柄と考えられる。W272は白木の腰刀の鞘である。下げ緒の環と角返しが削り出されている。形状から鞘を再加工し、刀子の鞘にしたと考えられる。W273は兜の鍬形状の製品である。鍬形作成のための模（ためし）、もしくは加飾前の鍬形の未製品の可能性が考えられる。広島県草戸千軒町遺跡から類例が出土している。

服飾具（図版135～141　写真図版188～201）

櫛（W274～W285）

櫛は何れも白木の横櫛である。W274～W278は歯の間が粗い解き櫛、W279～W285は歯の間が詰まった梳き櫛である。W279は山に黒漆を塗る。何れも山に稜をもつもの、山が平坦なもの、山が台形のものがある。

履物類（W286～W337）

W286～W295は楕円・小判型の連歯下駄である。W286は前壷が左による右足用の下駄である。W287～W295は中央に前壷がある。W296～W303は隅丸方形の連歯下駄である。何れも中央に前壷がある。W296は子供用である。※印の刻書がある。W304は長方形の形状を持つ、方形の連歯下駄である。前歯は独立するが、後歯が独立せず台板と一体化して削り出されている形状である。W305は先端を欠損している。全体に薄く反りあがる形状である。W306～W313は何れも差し歯下駄、なかでも歯が台板を貫通するいわゆる露卯下駄である。W306～W312は楕円･小判型の露卯下駄である。W313は隅丸方形である。W307以外は断面形状が逆台形の台板である。また、歯はW310以外は外側へ踏ん張る台形である。W314は、爪先側に集中して釘が打ちこまれた両歯の下駄である。いわゆる便所下駄の形態をとる。W315～W337は通常の使われ方をする履物（下駄）ではなく、限られた用途を推測させる履物類である。これらの内にはまだ履物類と確定されないものも含まれるが、基本的に歯を持つこと、孔をあける点から履物類に分類した。基本的に10㎝×10㎝前後の小型である。W315～W319は歯がない、いわゆる無歯下駄である。W315・W316は中央に前緒孔をもつ。類例は一乗谷朝倉館遺跡にあり、足裏と草鞋の間に挟んで履く雪下駄である。W317～W336は連歯・差し歯の違いはあるが比較的一辺が短く、多孔の製品である。これらのうち、足跡痕跡が残るW334の例もあるが、前壷が存在しない製品も多く、大人用の下駄を加工した製品も存在する。すべてが子供用とは考え難く、前壷が存在しない製品は足もしくは草鞋などに括りつける可能性も考えておきたい。W317～W319は３孔を主体とした無歯下駄である。W317は小判型、W318・W319は長方形台板の際近くに孔をあける。W320～W324は、いわゆる連歯下駄の台板を再加工し、緒孔を残した製品である。W320・W321は小判型に加工している。やや小型の下駄を加工しており、歯の厚み・歯間・台板の幅ともに法量が小さい。子供あるいは女性用の下駄を加工した可能性が高い。W322は台板の両端を切り落としている。前壷孔は切断に際し一部欠失している。緒孔は３孔ともに小さい。やや小型の下駄を加工しており、歯の厚みが小さい。W323・W324は台板の両端を切り落としている。前壷孔は切断に際し欠失している。使用された下駄は出土例の多い通常の大きさの下駄である。W325は正方形の板に４孔をあけている。孔の位置は四辺に並行してあけられており、田下駄に開けられる位置に近い。２孔を結ぶ紐摺れの痕跡がある。W326・W327は４孔をあけている。孔の位置は四辺に対して、90度の位置にあり、孔は何れも斜めに穿たれている。W326は板の四隅を落とし、歯はない。W327は二隅を落とし、歯が摩耗した痕跡がある。W328～W336は６孔以上の孔がある。その大半は釘穴と考えられる。W328･W329は連歯下駄である。W328の上部中央の孔は前壷、下部の２孔は後壷孔と考えられる。W329は２か所に釘が残る。W330～W333は台座に歯を釘打ちした差し歯（打ち歯）下駄である。６孔以上の孔があるが、これらの台板には緒を据える孔が基本的には見られない。W334には左足裏の痕跡が残る。W335は差し歯（打ち歯）の痕跡がのこる。径のやや大きい孔３か所は緒孔であろう。W337は連歯下駄を半折したものである。W338は小判型の連歯下駄である。歯に下面から釘を打ちつけた痕跡がある。壷孔は存在しない。W317～W336は連歯・差し歯の違いはあるが比較的一

辺が短く、多孔の製品である。これらのうち足跡痕跡が残るW334の例もあるが、壷孔が明確でない製品も含まれる。これらの下駄類の検討をⅩ章で行なった。

食事具（図版142～147　写真図版202～209）

刳りもの食器類（W339～W341）

W339は木製の皿、極一部が残存しているため全体の様相は不明である。内面が丸く隆起している。W340は木地椀である。W341は木地鉢である。

楊枝（W342～W347）

W342は上端を短冊形に収め、下端を刀子様に刃を削り出している。W343･344は上端を短冊形に収め、下端を尖らせる形状である。W345～W347は下端を尖らせ、上端もやや細く削り出している。

箸類（W348～W384）

W348～W382は両端を尖らせた何れも白木のいわゆる両口箸である。箸の全長は21㎝・24㎝・27㎝・30㎝、７寸から10寸の各寸にわたっている。W383は下端を尖らせ、上端を角頭とする片口箸である。

W384は両端を斜めに切り落とした太めの両口箸である。食事用ではなく菜箸などの用途の可能性が考えられる。

小かまぼこ板類（W385～W421）

形態は基本的には、すり身を塗りつける板の部分と、刳り込みをつけて作り出した柄に分かれる。上端は圭頭にするものが殆んどであるが、先端を短冊形（W412）・小刀形（W413）にするものもある。

W385・W386は小型のかまぼこ板である。全長は約10㎝、すり身を塗る部分は約６㎝である。

W388～W413は大型のかまぼこ板である。全長は約17㎝、すり身を塗る部分は約10㎝である。

W414・W415は全長が20㎝近くある。すり身を塗る部分はやや短い。W416～W421は柄の部分を折損している。刃物によって切り折っている。 W406・W408～W410・W416・W418・W419・W421には有機物が接着していた痕跡がある。小かまぼこ（小板かまぼこ）は白身魚を練り、板に塗りつけ炭火で炙って食べるものであるが、食するときに灰に突き刺し汚れた柄の部分を切り取り食膳に供するものとされる。

杓子（W422）

W422は杓子である。

切匙（W423～W468）

図示した切匙の中で中央に孔があくもの（W432・W434・W442・W444・W447・W455・W457・W462・W466）、峰に木釘孔痕があくもの（W461）は何れも足打ち折敷の脚部を再利用したものである。

切匙はその刃部の形態によって大きく３種に分かれる。

①刀形の切匙（W423～W439）

刃と柄の幅がほとんど変わらず、刃部と柄の境が形態的に明瞭でないものを刀形とした。刀に近い形状である。

②中世庖丁形の切匙（W440～W447）

刃部を緩やかに丸く削りだし、柄との境を明瞭にするものをこの時期の庖丁の形である中世庖丁形とした。刃部は幅の細いⅠ類（W440～W443）と、刃部は幅が厚い半月形の刃部をもつⅡ類（W444～W447）に細分できる。

③現代庖丁形の切匙（W448～W468）

刃部の終わりに角をつけ、基部に抉りを入れて削りだし、柄との境を明瞭にするものを現代の庖丁に近い形として、現代庖丁形とした。更に刃部が細身で抉りが鈍角なⅠ類（W449～W458）と、細身で直角に近いⅡ類（W459～W463)、刃幅が厚く、刃部の先端が丸いⅢ類（W464～W468）に細分できる。

杓文字（W469～W486）

杓文字は全長10cmを切る小型のものから全長50cmを超える大型のものまで存在する。

W469～W476は先端を丸く造りだした製品である。この中でW469～W473は幅４cmを切る小品である。

W474～W476は幅８cm前後の製品であり、現在の飯盛りに使用している杓文字に最も近い形状である。

W476は身と柄の取りつき部分を直角に造り出す、移植ゴテの形状である。W477～W486は先端を真直ぐに造り出した製品である。W478・W479は身と柄の取りつき部分を直角に造り出す、幅５cm前後の小品である。W477・W480・W481は幅８cm前後の製品であり、W474～W476と近い大きさの製品である。W482・W483・W486は幅８cm前後の製品であるが全長が長い、また、W485・W484は身幅が広く、全長が長い大型の製品である。大鍋などに使用したと考えられる。

俎板（W487～W490）

再利用された板材のうち顕著なものをあげた。W487は長方形の厚手の板材である。W488･W489は箱材、W490は折敷の底板を再利用している。

容器（図版148～166　写真図版210～227）

折敷（W491～545）

以下にあげるのは、折敷の側板及び底板である。

［長方形の折敷］

W491は長方形の板材である。中央付近に皮とじ孔が４か所開いていることから、蓋と考えられる。W492は一辺８cm四方の板材である。４か所の孔の位置から底板と考えられる。W493は長方形の板材である。３方に孔の痕跡と考えられる窪みが存在する。底板の可能性が高い。W494～W496は長方形の折敷である。W494は心持ち四隅を落とす。側板が残っており、内法は幅15cm・全長24cm・高さ３cm弱を測る。W495・W496は底板のみ残る。ともに隅を落とさない長方形の板である。W497は六角形の板の中央と外縁際に孔が認められる。六角形の折敷の蓋と考えられる。W498～W502は六角形の底板である。これは、亀甲と言われる六角形の折敷である。一辺７cm、内法一辺６cmの大きさがW498についた側板の圧痕から推測できる。

［隅切折敷］

W503～W544は正方形の四隅を落とした、隅切（あるいは角切）の折敷である。折敷は、底板の厚みによって２種存在する。即ち、２mm前後の極薄い経木折敷と、５mm以上の板折敷である。また、出土した折敷は基本的には方形を指向し、その一辺の長さは多岐に亘る。ここでは、一辺の長さによって分けて述べてゆくが、『寸刻み』以下の規格が見られ、便宜上cm単位とする。

方10cmの経木折敷

W503～W510は一辺10cmを指向する経木折敷である。何れも側板を留める孔が、２個づつ２か所に穿たれている。この孔と側板の圧痕から、内法は10cmのものの多くは８cmであったと考えられる。

方11cmの経木折敷

W511～W519は一辺11cmを指向する折敷である。何れも側板を留める孔が、2個づつ3か所に穿たれている。この孔と側板の圧痕から、内法は11cmのものは9cmであったと考えられる。

方17cmの板折敷

W520は一辺17cmを指向する折敷である。何れも側板を留める孔が、3個づつ4か所に穿たれている。この孔と側板の圧痕から、内法15cmであったと考えられる。

方22cmの経木折敷

W521は一辺22cmを指向する折敷である。側板を留める孔が、2個づつ4か所に穿たれていると考えられる。この孔と側板の圧痕から、内法は20cmであったと考えられる。

方24cmの経木折敷

W522･W523は一辺24cmを指向する折敷である。W522は側板を留める孔が、3個づつ4か所に穿たれている。この孔と側板の圧痕から、内法21cmであったと考えられる。

方26cmの経木折敷

W524～W527は一辺26cm を指向する折敷である。W525は側板を留める孔が、2個づつ各隅と一辺の中程に穿たれている。計8か所にあったと考えられ、この孔と側板の圧痕から内法24cmと考えられる。

方27cmの板折敷

W528は一辺27cmを指向する折敷である。W528は側板を留める孔が、2個づつ一辺の中程に穿たれている。この孔と側板の圧痕から、内法は約24cmであったと考えられる。

W529は2次的な加工を受けている。一辺は27cm、他辺は2次加工を受け詳らかではない。あるいは長方形の折敷であった可能性も残る。

方30cmの経木折敷

W530･W533は一辺30cmを指向する折敷である。W530は側板を留める孔が、隅と一辺の中程に認められるが、ない箇所もある。この孔と側板の圧痕から、内法約28cmであったと考えられる。

W533は隅を丸く削りだした板折敷で、破断面に3か所の穿孔跡がある。脚が存在した可能性がある。

その他の折敷

W531･W532は2次加工･破片など形状が詳らかではない折敷片である。W531は2次加工によって一端が斜めに切断されており、丸く削り出した部分もある。2次加工の意図は不明である。

方32cmの板折敷

W534～W538は一辺32cmを指向する折敷である。W534・W536・W537・W538は隅を丸く削りだした板折敷である。

W535は側板を留める孔が、各辺2個づつ2か所に穿たれている。この孔と側板の圧痕から、内法約30cmであったと考えられる。

方33cmの経木折敷

W539は一辺33cmを指向する折敷である。側板を留める孔が、各辺2個づつ2か所に穿たれている。この孔と側板の圧痕から、内法約31cmであったと考えられる。また、内側に3か所の孔が認められることから脚が存在した可能性が高い。

方34cmの板折敷

W540～W547は一辺34cmを指向する隅切折敷である。W540・W543以外は隅を丸く削りだしている。

W542は側板を留める孔が、隅と一辺の中程に認められる。それ以外のものは、側板を留める孔が各辺２個もしくは３個づつ２か所に開く。この孔と側板の圧痕から、内法約32cmであったと考えられる。

その他

W997は折敷の側板（桟）である。

折敷脚部（W548～W568）

W548～W568は折敷につけられた脚である。脚がつく折敷を足打折敷と呼ぶ。足打折敷につける脚は軸孔をあけ軸を通すものと軸孔を持たないものがある。また、折敷本体と固定しないもの、木釘によって接合するもの、樹皮によって綴じるものがある。また、全長は固定する折敷の法量によって８cm～37cmまでの各種出土している。W548～W552は全長８cm前後のもので、軸孔をもち、折敷本体とは固定しないものである。W553は全長約13cm、W554は全長約19.5cm共に軸孔がなく折敷本体と木釘によって固定している。W555・W556は全長約23.5cm、対になる。軸孔に軸が残り、折敷本体と木釘によって固定している。W557・W558・W559・W560・W565・W566・W568は軸孔を中央にあけ、折敷本体と木釘によって固定している。W557・W558は全長27cm。W559・W560・W565・W566・W568は全長29cmである。W559は軸孔を中央にあけ、折敷本体と樹皮によって綴じている。W561・W567は軸孔がなく、折敷本体と木釘によって固定している。W562・W563は全長約31.5cm、細い軸孔を２カ所にあけ、折敷本体とは樹皮によって綴じている。W564は33.0cm 全面に黒漆を塗る。軸孔がなく折敷本体と木釘によって固定する厚手の製品である。W567の全長から、折敷本体では出土していないが、方37cm以上のサイズの足打ち折敷が当遺跡に存在していたことが分かる。

三宝脚部（W569～W575）

W569～W575は三宝の脚である。立方体の形状をとるW569～W572と、台形状に裾が開くW573～W575がある。折敷底板との接合は行わないもしくは上端中央に穿孔を施している。

円形容器の蓋類（W576～W588）

W576～W581は円形の曲物の蓋である。径６cm～12cmに亘る。W582～W585は楕円形の曲物の蓋板と考えられる。W586～W588は中央に一列に釘孔があく円形の板である。鍋類などの蓋と考えられる。

円形容器の身・底板類他　（W589～W611）

W589～W599は円形の曲物の底・身である。W590には柿渋様の黒色塗料が塗布されている。W591は側板に方形の孔が開いている。柄杓の身と考えられる。W600は側面に木釘の痕がなく、桶の底板の可能性が高い。W601は木釘の痕跡が数か所に認められる。桶の底板あるいは蓋の可能性が考えられる。

W602～W605は楕円形の曲物の身あるいは底板と考えられる。W606は側板を留めたと考えられる孔が、各辺２個づつ２か所に穿たれている。また、釘孔が４箇所に認められる。蓋の可能性も考えられる。

W607・W608は方形の刳り込みがあり、脚がはめ込まれていたと考えられる。いわゆる『行器』の底板と考えられる。W610･W611は曲物『行器』に着けられた脚であろう。W609は多数の孔があけられており、蒸籠の底板と考えられる。形状から方形であった可能性が高い。

柄杓類（W612～W622）

柄杓類は身の口径が９cm前後の小径のものと12cm前後の大径のものがある。柄は小径のものは20cm程度、大径のものは45cm前後となる。

結桶類（W623～W644）

出土した結桶類は完全なものはなく、側板である樽と底板が出土している。復元できるものの中で、

高さ（深さ）が口径と同じあるいは超えるものは、W637を除きない。W623は脚が付く部分の樽である。W624・W625は口径に対して深さがない盥あるいは半切り桶である。W643・W644は盥あるいは半切り桶の底部板であろう。W638・W639は手桶の一部である。

把手類（W645～W655）

W645～W650は鍋蓋類の把手である。W651～W655は手桶類の把手である。

栓類（W656～W662）

栓類は円筒形の材が一端に向けて徐々に細くなるもの（W656～W660）と握り部分と差し込み部分に明瞭な違があるもの（W661）、段を造り出すもの（W662）がある。

箱物類ほか（W663～W674）

箱物の部材をあげた。底板の残るW666と、W674以外は何れも蓋もしくは身に伴う側板である。W663･W664･W667は両端が相欠き組みに加工されている。想定される箱は内法で共に約９㎝を測る。W665は箱物の側板である。組み接ぎに加工されている。箱は、一辺約14㎝・高さ約６㎝、内法で約12.5㎝・深さ約５㎝を測る。内容量約781.25CCである。W666は箱物である。相欠き組みに加工されて組み合わされる。箱は一辺約18㎝・高さ約９㎝、内法で約16.5㎝・深さ約８㎝を測る。内容量約2178.00CCである。W665･W666は枡の可能性が考えられる。W671は箱物蓋の側板である。両端が組み接ぎに加工されている。W672は長辺の上下に釘孔が認められる。W673は大型の箱物の側板、高さが10㎝足らずの浅い器形である。W674は台形の材の一面を刳りぬいている。砥石台などの可能性も考えられる。

槽類（W675～W680）

W675～W677は平面形が楕円形を指向する個体である。全体に薄い造りである。

W678は残存割合が不明のため全体の形状は不明であるが、内面底部の形状から隅丸方形の可能性がある。比較的厚い造りである。W679・W680は短辺を直に切り落とし、箱状の形態をとる。

籠編み物類・縄類（図版167～169　写真図版228～230）

笊類（W681～W687）

縁のばらけた個体が多く元の形状を保つものは少ない。ほぼ完形になるW681とW682は楕円形であり、短軸と長軸の割合は１対1.2程度である。笊は短軸方向に幅１㎝前後の竹を使用し、長軸方向には幅５㎜以下の竹を使用して編んでいる点が特徴である。

箕類（W688～W690）

縦軸方向に幅３㎝前後の竹を使用し、横軸方向に幅１㎝以下の竹を使用して編む点が特徴である。

籠類（W691）

縁がばらけ、全体の形状は詳らかではない。縦横軸ともに幅１㎝以下の竹を使用して編む。

畳類（W692）

火災に会い炭化している。全体の形状は詳らかではない。畳表を留めていたと考えられる鉄釘がほぼ同一地点から出土している。

縄類（W693～W695）

藁縄類である。何れも３本の細縄を１本に縒りあげている。

遊戯具（図版170　写真図版231）

羽子板（W696～W705）

全長21cm～35cmの大きさがある。W696･W702では石などを打撃した痕跡が残る。また、W701･W703では穿孔・釘孔があり、更に夥しい刃物痕が着けられていることから、箱材を俎板に転用し、更に羽子板に加工したことが分かる。

打杖球（W706）

一部を欠損するが、球形を指向したものである。打杖の球と考えておく。

将棋駒（W707）

文字の書き込みがないため栓の可能性が残るが、圭頭状に丁寧に加工されていることから将棋の駒とした。細身の無文字の駒は駿府城跡からも出土している。

祭祀具（図版171・172　写真図版232～234）

墨書・彩色した木彫り猿（W708）

W708は、猿の木彫り人形である。目鼻及び背中の毛を墨による点描で表現している。顔面に赤色顔料が塗られていることから猿と判断した。

墨書絵馬（W709・W710）

W709･W710は墨書の線描によって馬が描かれている。何れも経木に書かれており、W709は墨書の後隅落としなどの加工が施されている。

形代類

人形（W711～W713）

W711･W712は立体の人形と考えられる。共に頭部に烏帽子を表現している。W713は側面人形の脚部である。

鳥形（W714～W716）

W714・W715・W716は鳥形と考えられる。

その他の形代類（W717～W720）

W717～W720は欠損部があるため不明であるが、剣形や舟形などの一部の可能性があるものである。

刀形（W721～W737）

W721・W722は棒状の材を削り出した立体的な刀形である。W729・W730は刃部と柄の区別を表現している。

陽物（W738～W745）

W738は比較的扁平な形状をしており、基部には方形の孔があく。

斎串（W746～W753）

幅３㎜前後の細いひご状の斎串である。全長20cm前後と32cm前後の大小２種がある。共に上端に縦割りの切れ目を入れ、下端を削り尖らせている。図示した８点は纏まって出土している。太さ・長さに違いはあるが、砂入遺跡分類D類の斎串の系譜を引くものと考えられる。

建築部材（図版173～179　写真図版235～240）

円柱・円桁類（W754～W759）

W754は角枘孔を持ち、楔を打ち込む溝が掘られている。先端に向けて扁平となる部材である。円桁材の先端と考えられるが、W756の柱頭の可能性も残る。W755～W759は円柱である。W757は天地が定かではない。W760は下端を尖らせた杭であるが、上端付近に角枘孔があることから元々は円桁材と考えられる。

角柱類（W761～W766）

何れも角柱もしくは角柱の残材（W766）と考えられる。W761は上下端近くに貫孔、２面に角枘孔が45cm間隔であく。W762･764は図示した下端が上部である可能性も高い。W762は柱頭に桁を落としこむ仕口を掘り込む。W764は柱頭に角枘造り出す。貫孔と直交して込栓の孔があく。W765は天地が定かではない。貫材の孔が交叉してあけられている。桁束柱などの可能性もある。

根太類ほか（W767～W771）

W767･W768は根太材である。W767は２本の材を並べて使用しており柱を据える箇所を削り凹面を造り出している。外面に枘孔が残ることから建築部材を転用した可能性が高い。想定される柱の間隔は60cmである。W769･W770は共に手斧痕跡を多く残す部材である。W771は貫材と考えられる。サイズはW765と合致する。

板材ほか（W772～W794）

主に平板材をあげた。W772・W773・W774・W779・W780は貫材もしくは貫材を切断したものである可能性が考えられる。W775は一端が薄く削られており、隙間などに差し込まれた痕跡が認められる。床板もしくは板壁材の可能性が考えられる。W777は一端に穿孔がある。壁材などの可能性が考えられる。W776はまな板に再利用されたと考えられる。一端には枘が存在する。他端は不明である。W781は一面に方形の溝を彫り込んだ建築部材の切断材と考えられる。一端に枘状の突起があるが、完全には加工されてはいないことから切れ端であろう。壁板を差し込む柱材の一部と考えておく。W782・W783は柱材の先端（枘）部分を切断したものと考えられる。W784については先端に向かって細くなる。枘をもつ建築部材を切断したものと考えられる。W785・W786は断面六角形、W787は円形の杭である。

W788は鎌首形の木製品である。鎌継ぎの枘が折損したものか。W789は鼻栓と考えられる。

W790～W794は厚さ２cm前後の壁材に使用されたと考えられる長方形の板材である。

建具類（W795～W800）

W795～W800は格子戸・蔀の格子の部材である。W795は横桟と考えられる。格子子に止める釘孔があく。W796についても幅・厚みから横桟と考えておく。W797・W798は格子子である。W797は凸部に釘孔があく。戸板に打ちつけたものであろう。W798は凹部に釘孔がある。横桟を留めたものと理解できる。W799は先端にL字形の平枘、他端は欠損している。枘を縦框にはめ込む横桟の先端と考えられる。W800は断面が縦長の部材である。佐助ヶ谷遺跡では障子戸の部材の可能性を指摘している。W801は溝と釘孔の存在から建具の可能性を考えておくが、具体的には不明である。W802・W803は等間隔に切れ込みをいれ、外反する曲面を出した部材である。部分的に留め釘が残る。建具の可能性を考えておくが、具体的には不明である。

用途不明品（図版180～182　写真図版241～243）

単体で使用する可能性があり性格が明確ではないものをあげる。

木札状木製品類（W804～W810）

いずれも薄板を木札状に整形しているが、墨痕跡はなく、両端の頭を裁断している。また木釘痕跡のあるものも存在する。形代の可能性もある。

箱形加工品（W811）

直方体の内部を箱型に加工しているが、上下・側面の 3 方向に窓があけられている。

蛇尾型木製品（W812）

ベルトの蛇尾様の形状をするが、白木の製品である。 4 か所の穿孔があり、布・革などに縫いとめられていた可能性がある。

蓋状加工品（W813・W814）

面取りを行った板材である。W814は上部に貫通しない孔がある。

方形加工板材（W815～W825）

一辺が10㎝以内の方形・長方形の板材である。大半は経木であるが、一部に板材も含む。刃物痕・木釘・釘孔・穿孔を伴うものもあり、折敷・曲物などの加工時にでた残欠や、折敷・曲物などの製品の再加工時にでた廃材などが含まれていると考えられる。

模様をもつ加工品（W826～W828）

W826は両端を塔婆状に刻みをいれた薄板製品である。内側に 2 か所の孔がある。W827は墨書の縞模様、刺突、刃物による毛引きを施した角材である。W828は刻み目を施す方の一端が管状になっていた可能性がある。他端は削りを施す。

自在型木製品（W829・W830）

W829は小型の自在の可能性がある。W830は両側の穿孔が四角く小さい。釘孔の可能性が高い。

火処具用部材（W831～W834）

W831･W832は、佐助ヶ谷遺跡の例から付け木の可能性がある木片である。W833･W834は刃物によって局所的に木片を抉りとっており、付け木に使用した可能性を残す。W834の樹種は軟質のタカノツメであり、付け木・マッチなどに使用される事例がある。

球状加工木片（W836・W837）

多方向から面取りを行っているが、球体となっていない木片である。

その他（W835・W838・W839）

W835は紐括り状の突起を造り出す。運搬時に使用した可能性が考えられる。W838･W839は柱材などの切片の可能性が考えられるが、W839には刃物痕跡がある。

柄類（W840～W853）

工具等の柄として使用された可能性が高い棒状木製品である。W840～W842は両端に削りをほどこした角材である。W842は一面に刻み目をつけており、計量具の一部である可能性もあるが、刻み目の間隔が均等ではない。W843～W845は一端の径が太くなる製品である。W846・W847はヘラ状に加工している。W848は最大径が中央にある棒である。W850は断面長方形の柄である。折損した部分が一部残る。

用途不明部材（図版183～186　写真図版244～246）

W854～874は箱物や細工もの･構造物などの一部と考えられるが用途不明なものである。W855･W856は中央の孔の配置から推して十字に組み合わせて使用していた可能性が考えられる。W859～W862は方･円･三角の透かしが入る加工材である。W869は靴べら状の部材の基部に木楔が充填されている。W870は雲形の飾り板である。近似した形状のものは大坂城跡の出土例にある。

枘・鉄釘などを伴う部材（W875～W884）

枘・枘孔・釘打ちを伴う部材を集めた。建具・家具あるいは建築物を構成する一部と考えられるが、具体的には不明である。W884は台形の板材の面に釘が打たれている。側面にはない。

その他の部材（W885～W890）

W885は形状からは大型の桶類の把手の可能性が高い。中央部の側面に凹部を削りだしており、縄などを結びつけた可能性がある。W886は両端を薄く削った板材である。W888は内部をコノ字形に落とし両端に厚みを残した板材である。W889は裏面に釘様の圧痕が残る栓状の木片である。W890は面取りを行った棒材に溝を彫る。先端に方形の孔があく。

切断材（W891～W896）

W891～W893は側面にアールをもつ板材。枘・釘孔・面取りなど加工がある。W894・W895は角材の切れ端である。W894は工具の柄を切断したものか。W896は丸太から板を切り出した残欠か。

竹製品（図版187　写真図版247）

竹製品は、籠編み物類については先に述べたが、ここではその他の竹製品について述べておく。W897は先端を尖らせた竹枝を細身の竹筒を鞘として収納した工具である。竹枝の先端には赤色塗料が付着しており、墨引きに使用されたと考えられる。W898は非常に短いが、先端を尖らせており、竹篦と考えられる。W899は刀子状に加工された製品である。切先及び刃部を片刃（切刃）に表現しており、節を柄との境に表現している。柄部分には２か所に切り込みをいれている。造りが精工であり菓子切りなどの用途を想定しておきたい。W900･W901は、細身の竹の一節を加工した製品である。節を抜き、W900は一端の側面に孔をあけている。鳴子などに使用した可能性が考えられよう。W901は両端を丸く加工している。W902は真竹の一節を加工した製品。底部の節を残し容器としているが具体的な使用法は不明である。W903は真竹の一節を加工した筒状の製品である。節を抜き底はない。一方を２方向から刃を入れ山形に切断している。具体的な使用法は不明である。W904は真竹の一端を斜めに切り落としている。他端は水平に切断しており加工意図は不明である。あるいは加工屑の可能性もある。

江戸時代及び下層の木製品（図版189～193　写真図版248～250）

江戸時代（W960・W961）

W960は折敷の一部と考えられる。W961は表面に黒漆を塗った箱物の側板である。３枚組み接ぎを行い、木釘によって留めている。２点は江戸時代の層位から出土したが、下層から遊離した遺物の可能性が高い。

下層の木製品（W962～W995）

祭祀具

W962は馬形、鞍の表現はない。W963・W964は人形・人形の脚。W965～W967は斎串である。

紡績具

W968は紡錘車の破片と考えられる。

容器

W969は朱漆杯である。W970は柄杓である。柄を短く切断している。W971・972は隅丸方形を指向する大型の曲物類の底板と考えられる。W973は中央に円形の孔を穿つ蓋板である。

W974は籾掬いあるいは漁具の閼伽掬いの柄と考えられる。

農具等

W975は両端を削り、紐かけ部分を造り出した棒である。天秤棒等の用途にはやや全長が短い。W976は鍬等農工具の柄である。W977～W981は田下駄である。W977・W978は砂入遺跡分類におけるA類４孔式、W979はD類抉れ留めタイプに分類される。W980・W981は枠型田下駄、いわゆる大足である。

部材

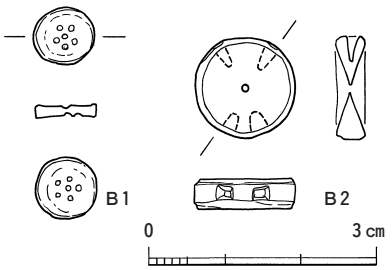
W982は両端部近くに方形の穿孔があり、腰掛けの座板と考えられる。W983～W987は一端近くに穿孔もしくは柄を切る板材である。W983は上端を、W984～W986は下端を２次的に切断されている可能性が高い。W984・W986は長辺に沿って穿孔があり、壁材（おそらく横方向に使用した）である可能性が高い。その他の板材についても壁もしくは床板材の可能性が考えられる。W988は２つの隅を削る板材である。性格は不明である。W989は断面L字形の材である。用途は不明である。W990は一端は方形に加工し、他端には未貫通の柄孔を切る。材の大半は断面が裁頭三角形である。棟木などの可能性が考えられるが、不明である。W991は一端に抉りを入れた棒である。用途は不明である。W992･W993は一端を尖らせた棒である。用途は不明である。W994は両端を尖らせた札状の製品である。中央部に擦痕がある。用途は不明である。W995は付け札状の製品である。墨痕は存在しない。

第４節　骨角製品

双六駒石他（第６図、写真図版156　Ｂ１・Ｂ２）

Ｂ１は直径1.5cm、厚さ3.5㎜を測る。表裏両面に直径1.2㎜、深さ１㎜の６個の孔が刳られている。

Ｂ２は直径1.7cm、厚さ８㎜を測る。側面に直一辺２㎜、深さ３～７㎜の孔が４カ所、穿たれている。用途は不明である。



第６図　骨角製品

第５節　石製品

碁石（図版96、写真図版150　Ｓ１～S22）

Ｓ１～S22は石製の黒石である。大きさは1.6～2.1cmである。色調は褐灰～暗灰色を呈する。

硯（図版96、写真図版150　S23～S28）

S23は長さ7.2cm、幅2.5cm、厚さ１cmを測る。海部の頭部は半円形を呈し、深さは５㎜である。S24は長さ6.9cm、幅3.3cm、厚さ0.9cmを測る。海部の深さは５㎜である。S25は縁部分が欠損しており、残存長6.4cm、残存幅３cm、厚さ1.3cmを測る。S26は長さ9.1cm、幅4.9cm、厚さ１cmを測る。海部の深さは７㎜である。陸部の中央も使い込まれて凹状に凹んでいる。縁部分には漆継ぎの痕跡が残っている。S27は長さ2.7cm、幅3.9cm、厚さ0.9cmを測る。硯の破片を再加工して小さな硯に作り替えている。S28は長さ12.3cm、幅4.6cm、厚さ1.5cmを測る。表裏両面に陸部の凹みが見られる。

石臼（図版96、写真図版150　S29～S30）

S30は茶臼である。復元径は40cm、高さ40cm、上面に臼部を１cmの高さで削りだし、周囲に深さ２cmの受皿を巡らしている下臼である。摺り面は溝が11条、８分割で配されている。心棒孔は一辺約２cmの方形を呈す。残存部分だけでも３つに分割しているのを漆でつなぎ合わせてある。S29は挽臼である。復元直径は19cm、残存高は15.8cmで、上面、下面ともほとんどが欠損している。

砥石（図版97～101、写真図版151～155　S31～S63）

形態からは小さく短冊状に整形されたものと大きく長方体に整形されたもの、不定形のまま使用している物に分類できる。S31～S39、S41～S44、S46～S48は短冊状に加工したものかその破片と考えられる。S40とS45は直方体のまま使用されている。S50～S63までは不定形のまま使用している。また、石材の粒子から仕上砥石と荒砥石に分けられる。仕上砥石はS31～S35、S37～S41、S43～S49、S60、荒砥石はS36、S42、S50～S59、S61～S63である。

小型石斧（図版64、写真図版155　S64）

長さ4.2cm、幅3.3cm、厚さ0.9cmを測る。全体がよく研磨されている。蛤状の刃には使用痕と思われる欠けが７カ所認められる。

石錘（図版102、写真図版155　S66）

S66は不定な空豆型を呈し、最大径8.5cm、最大幅4.7cm、厚さ1.7cm、重さ82.5gを測る。長径の中央に抉りがある。また、直径８mmの孔が穿たれている。

打製石鏃（図版102、写真図版155　S67）

平基式で長さ2.4cm、幅1.4cm、厚さ0.6cm、重さ1.9gを測る。材質は石英である。

剥片（図版102、写真図版155　S68）

翼状のサヌカイトの剥片である。

不明品（図版102、写真図版155　S65、S69～S73）

S65は長径5.2cm、短径4.6cm、厚さ1.6cmの楕円形の製品である。一部に打ち欠いた痕跡が残る。S69は底辺3.7cm、高さ3.8cm、厚さ６mmの三角形を呈する。S70は長さ7.3cm、幅4.8cm、厚さ3.6cmを測り、３面の削りだした面を持つ。S71は長さ5.6cm、幅5.3cm、厚さ5.3cmの軟質の凝灰岩である。砥石として使用する目的で切り出された半加工品の可能性がある。S72は残存長は11.6cm、幅8.0cm、厚さ5.0cmを測る。上面の平坦面が良く摺り減っており、石臼の一部と見られる。S73は長さ13cm、幅8.5cm、厚さ5.6cmを測る。

第６節　石造品

宝篋印塔（図版103、写真図版156　S74）

宝篋印塔の塔身部である。高さ28.4cm、最大径13.1cm、重さ6.5kgを測る。塔身部には九つの環が底部には蓮弁が刻まれている。

五輪塔（図版103、写真図版156　S75、S77）

S75は五輪塔の水輪である。花崗岩製で上径9.6cm、最大径19.5cm、下径8.7cm、高さは15.8cm、重量は7.0kgを測る。梵字「𑖀」が刻まれている。S77は五輪塔の地輪である。長さ22.5cm、幅24.5cm、厚さ21.5cmを測る。梵字「𑖪」が刻まれている。

墓石（図版103、写真図版156　S76）

高さ22.6cm、幅19.8cm、厚さ11.5cm、重さ10kgを測る。上端中央に梵字が刻まれているが判読できな

かった。

礎石（図版103　S78～S79）

S78は長さ43cm、幅24.8cm、厚さ13cm、重さ30.8kgを測る。片面には「中」の刻印が施されている。S79は楕円形を呈し、長径42.8cm、短径33.3cm、厚さ16.2cm、重さ42.4gを測る。

第７節　宮内堀脇遺跡Ⅱ出土の刷毛について

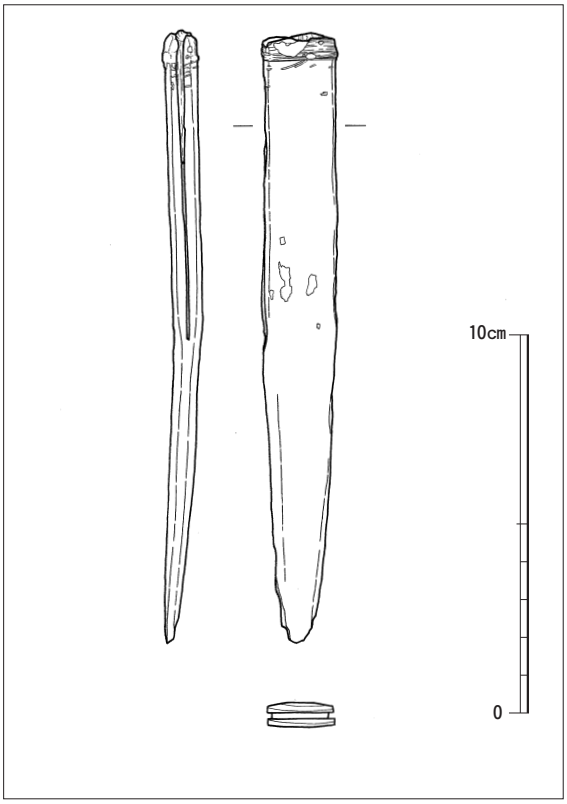
この頁で報告する遺物は、平成10年度に実施した宮内堀脇遺跡の発掘調査で出土した遺物である。本来は2007年３月刊の『宮内堀脇遺跡Ⅱ（兵庫県文化財調査報告　第311冊）』に掲載されるべき遺物であるが、報告書刊行後に未報告遺物の整理をしていた際に確認した遺物である。A地区の遺構検出面で、遺構精査時に出土している。

扁平な板材の先端に割れ目を入れて毛をはさんでいる。割れ目は先端から刷毛の中央部に及んでおり、毛は先端から約3.5cmの深さまではさみ込まれている。先端部にはさんだ毛を止めるのに、糸状の物を巻いて固定している。糸の１本ずつの単位の認識は困難であり、また漆に混ぜられたと考えられる赤い顔料の色が沈着している。また刷毛の先端部を中心に漆が付着している。特に黒漆と赤漆が重なるように残存しており、またその他の部位にも黒漆が部分的に付着している。これらのことから、この遺物が漆塗りに用いたことが想定される。

法量は全長16.1cm、最大幅2.1cm、厚さ0.7cmで、木取りは板目取りである。

参考文献

鈴木　敬二　「第１章　調査の経過」『宮内堀脇遺跡Ⅱ（兵庫県文化財調査報告　第311冊）』兵庫県教育委員会編　2007年３月　p.p.１－p.p.２



第７図　遺物実測図

写真１　遺物写真

第Ⅶ章　文字資料

本遺跡における文字類が記載された遺物は、木製品に墨書されたもの（木簡類）と土器類に墨書されたもの（墨書土器）があり、両者共に、一般の遺跡に比べ出土数量が多い。木簡・墨書土器間には関連する墨書が記されていることもあり、文字資料の章立てを行い以下述べてゆく。

第１節　墨書土器類

墨書土器類は、若干、磁器類の高台裏に記されるものも存在するが、大半は土師器皿類への墨書であり、その大半は、96年度・97年度に外堀内から出土した人名墨書土器群である。人名墨書土器は、その論拠は後述するが、仏事（追善供養）に使用されたと推断でき、書かれた人名の多くは、遺跡が所在する宮内地区に居住した人々の名であった蓋然性が極めて高い。この点が特徴としてあげられる。また、人名と共に月日や『無縁』『法界』『六親眷属』など仏事に使用される文言が含まれていることも特徴である。当宮内地区所在の総持寺には、墨書土器が廃棄されるよりも30年以上前に作成された寺社再建に伴う奉加帳（1535年）が現存している。奉加帳に記載された1500名にのぼる人々の大半は宮内地区の住人とみられている。その中の幾人かが没後、追善供養され墨書土器にその名が再び記されている可能性が極めて高い。その点が墨書土器に記された人名を理解する点での視点となっている。

1.95年度出土の墨書土器（図版194　写真図版251）

95年度出土の墨書土器の大半は細片で出土しており、文意の分かるものは極めてすくない。1001・1002は第１面上層から出土している。共に内面に墨痕が付着するのみである。1003・1004はSD52002から出土した。共に外面底部に墨書がある。1003は『ほん□』、1004は故意に筆によって文字を消したと考えられ、釈読はできなかった。1005～1007はSD52008から出土している。1005は溝下層から出土しており、第３面に対応する可能性がある。『すいうん』と記される。法名か。1006は白磁皿高台裏に『上』と記されている。1007は内面に墨痕が付着する。1008～1010は第２・３面間から出土している。いずれも墨痕・墨書があるが細片のため内容は不明である。1011～1013・1015・1016は土師器皿の外面に1014は内面に墨書がある。何れも細片のため内容は不明である。1011はSD53012から出土している。外面に２行の文字が認められるが、内容は不明である。1017～1019は土師器皿の内面に墨書がある。何れも細片のため内容は不明である。1020～1022は土師器皿の外面に墨書がある。1021は五芒星を外面に４か所記している。1023は白磁皿高台裏に『三』と記している。1024・1025は内面に墨書がある。1025は内面に複数行の文字と文字を囲む円形の縁取り線が記されていると推測されるが、細片のため全容は不明である。

2．人名墨書土器群

1026以下は、外堀に投棄された人名墨書土器群である。土器群は、大きく96年度のSD67001において一群（F群）、97年度のSD74001において三群（A・B・C群）、下層のSD75001において三群（B・C・E群）に分かれることは先述している。以下、まず墨書内容を中心に述べてゆく。

1026はSD62001から出土した。文面から、下層の墨書土器群から遊離した個体と考えられる。４寸径の土師器皿の内面に５名の人名が記されている。いずれも法名ではない。1027はSD66001から出土した。

文面から下層の墨書土器群から遊離した個体と考えられる。4寸径の土師器皿の内面に『ほうせい』と記されている。法名と考えられる。

SD67001－F群出土の墨書土器　（図版195～197　写真図版252～255）

1028～1073は土師器皿内面に一行の墨書を記すものである。1028～1065・1068～1070は法名を記している。1028～1034は土師器皿の内面に『ほうせい』と記されている。1028～1031の4点は3寸径、1032～1034の3点は4寸径の土師器皿である。遊離した1027を加へ、3寸径4点、4寸径4点の土師器皿に『ほうせい』と記し、廃棄した可能性が考えられる。1035～1040は土師器皿の内面に『そうけん』と記されている。1035～1037の3点は3寸径、1038～1040の3点は4寸径の土師器皿である。3寸径3点、4寸径3点の土師器皿に『そうけん』と記し、廃棄した可能性が考えられる。1041～1046は土師器皿の内面に『ちよけい』と記されている。1041～1043の3点は3寸径、1045はやや径が大きいが、1044～1046の3点は4寸径の土師器皿と考えられ。3寸径3点、4寸径3点の土師器皿に『ちよけい』と記し、廃棄した可能性が考えられる。1047～1050は土師器皿の内面に『めうけん』と記されている。1047・1048の2点は3寸径（1048は3寸5分か）、1049･1050の2点は4寸径の土師器皿と考えられる。3寸径2点、4寸径2点の土師器皿に『めうけん』と記し、廃棄した可能性が考えられる。1051～1053は土師器皿の内面に『めうかう』と記されている。1051･1052の2点は3寸5分、1053は4寸5分径の土師器皿と考えられる。『めうけん』の例から推して、4寸5分径の皿が一枚欠失している可能性が考えられる。1054･1055は土師器皿の内面に『たふゆう』と記されている。2点は共に3寸5分皿である。2枚を単位に廃棄した可能性が考えられる。『たふゆう』は後に述べる位牌『道祐禅門』と同一人物の可能性が高いと考えられる。1056･1057は土師器皿の内面に『ちゆけい』と記されている。1056は3寸5分皿、1057は4寸5分皿である。小径の皿1枚と中径の皿1枚を単位に廃棄した可能性が考えられる。1058・1059は土師器皿の内面に『めうきん』と記されている。1058は3寸5分皿、1059は4寸5分皿である。『ちゆけい』と同じく小径の皿1枚と中径の皿1枚を単位に廃棄した可能性が考えられる。1060・1061は土師器皿の内面に『めうしゆん』と記されている。2点は共に4寸皿である。中径の皿2枚を単位に廃棄した可能性が考えられる。1062・1063は土師器皿の内面に『めうせん』と記されている。法名と考えられる。2点は共に4寸皿である。『めうしゆん』と同じく中径の皿2枚を単位に廃棄した可能性が考えられる。1064は土師器皿の内面に『しゆけい』と記されている。4寸皿一枚を単位としたものか。1065は土師器皿の内面に『めうゑん』と記されている。『しゆけい』と同じく4寸皿一枚を単位としたものか。1066は土師器皿の内面に『おこのへ』と記されている。3寸5分皿である。『おこのへ』は97年度の土師器皿にも記載されているが、意味は不明である。1067は土師器皿の内面に『むゑん』と記される4寸皿である。『むゑん』は『無縁』であろう。1068・1069・1070は文字の一部が欠損し文言が明らかではないが、法名を記したと推測できるものである。1068は土師器皿の内面に『せい』の文字が残る3寸皿である。欠損した文字は1・2文字と考えられ、『ほうせい』の可能性が考えられる。1069は土師器皿の内面に『□い』の文字が残る3寸5分皿である。□の文字は『け』の残欠と考えられ、その他の欠失した文字は1・2文字分であろう。『ちゆけい』あるいは『しゆけい』として、1056･1057と同じく、1064とセットで廃棄された可能性を考えておきたい。1070は土師器皿の内面に『そう□』の文字が残る4寸皿である。□の文字は『け』の残欠と考えられ、その他の欠失した文字は1・2文字分であろう。他の墨書土器の法名からみて、『そうけい』あるいは『そうけん』の可能性が高い。1071は土師器皿の内面に『ほ□かい』

の文字が残る4寸皿である。□の文字は『う』の残欠と考えられ、『ほうかい』の可能性が高い。『ほうかい』は法名の可能性もあるが、仏語『法界』を示すものと考えておく。1067と対をなして、『無縁法界』となる。『むゑんほうかい』の墨書は1109にある。1072は『ち』一文字を記している。意味は不明である。1073は『□う』の文字が残る4寸皿である。□の文字は『ほ』の残欠と考えられ、その他の欠失した文字は1・2文字分であろう。3文字目に『せ』の残欠と考えられる横棒の一部があること、他の墨書土器の法名からみて、『ほうせい』の可能性を考えておきたい。1074は土師器皿内面に二行の墨書を記すものである。5寸皿の内面に『ほん上はう　うつか』と記されている。『ほん上はう』は本上坊あるいは本上房と見て、塔頭の名とも考えられる。『うつか』は、『菟束』姓をさすと考えられる。旧美方郡には鬼塚村があり但馬国大田文には菟束庄　下司菟束左衛門入道の名が記載されている。1075は土師器皿内面に三行の墨書を記すものである。4寸皿の内面に『ミツ□□　めうせん　めうゑん』と記されている。ミツ□□は文字の配置から欠失した文字は2・3文字分であろう。『めうせん』・『めうゑん』は1枚1名で記された1062・1063、1065にも記されている。1076・1077は土師器皿内面に四行・四名の墨書を記すものである。1076は土師器皿内面に四行の墨書を記すものである。4寸半皿の内面に『ゑむら　こせう　たうけ□　めうゑ□』と記されている。『ゑむら』は姓か。『こせう』は小姓と考えられる。他の2行は法名と考えられ、たうけい・めうゑんの可能性が高い。1077は土師器皿内面に四行の墨書を記すものである。4寸半皿の内面に『とう二ら　又らく　こうはい　とうひやうへ』と記されている。『とう二ら』・『又らく』・『とうひやうへ』はとう（藤）二郎・又六・とう（藤）兵衛であろう。『こうはい』は法名と考えれば、紅梅などの字が当たる可能性が考えられる。1078は半分が欠けているため、明確ではないが、墨書の位置から推して1077と同じく4行・4名の墨書を記したものと考えられる。4寸皿の内面に『めう□□　おもち　こせう』と記されている。めう□□は法名であろう。『おもち』は人名か餅を意味するものか判然としないが、人名と連記されていることから人名である可能性は高い。『こせう』は1076にも記載がある。小姓を指すと考えられる。1079・1080は4寸皿の内面に6行・6名の墨書を記すものである。1079は『本上はう　うつか　とうひやうへ　そうけい　とうちよ　ゑむら』と記されている。『本上はう』・『うつか』は1074に同名が記載されている。『とうひやうへ』は1077に、『ゑむら』は1076に同名が記載されている。『そうけい』は法名、『とうちよ』は『とう（藤）千代』として、幼名、成人前の男子の名と考えられる。1080は『めうゑん　又六　とう二ら　たうゆう　めうきん　こうは□』と記されている。これらの名は1054・1058・1075・1077に同名があり、『こうは□』は『こうはい』と考えられる。1081は4寸皿の内面に7行・7名の墨書を記すものである。『お□のへ　おちこ　おと五れう　ほうしゆ　めう□い　おにう　おかめ』と記されている。『お□のへ』は1066にある『おこのへ』と同じであろう。『おちこ』はお稚児か。『おと五れう』はおと五郎、『めう□い』は、めうさいなど法名と考えられる。『おかめ』は女性名である。『おにう・ほうしゅ』は意味を確定し難いが、『おにう』は『小入』として人名の可能性が考えられる。『ほうしゆ』は法名あるいは、宝殊の意味か。1082は堀の更に下層から出土している。3寸皿の内面に『そうけん』と記している。法名と考えられる。

SD74001－A群出土の墨書土器　（図版198・199　写真図版256～258）

1083～1098は4寸皿もしくは4寸5分の土師器皿内面に一行の墨書を記すものである。すべて法名を記している。1083～1085は土師器皿の内面に『ほうせい』と記されている。すべて4寸径の土師器皿である。『ほう□□』と読める1086を加え、4寸径4点の土師器皿に『ほうせい』と記し、廃棄した可能性

が考えられる。1087～1089は土師器皿の内面に『そうけん』と記されている。すべて4寸径の土師器皿である。4寸径3点の土師器皿に『そうけん』と記し、廃棄した可能性が考えられる。『そうけん』はF群の下層においても記された皿が出土している。1090～1092は土師器皿の内面に『ちよけい』と記されている。すべて4寸径の土師器皿である。4寸径3点の土師器皿に『ちょけい』と記し、廃棄した可能性が考えられる。以上の墨書土器は3枚を単位に廃棄した可能性が考えられるものである。1093・1094、1095・1096はそれぞれ2枚を単位に廃棄した可能性が考えられるものである。1093・1094は4寸皿の内面に『めうかう』と記されている。1095は4寸皿の内面に『めうけん』と記されている。1096は破片のため明確ではないが、同名の可能性が高く、2枚を単位と推定される。1097・1098は1枚を単位に廃棄した可能性が考えられるものである。1097は4寸もしくは4寸5分皿の内面に『ちゆけい』と記す。F群においても同名を記した皿が出土している。1098は4寸5分の皿の内面に『めう□ん』と記している。1060・1061と同じく『めうしゆん』の可能性が高い。1099・1100は4寸皿もしくは4寸5分の土師器皿内面に2行2名の墨書を記すものである。すべて法名ではない。1099は4寸5分皿の内面に『よした殿　□□た殿』と記す。よした殿は吉田殿と考えられ武士の姓と考えられる。2名ともに敬称『殿』が付けられている。1100は4寸5分皿の内面に『まこ七　とう二ら』と記す。『孫七・とう（藤）二郎』と考えられる。『とう二ら』はF群においても同名を記した皿が出土している。1101～1106は4寸皿の土師器皿内面に5行の墨書を記すものである。1101は『へや　めうきん　たうゆう　めうきん　たうゆう』と記されている。『へや』は『室』のことか、『たうゆう・めうきん』は並んで2度づつ記載されている。また、共に1102・1104でも並んで記されており、F群・C群下層にも同名は記されている。1102は『めうせん　めうせん　めうゑん　□かミ□　お□』と記されている。『めうせん・めうゑん』はF群1075では並んで記されている。1103は『こうは□　うミのかし　やくこれう　お□□へ　□□は□』と記されている。『こうは□』は1077にある、『こうはい』の可能性が考えられる。『やくこれう』は、『夜久五郎』か。夜久は京都府夜久野町の地名が残り、夜久姓は丹波から但馬周辺に認められる。『うミのかし』は意味が不明であるが、『丑巳の歳』の誤記か。『お□□へ』は1066にある『おこのへ』と考えられる。『□□は□』は不明である。1104は『たま　たうゆふ　めうきん　めうきん　七ほうはは』と記されている。『たうゆふ・めうきん』は1080・1101と同じである。『めうきん』は2度記されている。『たま』は人名であろう。『七ほうはは』は『七法母』と考えられる。

1105は『うつか　ほん上はう　こうはい　たうけい　廿八日ちい』と記されている。『うつか　ほん上はう』はF群1074・1079においても連記されている。『こうはい』は1077・1103にも記されている。『廿八日ちい』のちいの意味は不明である。1106は4寸皿の土師器皿内面に7行7名の墨書を記すものである。『おちこ　めうさい　ほうちゆ　こせう　おもち　こにう　おかめ』と記されている。これらの内、『おちこ・ほうしゆ・おにう・おかめ』はF群1081にも連記されている。『めうさい』についても1081に記されていた可能性が高い。『めうさい』は法名、『こにう・ほうしゅ』は意味を確定し難いが、『こにう』は『おにう』と同じく小入として人名の可能性が考えられる。『ほうしゆ』は法名あるいは、宝殊の意味か。『こせう・おもち』は1078においても連記されている。

1107・1108は共に複数の人名を墨書した4寸もしくは4寸5分皿である。

1107は『めう□　ほ』の字が記されている。1108は4行以上の墨書があったと考えられる。『おとヵ　□□やく　□□ゆヵ　□□ん』と記されており、人名の可能性が考えられる。1109・1110は仏語を記している。1109は4寸皿に2行『□　むゑんほうかい』ある。『むゑんほうかい』は、無縁法界である。1110

は4寸皿に『六しんけんそく』とある。六親眷属である。1111は3寸皿に月日、『□月五日』と記されている。1112～1127は細片のため、釈読がほとんど行えず、行数・内容が不明のものである。1112は4寸5分皿に3行以上の墨書が記されている。『□□く　□□のおの　ひ□□』である。内容は不明である。1126は『□うせ』の文字が記されている。法名の一部であろう。

SD74001－B群出土の墨書土器　（図版200　写真図版258）

1128は4寸皿の内面に二行の墨書を記すものである。4寸皿の内面に『ほん上はう　うつか』と記されている。『ほん上はう・うつか』はF群1074・1079・A群1105においても2名連記されている。1129・1130は3寸皿に1行・1名の墨書を記すものである。1129は『又六』、1130は『おこう』と記されている。『又六』は1077・1080にも記されている。1131～1146は細片のため、釈読がほとんど行えず、行数・内容が不明のものである。1134は4寸5分皿に2行以上の墨書が記されている。『む□□』である。む□の2文字目はゑの可能性が高く、『むゑん』と記されていた可能性が高い。1135は3寸5分皿に複数行の墨書が記されていたと考えられる。『ちやうて』の文字が認められる。1223と同様の文言であったと考えられる。1136は2行以上の墨書が記されている。『□□□□』。左行は『のへ』とも読め、『おこのへ』の一部と考えられる。

SD74001－C群出土の墨書土器　（図版200　写真図版258）

1147～1149は4寸皿の内面に1行の墨書を記すものである。すべて法名を記している。1147は土師器皿の内面に『ほうせい』と記されている。『ほうせい』は、F群1028～1034・A群1083～1086・B群1164にも記されている。1148は土師器皿の内面に『道ゑい』と記されている。1149は土師器皿の内面に『めうしゆん』と記されている。『めうしゆん』はF群1060・1061にも記されている。1150は3寸皿の内面に『やく』と記されている。『やく』は『夜久』姓の意味か。

1151～1159は細片のため、釈読がほとんど行えず、行数・内容が不明のものである。

SD75001－B群出土の墨書土器　（図版201　写真図版259）

以下、下層に投棄された墨書土器である。1160～1166・1168～1170は4寸皿もしくは4寸5分の土師器皿内面に一行の墨書を記すものである。すべて法名を記している。1160・1161は『めうけん』と記されている。法名と考えられる。2点は共に4寸皿である。2枚を単位に廃棄した可能性が考えられる。1162は『めうち』と記されている。1163は『□うゆう』と記されている。『たうゆう』の可能性が高い。1164は『ほうせい』、F群1028～1034・A群1083～1086・C群1147にも記されている。1165は『めうさい』、1081に同名が記載されていた可能性がある。1166は『めうこう』、1093・1094の『めうかう』と同じ法名と考えられる。1168は『しゆけい』、1064の『しゆけい』及び1097の『ちゆけい』と同じ法名と考えられる。1169は『そうせん』と記されている。1170は『そうけい』、1079と同じ法名と考えられる。

1167は3寸皿に1行・1名の墨書を記すものである。『うつか殿』と記す。1074などに記された『うつか』（菟束）と同じであろう。1171は4寸皿の土師器皿内面に二行の墨書を記すものである。『けたのわか　しやうろう』と記している。二行に亘っているが、左行の文頭を一字下げていることから右行から一連の文言であると考えられる。文意は不明である。1172は3寸皿の土師器皿内面に二行の墨書を記すものである。『□はヵ　ち□』と記す。1173は4寸皿もしくは4寸5分の土師器皿内面に5行以上の墨書を記すものである。人名で構成される。『おちこ　めうちん　おこう　□□□　□□と□』と記され

ている。1081にもある、『おちこ』はお稚児か。『めうちん』は法名。『おこう』はお幸か、女性名と考えられる。1174は4寸の土師器皿内面に3行以上の墨書を記すものである。月日を記している。『四月廿□　五□　ほ□』と記されている。

SD75001－C群出土の墨書土器　（図版202～204　写真図版260～263）

1175～1207は土師器皿内面に一行の墨書を記すものである。法名を記している。1175・1176は4寸の土師器皿の内面に『せんち』と記している。1177は下半を欠失しているため、詳らかではないが、せんが冒頭につく法名と考えれば同じく『せんち』である可能性が高い。4寸径3点の土師器皿に『せんち』と記し、廃棄した可能性が考えられる。1179は4寸の土師器皿の内面に『そうけい』と記している。1178は上部が欠失しているが、字体から推して同じく『そうけい』と記した4寸皿と考えられる。1178･1179の中径の皿2枚を単位に廃棄した可能性が考えられる。1180・1181は4寸皿の内面に『そうかう』と記されている。『そうけい』と同じく中径の皿2枚を単位に廃棄した可能性が考えられる。1182･1183は4寸皿の内面に『たうゆう』と記されている。法名と考えられる。『そうかう』と同じく中径の皿2枚を単位に廃棄した可能性が考えられる。1184は4寸の土師器皿の内面に『そうせん』と記している。1185は一部が欠失しているが、字体から推して同じく『そうせん』と記した4寸皿と考えられる。1184・1185の中径の皿2枚を単位に廃棄した可能性が考えられる。1187は4寸の土師器皿の内面に『めうかう』と記している。1186は上部が欠失しているが、字体から推して同じく『めうかう』と記した4寸皿と考えられる。1186・1187の中径の皿2枚を単位に廃棄した可能性が考えられる。1189は4寸の土師器皿の内面に『ほうせい』と記している。1188は一部が欠失しているが、字体から推して同じく『ほうせい』と記した4寸皿と考えられる。1189・1189の中径の皿2枚を単位に廃棄した可能性が考えられる。1190・1191は4寸皿の内面に『めうゑん』と記されている。『そうかう』と同じく中径の皿2枚を単位に廃棄した可能性が考えられる。『めうゑん』は1065でも記されている。1193は4寸の土師器皿の内面に『めうち』と記している。1192は一部が欠失しているが、字体から推して同じく『めうち』と記した4寸皿と考えられる。1192・1193の中径の皿2枚を単位に廃棄した可能性が考えられる。1194は4寸皿の内面に『□けい』と記されている。□は『しゆ』（寿）の可能性が高く、『しゆけい』であろう。1064・1168の『しゆけい』及び1097の『ちゆけい』と同じ法名と考えられる。1195は4寸皿の内面に『ほうゐ□』と記されている。末尾は『ん』の可能性が高く、『ほういん』であろう。法名あるいは、法印と記したと考えられる。1196は4寸皿の内面に『めうきん』と記している。1197は一部が欠失しているが、残存する字体から推して同じく『めうきん』と記したと考えられる。1196・1197の中径の皿2枚を単位に廃棄した可能性が考えられる。1198は4寸皿の内面に『めうけん』と記している。F群1047～1050にも『めうけん』は記されている。1199は4寸皿の内面に『めうこ』と記している。1200・1201は3寸皿に1行1名の墨書を記すものである。1200は3寸皿の内面に『めうちん』と記している。B群1173・E群1233にも『めうちん』は記されている。1201は3寸皿の内面に『たうゑ』と記している。法名であろう。1202は4寸皿の内面に『めうさい』と記している。F群1081・A群1106・B群1165にも『めうさい』は記されている。1203は4寸皿の内面に『め□□』と記している。2次目は『う』の可能性が高い。1204は5寸皿の内面に『月けいせいうん』と記している。E群1229『月けいせうん』は同一名の可能性が高い。1205は4寸皿の内面に『八備』と記している。法名もしくは姓あるいは（備を備前・備中・備後の略と見て）人名を略したものなどが考えられる。1206は4寸皿の内面に『みやしまのかミ』と2行に亘り記している。

『みやしまのかミ』は『宮島の神』と考えられる。安芸宮島の厳島神社あるいは、出石神社に祀られている『市杵嶋姫』（市杵島比賣神社）を指すものと考えられる。1207は4寸皿の内面に『おくり』と記している。『おくり』は、C群1208・E群1234に『よね』と連記されて記されている。1208は4寸皿の内面に『よね　おくり』と記している。『おくり』は、C群1207にあり、『よね　おくり』はE群1234にも記されている。1209は4寸皿の内面に『とくしゆ　しゆとく』と記している。法名と考えておく。1210は3寸皿の内面に『おちこ』と記している。『おちこ』は1026・F群1081・A群1106・C群1211においても記されている。1211は4寸皿の内面に『おこう　おちこ』と記している。『おこう　おちこ』はB群1173において2名共に記されており、後述する1215においても欠字があるが2名共に記されていると考えられる。1212は4寸～4寸5分皿の内面に『又らく　あちや』と記している。『又らく』は『又六』である。1213は4寸皿の内面に二行の墨書を記している。『□たわか　しやうらう』と記している。二行に亘っているが、左行の文頭を一字下げていることから、右行から一連の文言であると考えられる。文頭の□は、1171を参考にすれば、『け』であることは明白であろう。文意は不明である。1214は5寸皿に3行の墨書を記すものである。『めうゑん　たかぬのかミ　こせう』と記している。『めうゑん』は法名、1065･1190･1191に記されている。『たかぬのかミ』は旧城崎郡日高町所在の式内社鷹貫神社の祭神『鷹野姫命』あるいは同郡竹野町所在式内社鷹野神社の祭神を指すものと考えられる。『こせう』は小姓、F群1076ではめうゑんと連記されている。1215は4寸皿に5行5名の墨書を記すものである。『おきく　とらきく　□しちよ　□こう　□ちこ』と記している。おきく・とらきくの文字の位置から左3名の欠字はそれぞれ1文字づつと推測できる。『□こう　□ちこ』は1211にある『おこう　おちこ』と推断してもよいだろう。『□しちよ』は『□千代』と考えられるが、欠字は詳らかではない。

以下の墨書土器は、主に、意味が不明なもの仏語･月日等が記されたものである。1216は4寸皿に『く』の一文字が記されている。左半の一部が欠失しているため、当初の文字数は詳らかではなく、意味も不明である。例えば、『やく』の可能性も残る。1217は5寸の皿に『御ほん□□』と記している。不明の2文字は『そん』の可能性が高く、『御本尊』と記したと考えられる。『御本尊』は、宮内地区所在の総持寺　千眼千手観音を指すものと考えられる。1218は4寸皿に『六しん』と記されている。六親である。

1219は3寸皿に『六しんけんそく』と記されている。六親眷属である。1220は4寸皿に月日が2行記されている。『□月廿日　五月五日』と記されている。冒頭の一字は『四』として、四月廿日の可能性が高い。1221は3寸皿に『四月廿日』と記されている。1222は3寸皿に2行にわたり、『廿六日のうい』と記されている。ういの意味は不明である。1223は4寸皿に3行の墨書が記されている。『上□□ちやうてん　下□□の　むゑ□ほうかい』と記している。『むゑ□ほうかい』は『無縁法界』であろう。『上□□ちやうてん　下□□の無縁法界』は3行で一文を構成する可能性が高いが、意味は不明である。1224は3寸皿に2行の墨書が記されている。『むゑん　ほうかい』と記している。『無縁法界』である。1225は3寸皿に『やく』と記されている。1103･1108と同じく『夜久』を指すものと考えられる。1226は4寸皿に2行の墨書が記されている。『六しん□　七せの□　』と記しており、下半を欠失している。『六親眷属　七世の父母』と記されていたと考えられる。

SD75001－E群出土の墨書土器　（図版204　写真図版264）

1227～1230は土師器皿内面に1行の墨書を記すものである。法名･人名を記している。1227は4寸5分皿に『ひせん殿』と記している。『ひせん』は『備前』もしくは『肥前』と考えられ、敬称『殿』が付け

られている。1228は4寸5分皿に『めうこせつちやうに』と記している。『めうこ』は1199にもあり、『せつちやうに』の意味は詳らかではないが、『に』は尼の可能性が考えられる。『禅定尼』の誤記の可能性が考えられる。1229は5寸皿の内面に『月けいせうん』と記している。法名である。C群1204『月けいせいうん』は同一名の可能性が高い。1230は4寸皿の内面に『ほうせい』と記されている。法名と考えられる。B群下層1164・F群1028～1034・A群1083～1086・C群1147・C群下層1188・1189においても同名が墨書されている。1231は4寸5分の皿に3行の墨書を記す。『本しやうは□　ねゝほうし　きくてう』である。『本しやうは□』の末尾は1074・1079・1105・1128・1233を参考にするならば、『う』であり、『本上はう（坊もしくは房）』と推断できる。『ねねほうし』は『禰々法師』、僧の名あるいは男児の名と考えられよう。『きくてう』は童子の名とも考えられるが詳らかではない。1232は4寸皿に3行の墨書を記す。『けたのわかヵ　しやうらう　にやにや』である。『けたのわかヵ　しやうらう』は2行に亘るが、1171・1213と同じ『けたのわかしやうろう』と続けて読むものであろう。『にやにや』は人名と考えられる。1233は4寸5分の皿に5行の墨書を記す。『めうちん　めうきん　めうゑん　ミやちまのかミ　ほんしやうはう』である。『めうちん　めうきん　めうゑん』は法名であり、めうきん･めうゑんは1080では連記されている。『ミやちまのかミ』は1206の『みやしまのかミ』と同じく、『宮島の神』と考えられる。安芸宮島の厳島神社あるいは、出石神社に祀られている『市杵嶋姫』を指すものと考えられる。『ほんしやうはう』は『本上坊もしくは房』であろう。1234は4寸の皿に10行の墨書を記す。右端の『よねおくり』はC群1208・E群1234と同じく『よね』と『おくり』の2名の名を1行に書いたと考えられる。『ほちこヵやくこヵ』の意味は不明である。『とうきく　うしちく』はともに人名と考えられる。『たんはのかミ』は1233と同じく、神名を記したと考えられ、『丹波の神』と考えられる。『と□いまこ七』は姓名と考えられる。『□□さ□□□』の意味は不明、『こ三郎』は人名、『はヵくヵほうヵ』は法名と考えられる。末尾の十は、よねおくりを2名と見て、（神名を含め）計10名の名を墨書したことを表示したものと考えられる。

以上、人名墨書土器群の釈読を中心に述べてきた。続いて墨書が記された土師器皿自体について述べておく。

SD67001出土の土師器皿の様相

全て、手づくね手法による土師器皿である。F群の墨書土器の法量は先述したように8.5㎝ から14.6㎝に亘り、3寸・3寸半・4寸・4寸半・5寸を指向していると考えられる。皿の形態は、口縁部のヨコナデによって口縁部が外反する個体はほとんどなく、底部との境から斜め上方に直線的に立ち上がる個体が大半を占める。口縁端部は端部つまみ上げの痕跡を残すa_1類と、痕跡が消滅し紡錘形となるa_2類の両者があるが、一個体の中に両者が混在するものも多い。いずれも端部上面に内傾する面もしくは浅い凹みをもつ。底部は平底・丸みを帯びるもの両者が存在する。内面の体部との境を強くナデ、凹線を残すものはなく、1047・1051・1052など一部に強いナデによる凸線状の痕跡を残すものがある。また、内面の回しナデ痕が『つ』字を有する個体が多く見受けられる。

SD74001出土の土師器皿の様相

基本的にはF群と様相は変わらないが、1095・1098・1100など口縁部のナデが強く若干、外反する個体が混じる。

SD75001出土の土師器皿の様相

上層の土師器皿群に対して、口縁端部を外方へ拡張し内面が凹む個体が74個体中26個体を占める。また、平底の比率が増え、40個体以上が平底である。また、内面の体部との境を強くナデ、凹線を残すものはなく、ほぼ全個体に、『つ』字の内面の回しナデ痕が見受けられる。

第２節　木簡類

木簡類はいわゆる付け札木簡など狭義の木簡のほか、将棋・闘茶札、位牌や、折敷・三宝あるいは床板など多岐に亘っている。ここでは、すべてを広義の木簡類と捉えて述べることとする。また、ここでは、墨書のある51点に加え、墨痕が見られないが、付け札の形態をとる４点を合わせて述べておく。

なお、木簡の釈文は原則木目方向を縦とし、木簡学会編『木簡研究』の方式に準拠して表記した。表に記入した型式番号についても『木簡研究』に準拠している。これは墨書土器についても同じである。

１．付け札類（図版205～208　写真図版265～269）

W905～W917は頭部に切れ込みを入れる形状の付け札木簡である。下端を加工するW905～W910と、短冊型に納めるW911～W917がある。W905は95年度第２面（整地面）上に被覆する焼土･炭を含む土壌層より出土した。頭部に切り込みがあり、荷札として使用されたものであろう。先端が心持ち折損している。残存する全長は24.3センチ、幅3.1センチ、厚さ0.2センチである。釈文･「＞乃木出羽守かわこ一ツ　くりかわこ二つ･「＞永禄拾弐年八月廿四日以上三つ　のなかで、表面の『かわこ』は『皮籠』（かわご＝皮を張った箱）、くりかわこは、栗色の皮籠を指すと考えられる。乃木出羽守は文献には見られないが、同じ宮内地区にある総持寺観音堂本尊『十一面千手千眼観世音菩薩』胎内に天文四年（1535年）に納められた「惣持寺本尊勧進奉加帳」には乃木日向守・乃木丹後守・乃木若狭守といった乃木姓の武士の名が山名祐豊とともに記されており、山名家の被官であったことが推測される。裏面に記された年月日、永禄一二年（1569年）八月二四日は、羽柴秀吉が指揮する織田軍の但馬侵攻（永禄一二年八月一日～一三日）によって此隅山城が陥落した直後にあたる。木簡が出土した層は焼土・炭を含み、明らかに火災を起こしている。木簡の年号から見て、火災が、永禄一二年の織田軍の但馬侵攻に伴う戦闘に起因した可能性は非常に高いと考えられる。この木簡からは乃木出羽守を送り主もしくは受取人として永禄一二年八月二四日に荷物をやり取りしていることが判る。落城10日後には敗者側の武将がもう荷物のやり取りをしていることは、２週間足らずで終了した織田軍の但馬侵攻を考える上でも興味深い資料である。W906は堀SD68001より出土した。付け札木簡である。両面に墨書が存在するが、墨の残存状況が悪く、ほとんど釈読ができない。表面の冒頭には『田』の文字が認められる。W907は堀SD54001より出土した。付け札木簡である。両面の墨書が存在するが、墨の残存状況が悪く、ほとんど釈読ができない。表面の冒頭には『一斗□□』とあり、□□は二升の可能性が高い。W908は95年度第２面より出土した。付け札木簡である。３文字以上の墨書が存在するが、墨の残存状況が悪く、ほとんど釈読ができない。W909は集石より出土した。付け札木簡である。先端が心持ち折損している。『米三斗五升』と記されている。W910は堀SD54002より出土した。木簡の先端に凸部を造りだす形状の付け札木簡である。両面に墨書が存在する。表面「小□中　志もの見や」、裏面「＞今井殿からの米」とある。志もの見やは出石町に隣接する旧豊岡市内の地名「下の宮」である。今井姓は前出の奉加帳にも記載がある。今井家は、出石神社神職七家の一つである。W911は95年度第４面より出土した。付け札木簡である。下端を

短冊型に加工している。両面に墨書が存在するが、墨の残存状況が悪く、加えて側面を欠損しているため、釈読はできなかった。裏面には2行の墨書があったと推測される。W912は95年度第5面より出土した。付け札木簡である。下端を短冊型に加工している。「＞四□□□小五郎」と釈読できる。W913は堀SD54001より出土した。付け札である。W911と同様の形状であるが、墨痕は確認できなかった。W914は堀SD54001より出土した。付け札木簡である。両面の墨書が存在するが、折損しているため、内容は不明である。片面の冒頭には『め』と記している。W915は95年度第4面より出土した。付け札木簡である。下端を折損しており、全容は明らかでない。両面に墨書をもち、冒頭には（目印）を書いている。裏面にはそれ以外には墨書はなく、表面には、目印に続き、二百入、更に2行の墨書があるが、内容は詳らかではない。W916は95年度第5面の土塁下に延びる堀からの出土である。第5面の古い段階に対応する付け札木簡である。下端を折損しており、全容は明らかでない。『二はん　貳百入』の墨書がある。W917はSD52008より出土した。刳り込みがあり、下端が短冊型に加工していることから付け札としたが、墨痕は確認できなかった。別用途の木製品の可能性もある。W918～W927は切れ込みを持たず、下端を尖らせる形状の付け札である。W918は97年度調査区の側溝中より出土した。下端を折損しており、全容は明らかでないが、下端を尖らせた付け札木簡である。両面に墨書が存在する。片面には、『ち□わせ』、他面には、『ちと□せ五郎』の墨書がある。両面の冒頭4文字は、文字の並びから同一と考えられ、互いを補うと、『ちとわせ』と読める。文意は不明である。W919は95年度第1～4面間より出土した。下端を折損しており、全容は明らかでないが、下端を尖らせた付け札木簡と考えられる。両面に墨書が存在するが墨の残存状況が悪く、文意は不明である。W920・W921は切れ込みを持たず、下端を尖らせる形状の付け札である。墨痕は確認できなかった。W921は頭部に紐で縛った痕跡が残る。W922～W927は95年度第2面～4面にかけての外堀から出土している。何れも上端を面取りし孔をあけ、下端を尖らせる形状の付け札である。基本的には片面を使用している。これらの木簡は、すべて月・数量・人名の順に記載しており同じ用途に使われたことは明白である。同様の木簡は入佐川遺跡からも出土しており、参考としてあげた。記載された数量は一斗七合が大半を占め、一斗五合・一斗五升のものが1点づつ含まれる。数量の対象物はW923には米の記載がある。木簡の性格は詳らかではないが、複数の男子成人に対して、月ごとに米を支給もしくは納入させる内容であったと考えられる。W928・W929は一端を面取りし孔をあける形状の付け札である。W928は95年度第4面外堀SD54002から出土している。穿孔をもつ釣鐘形をした札である。2文字目は『さ』か、文意は不明である。W929は95年度SD52008（第3面）から出土している。下端を面取りしている。「わミ衛門　　小三郎」と2行に記している。W930は95年度第4面堀SD54001から出土している。下端に穿孔をもつ短冊形の札である。冒頭の三ツ四郎と門殿の間には墨痕は認められないが、あるいは『右衛や左衛』といった人名に関わる文言が入る可能性は考えられる。W931は95年度第4面外堀SD54002から出土している。穿孔をもつ。頭部には面取りを施し釣鐘形である。墨痕がなく付け札ではない可能性もあるが、削り痕が一部にあり、木簡として使用された可能性を考えておく。頭部に向かって厚みが減じている。

2．習書木簡ほか（図版208　写真図版269）

W932は96年度、堀の外側の16世紀後半の面水田土壌より出土した。数字を2行に亘って記している長方形の板材である。右行の末尾は『九』であるが、その上二文字は廿の可能性が高く、習書木簡の可能性が考えられる。W933は96年度第8面より出土した。径2寸の曲物の底板に『かよ』と記している。

人名であろう。W934は95年度第４面堀SD54001から出土している。丸太材を割った断面に人名を記している。本木簡は永らく外気に触れていたと考えられ、木質が腐朽し墨書部分のみが隆起した状態で遺存していた。墨痕は全て残っていない。W935は96年度の土塁上より出土した。形状及び文言からみて柄杓の柄に刻書された可能性が高い。

3．折敷等の容器（図版209～211　写真図版270～273）

W936～W949は曲物・折敷といった容器に墨書があるものである。W936～W938は95年度第４面堀SD54001から出土している曲物の側板である。接合はしないが、同一個体と考えられ、何れも表面に墨書がある。W939は95年度第４面堀SD54001から出土している折敷の底板である。内外面に墨書がある。W940は95年度第４面堀SD54001から出土している折敷の側板である。内外面に墨書がある。外面に５行、内面に４行の墨書がある。内容は不明である。W941は95年度第４面から出土している折敷の側板である。片面に７行の墨書が認められるが、内容は不明である。W942は97年度堀SD75001から出土している幅９寸の折敷の底板である。内面中央に『上』と記している。W943は96年度SD68002から出土している長方形の折敷の底板である。内面中央に『そうせん』と記している。『そうせん』はSD75001－C群出土の墨書土器にも存在する。W944は96年度堀SD69001から出土している長方形の折敷の底板である。内面中央に『そうかう』と記している。『そうかう』はSD75001－C群出土の墨書土器にも存在する。W945は95年度第４面～５面にかけて出土した横材である。折敷の底板と考えられる。内面中央に『二十』と記している。W946は96年度第８面から出土している長方形の折敷の底板である。内面中央に『□うこ□』と記している。墨書土器に『めうこう』があり、同一である可能性がある。W947は96年度SD68002から出土している三宝の脚台部分である。正面、透かしの右側に『ほうせい』と記している。『ほうせい』はSD67001－F群出土の墨書土器にも存在する。W948は97年度SD75001から出土している三宝である。正面、透かしの右側に『ほうせ□』と記している。W947とお同じく『ほうせい』と記している可能性が高い。脚台の上にのる折敷の一辺は８寸を測る。『ほうせい』は墨書土器群C群下層出土の墨書土器にも存在する。W949はW948と同じく97年度堀SD75001から出土している三宝である。正面、透かしの右側に『しゆけい』と記している。墨書土器群C群下層より出土している。『しゆけい』は墨書土器群F群・B群下層・C群下層出土の墨書土器にも存在する。

4．祭祀具（図版212・213　写真図版274・275）

W950～W953は宗教行事に使用された木簡である。W950は位牌である。96年度調査において土塁の内側から出土した。近接して重られた土師器皿が出土しており元の位置から動いていないものと考えられるが、土坑などの埋納遺構は見つからなかった。白木製で、圭頭状の頭部をもつ札型牌身に長方形の板状台座がつく。細部の法量は全長25.5㎝、牌身長24.4㎝・牌上幅6.6㎝・牌下幅6.1㎝・厚さ0.7㎝、台座は長辺9.1㎝・短辺6.7㎝を測る。「帰本道祐禅門霊位」「天文廿三年七月廿三日」と記している。ここに記された『道祐禅門』は人名墨書土師器皿にある『たふゆう』、「惣持寺本尊造立勧進奉加帳」にある『道祐』と同一人である可能性が高い。袴狭遺跡の仏堂（三間堂跡）出土の卒塔婆にも『道祐禅門』は記されている。没年の天文廿三年は西暦1554年である。W951は卒塔婆である。下半を折損しており、全体の形状・大きさは不明である。96年度調査に伴い、堀外側の16世紀中頃の水田土壌より出土した。W952は堀SD75001の肩部より人名墨書土師器皿と共に出土した柿経の一部である。『妙法蓮華経常不輕菩薩品第二十』の文言を記したものである。W953は呪符木簡である。下半を折損しており、全体の形

状・大きさは不明である。96年度調査に伴い、第11面堀外側の鎌倉時代の水田土壌より出土した。

5．遊戯具（図版213　写真図版275）

W954～W957は遊戯具に使用されたと考えられる札である。W954は将棋の駒である。土塁SF68001の内側から出土した。表面には『銀将』、裏面には『竪行』の墨書が達筆で書かれている。この駒は、裏面が『竪行』であることから、『中将棋』の銀将と考えられる。W955は95年度第4面堀SD54001から出土した長方形の小さな札である。闘茶や聞香に使用された可能性が考えられる。W956は95年度第4面から出土した長方形の小さな札である。裏面の文字は不明であるが、闘茶や聞香に使用された可能性も考えられる。また、裏面の墨の残り具合から、当初は長い札であったものを切断・加工した可能性も考えられる。W957は95年度第4面堀SD54001から出土した円形の小さな札である。表面は面取りを行っているが、墨書はなく、裏面に文字が記されているが、判読にはいたらなかった。

6．その他（図版214　写真図版・276）

W958は十字に交差した圭頭の部材に『ろ』と書かれている。95年度第4面堀SD54001から出土した。部材の性格は不明である。W959は96年度第9面堀SD69002から出土した床板材と考えられる。板材は残りが悪く、当初の大きさは不明である。墨書は2行に亘るが、文意は不明である。

1014	1013	1012	1011	1010	1009	1008	1007	1006	1005	1004	1003	1002	1001	番　号	
ⅣD	ⅣC	ⅢA	Ⅲ	ⅦA	ⅦD	Ⅷ	Ⅷ	ⅦD ⅥA	ⅦA	ⅣD	ⅣD	ⅤB	ⅦA	地　区	
95－3S	95－3S ＋1まで	95－3面	SD53015	95－2 ＋2面	95－2面 整地面直上	95－2面 ～整地土	SD52008	95－2面 SD52009 SD52008	95－3面 SD52008 下層	SD52002	SD52002	95－1面 上層	95－1面 上層	出土遺構	
濁灰色粗砂まじり細砂		暗褐色シルト										灰色粗砂まじりシルト	汚れた黄灰色シルト	層　位	
土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	白磁	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	種　別	
Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	不明	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	器　種	
(16.4)	(13.7)	(12.5)	(9.4)	(8.7)	(5.2)	—	—	(14.6)	8.4	(13.9)	12.1	(9.2)	—	長さ・口径	法量（　）は残存値
(2.3)	2.0	(2.6)	(1.3)	1.5	(6.2)	(0.6)	(1.3)	4.2	2.2	2.6	2.5	(1.5)	(1.7)	幅・器高	
									(3寸)	4.5寸	4寸	3寸		寸　別	
	冂	□	□ゑ	（墨付着）	□	（内面墨痕）	（内面墨痕）	上	すいうん		ほん冂	（内面墨痕）	（内面墨痕）	釈　読	
														備　考	

1027	1026	1025	1024	1023	1022	1021	1020	1019	1018	1017	1016	1015	番　号	
ⅩⅡ	ⅩⅡ	ⅣC	ⅣC	Ⅰ	ⅦA	ⅦA	ⅦA	ⅨD	ⅣB	ⅣB	ⅦA	ⅦA	地　区	
SD66001	SD62001	95－5面	95－5面 まで	95－5面 まで 5Sまで	95－5面 まで	95－5面	SD55001	95－4面 上カ	95－4面 (4a)	95－4面 4a	95－4面 まで	SD54004	出土遺構	
								粗砂層まで	暗茶シルト	暗茶シルト			層　位	
土師器	土師器	土師器	土師器	白磁	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	種　別	
Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	碗	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	器　種	
12.2	12.3	(12.4)	(14.9)	—	(14.4)	8.4	(14.4)	(16.7)	—	—	(13.6)	(14.1)	長さ・口径	法量（　）は残存値
2.5	2.5	2.0	(1.9)	(1.6)	2.6	2.1	(1.9)	(2.0)	(2.0)	(2.0)	2.1	2.1	幅・器高	
4寸	4寸	4寸	5寸		5寸	(3寸)	5寸						寸　別	
ほうせい	とらきく おちこ よねこれう おとこれう おかめ	□□□	□	三		（五芒星）					□	（墨付着）	釈　読	
法名	童名ほか												備　考	

1041	1040	1039	1038	1037	1036	1035	1034	1033	1032	1031	1030	1029	1028	番　号	
ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	地　区	
SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	出土遺構	
F群	F群	F群	F群	F群	F群	F群	F群	F群	F群	F群	F群	F群	F群	層　位	
土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	種　別	
Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	器　種	
8.6	12.7	12.1	12.2	8.5	8.6	8.7	12.0	12.2	12.2	(8.9)	8.4	8.7	8.5	長さ・口径	法量（　）は残存値
2.1	2.5	2.5	2.6	2.3	2.4	2.2	2.4	2.3	2.3	2.0	2.1	2.0	2.1	幅・器高	
3寸	4寸	4寸	4寸	3寸	3寸	3寸	4寸	4寸	4寸	3寸	3寸	3寸	3寸	寸　別	
ちよけい	そうけん	そうけん	そうけん	そうけん	そうけん	そうけん	ほうせい	ほうせい	ほうせい	ほうせい	ほうせい	ほうせい	ほうせい	釈　読	
法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	備　考	

第３表　文字資料（墨書土器）釈読一覧（１）

1055	1054	1053	1052	1051	1050	1049	1048	1047	1046	1045	1044	1043	1042	番　号	
ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	地　区	
SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	出土遺構	
F群	F群	F群	F群	F群	F群	F群	F群	F群	F群	F群	F群	F群	F群	層　位	
土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	種　別	
Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	器　種	
9.9	10.1	(13.3)	10.0	10.0	12.3	12.6	10.1	9.4	12.1	13.0	12.3	8.8	8.8	長さ・口径	法量(　)は残存値
1.2	2.2	2.2	2.4	2.3	2.6	2.6	2.3	2.5	2.4	2.3	2.4	2.2	2.0	幅・器高	
3.5寸	3.5寸	4.5寸	3.5寸	3.5寸	4寸	4寸	3.5寸	3寸	4寸	4寸	4寸	3寸	3寸	寸　別	
たうゆう	たうゆう	めうかう	めうかう	めうかう	めうけん	めうけん	めうけん	めうけん	ちよ□(けい)カ□	ちよけい	ちよけい	ちよけい	ちよけい	釈　読	
法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	(法名)	法名	法名	法名	法名	備　考	

1069	1068	1067	1066	1065	1064	1063	1062	1061	1060	1059	1058	1057	1056	番　号	
ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	地　区	
SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	出土遺構	
F群	F群	F群	F群	F群	F群 最下層	F群	F群	F群	F群	F群 最下層	F群	F群	F群	層　位	
土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	種　別	
Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	器　種	
10.0	9.0	12.3	10.2	12.3	12.3	12.7	12.3	12.2	12.2	12.2	10.2	13.0	10.2	長さ・口径	法量(　)は残存値
2.2	2.0	2.7	2.4	2.4	2.4	2.5	2.5	2.5	2.6	2.4	2.3	2.5	2.2	幅・器高	
3.5寸	3寸	(4寸)	3.5寸	4寸	4寸	4寸	4寸	4寸	4寸	4寸	3.5寸	4.5寸	3.5寸	寸　別	
□□い	□せい	むゑん	おこのへ	めうゑん	しゅけい	めうせん	めうせん	めうしゆん	めうしゆん	めうきん	めうきん	ちゆけい	ちゆけい	釈　読	
	(法名)	仏教用語	不明	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	備　考	

1080	1079	1078	1077	1076	1075	1074	1073	1072	1071	1070	番　号	
ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	ⅩⅣ	地　区	
SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	SD67001	出土遺構	
F群	F群	F群	F群	F群	F群	F群	F群	F群	F群	F群	層　位	
土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	種　別	
Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	器　種	
12.2	11.6	(12.2)	14.1	13.9	12.3	14.6	12.8	12.4	12.6	12.7	長さ・口径	法量(　)は残存値
2.3	2.4	2.4	2.7	2.8	2.2	2.3	2.3	2.4	2.3	2.1	幅・器高	
4寸	4寸	4寸	4.5寸	4.5寸	4寸	5寸	4寸	4寸	4寸	4寸	寸　別	
めうゑん 又六 とう二ら たうゆう めうきん こうは□(ゑ)カ	ほん上はう うつか とうひやうへ そうけい とうちよ ゑむら	めう□ おもち こせう	とう二ら 又ら(ゥ)く こうはい とうひやうへ	ゑむら こせう たうけ□(ゝ)カ めうゑ□(ん)カ	ミツ□□ めうせん めうゑん	ほん上はう うつか	□う□	ち	ほ□(う)カかい	そう□□	釈　読	
			姓・官途成名	法名・姓ほか	法名	苗字・法名			仏教用語		備　考	

第３表　文字資料(墨書土器)釈読一覧(２)

番号	1092	1091	1090	1089	1088	1087	1086	1085	1084	1083	1082	1081
地区	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅣ	XⅣ
出土遺構	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD68001	SD67001
層位	A群	A群	A群	A群	A群	A群	A群	A群	A群	A群	—	F群
種別	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器
器種	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
法量( )は残存値 長さ・口径	12.5	12.8	12	12.6	12.6	12.7	(13.0)	12	12.7	12.6	8.7	12.5
法量( )は残存値 幅・器高	2.5	2.5	2.6	2.5	2.3	2.3	2.0	2.9	3.0	2.1	2.1	2.8
寸別	4寸	4寸	4寸	4寸	4寸	4寸	(4寸)	4寸	4寸	4寸	3寸	4寸
釈読	ちよけい	ちよけい	ちよけい	そうけん	そうけん	そうけん	ほう゛	ほうせい	ほうせい	ほうせい	そうけん	お□゛のへ゛ おちこ おと五れう゛ ほうしゆ めう□い゛ おにう おかめ
備考	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	

番号	1103	1102	1101	1100	1099	1098	1097	1096	1095	1094	1093
地区	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅥ－XⅧ	XⅧ－XX	XⅥ－XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅥ－XⅧ
出土遺構	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001
層位	A群	A群	A群	A群	A群	A群	A群	A群	A群	A群	A群
種別	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器
器種	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
法量( )は残存値 長さ・口径	12.3	(12.5)	12.5	12.9	13.0	13.0	12.7	－	12.4	12.2	11.7
法量( )は残存値 幅・器高	2.4	2.3	2.6	2.2	2.4	2.5	2.3	(2.3)	2.5	2.4	2.9
寸別	4寸	4寸	4寸	4.5寸	4.5寸	4.5寸	4寸		4寸	4寸	4寸
釈読	こうは□い゛ うミのかし やくこれう お□へ □ □は □	めうせん めうせん゛ めうゑ゛□ □かミ お□	めうせん めうきん たうゆう めうきん たうゆう	へや めうきん゛ まこ七 とう二ら	よした殿 □□た殿	めう□ん	ちゆけい	□うけん	めうけん	めうかう	めうかう
備考	人名・法名ほか	法名ほか	法名ほか	姓・その他	苗字・敬称	法名	法名	法名	法名	法名	法名

番号	1114	1113	1112	1111	1110	1109	1108	1107	1106	1105	1104
地区	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ－XX	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ／XⅥ－XⅧ
出土遺構	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001
層位	A群	A群	A群	A群	A群	A群	A群	A群	A群	A群	A群
種別	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器
器種	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
法量( )は残存値 長さ・口径	(13.0)	(12.6)	13.4	8.5	12.4	12.7	(13.2)	(12.1)	12.7	12.4	12.5
法量( )は残存値 幅・器高	(1.5)	2.2	2.5	2.3	2.7	2.4	(2.0)	2.0	2.3	2.5	2.5
寸別	(4.5寸)	4寸	4.5寸	3寸	4寸	4寸	4.5寸	4寸	4寸	4寸	4寸
釈読	□	□	□□く □□のおの ひ□ □	□ 月五日	六しんけんそく	□ むゑんほうかい	□ やく □□	ほ めう□	おちこ めうさい ほうちゆ こせう おもち こにう おかめ	うつか ほん上はう こうはい゛ たうけい 廿八日ちい	たまゆ゛ふ たうきん めうきん 七ほうはは
備考				月日	仏教用語	仏教用語	苗字	(法名)	法名・人名ほか	法名・姓・月日	法名・童名

第３表　文字資料（墨書土器）釈読一覧（３）

1128	1127	1126	1125	1124	1123	1122	1121	1120	1119	1118	1117	1116	1115	番号
XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅥ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	地区
SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	出土遺構
B群	A群	A群	A群	A群	A群	A群	A群	A群	A群	A群	A群	A群	A群	層位
土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	種別
皿	皿	皿	皿	皿	皿	皿	皿	皿	皿	皿	皿	皿	皿	器種
12.8	(11.9)	(4.0)	(1.7)	(1.6)	(1.8)	(2.6)	(3.8)	(11.8)	(12.0)	(13.2)	(12.0)	(11.4)	(11.9)	長さ・口径 法量( )は残存値
2.5	(1.8)	(4.6)	(3.1)	(2.7)	(3.8)	(2.3)	(3.8)	(2.0)	(1.6)	1.8	1.5	(2.2)	2.0	幅・器高
4寸	4寸							4寸	(4寸)	(4.5寸)	4寸	4寸	4寸	寸別
こせう 本上はう		□うせ									めヵ	□	□	釈読
														備考

1142	1141	1140	1139	1138	1137	1136	1135	1134	1133	1132	1131	1130	1129	番号
XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	地区
SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	出土遺構
B群	B群	B群	B群	B群	B群	B群	B群	B群	B群	B群	B群	B群	B群	層位
土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	種別
皿	皿	皿	皿	皿	皿	皿	皿	皿	皿	皿	皿	皿	皿	器種
(2.5)	(4.5)	(11.9)	(10.8)	(10.0)	(12.9)	(5.5)	(11.0)	(13.0)	(13.0)	(9.0)	(8.0)	8.7	8.3	長さ・口径 法量( )は残存値
(2.8)	(3.4)	(1.1)	(1.9)	(1.0)	(1.7)	(3.2)	2.2	(1.8)	(2.3)	(1.7)	(1.4)	2.1	2.0	幅・器高
												3寸	3寸	寸別
							ちやうて	□むゑヵ □				おこう	又六	釈読
							不明（頂天ヵ）					童名	その他の人名	備考

1156	1155	1154	1153	1152	1151	1150	1149	1148	1147	1146	1145	1144	1143	番号
XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	XⅧ	地区
SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	SD74001	出土遺構
C群	C群	C群	C群	C群	C群	C群	C群	C群	C群	B群	B群	B群	B群	層位
土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	種別
皿	皿	皿	皿	皿	皿	皿	皿	皿	皿	皿	皿	皿	皿	器種
(2.4)	−	(4.2)	(11.8)	(13.8)	(9.9)	8.4	12.1	12.8	12.4	(2.1)	(2.0)	(2.3)	(5.1)	長さ・口径 法量( )は残存値
(3.4)	(0.8)	(3.3)	(1.7)	(1.5)	(1.7)	2.0	2.3	2.4	2.4	(1.9)	(2.4)	(3.3)	(1.8)	幅・器高
					3寸	3寸	4寸		4寸					寸別
		□け				やく	めうしゅん	道ゑい	ほうせい					釈読
						苗字	法名	法名	法名					備考

第3表　文字資料(墨書土器)釈読一覧(4)

1170	1169	1168	1167	1166	1165	1164	1163	1162	1161	1160	1159	1158	1157	番　号	
Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ－Ⅹ Ⅹ	Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅵ	Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ	地　区	
SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD74001	SD74001	SD74001	出土遺構	
B群	B群	B群	B群	B群	B群	B群	B群	B群	B群	B群	C群	C群	C群	層　位	
土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	種　別	
Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	器　種	
(13.1)	12.8	12.9	8.8	13.0	12.4	12.1	(11.9)	12.4	12.5	12.8	(11.8)	(2.0)	(1.8)	長さ・口径	法量（　）は残存値
2.5	2.3	2.5	2.3	2.8	2.3	2.4	2.3	2.3	2.4	2.7	(1.6)	(3.6)	(2.1)	幅・器高	
4.5寸	4.5寸	4.5寸	3寸	4.5寸	4寸	4寸	4寸	4寸	4寸	4.5寸	4寸			寸　別	
そうけい	そうせん	しゅけい	うつか殿	めうこう	めうさい	ほうせい	␣うゆう	めうち	めうけん	めうけん				釈　読	
法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名				備　考	

1183	1182	1181	1180	1179	1178	1177	1176	1175	1174	1173	1172	1171	番　号	
Ⅹ Ⅷ－Ⅹ Ⅹ	Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ－Ⅹ Ⅹ	Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ－Ⅹ Ⅹ	Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ	地　区	
SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD74001	SD74001	SD75001	SD75001	出土遺構	
C群	C群	C群	C群	C群	C群	C群	C群	C群	B群	B群	B群	B群	層　位	
土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	種　別	
Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	器　種	
12.1	11.6	12.4	12.3	12.7	(12.2)	(12.3)	11.9	12.6	12.4	(12.7)	(8.4)	12.3	長さ・口径	法量（　）は残存値
2.1	2.4	2.1	2.4	2.6	2.3	2.3	2.2	2.5	2.5	2.8	2.2	2.5	幅・器高	
4寸	4寸	4寸	4寸	4.5寸	4寸	4寸	4寸	4.5寸	4寸	4.5寸	3寸	4寸	寸　別	
たうゆう	たうゆう	そうかう	そうかう	そうけい	□□ヵけい	せ□□	せんち	せんち	四月廿□五□ほ□	␣□␣□□と□	おちこめうちんおこう	□はヵち□	けたのわかしやうらう	釈　読	
法名	法名	法名	法名	法名	法名	（法名）	法名	法名	月日ほか	法名・童名他		人名か	備　考	

1197	1196	1195	1194	1193	1192	1191	1190	1189	1188	1187	1186	1185	1184	番　号	
Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ－Ⅹ Ⅹ	Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ－Ⅹ Ⅹ	Ⅹ Ⅷ	Ⅹ Ⅷ	地　区	
SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	出土遺構	
C群	C群	C群	C群	C群	C群	C群	C群	C群	C群	C群	C群	C群	C群	層　位	
土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	種　別	
Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	器　種	
11.9	12.2	12.2	12.6	12.3	12.0	(12.4)	12.4	12.1	12.2	12.1	12.3	12.0	12.0	長さ・口径	法量（　）は残存値
2.3	2.2	2.4	2.6	2.5	2.4	2.4	2.7	2.4	2.1	2.4	2.1	2.5	2.4	幅・器高	
4寸	4寸	4寸	(4寸)	4寸	4寸	4寸	4寸	4寸	4寸	4寸	4寸	4寸	4寸	寸　別	
␣う□ん	めうきん	ほうゐ□ん ヵ	□し ヵゆけい	めうち	め□ち ヵ	めうゑん	めうゑん	ほうせい	ほうせい	めうかう	□め ヵうかう	□そ ヵ□せん	そうせん	釈　読	
法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	備　考	

第３表　文字資料（墨書土器）釈読一覧（５）

番号	1198	1199	1200	1201	1202	1203	1204	1205	1206	1207	1208	1209	1210	1211
地区	ⅩⅧ	ⅩⅧ－ⅩⅩ	ⅩⅧ	ⅩⅧ	ⅩⅧ－ⅩⅩ	ⅩⅧ	ⅩⅧ	ⅩⅧ	ⅩⅧ	ⅩⅧ	ⅩⅧ	ⅩⅧ	ⅩⅧ	ⅩⅧ
出土遺構	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001
層位	C群	C群	C群	C群	C群	C群	C群	C群	C群	C群	C群	C群	C群	C群
種別	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器
器種	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
法量（ ）は残存値 長さ・口径	12.1	11.8	8.6	8.2	12.0	12.1	14.2	12.4	12.5	12.2	12.2	12.1	8.8	12.1
法量（ ）は残存値 幅・器高	2.2	2.2	2.1	1.9	2.6	2.5	2.2	2.4	2.5	2.3	2.1	2.3	2.2	2.2
寸別	4寸	4寸	4寸	4寸	4寸	4寸	4·5～5寸	4寸	4寸	4寸	4寸	4寸	3寸	4寸
釈読	めうけん	めうこ	めうちん	たうゑ	めうさい	め□	月けいせいうん	八備	みやしまのかミ	おくり	よねおくり	とくしゅしゅとく	おちこ	おこうおちこ
備考	法名	法名	法名	法名	法名	法名	法名	人名の略か	神名	童名	童名	法名	その他	童名・その他

番号	1212	1213	1214	1215	1216	1217	1218	1219	1220	1221	1222	1223
地区	ⅩⅧ	ⅩⅧ－ⅩⅩ	ⅩⅧ	ⅩⅧ	ⅩⅧ	ⅩⅧ	ⅩⅧ－ⅩⅩ	ⅩⅧ	ⅩⅧ	ⅩⅧ	ⅩⅧ	ⅩⅧ－ⅩⅩ
出土遺構	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001
層位	C群	C群	C群	C群	C群	C群	C群	C群	C群	C群	C群	C群
種別	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器
器種	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
法量（ ）は残存値 長さ・口径	13.0	12.2	14.4	(12.8)	12.3	14.0	12.4	8.6	12.2	8.7	8.5	12.5
法量（ ）は残存値 幅・器高	2.6	2.5	2.4	2.4	2.3	2.4	2.1	2.0	2.3	2.0	2.0	2.1
寸別		4寸			4寸		4寸	3寸	4寸	3寸	3寸	
釈読	又らくあちや	□わかしやうらう	めうゑんたかぬのかミこせう	おきくとらきく□しちよ□こう□ちこ	く	御ほん□□	六しん	六しんけんそく	□月廿日五月五日	四月廿日	廿六日のうい	上□□ちやうてん下□□の□ほうかいむゑ□ほう
備考	その他	不明	神名・法名ほか	人名	不明	仏教用語	仏教用語	仏教用語	月日	月日	月日	仏教用語

番号	1224	1225	1226	1227	1228	1229	1230	1231	1232	1233	1234
地区	ⅩⅧ	ⅩⅧ	ⅩⅧ	ⅩⅧ－ⅩⅩ	ⅩⅧ－ⅩⅩ	ⅩⅧ－ⅩⅩ	ⅩⅧ－ⅩⅩ	ⅩⅧ－ⅩⅩ	ⅩⅧ－ⅩⅩ	ⅩⅧ－ⅩⅩ	ⅩⅧ－ⅩⅩ
出土遺構	SD75001	SD76001	SD76001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001	SD75001
層位	C群	C群	C群	E群	E群	E群	E群	E群	E群	E群	E群
種別	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器	土師器
器種	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
法量（ ）は残存値 長さ・口径	8.5	8.8	(12.3)	13.8	13.4	14.0	(12.2)	13.4	11.8	13.8	13.4
法量（ ）は残存値 幅・器高	2.1	2.0	2.0	2.4	2.3	2.3	2.4	2.5	2.4	2.7	2.4
寸別	3寸	3寸		4.5寸	4.5寸	4.5寸	4寸	4.5寸	4寸	4.5寸	4.5寸
釈読	むゑんほうかい	やく	六しん□七せの□	ひせん殿	めうこせつちやうに	月けいせうん	ほうせい	本しやうはね、ほうしきくてう	けたのわか□にやにや	めうちんめうきんめうゑんミやちまのかミほんしやうはう	よねおくりほちこやくことうきくうしちくたんはのかミ□□さ□□□こ三郎はくほう「十」
備考	仏教用語	姓	仏教用語	人名（敬称）	法名	法名	法名	童名ほか	人名	法名・神名他	神名・童名・姓名・その他

第3表　文字資料（墨書土器）釈読一覧（6）

W－914	W－913	W－912	W－911	W－910	W－909	W－908	W－907	W－906	W－905	番　号
ⅥA・D	ⅥA・D	ⅣA	Ⅵ	ⅢC	ⅣA	ⅦD	ⅥA	XⅣ	Ⅰ	地　区
SD54001	SD54001	95－5面まで	95－4面まで	SD54002	95－集石部	95－2面まで	SD54001	SD68001	95－2面 火事かたづけ層	出土遺構
第3層	第3層		灰色礫混シルト	上半						層　位
木簡	木簡	木簡	木簡	木簡	木簡	木簡	木簡	木簡	木簡	種　別
付札	付札	付札	付札	付札	付札	付札	付札	付札	付札	器　種
(5.8)	(14)	10.7	12.3	15.9	12.9	19.6	16.9	15.0	(23.9)	長さ・直径
2.7	2.3	2.1	(1.8)	2.2	2.2	2.1	2.0	3.0	3.1	幅・器高
0.4	0.4	0.5	1.0	0.2	0.5	0.3	0.4	0.7	0.3	厚さ・底径
039	033	032		032	033	033	033	033	033	型　番
・「＜□ ・「＜め□	(墨痕なし)	「＜四□□□　小五郎」	・「＜□□」 ・「＜□□」	・「＜小□中志もの見や」 ・「＜今井殿からの米」	「＜米　三斗五升	「＜□上□」	・「＜田□□」 ・「＜□□」	・「＜ 一斗□□〔二升〕カ □□□□〔しち〕カ ・「＜ □□」	・「＜乃木出羽守かわこ一ツ　くりかわこ二ツ ・「＜永禄拾弐年八月廿四日以上三つ	釈　読

W－924	W－923	W－922	W－921	W－920	W－919	W－918	W－917	W－916	W－915	番　号
ⅨD	ⅨD	ⅨD	ⅥA	Ⅵ－Ⅸ		XⅢ	ⅦA	Ⅲ	Ⅶ	地　区
SD54002	95－3～4面 SD51005下層	95－3～4面 SD51005下層	第3面下	95－1～4面	95－4面 サブトレ	西側溝	SD5200 95－3面対応	土塁下部 (流路中か)	95－4面 土壌層	出土遺構
上半			腐植土			茶灰シルト	下層			層　位
木簡	木簡	木簡	木簡	木簡	木簡	木簡	木簡	木簡	木簡	種　別
付札	付札	付札	付札	付札	付札	付札	付札	付札	付札	器　種
22.1	26.4	29.7	21.5	12.8	(9.5)	15.1	17.4	(14.2)	(12.4)	長さ・直径
2.9	3.3	3，6	3.3	2.2	2.0	2.6	(1.0)	2.4	2.7	幅・器高
0.5	0.6	0.4	0.5	0.4	0.8	0.1	0.3	0.4	0.4	厚さ・底径
051	051	051	051	051	51	051	032	039	032	型　番
「。三月壱斗七合　六郎」	「。正月米壱斗五升　九郎三郎」	「。正月壱斗五合丹よた郎」	(墨痕なし)	□□	「ミの毛カ 「この □	「ち□わせ 「ちと□せ五郎」	(墨痕なし)	「＜二はん 貳百入	・「＜(目印)二百入□の□ ・「＜(目印)□	釈　読

W－932	W－931	W－930	W－929	W－928	(参考)	W－927	W－926	W－925	番　号
XⅢ	ⅥC	ⅥD	ⅦC	ⅨA	入佐川4区	ⅨD	ⅨD	ⅨD	地　区
西側溝	SD54002	SD54001	95－4面まで 段差より北 SD52008より南	SD54001	入佐川 第2遺構面	95－1面 SD51005	SD54002	95－1面 SD51005	出土遺構
砂層の上		第2層 腐植土		暗茶灰腐植土	包含層		上半		層　位
木簡	木簡	木簡	木簡	木簡	木簡	木簡	木簡	木簡	種　別
習書	付札	付札	付札	付札	付札	付札	付札	付札	器　種
33.8	20.0	(19.3)	11.7	6.7	28.2	26.9	25.6	27.3	長さ・直径
5.0	2.8	(2.8)	4.1	2.5	3.8	2.2	2.7	2.8	幅・器高
0.4	0.4	0.2	0.8	3.5	0.5	0.4	0.5	0.4	厚さ・底径
			011	022	051	051	051	051	型　番
「□□□□九〔廿廿〕カ 三□五六七八」	(墨痕なし)	「三ツ四郎　門殿　□ち□ 六郎二□」	「わミ衛門カ 小三郎」	「。の□□カ」	「。十一月壱斗七合　かふや」	「。八月一斗七合　や三郎カ」	「。六月一斗七合　三郎□□」	「。五月壱斗七合ひこ三郎カ」	釈　読

第４表　文字資料(木簡)釈読一覧(１)

W－940	W－939	W－938	W－937	W－936	W－935	W－934	W－933	番　号	
ⅥB	ⅥD	ⅥD	ⅥD	ⅥD	ⅩⅡ	ⅥA	ⅩⅡ	地　区	
SD54001	SD54001	SD54001	SD54001	SD54001	サブトレA 土塁上	SD54001	8面まで	出土遺構	
第2層　腐植土	第2層　腐植土	第2層 腐植土	第2層 腐植土	第2層 腐植土	腐植土		灰色シルト	層　位	
容器	木簡	容器	容器	容器	容器	木簡	容器	種　別	
折敷	不明	曲物側板	曲物側板	曲物側板	柄杓の柄	不明	曲物底板	器　種	
(5.1)	(8.9)	(4.3)	(3.2)	(3.8)	(18.5)	16.7	6.7	長さ・直径	法量（　）は残存値
(21.9)	(3.0)	(5.1)	(11.1)	(12.1)	2.4	7.5	6.3	幅・器高	
0.3	0.4	0.2	0.2	0.1	0.9	0.9	0.5	厚さ・底径	
					081	065		型　番	
おたい け候御 候へく □□ 小□ □ □こと□ □升□	・「三□ □□ ・「あ□□に□ あつかりけり□ □□	□	一ツ	小七□	「百之ひしゃく」	「四間口六郎二郎	「かよ」	釈 読	

W－950	W－949	W－948	W－947	W－946	W－945	W－944	W－943	W－942	W－941	番　号	
ⅩⅡ	ⅩⅧ	ⅩⅧ	ⅩⅡ	ⅩⅡ	ⅣA	ⅩⅣ	ⅩⅡ	ⅩⅥ	ⅢC	地　区	
SD68002－b	SD75001 コーナーより東杭列部	SD75001 コーナーより東杭列部	SD68002	96－8面まで	95－3＋1～5面	SD69001	SD68002－b	SD75001	95－3面より下	出土遺構	
				灰色シルト		溝底				層　位	
祭祀具	容器	容器	容器	容器	容器	容器	容器	容器	容器	種　別	
位牌	三宝	三宝	三宝	折敷	折敷	折敷	折敷	折敷	折敷	器　種	
25.6	16.4	25.1	16.2	(8.4)	(6.6)	28.7	14.3	13.4	27.7	長さ・直径	法量（　）は残存値
9.5	15.4	16.8	16.3	(17.8)	26.6	14.2	25.0	26.4	(4.0)	幅・器高	
7.0	16.4	17	16.2	0.3	0.5	3.1	3.5	0.3	0.4	厚さ・底径	
061	061	061	061	061	081	061	061	061		型　番	
・「帰本　道祐禅門霊位」 ・「天文廿三年七月廿三日」	「しゆけい」	「ほうせ□」	「ほうせい」	「□うこ□」	「二十」	「そうかう」	「そうせん」	「上」	□□□□□□□	釈 読	

W－959	W－958	W－957	W－956	W－955	W－954	W－953	W－952	W－951	番　号	
	ⅣC	ⅨA	ⅦC	ⅨB・C	ⅩⅡ	ⅩⅢ	ⅩⅥ－ⅩⅧ	ⅩⅠ	地　区	
SD69002	SD54001	SD54001	4a	SD54001	96－8面まで	下層水田Ⅴ	SD75001	96－4面	出土遺構	
	溝底		腐植土						層　位	
建築部材	不明	遊戯具	遊戯具	遊戯具	遊戯具	祭祀具	祭祀具	祭祀具	種　別	
床板	不明	闘茶札	闘茶札	闘茶札	将棋の駒	呪符	柿経	卒塔婆	器　種	
(38.6)	(39.6)　(28.8)	3.0	3.7	3.1	3.0	(13.2)	12.4	(29.7)	長さ・直径	法量（　）は残存値
(19.6)	6.3　6.1	3.2	1.8	2.7	2.7	4.6	2.7	6.0	幅・器高	
1.9	0.5　0.5	0.5	0.4	0.4	1.1	0.6	0.5	0.4	厚さ・底径	
061	065	021	021	021	061	019	019	019	型　番	
「□六□ い□□」	「ろ」	・「□」	・「亀」 ・「□」	・「一」 ・「一」	・「銀将」 ・「竪行」	「（符籙）尸尸鬼鬼鬼 鬼鬼鬼鬼鬼鬼 鬼鬼鬼 □□ 「尸鬼」か	「過去有仏号威音王神×	・「梵字（ウーン）見我身者発菩提心門我名 聴我説者得大智恵智我□ ・「梵字（ハンキリーク）南无阿弥	釈 読	

第４表　文字資料（木簡）釈読一覧（２）

第Ⅷ章　自然科学分析

第１節　宮内堀脇遺跡から出土した動物遺存体

第Ⅶ章　第1節は

公開していません

第２節　宮内堀脇遺跡出土遺物の種実同定

株式会社古環境研究所

1．はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、条件が良いところでは堆積物中に残存している。堆積物から種実を検出し、その群集の構成や組成から過去の植生や群落の構成要素を明らかにすることで古環境の推定が可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境も調べることができる。

2．試料

試料は、15世紀から16世紀末とされる堀・土塁の内側（東側）に建物群が散存する武家屋敷遺構より採取されたもので、すべて水洗選別済みである。

3．方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

4．結果

（1）分類群

樹木９、草本９の計18分類群が同定された。学名、和名および粒数を表１～３に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記す。

〔樹木〕

マツ属複維管束亜属　*Pinus* subgen. *Diploxylon*　毬果　マツ科

黒褐色で卵形を呈す。種鱗先端の外部に露出する部分は扁平５角形であり、その中央にはへそがある。

オニグルミ　*Juglans ailanthifolia* Carr.　核（完形・半形・破片）　クルミ科

茶褐色で円形～楕円形を呈し、一端がとがる。側面には縦に走る一本の縫合線がめぐる。表面全体に不規則な隆起がある。

ヒメグルミ　*Juglans mandshurica* Carr. var. *cordiformis* Rehder　核（完形）　クルミ科

淡褐色で円形を呈し、一端がとがる。側面には縦に走る一本の縫合線がめぐる。表面にはオニグルミと比べて明瞭な隆起はない。断面は円～楕円形である。

クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　堅果（破片）　ブナ科

堅果は三角状扁円形を呈す。一側面は円みがあり、反対面は平らな形が多い。両面とも円みがある。

コナラ属　*Quercus*　堅果（破片）　ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。この分類群は殻斗が欠落し破片のため、属レベルの同定までである。

ヤマグワ　*Morus australis* Poir.　種子　クワ科

茶褐色で広倒卵形を呈し、基部に突起がある。表面はやや粗い。

モモ　*Prunus persica* Batsch　核（完形・半形）　バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

スモモ　*Prunus salicina* Lindley　核（完形・破片）　バラ科

淡褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が走る。表面には不明瞭で微細な凸凹がある。断面は扁平である。

カキノキ　*Diospyros kaki* Thunb.　種子（完形・破片）　カキノキ科

黒褐色で非対称的広倒卵形を呈し、曲線状の背面は狭倒皮針形で、直線状の腹面は稜をなす。

〔草本〕

イネ　*Oryza sativa* L.　穎（破片）・果実（炭化）　イネ科

穎は茶褐色で扁平楕円形を呈し、下端に枝梗が残る。表面には微細な顆粒状突起がある。完形のものは無かった。炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、枝梗の部分が残る。表面には数本の筋が走る。

イネ科　Gramineae　穎

穎は灰褐色～茶褐色で楕円形を呈す。腹面はやや平ら。背面は丸い。表面は滑らかである。

カヤツリグサ科　Cyperaseae　果実

茶褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平である。

タガラシ　*Ranunculus scleratus* L.　果実　キンポウゲ科

黄褐色、扁平、ややレンズ状。側面にしわはないが、滑らかではない。

トウガン　*Benincasa cerifera*　種子　ウリ科

卵倒形を呈し、扁平。周辺部の縁は平行に一段高くなる。

ヒョウタン類　*Lagenaria siceraria* Standl.　種子（破片）・果皮（破片）　ウリ科

種子は淡褐色で楕円形を呈す。上端にはへそと発芽孔があり、下端は波うつ切形を呈す。表面には縦に2本の低い稜が走る。果皮は、木質化しやや厚みがある。表面はなめらかで裏面は粗い。

藤下がヒョウタン仲間とするものには、ヒョウタン・フクベ・カンピョウが含まれており、このうちフクベ・カンピョウは食用になる。

ウリ類　*Cucumis melo* L.　種子　ウリ科

淡褐色～黄褐色である。楕円形を呈し、一端には「ハ」字状のへこみがある。

藤下（1992）による長さ8.1㎜以上の大粒種子（モモルディカ型）にあたる。

タカサブロウ　*Eclipta prostrata* L.　果実　キク科

黄褐色で長倒卵形を呈し、一端は切形である。中央部にはいぼ状の突起がある。

（2）種実群集の特徴

1）宮内堀脇遺跡（950223）

マツ属複維管束亜属3、オニグルミ22、ヒメグルミ1、コナラ属片1、ヤマグワ38、モモ21、スモモ11、イネ穎61・炭化果実1、イネ科2、カヤツリグサ科1、タガラシ214、トウガン676、ヒョウタン果皮1・種子2、ウリ類55、タカサブロウ1が同定された。

2）宮内堀脇Ⅱ遺跡（960362）

クリ片6、モモ1、不明毬果4が同定された。

3）宮内堀脇Ⅲ遺跡（970351）

モモ5、スモモ1、カキノキ27、トウガン53、ヒョウタン1、ウリ類6が同定された。

第15表　宮内堀脇遺跡における種実同定結果

No.	地区名	遺構名	分類群		部位	個数	備考
			学名	和名			
950223	Ⅱ－D	SD1001	*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	
	Ⅲ－A	第3面．内堀の埋土	*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	11	
					(半形)	1	
	Ⅲ－C	第3面より下					木片1
	Ⅳ－C	SD2002上半	*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	
		SD2003	*Juglans ailanthifolia* Carr	オニグルミ	核(半形)	2	
			Prunus persica Batsch	モモ	核(完形)	1	
	Ⅴ－A	北西半．4面まで	*Oryza sativa* L.	イネ	穎	39	
					(破片)	(＋＋＋)	
			Gramineae	イネ科	穎	1	
			Benincasa cerifera Savi	トウガン	種子	3	
		第1面P.T7					繭4
	Ⅵ	ⅤB内．5a対応	*Oryza sativa* L.	イネ	穎(破片)	(＋＋＋)	サナギ片(＋)
	Ⅵ－B	SD4003	*Benincasa cerifera* Savi	トウガン	種子	113	
			Cucumis melo L.	ウリ類	種子	1	
	Ⅵ－B(南半)	第3整地層中	*Lagenaria siceraria* Standl.	ヒョウタン類	果皮(破片)	1	
	Ⅵ－BC	SD4001.0～20層	*Cucumis melo* L.	ウリ類	種子	3	
	Ⅵ－C	SD2003	*Benincasa cerifera* Savi	トウガン	種子	1	
			Cucumis melo L.	ウリ類	種子	39	
	Ⅵ－D	SD4001．第2層	*Morus australis* Poir.	ヤマグワ	種子	38	
			Oryza sativa L.	イネ	穎(破片)	22	
			Oryza sativa L.	イネ	果実	1	
			Gramineae	イネ科	穎	1	
			Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	1	
			Ranunculus scleratus L.	タガラシ	果実	162	
			Cucumis melo L.	ウリ類	種子	3	
			Eclipta prostrata L.	タカサブロウ	果実	1	
	Ⅶ－C	第3面＋1	*Juglans ailanthifolia* Carr	オニグルミ	核(完形)	1	
					(半形)	1	
	Ⅶ－D	SD2008－a区	*Juglans ailanthifolia* Carr	オニグルミ	核(半形)	4	
					(破片)	1	
			Prunus persica Batsch	モモ	核(完形)	2	
					(半形)	1	
	Ⅶ－D	SD2008	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	毬果	3	
			Juglans ailanthifolia Carr	オニグルミ	核(破片)	1	
			Prunus persica Batsch	モモ	核(完形)	1	
			Lagenaria siceraria Standl.	ヒョウタン類	種子(破片)	1	木片(＋)
			Cucumis melo L.	ウリ類	種子	5	
			Unknown	不明種実		2	
	Ⅶ－Ⅷ	2a？	*Juglans ailanthifolia* Carr	オニグルミ	核(完形)	1	
	Ⅷ	SD2008南溝層	*Juglans ailanthifolia* Carr	オニグルミ	核(半形)	4	
		南西．第4面まで	*Juglans ailanthifolia* Carr	オニグルミ	核(完形)	1	
		南西半．第4面まで	*Quercus*	コナラ属	堅果(破片)	6	
			Aesculus turbinata Blume	トチノキ	堅果(破片)	2	
			Benincasa cerifera Savi	トウガン	種子	556	
			Cucumis melo L.	ウリ類	種子	1	
		粘土盛土中	*Juglans mandshurica* var. Rehder	ヒメグルミ	核(完形)	1	
		第3面上層ヵ	*Lagenaria siceraria* Standl.	ヒョウタン類	種子(破片)	1	
			Cucumis melo L.	ウリ類	種子	31	
	Ⅷ(南半分)	第2面＋1まで	*Benincasa cerifera* Savi	トウガン	種子	3	
			Cucumis melo L.	ウリ類	種子	11	
	Ⅷ－A	22K中．第2面まで	*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	2	
	Ⅸ－A	SD4001	*Ranunculus scleratus* L.	タガラシ	果実	52	
	3面	SD2009内ヵ	*Juglans ailanthifolia* Carr	オニグルミ	核(半形)	6	
			Unknown	不明種実	毬果	1	
	Ⅳ	第3整地層より下	*Prunus salicina* Lindley	スモモ	核(完形)	11	
					(破片)	1	

第16表　宮内堀脇Ⅱ遺跡における種実同定結果

No.	地区名	遺構名	分類群		部位	個数	備考
			学名	和名			
960362	XI	3a中．第4面まで	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ	堅果(破片)	6	
	XII	SD9002	*Prunus persica* Batsch	モモ	核(半形)	1	
	XIII	第4面まで.3a	Unknown	不明種実	毬果	4	

第17表　宮内堀脇Ⅲ遺跡における種実同定結果

No.	地区名	遺構名	分類群		部位	個数	備考
			学名	和名			
970351	XV－XVI	東側整地層の下	*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	
	XVI	SD4001	*Cucumis melo* L.	ウリ類	種子	1	
	XVIII－XX	SD5001	*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	1	
	XVI	第2面まで		不明植物遺体	破片	2	
	XVI－XVIII	SD4001主	*Prunus persica* Batsch	モモ	核(完形)	3	
			Prunus salicina Lindley	スモモ	核(完形)	1	
			Diospyros kaki Thunb.	カキノキ	種子(完形)	27	
					(破片)	(+)	
			Benincasa cerifera Savi	トウガン	種子	53	
			Lagenaria siceraria Standl.	ヒョウタン類	種子	1	
			Cucumis melo L.	ウリ類	種子	5	
	XXIII	第3整地層直下SD4001最下層					根1

5．考察

宮内堀脇遺跡における種実同定の結果、マツ属複維管束亜属、オニグルミ、ヒメグルミ、クリ、コナラ属、ヤマグワ、モモ、スモモ、カキノキ、イネ、イネ科、カヤツリグサ科、タガラシ、トウガン、ヒョウタン、ウリ類、タカサブロウが同定された。これらの中で明らかな栽培植物は、モモ、スモモの果樹、トウガン、ヒョウタン、ウリ類の畑作物であり、いずれも弥生時代以降に出土例が多い。また、ヒメグルミ、クリ、ヤマグワ、カキノキは食用等として利用される有用植物であるが、在来種であるため栽培かどうかは不明である。オニグルミは谷沿いに多く生育し、マツ属複維管束亜属は二次林種のアカマツが考えられる。イネ科、カヤツリグサ科は人里植物、水田雑草、畑地雑草であり、タガラシは水田雑草、タカサブロウは水田雑草と畑作雑草の双方の性格をもつ。

参考文献

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.

笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類．弥生文化の研究第2巻生業，雄山閣　出版，p.131－139.

金原正明（1996）古代モモの形態と品種．月刊考古学ジャーナルNo.409，ニューサイエンス社，p.15－19.

南木睦彦（1991）栽培植物．古墳時代の研究第4巻生産と流通Ⅰ，雄山閣出版株式会社，p.165－174.

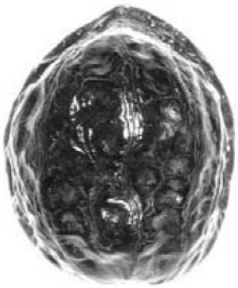
南木睦彦（1992）低湿地遺跡の種実．月刊考古学ジャーナルNo.355，ニューサイエンス社，p.18－22.

1 マツ属複維管束亜属毬果

2 マツ属複維管束亜属毬果

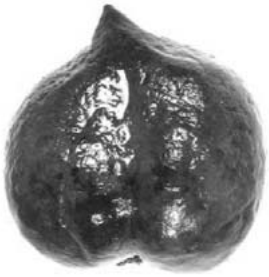
10.0mm

3 オニグルミ核



4 オニグルミ核

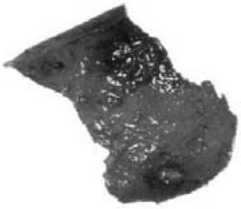
10.0mm



5 ヒメグルミ核

10.0mm

6 クリ堅果



7 同左

10.0mm

8 コナラ属堅果片

5.0mm

9 ヤマグワ種子

5.0mm

10 モモ核

11 モモ核

12 モモ核

5.0mm

13 スモモ核

14 スモモ核

5.0mm

15 カキノキ種子

16 カキノキ種子

5.0mm

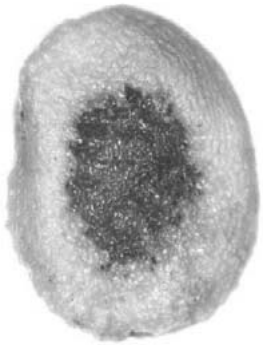
写真8　宮内堀脇遺跡の種実Ⅰ

1 イネ頴 1.0mm

2 イネ炭化果実 1.0mm

3 イネ科頴 1.0mm

4 カヤツリグサ科果実 1.0mm



5 タガラシ果実

6 タガラシ果実 0.5mm

7 トウガン種子

8 トウガン種子 1.0mm

9 ヒョウタン果皮片 10.0mm

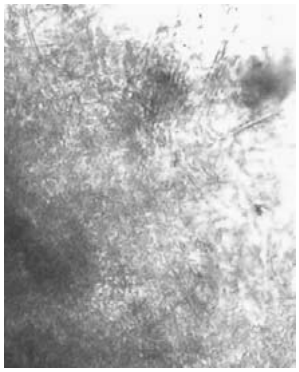
10 ヒョウタン種子 5.0mm

11 ウリ類種子

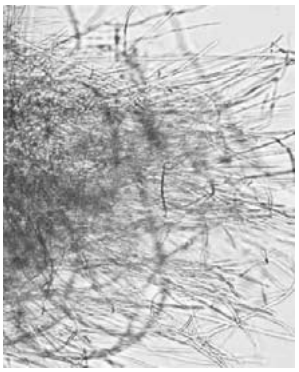
12 ウリ類種子 1.0mm

13 タカサブロウ果実 10.0mm

14 不明繭 10.0mm



15 同左拡大



16 同左強拡大

写真9　宮内堀脇遺跡の種実Ⅱ

第３節　宮内堀脇遺跡Ⅰ出土木製品の樹種

京都大学名誉教授　伊東隆夫

兵庫県豊岡市出石町宮内に所在する宮内堀脇遺跡は、円山川河口より約20㎞遡った出石川流域の沖積地に立地する。このあたりの標高は海抜４～８ｍと低く、堆積土が粘質土で地下水位も高いため木製品の遺存状態が良い。今回の調査では、江戸～弥生時代にわたる遺構・遺物が検出された。中でも室町時代の守護大名である山名氏居城の此隅山城下の堀や土塁、武家屋敷跡より、当時の生活に関わる遺物が多く出土している。また、下層の鎌倉時代の水田跡からは畦畔の下に敷かれた枝や杭、平安時代の水田跡からは人型などの祭祀具が、奈良～古墳時代の水田跡からは田下駄などの農具や建築部材等が多数出土した。

今回、樹種同定を行った遺物は、主に中世末期の武家屋敷遺構群から出土した多種多様な木製品であり、樹種同定を行った試料の総点数は180点にのぼる。

定法にしたがって、安全カミソリで木片から木口面、柾目面、板目面の３断面の薄い切片を切り取り、スライドガラスに載せ、ガムクロラールで封入して顕微鏡観察用プレパラートを作製した。つぎに、以下の樹種ごとの顕微鏡的特徴を観察して樹種を同定した。

モミ（*Abies firma* Sieb. et Zucc.）

樹脂道および樹脂細胞を欠く。放射柔細胞壁は厚く、末端壁は数珠状となる。

マツ属複維管束亜属（*Pinus* sp. *Diploxylon*）

樹脂道が存在する。樹脂細胞はみられない。分野壁孔は典型的な窓状。放射仮道管が存在し、仮道管内壁に鋸歯状突起がみられる。

スギ（*Cryptomeria japonica* D. Don）

樹脂道を欠く。樹脂細胞は晩材部にまばらにかつ接線状にならぶ。分野壁孔は典型的なスギ型。

ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa* Endlicher）

樹脂道を欠く。樹脂細胞は晩材部にまばらにかつ接線状にならぶ。分野壁孔は典型的なヒノキ型。

ヤナギ属（*Salix* sp.）

散孔材。道管の大きさは中庸で多くが放射方向に２－３個複合する。放射組織は単列異性。道管と直立細胞間の壁孔はふるい状となる。

クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）

環孔材。孔圏道管は非常に大きく、複列となる。単穿孔。孔圏外道管は火炎状となる。放射組織は単列。

アカガシ亜属（*Quercus* L. *Cyclobalanopsis*）

放射孔材。やや大型の道管がほぼ単独で放射状に配列する。単穿孔。単列放射組織と複合放射組織がみられる。

コナラ節（*Quercus* L. Sect *Prinus*）

環孔材。孔圏道管は大きく、単穿孔を有する。小さく多数の孔圏外道管が放射状ないし火炎状に配列する。単列放射組織と複合放射組織が存在する。

クヌギ節（*Quercus* L. Sect *Cerris*）

環孔材。孔圏道管は大きく、単穿孔を有する。孔圏外道管は小さく、壁が厚く、単独で放射状に並ぶ。単列放射組織と複合放射組織が存在する。

ケヤキ（*Zelkova serrata* Makino）

環孔材。孔圏道管は一列で単穿孔を有する。孔圏外道管は花綱状にならぶ。放射組織は異性で１－５列。放射組織縁辺の細胞にしばしば結晶を含む。

ヤマグワ（*Morus australis* Poiret）

環孔材。孔圏道管は大きく、単穿孔を有する。道管にチロースがみられる。孔圏外道管は多数が集合する。放射組織は異性で１－５列となる。

モクレン属（*Magnolia* sp.）

散孔材。道管は中庸で２－数個放射状に複合し、単穿孔を有する。道管にチロースがみられる。隔壁木繊維がみられる。放射組織は異性で、１－２列。

モッコク（*Ternstroemia japonica* Thunb.）

散孔材。きわめて小さい道管がほぼ単独で一様に多数分布する。階段穿孔。放射組織は異性Ⅰないし Ⅱ型で１－４列となる。

ヒサカキ（*Eurya japonica* Thunberg）

散孔材。道管径はきわめて小さい。バーのきわめて多い階段穿孔。らせん肥厚。放射組織は異性で、１－４列。

イスノキ（*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.）

散孔材。道管径はやや小さい。階段穿孔。らせん肥厚。放射組織は異性で、１－４列。

トチノキ（*Aesculus turbinate* Blume）

散孔材。やや小さい道管が単独ないし２－３個放射複合。単穿孔。放射組織は単列で、層階状に配列。

コシアブラ（*Acanthopanax sciadophylloides* Fr. Et Sav.）

環孔材。孔圏道管は単列で不連続に並ぶ。孔圏外道管は散在しときに集団をなす。放射組織は同性ないし異性Ⅲ型で、１－４列となる。

エゴノキ（*Styrax japonica Sieb*. Et Zucc.）

散孔材。中庸の道管が放射方向に２－６個複合して分布する。年輪後半部には道管の分布が少ない。階段穿孔。放射組織は異性Ⅰないし Ⅱ型で、１－３列となる。軸方向柔組織は年輪後半で短接線状となる。

タケ亜科（Bambusoideae）

維管束がクローバ状に見られる。放射組織を欠く。厚壁繊維群を軸方向柔組織が取り囲む。

樹種同定の結果は第18表に示した。同表から種類別の樹種をまとめると、以下のようになる。

建築部材（18点）：根太、柱材、板材、部材、屋根材、墨書木板、杭、不明部材などで樹種構成は、スギ８点、クリ４点、マツ属複維管束亜属４点、ヒノキ１点、モミ１点。

工具（８点）：漆刷毛、木槌、砧（横槌）が出土し、漆刷毛はヒノキ５点、スギ１点、木槌はコナラ節１点、砧（横槌）はクリ１点。

祭祀具（10点）：馬形、形代、刀形、鳥形、陽物、舟形などで樹種構成は、スギ２点、モミ３点、クリ２点、アカガシ亜属１点、コナラ節１点、ヒノキ１点。

食事具（16点）：切匙、杓子、杓文字、栓、箸、俎板、麺棒などで樹種構成は、スギ11点、モミ１点、ヒノキ１点、マツ属複維管束亜属２点、クリ１点。

調度具（６点）：燭台、灯台、箱などで樹種構成は、スギ４点、ヒノキ２点。

農具（13点）：馬鍬、鎌、杵、鍬、田下駄大足、木錘などで樹種構成は、スギ２点、マツ属複維管束亜属２点、クリ２点、コナラ節２点、クヌギ節２点、ヒノキ１点、アカガシ亜属１点、ヒサカキ１点。

武器（２点）：鞘と小刀の鞘でそれぞれマツ属複維管束亜属１点とヒノキ１点。

武具（３点）：刀の柄と小刀の鞘でそれぞれヒノキ１点、刀子の鞘でモクレン属１点。

服飾具（25点）：櫛、下駄、紡織具、糸巻、紡錘車、遊戯具、香木、羽子板などで櫛はモッコク２点、イスノキ１点、下駄はモクレン属８点、スギ４点、ヒノキ４点、マツ属複維管束亜属４点、ヤナギ属２点、紡織具（６点）は糸巻でスギ１点、紡錘車でスギ４点、ヤナギ属１点。

遊戯具（７点）：羽子板、不明品（付け木？）、毬杖の玉？などで、羽子板はモミ３点、ヒノキ１点、エゴノキ１点、不明品（付け木？）はコシアブラ１点、毬杖の玉？はエゴノキ１点。

容器（60点）：大皿、桶、折敷、木地椀、皿、三宝、槽、底板、盥、把手、柄杓、蓋置き、などで、大皿（３点）はクリ３点、桶（８点）はスギ７点、ヒノキ１点、折敷（20点）はスギ９点、ヒノキ８点、モミ３点、木地椀（２点）はクリ１点、トチノキ１点、皿はヒノキ１点、三宝（４点）はヒノキ３点、スギ１点、槽（１点）はマツ属複維管束亜属１点、底板はスギ１点、盥はスギ１点、柄杓（８点）はスギ４点、ヒノキ３点、マツ属複維管束亜属１点、蓋置きはタケ亜科１点、把手（１点）はマツ属複維管束亜属１点、曲物（７点）はヒノキ５点、スギ２点、六角形の底板はヒノキ１点。

その他（１点）：火きり臼でスギ１点のみ。

用途不明（１点）：マツ属複維管束亜属１点。

樹種別の傾向を見るために10点以上検出されている樹種をあげると、スギ65点、ヒノキ30点、マツ属複維管束亜属18点、クリ14点、モミ11点であった。スギの用途で最も多いのは容器（24点）であり、ヒノキでも容器（23点）の用途が最も多く、本遺跡で針葉樹を容器として使用する傾向が目立った。

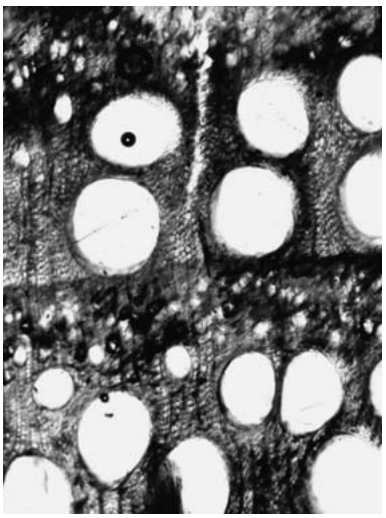
第18表　宮内掘脇遺跡Ⅰ樹種同定試料一覧

試料No.	種類	器種	図版表記No.	樹種	時代
1	容器	木地椀	W340	クリ	江戸
2	武具	刀子の鞘	W271	モクレン属	不明
3	農具	鎌柄	W245	マツ属複維管束亜属	不明
4	服飾具	下駄（台）	W308	モクレン属	安土・桃山
5	服飾具	下駄（歯）	W308	モクレン属	安土・桃山
6	容器	曲物（底板）	W604	ヒノキ	室町
7	容器	曲物（側板）	W604	ヒノキ	室町
8	容器	把手	W651	マツ属複維管束亜属	室町
9	祭祀具	鳥形？	W714	モミ	安土・桃山
10	容器	折敷（底板）	W534	スギ	室町
11	容器	折敷（底板）	W542	モミ	室町
12	容器	折敷（脚）	W556	ヒノキ	室町
13	容器	折敷（脚）	W557	スギ	室町
14	祭祀具	陽物	W379	クリ	室町
15	食事具	蒲鉾板	W389	モミ	室町
16	食事具	蒲鉾板	W413	スギ	室町
17	武具	刀の柄	W272	ヒノキ	室町
18	服飾具	下駄	実測なし	モクレン属	安土・桃山
19	服飾具	櫛	W284	モッコク	室町
20	容器	六角形の底板	W499	ヒノキ	室町
21	食事具	杓文字	W475	マツ属複維管束亜属	室町
22	工具	砧（横槌）	W238	クリ	室町
23	農具	木錘	W249	ヒサカキ	室町
24	容器	木地椀	W341	トチノキ	室町
25	容器	折敷（脚）	W564	スギ	室町
26	食事具	切匙	W444	ヒノキ	室町
27	農具	鎌	W246	ヒノキ	室町
28	服飾具	下駄	W287	スギ	室町
29	容器	曲物	実測なし	ヒノキ	安土・桃山
30	紡織具	紡錘車	W265	スギ	不明
31	遊戯具	羽子板	W702	ヒノキ	室町
32	建築部材	板材	不明	スギ	安土・桃山
33	遊戯具	羽子板	W704	モミ	室町
34	服飾具	下駄	不明	モクレン属	安土・桃山
35	農具	木錘	W250	クリ	室町
36	武具	小刀の鞘	W226	ヒノキ	室町
37	容器	皿？	W339	ヒノキ	室町
38	調度具	燭台	W232	スギ	室町
39	祭祀具	刀形	W724	スギ	室町
40	不明	斧柄	W853	ヤマグワ	室町
41	武器	鞘	W878	マツ属複維管束亜属	室町
42	農具	砧（横槌）	W237	クリ	室町
43	祭祀具？	舟形？	W805	ヒノキ	室町
44	不明	ヤリガンナの鞘	W227	スギ	室町
45	農具	鍬	W242	コナラ節	室町
46	服飾具	下駄	W288	モクレン属	室町
47	建築部材	自在？	W829	スギ	室町
48	容器	桶	W636	スギ	室町

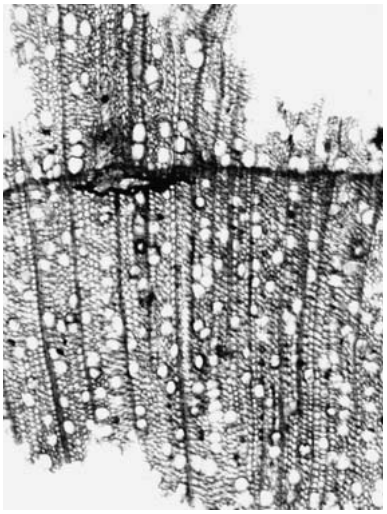
試料No.	種類	器種	図版表記No.	樹種	時代
49	食事具	蒲鉾板	W409	スギ	室町
50	食事具	杓子	W476	スギ	鎌倉
51	武器	小刀の鞘	W225	ヒノキ	室町
52	容器	三宝	W553	スギ	室町
53	容器	折敷	W491	モミ	室町
54	遊戯具	毬杖の玉？	W706	エゴノキ	室町
55	調度具	箱	W671	ヒノキ	室町
56	遊戯具	不明品（付け木？）	W834	コシアブラ	室町
57	容器	折敷	W544	スギ	室町
58	工具	木槌	W252	コナラ節	室町
59	服飾具	下駄	W298	ヒノキ	室町
60	服飾具	下駄（台）	W309	モクレン属	室町
61	服飾具	下駄（歯）	W309	モクレン属	室町
62	祭祀具	形代？	W737	モミ	室町
63	祭祀具	刀形	W727	モミ	室町
64	祭祀具	陽物	W745	クリ	室町
65	調度具	箱（側板）	実測なし	スギ	室町
66	調度具	箱（側板）	実測なし	スギ	室町
67	容器	折敷（脚）	W560	スギ	室町
68	食事具	麺棒	W848	クリ	室町
69	食事具	杓文字	W478	スギ	室町
70	農具	鍬（身）	W239	クヌギ節	室町
71	農具	鍬（柄）	W239	クヌギ節	室町
72	容器	折敷（底板）	W515	ヒノキ	室町
73	容器	折敷（側板）	W515	ヒノキ	室町
74	容器	折敷（底板）	W515	ヒノキ	室町
75	容器	折敷（側板）	W515	ヒノキ	室町
76	服飾具	草履（連歯）	W314	マツ属複維管束亜属	室町
77	容器	曲物	W605	ヒノキ	室町
78	遊戯具	羽子板	W484	スギ	不明
79	祭祀具	陽物	W742	アカガシ亜属	室町
80	不明	？	W839	ケヤキ	室町
81	容器	盥	W624	スギ	室町
82	紡織具	紡錘車	不明	ヤナギ属	室町
83	服飾具	下駄	W299	ヒノキ	室町
84	容器	桶	W631	スギ	室町
85	服飾具	下駄	W296	ヤナギ属	室町
86	紡織具	紡錘車	W261	スギ	室町
87	容器	槽	W680	マツ属複維管束亜属	室町
88	不明	柄	W843	マツ属複維管束亜属	室町
89	服飾具	下駄	W302	ヒノキ	室町
90	食事具	切匙	W460	スギ	室町
91	容器	底板	W643	スギ	室町
92	服飾具	下駄	W291	モクレン属	室町
93	農具？	鍬？	W243	マツ属複維管束亜属	室町
94	服飾具	下駄	W289	マツ属複維管束亜属	江戸
95	容器	折敷（底板）	W540	スギ	不明
96	容器	折敷（側板）	W540	ヒノキ	不明

試料No.	種類	器種	図版表記No.	樹種	時代
97	容器	柄杓（底板）	W617	スギ	安土・桃山
98	容器	柄杓（側板）	W617	スギ	安土・桃山
99	容器	柄杓（柄）	W617	マツ属複維管束亜属	安土・桃山
100	服飾具	下駄	W300	マツ属複維管束亜属	安土・桃山
101	容器	曲物	W592	ヒノキ	室町
102	容器	柄杓（側板）	W616	ヒノキ	室町
103	容器	柄杓（柄）	W616	ヒノキ	室町
104	調度具	箱	W961	ヒノキ	室町
105	紡織具	紡錘車	W264	スギ	室町
106	容器	桶	W638	スギ	室町
107	容器	曲物（底板）	W598	スギ	室町
108	工具	漆刷毛	W190	ヒノキ	室町
109	調度具	灯台	W234	スギ	室町
110	紡織具	紡錘車	W263	スギ	室町
111	容器	曲物（底板）	W596	スギ	室町
112	祭祀具	陽物	W741	コナラ節	室町
113	服飾具	下駄	W321	スギ	室町
114	服飾具	下駄	W304	ヤナギ属	室町
115	容器	三宝（側板）	W570	ヒノキ	室町
116	農具	鍬	W241	コナラ節	室町
117	容器	三宝（側板）	実測なし	ヒノキ	室町
118	食事具	箸	実測なし	スギ	室町
119	食事具	箸	実測なし	スギ	室町
120	服飾具	下駄	W307	ヒノキ	室町
121	容器	大皿	W675	クリ	室町
122	食事具	俎板（折敷底板）	W490	スギ	安土・桃山
123	容器	桶（側板）	W630	スギ	安土・桃山
124	遊戯具	羽子板	W697	モミ	安土・桃山
125	農具	鍬	W240	クヌギ節	安土・桃山
126	工具	漆刷毛	W199	ヒノキ	室町
127	容器	大皿	W676	クリ	安土・桃山
128	工具	漆刷毛	W194	ヒノキ	安土・桃山
129	食事具	両口箸	実測なし	スギ	安土・桃山
130	食事具	栓	W656	スギ	安土・桃山
131	容器	桶（側板）	W634	スギ	安土・桃山
132	容器	桶（側板）	W627	ヒノキ	安土・桃山
133	容器	桶（側板）	W626	スギ	安土・桃山
134	容器	折敷（底板）	W524	スギ	安土・桃山
135	食事具	箸	W351	スギ	安土・桃山
136	遊戯具	羽子板	W705	モミ	安土・桃山
137	工具	漆刷毛	W192	スギ	室町
138	工具	漆刷毛	W198	ヒノキ	室町
139	工具	漆刷毛	W196	ヒノキ	室町
140	容器	蓋置き	W175	タケ亜科	室町
141	服飾具	櫛	W275	モッコク	室町
142	容器	柄杓（底板）	W970	スギ	鎌倉
143	容器	柄杓（側板）	W970	ヒノキ	鎌倉
144	容器	柄杓（柄）	W970	スギ	鎌倉

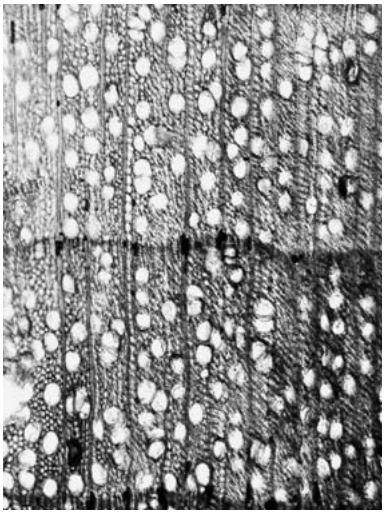
試料No.	種類	器種	図版表記No.	樹種	時代
145	服飾具	櫛	W278	イスノキ	室町
146	容器	三宝	W571	ヒノキ	室町
147	容器	折敷（底板）	W525	ヒノキ	室町
148	容器	大皿	W677	クリ	室町
149	服飾具	下駄（台）	W330	スギ	室町
150	服飾具	下駄（歯）	W330	スギ	室町
151	食事具	俎板（箱）	W489	マツ属複維管束亜属	室町
152	服飾具	下駄	W320	マツ属複維管束亜属	室町
153	容器	折敷（底板）	W541	モミ	安土・桃山
154	容器	折敷（側板）	W541	ヒノキ	安土・桃山
155	祭祀具	馬形	W962	スギ	奈良
156	その他	火きり臼	W236	スギ	室町
157	容器	折敷（底板）	W494	スギ	室町
158	容器	折敷（側板）	W494	スギ	室町
159	紡織具	糸巻	W256	スギ	室町
160	建築部材	杭	W770	マツ属複維管束亜属	室町
161	容器	桶（底板）	W644	スギ	室町
162	建築部材	屋根材	W791	モミ	室町
163	建築部材	根太	W767	クリ	室町
164	建築部材	不明部材	W769	マツ属複維管束亜属	室町
165	建築部材	板材	W774	クリ	室町
166	建築部材	不明部材	W771	スギ	室町
167	建築部材	板材	W775	ヒノキ	室町
168	建築部材	柱材	W757	クリ	室町
169	建築部材	柱材	W770	クリ	室町
170	用途不明	切断材	W896	マツ属複維管束亜属	室町
171	建築部材	板材	W776	マツ属複維管束亜属	室町
172	建築部材	部材	W786	スギ	室町
173	建築部材	部材	W990	スギ	奈良
174	容器	大型曲物底	W763	ヒノキ	安土・桃山
175	農具	田下駄大足（桟）	W980	スギ	奈良
176	農具	田下駄大足（横桟）	W980	スギ	奈良
177	建築部材	墨書木板	W959	マツ属複維管束亜属	安土・桃山
178	建築部材	屋根材	W790	スギ	安土・桃山
179	建築部材	不明部材	W984	スギ	奈良
180	建築部材	不明部材	W993	スギ	奈良



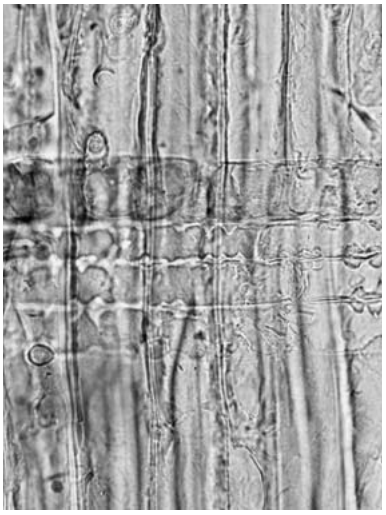
1．木地椀（図版表記No. W340）、
クリ x30



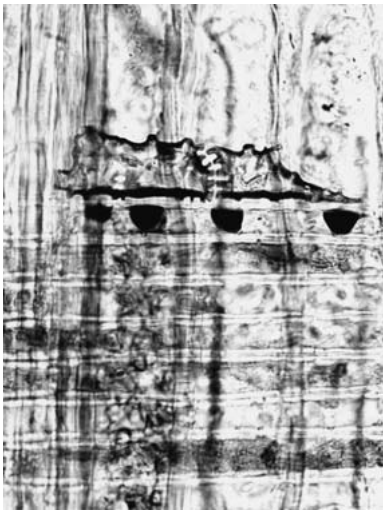
2．刀子鞘（図版表記No. W271）、
モクレン属 x30



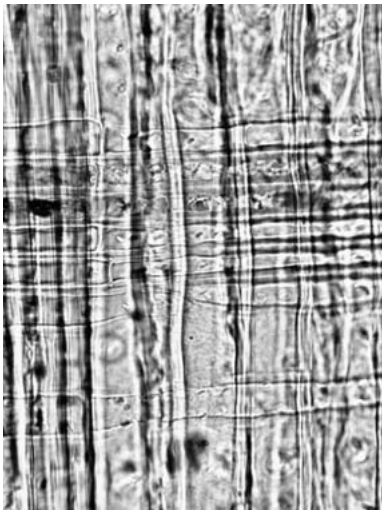
3．鎌柄（図版表記No. W245）、
モクレン属 x30



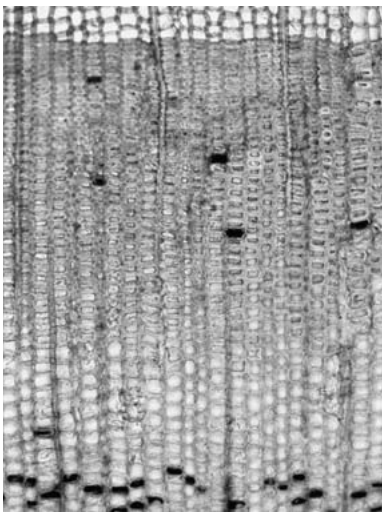
4．不明（図版表記No. W651）、
二葉マツ x300



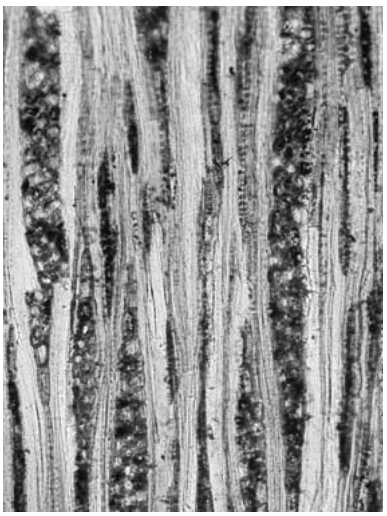
5．折敷（底板）（図版表記No. W542）、
モミ x300



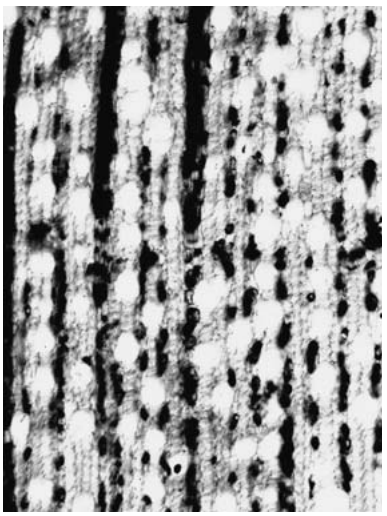
6．折敷（脚）（図版表記No. W556）、
ヒノキ x300



7．蒲鉾板（図版表記No. W413）、
スギ x300

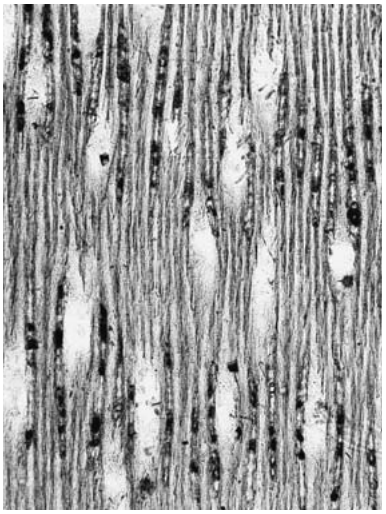


8．櫛（図版表記No. W284）、
モッコク x75



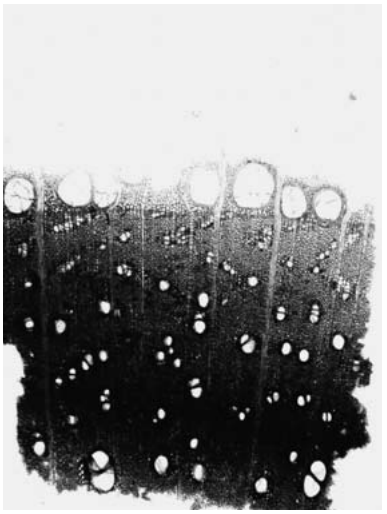
9．木錘（図版表記No. W249）、
ヒサカキ x75

写真10　宮内堀脇遺跡Ⅰ出土木製品顕微鏡写真（１）



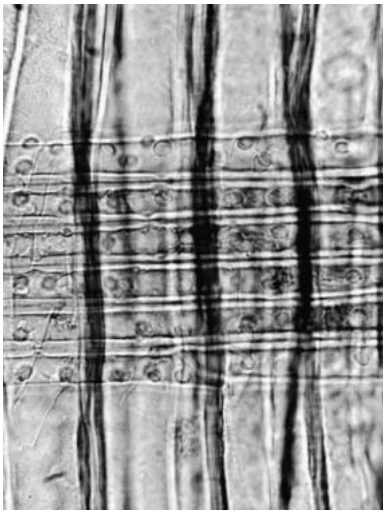
10. 木地椀（図版表記No. W341）、
トチノキ x75

11. 木錘（図版表記No. W250）、
クリ x30

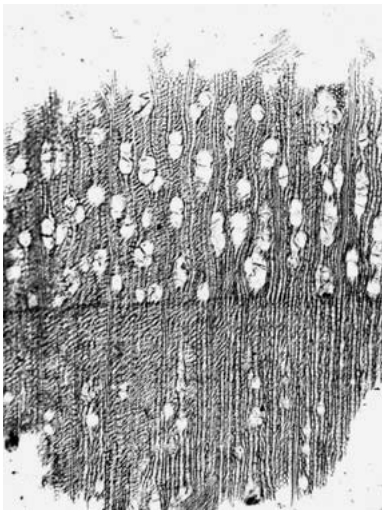


12. 斧柄（図版表記No. W853）、
ヤマグワ x30

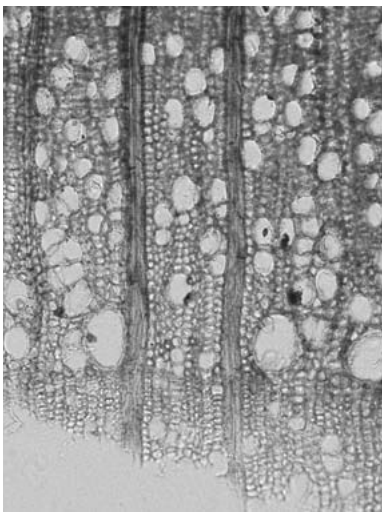
13. 鍬（図版表記No. W242）、
コナラ節 x30



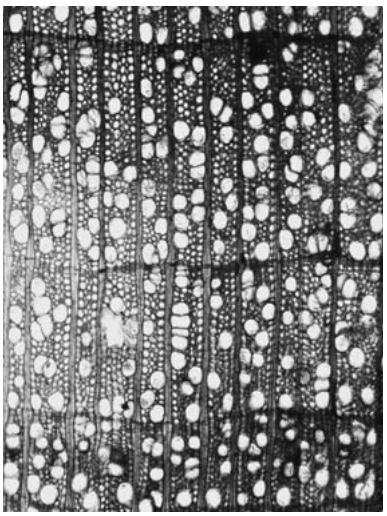
14. 桶（図版表記No. W636）、
スギ x300



15. 毬杖の玉？（図版表記No. W706）、
エゴノキ x30



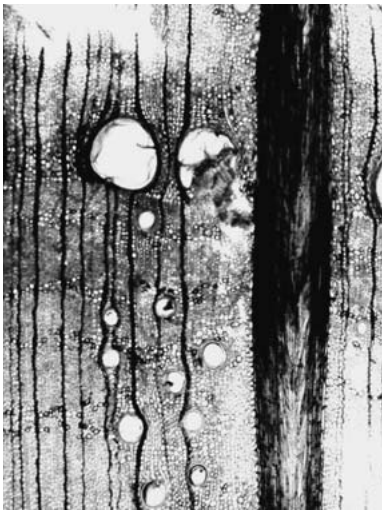
16. 不明品（つけ木？）（図版表記No.
W834）、コシアブラ x30



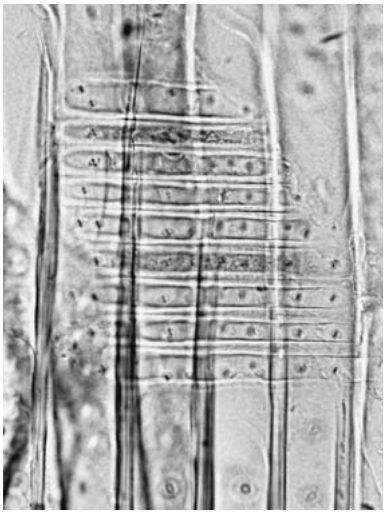
17. 下駄（台）（図版表記No. W309）、
モクレン属 x30

18. 刀形（図版表記No. W727）、
モミ x300

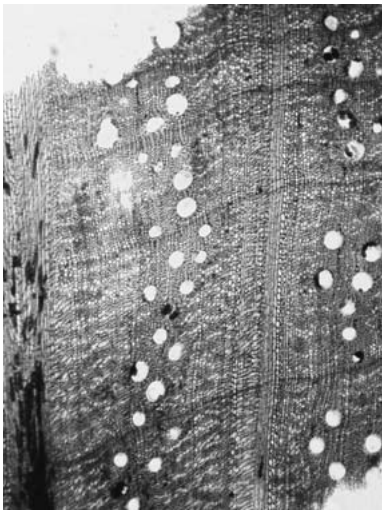
写真11　宮内堀脇遺跡Ⅰ出土木製品顕微鏡写真（２）



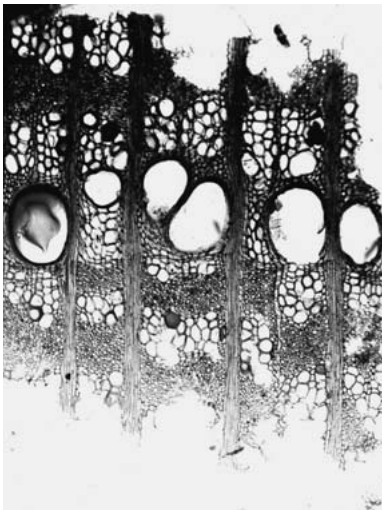
19. 鍬（柄）（図版表記No. W239）、
クヌギ節 x30



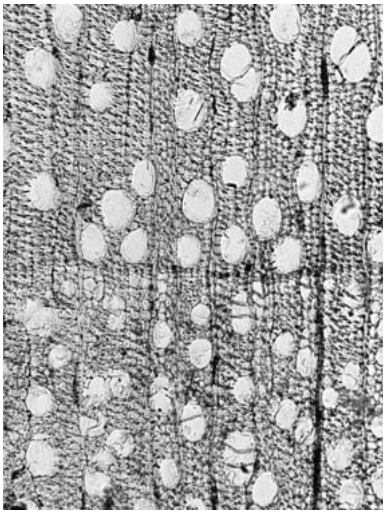
20. 折敷（底板）（図版表記No. W515）、
ヒノキ x30



21. 陽物（図版表記No. W742）、
アカガシ亜属 x30

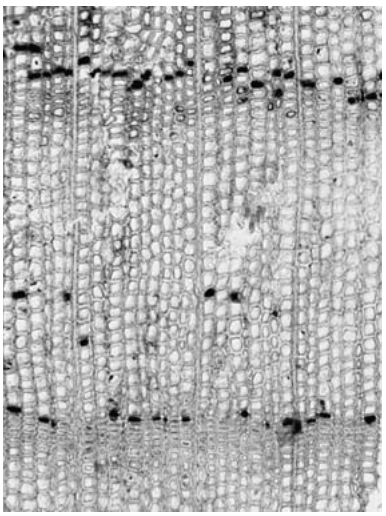


22. 不明（図版表記No. W839）、
ケヤキ x30

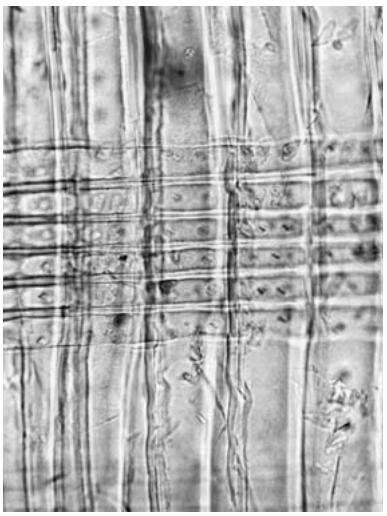


23. 下駄（図版表記No. W296）、
ヤナギ属 x75

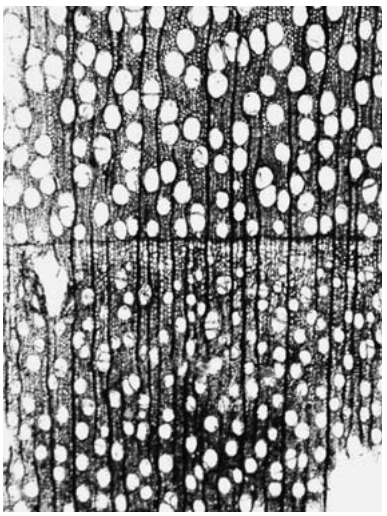
24. 鍬？（図版表記No. W243）、
二葉マツ x300



25. 箱（図版表記No. W961）、
ヒノキ x75

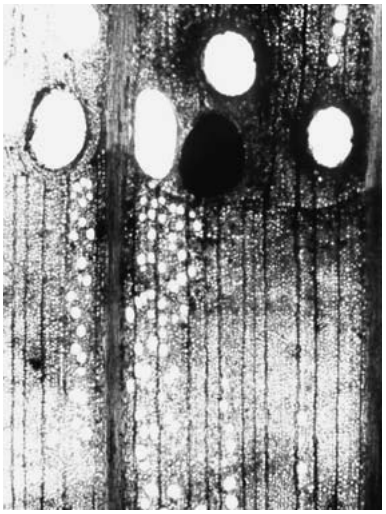


26. 漆刷毛（図版表記No. W190）、
ヒノキ x300

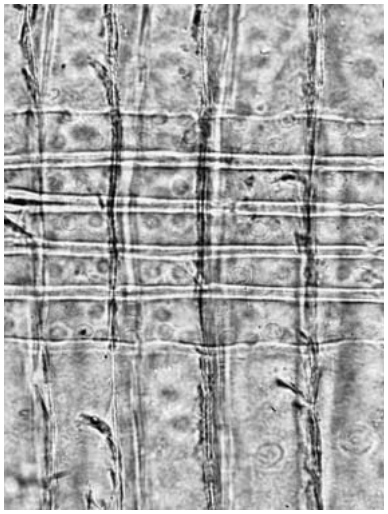


27. 下駄（図版表記No. W304）、
ヤナギ属 x30

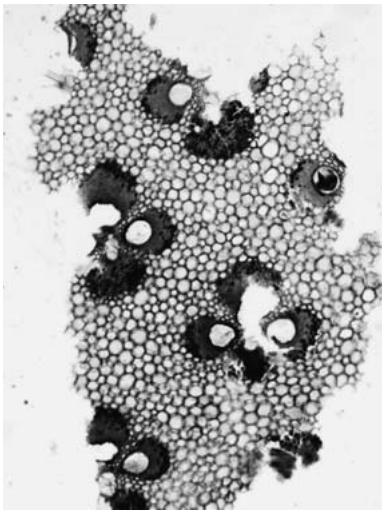
写真12　宮内堀脇遺跡Ⅰ出土木製品顕微鏡写真（３）



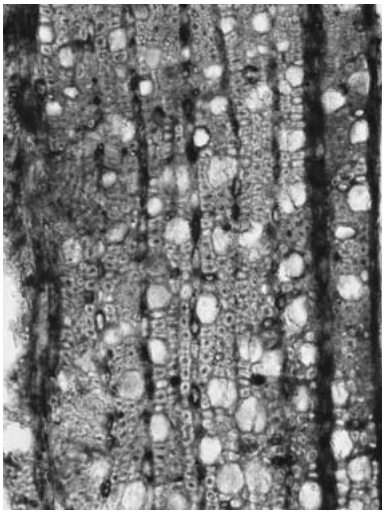
28. 鍬（図版表記No. W241）、
コナラ節 x30



29. 俎板（折敷底板）（図版表記No. W
490）、スギ x300



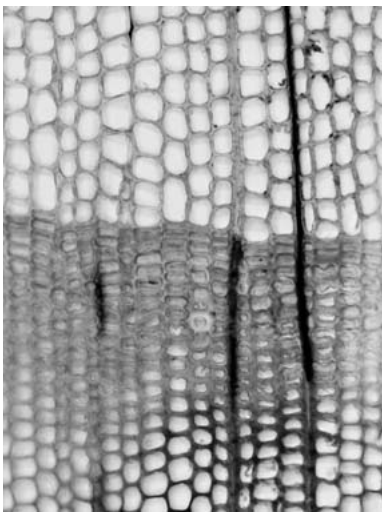
30. 蓋置き（図版表記No. W175）、
タケ亜科 x30



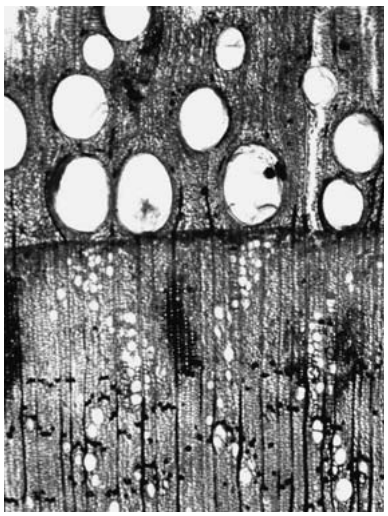
31. 櫛（図版表記No. W275）、
モッコク x75

32. 櫛（図版表記No. W278）、
イスノキ x75

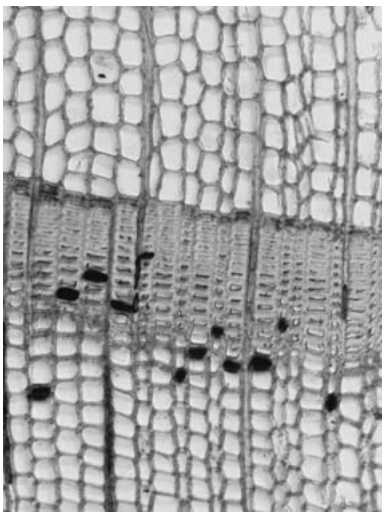
33. 杭（図版表記No. W770）、
二葉マツ x300



34. 屋根材（図版表記No. W791）、
モミ x75



35. 柱材（図版表記No. W770）、
クリ x30



36. 田下駄大足（横桟）（図版表記No.
W980）、スギ x75

写真13　宮内堀脇遺跡Ⅰ出土木製品顕微鏡写真（４）

第４節　宮内堀脇遺跡出土漆器の材質・技法に関する調査

北野信彦

１．はじめに

宮内堀脇遺跡は、山名氏宗家の居城であった此隅山城の城下町遺跡と考えられており、ここからは室町時代後期の16世紀後期から近世初頭期段階に至る城下町関連の遺構と遺物が多数検出された。この中には、多数の漆器資料も含まれていた。今回、宮内堀脇遺跡Ⅱの報告書に引き続き、これらの材質・技法に関する文化財科学的調査を行ったので、その結果を報告する。

２．出土漆器の調査

２．１　調査対象資料

今回調査を行った漆器資料は、ろくろ挽き物である椀類をはじめとする飲食器類と一部板物などを含む合計669点である。基本的には中世後期から近世初頭段階（天正年間頃）の資料が中心であり、これにわずかながら性格の異なる江戸時代後期頃の資料が混じる。いずれも実用性が高い生活什器類である。

２．２　調査方法

一般に漆器の製作は、原木から木地をつくり、ろくろ挽き作業により椀や皿型の挽き物の形態にする「木胎製作」の工程と、その木胎に下地および漆を塗布し、漆絵などの加飾や研磨作業を行う「漆工」の工程から成っている。本報では、まず、各資料の器形や残存状態、漆塗り表面の状態などを肉眼観察した後、実体顕微鏡による細部の観察を行った。次に、自然科学的手法を用いた①木胎の樹種同定、②木取り方法、③漆塗り構造の分類、 ④赤色系漆の使用顔料、などの材質･技法の組成に関する調査を行った。以下、調査方法を記す。

（１） 木胎の樹種同定

樹種の同定は、出土木材の内部形態の特徴を顕微鏡で観察し、その結果を新材と比較することでなされる。試料は、本体をできるだけ損傷しないよう、破切面などオリジナルでない面から木口、柾目、板目の三方向の切片をカミソリの刃を用いて作成した。切片は、サフラニン・キシレンを用いて常法に従い染色と脱水を行い、検鏡プレパラートに仕上げた。

（２）木取り方法

挽き物類である漆器資料の木取り方法の検討は、樹種同定の切片作成時に細胞組織の方向を生物顕微鏡で確認することで、同時に行なった。

（３） 漆塗り構造の分類

まず肉眼で漆塗り表面の状態を観察した後、実体顕微鏡を用いた細部の観察を行った。次に１㎜×３㎜程度の漆膜剥落片を採取して合成樹脂（エポキシ系樹脂／アラルダイトＧＹ1251Ｊ．Ｐ,ハードナーＨＹ.837）に包埋した後、断面を研磨した。この断面試料の漆塗膜面の厚さ、塗り重ね構造、顔料粒子の大きさ、下地の状態などについて、金属顕微鏡による落射観察を行った。

（４）赤色系漆の使用顔料

赤色系漆の使用顔料に関する定性分析は、採取可能な部分の漆膜剥落小片をカーボン台に取り付け、㈱堀場製作所MESA－500型の蛍光Ｘ線分析装置に設置して、特性Ｘ線を検出した。設定条件として、

分析積算時間は600秒、試料室内は真空状態、X線管電圧は15kVおよび50kV、電流は240μAおよび20μA、検出強度は40.000cps、定量補正法はスタンダードレスである。

2．3　調査結果

上記のような方法を用いた個々の資料の分析結果は第20表に示す。まず、出土漆器資料のうちの挽き物類は、（1）内・外面とも黒色漆、もしくは内面赤色系漆・外面黒色漆を地塗りし、資料によってはこの上に赤色系漆もしくは黒色漆で漆絵を肉筆描きする椀型資料、（2）資料によっては高台底のみに黒漆を塗布するものの、いずれも地の内・外面は無加飾で赤色系漆のみを塗布する椀型資料、の2つのグループに大別された。このうち、（1）のグループでは地内面は赤色系漆、地外面には黒色漆の上に赤色系漆の漆絵で類似した鶴亀文様のモチーフを描く一括の椀類資料が46点、（2）のグループでは小型端反椀・豆子・椿皿などの器形を含む中世以来の寺社什器として広く知られる「根来塗」と総称される赤色系漆器との関連性が想定される資料が68点と、占有率が比較的高い点が特徴の一つである。

これらの樹種同定を行なった結果、椀型および椀破片資料は、いずれも挽き物類であるためかトチノキ材332点（52.3%）、ケヤキ材97点（15.8%）、クリ材81点（13.2%）を中心とした広葉樹材が選択されており、トチノキ・ケヤキ・クリ3樹種で全体の81.3%が算定された。なお、このうち、（1）の資料群のうち前記したような鶴亀文様の加飾を有する漆器椀類では、やや一般的な良材であるトチノキ材（44点：95.6%）の占有率が高く、その他ではクリ材（1点：2.2%）、カツラ材（1点：2.2%）であった。一方、（2）の資料群では、最良材であるケヤキ材（55点:80.9%）の占有率が高く、その他ではシオジ材（3点：4.4%）、トチノキ材（3点：4.4%）、ブナ材（3点：4.4%）、サクラ亜属材（1点：1.5%）、ハンノキ材（1点：1.5%）その他（2点：2.9%）などであった。このように、両者の傾向は大きく異なっていた（表2）そしてこれらの木取り方法は、いずれも横木地であり、板目取りと柾目取りの双方が確認された（第10図）。一方、板物類には、スギ、ヒノキ、マツ材などの針葉樹材が選択されていた。

次に、個々の資料の漆塗り構造、特に各漆器の堅牢性を知る目安となる木胎と漆塗り層との間の下地層をみると、無機物を含んでいないためピークがほとんど見出だされない資料と、Al（アルミニウム）、Si（シリカ）、K（カリウム）、Ca（カルシウム）、Fe（鉄）など粘土鉱物もしくは珪藻土の構成要素に

第19表　ろくろ挽き物の用材分類一覧表

A環孔材	a．ケヤキ系 ニレ、ケヤキ、シオジ、ハリギリ、クリ、ヤマグワなど	木目が明瞭に表れる。堅硬であるが靭性もあり、木皿など薄手の物に適する。
B散孔材	b．サクラ、カエデ系 イヤタカエデその他のカエデ類、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、ミズメなど	白木で美しい光沢があり、白木地物にも適している。割れ狂いが少なくて、やや堅さはあるが加工は容易。下地が少量で足りるので、塗り物にもっとも適する。
	c．ブナ、トチノキ系 トチノキ、ブナ、ミズキ、カツラ、ホオノキなど	軟らかくて加工は容易であるが、乾燥が難しく狂いも多い。しかし、大量に入手できるので使用量は大である。
	d．エゴノキ系 エゴノキ、アオハダなど	白い軽軟で加工が容易である。仕上げは見た目によく、彩色もし易いので、玩具、小物等に向いている。とくにエゴノキは大材を得られないが、入手が容易であり、割れにくいので使用に適する。

橋本鉄男「ろくろ、ものと人間の文化史31」1979などを参考にして作成

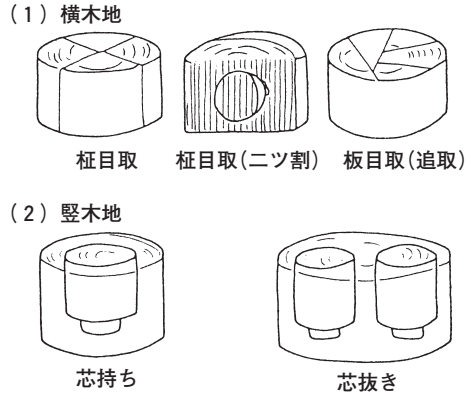


図１－１　横木地と竪木地の要領

（末沢春一朗「近世以降木地師の
ロクロ製品技術の研究」原図）

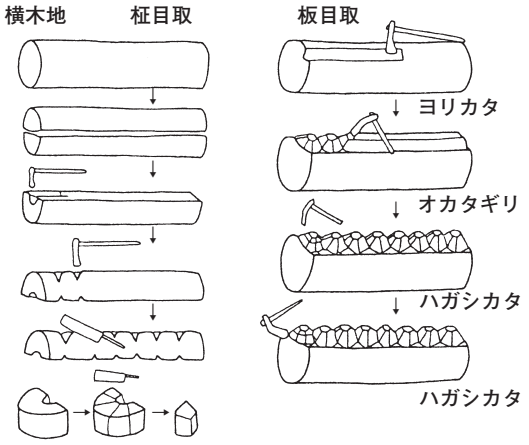


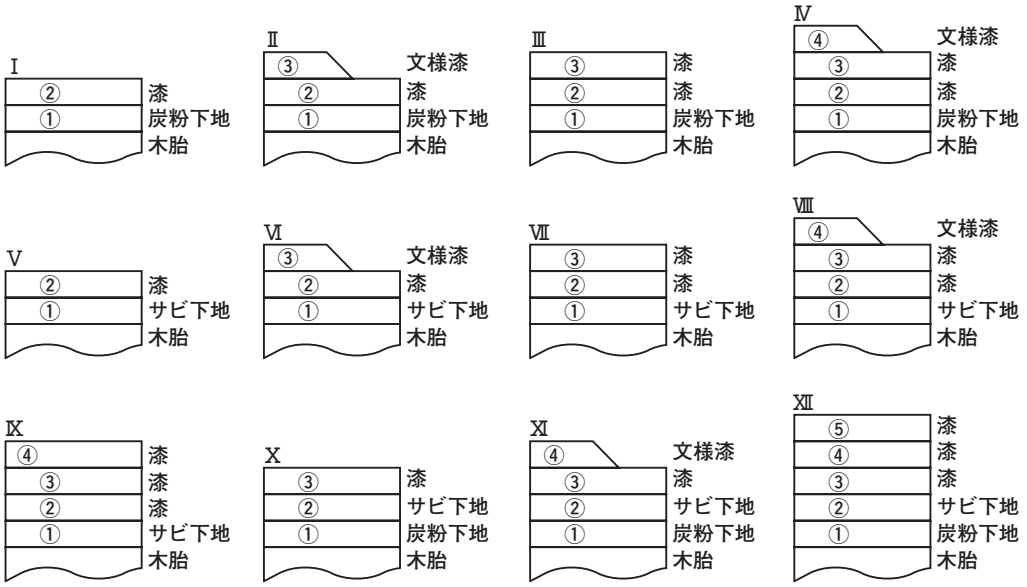
図１－２　近世会津木地師の木取りの方法

須藤（1982）より原図引用

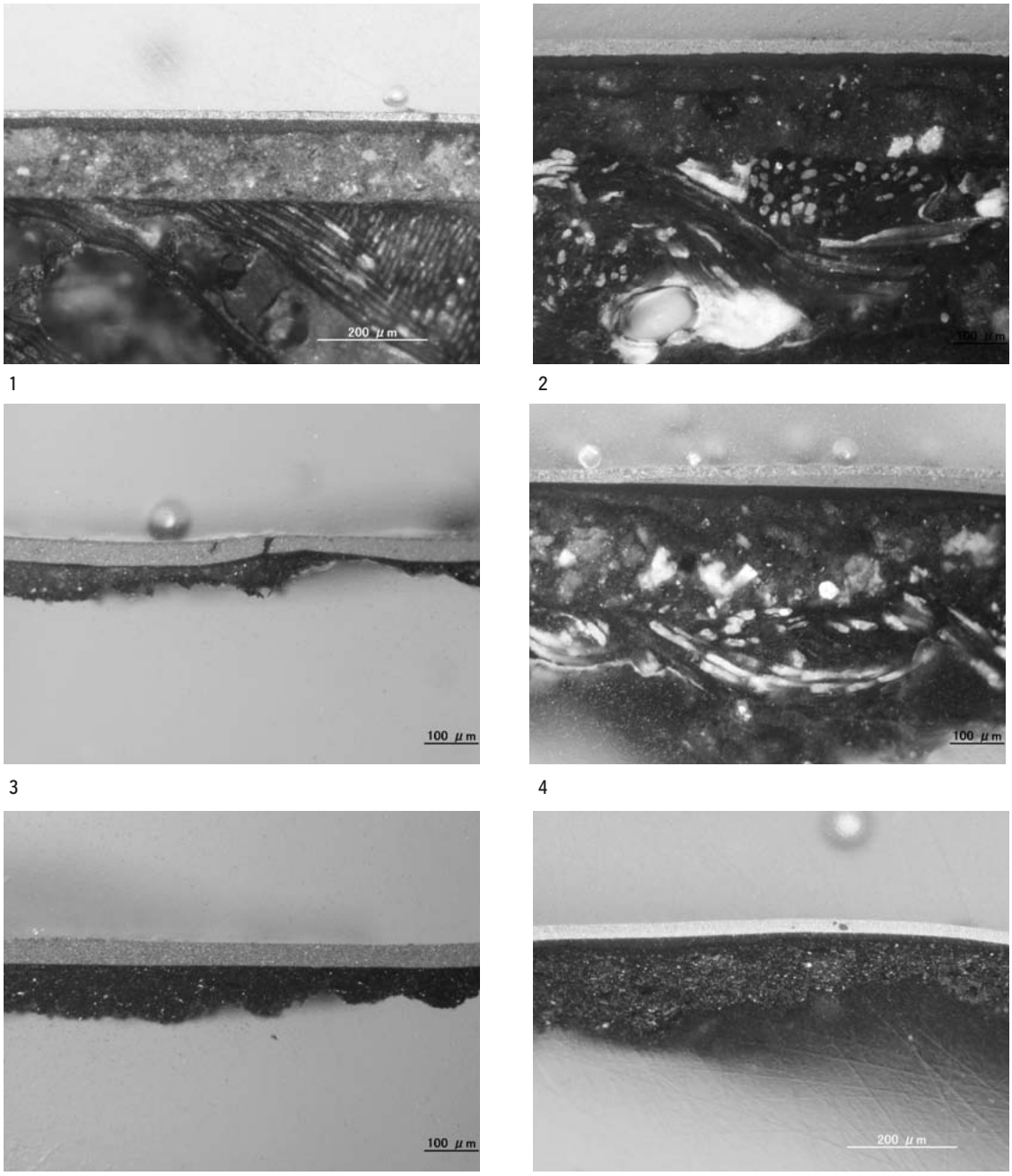
第10図　近世以降の漆器(挽き物類)の木取り方法

近いピークが認められる資料に分けられた。さらにこれらを顕微鏡観察することにより、前者を炭粉を柿渋や膠などに混ぜて用いる炭粉下地、後者を細かい粘土もしくは珪藻土を生漆に混ぜて用いるサビ下地（堅下地もしくは本下地ともいう）と理解した。特に（１）の椀型資料は、いずれも炭粉下地の上に薄く黒漆層や透明感のある赤褐色系漆、朱漆が１層ないしは２層塗布した漆器資料群であった。このような炭粉下地の上に薄い上塗り漆層を塗布する技法は、中世末から近世初頭期における実用的な出土漆器椀類に一般的にみられる特徴である。そして、加飾の漆絵はいずれも地の上塗り漆の上に描かれていた(第11図)。

一方、根来塗との関連性が想定される赤色系漆器資料では、木胎の上に堅牢性を重視した布着せ補強を伴う資料も含めてサビ下地が施される資料が58点（86.6%）であり占有率が高かった。内訳は、ケヤキ材では55点中54点、シオジ材は３点中３点、トチノキ材は３点中１点であり、炭粉下地の資料はブナ材３点中３点、トチノキ材３点中１点、サクラ亜属材１点中１点である。このうちのサビ下地の資料群は、サビ下地の上に中塗りの黒漆を塗布し、さらに上塗りの赤色系漆が塗り重ねられている資料が基本



第11図　漆塗り構造の分類



1　2

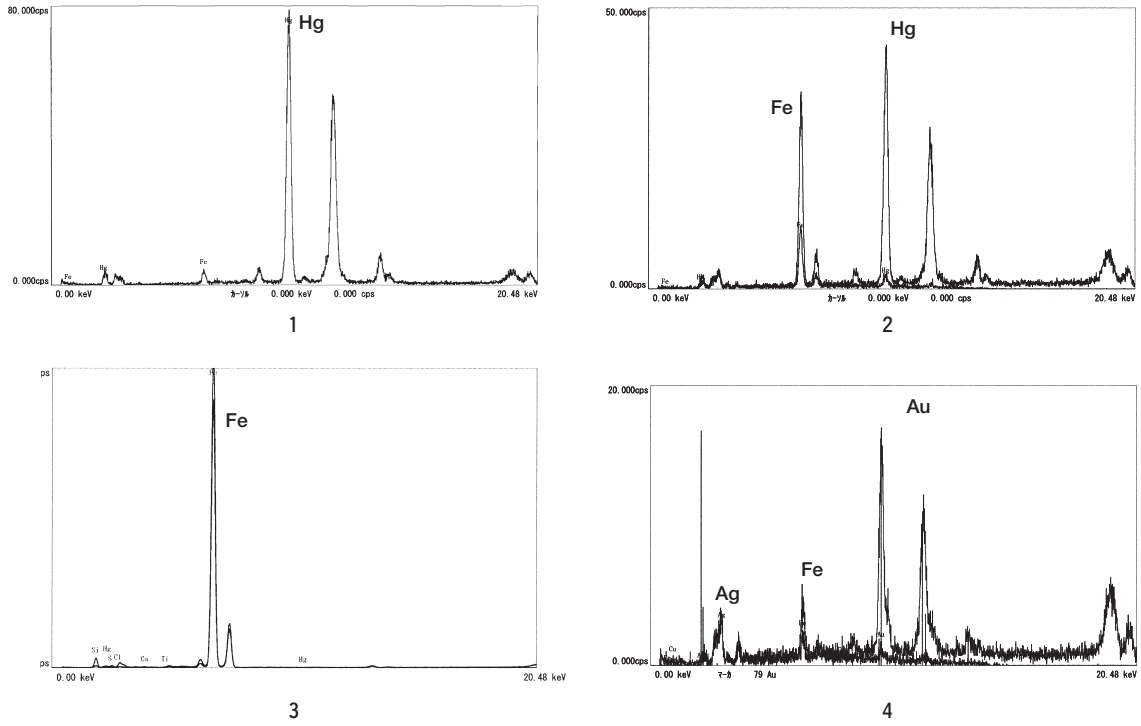
3　4

5　6

写真14　漆膜断面試料写真

であった（写真16－1，2)。なお、一部の資料では上塗りの朱漆を 2 層重ねたり、中塗りの黒漆層が省かれて直接上塗りの赤色系漆のみの資料も存在していたが数量的には少なかった(写真16－3，4)。そして炭粉下地を施した資料群のなかにおいても、赤色系漆を一層のみ塗布した資料と、黒漆を中塗りして赤色系漆を上塗りして塗り重ねる資料の 2 つのグループが確認された（写真16－5，6)。

次に、各資料における赤色系漆の使用顔料を蛍光X線分析した結果、ほとんどの資料から水銀（Hg）成分が強く検出され、これらの塗膜断面からは、顕微鏡観察においても、粗細さまざまではあるが朱（辰砂もしくは水銀朱 HgS）の赤色顔料の粒子が確認された（第12図－1)。その一方で、水銀（Hg）成分とともに、若干の鉄（Fe）成分のピークが同時に検出される資料も存在していた（第12図－2)。これらは、色味調整で朱にベンガラ（Fe_2O_3）顔料を混ぜて使用した赤色系漆も当然一部には存在するものの、



第12図　蛍光X線スペクトル図

埋没土中の鉄成分の沈着汚染が単に検出された可能性も残される。そのため、本報ではあえて使用顔料を朱、ベンガラ、朱＋ベンガラとは断定せず、あえて無機元素である水銀（Hg）、鉄（Fe）の存在の有無で表記することとした。その一方で、水銀（Hg）を全く含まない鉄（Fe）のみが強く検出されたベンガラ漆は資料No.519，560の年代的には新しい江戸時代後期の村方関連資料（いずれもブナ材）の２点のみに限定された（第12図－3）。また資料No.263からは微量の銀（Ag）を含む金（Au）粉の使用が確認された（第12図－4）。

３．考察

以上、宮内堀脇遺跡出土漆器資料のうちの挽き物類は、いずれも椀・反端椀・小皿型などの飲食器類を中心とした極めて実用的な生活什器としての漆器であった。ところが、これらを材質・技法といった生産技術面の組成からみると、簡素で一般的な日用漆器の塗り構造を持つ資料と、堅牢で多層塗り構造を持つ優品資料に分類された。これらは、（１）内･外黒漆もしくは内朱漆･外黒漆を地塗りし、それらに朱漆で漆絵を筆描きする。木胎部は肉厚でやや大振りの器形を有する高台高が比較的高い資料と普通の高台高の資料があるが、これは大中小入れ子の三つ椀タイプのいずれかによる椀型、（２）高台底のみに黒漆を塗布するものの、地の内外面は無加飾で朱漆を塗布する。木胎部の厚みは薄造りで端反りがある小皿型、の大きく２つの材質・技法別のグループに分類され、それぞれ前者は（１）群、後者は（２）群の生産技術が用いられていた。一方、本資料群には、漆塗料の塗装が観察されない白木椀・鉢類も９点（内訳トチノキ５点、クリ材２点、シイノキ材１点、その他１点）含まれていた。これらには轆轤痕が明瞭に認められる資料もあった。この点からは、本資料群における白木椀と漆器椀双方の用材選択性（樹種の占有率）の傾向とには類似性が認められた。

以上のように、本漆器資料には極めて一般性が高い普段使いの飲食器と、ハレの儀式食もしくは寺社

第20表　漆器観察表

No.	報告No.	器型	樹種	木取	表面塗り技法			漆塗構造		使用顔料			備考	高台内
					内	外	文様	内	外	内	外	文様		
1	W17	椀型	ケヤキ	B	赤	赤	外－絵－黒	Ⅰ	Ⅱ	Hg	Hg			
2	W139	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg		
3	W131	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg＋Fe		刻印
4	W53	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg	鶴亀	
5	W47	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				文字(上)
6	W11	椀型	ケヤキ	B	赤	赤		Ⅵ	Ⅵ	Hg	Hg		根来	黒
7	W129	椀型	クリ	B	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg		
8	W126	椀型	カツラ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
9	W18	椀型	サクラ	B	赤	赤		Ⅰ	Ⅰ	Hg	Hg		根来	
10	W969	椀型	シオジ	B	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来・布着せ補強	
11	W134	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
12	W145	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
13	W29	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
14	W8	端反椀	ケヤキ	A	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来・布着せ補強	
15	W170	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg				
16	W170	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
17	W20	椀型	トチノキ	A	赤	赤		Ⅰ	Ⅰ	Hg	Hg		根来	
18	W128	椀型	コナラ	B	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg		文字
19	W3	小型端反椀	シオジ	B	赤	赤		Ⅴ	Ⅶ	Hg	Hg		根来	
20	W5	端反椀	ケヤキ	A	赤	赤		Ⅴ	Ⅶ	Hg	Hg		根来・布着せ補強	文字
21	W40	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
22	W133	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
23	W9	椿皿	広散孔	A	赤	赤		Ⅲ	Ⅲ	Hg	Hg		根来？	
24	W171	小形棗蓋	未調査	－	赤	赤		Ⅰ	Ⅰ	Hg	Hg			
25	W174	筒型	タケ	－	黒	黒		－	－					
26	W69	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
27	W46	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
28	W81	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
29	W177	筒型	針葉樹	－	黒	黒		Ⅴ	Ⅴ					
30	W61	椀型	コナラ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg		
31	W6	椀型	ケヤキ	A	赤	赤		Ⅷ	Ⅷ	Hg	Hg		根来・布着せ補強	文字(重)
32	W24	椀型	トチノキ	A	黒	黒	内外－絵－赤	Ⅱ	Ⅱ			Hg		
33	W110	椀型	トチノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ			Hg		文字
34	W70	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
35	W82	椀型	ケヤキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg		
36	W38	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
37	W64	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
38	W148	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
39	W175	筒型	タケ	－	黒	黒		－	－					
40	W173	筒型	ホオノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
41	W201	漉し紙	－	－	赤			－	－	Hg＋Fe？				
42	W48	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	松竹	文字(上)
43	W78	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
44	W88	椀型	クリ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg		
45	W45	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
46	W125	椀型	クリ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg		Hg		
47	W15	椀型	トチノキ	A	赤	赤		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe	Hg＋Fe		根来？	
48	W111	椀型	クリ	B	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg＋Fe		刻印
49	W120	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg	俵・引っ掻き	文字(上)
50	W66	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg＋Fe	鶴亀	
51	W151	椀型	ブナ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
52	W67	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
53	W44	椀型	ケヤキ	A	赤	赤	外－絵－黒	Ⅴ	Ⅶ	Hg	Hg			
54	W2	椀型	シオジ	A	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来	
55	W16	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg		
56	W117	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg＋Fe		
57	W135	椀型	ケヤキ	B	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来・布着せ補強	
58	W176	筒型	タケ	－	黒	黒		－	－					
59	W57	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg	鶴亀	
60	W180	椀型	ホオノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
61	W49	椀型	トチノキ	B	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	絵
62	W90	椀型	カツラ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
63	W33	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg＋Fe		刻印
64	W93	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	菊	

No.	報告No.	器型	樹種	木取	表面塗り技法			漆塗構造		使用顔料			備考	高台内
					内	外	文様	内	外	内	外	文様		
65	W162	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg	鶴亀	
66	W7	椀型	ケヤキ	A	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来	文字(五)
67	W100	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		文字
68	W144	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg		
69	W87	椀型	クリ	B	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg		文字
70	W154	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg＋Fe	俵・引っ掻き	
71	W85	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
72	W22	椀型	ケヤキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
73	W85	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg	鶴亀	
74	W13	豆子	ケヤキ	A	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来	
75	W4	端反椀	ケヤキ	A	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来	文字
76	W147	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg	鶴亀	
77	W150	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
78	W136	椀型	ホオノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
79	W60	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
80	－	椀型	トチノキ	B	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
81	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
82	－	椀型	クリ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
83	－	椀破片	ケヤキ	－	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来	
84	－	椀破片	ケヤキ	－	黒	黒		Ⅴ	Ⅴ					
85	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
86	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
87	－	椀破片	クリ	－	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
88	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
89	－	椀型	クリ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
90	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
91	－	椀破片	ケヤキ	－	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来？・布着せ補強	
92	－	椀破片	コナラ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
93	－	椀型	ケヤキ	A	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来？・布着せ補強	
94	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
95	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
96	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
97	－	椀型	トチノキ	B	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
98	－	椀破片	ケヤキ	－	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来？	
99	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
100	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
101	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
102	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
103	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
104	－	椀破片	クリ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg＋Fe		
105	－	椀破片	カバノキ？	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
106	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
107	－	椀破片	トチノキ	A－	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
108	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
109	－	椀破片	クリ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
110	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
111	－	椀破片	ケヤキ	－	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
112	－	椀破片	ケヤキ	－	赤	黒		Ⅷ	Ⅶ	Hg				
113	－	椀破片	クリ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
114	－	椀破片	ケヤキ	－	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来？	
115	－	椀破片	広葉樹散孔材	－	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
116	－	椀型	ケヤキ	A	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来	
117	－	端反椀	ケヤキ	B	赤	赤		Ⅷ	Ⅷ	Hg	Hg		根来・布着せ補強	
118	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
119	－	椀破片	ケヤキ	－	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来	
120	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg＋Fe		
121	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
122	－	椀破片	ケヤキ	－	赤	赤		Ⅴ	Ⅶ	Hg	Hg		根来	
123	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg		
124	－	椀型	クリ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				文字
125	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg＋Fe		
126	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				文字(上)
127	－	椀型	クリ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
128	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				

No.	報告No.	器型	樹種	木取	表面塗り技法			漆塗構造		使用顔料			備考	高台内
					内	外	文様	内	外	内	外	文様		
129	－	椀破片	クリ	－	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
130	－	椀破片	タケ	－	黒	黒		－	－					
131	－	椀破片	クリ	－	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
132	－	椀型	クリ？	B	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
133	－	椀破片	ケヤキ	－	赤	赤	外－絵－黒	Ⅷ	Ⅷ	Hg	Hg		根来？・布着せ補強	
134	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
135	－	椀破片	ケヤキ	－	赤	赤	外－絵－黒	Ⅲ	Ⅳ	Hg	Hg			
136	－	椀破片	ケヤキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
137	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
138	－	椀破片	ホオノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
139	－	椀型	サクラ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
140	－	端反椀	ケヤキ	－	赤	赤		Ⅷ	Ⅷ	Hg	Hg		根来	
141	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg、Hg	絵の二種のHgは粒子の違い	
142	－	椀型	ケヤキ	B	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来・布着せ補強	文字
143	－	椀型	ケヤキ	A	赤	赤		Ⅰ	Ⅰ	Hg	Hg		根来？	
144	－	椀型	ケヤキ	B	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg＋Fe	Hg＋Fe		根来・布着せ補強	
145	－	椀型	クリ	B	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
146	－	椀破片	ケヤキ	－	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来？・布着せ補強	
147	－	椀破片	ケヤキ	－	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来	
148	－	椀破片	ケヤキ	－	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来？	
149	－	椀破片	クリ	－	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
150	－	椀型	ケヤキ	A	赤	赤		Ⅷ	Ⅷ	Hg	Hg		根来・布着せ補強	
151	－	椀破片	ケヤキ	－	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来？	
152	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
153	－	椀型	クリ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
154	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
155	－	椀破片	ブナ	－	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
156	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
157	－	椀破片	ケヤキ	－	赤	赤		Ⅷ	Ⅷ	Hg	Hg		根来？	
158	－	椀破片	ケヤキ	－	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg＋Fe	Hg＋Fe		根来？・布着せ補強	
159	－	椀破片	ケヤキ	－	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg＋Fe	Hg＋Fe		根来？	
160	－	椀破片	ケヤキ	－	赤	赤		Ⅷ	Ⅷ	Hg	Hg		根来？・布着せ補強	
161	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
162	－	椀破片	ケヤキ	－	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
163	－	椀型	カバノキ	B	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
164	－	椀破片	広散孔	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
165	－	椀型	ケヤキ	B	赤	赤		Ⅴ	Ⅴ	Hg	Hg		根来？・布着せ補強	
166－1	－	椀破片	ブナ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
166－2	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
167	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
168	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
169	－	膜面のみ	不明	－	赤	赤		Ⅴ＋Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		塗り直し補修	
170	－	椀破片	ケヤキ	－	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来？	
171	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
172	－	椀型	ケヤキ	B	赤	赤		Ⅷ	Ⅷ	Hg	Hg		根来	
173	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
174	－	椀型	シオジ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
175	－	椀破片	シオジ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
176	－	椀破片	ケヤキ	－	黒	黒		Ⅴ	Ⅴ					
177	－	椀破片	ケヤキ	－	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来？・布着せ補強	
178－1	－	椀破片	トチノキ	－	赤	赤	外－絵－黒	Ⅲ	Ⅳ	Hg	Hg		根来？	
178－2	－	椀破片	ケヤキ	－	赤	赤		Ⅷ	Ⅷ	Hg	Hg		根来・布着せ補強	
179	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg+Fe				
180	－	椀破片	クリ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg+Fe				
181	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg+Fe		Hg		
182	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
183	－	椀破片	ケヤキ	－	赤	赤	外－絵－黒	Ⅰ	Ⅱ	Hg	Hg			
184	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
185	－	椀破片	ケヤキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
186	－	椀破片	ケヤキ	－	赤	黒		Ⅶ	Ⅶ	Hg				
187	－	椀破片	ケヤキ	－	赤	赤	内外－絵－黒	Ⅷ	Ⅷ	Hg	Hg		布着せ補強	
188	－	椀破片	クリ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
189	－	椀破片	クリ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
190	W564	板物	スギ	A	－	－		－	－					

No.	報告No.	器型	樹種	木取	表面塗り技法			漆塗構造		使用顔料			備考	高台内
					内	外	文様	内	外	内	外	文様		
191	W172	筒型	バラ科？	C	黒	黒		I	I					
192	W341	白木椀	トチノキ	A	−	−		−	−					
193	W340	白木椀	トチノキ	B	−	−		−	−				轆轤痕	
194	W197	白木刷毛	ヒノキ	B	−	−		−	−					
195	W194	刷毛	ヒノキ	A	−	−		−	−				透漆	
196	W198	刷毛	スギ	−	−	−		−	−				透漆	
197	W924	刷毛	スギ	−	−	−		−	−				透漆	
198	W199	刷毛	スギ	A	−	−		−	−				透漆	
199	W192	白木刷毛	スギ	A	−	−		−	−					
200	W200	白木板物	針葉樹	−	−	−		−	−					
201	W195	刷毛	スギ	−	−	−		−	−				透漆	
202	W193	刷毛	スギ	−	−	−		−	−				透漆	
203	W191	白木板物	スギ	−	−	−		−	−				透漆	
204	W970	杓子	スギ	−	−	−		−	−				透漆	
205	W591	曲げ物	マツ？	−	黒	黒		−	−					
206	W179	白木板物	スギ	−	−	−		−	−					
207	W492	白木板物	針葉樹	−	−	−		−	−					
208	W94	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	I	II	Hg		Hg		
209	W26	椀型	クリ	A	黒	黒		I	I			ベンガラ		
210	W130	椀型	クリ	B	赤	黒	外−絵−赤	I	II	Hg+Fe		Hg+Fe		
211	W54	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	I	II	Hg		Hg		
212	W77	椀型	ケヤキ	A	赤	黒	外−絵−赤	I	II	Hg+Fe		Hg		
213	W122	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	I	II	Hg		Hg	鶴亀	文字
214	W42	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	I	II	Hg		Hg	鶴亀	
215	W124	椀型	トチノキ	A	赤	黒		I	I	Hg				
216	W168	椀型	トチノキ	A	赤	黒		I	I	Hg				
217	W107	椀型	クリ	A	赤	黒	外−絵−赤	I	II	Hg+Fe		Hg		
218	W68	椀型	コナラ	不明	赤	黒	外−絵−赤	I	II	Hg+Fe		Hg+Fe		
219	W89	椀型	ホオノキ	B	赤	黒	外−絵−赤	I	II	Hg		Hg		
220	W83	椀型	クリ	B	赤	黒	外−絵−赤	I	II	Hg		Hg	鶴亀	
221	W141	椀型	トチノキ	B	赤	黒		I	I	Hg				
222	W55	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	I	II	Hg		Hg	鶴亀	文字
223	W146	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	I	II	Hg+Fe		Hg	鶴亀	
224	W58	椀破片	ブナ	−	赤	黒	外−絵−赤	I	II	Hg		Hg		
225	W183	曲物底板	スギ	−	黒			−	−					
226	W99	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	I	II	Hg+Fe		Hg+Fe		文字
227	W25	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	I	II	Hg+Fe		Hg		
228	W30	椀型	ホオノキ	A	黒	黒	外−絵−赤	I	II			Hg		
229	W157	椀型	クリ	B	黒	黒		I	I					
230	W160	椀型	コナラ	不明	黒	黒		I	I					
231	W28	椀型	トチノキ	A	黒	黒		I	I					
232	W142	椀型	広散孔	B	赤	黒	外−絵−赤	I	II	Hg		Hg		
233	W98	椀型	カツラ	A	赤	黒	外−絵−赤	I	I	Hg		Hg		
234	W156	椀型	コナラ	A	黒	黒		I	I					文字
235	W119	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	I	II	Hg		Hg		
236	W127	椀型	ケヤキ	B	赤	黒	外−絵−赤	I	II	Hg+Fe		Hg		
237	W71	椀型	ブナ	A	赤	黒	外−絵−赤	I	II	Hg+Fe		Hg		
238	W31	白木鉢	トチノキ	A	−	−		−	−					
239	W92	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	I	II	Hg		Hg	漆付着	
240	W178	椀破片	ケヤキ	−	赤	黒		I	I	Hg＋Fe				
241	W167	椀型	クリ	A	赤	黒	外−絵−赤	I	II	Hg		Hg		
242	W115	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	I	II	Hg		Hg		
243	W101	椀型	コナラ	B	赤	黒		I	I	Hg				文字
244	W104	椀型	トチノキ	A	赤	黒		I	I	Hg				
245	W32	椀型	ホオノキ	B	赤	黒		I	I	Hg				文字
246	W21	椀型	イタヤカエデ	A	赤	黒	外−絵−赤	I	II	Hg		Hg		
247	W97	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	I	II	Hg		Hg	菊	
248	W73	椀型	ホオノキ	B	赤	黒		I	I	Hg				
249	W137	椀型	トチノキ	A	黒	黒		I	I					
250	W159	椀型	トチノキ	A	黒	黒		I	I					文字
251	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	I	II	Hg		Hg		
252	−	椀型	トチノキ	B	赤	黒	外−絵−赤	I	II	Hg＋Fe		Hg		
253	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	I	II	Hg＋Fe		Hg	鶴亀	
254	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒	外−絵−赤	I	II	Hg＋Fe		Hg		

No.	報告No.	器型	樹種	木取	表面塗り技法			漆塗構造		使用顔料			備考	高台内
					内	外	文様	内	外	内	外	文様		
255	－	椀破片	ホオノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
256	－	椀型	ホオノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
257	－	椀破片	カツラ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
258	－	椀型	ケヤキ	B	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来？・布着せ補強	
259	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
260	－	椀型	クリ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
261	－	椀破片	トチノキ	－	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
262	－	椀型	トチノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
263	－	板物	ヒノキ	－	－	黒	縁－金	－	Ⅱ			Au＋Ag(少)		
264	－	椀破片	クリ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
265	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
266	－	椀型	トチノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
267	－	椀破片	ホオノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
268	－	椀型	クリ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
269	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
270	－	板物	スギ	－	－	黒		－	Ⅰ					
271	－	椀型	トチノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
272	－	椀破片	ブナ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
273	－	椀型	ホオノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
274	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
275	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
276	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
277	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
278	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
279	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg		
280	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
281	－	椀型	トチノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
282	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
283	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
284	－	椀破片	広葉樹	－	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg			
285	－	椀型	ケヤキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
286	－	椀破片	カツラ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
287	－	椀型	トチノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ			Hg		文字(上)
288	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
289	－	椀型	コナラ	B	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg		
290	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
291	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
292	－	椀型	ホオノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
293	－	椀破片	イタヤカエデ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
294	－	椀型	クリ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
295	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
296	－	椀型	ホオノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
297	－	椀型	スギ		黒	黒		－	－					
298	－	椀破片	トチノキ	－	赤	赤		Ⅲ	Ⅲ	Hg	Hg			
299	－	椀破片	ホオノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
300	－	椀型	トチノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
301	－	椀型	ケヤキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
302	－	椀破片	トチノキ	－	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
303	－	椀型	ケヤキ	A	赤	黒		V	V	Hg				
304	－	椀型	クリ？	－	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
305	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
306	－	椀型	ケヤキ	A	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来・布着せ補強	
307	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
308	－	椀型	トチノキ	A	黒	黒	内－絵－赤	Ⅱ	Ⅰ	Hg				
309	－	こま	ホオノキ	C				－	－			Hg	朱線	
310	－	椀型	トチノキ	A	黒	黒	内外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ			Hg		
311	－	板物	スギ	－	黒	黒		－	－					
312	－	椀型	トチノキ	不明	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
313	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
314	－	曲物底板	スギ	－				－	－					
315	－	椀破片	ケヤキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
316	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
317	－	椀型	広葉樹散孔材	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
318	－	椀型	広葉樹散孔材	－	黒	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ			Hg		文字

No.	報告No.	器型	樹種	木取	表面塗り技法			漆塗構造		使用顔料			備考	高台内
					内	外	文様	内	外	内	外	文様		
319	−	白木椀	シイノキ	B	−	−		−	−				轆轤痕	
320	−	椀型	コナラ	−	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg＋Fe		
321	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
322	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
323	−	反端椀	ケヤキ	B	赤	赤		Ⅷ	Ⅷ	Hg	Hg		根来・布着せ補強	
324	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
325	−	椀型	ホオノキ	B	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe		Hg		
326	−	椀型	クリ	A	黒	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ			Hg		
327	−	椀破片	クリ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
328	−	板物	スギ	−	−	黒		−	−				透漆	
329	−	椀型	クリ	B	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
330	−	反端椀	ケヤキ	B	赤	赤		Ⅹ	Ⅺ	Hg	Hg		根来・布着せ補強	
331	−	椀破片	クリ	−	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
332	−	椀型	クリ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
333	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
334	−	椀破片	ケヤキ	−	赤	赤		Ⅷ	Ⅷ	Hg	Hg		根来？	
335	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
336	−	椀型	クリ	B	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
337	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
338	−	椀型	トチノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
339	−	椀型	トチノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					刻印
340	−	椀型	トチノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
341	−	椀型	カツラ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
342	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
343	−	板物	スギ	−	黒	黒		−	−					
344	−	椀型	クリ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
345	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
346	−	椀型	ケヤキ	A	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来・布着せ補強	
347	−	椀破片	ケヤキ	−	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
348	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
349−1	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
349−2	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
350	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
351	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
352	−	椀型	トチノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
353	−	板物	スギ		黒	黒		−	−					
354	−	椀破片	クリ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
355	−	椀破片	クリ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
356	−	椀型	ホオノキ	B	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
357	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
358	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
359	−	椀型	トチノキ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
360	−	椀型	クリ	B	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg+Fe		Hg		
361	−	板物	スギ	−	黒	黒		−	−				透漆	
362	−	板物	スギ	−	黒	黒		−	−				透漆	
363	−	板物	スギ	−	−	黒		−	−				透漆	
364	−	椀型	ケヤキ	A	赤	赤		Ⅶ	Ⅷ	Hg	Hg		根来・布着せ補強	
365	−	椀型	ケヤキ	A	黒	黒		Ⅴ	Ⅴ				布着せ補強	
366	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
367	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
368	−	椀型	ケヤキ	B	赤	赤		Ⅶ	Ⅴ	Hg	Hg		根来？	
369	−	板物	スギ	−	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
370	−	椀破片	コナラ	−	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
371	−	椀型	コナラ	B	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
372	−	椀型	ケヤキ	B	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg+Fe	Hg+Fe		根来・布着せ補強	
373	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg+Fe		Hg+Fe		
374	−	板物	ヒノキ	−	黒	黒		−	−					
375	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg+Fe		Hg		
376	−	椀型	トチノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
377	−	白木椀	クリ	A	−	−		−	−				轆轤痕	
378	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
379	−	椀型	トチノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
380	−	椀型	ブナ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					文字
381	−	椀破片	クリ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg+Fe				

No.	報告No.	器型	樹種	木取	表面塗り技法			漆塗構造		使用顔料			備考	高台内
					内	外	文様	内	外	内	外	文様		
382	−	椀型	ハンノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg				
383	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
384	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
385	−	椀型	ケヤキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
386	−	板物	スギ	−	透	透		−	−				透漆	
387	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ					
388	−	板物	スギ	−	黒	黒		−	−					
389	−	板物	スギ	−	黒	黒		−	−					
390	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		hg		
391	−	椀型	クリ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg+Fe				
392	−	椀型	トチノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
393	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
394	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	引っかき	
395	−	椀型	トチノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
396	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
397	−	椀型	クリ	B	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg+Fe		Hg		
398	−	椀型	ケヤキ	A	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
399	−	椀型	トチノキ	B	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
400	−	椀破片	トチノキ	−	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
401	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
402	−	椀型	カバノキ科？	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
404	−	椀破片	コナラ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg+Fe				
405	−	椀型	トチノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
406	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
407	−	椀型	ブナ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
408	−	椀型	クリ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
409	−	椀破片	ホオノキ	−	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
410	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
411	−	椀破片	ケヤキ	−	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
412	−	椀破片	クリ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
413	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
414	−	椀型	クリ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg+Fe				
415	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
416	−	椀破片	トチノキ	−	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
417	−	椀破片	クリ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
418	−	椀型	ケヤキ	不明	赤	赤	外−絵−黒	Ⅷ	Ⅷ	Hg	Hg			
419	−	椀破片	ケヤキ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg+Fe				
420	−	椀型	シオジ	A	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg+Fe		Hg		
421	−	椀破片	ホオノキ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
422	−	椀型	クリ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg+Fe			轆轤痕	
423	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
424	−	椀型	コナラ	B	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg+Fe		Hg		
425	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
426	−	椀破片	不明	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
427	−	椀型	トチノキ？	不明	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
428	−	白木椀	クリ	A	−	−		−	−					
429	−	椀型	トチノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
430	−	椀型	クリ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
431	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
432	−	椀破片	ケヤキ	−	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
433	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
434	−	椀破片	ケヤキ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
435	−	椀破片	ケヤキ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg+Fe				
436	−	椀破片	クリ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
437	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
438	−	椀破片	ブナ	−	赤	赤		Ⅰ	Ⅰ	Hg	Hg			
439	−	椀型	ケヤキ	B	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来？・布着せ補強	
440	−	椀破片	クリ	−	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
441	−	椀型	トチノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
442	−	椀破片	トチノキ	−	黒	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ			Hg		
443	−	椀型	シオジ	B	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
444	−	椀型	クリ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
445	−	椀型	クリ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg+Fe				文字
446	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		

No.	報告No.	器型	樹種	木取	表面塗り技法			漆塗構造		使用顔料			備考	高台内
					内	外	文様	内	外	内	外	文様		
447	−	椀破片	コナラ	−	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
448	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	引っかき	
449	−	椀破片	ケヤキ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
450	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
451	−	椀型	トチノキ	B	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
452	−	椀破片	不明	−	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
453	−	椀型	トチノキ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
454	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
455	−	椀破片	トチノキ	−	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
456	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
457	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
458	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
459	−	椀破片	ケヤキ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
460	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
461	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
462	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
463	−	椀型	トチノキ	B	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
464	−	椀破片	クリ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg+Fe				
465	−	椀型	トチノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
466	−	椀破片	ホオノキ	−	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
467	−	椀破片	ブナ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
468	−	椀破片	カツラ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
469	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg+Fe		Hg		
470	−	椀破片	トチノキ	−	赤	赤		Ⅰ	Ⅰ	Hg	Hg			
471	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
472	−	椀型	イタヤカエデ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
473	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
474	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg+Fe				
475	−	椀破片	サクラ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Fe				
476	−	椀破片	ブナ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
477	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg+Fe				
478	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
479	−	椀型	クリ	A	黒	黒	内−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ			Hg＋Fe		文字
480	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
481−1	−	椀破片	コナラ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
481−2	−	椀破片	トチノキ	−	黒	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ			Hg		
482	−	椀型	トチノキ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
483	−	椀型	クリ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
484	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
485	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
486	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
487	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
488	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		文字(上)
489	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				文字
490	−	椀型	クリ	B	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg		
491	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
492	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
493	−	椀破片	ケヤキ	−	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
494	−	白木椀	トチノキ	A	−	−		−	−					
495	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
496	−	椀破片	ケヤキ	−	赤	黒		Ⅶ	Ⅴ	Hg				
497	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
498	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
499	−	椀破片	トチノキ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
500	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
501	−	椀破片	ホオノキ	−	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
502	−	椀型	コナラ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
503	−	椀型	コナラ	B	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg		
504	−	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
505	−	椀型	クリ	B	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg		
506	W39	椀型	トチノキ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
507	W1	小型反端椀	ハンノキ	A	赤	赤		Ⅰ	Ⅰ	Hg	Hg		根来	
508	W41	椀型	ケヤキ	B	赤	黒		Ⅶ	Ⅴ	Hg			布着せ補強	
509	W65	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外−絵−赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		

No.	報告No.	器型	樹種	木取	表面塗り技法			漆塗構造		使用顔料			備考	高台内
					内	外	文様	内	外	内	外	文様		
510	W86	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg		
511	W72	椀型	ホオノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
512	W152	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg				
513	W143	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
514	W158	椀型	クリ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
515	－	椀型	トチノキ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
516	－	椀型	トチノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
517	－	椀型	クリ	B	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
518	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg＋Fe		
519	－	椀型	ブナ	A	赤	赤		Ⅰ	Ⅰ	Fe	Fe		新しい	
520	－	椀型	クリ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
521	－	椀型	カバノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
522	－	椀型	クリ	B	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg		
523	－	椀型	ブナ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
524	－	椀型	クリ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
525	－	椀型	クリ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
526	－	椀型	トチノキ	B	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg＋Fe		
527	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg		
528	－	椀型	ケヤキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅶ	Ⅷ	Hg＋Fe		Hg＋Fe		
529	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
530	－	椀型	広葉樹散孔材	A	赤	赤		Ⅰ	Ⅰ	Hg	Hg		根来	
531	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg, Hg＋Fe		
532	－	椀型	ケヤキ	A	赤	黒		Ⅶ	Ⅴ	Hg			布着せ補強	
533	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
534	－	椀型	ブナ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	引っかき	
535	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
536	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
537	－	椀型	クリ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg		
538	－	椀型	クリ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
539	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	文字
540	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
541	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
542	－	椀型	トチノキ	B	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ				内－漆液あり	
543	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
544	－	椀破片	トチノキ	－	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
545	－	椀型	クリ	B	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
546	－	椀破片	トチノキ	－	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
547	－	椀型	ブナ	B	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg		
548	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
549	－	板物	スギ	－	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
550	－	椀型	ケヤキ	A	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来	
551	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
552	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
553	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
554	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
555	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
556	－	白木椀	トチノキ	B	－	－		－	－					
557	－	椀型	ブナ	B	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg＋Fe		
558	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
559	－	椀破片	トチノキ	－	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
560	－	椀破片	ブナ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Fe			新しい	
561	－	板物	スギ	－	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
562	－	椀破片	ケヤキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
563	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
564	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
565	－	椀型	クリ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
566	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
567	－	椀型	クリ	B	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
568	－	椀型	ブナ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
569	－	筒型	トチノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ				轆轤痕	
570	－	椀型	クリ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
571－1	－	椀型	トチノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
571－2	－	椀型	トチノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
572	－	椀型	コナラ	B	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		

No.	報告No.	器型	樹種	木取	表面塗り技法			漆塗構造		使用顔料			備考	高台内
					内	外	文様	内	外	内	外	文様		
573	－	椀型	ホオノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
574	－	椀型	カツラ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
575	－	椀破片	クリ	－	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
576	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
577	－	椀破片	ブナ	－	黒	黒	内－絵－赤	Ⅱ	Ⅰ			Hg＋Fe	絵：スタンプ紋・古皿タイプ	
578	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	内：漆付き	
579	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
580	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
581	－	椀破片	トチノキ	－	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
582	－	椀破片	クリ	－	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
583	－	椀型	ケヤキ	A	赤	赤		Ⅴ	Ⅶ	Hg	Hg		根来？	
584－1	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
584－2	－	椀型	クリ	不明	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
585	－	椀型	ケヤキ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
586	－	椀破片	ホオノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
587	－	椀破片	クリ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
588	－	椀破片	トチノキ	－	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
589	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
590	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
591	－	椀型	ブナ	A	赤	赤		Ⅰ	Ⅰ	Hg	Hg		根来？	
592	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
593	－	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
594	－	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		刻印
595	－	鉢型	トチノキ	C	不明			Ⅰ	Ⅰ				漆付き？	
596	W106	椀型	コナラ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
597	W80	椀型	コナラ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe				
598	W74	椀型	クリ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
599	W76	椀型	カツラ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				文字（上）
600	W63	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
601	W121	椀型	シオジ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
602	W116	椀型	ホオノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
603	－	不明	マツ	－	透漆			－	－					
604	－	不明	マツ	－	透漆			－	－					
605	－	不明	マツ	－	透漆			－	－					
606	W165	白木椀	広葉樹環孔材	A	－	－		－	－					
607	W114	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg		
608	W23	椀型	コナラ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
609	W12	椀型	ブナ	B	赤	赤		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe	Hg＋Fe		根来？	
610	W43	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
611	W161	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
612	W123	椀型	コナラ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg		
613	W140	椀型	トチノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
614	W79	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
615	W118	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe？				
616	W51	椀破片	トチノキ	－	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
617	W108	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
618	W50	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
619	W132	椀型	トチノキ	不明	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
620	W102	椀型	トチノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
621	W103	椀型	コナラ	B	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg		
622	W149	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ					
623－1	W113	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
623－2	W113	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	菊	
624	W166	椀型	ケヤキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
625	W108	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
626	W95	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg		
627	W34	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg		Hg		
628	W112	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe				
629	W169	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg＋Fe		
630	W75	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
631	W138	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg		Hg＋Fe		
632	W14	椀型	ケヤキ	A	赤	赤	外－絵－黒	Ⅷ	Ⅸ	Hg	Hg			
633	W19	椀型	ブナ	A	赤	赤		Ⅰ	Ⅰ	Hg＋Fe	Hg＋Fe		根来	
634	W153	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				

No.	報告No.	器型	樹種	木取	表面塗り技法			漆塗構造		使用顔料			備考	高台内
					内	外	文様	内	外	内	外	文様		
635	W35	椀型	コナラ	B	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
636	W163	椀型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	Hg				
637	W164	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
638	W56	椀型	クリ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg				
639	W37	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
640	W91	椀型	コナラ	B	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
641	W155	椀型	コナラ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
642	W62	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
643	W84	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	引っかき	
644	W96	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg＋Fe		刻印
645	W105	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
646	W52	椀型	トチノキ	B	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg	鶴亀	
647	W109	椀型	トチノキ	A	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg		Hg		
648	W27	椀型	トチノキ	A	黒	黒	内外－絵－赤	Ⅱ	Ⅱ			Hg		
649	W36	椀破片	トチノキ	－	赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	Hg＋Fe		Hg		
650	W442	杓子柄	ホオノキ	－	黒	？		－	－					
651	W442	杓子	ホオノキ	B	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					
652	W665	板物	スギ	－	透漆			－	－					
653	W182	板物	ヒノキ？	－	透漆			－	－					
654	W185	板物	スギ	－	透漆			－	－					
655	W186	板物	ヒノキ	－	透漆			－	－					
656	W10	椀型	ケヤキ	B	赤	赤		Ⅰ	Ⅰ	Hg	Hg		根来？・補修痕	
657	－	板物	針葉樹	－	透漆			－	－					
658	－	椀破片	ケヤキ	B	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来？	
659	－	椀破片	ケヤキ	－	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来？	
660	－	椀型	ケヤキ	A	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来？	
661	－	椀型	ケヤキ	B	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	Hg	Hg		根来？・布着せ補強	
662	－	椀破片	ケヤキ	－	赤	赤		Ⅷ	Ⅷ	Hg	Hg		根来？	
663	M12	刀子柄	膜面のみ	－	黒			Ⅴ	Ⅴ					

什器などに使用するような朱漆器（これについても一般的な１層塗の資料群と黒漆を中塗りして朱漆を上塗りして塗重ねる正当な根来塗の製法を踏襲した資料群の両者が含まれていた）が見出された。この中には、畿内の京都などで占有率が高いトチノキ材の使用事例が多く、洗練された絵柄のモチーフによる吉祥文様である鶴亀文様を加装する資料群や、前記したような正当もしくは典型的な根来系朱漆器の資料群なども含まれていた。

宮内堀脇遺跡は、物資流通を含めた交通の要衝であると同時に、当時有力大名であった山名氏宗家の城下町関連である。このような当時の背景を考慮に入れると、当該地域で使用されていた日常生活什器である漆器に、畿内を中心とした漆器生産技術の範疇に入る資料が多く含まれていても、ある程度納得いく結果といえよう。もちろんこのような漆器に、在地性が強い小規模の漆器生産地の製品を加えながら、両者相互補完してそれぞれの時と場所のニーズに答えた調達と使用が本遺跡内では為されていたものと考える。この点は、前回報告を行った宮内堀脇遺跡出土漆器と同じ結果である。いずれにしても、今回の分析調査を経て、本資料群の材質・技法の一般的な傾向の全貌が明らかになったものと理解している。

（引用文献）

北野信彦（2005）『近世出土漆器の研究』吉川弘文館

北野信彦（2005）『近世漆器の産業技術と構造』、雄山閣

北野信彦（2005）『漆器の考古学 ―出土漆器からみた近世という社会―』、あるむ出版

兵庫県教育委員会（2007）『宮内堀脇遺跡Ⅱ』

第Ⅸ章　宮内堀脇遺跡における地形環境と土地改変

青　木　哲　哉（立命館大学非常勤講師）

1. はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用しながら活動してきた。なかでも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活との間には密接な関係が存在する。地形環境は、第四紀に変化を続け、現在に至っている。そのため、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期の地形環境とその変化を明らかにすることが必要と考えられる。

人間生活の解明につながる地形環境は、数万年や数千年オーダーでの考察だけでなく、それより細かいオーダーで捉えなければならない。これには、考古遺跡の発掘調査区における地形・地質調査が有効な方法となる。調査区では、微地形の観察や堆積物の詳細な区分ができ、地形環境を細かいオーダーで復原できる。同時に、人間活動の痕跡である遺構が検出されるため、過去の人間生活が知られる。考古遺跡の発掘調査区では、地形環境と人間生活の関わりについても考察できるのである。

本稿では、宮内堀脇遺跡における地形環境を明らかにしたい。調査では、１万分の１空中写真の判読と現地踏査にもとづいて遺跡周辺の地形を分類するとともに、遺跡の各調査区における堆積物の観察を行った。こうして得られた調査結果に発掘調査の成果を加えて、遺跡における地形環境を考察した。

2. 調査区周辺における地形の分布

本遺跡の調査区は豊岡盆地の南東部に位置する。この盆地は円山川の下流部にみられ、その中央付近では、概ね北流する出石川が円山川に注ぎ込む。豊岡盆地の南東部には、出石川とその支流によって形成された平野が広がり、調査区はその東端にみられる。調査区の北側には、出石川の小規模な支流である入佐川（いるさ）がほぼ西流する。この川は調査区東方の山地に源を発し、流域の山地は主に花崗岩類からなる。これらのうち、調査区より約400m東北東にある山地の頂には、此隅山（このすみやま）城跡が認められる。この城は、室町時代から安土桃山時代における山名氏の居城で、山頂は標高約150mを有する。

調査区周辺の出石川沿いには、沖積低地が広がり、丘陵や更新世段丘がほとんど認められない。沖積低地は低平で、縄文海進頂期には概ねその北半部が海域であったと考えられる。沖積低地には、自然堤防、後背湿地、旧河道、および支流性扇状地がみられる（第13図）。自然堤防は主に出石川の現流路に沿って分布する。数は比較的少なく、比高が数十cmである。後背湿地は、沖積低地の多くを占め、とくに出石川の支流に沿って開ける沖積低地でよく発達する。これは、上流から下流への傾斜がほとんどなく、低湿な環境の微地形にあたる。旧河道はその分布が沖積低地の広い範囲で推定できる。なかでも、出石川の旧河道は緩やかに蛇行するものが多い。

支流性扇状地は沖積低地の周縁に点々と分布する。これらは、背後の山地から堆積物が供給されてできたものである。地表の平均傾斜は約85‰と大きく、その前面にみられる後背湿地と傾斜変換線で接している。調査区はこのような支流性扇状地の扇端付近に位置する。調査区がみられる支流性扇状地は、入佐川によって形成されたもので、現在の出石市街地が位置するものと並んで面積が大きい。

3. 調査区における堆積物の特徴

（1） 平安時代以前の堆積物

調査区では、この時期における堆積物が10観察され、これら以深には支流性扇状地を構成する砂礫が存在すると推定される。調査区で観察された堆積物は、下位から順に灰白色のシルト、黒色の泥炭、暗灰色のシルト、暗褐灰色のシルト、黒色の泥炭、暗褐色のシルト、暗褐色の礫混じり砂質シルト、黒灰色のシルト、灰色のシルト、および黒灰色のシルトである（図２）。

これらは、いずれも後背湿地堆積物に相当し、10～40cmの厚さで認められる。それらのうち泥炭を除くシルトと礫混じり砂質シルトは、出石川の洪水に伴うもので、ほぼ水平に堆積している。なかでも、２つの黒灰色シルトはその堆積後に低湿な環境下で生成された土壌にあたる。水田土壌は４つみられ、下位から３つ目の暗灰色シルト、４つ目の暗褐灰色シルト、６つ目の暗褐色シルト、ならびに９つ目の灰色のシルトがそれにあたる。これらの上面では畦畔が検出され、堆積物にはそれぞれ弥生時代末ころ、古墳時代前期、奈良時代、ならびに平安時代後期の遺物が含まれる。また、下位から８つ目の黒灰色シルトからは平安時代前期の馬形が出土している。

他方、泥炭は２つみられる。これらは湿地性堆積物であり、調査区付近では弥生時代末ころ以前と古墳時代前期から奈良時代までのある時期とに湿地が存在していたことが知られる。

（2） 鎌倉時代～安土桃山時代の堆積物

この時期における堆積物の基本層序は、下位から灰色のシルト、暗灰色のシルト、灰色のシルト、灰褐色の砂礫、人為的な盛土、褐灰色のシルト質砂、および暗灰色の礫混じりシルトである（図２･図３）。これらのうち、下位に位置する３つのシルトは出石川の洪水に伴う後背湿地堆積物に該当する。なかでも、最下位の灰色シルトは水田土壌である。灰褐色の砂礫はマサ土で、径0.5～１cmの礫を主体とする。これは、調査区東方の山地から入佐川によって供給されたものであり、支流性扇状地の堆積物にあたる。このような灰色シルト（水田土壌）とその上位の灰褐色砂礫には、鎌倉時代の遺物が含まれる。

盛土には、整地を行うためのもの（整地土）と土塁を構成するものとがみられる。整地土は、95年度調査区と96年度調査区の東部に分布し、主に暗灰色や黄色を呈する砂礫とシルト質砂礫からなる。砂礫は、淘汰の悪いマサ土で、風化の進んだ径数cm～十数cmの花崗岩礫が混入する。整地土全体の厚さは１m～1.8mで、そこには炭が６層位にわたって認められる。炭は10cm前後の厚さで断続的にみられ、それらを境に整地土は大きく６つに分けられる。

各整地土の上面（中世Ⅱ～Ⅶ面）では、掘立柱建物（侍屋敷）跡が検出され、炭はこれらの屋敷が合戦などの際に焼失してできたものである。これらのうち中世Ⅶ面、Ⅵ面、ならびにⅡ面の時期はそれぞれ16世紀前半、天文23（1554）年までの天文年間、天正８（1580）年までの天正年間と考えられている。なお、整地土の間には、洪水堆積物が部分的に認められ、中世Ⅴ面の下位にはマサ土からなる砂礫が薄く堆積している。

一方、土塁を構成する盛土は整地土の西側にみられる。これは、最大で約５mの厚さで観察され、黄灰～灰色の砂礫や灰～褐灰色のシルトからなる。砂礫は整地土と同様の特徴をもち、シルトには径数～十数cmの黒灰～褐色シルトがボール状に多数混入する。土塁の西隣では堀が検出されており、これを埋めるように施された盛土もみられる。盛土の上位にのる褐灰色のシルト質砂と暗灰色の礫混じりシルトは洪水堆積物に相当する。これらには、慶長年間（1596～1615年）の遺物が含まれる。

（3） 江戸時代の堆積物

この時期の堆積物は下位から褐白色の砂礫、黒灰色の砂礫、暗灰色のシルト、黄灰色の砂礫、暗灰色のシルト、黄褐色の砂礫、および褐灰色の砂質シルトであり、この上位に現耕土がみられる（第14・15図）。これらのうち砂礫は、マサ土であり、径１cm以下の礫を主体とする。下位から６つ目の黄褐色砂礫には、江戸時代末の遺物が含まれており、それより下位の砂礫とシルトは江戸時代中～後期に堆積したと考えられている。なお、下位から５つ目の暗灰色シルトは畠の耕土にあたる。

4．地形環境の変遷について

ここでは、これまでの事柄から考察される地形環境について述べる（第16・17図）。

〔ステージ１〕 調査区では、出石川の洪水によってシルトが堆積し、後背湿地が形成されていた。弥生時代末以前には、湿地がみられ、そこでは泥炭が生成された。湿地がシルトの被覆によって消滅した後の弥生時代末ころと古墳時代前期には、その直前に堆積したシルトを土壌とした水田稲作が営まれた。

〔ステージ２〕 再び湿地が形成された後、出石川の洪水に伴うシルトが次々に堆積し、後背湿地が発達した。そこでは、奈良時代と平安時代後期に水田がつくられた。平安時代前期には、低湿な環境下で土壌化した黒灰色のシルトが生成され、馬形を使った祭祀がなされた。

〔ステージ３〕 引き続きシルトが堆積した後、鎌倉時代にはまず水田稲作が行われた。次に、入佐川の洪水によって砂礫（マサ土）がもたらされ、支流性扇状地が調査区付近まで発達した。

〔ステージ４〕 16世紀に入ると、支流性扇状地の扇端付近に整地が施され、侍屋敷が建てられた。同時に、屋敷の西側には土塁と堀がつくられた。その後天文23（1554）年までの間に、消失した屋敷を建て替えるため、整地が再度なされた。

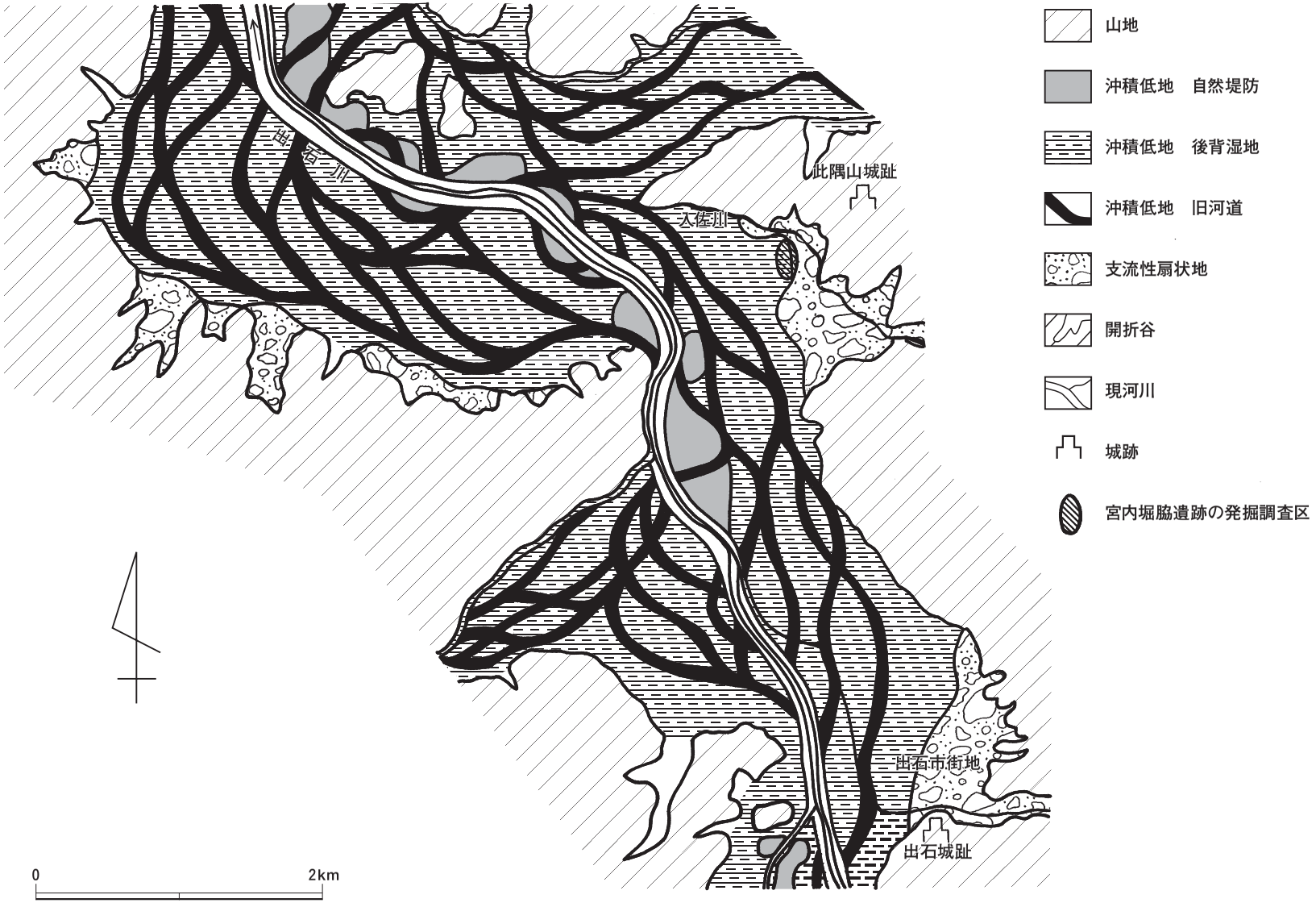
〔ステージ５〕 天文23年以降、屋敷の消失後に入佐川の洪水が発生し、屋敷地内に砂礫が堆積した。その後、４度の整地が施され、屋敷の建て替えや土塁と堀のつくり直しが行われた。こうした人為的な土地改変は屋敷が廃絶された天正８（1580）年までみられた。

〔ステージ６〕 慶長年間（1596～1615年）になると、入佐川と出石川の洪水が各１度及び、砂礫とシルトが堆積した。

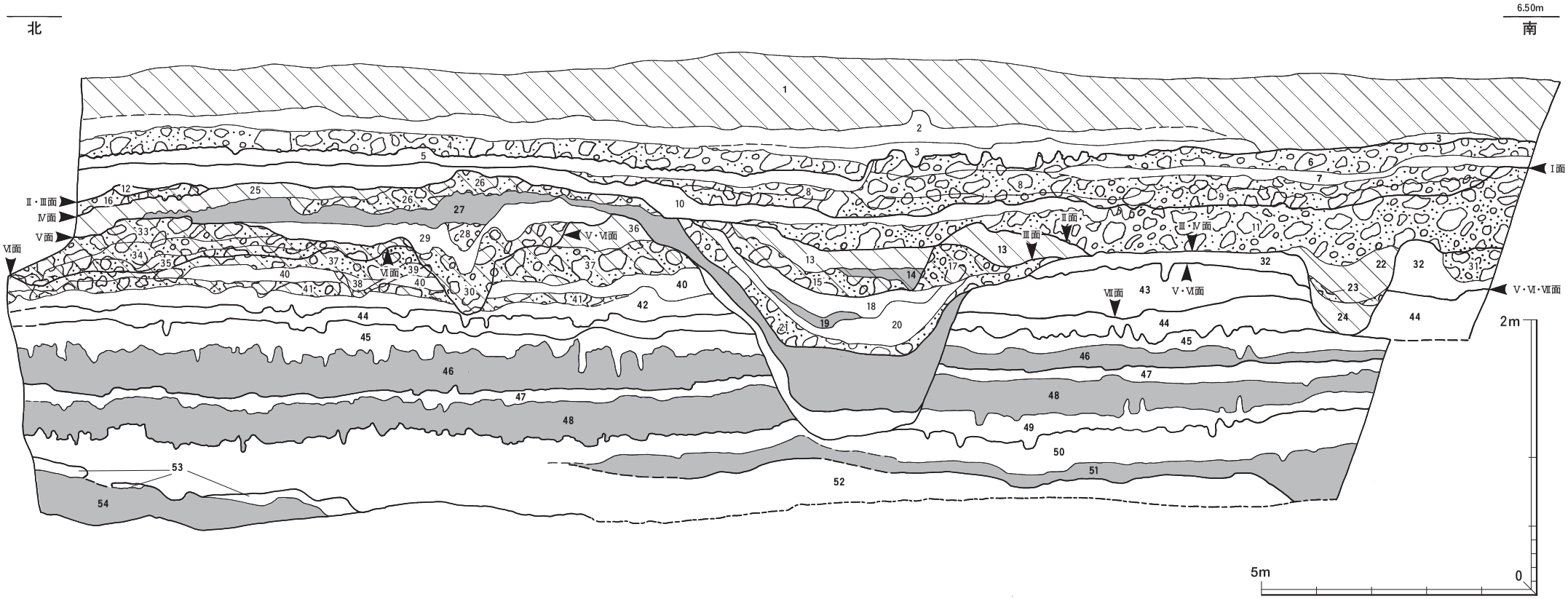
〔ステージ７〕 江戸時代中～後期にも、砂礫とシルトが洪水に伴ってもたらされた。とくに、度重なる砂礫の堆積によって支流性扇状地がさらに発達し、高燥な環境となった調査区では、畠がつくられた。

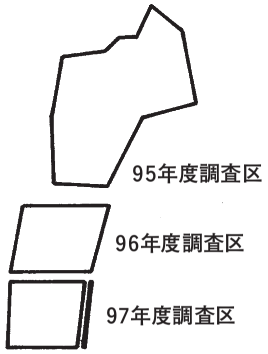
5．おわりに

本遺跡における地形環境は、鎌倉時代を境にして低湿な後背湿地から比較的高燥な支流性扇状地へと移り変わった。調査区では、弥生時代末ころから鎌倉時代にかけて後背湿地が形成され、水田稲作が営まれた。ところが、鎌倉時代には入佐川の洪水によって砂礫が供給され、支流性扇状地が発達した。その扇端にあたる調査区はやや高燥となり、16世紀にはそこを人為的に改変して侍屋敷がつくられた。江戸時代に入ると、さらなる砂礫の供給によって支流性扇状地が発達し、高燥となった調査区では畑作が行われた。このように人間は、地形環境と深く関った生活を行い、時には16世紀のように土地改変によってさらに便利な環境を創出したのである。


山地
沖積低地　自然堤防
沖積低地　後背湿地
沖積低地　旧河道
支流性扇状地
開折谷
現河川
城跡
宮内堀脇遺跡の発掘調査区
出石川
太佐川
此隅山城趾
出石市街地
出石城趾
0
2km

第13図　地形分類図

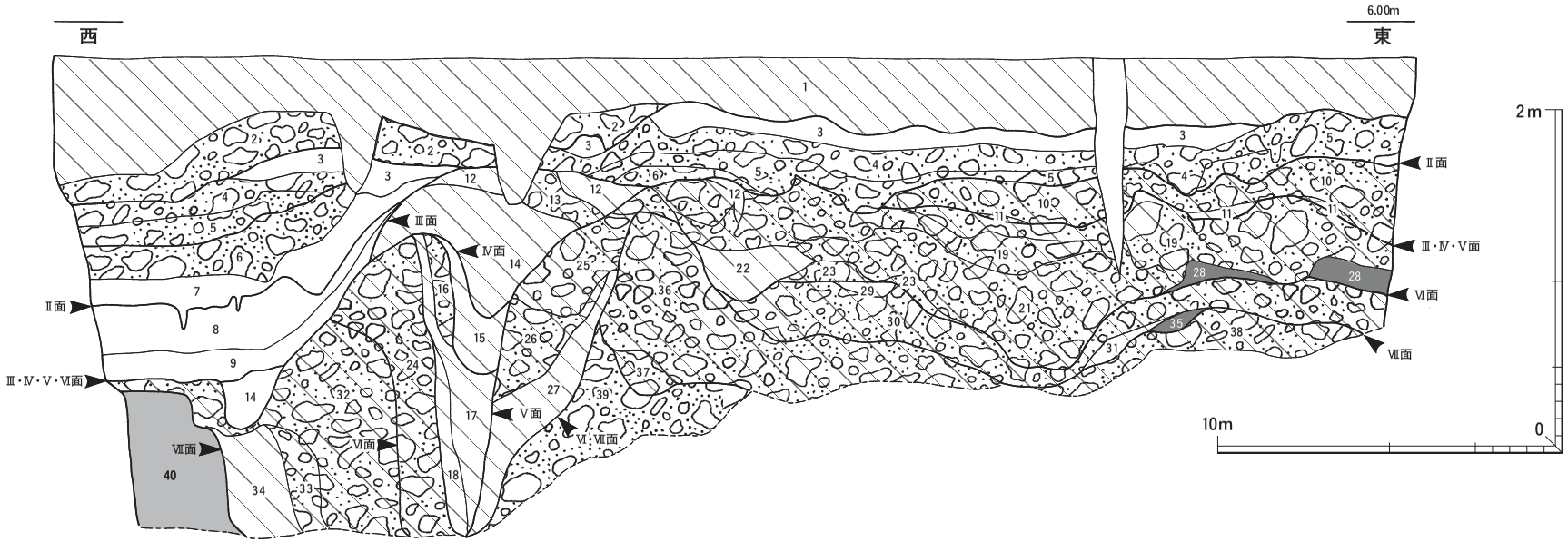


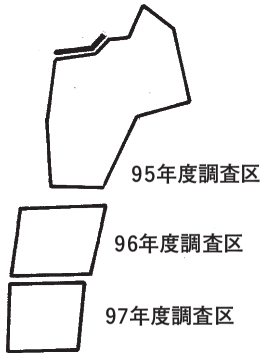


1 盛土(近年)
2 現耕土
3 褐灰色 砂質シルト
4 黄褐色 砂礫：江戸時代末ごろ
5 暗灰色 シルト
6 黄灰色 砂礫
7 暗灰色 シルト
8 黒灰色 砂礫
9 褐白色 砂礫
10 暗灰色 礫混じりシルト：慶長年間
11 褐灰色 シルト質砂礫：慶長年間
12 灰色 シルト：盛土(整地土)
13 赤黄色 砂礫：盛土
14 褐色 植物遺体層
15 灰色 砂礫：盛土
16 暗褐灰色 シルト質砂礫：盛土(整地土)
17 黄色 砂礫：盛土
18 褐灰色 シルト
19 褐色 植物遺体層
20 暗灰色 シルト
21 灰黒色 シルト質砂礫
22 暗灰色 シルト：盛土
23 灰色 砂礫：盛土
24 淡灰色 シルト：盛土
25 暗灰色 シルト：盛土(整地土)
26 灰色 砂礫：盛土(整地土)
27 灰黒色 シルト
28 褐灰色 シルト質砂礫
29 暗灰色 シルト
30 灰色 砂礫：盛土
31 灰色 砂礫
32 灰色 シルト
33 黄色 砂礫：盛土(整地土)
34 褐色 シルト質砂礫：盛土(整地土)
35 黄色 砂礫：盛土(整地土)
36 灰色 砂質シルト：盛土(整地土)
37 黒灰色 砂礫：盛土(整地土)
38 暗灰色 シルト：盛土(整地土)
39 灰色 砂礫：盛土(整地土)
40 暗灰色 シルト
41 暗灰色 シルト質砂礫：盛土(整地土)
42 暗灰色 礫混じりシルト
43 灰色 シルト
44 暗灰色 シルト
45 灰色 シルト：鎌倉時代の水田土壌
46 黒灰色 シルト
47 灰色 シルト：平安時代後期の水田土壌
48 黒灰色 シルト：平安時代前期
49 暗褐色 礫混じり砂質シルト
50 暗褐色 シルト：奈良時代の水田土壌
51 黒色 泥炭
52 暗褐灰色 シルト：古墳時代前期の水田土壌
53 暗灰色 シルト：弥生時代末ごろの水田土壌
54 黒色 泥炭

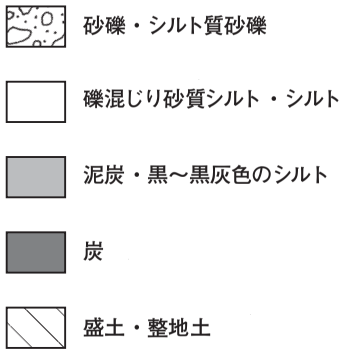
砂礫・シルト質砂礫
礫混じり砂質シルト・シルト
泥炭・黒～黒灰色のシルト
盛土・整地土

第14図 97年度調査区の東壁断面図

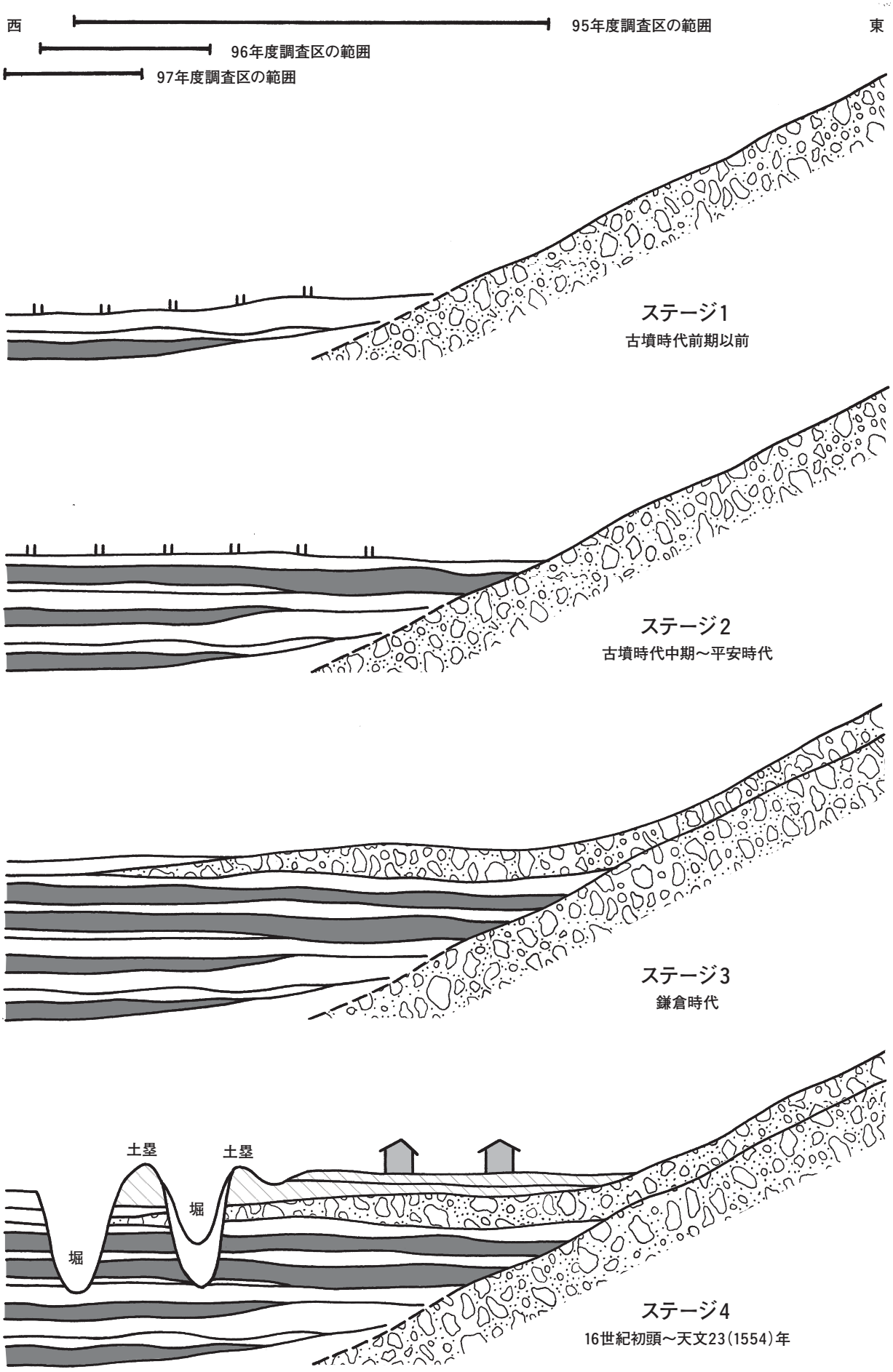




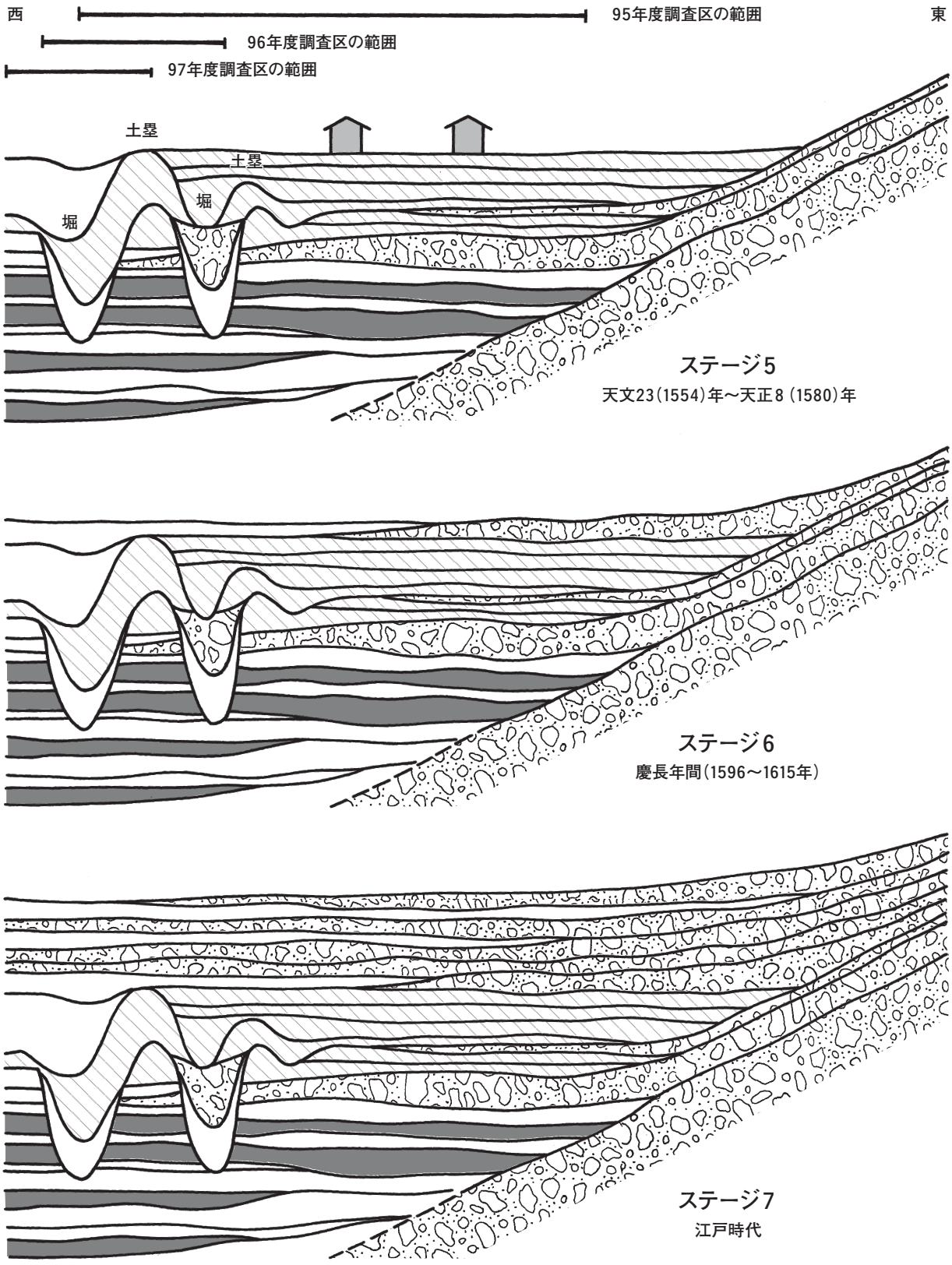
1 盛土(近年)
2 黄色 砂礫：江戸時代末ごろ
3 灰色 礫混じり砂質シルト
4 黄灰色 砂礫
5 灰色 砂礫
6 暗灰色 砂礫
7 褐白色 シルト
8 暗灰色 シルト
9 灰色 シルト
10 黄白色 砂礫：盛土(整地土)
11 暗灰色 シルト：盛土(整地土)
12 淡褐灰色 シルト：盛土
13 灰色 砂礫：盛土
14 灰色 シルト：盛土
15 褐灰色 シルト：盛土
16 黄灰色 砂礫：盛土
17 褐灰色 礫混じりシルト：盛土
18 灰色 シルト：盛土
19 黄白色 砂礫：盛土(整地土)
20 灰色 シルト質砂礫：盛土(整地土)
21 淡黄灰色 砂礫：盛土(整地土)
22 暗灰色 シルト：盛土(整地土)
23 黄褐色 砂礫：盛土(整地土)
24 灰色 シルト質砂礫：盛土
25 黄灰色 砂礫：盛土
26 褐色 シルト質砂礫：盛土
27 灰褐色 シルト：盛土
28 炭
29 褐灰色 礫混じりシルト：盛土(整地土)
30 暗褐色 シルト質砂礫：盛土(整地土)
31 褐灰色 シルト：盛土(整地土)
32 灰色 シルト質砂礫：盛土
33 灰色 砂礫：盛土
34 灰褐色 シルト：盛土
35 炭
36 灰色 砂礫：盛土(整地土)
37 灰色 シルト質砂礫：盛土(整地土)
38 褐灰色 シルト質砂礫：盛土(整地土)
39 灰褐色 砂礫：鎌倉時代
40 黒灰色 シルト



第15図　95年度調査区の北壁断面図



第16図　模式的な地形環境と土地改変 1 （凡例は第17図を参照）



第17図　模式的な地形環境と土地改変 2

第Ⅹ章　遺構・遺物の考察

第１節　出土土器・陶磁器の検討

（１）土器・陶磁器の分類

宮内堀脇遺跡から出土した中世の土器・陶磁器は数多く、また、種類も豊富である。それらは種別では、土師器、瓦質土器、無釉陶器、施釉陶器、磁器などが含まれる。ここでは、これらの土器・陶磁器について、土師器、瓦質土器、無釉陶器、施釉陶器、磁器の順に種別に分類を試み、整理を行いたい。

土師器

宮内堀脇遺跡から出土した土師器には皿・耳皿・脚付皿・壷があるが、そのほとんどが耳皿、脚付皿を含む皿類で占められ、皿の他には数点の壷が見られる程度である。一方、通常、他の県下の中世遺跡とりわけ瀬戸内沿岸の中世遺跡では多量に出土する羽釜、鍋などの土製煮炊具はほとんど含まれない。

皿　宮内堀脇跡で出土した土師器皿は若干の例外を除き、ほぼすべてが手づくね（非ロクロ成形土師器）によるものである。形態から大きく、内面はナデ調整、外面は指おさえの後、口縁部をヨコナデするいわゆる京都系土師器皿（A類）と、やや丸底気味の底部に指おさえによって成形された短く立ち上がる口縁がつき、内面はナデ調整を行い、口縁部外面にはナデ調整を加える（B類）とに分類される。

A類はさらに、底部の形態から、丸底気味の底部から、体部が内彎気味に外上方に立ち上がり、口縁部に至るAa類と、底部は平底であるが、体部との境は丸味を帯びてやや明瞭でないAb類とに分類される。さらにAa類は口縁部が内傾し、端部が窪むAa1類と、口縁部が内傾し、端部が紡錘形になるAa2類に細分される。Ab類も同様に口縁端部内面が窪むAb1類と紡錘形になるAb2類に細分される。また、Ab2類には強いヨコナデ調整によって口縁部外面に段が付くAb2'類がある。

また、法量については、A・B類を通じて、口径を基準として以下の８タイプに分類した。

Ⅰ：６㎝前後、Ⅱ：９㎝前後、Ⅲ：10.5cm前後、Ⅳ：13cm前後、Ⅴ：15cm前後、Ⅵ：18cm前後、Ⅶ：22cm前後、Ⅷ：25cm前後

耳皿　４点（71・158・355・862）出土している。いずれも非ロクロ成形で、口縁部の２ヶ所を内側に折り曲げて成形する。

脚付皿　非ロクロ成形の皿の底部に短い脚を貼り付けるもので２点図化している。完形品がないため、断定は出来ないが、恐らく三脚になるものと考えられる。灯明皿として使用されたものであろう。

壷　４点図化しているが（160・162・546・694）、いずれも小型で体部が僅かに内彎する椀形のもの（162）、平底で体部が内傾し、口縁部が短く直立して、蓋を伴うもの（546）、体部が大きく内彎する手づくね成形のミニチュアタイプのものなどが含まれる。

瓦質土器

土師器が量的には多いものの、器種が非ロクロ成形の皿にほぼ限定されるのに対して、瓦質土器は量が多いだけでなく、器種も擂鉢をはじめとして、鉢、火鉢、火舎香炉、桶形容器、蓋、壷、燭台などが含まれ、大型品を中心に器種も豊富である。しかし、土師器と同様に、県下の他の中世遺跡から普遍的に出土する鍋・羽釜などの煮炊具は全く見られない。

擂鉢　40点図示している。主に口縁部の形状から、口縁部が直口するA類、口縁部が強いナデ調整により外側につまみ出され拡張するB類、口縁部が外側に折り曲げられ内面に凹部を作り出すC類、口縁部が

外側に折り曲げられるが、内面には凹部を作り出さず、肥厚するD類、体部・口縁部が内彎するE類に大別される。また、法量は大きく口径15㎝～20㎝前後のものを２類、それ以外のものを１類とした。A類は外面に指おさえの後ナデ調整を、内面にナデ調整を施すAa類、内外面共に刷毛目調整を施し、外面にナデ調整を加えるAb類に細分される。口径24～30㎝のAa1類・Ab1類のみで構成される。B類は同様に、外面を指押え整形の後、ナデ調整し、内面はナデ調整するBa類、内外面ともに刷目調整を行い、外面にナデ調整を施すBb類、口縁部内側に沈線を巡らせ、外面体部は縦刷毛目、内面は横方向の磨き調整を施すBc類に細分される。法量ではA類同様、口径24㎝ ～30㎝ の中型品Ba1類・Bb1類・Bc1類のみで構成される。C類は外面を指押え整形の後、口縁部を中心にナデ調整するCa類のみであるが、法量別では口径30㎝ 以上の大型品であるCa1類と口径20㎝ 前後の小型品であるCa2類とがある。D類は外面に縦刷毛目調整を行い、後ナデ調整を施すDb類のみであるが、法量からは、口径30㎝以上の大型品であるDb1類と口径20㎝前後の小型品Db2類が見られる。また、小型品Db2類では口縁部内面の窪みの部分に波状の擂目を施文する。E類は指おさえ整形の後ナデ調整を施すEa類と外面に縦刷毛目調整を施し、後にナデ調整を施すEb類に細分される。法量は口径20㎝前後の小型品Ea2類・Eb2類のみで構成される。

鉢　内面に擂目を施さない鉢は４点（228・427・699・789）図化している。形態は擂鉢と同様で、上記の擂鉢分類に従えば、228はAb1類、427はBC1類、699はAb1類、789はAa1類に分類される。

火鉢　火鉢と考えられる鉢は12点図化している。体部から口縁部まで残存するものは、その形態から、体部が内彎し口縁部が短く直立するⅠ類（165・282・774）、平底で体部が大きく内彎し、外面に把手を２つ貼り付けるⅡ類（105・106・553・554・836・900・909）、平面形状は楕円形で体部は直立し、外面に印花で巴文を施文するⅢ類（777･788）、体部は直線的に外上方に延び、口縁部を水平に外方に折り曲げるⅣ類（901）、大型で体部は内彎し、口縁端部を内側に引き出すⅤ類（966）に分類される。

火舎香炉　小型で短い脚をもち、体部が直立するⅠ類（164・906）、平面形状が楕円形で、平底で脚をもたないⅡ類（932）と高い高台をもち、口縁端部が内傾して、釣鐘形の蓋をもつⅢ類（696・697・698）とがある。Ⅲ類は灯火具として使用された可能性も考えられる。

桶形容器　平底で体部外面に箍を模倣したと見られる凸帯を巡らせるものを桶形容器とした。体部がほぼ直立するⅠ類（70）、体部は僅かに内彎し、体部外面全体に凸帯を多数巡らせるⅡ類（311）、平底で体部が直立し低い高台をもち、蓋を伴うと考えられるⅢ類（551・695）、Ⅰ類と形状は類似するが凸帯間に印花で花文を施文するⅣ類（967）がある。火鉢としての使用の他、蓋を伴うⅢ類は火消し壷などの用途が考えられる。

蓋　小型の壷蓋（225・545・691・692）と火舎香炉Ⅲ類の蓋（875）がある。壷蓋はいずれも扁平な円盤形で中央に棒状の短いつまみをもつ。口縁端部が僅かに外方にひらくⅠ類（225・545・692）と口縁端部が垂下するⅡ類（691）とがある。

壷　体部が内彎し口縁部が僅かに内傾する小型の壷（161）と同形で大型の壷（310）がある。48は凸帯が確認できないため、壷に分類したが、おそらく桶形容器Ⅲ類の口縁部と考えられる。

燭台　549は直立する脚部にⅢが付くもので、脚部には穿孔が見られる。

無釉陶器

産地別では越前焼、備前焼のほか丹波焼が僅かに１点含まれている。

越前焼

擂鉢　越前焼擂鉢は22点図示している。口縁部の形状からA類・B類・C類の３種に大別される。

A類は口縁部が外方にまっすぐ延びるもので、口縁端部は尖り、直下に弱い沈線が巡る（708・709・710・754）。B類は口縁端部の上部に面をもち、その直下に段をもつもので、段の形状から、口縁端部の段・面が明瞭なB1類（432・443）、段が退化しあまくなるB2類（12・13・14・90・170・318・320・838）、段が消失し、屈曲部となるB3類（50）に細分される。C類は口縁端部が内傾し、凹面をもち、その直下に段をもつもので、B類同様に段の形状から、口縁端部の段・面が明瞭なC1類（319）、段が退化し、あまくなるC2類（171・172・173・914）、段が消失するC3類（791）に細分される。

また、法量別では、口径が36㎝前後の中型品が最も多く、A・B1・B2・C1類はほとんどがこのサイズのもので占められている。一方、口径40㎝を超える大型品は少なく、B3・C3類がこのサイズのもので占められる。口径35㎝以下の小型品は今回の調査では見られなかった。また、C2類には中型品と大型品の両者が見られる。

甕　擂鉢に比べて越前焼の甕は少量である。289は体部が大きく内彎し口縁部は外方にひらく越前焼Ⅴ期相当の甕である。

備前焼

擂鉢　瓦質擂鉢や越前焼に比べて量的には少ないものの、備前焼擂鉢も一定量出土している。備前焼Ⅴ期相当のもの（203・387・792・876）が多いが、Ⅳ期相当のもの（790）も含まれる。

甕　擂鉢に比べて、備前焼の占める割合が高い。口縁部の形態からⅣ期相当のもの（169・564・565・780）とⅤ期相当のもの（289・322・904・905・915・982）に分類される。

壷　頸部が短く直立し、口縁部が玉縁状に肥厚するもの（779）がある。

徳利　徳利は２点（91・275）図化している。いずれも船徳利と考えられる。

施釉陶器

施釉陶器には産地別では、瀬戸・美濃系、中国製と極少量ではあるが朝鮮産と考えられるものがある。

瀬戸・美濃系

瀬戸・美濃系施釉陶器には器種別では、皿、椀、天目茶碗、壷、香炉、水滴などがある。

皿　全て灰釉皿である。口縁部の形態から口縁部が直口するⅠ類（15・324・907）と口縁部が外方にひらくⅡ類、口縁端部を僅かに外方に引き出すⅢ類（208・572・576・713）、口縁部を波状に成形するⅣ類のひだ皿（573）に分類される。Ⅱ類はさらに底部の形状から、輪高台をもつⅡA類と碁笥底のⅡB類に分類される。ⅡA類は底部内面に印花文をもたないⅡA1類（356・567・569・574・712）、印花文をもつⅡA2類（327・434・493・566・570・761）に細分される。ⅡB類も同様に底部内面に印花文をもたないⅡB1類（643）と印花文をもつⅡB2類（711）に細分される。また、Ⅰ類には底部が碁笥底のⅠB類（15・907）がある。これらの灰釉皿はいずれも大窯Ⅰ～Ⅲ期相当の製品と考えられる。

椀

灰釉椀と天目茶椀がある。

灰釉椀　いずれも、体部が内彎し、口縁部が直口して、内外面に灰釉を施釉する灰釉丸椀（485・578・639・714・715・716・717・718・719・720）である。ほとんどが無文であるが、体部外面に若干櫛描き文を施すもの（717）、龍泉窯系青磁椀を模倣して外面に細蓮弁文を施すもの（578・718）などがある。いずれも大窯期の製品と考えられる。

天目茶椀　比較的多量に出土しており、灰釉椀に比べても多い。時期としては窖窯期と考えられる839を除くと全てが大窯期の製品と考えられる。形態の特徴から大窯Ⅰ期（782・917）、大窯Ⅱ期（17・783）、大窯Ⅲ期（53・276・389・935）の製品が含まれており、大窯Ⅲ期の製品が最も多い。

壷　茶入れとして使用されたと考えられる小壷（57・174）が2点出土している。57は内外面とも灰釉を施すもので、古瀬戸の中期段階の所産と考えられる。174は外面に印花で輪違い文、花文を施文し、鉄釉を施釉する。擂座小壷に類似する。

香炉　体部が直立し、口縁部を内側に引き出すもの（108）、平底で短い脚部を3箇所貼り付け、体部が直立するもの（232）がある。いずれも内外面に灰釉を施釉する。形態から大窯Ⅱ～Ⅲ期相当のものと考えられる。

水滴　52は体部上面に印花で割菱文を4箇所施文する水滴で、外面に灰釉を施釉し、暗緑色に発色する。古瀬戸の中期段階の製品と考えられる。

中国製陶器

宮内堀脇遺跡からは県下の中世遺跡からはあまり出土例のない中国製と考えられる施釉陶器が一定量出土している。中国製陶器には器種としては、壷、鉢、天目茶碗、水滴などがある。

壷　底部を除いてほぼ全体が復原できる褐釉四耳壷（388）のほか、いずれも、破片のため断定はできないが、鉄釉四耳壷片（116・841・898）と口縁端部が玉縁状に肥厚する褐釉壷片（321）が出土している。いずれも16世紀代の中国華南産と考えられる。

鉢　いずれも平底で体部が内彎し、口縁部は断面長方形状に肥厚するもの（177・178・233・234・563）で、内外面とも褐釉を施釉する。華南産の褐釉陶器鉢と考えられる。

天目茶碗　瀬戸・美濃系天目茶碗と比べて、量的には非常に少ないが、胎土・色調から見て建窯産と考えられる天目茶碗（54・56・176）が3点出土している。

水滴　579は型作りの鳥形水滴の頭部である。緑釉をベースに黄釉、褐釉を施釉する。華南三彩の可能性が高い。

朝鮮製陶器

極少量ではあるが、椀、皿と徳利に朝鮮製と考えられるものが含まれている。

椀　椀には底部のみの破片であるが、いずれも、底部内面に砂目跡が残り、鉄釉を施すもの（51）と灰釉を施すもの（721）とがある。

皿　皿（793）は碁笥底で高台裏に卜巾が残る。内外面とも灰釉を施釉するが、底部外面は露胎である。

徳利　徳利（290）は粘土紐巻上げ成形で器壁は非常に薄い。内面は青海波状の当て具痕が残る。外面には灰釉を施釉し、黄灰色に発色する。

磁器

中国製、朝鮮製と考えられるもの、国産の肥前系のものがあるが、ほとんどが中国製である。

中国製

中国製の磁器には白磁、青白磁、青磁、青花磁器がある。

白磁

白磁には器種別では皿、碗、杯、蓋、壷などがある。

皿　多量に出土しているが、なかでももっとも多く出土しているものは低い輪高台をもち口縁部が外方にひらく森田分類皿E－2群（22・23・24・25・61・93・94・180・181・240・242・243・244・261・

263・332・333・334・335・584・585・586・795・796・842・938・939）で白磁皿の大部分を占める。この他に、皿には口縁部が直口するＥ－１群（444・582）、型押しで口縁部を菊花形に成形するＥ－４群（21・60・92）などがあるがＥ－２群に比べてごく少量である。いずれも華南産白磁である。

碗　皿に比べて量的には少ないものの、器形は様々である。体部が僅かに外反し、口縁部が直口する森田分類白磁碗D群（182）、底部内面に線描きの草花文を施文する白磁碗B群（587）の他に、小碗がある。小碗は口縁部が直口するA類（27・96・762）と口縁部が外方にひらくB類（247・248・597・737・738）とに分類される。また247･597･737･738は底部内面の釉を輪状にかきとるいわゆる輪禿げの碗である。26も底部のみの残存であるが輪禿げがみられる。96は口縁部が直口する中型碗である。

杯　206・583は体部が僅かに外反気味に外上方に延びる森田分類杯Ｅ－２群相当のものである。またその他に、体部が外反して外上方に延びるもの（337・848）、体部が直立するもの（336・985）、体部が内彎するもの（943）などがある。いずれ華南産白磁と考えられるが、985は近世の肥前産の可能性が高い。

蓋　58は山笠形で上面に扁平なつまみを貼り付ける。内面は露胎である。華南産の白磁小壷の蓋と考えられる。

壷　877は頸部は僅かに外反気味にほぼ直上に延び、口縁端部は外方に折り曲げる壷の口縁部である。形態・調整技法から華南白磁四耳壷で、12世紀後半～13世紀前半代の所産と考えられる。

青白磁

767は脚部に蛇の目高台風の幅の広い高台をもつ杯である。14世紀代の景徳鎮窯産の青白磁の可能性が考えられる。

青磁

器種別では碗、皿、香炉のほか特殊なものとして酒会壷、面子などがある。

碗　磁器碗の中では青花碗に次いで多く出土している。底部から口縁部までが残るものは少ないが、最も多く残る口縁部の形態から、口縁部が直口するⅠ類と口縁部が外方にひらくⅡ類（727）、口縁部は直口するが、輪花状に整形する輪花碗Ⅲ類（179）に大きく分類される。

青磁碗の殆どを占めるⅠ類は外面の文様から無文碗ⅠA類（330・358・486・732・794・864・902・960）と線描きの細い蓮弁文を描く細蓮弁文碗ⅠB類、外面に崩れた雷文帯を描くⅠC類（726）、内面に印花で雷文帯と神獣文を描くⅠD類（736）に分類される。ⅠA類は底部まで残るものについては、底部の施釉の範囲から、高台畳付から高台裏が露胎のⅠA1類（794）と高台畳付から高台裏まで施釉し、高台裏の釉を輪状にかきとるⅠA2類（902）に細分される。また、960は器壁が薄く、色調も空色に近いもので、他の無文碗とは異なっている。いわゆる砧手の青磁と考えられる。ⅠB類の細蓮弁文碗は蓮弁の描き方の違いから剣頭と身が一致して丁寧に描かれるⅠB1類（729･968）と剣頭と身が不一致で雑に描かれるⅠB2類（19・235・236・237・329・392・580・937）に細分される。

皿　口縁部の形態から口縁部が直口するⅠ類（722）と口縁部が外方にひらくⅡ類に大きく分類される。Ⅱ類は口縁部を輪花状に整形するⅡA類（390・724・725・961）と整形しないⅡB類（723）に分類される。最も多く出土したⅡA類は内面に簡易なヘラ描きの草花文を描く粗製の青磁である。

香炉　全て体部から口縁部までの破片で底部は欠失している。ほぼ同形であるが、体部が直立し、口縁端部を若干内側に引き出すもの（59・239）と小型で体部が直立するもの（331・766）とがある。

酒会壷　617は体部外面に縦方向の櫛描き文様を施文する。酒会壷の蓋と考えられる。

面子　265は青磁皿の底部を円盤状に打ち欠いたもので、面子と考えられる。

青花磁器

器種別では碗・皿・杯・鉢がある。

碗　今回の調査で出土した碗類の中で、青花碗が最も多く出土している。青花碗は口縁部の形態から、口縁部が直口するⅠ類と口縁部が外方にひらくⅡ類（67・251・359・784・879）に大別される。Ⅰ類は口縁部から底部まで残存するものについては、底部が上方に突出するⅠA類（445･798　饅頭心碗）、反対に底部が下方に突出するⅠB類（188・189・291・361・593・744・745・962　蓮子碗）、平底のⅠC類（69・437・447・918）に細分される。

また、底部のみ残存するもので見ると、□A類（256・278・963）、□B類（42・109・200・284・763・965）、□C類（32・257・274・339・340・341・436・592・845）となり、A類→C類の順に量が多くなっている。

皿　口縁部の形態から口縁部が直口するⅠ類と口縁部が外方にひらくⅡ類に大別される。Ⅰ類は底部から口縁部まで残るものについては、底部が碁笥底のⅠA類（435・618・786）、底部が輪高台のⅠB類（277）に細分される。Ⅱ類も同様に底部が碁笥底のⅡA類（31）と底部が輪高台のⅡB類（184・264・589・619・620・621・739・741・742・755）に細分される。白磁皿と同様に、口縁部が外方にひらき、低い輪高台をもつⅡB類がもっとも多く出土している。

杯　口縁部の形態から、口縁部が直口するⅠ類（635）と口縁部が外方にひらくⅡ類（185・253・254・338・903）に分類される。

鉢　772は体部が内彎し、口縁部が内傾する鉢である。外面にはやや滲んだ呉須で施文する。焼成・色調から見て、漳州窯系の製品と考えられる。

色絵磁器

体部が内彎し、外面に赤色･淡緑色釉で彩絵する小壷（198）と口縁部が外方にひらき、外面を赤・緑彩で彩色する碗（252）がある。

朝鮮製磁器

朝鮮製と考えられる磁器には、外面の体部下半以下が露胎の白磁皿（65）と外面の高台脇以下が露胎で底部内面に砂目跡が残る青磁碗（35）がある。

国産磁器

国産磁器には白磁と染付磁器がある。

白磁　白磁皿（984）・杯（985）がある。

染付磁器　肥前系波佐見産のくらわんか手皿（987）、肥前系の半球形碗（989）、瀬戸系と考えられる碗（990）、産地不明の皿（988）などがある。

（２）時期設定と土器・陶磁器組成の変遷

今回の調査地点での時期設定にあたっては、第Ⅳ章で述べたように火災焼土層を鍵層として、それに、紀年銘木簡と火災層との照合、さらに墨書土器に記された人名の文献との照合に、前節で分類した土器・陶磁器の年代観を加えておこなった。

具体的には、中世Ⅶ面を中世１期、中世Ⅵ面を中世２期、中世Ⅴ面を中世３期、中世Ⅳ面を中世４期、中世Ⅲ面を中世５期、中世Ⅱ面を中世６期、中世Ⅰ面を中世７期とした。

中世１期（16世紀前半）

土師器皿　土師器皿はＢⅠ類、ＢⅢ類、Aa1Ⅱ類、 Aa2Ⅱ類、Aa1Ⅲ類　Aa2Ⅲ類、Ab1Ⅱ類、Ab2Ⅱ類、Ab1Ⅲ類、Ab2Ⅲ類、Ab1Ⅳ類、Ab2Ⅳ類　Ab1Ⅴ類、Ab2Ⅴ類、Ab1Ⅵ類、Ab2Ⅵ類で構成される。

瓦質土器　擂鉢はBa類、Bb類、Ca1類、Db1類が使用されている。また、他の器種には火舎香炉Ⅲ類、桶形容器Ⅲ類がある。

無釉陶器　越前焼擂鉢A類が見られる。

施釉陶器　瀬戸・美濃系灰釉陶器皿ⅡB2類・ⅡA1類・Ⅲ類、椀では外面に櫛描き施文する灰釉丸椀、龍泉窯系青磁細蓮弁文碗を模倣した灰釉丸椀などがある。

白磁　底部内面が輪禿げの小碗B類がある。

青磁　碗Ⅱ類・ⅠB1類・ⅠA類、皿ⅡA類・ⅡB類がある。

青花磁器　碗ⅠB類の蓮子碗、Ⅰ類碗、皿ⅡB類がある。

中世２期（天文年間　1554年以前）

土師器皿　土師器皿はＢⅠ類・ＢⅢ類、Aa1Ⅱ類、Aa2Ⅱ類、Aa1Ⅲ類、Aa2Ⅲ類、Aa1Ⅳ類、Aa2Ⅳ類、Aa1Ⅴ類、Aa2Ⅴ類、Aa1Ⅵ類、Ab2Ⅱ類、Ab1Ⅲ類、Ab2Ⅲ類、Ab1Ⅳ類、Ab2Ⅳ類、Ab1Ⅴ類、Ab2Ⅴ類、Ab2Ⅵ類、Ab1Ⅵ類、Ab2Ⅷ類などで構成されている。

瓦質土器　擂鉢はAb類、BA類、Bb類、Bc類、Ca1類、Ca2類、Db1類が使用されている。擂鉢以外の器種では火鉢Ⅱ類、桶形容器Ⅲ類、燭台がある。

無釉陶器　越前焼擂鉢B1類が見られる。

施釉陶器　前代に引き続いて、瀬戸・美濃系灰釉陶器皿ⅡA1類・ⅡA2類・Ⅲ類が、椀では青磁細蓮弁文椀写しの灰釉丸椀の他に天目茶碗が加わる。

白磁　碗は森田分類白磁B群の碗が僅かに見られる程度である。皿では森田分類Ｅ－２群・Ｅ－１群の皿が出現する。Ｅ－２群の白磁皿はこの後、３期を除いて、中世２～７期を通じて普遍的に見られる。

青磁　碗ⅠB2類が出現する。皿は見られない。

青花磁器　前代に引き続きⅠB類の蓮子碗が使用されている。皿ではⅡB類の端反皿の他、底部のみの残存であるが、碁笥底のA類が見られる。

中世３期（天文後期～永禄前期（1550年代～））

土師器皿　B1類、Aa1Ⅱ類、Aa2Ⅱ類、Aa1Ⅲ類、Aa2Ⅲ類、Aa1Ⅳ類、Aa2Ⅳ類、Aa1Ⅴ類、Ab1Ⅱ類、Ab2Ⅱ類、Ab1Ⅲ類、Ab2Ⅲ類、Ab1Ⅳ類、Ab1Ⅴ類、Ab2Ⅴ類、Ab2Ⅷ類で構成されている。

瓦質土器　擂鉢にはBa類、BC類、Ca2類、Db1類がある。擂鉢以外の器種では、火鉢Ⅰ類、桶形容器Ⅱ類、鉢などがある。

無釉陶器　越前焼に加えて備前焼の擂鉢・甕が見られる。越前焼では擂鉢Db1類の他、越前焼Ⅴ期の甕が見られる。備前焼では、備前焼Ⅴ期相当の擂鉢が少量見られる他、Ⅴ期の甕が使用されている。

施釉陶器　皿はこの時期は見られない。椀では天目茶碗が見られるのみで灰釉丸椀は見られない。瀬戸・美濃系以外に、中国華南産と見られる褐釉四耳壺が出土している。

白磁　この時期白磁は碗・皿とも見られない。

青磁　碗では前期と同様に、無文碗ⅠA類、細蓮弁文碗ⅠB類が見られる。皿は１期に見られた輪花皿ⅡA類が見られる。青磁皿はこの時期以後見られなくなる。

青花磁器　碗ではⅠC類、B類の蓮子碗が見られる。皿はⅡ類のものが少量出土している。

中世４期（永禄年間）

土師器皿　この時期B類は見られない。A類はAa1Ⅱ類、Aa2Ⅱ類、Aa1Ⅲ類、Aa2Ⅲ類、Aa1Ⅳ類、Aa2Ⅳ類、Aa1Ⅴ類、Aa1Ⅵ類、Ab1Ⅱ類、Ab1Ⅲ類、Ab2Ⅲ類、Ab1Ⅳ類、Ab2Ⅳ類、Ab1Ⅴ類、Ab2Ⅵ類で構成されており、前代まで見られたⅥ類以上の大型の皿は姿を消す。

瓦質土器　瓦質擂鉢は多く出土しており、また種類も多い。Aa類、Ab類、Bc類、Ca1類。Ca2類、Db1類の他、小型で体部が内彎するE類のEb1類が出現する。

無釉陶器　3期と同様に越前焼と備前焼とで構成されている。越前焼では擂鉢があり、B1類、B2類、C1類、C2類が共存して、種類、量とも豊富である。備前焼にはⅤ期の擂鉢がある。

施釉陶器　ⅡA1類の灰釉皿が少量含まれるのみで、この時期の瀬戸・美濃系陶器は非常に少ない。瀬戸・美濃系以外の施釉陶器には朝鮮製と考えられる徳利がある。

白磁　この時期、瀬戸・美濃系の灰釉陶器皿が減少するのとは対照的に白磁皿は増加する。そのほとんど全てが森田分類E－2群の端反皿で占められている。碗は見られない。

青磁　碗と極少量であるが香炉がある。碗は無文碗ⅠA類と細蓮弁文碗ⅠB2類があり、前代と同様の傾向を示す。

青花磁器　ⅠB類の蓮子碗に加えて、ⅠA類の饅頭心碗が加わる。皿でⅡB類の端反皿の他に口縁部が直口するⅠ類の皿が見られる。また、その他に、口縁部が外方にひらくⅡ類の小碗が出現する。

中世５期（永禄後期（1569年まで））

土師器皿　BⅠ類、Aa1Ⅱ類、Aa2Ⅱ類、Aa2Ⅲ類、Aa1Ⅳ類、Aa1Ⅴ類、Aa1Ⅵ類、Ab1Ⅱ類、Ab1Ⅲ類、Ab2Ⅲ類、Ab2Ⅲ類、Ab1Ⅵ類で構成されている。

瓦質土器　前期に引き続き、瓦質土器擂鉢は多く使用されており、特に４期に出現したEb類が増加する。この時期の擂鉢にはAa類、Ab類、Bc類、Ca2類、Eb2類がある。擂鉢以外の瓦質土器も多く、火鉢Ⅰ類、火舎香炉Ⅰ類、桶形容器Ⅳ類など器種も豊富である。

無釉陶器　前期と同様に、越前焼と備前焼とで構成されている。越前焼では擂鉢B2類・C3類が見られる。備前焼は少量ではあるが、備前焼Ⅳ期の甕の他、徳利がある。

施釉陶器　瀬戸・美濃系陶器と中国産陶器が見られる。瀬戸・美濃系陶器には皿では青磁写しのⅠ類及びⅡA1類が見られる。椀では灰釉丸椀の他、天目茶碗が見られる。また、その他の器種ではごく少量であるが、茶入れと考えられる小壺、香炉がある。

中国製の陶器には褐釉鉢と天目茶碗がある。

白磁　森田分類D群の碗、小碗B類の他、森田分類E－２類の端反皿が多量に使用されている。

青磁　碗ではⅠB2類の細蓮弁文碗の他、伝世と考えられる輪花碗が見られる。他にごく少量ではあるが、香炉が見られる。

中世６期（天正年間）

土師器皿　量が減少するとともに、法量も急速に縮小化が進み、Ⅴ類以上の大型のものは姿を消す。この時期の皿はBⅠ類、Aa1Ⅱ類、Aa2Ⅱ類、Aa2Ⅲ類、Ab1Ⅱ類、Ab1Ⅳ類で構成される。

瓦質土器　土師器皿と同様に瓦質土器の量･器種ともに減少する。擂鉢にはAa類、BC類、Db2類、Eb2類がある。擂鉢以外では桶形容器Ⅲ類が見られる。

無釉陶器　この時期の無釉陶器は越前焼擂鉢B３類が見られるのみで無釉陶器も急速に減少する。

施釉陶器　瀬戸・美濃系、中国産及び朝鮮産と見られるものがあるものの、量的には急速に減少し、土

師器皿と同様の傾向を見せる。

瀬戸・美濃系陶器では灰釉皿・丸椀が姿を消し、大窯Ⅲ期の天目茶碗のみが見られる。その他に、伝世品と考えられる古瀬戸中期の小壷、水滴が見られる。

瀬戸・美濃系陶器以外では、中国建窯産と考えられる天目茶碗のほか、朝鮮製の可能性が考えられる椀がある。

白磁　白磁も同様に減少する。皿では端反皿E－２群の他、型押しで菊花形に成形する森田分類E－４群が出現する。

青磁　青磁碗が姿を消す。他に伝世品と考えられる香炉が見られる。

青花磁器　Ⅰc類、Ⅱ類の碗の他、杯が見られる。

中世７期（慶長年間）

土師器皿　皿の減少・縮小化が進み、Ab類がほとんど姿を消す。この時期の皿にはBⅠ類、Aa1Ⅱ類、Aa2Ⅱ類、Aa2Ⅲ類、Aa1Ⅳ類、Ab1Ⅲ類がある。

瓦質土器　擂鉢が姿を消し、同時に他の器種も見られなくなり、この時期の瓦質土器はない。

無釉陶器　越前焼、備前焼とも見られず、この時期の無釉陶器はない。

施釉陶器　瀬戸・美濃系陶器が僅かに見られる。口縁部が直口する皿Ⅰ類の他、天目茶碗がある。いずれも大窯Ⅱ期～Ⅲ期の製品と考えられる。

白磁　碗では口縁部が直口する小碗A類が出現する。皿には６期と同様に、端反皿E－２群の他、E－４群が見られる。

青磁　碗ⅠB2類が見られる。

青花磁器　碗は見られない。皿では碁笥底のⅡA類のほか、新たに芙蓉手のつば皿が出現する。

（３）土器・陶磁器組成の変遷から見た中世後半の土器･陶磁器の使用について

（１）土器・陶磁器の分類、（２）時期設定と土器・陶磁器組成の変遷を通して、宮内堀脇遺跡の土器組成の変遷について概観した、次に、土器・陶磁組成の変遷から当遺跡ではこれらの土器・陶磁器がどのように使用され、そこにはどのような社会的背景が窺えるのかについて、これらの土器・陶磁器を１食膳具、２調理具、３煮炊具、４その他に分類して若干の考察を加えたい。

１　食膳具

当遺跡から出土した土器・陶磁器の中で碗・皿などの食膳具が占める割合は極めて高く、そのほとんど90%以上を占めている。ここでは、皿、碗の順に記述を進めたい。

皿

皿には土師器、瀬戸・美濃系施釉陶器、白磁、青磁、青花磁器がある。

土師器皿　A類、B類とも１期～７期の全期間を通じて、継続的に大量に出土しており、当遺跡が中世後半の一般集落ではなく、武家屋敷から構成される都市的性格をもつ集落であることを強く示している。

分類の項で述べた様に、在地系と考えられるB類は１期・２期では小型のBⅠ類と中型のBⅢ類が併存するが、３期以降、BⅢ類は姿を消し、小型のBⅠ類のみとなる。

広義の京都系土師器としたA類では、底部がやや丸底気味のAa類では、１期ではAaⅡ・AaⅢ類の小型のもので占められているが、２期には大型化し、これに、AaⅣ・Ⅴ・Ⅵ類が加わる。この状態は続く３・４・５期まで継続される。しかし、６期になるとAaⅥ類、AaⅤ類が姿を消し、法量の縮小化が進

行する。また、法量の縮小化と同時に出土量も急速に減少して行く。

また、より京都系土師器への模倣度が高いと考えられる平底のAb類では1期段階でAbⅡ・AbⅢに加えて、AbⅤ類、AbⅥ類が存在し、大型化が既に進行している。続く2・3期にはこれにAbⅦ類・AbⅧ類が加わり、法量の大型化はその頂点に達する。しかし、4期には急速に法量の縮小化が進み、AbⅦ類・AbⅧ類が姿を消す。さらに5期には出土量も急速に減少する。6期にはAbⅥ類、AbⅤ類が姿を消し、縮小化に拍車がかかる。7期には僅かにAb1Ⅲ類が見られるが、実質的には京都系土師器皿Ab類の使用は6期に終焉を迎えるものと考えられる。

瀬戸・美濃系灰釉陶器　皿はⅡ類とした口縁部が外方にひらく灰釉皿が中世1期にはすでに出現しており、続く2期に入っても同じくⅡ類の皿が継続して使用されている。これらは大窯ⅠからⅡ期段階の製品と考えられ、火災層などを基準に設定した年代観とほぼ一致する。灰釉皿は続く3期には一時的姿を消すのを契機に、4期以降は、僅かに見られる程度になる。5期には青磁輪花皿を模倣したⅠ類が見られるものの、5期以降は完全に姿を消すと考えられる。

白磁　皿は1期には見られないが、2期には出現し3期の空白期を挟んで4期～5期にかけて増加する。形態的には森田分類E－2類の端反皿が大部分を占め、2期～7期の期間を通じて使用されている。2期には口縁部が直口するE－1群が見られ、また、6期・7期には型押しで成形するいわゆる菊皿タイプのE－4類が見られる。白磁皿は、瀬戸・美濃系灰釉陶器皿が減少する4期以降には土師器皿を除く、日常器の皿の主体をなし、7期に至るまで全期間を通じて使用されている。

青磁　白磁皿が1期を除く全期間を通じて、継続的に多量に使用されているのに対し、青磁皿の使用は断続的で、その量も少ない。

青磁皿は1期に口縁部を波状に成形するⅡA類と外面に広形蓮弁を施文するⅡ類の皿が見られる。さらに、Ⅲ期にもⅡA類が見られるが、以後青磁皿は姿を消す。このことから、青磁の主力器種はあくまで後述する碗であり、青磁皿は白磁皿あるいは青花皿を補完する形で少量受容されたと考えられる。

青花磁器　皿は1期には口縁部が外方にひらくⅡB類皿がすでに出現している。2期には底部が碁笥底を呈するA類が見られる。4期には一時的に姿を消すが、5期にはⅡ類と共に口縁部が直口するⅠ類も見られる。6期の断続期を経て、7期には口縁部が大きく外方にひらく芙蓉手の皿が出現する。

白磁が2期～7期を通じて継続して多量に使用されているのに対して、青花磁器皿は断続的に使用され、量も白磁皿に比べて少量である。このことから、16世紀を通じて、1期～2期までは日常器の皿は瀬戸・美濃系灰釉陶器皿が主体を占め、3期以降は白磁皿が主体を占め、それを補完する形で青花磁器皿が使用されていたと考えられる。

碗

碗には瀬戸・美濃系陶器、白磁、青磁、青花磁器がある。

瀬戸・美濃系陶器　椀には天目茶碗と龍泉窯系青磁碗を模倣した灰釉丸椀がある。

天目茶碗は2期以降、4期を除いて、2期から7期までの期間を通じて一定量が使用されている。これに対して龍泉窯系青磁碗を模倣したと考えられる灰釉丸椀は1期には外面に櫛描き施文するものと細蓮弁文碗を模倣した蓮弁文碗が見られ、2期には蓮弁文が継続して見られるものの、3期以降は姿を消す。さらに、5期に無文椀が極少量見られるが、6・7期には見られない。これらの結果から、基本的に灰釉丸椀は3期以降は消滅するものと考えて良いだろう。

また、青磁蓮弁碗を写した碗は青磁細蓮弁碗の中でも蓮弁文の施文が丁寧な細蓮弁文碗ⅠB1類を写し

たものに限られ、蓮弁文の施文が粗雑なⅠB2類模倣のものは見られないことも、灰釉椀の搬入が3期までと判断される根拠の一つになろう。

青磁　灰釉陶器丸椀が2期以降早くも姿を消すのに対して、青磁碗は6期を除いて1期～7期まで継続して使用されている。1期には細蓮弁文碗ⅠB1類がすでに見られるが、口縁部が外方にひらく無文碗Ⅱ類および口縁部が直口する無文碗ⅠA類が共伴する。2期には細蓮弁文碗ⅠB2類が出現する。続く3・4期には細蓮弁文碗ⅠB2類と無文碗ⅠA類が併存するが、主体は徐々に細蓮弁文碗ⅠB2類に移って行き、5期には伝世品と考えられるⅢ類の輪花碗を除くと、青磁碗はⅠB2類のみで占められるようになる。6期には青磁碗は急速に減少し、7期に僅かにⅠB2類が見られる程度になる。

青花磁器　青花碗も青磁碗と同様に1期にはすでに出現し、7期を除くほぼ全期間を通じて使用されている。1期には蓮子碗ⅠB類がすでに出現し、続く2期にも蓮子碗ⅠB類が継続して使用されている。3期に入るとⅠB類に加えてⅠC類が見られる。4期の青花碗は多彩でⅠB類、ⅠC類の他に、端反碗Ⅱ類も見られる。続く5期には饅頭心碗ⅠB類が僅かに見られ、青磁碗が基本的に姿を消す6期にも僅かではあるが、ⅠC類、Ⅱ類の碗が継続して見られる。このことから、6期には碗の主体は青磁碗から青花碗に移行するものと考えられる。

2　調理具

他の県下の同時期の遺跡、特に瀬戸内沿岸の神戸市の兵庫津遺跡、姫路市の姫路城跡、御着城跡、たつの市の福田片岡遺跡などと比べて、著しく異なった土器組成を見せるのが、擂鉢に代表される調理具の組成である。16世紀代には、擂鉢は上記の遺跡では備前焼でほぼ独占され、若干の土師器あるいは丹波焼が見られる程度である。これに対して、宮内堀脇遺跡では、3・4・5期に備前焼擂鉢が少量見られるものの、その主体は越前焼擂鉢とそれを模倣したと考えられる瓦質擂鉢で占められており、量的には瓦質擂鉢が越前焼擂鉢を凌駕している。

瓦質土器　擂鉢は1期には、Ba類・Bb類・Ca1類・Db1類で構成されている。2期に入ると、これにAb類・Bc類・Ca2類が加わり、種類・量ともに増加し、E類を除く、AからD類までの全ての形式が揃い、瓦質擂鉢使用の最盛期を迎える。3期に入るとAb類・Ca1類が一時的に姿を消し、また、Bb類は消滅する。Ⅳ期には新たにAa類・Eb1類が出現するが、Ba類が姿を消し、B類はBc類のみとなる。5期には大型のCa1類・Db1類が姿を消し、Aa類・Ab類・Bc類・Ca類2類・Db2類・Eb2類など中型から小型の形式のみで構成されるようになり、法量の縮小化とともに出土量も大きく減少する。6期にはその傾向はますます増大し、Aa類・Db2類・Eb2類のみで構成されるようになり、7期には全ての形式が姿を消し、瓦質擂鉢の受容は終焉を迎える。このように、瓦質擂鉢は1期～2期にかけて出土量、形式ともに増大し、加えて大型化が進み、2期にその最盛期を迎えるが、3期以降、量の減少、法量の縮小化が進み、6期を最後に以後消滅する。

また、形式別の変遷を見ると、D類は全期間を通じて存在するが、C類は4期まで、Bc類を除くB類は3期以降は消滅し、入れ替わる形で、Aa類、E類が4期以降出現する。

さらに、4期に出現するE類は内面に擂目を持つことから擂鉢に分類したが、口縁部・体部が内彎しており、擂鉢としての機能には疑問が残る。鉢あるいは茶席に伴う花器として使用された可能性が高い。

越前焼　越前焼擂鉢は1期にはすでにA類が存在している。2期に入るとA類からB1類へと変化し、3期もB1類の使用が継続する。4期にはB1類にB2類・C1類・C2類が加わり、使用量・形式ともに増大し、同時に法量の大型化が進行する。5期には、B1類、C1類など小型のものは消滅するものの、他の形式は

継続して使用されている。6期にはB3類が存在するのみで、使用量は激減し、7期には越前焼擂鉢は見られなくなる。

備前焼　16世紀代の瀬戸内沿岸の中世遺跡からは、普遍的かつ大量に出土する備前焼擂鉢も当遺跡では極短期間に極少量見られるに過ぎない。

備前焼擂鉢は3期に出現し、4・5期に継続していずれも備前焼Ⅴ期のものが使用されている。6・7期には見られない。

以上、当遺跡の擂鉢使用は1期に、瓦質擂鉢と越前焼擂鉢が併存する形で開始されるが、2期までは、主体は瓦質擂鉢にあり、瓦質擂鉢が量、種類ともに優位に立っている。しかし、3期を挟んで4期になると、主体は越前焼擂鉢に移り、瓦質擂鉢は量・種類が減少し、また小型化する。さらに、3期には備前焼擂鉢が越前焼擂鉢を補完する形で出現し、4期の擂鉢は越前焼を主体とする無釉陶器擂鉢を中心に展開される。

また、4期に出現する瓦質擂鉢E類は他の瓦質擂鉢とは形態が大きく違っており、鉢もしくは花器として使用された可能性が指摘される。続く5期は瓦質擂鉢、越前焼擂鉢ともに減少するが、越前焼擂鉢優位の状況は継続され、6期へと引き継がれる。

3　貯蔵具

甕　甕は擂鉢などの調理具に比べて、出土量が少なく、また、16世紀前半～後半と言う短期間では、形式もほとんど変化が見られない。

擂鉢に比べ、使用期間が長期に及ぶ水甕などは、16世紀代一杯は一つの個体が継続使用される可能性も考えられることから、出土量も自ずから少なくなるものと考えられる。

甕は越前焼のものと、備前焼のものとがある。木村編年越前焼Ⅴ期の甕と備前焼Ⅴ期の甕が3期に見られることから、少なくともこれらの甕は3期以前からこの時期まで継続して使用されていることがわかる。また、5期には備前焼Ⅳ期の甕が見られることから、Ⅳ期の備前焼甕がこの時期まで継続使用されたことが分かり、少なくともこの甕は1世紀以上使用されていた可能性が考えられる。

また、4期以降瓦質土器に代わって、擂鉢では越前焼が主体となるが、甕では備前焼の使用が目立ち、少なくとも、越前焼甕の優位は実証できない。

壷　壷類では備前焼徳利が5期に使用されている。また、当遺跡以外の県下の中世遺跡ではあまり見られない中国製あるいは朝鮮製の陶器壷・徳利の存在が特筆される。

中国製の陶器壷は3期に褐釉陶器四耳壷が見られる。これは中国華南産の褐釉壷と考えられ、葉茶壷として使用されたものであろう。

この他、葉茶壷として使用された可能性が高い華南産四耳壷は鉄釉四耳壷が破片ではあるが、4期、5期に存在している。さらに4期には朝鮮製と見られる灰釉徳利が見られる。

これは本来の徳利としての用途の他に、花器として使用された可能性も考えられる。これらは天目茶碗、青磁碗、青花碗などとともに16世紀代前半～後半に至るいわゆる桃山茶陶成立以前の地方都市における茶陶の実態を示すものとして注目される。

4　煮炊具

当遺跡で見られないものに、土製煮炊具がある。ほぼ同時期の遺跡である摂津の兵庫津遺跡では、播磨型の鍋あるいは瓦質羽釜などの出土が顕著に見られるのに対して、当遺跡では、土製煮炊具の存在はほとんど見られない。このことは、遺物としては存在しない鉄製煮炊具の存在を窺わせ、この時期の煮

炊具はすでに鉄製煮炊具によって占められていたものと考えられる。

5　その他

瓦質土器では擂鉢以外にも、火鉢・火舎香炉・桶形容器・燭台など様々な器種が使用されている。特に、桶形容器は蓋をもつものと、無蓋のものとがある。無蓋のものは火鉢としての用途が考えられるが、有蓋のものは、火消し壷あるいは、水指として使用された可能性も指摘できる。

さらに、5期に存在する華南産の褐釉鉢も他の県下の中世遺跡では類例の見られないもので、鉢本来の用途の他、見立ての花器として使用された可能性も考えられる。

（4）小結

最後に、最も多量に出土した食膳具と瀬戸内地域の遺跡とは大きく異なる組成を見せる調理具について、若干の補足を行って、本節のまとめに代えたい。

食膳具

当遺跡から出土した食膳具の中で最も多量に出土しているものは、土師器皿である。このことから、当遺跡が通常の集落遺跡ではなく、都市的性格の強い遺跡であることが分かる。

さらにAB類に代表される京都産土師器を模倣したいわゆる京都系土師器の大量の使用はこの地が京都と密接に結びついていたことを如実に物語っている。

また、土師器皿の消長を見ると、2期～3期が京都系土師器の最盛期と言え、法量の大型化・使用量は2・3期をピークとして、以後急速に縮小・減少して行く。これは、守護山名氏の弱体化とほぼ軌を一にしており、文献上の記載と調査データとがほぼ一致するものと言えよう。

土師器皿が式三献に代表される宴席での非日常の器と考えられるのに対して、日常器として普段用いられた食膳具が瀬戸・美濃系灰釉陶器と中国産の白磁・青磁・青花の碗・皿類であると考えられる。

これらの中で、碗は1・2期は瀬戸・美濃系の灰釉丸椀が主体を占めるが3期以降それは青磁碗に移行し、さらに5期以降には青花碗に移ってゆく過程がある程度明らかなった。

この時期の瀬戸･美濃系灰釉丸碗は龍泉窯系青磁を模倣したもので、そのことは青磁ⅡＢ1類写しの碗に典型的に現れている。灰釉丸碗から青磁碗への変化は15世紀後半～16世紀前半までの時期は貿易陶磁の搬入が少なく、その代替品である灰釉丸椀を使用していた当地の人々が天文期以降、大量に搬入される青磁碗によって、代替品である灰釉陶器から青磁へとその受容対象を変えていったことが背景にあるものと考えられる。

皿も碗と同様に、灰釉陶器皿から白磁皿へと移行してゆく。青磁が5期以降、急速に減少して青花碗に代わるのに対して、白磁皿の受容は長く続き、少なくとも6期までは皿の主体は白磁である。白磁皿から青花皿への移行は当遺跡では明確にはなっていないが、7期以降になるものと考えられる。

ここで、碗・皿類に代表される食膳具の変遷についてまとめると、16世紀前半段階では、灰釉陶器皿と灰釉丸椀が主体であり、16世紀中葉～後半にかけては白磁皿と青磁碗のセットに変化し、16席後半代には白磁皿と青花碗へと変化する。また、非日常器の土師器皿とセットで使用された椀は多量に出土した漆椀と考えられる。

次に、天目茶碗に代表される茶器について、若干ふれてみたい。抹茶碗として使用された天目茶碗は2期には出現し、7期まで一定量が使用されている。この他、青磁碗、青花碗も同じく抹茶碗としての使用の可能性が考えられるが、特に底部が窪み、茶溜まりのできる青花蓮子碗は天目茶碗同様に抹茶碗

として使用された可能性が高い。さらに、碗以外の茶陶として、３～５期に見られる華南産の褐釉葉茶壷、花器としての使用が考えられる朝鮮産の灰釉徳利、華南産の褐釉鉢がある。また、５期には古瀬戸灰釉茶入れ、６期には古瀬戸小壷など伝世品と考えられる茶器の使用が見られる。

これらは、少量ではあるが、天正期以前の、すなわち桃山茶陶成立以前の地方都市の茶器の実態を窺わせる良好な資料と考えられる。

調理具

調理具を代表する擂鉢では、同時期の瀬戸内沿岸の遺跡で大量に消費されている備前焼擂鉢が僅かしか見られず、瓦質擂鉢と越前焼擂鉢が主体であり、２期までは瓦質擂鉢が、以降は越前焼擂鉢が徐々に増加するが６期まで瓦質擂鉢が残ることが明らかになった。

一方、瀬戸内沿岸の都市遺跡、例えば、摂津の兵庫津遺跡では14世紀代に東播系須恵器鉢から備前焼擂鉢への移行が進み、15世紀前半には擂鉢では東播系鉢が姿を消し、備前焼が独占的に使用されるようになり、この状況は16世紀後半代まで続く。

宮内堀脇遺跡では、14世紀代～15世紀代の状況が不明のため、瓦質擂鉢の出現期、さらには越前焼擂鉢受容の初源がいつに求められるかは明らかにできなかった。

ただ、兵庫津遺跡では須恵器鉢の受容が減少する14世紀後半以降、その技術系譜を受け継いだ土師器の播磨型鍋の生産が開始されるとされている。

このことから考えると、宮内遺跡出土の瓦質擂鉢生産は越前焼からの技術導入というよりはむしろ、元来、但馬地域に存在した土器生産技術の上に成立したものと推定され、その後、擂鉢受容の高まる16世紀代に、当時搬入された越前焼擂鉢の影響下にその模倣が始まり、B類擂鉢が成立し、同時に、越前焼の影響を受けない従来からの在地土器生産の影響下にあるC類、D類も共存すると言う仮説も成り立ちうると考えられる。

ただ、このことを実証するには但馬及びその周辺地域の瓦質土器を含む在地土器の生産と消費の実態を検証する必要があり、今後に残された課題である。

引用・参考文献

1　森田　勉　1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No２　日本貿易陶磁研究会

2　上田秀夫　1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No２　日本貿易陶磁研究会

3　小野正敏　1982 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No２　日本貿易陶磁研究会

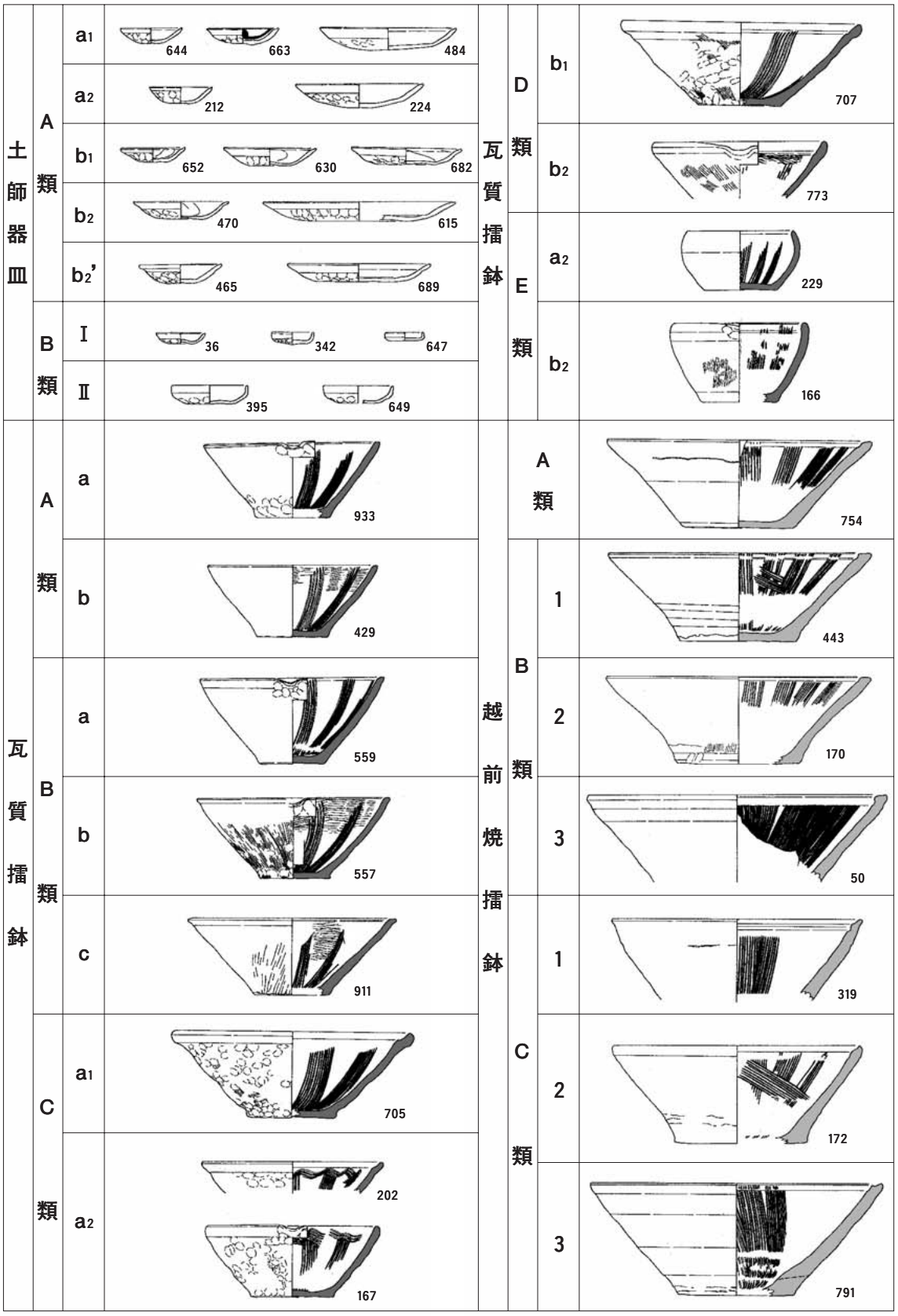
4　木村孝一郎　2008 「越前焼の編年的研究ノート」『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会

5　岩田　隆　1997 「越前」『中・近世の北陸―考古学が語る社会史－』北陸中世土器研究会

6　井上喜久雄　1985 「美濃焼の研究（一）」『東洋陶磁』第15・16号　東洋陶磁学会

7　太宰府市教育委員会　2000『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』

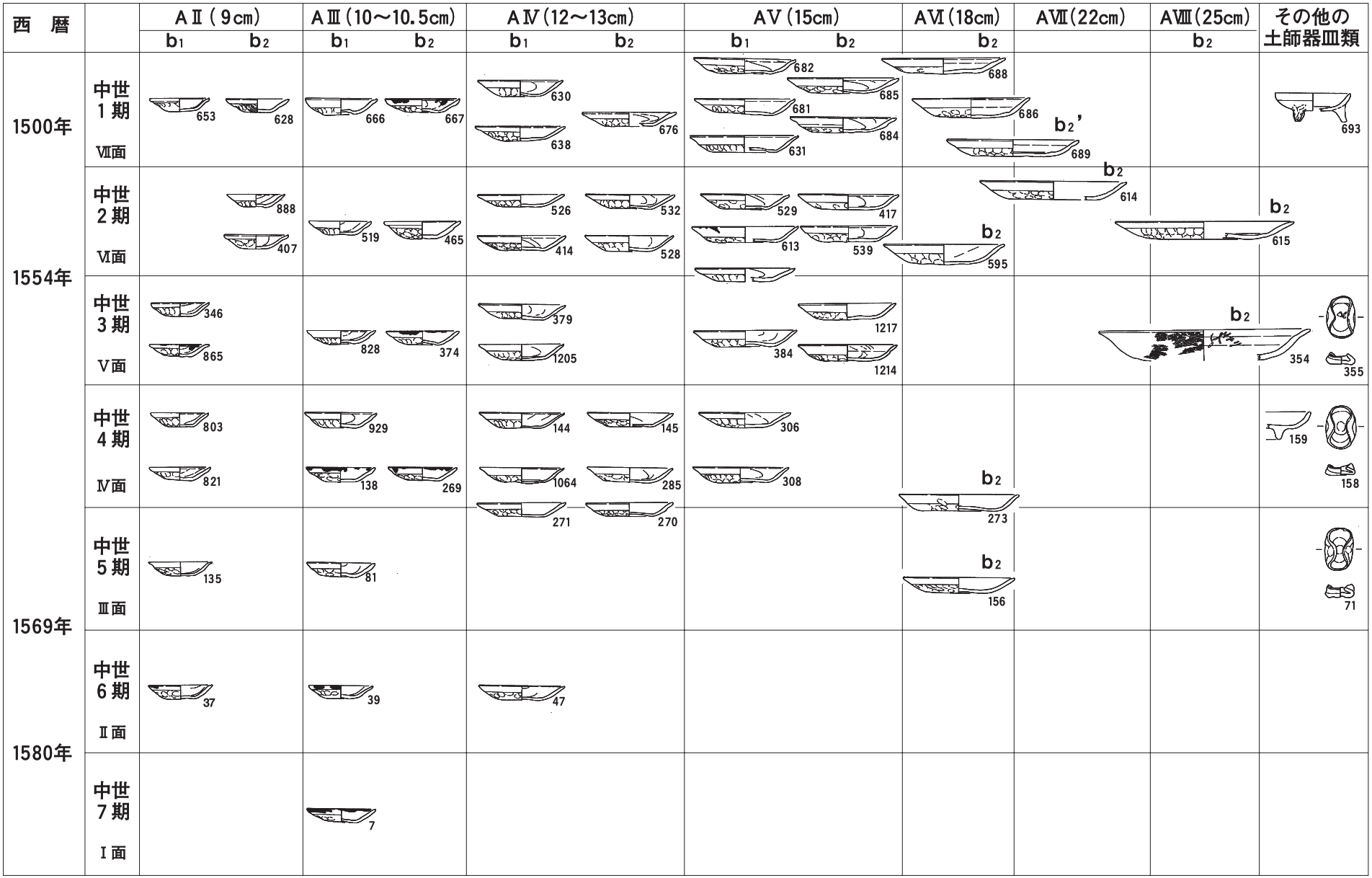
8　兵庫県教育委員会　2004 『兵庫津遺跡Ⅱ』



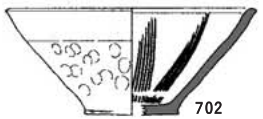
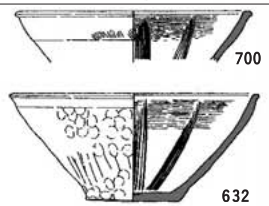
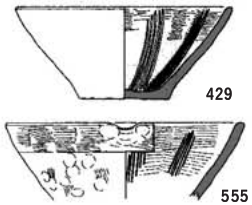
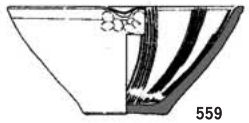
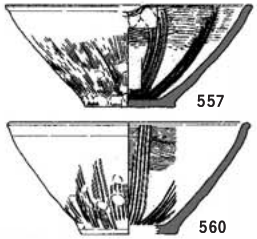
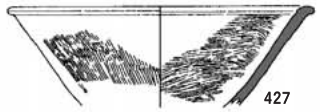
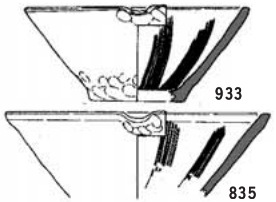
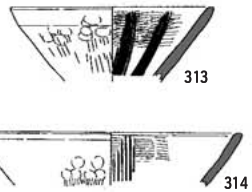
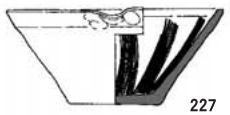
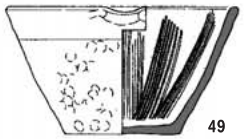
第21表　土師器皿・瓦質擂鉢・越前焼擂鉢　分類表

西　暦		B		AⅡ(9cm)		AⅢ(10～10.5cm)		AⅣ(12～13cm)		AⅤ(15cm)		AⅥ(18cm)
		Ⅰ	Ⅲ	a1	a2	a1	a2	a1	a2	a1	a2	a1
1500年	中世1期 Ⅶ面	647 648	649	645 644	636 627	663	629					
1554年	中世2期 Ⅵ面	494 495	395	513 594	398 460	463 408	409 464	894 895	441 448	481	541	419 484
	中世3期 Ⅴ面	342		950 852	367 854	855 858	376	868 953 954	1079 1166	383 1228		
	中世4期 Ⅳ面			293 801	283 280	829 299	287 827	832 279	1072 281	153 834		309
1569年	中世5期 Ⅲ面	117		73 79	212 258		192 113	222 84	114 221	89 223		224
	中世6期 Ⅱ面	36		38 33	43 44		34 45	46				
1580年	中世7期 Ⅰ面	1		2	4 3		6	8 9				

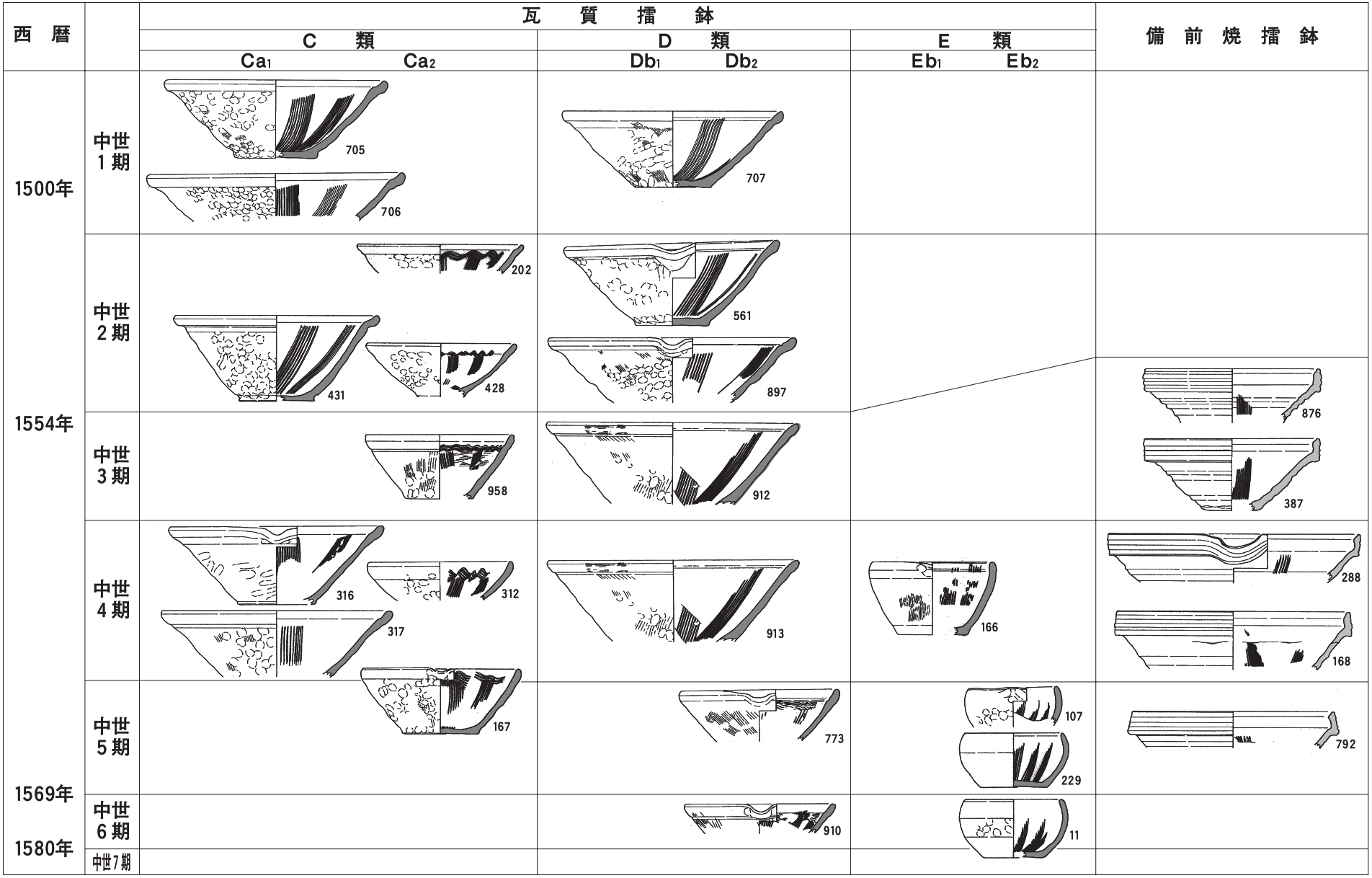
第22表　土器・陶磁器　変遷表（1）



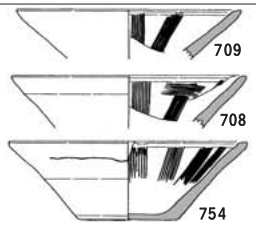
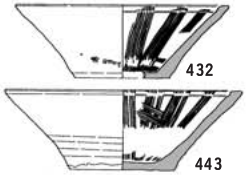
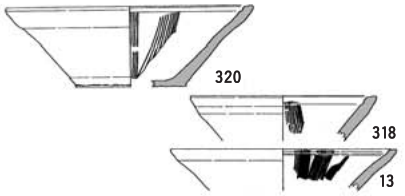
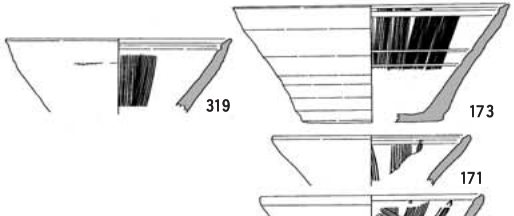
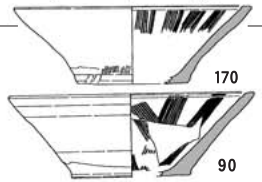
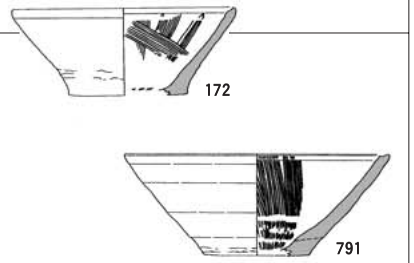
第23表　土器・陶磁器　変遷表（2）

西　暦		瓦　質　擂　鉢				
		A		B		
		Aa	Ab	Ba	Bb	Bc
1500年	中世1期			 702	 700 632	
	中世2期		 429 555	 559	 557 560	 427
1554年	中世3期			385		959
	中世4期	 933 835	 313 314			911
	中世5期	 227	228			
1569年	中世6期	 49				
1580年						

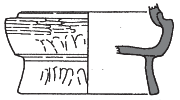
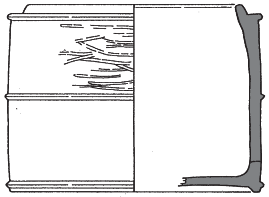
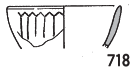
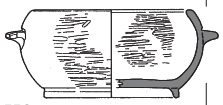
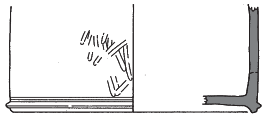
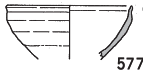
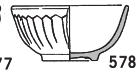
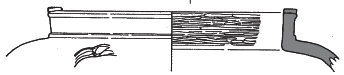
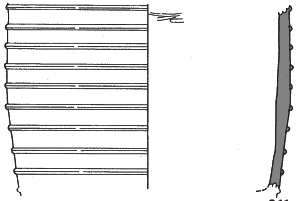
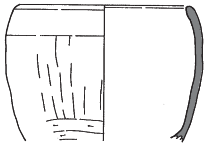
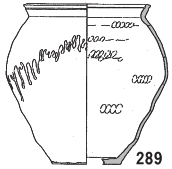
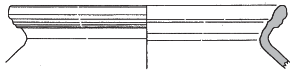
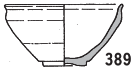
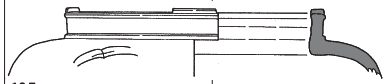
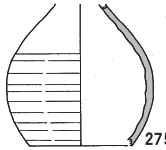
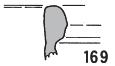
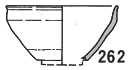
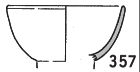
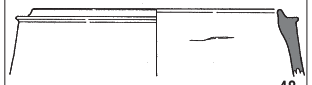
第24表　土器・陶磁器　変遷表（3）



第25表　土器・陶磁器　変遷表（4）

西暦		越前焼擂鉢							
		A	B			C			
			B_1	B_2	B_3	C_1	C_2	C_3	
1500年	中世1期								
	中世2期								
1554年	中世3期								
	中世4期								
	中世5期								
1569年	中世6期								
1580年	中世7期								

第26表　土器・陶磁器　変遷表（5）

西暦		瓦質土器				無釉陶器		施釉陶器
		火鉢	火舎香炉	桶形容器	その他	越前焼	備前焼	瀬戸・美濃系
								椀
1500年	中世1期		 697	 695				715  718 716
1554年	中世2期	 553		 551	549			 577  578
	中世3期	 282		 311	 310	 289	 322	 389
	中世4期							
1569年	中世5期	 165	164	163			 275  169	 262  357
1580年	中世6期			 48				53
	中世7期							17

第27表　土器・陶磁器　変遷表（6）

西暦		施釉陶器				磁器		
		瀬戸・美濃系		中国製	朝鮮製	白磁		
		皿	その他			碗	皿	その他
1500年	中世1期	711 712 713				737 738		
	中世2期	568 570 569 574 566 573				587	584 585 582	
1554年	中世3期			388				
	中世4期	356					334 333 335 332	
1569年	中世5期	324 175	174 232	234 176		247 248 182	180 242 241 181 244	
	中世6期		57 52	54	51		60 61 65	58 66
1580年	中世7期					27	21 24 22 23	

第28表　土器・陶磁器　変遷表（7）

西暦		磁器					
		青磁			青花		
		碗	皿	その他	碗	皿	その他
1500年	中世1期	727 729 732	725 723		745 744 747 746	741 742	
	中世2期	580			593 591 592	588 589	
1554年	中世3期	864 392 393	390		962 965	394	
	中世4期	358 329 330		331	359 360 291 361		
	中世5期	179 235 236		239	188 189 187	184 183 250	189 253 254
1569年	中世6期			59	69 67		68
1580年	中世7期					30 31	

第29表　土器・陶磁器　変遷表（8）

第２節　出土木製品について

１．漆製品（椀・皿類）の分類

主にA類　朱漆を内外面に塗布するものと、B類　黒漆を内外面に塗布するもの、更にC類　内面は朱、外面には黒漆を塗布するものに分かれ、量的にはC類の製品が大多数を占める。これらは、それぞれ同形態のものが口径・器高を違えて存在しており複数のタイプに細分することが可能である。A・B・C分類に加え、口縁部の形態・高台の高低・杯部の形状及び法量から細分を行う。

口縁部の形態　口縁部が直口するもの（a類）・口縁端部が外方へ直線的に開くもの（b類）・口縁部が外反するもの（c類）・口縁端部に玉縁をもつもの（d類）に大別できる。

体部（杯部）の形状　体部が底部との境から緩やかに内湾するα類と腰が張り筒型になるβ類がある。

高台の高低　高台は高さによって高低２種に分かれる。低いものは概ね１cm前後に収まる（１類）。高いものは小径の杯類は1.5cm、椀類は２cm以上を測り概ね器高さの１／３を占める（２類）。２類には外面にロクロ目がないものと、ロクロ目を意匠としてつける２'がある。

口径　法量は口径について８種に分かれる。即ち、①：10cm以下（３寸）、②：10.5cm前後（３寸半）、③：12cm前後（４寸）、④：13cm前後（４寸半）、⑤：15cm前後（５寸）、⑥：15cm以上の製品がある。

深さ　口径と関連して、深さが口径に対して深さが浅く20%前半以下の、主に皿・杯となる極浅いもの（皿杯Ⅰ）、20%後半の小径のものは杯となる浅いもの（椀Ⅰ）、やや浅く30%代前半となる椀（椀Ⅱ）、30%代後半となるやや深い（椀Ⅲ）、40%代の深い（椀Ⅳ）、50%を超える極深い（椀Ⅴ）のタイプがある。

以上の要素をもとに椀・皿類を分類する。

２．出土木製品の傾向

土器類と並んで遺物の多くを占めるものに木製品がある。今回の報告では、木製品の分類と紹介に力点を置き、個々の木製品の分析、層位ごとの変遷については紙数の関係もあり今回は行わない。

以下大まかな概要・傾向について述べておくに留める。

今回の出土木製品は狭義の漆製品・木製品・竹製品と大別し、更に工具・雑具・農具・紡績具・武具・服飾具・食事具・容器・編物類・遊戯具・祭祀具・建築部材・用途不明品・部材と種別によって分けた。

本遺跡での漆製品が占める割合は高く、図示した中世木製品・木簡を加えた959点中187点、19.5%を占める。竹製品は箕・籠類を含め19点、２%である。およそ80%が木製品であり、各属性ごとに分配するならば、959点中、おおよそ付札類2.8%・工具4.6%・灯火具などの雑具0.5%・農具2.6%・紡績具1.6%・武具0.3%・服飾具6.8%・食事具16.1%・容器39.9%・編物類1.5%・遊戯具1.7%・祭祀具5.4%・建築部材5.4%・用途不明品5.9%・用途不明部材4.9%の割合が出土木製品の大まかな傾向である。図示した個体についての割合であるため、付札類などは優先して選ばれており、容器破片などは選択的に実測されているため統計資料として問題もあるが、大まかには状況を示しているとみてよいであろう。

用途不明材・部材などを除くと、一見して、服飾具・食事具・容器の割合が高い。また、ついで祭祀具・工具の割合が高く、農具の占める割合は意外に少ない。

屋敷地もしくはその周辺において何らかの工作業が行われていることは、種々のヘラ類の存在から伺える。ためしの可能性が高い鍬形状木製品W273の存在は武具製作の可能性を想起させる。また、槍鉋（鞘）W227・墨引きW897などの存在から建築を行っており、建築に関わる工具も含まれている可能性が

ある。それは多量の建築部材の存在からも明らかである。加えて、漆器製作工具の多量の出土が注目される。漆製品については北野氏の論考を参照して頂きたいが、根来塗などの高級品を含み、棗や茶杓子あるいは蓋置きの可能性がある製品など茶の湯の道具を含む、一般集落では希少なものが含まれている。工具については、漆刷毛は少なくとも大小があり、ヘラ・漉し紙の存在から遺跡内もしくは至近において漆器製作が行われていたことは確実であろう。

対して、農具が占める割合は少ない。農具の占める割合は、槽を含めても図示したものでは30点たらずと中世木製品の約３パーセントに満たず、一般の農村との違いをみせている。

次に、宗教用具は、仏事に伴うものと神道系祭祀に伴うものに分かれるが、その割合は３対49である。仏事に関わるものは全て96・97年度の調査区より出土しており、呪符など陰陽道や神道系祭祀に伴うものはその殆んどが屋敷地A内もしくは屋敷地Aの内外堀内に投棄されている。出土土師器の中にある五芒星墨書の土師器皿や庚申信仰に伴うと考えられる木猿の存在、あるいは堀にまとめて投棄された斎串の存在は屋敷地で行われた祭祀・信仰の実態を示すものとして興味深い。対して、仏事に関わるものは96・97年度調査区から出土しており、その一部は人名墨書土器と関連する追善供養に伴うものである。

建築部材は、柱材・桁材の他、壁板・床板材などが出土している。これら家屋の躯体に使用された材と共に、格子戸や障子に使用された建具類があり、柱に差し込む灯明台、畳が出土している。

服飾具として図示したものの大半は下駄・履物類である。下駄は連歯下駄と露卯歯下駄の両者が出土しているが、若干連歯下駄の出土数は多い。共に武家屋敷成立期から使用されている。

興味を引くものとしては、W315・W316がある。所謂、無歯下駄である。これは一乗谷朝倉氏遺跡では雪下駄とされているものに酷似している。積雪期に足裏と草鞋の間に装着するものと考えられており、越前と同じく雪国但馬らしい出土遺物といえる。W315は後端にも孔があり、いわゆる踵側のカエシを通す孔と考えられる。W315・W316と同じ無歯下駄として３孔をもつW317・W318をあげた。これはW320～W322が連歯下駄の再加工を行い３孔に加えほぼ同じ大きさに切断されていることから、無歯の下駄類に分類してよいもの考えている。同じく４孔をもつW327は摩耗しているが、連歯を持ち、下駄類と認識できる。同じく４孔のW326は無歯下駄と認識できる。７孔のW328についても摩耗しているが連歯を持ち、下駄類である。W328の連歯を打ちつけた歯（打ち歯）に代えたものが、W329～W336と認識でき、これも下駄類と考えることができよう。

出土下駄類の相当部分を占めるこれら変則的な下駄類をどうとらえるべきか。ここにあげた下駄類には共通した特徴として、緒孔が通常の下駄よりも細く、台板は方形を指向し、一辺10㎝四方前後の大きさである点があげられる。また、再加工品や板材に釘留めをした手製と考えられる個体が多い点がある。これらの製品の性格として法量特に全長から子供用（あるいは小柄な女性用）の可能性が想起されるが、後壷の孔の間隔を見た場合その多くは７㎝前後と通常の成人用の下駄と同じ間隔となっている。足幅からみれば成人に使用された可能性が高い。縦横比が正方形に近い点は、足幅に合わせ横幅を広くとったため生じたと考えられる。横幅から成人用と見た場合、全長が通常の下駄の３分２程度である点は、足半草履に通じる使用をする下駄類の可能性が考えられる。また、開けられた孔が細い点からは、鼻緒が細い紐によってすげられたか、W329では釘を打ち込み結びつけた可能姓も考えられる。

下駄類のもう一つの特徴は開けられた孔の多さと位置である。W326・W327・W335などでは前壷の孔の反対の位置に孔があく。この孔は新潟県頸城地方の浜下駄にも類例があり、前壷が破損した際に反転して前緒をすげるためにあらかじめ開けられた孔と理解できる。７孔あるいは８孔のものは中心軸上に

ある孔は前壷用、中央の両側に開けられた孔は後壷用、前端・後端の各２孔は歯を打ちつけた釘孔と考えられる。W328は両歯下駄であるが、歯の摩滅に伴い歯を打ち付け補ったものと理解できる。

食事具と容器は出土木器の割合の大半を占める。その中で、木地椀・皿・鉢は僅か３点と少なく、木製椀はほぼ全てが漆製品によって構成されていたと考えられる。

食事具の中で非常に大きな割合を占めるものに切匙と小かまぼこの板がある。切匙は３種類の形状に大別したが、その形状は、刀子と、今回出土した庖丁の形状２種（手元の関の有無）に当てはまる。手直な刃物を手本にしたと考えられよう。小かまぼこ（小板かまぼこ）は白身魚を練り、板に塗りつけ炭火で炙って食べるものであるが、食するときに、灰に突き刺し汚れた柄の部分を切り取り食膳に供するものとされる。今回出土した小かまぼこ板には作法通りに切損したものが多く、一部に丁寧に柄の先を加工したものが含まれる。小かまぼこ板の出土は中世では大坂城跡・駿府城跡、近世では徳川家光の前田藩邸御成りに伴う膳部の資料、あるいは朝鮮通信使の饗応献立などに見られ、いわゆる式三献、本膳料理に伴うことが多い献立である。小かまぼこ板は悉く屋敷地A内もしくはその前面の堀から出土しており、中世２期あるいは一部３期から出土している。

容器の中で注目するものは、六角形の折敷である。これは、天正18年（1590）織田信長の毛利亭御成に際しての献立の中で、式三献の初献に使用されている亀甲（かめのこう）と呼ばれる折敷にあたる。

折敷にはこの他、足打折敷が多量に出土しており、その中には一辺が30㎝を超える大型折敷が数多く出土している。これら亀甲・足打折敷もまた、宴に使用されたと考えられるものである。

先に述べた多量の土師器皿が宴に使用されたと考え、そのピークを中世２～３期としたが、これら亀甲・足打折敷そして小かまぼこ板もまた、屋敷地A　95年度４面即ち中世２期に出土が集中している。木製品もまた、土師器皿の消長と同じく中世２期～３期がピークであることを示している。

第３節　出土金属製品について

金属製品は、武器・武具、建築材、生活具、紡績具、農具・漁労具、銭貨に分類した。分類ごとの出土割合は、武器・武具12%、建築材31%、生活具16%、農具・漁労具２%、不明品６%、銭貨32%である。一番割合の多かったのは建築材の釘類で、ついで銭貨、生活具の火箸、武器（刀装具）の小柄の順となっている。出土位置の傾向は、武器・武具はⅣ区、Ⅴ区、Ⅶ区、ⅩI区、XⅢ区に集中する。建築材はⅣ区、Ⅴ区、Ⅶ区、Ⅷ区に集中する。生活具は95年度調査区全域とXⅧ区に集中する。農具・漁労具は鋤先がXⅡ、XⅣ区より、釣針がⅣD区より出土している。銭貨については特に偏りが見られない。

鍍金された鍬形台や多量の小柄など武具や武器の出土が特筆される。また、灰匙といった香道具の出土は武家屋敷での日常生活の様子がかいま見られる。

鍬形台については、吉備国際大学、文化財学部、文化財修復国際協力学科の臼井洋輔教授より以下の所見をいただいたので掲載する。

１．鍬形台の特徴と制作年代について

この鍬形台は、唐草様にアレンジした枝菊が彫金されている。枝葉の部分は透かしの部分が大きく（金属部分が小さく）、しかも非常に繊細な彫りになっている。

また鍍金技術では「振り付け鍍金」という水銀アマルガム技法が用いられている。しかも抜群の色合いの良さが保たれている。

その技法は金と水銀を薬研に入れて均一に混ぜ、そのアマルガム溶液（液状合金）の中で、鍬形台など鍍金を施す金属を振り動かせて銅に蒸着させたり、あるいは塗布しその後に熱風などで水銀だけを蒸発させ、金をメッキする蒸着鍍金技法のことである。この他に鍍金には鍍金しようとする銅を梅酢で良く磨いた後に水銀を塗り、その上に金箔を押して（何回か）、その上から鹿の角などで磨いていく「摺り箔鍍金」と、今日一般に行われている「電気メッキ」がある。また最近では彫金そのものを鍍金集積で作り上げる「電鋳」技法が甲冑金物に応用されている。この鍬形台は「振り付け鍍金」である。鍬形が残っているとすれば、それには「摺り箔鍍金」が施されていたはずである。現代の復元品は別として、複雑なものにはアマルガム方式、平坦なものには箔方式が使い分けられていた。複雑なものはなかなか鍍金とのかねあいが難しいから、古い時代は特別な優品を除き彫りのない単純なものが多い。それが彫金や鍍金技術が進歩普及し一般物にも複雑な物が出来るようになってくると思われる。ところが室町末期のように多量生産されるようになると「透かし彫金」「鍍金」を含めて、雑になっていく。つまり、単純から複雑化が起こり、再び多量生産によって手抜き（単純化傾向）が行われるというのが、南北朝時代～室町末期の時代的流れだと考えられる。

土中から出土した遺物にもかかわらず、輝きが極めて良いのと鏨の切れがのびのびと繊細に仕上がっているのが最大の特徴である。室町末期や江戸時代のものはそうはいかない。時代と共にモノの質は退化していくことがこのような小さな物にも鮮明に表れている。その観点からすればこの鍬形台は前代の希な丁寧さを残した室町中期前後のものと考えてもよいのではないか。

２．使用者の身分について

この鍬形台の中央裏側に窪みが切り込まれている。ここに前立てを固定する台が収まる。前立てを固定する台には、「角本」と「祓立」の二種類がある。角本は鉄製で牡型（凸）になっており、羽子と呼ばれる、前立てが抜けにくくするスプリングがついている。祓立は真鍮製の筒状雌型（凹）の前立て装着台である。切り込みの形から祓立ての可能性が高い。祓立て技法の方が、数が少なく上級に位置している。この鍬形台を付けた兜の持ち主は山名氏の上級家臣であろうと推測される。

３．兜の形状と復元

室町時代中期から末期にかけての形状は、阿古陀形筋兜が隆盛をなしてくるが、この鍬形台をもった兜もそれに近いものであったであろうが、鍬形の大きさについては、鍬形台を固定する穴の数や大きさが少ないことから、変わり兜の流行し、大きな鍬形や前立てを装備した室町末期頃のようなものではなかったであろうことはいえる。

第４節　遺構面の変遷

火災焼土層を鍵層とし、２点の紀年銘木簡と火災層との照合を行い、更に墨書土器に記された人名の文献との照合を加え、前節の土器・陶磁器の年代観を加えて時期設定をおこなった。

ここでは、中世前期以前は俎上に載せず、此隅山城下関連遺構に関わる中世Ⅶ面～Ⅰ面を対象として、中世Ⅶ面を中世１期、中世Ⅵ面を中世２期、中世Ⅴ面を中世３期、中世Ⅳ面を中世４期、中世Ⅲ面を中世５期、中世Ⅱ面を中世６期、中世Ⅰ面を中世７期とした。

武家屋敷遺構の変遷

中世１期－中世Ⅶ面（16世紀前半）　中世１期は調査地点において武家屋敷が形成を開始する時期である。中世１期は堀の形状によって大きく２小期に分かれる。中世１期（新）が明確に屋敷地の形成が確

認できる時期である。中世１期を通じ、堀の外側は水田であったと考えられる。

中世１期（古） 95年度調査区おいて堀SD54001下層が土塁SF55002の下を通り、クランクがなく南北方向に真っ直ぐ貫通する時期である。屋敷地の形成状況については詳らかではない。

中世１期（新） 屋敷地Aおいて堀SD54001下層がSF55002の築造によってクランク部を造り、堀の内側に土塁SF55001及び屋敷地Aを形成する。屋敷地は大きく南北方向に２区画が並ぶ。堀は96年度調査区まで延びる。中世１期（新）は火災によって焼亡する。中世１期は15世紀後半を含み16世紀の早い段階が中心と理解している。

中世２期ー中世Ⅵ面（天文年間　1554年以前） 外堀SD54002・SD69001・SD76001を掘り、間に土塁SF54002・SF69001を構築する。外堀は97年度調査区内で東へ屈曲する（外堀南端のコーナー）。検出全長は約123mである。屋敷地Aは中世１期（新）のレイアウトを踏襲し、大きく南北方向に２区画が並ぶ。屋敷地Bの状況は変わらない。屋敷地C－外堀南端のコーナーにおいて小規模な追善供養が開始される。中世２期は、中世３期に至る過程で、内堀が埋没し凹みとなった時点で『天文廿三年』銘（1554年）位牌が埋納される。このことから、1554年が下限としてとらえられる。

中世２期は火災によって焼亡する。

中世３期ー中世Ⅴ面（天文後期～永禄前期　1550年代～） 中世１・２期と中世４期の間にあり、武家屋敷遺構のレイアウトを変更する過渡期にあたる。屋敷地A内は部分的に整地されるが、状況は詳らかではない。屋敷地Bは①SF68001・SF68002によって南北内法18m前後に囲み、②内側に盛土を施し嵩上げし、③SD68002を巡らせる。溝の内法で約13mの区画となる。④SD68002・SD68003を埋める。⑤SD68002が半ば埋まった時点で、『天文廿三年』銘（1554年）位牌が埋納される。⑥①～⑤の段階を経て、中世４期に至るまでに内側が平坦化する。平坦化した⑥段階に入って屋敷地B・C前面の外堀内において活発に追善供養が行われ、箕類の投棄が行われる。外堀内にある土橋は埋没するが機能している。

中世４期ー中世Ⅳ面（永禄年間） 中世１期・２期に対し、３期を経て各屋敷地のレイアウトを変更し終えた時期である。全体に厚く盛土（整地）を施し、内堀が完全に埋められ、外堀は幅３ｍ程度に縮小する。入佐川遺跡・95年度調査区の北端には、大きく掘り広げられた堀があり、土橋が２本かかる。入佐川遺跡において検出された土橋は屋敷地Aの北辺を限ると考えられる。南側の土橋を挟んで、L字に南へ延びる堀SD51005下層があり、96年度屋敷地B・97年度屋敷地Cまで続き、東へ直角に曲がり調査区外へと出てゆく。堀の内側には土塁を挟み屋敷地が形成されている。屋敷地Aは細かな区画割りを経て最終的には、土塁を割って引きこまれた溝SD53012によって大きく南北２区画に分割される。北の区画は南北約28m、南の区画もまたほぼ同様の規模と考えられる。北の区画の中央には区画溝を巡らせる正方形の小規模掘立柱建物があり、堂が存在した可能性がある。また、南側の区画には大型の礎石建物が存在した可能性が高い。堀と屋敷地を分ける土塁は３～５ｍの幅をもつが、高さは明確ではない。また、屋敷地Aの南端では居住区との間に畠があり、幅が狭くなる。畠が存在することから、屋敷地の端は近いと考えられ、95年・96年度調査区の間に屋敷地Aの南を限る土塁が通っていた可能性が高い。

屋敷地B・Cでは堀肩より東側に盛土が施され、上面は平坦となっている。建物の存在は不明である。また、整地によって堀は東側から埋められ、堀幅は４ｍ程度まで狭くなっている。

中世３期に引き続き、追善供養を行っている。中世４期は火災によって焼亡する。

中世５期ー中世Ⅲ面（永禄後期　1569年まで） 中世４期のレイアウトを基本的に引き継ぐが、堀は若干埋没し、土塁を割って流れ込んでいた区画溝は埋められ痕跡となる。また、屋敷地の地業は更に続く。

屋敷地Aでの４期との大きな違いは、最終的には屋敷地内の区画溝が埋没し、南北の２大区画が解消することである。集石遺構・根太痕跡以南には遺構がなく、入佐川遺跡の南北溝から根太痕跡までの南北約45mの範囲に建物が集中する。屋敷地Aでは区画溝SD2008などを埋め、北半の区画溝内には礎石建物（SB52001）が建てられる。中央には区画溝SD52003を半ば埋め小規模な根太建物（SB52002）が造られ、南半部に大型の礎石建物（SB52003）が出現し、更に小規模な根太建物が南側に造られる。また、４期において堀側へ突き出していた掘立柱建物は規模を縮小して建て替えられる（SB52004）。南端にあった畠は消滅する。屋敷地の南端は４期と同じと考えられる。屋敷地Bの４期からの変化は不明である。屋敷地C南端のコーナー部内側には、更に整地土を盛り出し、塀の基部となる石列と、上部に２列の柵列が走る。屋敷地B・Cでの土塁の痕跡は明らかではないが、屋敷地Bでは屋敷地Aの南端と同じ間隔を堀肩との間にとって小溝が走っている。小規模な土塁が存在した可能性もある。屋敷地Cの堀を挟んだ対岸に屋敷地Dが出現する。屋敷地は整地と、整地の北側を区切る石塁・溝から構成される。

中世５期は火災によって焼亡する。屋敷地Aの北端からは、焼けた畳が出土している。火災層直上から永禄12年銘（1569年）の木簡が出土しており、永禄12年の合戦により焼け落ちたと考えられる。

中世６期－中世Ⅱ面（天正年間）　各調査区を通じ、極端に遺構が営まれなくなる時期である。中世５期の遺構面が焼亡した後、屋敷地Aでは、火事片付けによる地均し・盛土を行う。屋敷地A内の区画割りは消滅し、方位をやや西に振る大型掘立柱建物１棟が出現する。建物の北西には畠（畝状遺構）を伴う。また、屋敷地A周辺では、堀SD51005・堀状落ち込みSX51001は埋没し浅くなり、土塁SF51001はほぼ削平され平坦となる。屋敷地B・Cでは焼亡した後積極的な地均しなどは行われていない。SA72004･72005は中世５期に遡ると考えられるが、方位がSB55001に近いことから、石列72001に替り６期に造られた可能性も残る。

中世６期の遺構面は焼亡する。中世５期上の火災層直上から永禄12年銘（1569年）の木簡が出土しており、７期からは慶長期の遺物が出土しているため、中世６期は天正年間と考えられる。この火災を、最終的に此隅山城から山名家が移した居城－有子山城が落城し山名家が実質滅びた天正８年（1580年）の合戦によるものと推定できる。

中世７期－中世Ⅰ面（慶長年間）　屋敷地A・B・C共に武家屋敷に関わる遺構はなく、水田化している。旧外堀は浅く窪み、用水路として残る。

武家屋敷遺構以外の遺構面について

弥生時代後期から近世の遺構面の内、武家屋敷遺構以外の下層・上層の遺構面について触れておく。

（下層の調査）

宮内堀脇遺跡の主たる部分を占める遺構・遺物は中世後期の此隅山城下に関係するものであるが、下層には弥生時代後期から鎌倉時代にかけての遺構面が検出されている。

弥生時代後期の遺構（古代Ⅳ面）　97年度調査区の最下層から水田土壌及び畦畔に伴う北北西に延びる杭列が検出された。その深度は標高約2.5mであり、標高が高くなる97年度調査区において出現した。弥生時代の遺構面は、更に南側へと伸び、出石神社周辺において過去に調査が行われた宮内遺跡・宮内黒田遺跡へと続くものと理解できる。

古墳時代前期～奈良時代・平安時代前期の水田遺構（古代Ⅱ・Ⅲ面）　96年・97年度の調査において、田下駄を含む加工材が帯状に検出されている。これらは、周辺の入佐川遺跡・袴狭遺跡などにおいても検

出されており、水田畦畔の芯材として使用されていた。今回の検出例についても水田畦畔であったと考えられ、北西・北東方向に方位をもつ水田区画・畦畔が検出されている。これらの水田の時期は出土木器及び古式土師器の存在から古墳時代前期に遡る可能性が高く。その点についても周辺遺跡の成果と同じ結果を示している。その方位は下層と同じく北西を指向しており地形に沿った水田が展開していたと考えられる。但し、若干の奈良時代～平安時代前期の遺物が出土しており、水田は平安時代前期まで継続して使用されていた可能性が高い。96年度の調査区では、北西･北東方向を向く水田区画と共に、東西方向を向く加工材群が検出されており、これが、奈良時代～平安時代前期の水田畦畔の可能性がある。この層位には木製祭祀遺物（人形・馬形・斎串）が相当量含まれており、至近において律令祭祀が行われていたことが分かる。これらの遺物のあり方は、入佐川遺跡・袴狭遺跡・砂入遺跡の水田土壌中の祭祀遺物のあり方に近く、律令祭祀が宮内地区においても行われていたことを示している。祭祀遺物の時期は 9 世紀代を示しており、出石郡家の祭祀が広く出石川に面した範囲においても行われていたことを示すものとして注目できる。

平安時代後期の水田遺構（古代Ⅰ面）　祭祀遺物包含層の上層には黒色土器を含む水田土壌が堆積しており、下層より継続して水田として使用されているが、明確な遺構の検出には至っていない。

鎌倉時代の水田遺構（中世Ⅷ面）　各年度の下層より鎌倉時代の水田土壌は検出されている。検出された水田畦畔・溝はほぼ正方位を指向している。出石神社神主であった神床家には『但馬一宮領神戸郷絵図』（神領田絵図）が伝わっており、その地割は正方位を指向し圃場整備前の地形にも残っている。検出した正方位の水田区画は絵図の時期に近く状況を反映しているものと考えられる。

（上層の調査）

近世Ⅰ～Ⅲ面　近世Ⅰ面は畠状遺構を検出している。上面に被覆する洪水砂層中に19世紀代の出石焼を含んでいることから19世紀代の畠である可能性が高い。各年度において確認できる。この時期の洪水砂は袴狭地区においても確認・報告されており、沖積地を広範囲に覆う洪水が発生したことが明らかである。近世Ⅱ・Ⅲ面については江戸中～後期の水田土壌と考えられる。

第 5 節　遺構の配置と性格

95年度～99年度に亘る調査成果を、中世Ⅱ期を中心とした16世紀前半と、中世Ⅳ期を中心とした16世紀後半に 2 分し、第18図と第19図に挙げた。

16世紀前半

各年度の堀・溝区画を中心に図上におとした。各屋敷地を挟み、屋敷境が 2 か所、堀の屈曲部が 3 か所存在する。まず、堀に注目する。外堀の延長上に98年度旧河道（溝）・99年度の溝SD09が位置する。堀と考えられる遺構の中で、97年度の堀コーナーaに加え、99年度C地区SD09についてもコーナーCが検出されている。99年度C地区以南では新たな堀が出現していないことから、SD09コーナーCが外堀の南隅と考えることができる。

堀コーナーCを南隅と押さえ武家屋敷群（堀において区画された屋敷群を武家屋敷群と呼称しておく）の範囲を推定する。現入佐川までの距離は約225mを測り、南北 2 町の中に各屋敷地が存在することがわかる。また、外堀の南北線をもとに東西幅を此隅山山裾に求めた場合、230m前後である。堀コーナーCを東へ延ばせば、宗鏡寺砦の尾根端にあたる。以上から、ほぼ 2 町方格内に武家屋敷が存在すると考えられる。

次に屋敷境に注目すると、外堀と98年度旧河道の間には15m前後の間隔があき、堀が貫通していない。98年度検出の旧河道もまた、その北端において東へ曲がりコーナーを造り出していた可能性が高い。外堀SD76001との間が通路となり、武家屋敷群を南北に２分していたと考えられる。

以上の想定をもとに２町方格の規模をもつ山名家の武家屋敷群内部の配置を概観する。区画は北限を入佐川、西・南限を堀と宗鏡寺砦の尾根、東限が此隅山山裾となる。堀は、少なくとも方格の北半では内堀をもち、２重にめぐる。

北東の隅に領主の居館（御屋敷）が位置し、領主の居館の西側の湿地上には屋敷地Ａが南北２区画（各南北１／３町）で並ぶ。上級家臣が住んでいたと考えられる。

屋敷地Ｂ・Ｃの状況は不明である。堀コーナーＣの南側には幅15m程度の東西方向の通路が通る。通路の南側には堀で囲まれた区画が調査区の東側に展開していたと考えられる。

16世紀後半

整地が進み、16世紀前半に明確であった２町方格はあいまいとなる。堀は内堀が埋められ、外堀は北半では幅が狭くなり、南半の堀（98・99年度調査区）は整地土によって埋められる。土塁は高さを減じ、次第に消滅してゆく。

屋敷地は南北にＡ・Ｂ・Ｃが並ぶ。屋敷地Ａの南北区画は解消され、南北２／３町を占める。北半には『堂』状の礎石建物、南半には大型礎石建物が出現し、屋敷内には畠が営まれる。引き続き上級家臣が住んでいたと考えられる。

屋敷地Ｂ・Ｃに遅れて堀外にＤが出現する。屋敷地Ｂは当初南北長13m程度の溝を巡らせる区画であったが、徐々に嵩上げされ、屋敷地Ｃと一体化してゆく。屋敷地Ｃ（堀コーナーＣ）南側には両側に溝をもつ幅５m程度の東西方向の通路が通る。

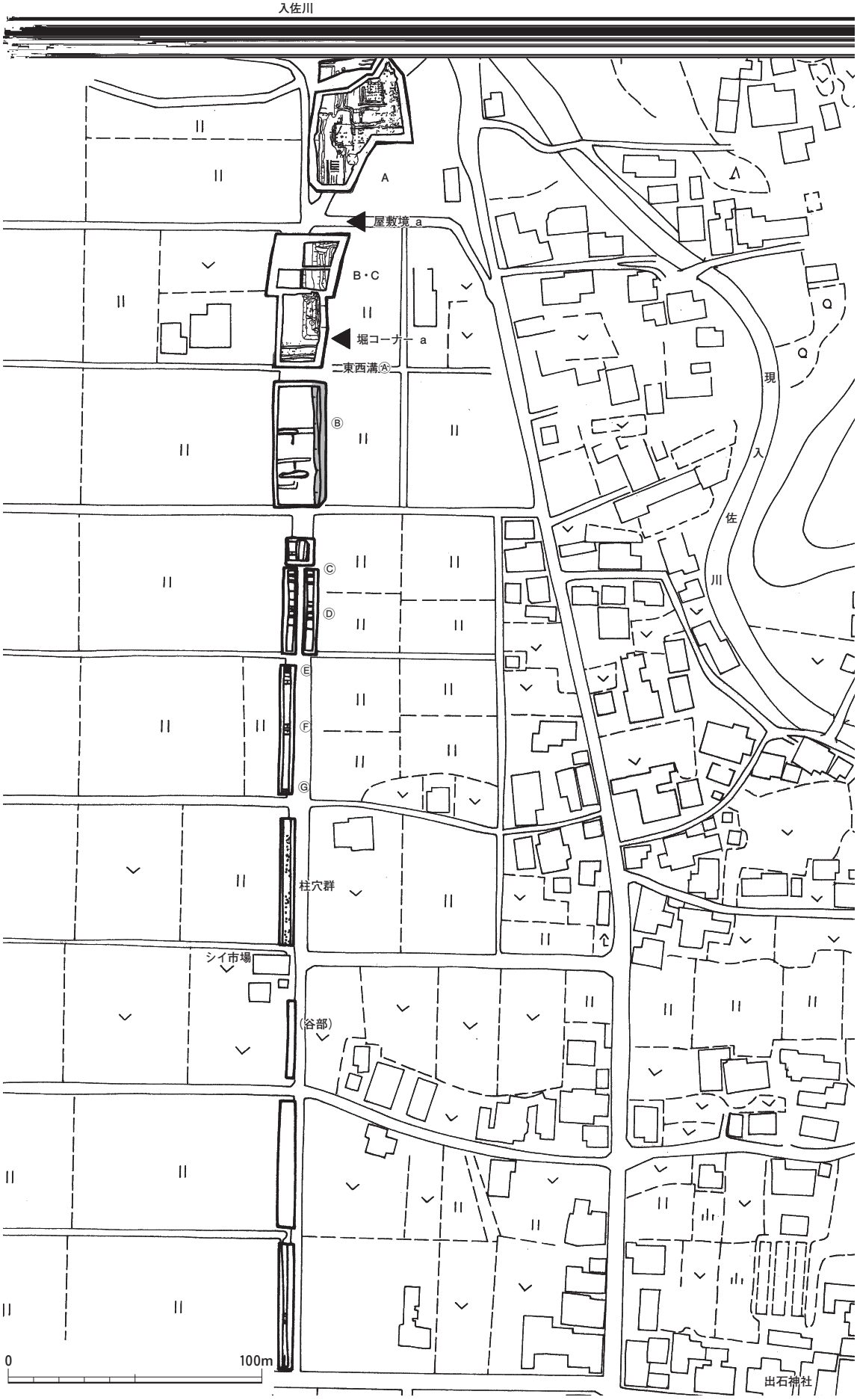
通路に面した屋敷地Ｃでは宗教行為（追善供養）が活発に行われる。

堀コーナーＣより南側では部分的に整地が行われるが、主に東西方向の溝が20m～25mの間隔で掘られ、排湿・排水を行ったと考えられる。

周辺小字名と宮内堀脇遺跡

先述した遺構の配置に小字名を加味する。２町方格は字『堀脇』の範囲とほぼ一致しており、堀の存在と範囲が字名からも追跡できる。方格の南側は字『宗鏡寺　太平治（寺）』『下砂後　砂後』となる。『宗鏡寺　太平治（寺）』は武家屋敷の南側山裾に複数の寺院があったことを推測させる。また、砂後は扇状地に供給される洪水砂を指すと考えられ、低地に向かって山側から土砂が供給されたことが分かる。旧河道跡は砂後・宮ノ後と宮ノ下・芝の間に痕跡を残しており、その先端は字シイ市場に及んでいる。

字シイ市場の一部は99年の調査範囲に入っており、小規模な柱穴群を検出している。この小規模な柱穴群が市場の遺構であった可能性を考えておく。シイ市場については第Ⅻ章において再度触れる。



第18図　遺構の配置Ⅰ

第20図　遺構の配置と小字名(縮尺＝1:3,000)

第Ⅺ章　文字資料について

第１節　人名墨書土器群について

宮内堀脇遺跡から出土した文字資料は約290点に及ぶ、その大半を占めるものは、96年度・97年度において堀内から出土した人名墨書土器群である。ここでは、出土した墨書土器に記された人名を中心とする内容を検討し、廃棄に伴うパターンの検討、および地元に残る文献資料との照合を行い、①人名墨書土器群の性格（目的）・②記された人名の階層、更に③遺構面の時期検討に必要な作業を行いたい。

１．人名墨書土器群の分析　分類と登場回数

人名墨書土器を整理し、属性表を作成した。墨書土器は大きく、①人名・②神名・③仏・仏教用語・④月日・⑤その他に分けることができる。人名は墨書土器の大半を占める。人名は更に幾つかの階層の人々に分かれており、詳しくは後述するが、法名をもつ者・武家・百姓・童名もしくはその他の人名をもつ者が含まれている。この中で圧倒的に数が多いもの、また、個々の名前の登場回数が多いものは共に『ほうせい』『たうゆう』『めうきん』といった法名を持つ者である。以下『小三郎』などの百姓の名が続き、『にやにや』などの現在では名前として認めがたいものが続く。『備前殿』など苗字や殿が付く武家と考えられる名前は少ない。

２．墨書土器群の類例からみた性格

墨書土器群には『六親眷属』・『七世父母』あるいは『ごほんぞん』などの墨書が見られることから仏事に使用されたと推測される。墨書土器群の類例は管見の限りでは以下３例があげられる。山口県長門国分寺(1)・愛知県清州城下町(2)・神奈川県裏八幡西谷遺跡(3)である。裏八幡西谷遺跡出土例は、土師器皿の外面底部に月日・人名を墨書したもので、時期は15世紀後半から16世紀前半である。清州城下町遺跡出土の墨書土器群は土師器皿の内側に『めいきん』などの法名と『南無阿弥陀佛』『七世父母』などの仏語が記されており、屋敷区画の大溝に投棄されている。時期は16世紀前半である。長門国分寺例は、西大寺の区画溝に多量の墨書土器を無地の土師器皿と共に投棄したもので、土師器皿の外面底部に人名を墨書しており、水野正好の分析から毛利氏が関与した長門国分寺による大内氏一族を主な対象とした追善供養行為と結論付けられている。16世紀後半より近世にかけて行われたと考えられている。

長門国分寺・清州城下町の例は何れも区画溝に投棄しており、清州城下町例は内面墨書、仏教用語を記した土師器皿の存在など本遺跡の墨書土器群に極めて近い。長門国分寺例は外面墨書の点を除けば、無地の土師器皿を多量に伴っている点を含め、ほぼ墨書土器群に近い内容である。これらの類例から人名墨書土器群についても追善供養にともなって使用・廃棄された可能性が非常に高いと考えられる。

３．セットと廃棄の状況について

墨書土器は基本的には４寸径の土師器皿と３寸径の皿の大小２種の皿によって構成され、Ａ～Ｆ群に分かれて廃棄されているが、それぞれの群の中には同じ名を墨書したものが複数見受けられる。これは１名の供養に複数枚の土師器皿を使用した結果と考えられる。図版にはそれらを整理して図示した。以下、各群の構成について述べる。

上層の墨書土器群

F群　大・小の土師器皿に法名１名を記すものが大半を占め、『ほうせい』『そうけん』『ちよけい』『めうけん』『ちゆけい』『めうきん』などは大小各１枚１組が４セット～１セットで構成されている。また、『めう志ゆん』『めうせん』は大皿２枚で１セット、『たうゆう』は小皿２枚で１セットと捉えられる。これ以外に１枚のみで構成されているものがある。法名を１名記すものが概ね複数枚のセットであるのに対し、法名に武家・一般農民の名を含むものは大皿に連記する形態をとる。

A群　大皿に法名１名を記すものを使用し、小皿は使用しない。『ほうせい』『そうけん』『ちよけい』は３枚１セット、『めうかう』２枚１セット、『めうけん』は１枚で構成されている。法名を１名記すものに対し、武家・一般農民の名を含むものは大皿に連記する形態をとる。Ｆ群と同じである。

B群　法名を含まず、武家・一般農民の名を含むもので構成される。小皿には一般農民の名を１名で記している。加えて法名に武家・一般農民の名を含むと考えられる大皿に連記する形態のものがある。

C群　大皿に法名１名を記すものを使用し、小皿に一般農民の名を１名で記している。加えて法名に武家・一般農民の名を含むと考えられる大皿に連記する形態のものがある。Ａ群に近い構成である。

下層の墨書土器群

B群下層　大皿に法名１名を記すものを使用し小皿は使用しない。『めうけん』は２枚１セット、他は１枚で構成されている。武家は小皿に１名で記している。法名に武家・一般農民の名を含むものは大皿に連記する形態をとる。

C群下層　大皿に法名１名を記すものを使用し『せんち』『たうゆふ』『そうかう』など２枚１セットとなるものが多いが、『めうこ』など大皿１枚のものに加え、『めうちん』など小皿に法名を１名記すものも少量存在する。また、武家は小皿に１名で記している。法名に武家・一般農民の名を含むものを大皿に連記する形態をとる。また、Ｃ群下層の特徴として仏語・月日・神名そして御本尊という供養の中心に位置するものなど人名以外の文言が含まれている点が特徴である。

E群　大皿のみで構成される。法名・武家名を各１名記すものと法名・武家・一般農民の名を大皿に連記する形態のものがある。

以上、墨書土器群は各グループによって少しづつ構成が違うことがあきらかである。しかし、大きくは、１．法名を持つものは基本的には大皿に１名づつを記し、大小の複数組・大大１組あるいは大１枚を使用している。２．武家は大皿に１名もしくは２名、仏や仏語、神名についても１行もしくは２・３行の中に記されていることが多い。３．それ以外の一般農民は基本的に法名・武家を含む大皿に複数名で記され、同名で構成された皿が複数枚使用されることはなく１枚で供養されている、といった傾向が読み取れる。

土師器皿の廃棄（投棄）状況は、Ｅ群については水平状態で検出されていることから、溝底に置いたあるいは極浅い水深で沈めた状態と考えられる。他群については概ね堀肩から投棄したと考えられ、Ａ－１群・Ａ－２群が堀底に向かい扇形に散らばっている様子が投棄状態をよく現わしている。墨書土師器皿はＦ群ではセットになる土師器皿が固まって出土しており、セットになるものはそれぞれ固まって廃棄された状況が伺える。Ａ－１群では複数連記の皿が比較的至近距離に集中していることから、複数連記の皿がまとめて投棄されている可能性が高い。

墨書名	属性		上層の群													下層の群													合計	名称　案	階層	備　　考
			A	A	A	B	B	B	C	C	C	F	F	F	小	A	A	A	B	B	B	C	C	C	E	E	E	小				
	大分類	細分類	大	小	複	大	小	複	大	小	複	大	小	複	計	大	小	複	大	小	複	大	小	複	大	小	複	計				
あちや	人名	その他																						1				1	1	あちや		
うしちく	人名	その他																									1	1	1				
うつか(殿)	人名	苗字			1									2	3					1								1	4	菟束殿	武家	
うミのかし	人名	生まれ歳			1										1														1	兎・巳の歳		
おかめ	人名	童名字			1									2	3														3	御亀		
おきく	人名	童名字																						1				1	1	お菊		
おくり	人名	童名字																				1		1			1	3	3			
おこう	人名	童名字					1								1						1			2				3	4	お幸		
おちこ	人名	その他			1									2	3						1		1	2				4	7			
おとこれう	人名	その他												2	2														2	乙五郎		
おにう	人名	その他												1	1														1	小入		
おもち	人名	その他			1									1	2														2			
きくてう	人名	童名ヵ																									1	1	1			
けたわかしやうろう	人名																		1			1					1	3	3			気多若上臈
こうはい	人名	法名			2									2	4														4	紅梅		
こ三郎	人名	その他																									1	1	1	小三郎		
こせう	人名	その他			1			1						2	4									1				1	5			小姓ヵ
こにう	人名	その他			1										1														1	小入		
しゅけい	人名	法名										1			1				1			1						2	3			寿けい
しゅとく	人名	法名																						1				1	1			
せんち	人名	法名																				2						2	2			
そうかう	人名	法名																				2						2	2			
そうけい	人名	法名																	1			2						3	3			
そうけん	人名	法名	3									3	3		9														9	宗賢		
そうせん	人名	法名																	1			2						3	3	宗泉		
たうけい	人名	法名			1									1	2														2			
たうゆう	人名	法名			3								2	1	6				1			2						3	9	道祐		妙金と関連
たうゑ	人名	法名																					1					1	1			
たま	人名	童名字			1										1														1			
ちゅけい	人名	法名	1									1	1		3														3			寿けいヵ
ちよけい	人名	法名	3									3	3		9														9			
月けいせいうん	人名	法名																				1			1			2	2		僧	
と□いまこ七	人名	苗字+仮																									1	1	1		武家	
とうきく	人名	童名字												1	1												1	1	2	藤菊		
とうちよ	人名	姓字												1	1														1	藤千代		
とう二ら	人名	姓字			1									2	3														3	藤二郎		
とうひやうへ	人名	姓字												2	2														2	藤兵衛		
道ゑい	人名	法名							1						1														1	道永		
とくしゆ	人名	法名ヵ																						1				1	1			
とらきく	人名	童名字																						1				1	1			
にやにや	人名	その他																									1	1	1	にやにや		
ねねほうし	人名	童名字																									1	1	1			
はくほう	人名	法名																									1	1	1			
八備	人名																					1						1	1			
ひぜん殿	人名																								1			1	1		武家	備前殿ヵ
へや	人名	その他			1										1														1	へや		
ほうしゅ	人名	法名												1	1														1			
ほうせい	人名	法名	3						1			4	4		12				1			2			1			4	16			

第30表　墨書土器属性分類表Ⅰ

墨書名	属性		上層の群														下層の群													合計	名称　案	階層	備　　考
			A	A	A	B	B	B	C	C	C	F	F	F	小		A	A	A	B	B	B	C	C	C	E	E	E	小				
	大分類	細分類	大	小	複	大	小	複	大	小	複	大	小	複	計		大	小	複	大	小	複	大	小	複	大	小	複	計				
ほうちゅ	人名	法名			1										1															1			
ほうゐん	人名	法名																					1						1	1			
本上はう	人名	法名			1			1						2	4													2	2	6		僧	本上坊
まこ七	人名	その他			1										1															1	孫七		
又らく	人名	その他					1							2	3										1				1	4	又六		
めうかう	人名	法名	2									1	2		5								2						2	7	妙香		
めうきん	人名	法名			4							1	1	1	7								2					1	3	10	妙金		道祐と関連
めうけん	人名	法名	2									2	2		6					2			1						3	9	妙乾		
めうこ	人名	法名																					1						1	1	妙香		
めうこう	人名	法名																		1									1	1	妙香		
めうこせつちやうに	人名	法名																								1			1	1	妙香禅定尼		
めうさい	人名	法名			1									1	2					1			1						2	4	妙西		
めうしゅん	人名	法名							1			2			3															3	妙春		
めうせん	人名	法名			2							2		1	5															5	妙善		
めうち	人名	法名																		1			2						3	3			
めうちん	人名	法名																				1		1				1	3	3	妙珍		宇津家
めうゑん	人名	法名			1							1		3	5								2		1			1	4	9	妙円		徳丸家
やく	人名	苗字			1					1					2									1					1	3	夜久	武家	
やくこれう	人名	苗字+仮			1										1															1	夜久五郎	武家	
よした殿	人名	苗字			1										1															1	吉田殿	武家	
よね	人名	童名字																							1			1	2	2	よね		
よねこれう	人名	その他												1	1															1	米五郎		
ゑむら	人名	苗字												2	2															2		武家	
たかぬのかミ	神																								1				1	1	鷹貫の神	神	
たんはのかミ	神																											1	1	1	丹波の神	神	
ミやちまのかミ	神																						1					1	2	2	宮島の神	神	
御ほんそん	仏	本尊																					1						1	1	御本尊	仏	
ほうかい	仏語											1			1															1	法界		
七ほうはは	仏語				1										1															1	七法母		
むゑん	仏語											1			1															1	無縁		
むゑんほうかい	仏語				1										1									1	1				2	3	無縁法界		
六しん	仏語																						1						1	1	六親		
六しんけんそく	仏語		1												1									1	1				2	3	六親眷属		
五月五日	月日																								1				1	1	5月5日		
四月廿□	月日																					1		1	1				3	3	4月20日		
廿八日ちい	月日				1										1															1	28日　市		
廿六日のうい	月日																							1					1	1	26日のうい		
おこのへ	不明				1								1	1	3															3			
く	不明																						1						1	1			
五□	不明																					1							1	1			
ち	不明											1			1															1			
ほ□	不明				1										1							1							1	2			
ほちこやくこ	不明																											1	1	1			
ミツ□	不明													1	1															1			
め□	不明		1												1															1			
上□□ちやうてん	不明						1								1															1			有頂天ヵ
十	数																											1	1	1			
計			16		35		3	2	3	1		24	19	38	141					11	1	6	33	8	19	4		20	102	243			

第31表　墨書土器属性分類表Ⅱ

３．記載人名の階層

墨書人名がどの様な階層にあたるか、坂田　聡の研究[4]をもとに属性表･釈読一覧に記入した。坂田は、中世百姓の人名の分析を通じて、少年時代の童名⇒成人名⇒官途名と呼ばれる官職名⇒法名と呼ばれる僧侶名の順に年齢が上がるに従い、儀礼を行い、改名を繰り返していったことを明らかにしている。また、坂田は日常的に使われる通称（字　あざな）について（ア）姓型字：姓にあたる漢字を含んだ字、（イ）官途名型字：官職を取り入れた名、（ウ）童名型字：こども時代の名前が字となった者あるいは女性名、（エ）その他に分けた。

墨書土器群の人名は、坂田の分類を参考として以下に分けることができる。①法名・②武家の苗字・③姓型字の人々・④官途名型字の人・⑤童名型字の人々・⑥その他の字をもつ人々である。①・②以外の人々が純粋な農民であるのか、商工業者を含むかは不明である。ここでは『百姓』として一括しておく。

①法名は、『めうきん』『どうゆう』『ちよけい』など２文字の法名をもつものと、４文字の『月けいせ（い）うん』、塔頭を示す『本上はう』（本上坊もしくは房）がある。

②武家は、吉田殿・ひせん殿・菟束殿といった敬称をつける場合と、菟束・夜久といった敬称のない場合がある。

③『とうきく・とうちよ・とうべい・とう二ろ』と云った名前に（藤原）姓がつく姓型字の人々。

④『とうひようへ』兵衛の官途成型の名前を持つ者。

⑤『かめ・とらきく・たま・ねねほうし』など童・女子名のもの（童名字）。

⑥『よねこれう・おとこれう・又六』など数字が含まれる人名や『にやにや・おもち・こにう』など名前として認識し辛い字をもつ人々。①～⑤以外の人名である。

法名はその大半を占めており、正式な寺僧であるか、『入道成り』を行い、在家のまま法名を名乗った者（宮座の上位以上の者や武家）であるかは、判然としない。官途成型の名前を持つ者は『とうひようへ』１名のみである。童・女子名のものは、10名と多い。その他の字を持つ者も14名と多い。

構成人名と使用墨書土器の関係

複数の名前が１枚の皿だけではなく、複数の皿で並んで記されている。例えば、『おかめ・おちこ』・『おちこ・おにう（こにう）・おかめ』『おちこ・おこう』・『本上はう・うつか』・『又六・とう二らう・こうはい』・『おもち・こせう』・『たうゆう・めうきん』・『めうせん・めうゑん』・『めうきん・めうゑん』・『よね･おくり』があげられる。これらの名前が複数の群において１枚の皿に並んで名前が記されており、何らかのつながり（例えば、親子・一族・兄弟・師弟あるいは連続して名前が記された帳簿の存在）などを連想させる。一枚の中に何らかの関係性を示す名前のセットが存在することは、同じ皿に書かれた別の名前もまた関係性をもつ可能性が高い。名前の関係性については後述する奉加帳の考察においても述べるが、各群ごとの廃棄についても何らかの『縁』によって結ばれていた可能性を考慮する必要があるだろう。例えば『とうきく・とうちよ・とうべい・とう二ろ』と云った名前に『藤』がつく姓型字の人々がＦ群のみに集まり、おおよそ１回限りで供養を終了している点をみれば、各群の人名間に関係性が存在する可能性は低くはないだろう。しかし、今回は準備が及ばず、これ以上は踏み込まない。

次に、これら関連をもつ複数の名前を含め、複数の群に同一の名前が書かれた土師器皿が投棄されている点に注目する。属性表に示したように複数の群に同名の墨書土器が投棄されていることが分かる。先述したように、同じ人名でありながら、各群によって廃棄時のセットに違いがある。土器群を大きく上下層でとらえたが、各群に亘って同じ名前が供養されている点は、同一層で捉えたＡ～Ｆ群の間にも

不可視な時間差があり、数回の追善供養が行われていたことを示す可能性が高い。

惣持寺本尊勧進奉加帳との関連

宮内地区には総持寺観音堂本尊『十一面千手千眼観世音菩薩』胎内に天文四年（1535年）に納められた「惣持寺本尊勧進奉加帳」がある。この奉加帳は、永正元年（1504年）に山名氏と垣屋氏の内乱に伴い消失した出石神社復興のために募った寄進帳である。奉加帳には延べ1,500人の名前があり、整理すれば、700名前後の人々が寄進を行っている。寄進は山名家当主祐豊を筆頭に家臣・僧侶・農民など多彩な階層に及び、出石町史を編纂した石田善人氏はその寄進者の大半が宮内地区の住人としている。今回出土した墨書土器は同じ宮内地区内にあり、30年ほど後に投棄されたと考えられる。

ここでは、同じ地区内にある２つの史資料の関連を考察する。互いに多数の人名を抱えており、両者に記された名前が合致するか否かを検討したい。まず、着目するのは、『たうゆう・めうきん』である。両者はＡ群とＦ群において何度か並んで書かれており強い関係性が考えられる人名である。

奉加帳を検討すると、『五文　**妙金**　**道祐**』として、２人が合わせて５文の寄進を行っていることが分かる。更に寄進額を記さず名前のみ書き連ねた部分において２か所、妙金・道祐が連続して記されている箇所が認められる。たうゆう・めうきんは道祐・妙金と同一人と認めてよいだろう。

次に、めうせん・めうゑん・めうきん・めうちんに注目する。『めうせん・めうゑん』・『めうきん・めうゑん』は墨書土器群のなかで複数回連記され、関係性が考えられる人名である。奉加帳を検討すると、『**妙円**　徳阿ミ　**妙金**　永通　小菊　**道祐**　**妙珍**』『**妙善**　新衛門　**妙円**』と近接して記されている部分がある。また、妙善は徳あミの女としている部分がある。また、妙善と妙円が連続する行に記載されている部分もある。墨書土器群の人名と奉加帳の示す人名の何れにも関連性が見いだせる人名が存在することは、同名異人の存在を完全に否定するものではないが、同一人の可能性が非常に高いと考えられる。加えて、墨書人名の中には『にやにや』・『おにう（こにう）』・『あちや』などの俗称に近い（世襲することのない）名前や、道祐・妙珍などと同じく妙西・妙泉・妙香禅尼など法名において一致する名が多い点は墨書土器群の人名と奉加帳の人名に合致する可能性が高いことを示している。

属性表に案として、奉加帳に存在する人名を記入した。相当数が対照できる。

奉加帳では、『めうちん』（妙珍）は宇津若狭守の一族として十文を寄進しており、徳丸豊後守は妙円のため十疋を寄進している。妙珍・妙円は妙金・妙善・道祐と関連性が見いだせる人名と考えており、山名家の上級家臣と関係する人々が墨書土器の法名に含まれている可能性が高いことがわかる。

今回は紙数の関係で触れることはしないが、連記される墨書人名間に何らかの繋がり（親子・一族・兄弟・師弟あるいは帳簿の存在）があるならば、同様に連続して記名された箇所が見られた奉加帳の名前同士にも何らかの繋がりが指摘できるだろう。それは奥**衛門**・五郎左**衛門**・五郎**兵衛**・六郎**兵衛**・小三郎・彦**衛門**や、妙慶で始まり太郎**兵衛**・道円・妙善・九郎**兵衛**・五郎**兵衛**・助三郎・あか・三郎**兵衛**・太郎**衛門**・二郎**兵衛**など「兵衛」名が続く箇所が随所に見られることからも推測できる。翻れば、奉加帳内において確認できる墨書人名が集中している箇所ではこれらの名前間に関係性があることも推測できよう。これは、また別の機会に述べることとしたい。

４．追善供養の復元に向けて

人名墨書土器群は、奉加帳との比較から推して、そのほとんどが、宮内地区（惣持寺に関わる）の人々であり、『ごほんぞん』御本尊の墨書の存在から、総持寺観音堂本尊『十一面千手千眼観世音菩薩』のも

と結縁した人々の追善供養であったと考えられる。これらの人々は法名・武士・童名・女性・その他の名前からみて各階層に亘っており、墨書土師器皿のセット枚数と法量・使用回数に階層差が表れている。なかでも法名はその大半を占めており、出家者と考えられるが、正式な僧であるか、『入道成り』を行い、在家のまま法名を名乗った者（宮座の上位以上の者）や出家した武士であるかは、判然としない。一部に山名家重臣縁の人物が含まれている。しかし、奉加帳に比べ太夫・衛門・兵衛など『官途成り』した名前を持つ者が殆んど含まれていない点から、『官途成り』した宮内地区の百姓の中でも上位の者が更に『入道成り』を行い、出家し、追善供養の対象になった可能性を考えておきたい。

複数群に分かれての廃棄に注目するならば、検出した土器群を大きく上下層でとらえたが、同一層の各群に亘って同名人が供養されている。『藤』の名の付く人々がＦ群のみの１回きりで供養を終了している点を考慮すれば、各群間には不可視な時間差があり、数回の追善供養が行われていること、そして群を構成した人名間には関係性が存在する可能性が考えられる。

また、供養には、墨書土器に加えその数倍の無地土師器皿が使用されている。長門国分寺と同じ様相と考えられるが、統計処理に及ばず、検討課題として残った。また、多量の箕・墨書三宝・折敷の存在は、供物などを入れて流した可能性があり、墨書土器以外の供養地点も定まっていることが判明した。

第２節　出土木簡について

１．出土木簡の概要

出土木簡は付け札類、習書、手紙様の文書木簡、位牌・柿経などの仏事に伴うもの、呪符、遊戯具、あるいは板材への覚書的なものなどが存在している。

付け札類の大半は米の出納に関わるものと考えられ、苗字のない仮名を伴うものが多い。宗教行事に伴うものの中で、三宝・折敷に法名が記されたものは墨書土器群と名が重なるものもあり、墨書土器と共に追善供養に使用されたと考えるべきであろう。遊戯具のなかには聞香あるいは闘茶札と考えられるものがあり、中将棋駒とともに武家屋敷内での娯楽に供されたものである。

これら木簡の出土傾向として、付け札類はほぼ全てが屋敷地Ａ及びその前面の堀から出土しており、位牌・柿経などの仏事に伴う木簡・呪符は悉く屋敷地Ｂ・Ｃ及びその前面の堀から出土している。

２．出土木簡の人名と年代

出土木簡の中で、人名と年代の両方が記載されているものが２点存在する。W905とW950である。

W905は永禄12年（1569年）銘をもち、乃木出羽守の人名の記載がある。

乃木出羽守は、古文書及び他の出土文字資料にその名はないが、乃木姓を名乗る武士については古文書にいくつかの記載がある。一つは宮内地区にある総持寺観音堂本尊『十一面千手千眼観世音菩薩』胎内に天文四年（1535年）に納められた「惣持寺本尊造立勧進奉加帳」である。乃木日向守･乃木丹後守･乃木若狭守・乃木長左衛門尉といった乃木姓の武士の名が山名祐豊とともに記されており、山名家の被官であったことが推測される。分けても、乃木丹後守は山名祐豊の次に記されており、極めて祐豊に近い場所にいた人物であり、寄進額からも非常に高位の武士であったことが伺える。乃木丹後守は山名家の他の文書にも登場しており、その内容から山名祐豊の奉行人であったと考えられている。出石町史において「惣持寺本尊勧進奉加帳」にふれた石田善人氏は、乃木氏の出自を出雲国意宇郡乃木村などに求めており、山名家の山陰経営伴い家臣団に組み込まれ、天文四年（1535年）時点では複数の家が分立し

ていたと推定している。奉加帳には存在せず、34年後に現れる出羽守はこれら分立した乃木家の後嗣（子あるいは孫）であったと考えられ、丹後守が奉行人であったことを勘案すれば、出羽守もまた山名祐豊の重要な家臣であった可能性が高くなる。この木簡に記された乃木出羽守が荷物の受取人であるか差出人であるかは検討を要する事柄であるが、仮に受取人と考えた場合、山名家（祐豊）の御屋敷の前面に奉行人格の重臣 - 乃木家の屋敷が位置していたと捉えることが可能となる。

W950は天文23年（1554年）銘をもち、道祐禅門の記載がある。道祐は、その位牌の出土地点から、前面に廃棄された人名墨書土器群にある『たふゆう』と同一人であると考えるのが自然であり、前述した『たふゆう』と奉加帳との関係から、「惣持寺本尊造立勧進奉加帳」に記された道祐とW950の道祐禅門が同一人と推断できる。即ち、天文四年（1535年）以前に妙金と共に総持寺に寄進した道祐は天文23年（1554年）に没し、白木位牌が役目を終え土師器皿と共に廃棄（あるいは埋納）される。更に墨書土器に名前を記され幾度か追善供養をされたと捉えることができる。その追善供養は更に上層のW905が示す永禄12年（1569年）よりも遡ることは明らかである。また、袴狭遺跡の仏堂（三間堂跡）出土の卒塔婆にも『道祐禅門』は記されており、出土土器の再検討など関連性の検討が更に必要である。

3．おわりに

以上、出土文字資料について若干の考察をおこなった。まず、文字資料の大半を占める墨書土器は、中世後期にいくつかの類例がある追善供養に伴うものである。

墨書土器に記された人名の中の幾つかは、その記載順と名称から、「惣持寺本尊造立勧進奉加帳」に記載され天文四年（1535年）に千手観音菩薩に納められた宮内地区の住人の名と一致する。1535年頃には生存していた宮内地区の住人が、死没し、墨書土器に名を記され、追善供養が行われたことが判明した。追善供養された中には、総持寺に関わる法名がいくつも含まれており、この追善供養自体も総持寺が関わる可能性が高い。『ごほんぞん』は『十一面千手千眼観世音菩薩』を指すものと推定できた。

また、これらの中で、同じ皿に名を連ねる人々は、『たうゆう　めうきん』が奉加帳においても並んで寄進していることから血縁・師弟などの何らかの関係をもつものと理解でき、他の皿に並んで記されている人名についても、少なくとも複数例確認できる事例については両者に血縁・師弟などの関係が存在した可能性が指摘できる。また、翻って奉加帳において記されている名前についても、前後や近接する名と名に関係があり、奉加帳は、ある程度関わりのある人々が続いて記されていることが予想された。

追善供養にも名を連ねる『たうゆう』（道祐）は位牌から没年が天文23年（1554年）であることが分かり、墨書土器群は更に時間的に新しいことが判明した。この位牌・墨書土器群更に上層の永禄12年木簡（1569年）の存在から、極めて短期間に変遷する武家屋敷に実年代を与えることが可能となった。

また、屋敷地Ａについては山名家重臣の屋敷地である可能性、屋敷地Ｂ・Ｃについては出石神社神宮寺　総持寺に関わる宗教行事を行う場所の可能性が浮上した。

以上のことが推測できた。

(1) 水野正好「叡尊忍性の考古学」『叡尊忍性と律宗系集団』 2000年

(2) 愛知県埋蔵文化財センター『清洲城下町遺跡Ⅵ』 1996年

(3) 神奈川県立埋蔵文化財センター『裏八幡西谷遺跡』 1984年

(4) 坂田聡『苗字と名前の歴史』 2006年

第Ⅻ章　まとめ

今回の調査では此隅山城下関連の遺構を中心に、弥生時代から律令期、荘園化（出石神社神領田）を経て行われた水田経営が、大規模な土木工事を伴う城下形成によって居住域となり、近世に至って再び水田へと戻り、最終的には幕末の洪水によって埋没するという、非常に重層的な景観の変遷を追うことができた。そこには人為的な景観への干渉と、洪水堆積・湿地化という自然の営みのせめぎ合いが常に繰り返されたことが如実に現われている。その理由の一つとして調査地が沖積地から扇状地へと変化してゆく境目に遺跡を形成していることが理由としてあげられる。宮内堀脇遺跡の地形から見た形成については青木哲哉氏が詳細な分析を行っている。

３ヵ年の調査において宮内堀脇遺跡は以下の様に変遷している。特に16世紀代の約100年間に焼亡と整地を繰り返し、７期の遺構面を形成している。変遷した遺構面に詳細な時期を与えることが可能となったのは、２本の紀年銘木簡の存在と文献と照合可能な火災層の存在、加えて文献に存在が確かめられる人名墨書土器の存在である。

①弥生時代後期には水田が営まれる。

②古墳時代前期から平安時代前期にかけて水田が営まれる。

③平安時代前期に近辺で律令祭祀が行われる。

④鎌倉時代には、荘園化し、土地区画が明確になる。

⑤中世前期からの土地区画に則る南北方向の堀と、内側に屋敷地が16世紀初頭前後に出現する。

⑥内乱で焼亡する。（16世紀前半）

⑦堀を屈曲させ、竹を植えた土塁を造り屋敷地を整備する。（16世紀前半）

⑧堀を２重にし、土塁を巡らせる。（16世紀中頃）

⑨時期が新しくなるに従い、整地の範囲が拡大し、内側の堀を埋め、屋敷地の範囲が拡大する。

⑩屋敷地が拡大を始めるころ、堀のコーナー付近において宮内地区の住人の追善供養が始まる。

⑪堀の外側にも整地（建物）が行われ建物が営まれる。（16世紀後半）

⑫永禄12年に合戦で焼亡する。

⑬火事片付けの後、屋敷地内の建物数は縮小する。

⑭天正８年に合戦で再び焼亡する。

⑮以下水田化する。

⑯洪水堆積の後、畠となる。

⑰幕末の洪水で埋没する。

今回報告したなかで、その大半を占めるものは此隅山城城下に展開する武家屋敷跡と隣接する宗教行事が行われた地点の調査である。

95年度の調査区は山名家の上級家臣の屋敷跡である。畳を使用する礎石建物を持ち、出土遺物には多量の土師器皿類・折敷・小かまぼこ板など非日常の食事『宴』に伴う食事具・容器が多く見られ、その他、茶の湯にともなう土器・木器類が多量に出土している。また、高級武具の出土もある。

日常生活に使用する調理具では16世紀後半に入って越前焼擂鉢の使用が増加し、日本海側の活発な流通を示している。

96･97年度の調査区は総持寺と密接に関わる宗教行事が行われる地点である。天文年間から永禄年間にかけて、屋敷地を区切る堀において活発に追善供養を行っている。その対象の多くは僧であり、一部には上級家臣縁の僧を含むが、出家した上層の百姓が多く含まれている可能性がある。

宮内地区には山名宗家の拠点と天日槍伝説をもつ但馬一之宮－出石神社があり、宮内堀脇遺跡は期せずして、その長い調査区をもって両者の勢力圏を縦断する調査を行ってきた。97年度以降の調査においても整地面・建物跡が検出され、湿地上に点々と居住区が広がることが確認されている。

各年度の調査結果から勘案すると、それはおそらく、堀を越えて出石川側へ整地面が拡大してゆく中世Ⅴ面（中世３期―16世紀後半）以降のことであろう。それ以前には南北を通る堀（あるいは用水路）によって扇状地側と沖積地側は分けられていたものと考えられる。

99年度の調査の結果から、堀が東側へ曲がる部分が検出されている。その結果から16世紀前半には、南北２町（225m前後　北端は入佐川）・東西約２町前後（東端は山裾まで）の２町四方の堀・入佐川・此隅山によって囲まれた空間に『御屋敷』を含む武家屋敷群が存在することが推定できた。

２町方格の南側では遺構は希薄となり、16世紀後半を中心に東西溝が検出される。更に南側には小規模な柱穴群が存在している。

99年度の調査では柱穴群の南側から、洪水砂によって埋没した谷部の上下より、中世の遺構・遺物を検出している。周囲の小字名は『シイ市場』（江戸時代）あるいは『深市場』（明治時代）となっており、市場の存在が推定されている。市場は河原に開かれることが多い。網野善彦の論考を参考にすれば、出石神社と此隅山城城下の間にある河原（東側の山塊から流れ出て扇状地を形成した旧河道）が造りだす自然の境界部分（無縁の地）に『市』が立っていた可能性は高いだろう。検出された柱穴群が市の小屋であった可能性を考えたい。

また、丸山氏の分析・論考に拠れば、近辺には出石川沿いに２か所の字犬馬場が認められ（鳥居字犬馬場・伊豆字犬馬場）、犬追う物の興行が行われていた可能性が高い。

宮内地区には権力の中心である山名家（の此隅山城）と信仰の中心である出石神社が存在しており、その間には、出石神社の神宮寺が城下の外れにおいて追善供養を行い、河原には市が立つ。更に外縁にある広い出石川の河原では軍事訓練を兼ねた犬追う物の興行が活発に行われていた。このような景観が復元できそうである。

少しずつ明らかになってきたが、此隅山城城下・武家屋敷跡の調査は、まだ、その縁辺を舐めた程度に等しい。此隅山城下を解明していくには山名氏の居館『御屋敷』あるいは扇状地の上に点在する寺院跡や武家屋敷跡の実態を明らかにしていくことが欠かせない。また、袴狭地区の山裾、あるいは坪井地区の山裾から湿地上においても同時期の遺構は確認されており、沖積地では、きめ細やかにそれらの情報をすくいあげてゆく必要がある。

第32表　出土土器・陶磁器観察表

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
						口径	器高	底径			
1	Ⅲ	95－1面	上層シルト (灰色粗砂まじり)	土師器	Ⅲ	4.8	1.2	—	平底。体部は緩やかに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部～体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。底部外面　不調整。指頭圧痕が残る。	焼成　良好。色調　浅黄橙色。ＢⅠ類。
2	Ⅵ	95－1面まで	灰色レキまじりシルト	土師器	Ⅲ	8.4	2.0	—	非ロクロ成形。器形はかなり歪む。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が僅かに残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　ややあまい。色調　浅黄色。Aa2Ⅱ類。
3	ⅣD	95－1面上層	灰色粗砂まじり極細砂	土師器	Ⅲ	8.6	(2.1)	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部外面に板状工具痕あり。	口縁部内外面に煤附着。焼成　ややあまい。色調　にぶい黄橙色。Aa2Ⅱ類。
4	ⅣB	95－1面上層	灰色粗砂まじりシルト	土師器	Ⅲ	8.6	(2.2)	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が僅かに残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成　ややあまい。色調　にぶい黄橙色。Ab1Ⅱ類。
5	ⅦA	95－1面上層	汚れた黄灰色シルト	土師器	Ⅲ	8.9	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に沈線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が僅かに残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅱ類。
6	ⅨD	95－1面上層	汚れた黄灰色シルト	土師器	Ⅲ	(9.2)	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が僅かに残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。体部内面に布目圧痕あり。	口縁部内外面に煤附着。焼成　ややあまい。色調　浅黄橙色。
7	ⅦC	95－1面上層	灰色粗砂まじりシルト	土師器	Ⅲ	10.0	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に沈線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が僅かに残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。2次焼成を受けたためか、器面の剥離が著しい。色調　にぶい黄褐色。Ab1Ⅲ類
8	ⅢA	95－1面上層	灰色粗砂まじりシルト	土師器	Ⅲ	(11.7)	(2.1)	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が僅かに残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Aa1Ⅳ類。
9	Ⅰ	—	95－1面上層シルト	土師器	Ⅲ	12.2	2.6	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が僅かに残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄橙色。Aa1Ⅳ類。
10	ⅢA	95－1面上層	灰色粗砂まじりシルト	土師器	Ⅲ	13.8	2.7	—	非ロクロ成形。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が僅かに残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Ab1Ⅴ類。
11	ⅦA	95－1面上層	灰色粗砂混じりシルト	瓦質土器	擂鉢	(13.9)	8.6	(8.9)	平底。体部は大きく内彎。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。体部外面中位に指頭圧痕が残る。底部外面　板ナデ調整。体部内面　5条1単位の擂目施文。	色調　暗灰黄色。Ea2類
12	ⅨC	95－1面上層	汚れた黄灰色シルト	無釉陶器	擂鉢	(31.7)	(6.1)	—	体部は斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。口縁部内面に凹線1条。	内外面とも回転ナデ調整。体部内面　櫛描きで擂目施文。	色調　橙色。越前焼。B2類。16世紀代。
13	ⅨC	95－1面上層	汚れた黄灰色シルト	無釉陶器	擂鉢	(33.6)	(6.2)	—	体部は斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。口縁部内面に凹線1条。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部～体部内面に10条1単位の擂目施文。	色調　にぶい赤褐色。越前焼。B2類。16世紀代。
14	ⅦD	95－1面上層	汚れた黄灰色シルト (下半)	無釉陶器	擂鉢	(35.6)	(5.6)	—	体部は斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。口縁部内面に凹線1条。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部～体部内面に10条1単位の擂目施文。	色調　にぶい橙色。越前焼。B2類。16世紀代。
15	Ⅷ	95－1面上層	汚れた黄灰色シルト 灰色粗砂まじりシルト	施釉陶器	Ⅲ	(5.8)	1.5	4.0	底部は碁笥底状に浅く削りだす。 体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。	内外面とも灰釉施釉。くすんだ浅黄色に発色。	瀬戸・美濃系。ⅠB類。大窯Ⅲ期。16世紀代。
16	ⅣD	95－1面上層	灰色粗砂まじり極細砂	施釉陶器	埦	—	(2.2)	(2.7)	底部の器壁は厚い。高台は浅く削りだす輪高台。	内面　鉄釉施釉。暗褐色に発色。外面　露胎。	瀬戸・美濃系小天目茶碗。
17	Ⅰ－Ⅱ	95－1面上層	汚れた黄灰色シルト	施釉陶器	埦	(11.6)	6.0	(4.0)	高台は内反高台。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は屈曲し、僅かに外方にひらく。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。内外面とも鉄釉施釉。灰被りのため、灰褐色に発色。高台脇以下露胎。露胎部は暗赤褐色に発色。	瀬戸・美濃系天目茶碗。大窯Ⅱ期。16世紀代。
18	ⅨD	95－1面上層	汚れた黄灰色シルト	施釉陶器	壺	—	(2.5)	(12.0)	平底。高台は比較的幅が広く低い。体部は直線的に斜め上方に延びる。体部外面に縦方向に小さい凸帯を貼り付け。	内外面とも灰釉施釉。淡緑灰色に発色。高台脇以下は露胎。	華南産?。
19	ⅦA	95－1面上層	汚れた黄灰色シルト	青磁	碗	(11.4)	(4.2)	—	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	体部外面に剣頭と身の一致しない蓮弁文を線描きで施文。内外面とも施釉。淡暗緑灰色に発色。	龍泉窯系青磁細蓮弁文碗。ⅠB2類。16世紀代。
20	ⅤB	95－1面上層	汚れた黄灰色シルト	青磁	輪花Ⅲ	—	—	—	口縁部は外方にひらく。端部に刻みを入れて輪花状に整形する。	口縁部内外面　青磁釉施釉。暗緑灰色に発色。	龍泉窯系青磁。
21	ⅣD	95－1面上層	汚れた黄灰色シルト	白磁	菊花Ⅲ	(9.8)	(2.0)	—	型作り成形。体部は内彎気味に緩やかに斜め上方に延びる。内外面とも型押しで菊花状に成形。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。	森田分類　E－4群。16世紀代。
22	Ⅰ－Ⅱ	95－1面上層	汚れた黄灰色シルト	白磁	Ⅲ	(10.9)	2.8	(6.3)	高台は比較的細く、低い。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。高台畳付の釉かきとり。畳付に砂附着。	華南産白磁。森田分類　E－2群。16世紀代。
23	Ⅰ－Ⅱ	95－1面上層	汚れた黄灰色シルト	白磁	Ⅲ	(12.8)	3.2	(7.1)	高台は断面三角形状で低い。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は若干外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。高台畳付の釉かきとり。砂附着。	華南産白磁。森田分類　E－2群。16世紀代。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
24	Ⅶ	—	黄色中砂	白磁	Ⅲ	(14.2)	2.6	(8.7)	高台は断面三角形状で畳付は尖る。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁部は若干外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。高台畳付の釉かきとり。	華南産白磁。森田分類　E－2群。16世紀代。
25	ⅦA	95－1面上層	汚れた黄灰色シルト	白磁	Ⅲ	(17.8)	(2.1)	—	器壁は比較的薄い。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁部は大きく外方にひらく。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。	華南産白磁。森田分類　E－2群。16世紀代。
26	Ⅷ	95－1面上層	汚れた黄灰色シルト	白磁	小碗	—	(1.45)	(9.85)	底部の器壁は比較的厚い。高台は断面三角形状。	内外面とも透明釉施釉。白色に発色。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。高台畳付の釉かきとり。	器面に虫喰いが目立つ。華南産白磁。小碗。16世紀代。
27	ⅥA ⅥD	95－1面上層	シルト	白磁	小碗	(7.0)	(2.7)	—	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。	華南産白磁。小碗A類。
28	Ⅷ	黄砂中砂	汚れた黄灰色シルト	青花磁器	Ⅲ	—	(0.9)	(7.8)	平底。高台は断面台形状で低い。	内面　呉須　草花文。外面　界線1条。	明青花磁器。16世紀代。
29	ⅨD	95－1面上層	汚れた黄灰色シルト	青花磁器	碗	—	(1.9)	(2.3)	碁笥底。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	底部内面　界線2条・牡丹文?。底部外面　蛇の目状に釉ハギ。	明青花磁器。16世紀代。
30	Ⅷ	95－1面上層	汚れた黄灰色シルト	青花磁器	Ⅲ	(16.4)	(2.4)	—	器壁は薄い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は緩やかに外方にひらく。	内面　窓絵で草花文施文。外面　丸文など。	芙蓉手皿。明末～清初。17世紀前半。
31	ⅨD	95－1面上層	汚れた黄灰色シルト	青花磁器	Ⅲ	(13.9)	(3.6)	(5.3)	碁笥底風に成形。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内面　草花文施文。外面　無文。色調　黒味がかった灰白色。	粗製の明青花磁器。ⅡA類。
32	ⅤB	95－1面上層	汚れた黄灰色シルト	青花磁器	碗	—	(2.3)	(4.3)	高台は比較的細く高い。体部は内彎気味に斜め上方に立ち上がる。	底部外面　界線1条・「長□□□」銘。底部内面　草花文。	明青花磁器。A類。饅頭心碗。16世紀代。
33	ⅣA	95－P20	—	土師器	Ⅲ	8.5	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面に煤附着。焼成　ややあまい。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅱ類。
34	ⅣA	95－P19	—	土師器	Ⅲ	9.5	2.2	—	非ロクロ成形。平底。やや上げ底気味。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	器面の摩滅が著しい。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰色。京都系。Aa2Ⅲ類。
35	ⅤD ⅣB	SD51001 95－2面まで	— —	青磁	碗	—	(3.4)	(5.9)	平底。高台は逆台形状で低い。体部は内彎気味に斜め上方に立ち上がる。	内外面とも青磁釉施釉。外面の高台脇以下露胎。底部内面に砂目跡4箇所。	朝鮮製青磁か?
36	Ⅵ	SD51005	旧流路1	土師器	Ⅲ	(6.5)	1.5	—	非ロクロ成形。平底。やや上げ底気味。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が僅かに残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成　ややあまい。色調にぶい黄色。BⅠ類。
37	ⅥD	SD51005	—	土師器	Ⅲ	9.2	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が僅かに残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成　ややあまい。色調　浅黄色。Ab1Ⅱ類。
38	Ⅵ	SD51005 流路①内	—	土師器	Ⅲ	8.6	2.3	—	非ロクロ成形。器高はやや高い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が僅かに残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成　ややあまい。色調　灰黄色。
39	ⅥD	SD51005	—	土師器	Ⅲ	9.3	1.9	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が僅かに残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成　ややあまい。色調　にぶい黄色。Ab1Ⅲ類。
40	Ⅸ	流路① SD51005	—	白磁	Ⅲ	—	(1.7)	—	器壁は比較的薄い。型作り成形。型押しで花弁状に成形。	内外面とも透明釉施釉。青味を帯びた白色に発色。	器面に細かい貫入。景徳鎮窯産の青白磁か? 12～13世紀代。
41	Ⅵ	流路①内	—	白磁	杯	—	(1.6)	(6.5)	高台は断面三角形状で低い。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。高台畳付の釉かきとり。	華南産白磁。16世紀代。
42	Ⅵ	流路①	清掃時	青花磁器	碗	—	(2.6)	(5.3)	高台は断面逆台形状。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	外面　呉須　芭蕉文。内面　呉須　界線2条・草花文。	器面に虫喰い。明青花磁器。B類。蓮子碗。16世紀代。
43	ⅤB	95－1面	—	土師器	Ⅲ	8.6	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が僅かに残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部に若干煤附着。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa2Ⅱ類。
44	ⅥB	—	灰色粗砂まじりシルト	土師器	Ⅲ	8.8	2.0	—	非ロクロ成形。器壁は比較的厚い。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が僅かに残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部端部に煤若干附着。焼成　良好。色調　浅黄色。Aa2Ⅱ類。
45	ⅤA	95－1面上層	火事かたづけ土	土師器	Ⅲ	(9.9)	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が僅かに残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	器面の剥離が著しい。焼成　ややあまい。色調　浅黄色。Aa2Ⅱ類。
46	Ⅳ	—	第1整地面上 (暗灰色シルト)	土師器	Ⅲ	12.4	2.6	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が僅かに残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　ややあまい。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅳ類。
47	ⅢD	—	暗灰色シルト (堀内カ)	土師器	Ⅲ	12.5	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が僅かに残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
						口径	器高	底径			
48	Ⅲ	95－1面	上層シルト	瓦質土器	植形容器	(25.9)	(7.1)	—	体部はほぼ直立。口縁部はやや内傾。	内外面とも回転ナデ調整。	蓋付きの火消し壷か?。Ⅲ類。色調　灰色。
49	ⅣD	95－1面まで (95－2火事かたづけ含む)	灰色粗砂混じりシルト 極細砂	瓦質土器	擂鉢	(24.0)	13.5	(12.0)	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。口縁部の1ヶ所を捻って片口を作り出す。	口縁部内外面　回転ナデ調整。体部外面　指おさえの後、回転ナデ調整。体部内面　5条1単位の擂目施文。底部内面　6条1単位の擂目を3方から交差させる形で施文。底部外面　不調整。	色調　灰～オリーブ黒色。Aa1類。
50	ⅥB	95－1面	上層 灰色粗砂まじりシルト	無釉陶器	擂鉢	(38.2)	(11.7)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は上面に水平に端面をもつ。口縁部内面に凹部をもつ。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。体部内面　11条1単位の擂目を櫛描きで施文。	色調　橙色。越前焼。B3類。16世紀代。
51	ⅧD	95－1面直上 まで	濁灰色シルト (灰白色粒まじり)	施釉陶器	埦	—	(1.9)	(4.8)	高台は幅が広く低い。	内外面とも鉄釉施釉。褐灰色に発色。底部内面に砂目跡2ヶ所。	高台畳付に砂附着。朝鮮陶器か?
52	Ⅷ	95－1面直上	暗灰シルト	施釉陶器	水滴	—	(3.0)	(2.7)	平底。体部大きく内彎。体部中位に最大径をもつ。体部外面の中位に注口の貼り付け痕が見られる。頸部より上は欠失。	内外面とも回転ナデ調整。底部外面　不調整。糸切痕が残る。体部外面上半部に印花で割菱文を4箇所施文する。外面は全面に灰釉施釉。暗緑色に発色。内面　露胎。	底部穿孔1ヶ所。頸部もその際、打ち欠いたものか。古瀬戸中期。14世紀代か?
53	ⅣA	95－1面まで	灰色粗砂まじり極細砂	施釉陶器	天目茶碗	(9.0)	(3.7)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は屈曲して、僅かに外方にひらく。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。内外面とも鉄釉施釉。暗茶褐色に発色。	器面は2次的に火を受ける。瀬戸・美濃系。大窯Ⅲ期。16世紀代。
54	Ⅲ－Ⅵ	95－1面まで	—	施釉陶器	埦	(10.1)	(3.3)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は屈曲して、僅かに外方にひらく。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。内外面とも鉄釉施釉。暗茶褐色に発色。	建窯産天目茶碗。
55	Ⅲ	95－1面	上層シルト (灰色粗砂まじり)	施釉陶器	埦	(11.7)	(4.2)	—	体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は屈曲して、僅かに外方にひらく。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。内外面とも鉄釉施釉。黒褐色に発色。	胎土から美濃系天目茶碗。大窯期。16世紀代。
56	Ⅰ ⅣD	95－2整地層より 下 95－1面	上層シルト 江戸以降の溝か?	施釉陶器	埦	(18.2)	5.4	(10.0)	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外反。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。内外面とも鉄釉施釉。禾目状に発色。外面の体部下半以下は露胎。	建窯産天目茶碗。
57	ⅣD	95－1面まで (第2火事かたづけ含む)	灰色粗砂まじり極細砂	施釉陶器	小壺	(6.0)	(3.3)	(8.2)	体部は内彎。口縁部は外傾。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも灰釉施釉。淡緑灰色に発色。	茶入れとして使用か?　瀬戸・美濃系。古瀬戸中期。14世紀代?
58	—	95－1整地層 直上	北壁	白磁	蓋	—	1.2	2.4	形態は山笠形。上面に扁平なつまみを貼り付ける。	外面　透明釉施釉。青味を帯びた白色に発色。内面　露胎。	華南産白磁。小壷の蓋。
59	ⅥA ⅥD	95－1面	上層シルト	青磁	香炉	(8.0)	(2.5)	—	体部は直立。口縁端部を内側に水平に引き出す。	内外面とも青磁釉施釉。暗黄緑色に発色。	龍泉窯系青磁。
60	ⅣA	95－1面まで	灰色粗砂まじり極細砂	白磁	菊花皿	(11.7)	(2.0)	—	型作り成形。型押しで内外面とも菊花状に成形。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。	華南産白磁。森田分類　E－4群。
61	Ⅵ ⅨD	95－1面整地 まで 95－2・95－3面	サブトレ際	白磁	皿	(11.0)	(2.2)	—	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。器面に虫喰い。	華南産白磁。森田分類皿E－2群。16世紀代。
62	ⅥA	95－1面	上層シルト	白磁	皿	—	(1.5)	(6.6)	高台は断面三角形状で低い。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。高台畳付の釉かきとり。畳付に砂附着。	華南産白磁。森田分類皿E－2群。16世紀代。
63	ⅤB	95－1面まで	灰色粗砂まじり極細砂	白磁	皿	—	(1.5)	(7.1)	平底。高台は断面三角形状で低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。高台畳付の釉かきとり。畳付及び高台裏に砂附着。	華南産白磁。16世紀代。
64	ⅢA ⅢB	95－1面	上層シルト	白磁	碗	—	(1.6)	(7.7)	平底。高台は断面台形状で低い。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。高台裏に砂が大量に附着。	華南産白磁。
65	Ⅳ	95－1面まで	灰色シルト中	白磁	皿	(12.8)	2.6	(6.9)	器壁は比較的薄い。高台は幅が広く低い。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は外方にひらく。	口縁部～体部上半　内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。体部下半以下　内外面とも露胎。	朝鮮製か?
66	Ⅵ	95－1面整地 まで	(炭まじり暗灰シルト) SH直上	白磁	杯	—	(3.2)	(2.9)	高台は断面台形状で低い。平底。体部は若干外反気味に斜め上方に延びる。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。高台畳付の釉かきとり。	華南産白磁?
67	ⅣA Ⅲ	95－1面まで 95－1面	灰色粗砂まじり極細砂 1a層	青花磁器	碗	—	(5.0)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は大きく外方にひらく。	外面　界線2条・細かい草花文。内面　界線2条。	明青花磁器。Ⅱ類。16世紀代。
68	ⅣA	95－1面まで	灰色粗砂まじり極細砂	青花磁器	杯	—	(1.8)	2.6	高台は比較的細く高い。底部の器壁は比較的厚い。体部は斜め上方に延びる。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。高台裏　呉須　崩れた文字で「□□□年製」銘。	明青花磁器。
69	Ⅲ	95－1面	黒灰色シルト直上	青花磁器	碗	(13.4)	4.8	(4.9)	高台は断面台形状。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	器面は灰被りが著しく、白濁する。釉切れも著しい。外面　淡い呉須で界線2条・細かい草花文・界線2条。内面　界線1・2条。いずれも不鮮明。	粗製の明青花磁器。ⅠC類。16世紀代。
70	ⅣB ⅦC ⅦA	95－1面直上 95－2面 SD52001 西サブトレ 95－3～4面	灰色粗砂まじりシルト 黒色腐植土層	瓦質土器	桶形容器	(19.8)	(9.5)	—	体部はほぼ直立。口縁端部は上面に水平に端面をもつ。体部外面　断面三角形状の凸帯1条。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部外面　縦方向のミガキ調整。体部内面　指おさえ。指頭圧痕が残る。	色調　暗灰色。Ⅰ類。
71	ⅣD	SD52002上半・ 主	—	土師器	耳皿	大6.2 小1.0	2.0	4.2	非ロクロ成形。体部～口縁部を2ヶ所を内側に折り曲げて、耳皿を成形。	口縁部～体部内外面　ヨコナデ調整。底部外面　不調整。	色調　にぶい黄橙色。
72	ⅣA	SD52002北端 95－3面対応	焼土まじりシルト	土師器	皿	8.1	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成　良好。色調にぶい黄橙色。Aa2Ⅱ類。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
73	ⅣD	SD52002下半	—	土師器	皿	8.5	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部に煤附着。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。Aa1Ⅱ類。
74	ⅣD	SD52002下半	—	土師器	皿	8.4	2.0	—	非ロクロ成形。体部と底部の界は比較的不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Aa1Ⅱ類。
75	ⅣD	SD52002	—	土師器	皿	8.5	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内外面とも全面に煤附着。焼成　良好。色調　灰オリーブ色。Aa1Ⅱ類。
76	ⅣD	SD52002	—	土師器	皿	8.5	2.4	—	非ロクロ成形。器高は比較的高い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が僅かに残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成　良好。色調　灰黄色。Aa2Ⅱ類。
77	ⅣA	SD52002北端	焼土まじりシルト (95－3面対応)	土師器	皿	8.6	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部に煤附着。焼成　良好。色調　灰黄色。Aa2Ⅱ類。
78	ⅣD	SD52002上半		土師器	皿	8.6	2.1	—	非ロクロ成形。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Aa1Ⅱ類。
79	ⅣD	SD52002	—	土師器	皿	8.8	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が僅かに残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅱ類。
80	ⅣD	SD52002	—	土師器	皿	8.8	2.2	—	非ロクロ成形。平底。やや上げ底気味。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に若干煤附着。焼成　良好。色調　灰黄色。京都系。Ab1Ⅱ類。
81	ⅣD	SD52002	—	土師器	皿	9.9	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が僅かに残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅲ類。
82	ⅣD	SD52002	—	土師器	皿	12.1	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　多方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。
83	ⅣD	SD52002上半		土師器	皿	(12.3)	2.4	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内外面とも煤が多量に附着。焼成良好。色調　暗灰色。京都系。Ab1Ⅳ類。
84	ⅣD	SD52002下半	—	土師器	皿	12.4	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Aa1Ⅳ類。
85	ⅣD	SD52002下半	—	土師器	皿	12.4	2.7	—	非ロクロ成形。体部と底部の界は比較的不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。内面全体に煤が多量に附着。調整は観察出来ず。	焼成　良好。色調　暗灰色。京都系。Aa1Ⅳ類。
86	ⅣA	SD52002北端 95－3面対応	焼土まじりシルト	土師器	皿	(12.5)	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Ab2Ⅳ類。
87	ⅣD	SD52002	—	土師器	皿	12.6	2.7	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　多方向のナデ調整。底部内面に微かに円圏が残る。	焼成　良好。色調　灰黄褐色。京都系。Aa2Ⅳ類。
88	ⅣD	SD52002	—	土師器	皿	12.7	2.6	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　多方向のナデ調整。底部内面に円圏(沈泥)が残る。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Aa1Ⅳ類。
89	ⅣD	SD52002下半	—	土師器	皿	14.4	2.8	—	非ロクロ成形。体部と底部の界は比較的不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。Aa1Ⅳ類。
90	ⅣC	SD52002	—	無釉陶器	擂鉢	(36.3)	12.5	17.8	平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。口縁部内面に凹線1条。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。体部外面下位　回転ヘラ削り。体部内面　10条1単位の櫛描きの擂目を施文。擂目は一部交差する。底部外面　不調整。	焼成　ややあまい。色調　灰褐色。越前焼。B2類。16世紀代。
91	ⅣA	SD52002北端	焼土まじりシルト (95－3面対応)	無釉陶器	徳利	(3.9)	(11.1)	(11.6)	体部は内彎。頸部はほぼ直立。口縁部は外方にひらく。口縁端部は尖り気味。	内外面とも回転ナデ調整。外面　灰被り。	焼成堅緻。色調　灰赤褐色。備前焼Ⅴ期　16世紀代。
92	ⅣD	SD52002	上半	白磁	菊花皿	(10.9)	(1.8)	—	型作り成形。型押しで内外面とも菊花状に成形。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。	華南産白磁。森田分類　皿E－4群。16世紀代。
93	ⅣA	SD52002北端	焼土まじりシルト (95－3面対応)	白磁	皿	(11.6)	(2.4)	—	器壁は比較的薄い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも透明釉施釉。灰被りのためか、細かい縞状に灰色が混じった発色。	華南産白磁。森田分類皿E－2群。16世紀代。
94	ⅣA	SD52002北端	焼土まじりシルト (95－3面対応)	白磁	皿	14.1	3.6	7.8	平底。高台は断面台形状で低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。畳付の釉かきとり。砂付着。	華南産白磁。森田分類E－2群。16世紀代。
95	ⅥD	SD52002	腐植土より上の埋土	白磁	皿	—	(1.2)	(9.7)	平底。高台は断面台形状で低い。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。畳付の釉かきとり。	華南産白磁。
96	ⅣB	SD52002上半主	—	白磁	碗	(10.8)	(5.4)	—	器壁は比較的薄い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。	華南産白磁。碗A類。
97	ⅣD	SD52002下半	—	青花磁器	碗	(10.7)	(3.7)	—	器壁は非常に薄い。口縁端部は尖り気味。	外面　呉須　界線2条・牡丹唐草文・界線2条。内面　界線2・2条。底部内面　牡丹文。	明青花磁器。16世紀後半～17世紀初頭。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
98	ⅣB	SD52003	—	土師器	皿	8.7	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成良好。色調　灰黄色。京都系。Ab2Ⅱ類。
99	ⅣB	SD52003下層	95－3面対応	土師器	皿	8.7	1.9	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は器壁が厚い。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好　色調　にぶい黄橙色。Ab1Ⅱ類。
100	ⅣC	95－2面 (SD52003)	95－3面対応	土師器	皿	8.9	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は比較的明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面の口縁部から底部にかけて煤附着。焼成良好。色調　灰黄色。京都系。Ab1Ⅱ類。
101	ⅣC	SD52003	—	土師器	皿	9.0	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。内面に布目跡か?	口縁端部に煤附着。底部外面に爪形あり。焼成　良好　色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅱ類。
102	ⅣC	SD52003溝底	95－3面対応	土師器	皿	(12.7)	2.0	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。やや上げ底気味。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　多方向のナデ調整。底部内面に円圏が微かに残る。	焼成　良好。色調　灰黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。
103	ⅣB	SD52003	—	土師器	皿	(12.8)	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部外面に浅い段をもつ。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　黄灰色。京都系。Ab1Ⅳ類。
104	ⅣB	SD52003	—	土師器	皿	13.9	2.9	—	非ロクロ成形。器形は大きく歪む。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成良好。色調　にぶい黄色。京都系。Ab2Ⅴ類。
105	Ⅳ	SD52003	樹木下	瓦質土器	火舎香炉	(17.6)	9.3	(14.6)	断面逆台形の比較的高い高台を貼り付け。平底。体部は大きく内彎。口縁端部は丸みをもつ。体部外面中位に把手を2ヶ所貼り付け。	口縁部～体部　内外面とも密にヘラミガキ調整。底部内面　不定方向のヘラミガキ調整。底部外面　不定方向のナデ調整。	色調　灰～暗灰色。Ⅱ類。
106	ⅣB	SD52003	—	瓦質土器	火舎香炉	(17.0)	9.5	(14.6)	断面逆台形の比較的高い高台を貼り付け。平底。体部は大きく内彎。口縁端部は丸みをもつ。体部外面中位に把手を2ヶ所貼り付け。	口縁部～体部　内外面とも密にヘラミガキ調整。底部内面　2方向のヘラミガキ調整。底部外面　ハケ目調整。	器面は平滑。色調　暗灰色。Ⅱ類。
107	ⅣC	SD52003	—	瓦質土器	擂鉢	(12.7)	(5.8)	—	体部は内彎。口縁端部は丸みをもつ。口縁部の1ヶ所を捻って、片口を作り出す。	口縁部内外面　回転ナデ調整。体部外面　指おさえの後、回転ナデ調整。体部内面　5条1単位の擂目施文。	色調　暗灰色。椀形の小型の擂鉢。Eb2類。
108	ⅦD	SD52003	—	施釉陶器	香炉	(6.8)	(2.9)	—	体部は直立。部分的に節状に屈曲。口縁端部は内側に水平に引き出す。	内外面とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色。器面に細かい貫入。	瀬戸・美濃系。大窯Ⅲ期。16世紀後半代。
109	ⅣC	SD52003西	上半	青花磁器	碗	—	(3.8)	(4.2)	底部の器壁は厚い。高台は比較的細く高い。体部は内彎気味に斜め上方に立ち上がる。	外面　呉須　芭蕉文。底部内面　呉須　草花文。器面に虫喰い。	明青花磁器。B類。蓮子碗。16世紀代。
110	ⅣD	SD52004	—	白磁	碗	—	(2.0)	(5.2)	底部の器壁は比較的厚い。高台は断面台形状で低い。	内外面とも透明釉施釉。明オリーブ灰色に発色。高台脇以下は露胎。	人為的に打ち欠いており、面子の未製品。原体は華南産白磁か?
111	ⅣC	SD52005	—	土師器	皿	(8.5)	2.1	—	非ロクロ成形。器壁は比較的厚い。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部外面に板状工具痕。	口縁部に煤附着。焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Aa1Ⅱ類。
112	ⅣD	SD52006	—	土師器	皿	8.3	1.9	—	非ロクロ成形。器形は若干歪む。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成良好。色調　浅黄色。京都系。Aa2Ⅱ類。
113	ⅣD	SD52006	—	土師器	皿	(9.6)	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　摩滅のため調整不明。	色調　にぶい橙色。京都系。Aa2Ⅲ類。
114	ⅣD	SD52006	—	土師器	皿	(12.5)	2.4	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	色調　にぶい橙色。京都系。Aa2Ⅳ類。
115	ⅥA	95－2面 SD52007	—	土師器	皿	9.1	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	器面は著しく摩滅する。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　淡黄色。京都系。Aa2Ⅱ類。
116	ⅣA	SD52007	埋土は焼土まじり腐植土	施釉陶器	四耳壺?	長 (9.8)	巾 (5.0)	厚1.1	口縁部は内傾。体部外面に横耳を貼り付け。体部は僅かに内彎。	内外面とも鉄釉施釉。暗茶褐色に発色。	華南産の鉄釉四耳壺片か? 16世紀代。
117	Ⅷ	95－3面まで SD52008大溝	暗灰腐植土	土師器	皿	(4.9)	1.6	—	非ロクロ成形。平底。体部は内彎してほぼ直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部外面　不調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。BⅠ類。
118	ⅦD	SD52008	—	土師器	皿	8.1	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部に煤附着。焼成　良好　色調　にぶい黄橙色。京都系。Aa2Ⅱ類。
119	ⅦA	SD52008北溝	95－3面対応	土師器	皿	8.2	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。体部内面に布目圧痕。	焼成　良好。色調　黄灰色。Ab1Ⅱ類。
120	—	SD52008	—	土師器	皿	8.2	2.1	—	器形はかなり歪む。非ロクロ成形。底部と体部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部外面　板状工具痕。	焼成良好。色調　浅黄色。京都系。Aa2Ⅱ類。
121	—	SD52008	—	土師器	皿	8.3	2.2	—	非ロクロ成形。底部と体部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。Aa1Ⅱ類。
122	—	—	—	土師器	皿	8.3	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰白色。Aa2Ⅱ類。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
123	ⅦA	SD52008	—	土師器	Ⅲ	8.4	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。Aa1Ⅱ類。
124	—	—	—	土師器	Ⅲ	8.4	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内面に煤若干附着。焼成　良好。色調　黄褐色。Aa1Ⅱ類。
125	Ⅷ	SD52008	—	土師器	Ⅲ	(8.4)	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄褐色。Aa1Ⅱ類。
126	ⅦA	SD52008下層	95－3面対応	土師器	Ⅲ	8.4	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面の1／3に煤附着。焼成　良好。色調　灰黄褐色。Aa1Ⅱ類。
127	ⅦD	SD52008－a	茶色フショク土	土師器	Ⅲ	(8.4)	1.5	—	非ロクロ成形。器壁は比較的厚い。平底。体部は短く直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	器面は摩滅が著しい。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。体部内面　ナデ調整。	焼成　あまい。色調　にぶい黄橙色。
128	Ⅷ	SD52008大溝直上	95－2面S層より下	土師器	Ⅲ	8.5	2.2	—	器形はかなり歪む。非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。外面の体部～底部　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。	焼成　良好。色調　浅黄色。Aa1Ⅱ類。
129	—	SD52008	—	土師器	Ⅲ	8.5	2.2	—	非ロクロ成形。器壁は比較的厚い。平底。体部と底部の界　比較的明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。体部内面に布目跡?　底部内面　一方向のナデ調整。	焼成良好。色調　浅黄色。Aa2Ⅱ類。
130	Ⅷ	95－3面まで SD52008大溝内	—	土師器	Ⅲ	8.2	1.9	—	非ロクロ成形。丸底。底部と体部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Aa1Ⅱ類。
131	ⅥA	SD52008上層	—	土師器	Ⅲ	8.7	2.0	—	非ロクロ成形。器形は歪む。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成良好。色調　浅黄色。
132	Ⅷ	SD52008南溝	—	土師器	Ⅲ	8.8	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。口縁部内面に凹部をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　摩滅のため調整不明。底部外面　板状工具痕。	口縁部内外面　煤附着。焼成良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅱ類。
133	ⅦA	SD52008下層	95－3面対応	土師器	Ⅲ	(8.8)	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部に煤附着。焼成　ややあまい。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅱ類。
134	ⅥA	SD52008	—	土師器	Ⅲ	8.8	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部外面に板目状圧痕。	焼成良好。色調　浅黄色。京都系。Aa1Ⅱ類。
135	ⅦA	SD52008	—	土師器	Ⅲ	9.2	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	体部内面～体部外面にかけて煤附着。焼成良好。色調　暗灰色。京都系。Ab1Ⅱ類。
136	—	SD52008	—	土師器	Ⅲ	9.7	2.5	—	器形は歪む。非ロクロ成形。平底。底部と体部の界は比較的明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部外面　板状工具痕。	焼成良好。色調　浅黄色。京都系。Aa2Ⅲ類。
137	—	SD52008	—	土師器	Ⅲ	10.0	2.4	—	非ロクロ成形。平底。底部と体部の界は明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部に煤附着。焼成良好。色調　灰黄色。京都系。Aa1Ⅲ類。
138	Ⅷ	SD52008	—	土師器	Ⅲ	(10.0)	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は比較的明瞭。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅲ類。
139	Ⅷ	SD52008大溝直上	95－2面S層より下	土師器	Ⅲ	10.2	2.0	—	非ロクロ成形。平底。やや上げ底気味。体部は直線的に緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内外面とも被熱のため、黒褐色に変色。京都系。Aa2Ⅲ類。
140	Ⅷ	SD52008南溝肩	SD－（2008大溝をうめる）	土師器	Ⅲ	(11.9)	2.3	—	土師器皿の口縁部～体部。	内外面ともヨコナデ調整。外面に指頭圧痕。	内面に墨痕。焼成　良好。色調　灰白色。Aa1Ⅳ類。
141	ⅥA	SD52008	—	土師器	Ⅲ	12.2	2.1	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が薄く残る。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。Ab1Ⅳ類。
142	—	SD52008	—	土師器	Ⅲ	12.3	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界　比較的明瞭。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。	焼成良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。Ab1Ⅳ類。
143	—	—	—	土師器	Ⅲ	12.4	2.4	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内面に煤若干附着。焼成　良好。色調　浅黄色。
144	—	—	—	土師器	Ⅲ	12.4	2.5	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は緩やかに、直線的に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。Ab1Ⅳ類。
145	Ⅷ	SD52008大溝内	95－4面腐植まじる	土師器	Ⅲ	(12.5)	2.1	—	非ロクロ成形。器壁は全体に薄い。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab2Ⅳ類。
146	Ⅷ	SD52008上層	—	土師器	Ⅲ	(12.6)	2.0	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
147	ⅦD	SD52008	レキまじり暗灰極細砂	土師器	皿	(12.9)	2.5	—	非ロクロ成形。器形はかなり歪む。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　黄灰色。京都系。Ab2Ⅳ類。
148	ⅦA	SD52008下層	95－3面の溝	土師器	皿	12.9	2.1	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。
149	Ⅷ	SD52008大溝内及び上部埋土	3Sまで	土師器	皿	(13.0)	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。
150	Ⅷ	95－3面まで SD52008大溝内	—	土師器	皿	13.1	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界はやや不明瞭。体部は緩やかに外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面　煤附着。底部内面に籾跡。焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。
151	—	SD52008	—	土師器	皿	13.3	2.9	—	非ロクロ成形。器形は歪む。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内外面とも煤附着。焼成良好。色調　浅黄色。京都系。Aa1Ⅴ類。
152	ⅥA	SD52008下層	—	土師器	皿	(13.8)	2.8	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　器面の剥離が著しい。	焼成　ややあまい。色調　浅黄橙色。京都系。Aa1Ⅴ類。
153	ⅦA	SD52008下層	95－3面対応	土師器	皿	14.3	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　多方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Aa1Ⅴ類。
154	—	SD52008	—	土師器	皿	14.5	2.4	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部と底部の界　比較的明瞭。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。	焼成良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅴ類。
155	ⅦA	SD52008	—	土師器	皿	14.8	3.0	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。Ab1Ⅴ類。
156	Ⅷ	95－2面 SD52008	—	土師器	皿	(16.2)	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は比較的明瞭。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　多方向のナデ調整。	焼成良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅴ類。
157	Ⅷ	SD52008南溝肩	SD(2008大溝をうめる)	土師器	皿	(16.2)	3.2	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成良好。色調　にぶい黄褐色。Aa1Ⅴ類。
158	ⅦA	SD52008下層	95－3面対応	土師器	耳皿	大6.4 小1.7	1.8	4.3	非ロクロ成形。体部～口縁部を2ヶ所内側に折り曲げて、耳皿を成形。	口縁部～体部内外面　ヨコナデ調整。底部外面　不調整。	色調　にぶい橙色。
159	ⅥA	SD52008下層	—	土師器	脚付皿	—	—	—	非ロクロ成形。平底。底部に断面三角形状の脚を貼り付ける（おそらく3脚か）。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。	内外面ともヨコナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。
160	Ⅷ	SD52008大溝上面 95－2面+1	第2･3面	土師器	壺	—	(3.0)	(7.7)	平底。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	型作り成形。内面に布目圧痕。外面　縦方向の板ナデ調整。	底部外面　剥落。色調　にぶい黄橙色。
161	ⅦA	95－2面 SD52008 SD52008北の中央部	— フショク土主	瓦質土器	壺	(8.0)	(6.0)	—	体部は内彎。口縁部は短く、僅かに内傾。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。	色調　にぶい黄橙色。
162	ⅦA	95－2面 SD52008	—	土師器	壺	(7.3)	(4.3)	—	口縁部～体部　僅かに内傾。口縁部は内側に断面楕円形状に肥厚。	体部内面　ヘラ削り調整。体部外面　丁寧な回転ナデ調整。器面を平滑に仕上げる。	焼成　堅緻。色調　にぶい黄橙色。
163	Ⅷ	SD52008上層	—	瓦質土器	桶形容器	—	(3.0)	(22.5)	平底。体部は直立。底部外面に脚部の貼り付け痕。	体部外面　凸帯1条貼り付け。印花文施文。底部内外面　不定方向のナデ。	色調　褐灰色。Ⅳ類。
164	Ⅲ－Ⅵ ⅥA Ⅵ－Ⅶ	95－2面 SD52008 SD52027 第1～3整地層まで	— 根太･腐植含む 東西サブトレ②	瓦質土器	火舎香炉	(10.9)	5.5	(10.5)	平底。断面逆台形状の脚を3箇所貼り付ける。体部は直立。口縁端部は上面に水平に端面をもつ。	体部外面　縦方向のミガキ調整。口縁部内面　横方向のミガキ調整。体部～底部内面　回転ナデ調整。底部外面　不定方向のナデ調整。	色調　黒色。Ⅰ類。
165	Ⅲ－Ⅵ ⅥA Ⅵ－Ⅶ	東西サブトレ② SD52008下層 南北側溝	2aより下暗褐灰色シルト — —	瓦質土器	火鉢	(26.9)	(7.2)	(39.4)	体部は内彎。口縁部は短く直立。口縁端部は水平に端面をもつ。端部上面に薄い板状の粘土板を貼り付け。体部上面に透かし有り。	内外面とも回転ナデ調整。	器面は平滑。色調　黒灰色。Ⅰ類。
166	ⅦA	SD52008	—	瓦質土器	擂鉢	(17.6)	10.7	(10.5)	平底。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。口縁部の1ヶ所を捻って片口を作り出す。	内外面とも回転ナデ調整。体部内面　7条1単位の擂目を櫛描きで施文。	使用により内面は著しく磨耗。色調　黒色。Eb1類。
167	ⅦD	SD52008 タチワリ	下層フショク主	瓦質土器	擂鉢	(22.9)	9.8	(11.3)	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味ををもつ。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　指押さえ→縦方向のハケ目調整の後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　7条1単位の擂目施文。縦方向の擂目の上に7条1単位の波状沈線施文。底部内面　×状に交差して擂目施文。	体部内外面　大きく剥離。色調　暗灰色。Ca2類。16世紀代。
168	—	SD52008	—	無釉陶器	擂鉢	(34.2)	(18.5)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁部外面　凹線2条。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　回転ナデ調整。体部内面　13条1単位の擂目施文。	焼成は非常に堅緻。口縁部～体部内面　胡麻状に灰被り。色調　にぶい暗赤褐色。備前焼Ⅴ期。16世紀代。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
						口径	器高	底径			
169	ⅦD	SD52008	—	無釉陶器	甕	—	(5.7)	—	口縁部は断面楕円形状に肥厚する。	内外面とも回転ナデ調整。	焼成は堅緻。備前焼Ⅳ期　15世紀代。
170	ⅦD — —	95－1面上層 SD52008 SD52008	灰色粗砂混じりシルト — —	無釉陶器	擂鉢	(35.3)	11.6	16.2	粘土紐巻上げ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。体部内面　9条1単位の櫛描きの擂目施文。体部外面下位　回転ヘラ削り。底部外面　不調整。	内面は使用のため、著しく磨耗する。焼成　ややあまい。色調　にぶい赤褐色。越前焼。B2類。16世紀代。
171	—	SD52008	—	無釉陶器	擂鉢	(29.6)	(7.5)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部内面　凹線1条。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　回転ナデ調整。体部内面　9条1単位の擂目施文。	焼成　ややあまい。色調　浅黄色。越前焼。C2類。16世紀代。
172	ⅦD	SD52008 タチワリ他	1層フショク主他	無釉陶器	擂鉢	33.3	12.9	17.9	粘土紐巻上げ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。口縁部内面に凹線1条。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。体部内面に10条1単位の擂目施文。一部、斜め方向に交差する擂目を施文。体部外面下位　ヘラケズリ調整。底部外面　不調整。	内面の下位が特に使用のため摩滅する。焼成　良好。色調　にぶい赤褐色。越前焼。C2類。16世紀代。
173	—	SD52008他	—	無釉陶器	擂鉢	(41.2)	17.3	(12.4)	粘土紐巻上げ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。口縁部内面に凹線1条。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。体部内面に9条1単位の櫛描きの擂目を施文。底部内面にも擂目施文。体部外面下位～底部外面　ヘラ削り調整。	特に内面の下位が使用のため、摩滅が著しい。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。越前焼。C2類。16世紀代。
174	ⅦD	SD52008	—	施釉陶器	小壷	—	(4.0)	—	体部は大きく屈曲。	外面に印花で輪違い文・花文を施文。内外面ともに鉄釉施釉。暗茶褐色に発色。	瀬戸・美濃系　茶入か?　(ex　姫路市加茂遺跡の擂座茶入れ)
175	—	—	—	施釉陶器	皿	11.1	2.6	5.9	底部の器壁は厚い。高台は断面台形状で細く低い。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は外方にひらく。	内外面とも灰釉施釉。くすんだオリーブ黄色に発色。器面に粗い貫入。畳付・高台裏まで施釉。	高台裏にツク附着。瀬戸・美濃系灰釉陶器皿。ⅡA1類。大窯Ⅰ期。16世紀前半代。
176	Ⅷ	SD52008大溝内	—	施釉陶器	塊	(12.6)	(3.2)	—	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。	内外面とも回転ナデ調整。内外面とも鉄釉施釉。黒褐色に発色。	胎土　緻密。中国製。建窯産天目茶碗。
177	ⅦD	SD52008 南溝	埋土下層	施釉陶器	鉢	(29.4)	(6.7)	—	器壁は比較的薄い。体部は内彎して、斜め上方に延びる。口縁部は断面長方形状に肥厚する。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内面以下に褐釉施釉。暗褐色に発色。	華南産褐釉陶器。16世紀代。
178	ⅦA	SD52008	—	施釉陶器	鉢	(29.8)	(5.5)	—	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。(備前焼Ⅳ期風)	内外面とも回転ナデ調整。内面に褐釉施釉。	華南産褐釉陶器。16世紀代。
179		SD52008上層 2S以下　3Sまで	— 黄色粗砂中	青磁	輪花碗	(14.8)	(5.3)	—	体部は内彎して斜め上方に延びる。口縁部は刻みを入れて輪花状に成形。	内外面とも青磁釉施釉。明オリーブ灰色に発色。	高級品。砧手。Ⅲ類。13世紀代。
180	ⅦD	SD52008 南溝	埋土上層	白磁	皿	(11.3)	3.1	(6.1)	平底。高台は断面逆台形状で低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。器面に虫喰い。高台畳付の釉かきとり。	華南産白磁。森田分類　E－2群。16世紀代。
181	ⅦD	SD52008－C区 南溝	—	白磁	皿	(11.8)	2.9	(7.2)	平底。高台は断面三角形状で低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。高台畳付の釉かきとり。畳付に砂附着。	華南産。森田分類　E－2群。16世紀代。
182	ⅦA	SD52008	—	白磁	碗	(8.8)	(2.6)	—	体部は僅かに外反気味に外上方に延びる。口縁端部は上面に端面をもつ。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。	華南産白磁。森田分類　白磁D群。
183	ⅦA	SD52008北溝	95－3面対応	青花磁器	皿	(12.1)	(1.8)	—	器壁は非常に薄い。体部は内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面　鮮やかな呉須で瑞果文。内面　竹葉文。	明青花磁器。16世紀後半～17世紀初頭。
184	ⅦA	SD52008北溝	95－3面対応 木猿の出た溝のつづき(土師器に墨書あり)	青花磁器	皿	(16.2)	3.5	(10.3)	平底。高台は逆台形で比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は大きく外反する。	外面　界線1条・唐草文(蔦)・界線2条。内面　界線1条・草花文。底部内面　界線2条・草花文。	器面に虫喰い。明青花磁器。ⅡB類。16世紀代。
185	ⅦD	SD52008－C 南溝	—	青花磁器	杯	(8.0)	(2.6)	—	器壁は薄い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	外面　界線1条・草花文。内面　界線1条。	明青花磁器。Ⅱ類。16世紀代。
186	ⅦD ⅦD	95－2面まで SD52008南溝	— 埋土土層	青花磁器	碗	(13.6)	(4.0)	—	器壁は比較的薄い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　淡い呉須で幾何学文施文。内面　界線1条。色調　黄色味を帯びた灰白色。器面に貫入。	粗製の明青花磁器。16世紀代。
187	ⅦD	95－2S以下	腐植土	青花磁器	碗	(12.1)	(6.2)	4.4	底部は上げ底気味。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面　呉須　界線1条・線描きの草花文。底部外面　界線2条・「大明年造」銘。底部内面　界線2条・人物文(寒山拾得図か?)。	明青花磁器。ⅠA類。饅頭心碗。16世紀代。
188	ⅦD ⅦB	SD52008 95－2面直上	— —	青花磁器	碗	(12.0)	6.3	(4.4)	高台は断面逆台形状で比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	界線1条・文様・界線1条・草花文・界線1・2条。内面　界線2条。底部内面　界線1条・草花文。色調　青味を帯びた灰白色。	明青花磁器。ⅠB類。蓮子碗。16世紀代。
189	ⅥA	SD52008下層	—	青花磁器	碗	(14.3)	6.1	(5.5)	高台は断面逆台形で比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　界線2条・水龍に牡丹唐草文。内面　界線2条。	明青花磁器。ⅠB類。蓮子碗。16世紀代。
190	ⅥC	95－2面 SD52009	—	土師器	皿	8.6	1.9	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は比較的明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部に煤若干附着。焼成　良好　色調　灰黄色。京都系。Aa1Ⅱ類。
191	ⅥA	SD52009下層	95－3面溝埋土	土師器	皿	(8.7)	1.8	—	非ロクロ成形。平底。やや上げ底気味。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。Ab2Ⅱ類。
192	ⅥC	SD52009	土師皿レベル	土師器	皿	9.4	2.1	—	非ロクロ成形。平底。やや上げ底風。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	器面の剥離が著しい。口縁部に煤附着。色調　淡黄色。京都系。Aa2Ⅱ類。
193	ⅥC	SD52009	—	土師器	皿	9.6	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	底部内面に円圏を残す。焼成　良好。色調　黄橙色。京都系。Aa1Ⅲ類。
194	ⅦC	SD52009(95－3面対応)	灰色粗砂まじり極細砂	土師器	皿	(11.9)	2.2	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　浅黄橙色。京都系。Aa1Ⅳ類。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
195	ⅥC	SD52009内	集石下	土師器	Ⅲ	12.3	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界　比較的明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は僅かに外方にひらき、尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内面に若干煤附着。色調　浅黄色。京都系。Aa1Ⅳ類。
196	ⅥA	SD52009下層(3面)	—	土師器	Ⅲ	12.6	2.6	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　多方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Aa1Ⅳ類。
197	ⅥA	SD52009下層(3面)	—	土師器	Ⅲ	(14.4)	2.5	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。	内面はほぼ全面に煤附着。焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅳ類。
198	Ⅵ	SD52009	—	色絵磁器	小壷	—	(2.8)	—	体部は内彎する。	外面に赤色・淡緑色釉で彩絵。	色絵磁器小壷か?
199	ⅥD	SD52009(底)	※3面目対応	青花磁器	Ⅲ	—	(5.1)	(11.9)	底部の器壁は厚い。高台は断面三角形状で低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	体部外面　呉須　牡丹唐草文・界線2・1条。底部内面　呉須　界線2条・牡丹文。畳付の釉了寧に拭き取り。色調　やや青味を帯びた灰白色。	明青花磁器。16世紀代。
200	Ⅷ	95－2面溝内	—	青花磁器	碗	—	(3.2)	4.6	高台は断面台形状。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	高台裏にノミ跡。体部外面　淡い呉須で芭蕉文。内面　八宝文のくずれか?畳付～高台裏　露胎。	粗製の明青花磁器。B類。蓮子碗。16世紀代。
201	Ⅵ	SD52010	—	土師器	Ⅲ	8.7	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に微かに凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁端部に煤附着。焼成　良好　色調　灰黄色。京都系。Aa1Ⅱ類。
202	ⅤB	SD52012?	—	瓦質土器	擂鉢	(24.1)	(4.3)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は若干外方にひらく。口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。体部外面に指頭圧痕が残る。体部内面　7条1単位の擂目施文。縦方向の擂目の上面に4条単位の波状文施文。	色調　暗灰色。Ca2類。16世紀代。
203	ⅦA	SD52015	—	無釉陶器	擂鉢	(22.9)	(5.8)	—	器面は摩滅。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁部外面　浅い凹線2条。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　回転ナデ調整。体部内面　7条1単位の擂目施文。	焼成は比較的堅緻。色調　灰褐色。備前焼Ⅴ期。16世紀代。
204	ⅦC	SD52019	根太痕	土師器	Ⅲ	(9.6)	1.9	—	非ロクロ成形。平底。やや上げ底風。体部と底部の界は比較的明瞭。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好　色調　にぶい黄橙色。Ab1Ⅲ類。
205	ⅦD	SD52027	根太　腐植含む	土師器	Ⅲ	(8.4)	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は比較的明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好　色調　にぶい黄橙色。京都系。Aa1Ⅱ類。
206	ⅨD	95－2面	溝埋土	白磁	杯	(11.8)	2.2	(6.2)	器壁は比較的厚い。平底。高台は断面三角形状で低い。体部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも透明釉施釉。黄色味を帯びた灰白色に発色。畳付の釉かきとり。畳付に砂少量附着。	華南産白磁。森田分類　杯E－2群。16世紀代。
207	ⅢA	95－2面土塁	直上層	施釉陶器	Ⅲ	(9.9)	(2.3)	—	体部は内彎。口縁部は僅かに外方にひらく。	内外面とも灰釉施釉。暗黄緑色に発色。器面に貫入。	瀬戸・美濃系。Ⅲ類。大窯Ⅰ期。16世紀前半代。
208	ⅢA	95－2面土塁	直上層	施釉陶器	Ⅲ	10.9	2.4	6.5	平底。底部の器壁は厚い。高台は逆断面台形状で低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。	内外面とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色。畳付・高台裏まで施釉。器面に貫入。	瀬戸・美濃系。Ⅲ類。大窯Ⅰ期。16世紀前半代。
209	Ⅷ	粘土盛土中	95－1・95－2面間対応	土師器	Ⅲ	8.0	2.1	—	非ロクロ成形。平底。底部と体部の界は比較的明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。口縁部内面に沈線1条。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成良好。色調　黄橙色。京都系。Aa1Ⅱ類。
210	ⅣD	95－2面上層	95－2K層上層	土師器	Ⅲ	8.1	2.3	—	非ロクロ成形。平底。やや深身。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　普通。色調　にぶい黄橙色。Aa2Ⅱ類。
211	Ⅴ－Ⅷ	95－2a層	—	土師器	Ⅲ	8.3	2.1	—	非ロクロ成形。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　多方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成　良好。色調　浅黄色。Aa2Ⅱ類。
212	Ⅵ	95－2面まで	—	土師器	Ⅲ	8.4	2.2	—	非ロクロ成形。器形はやや歪む。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。口縁部内面に凹部をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。Aa2Ⅱ類。
213	Ⅳ－D	95－2面上層	95－2K層上層	土師器	Ⅲ	8.5	2.3	—	非ロクロ成形。平底。底部と体部の界は明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成良好。色調　にぶい橙色。京都系。Aa2Ⅱ類。
214	Ⅷ	粘土盛土中	95－1・95－2面間対応	土師器	Ⅲ	8.5	1.8	—	非ロクロ成形。平底。底部と体部の界は明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。口縁部内面に凹線1条。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部外面に板状工具痕。体部外面　器面が剥離。	焼成良好。色調　褐灰色。京都系。Ab1Ⅱ類。
215	ⅦC	95－2面	根太の中	土師器	Ⅲ	8.8	2.2	—	非ロクロ成形。器形はやや歪む。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　器面摩滅のため調整不明。	焼成良好。色調　にぶい黄橙色。Aa2Ⅱ類。京都系。
216	Ⅰ ⅣA	95－2K 95－2a内	—	土師器	Ⅲ	(12.0)	2.7	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面全面に煤附着。焼成　良好。色調　灰黄色。京都系。Aa1Ⅳ類。
217	ⅥC	95－2面	—	土師器	Ⅲ	12.3	2.5	—	非ロクロ成形。平底。底部と体部の界は明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成良好。色調　暗灰色。京都系。Ab1Ⅳ類。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
218	ⅣD	95－2面上層	95－2K層上層	土師器	皿	12.5	2.0	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。口縁部内面に凹線1条。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。Aa2Ⅳ類。
219	ⅤB	95－2面まで	?	土師器	皿	12.5	2.6	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Aa1Ⅳ類。
220	Ⅷ	粘土盛土中	95－1・95－2面間対応	土師器	皿	(12.5)	2.2	—	非ロクロ成形。底部と体部の界は明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成良好。色調　にぶい橙色。京都系。Ab1Ⅳ類。
221	Ⅰ	95－2面	—	土師器	皿	12.8	2.7	—	非ロクロ成形。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成良好。色調　淡黄色。京都系。Aa2Ⅳ類。
222	ⅣD	95－2面上層	95－2K層上層	土師器	皿	(13.1)	2.0	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。口縁部内面に凹線1条。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。Aa1Ⅳ類。
223	ⅦA	SD52008より北側	95－4a中	土師器	皿	14.1	2.1	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。口縁部内面　凹線1条。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅳ類。
224	ⅤB	95－2面まで	95－1S層	土師器	皿	(17.1)	3.2	—	非ロクロ成形。丸底気味。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　ややあまい。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅳ類。
225	ⅣB	95－2面	—	瓦質土器	蓋	9.7	(1.8)	—	ロクロ成形。円盤状。かえりは短く斜め下方に延びる。上面中央につまみの貼り付け痕が残る。	内外面とも回転ナデ調整。上面はハケ目調整。	色調　灰色。Ⅰ類。
226	Ⅷ	95－2面まで	—	土師器	小壺	(8.3)	(4.0)	—	体部は内彎。口縁部は短く直立。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。	焼成堅緻。色調　灰色。
227	ⅣC	95－2面上層	褐灰色粗砂まじりシルト	瓦質土器	擂鉢	(22.7)	10.3	10.0	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部はほぼ水平に端面をもつ。口縁部の1ヶ所を捻って片口を作り出す。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　8条1単位の擂目を櫛描き施文。底部内面　7条1単位の擂目を放射状に施文。底部外面　ナデ調整。	色調　黒灰色。Aa1類。16世紀代。
228	ⅤB	95－2面まで(95－ⅠS)	—	瓦質土器	こね鉢	(24.5)	(10.0)	(10.3)	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。口縁部の1ヶ所を捻って片口を作り出す。	内外面とも回転ナデ調整。器面の剥離が著しい。	色調　黒灰色。Ab1類。
229	ⅣC	95－2面	—	瓦質土器	擂鉢	(14.4)	8.0	(9.7)	平底。体部は大きく内彎。口縁端部は尖り気味。	内外面とも回転ナデ調整。底部外面　ナデ調整。内面に5条1単位の擂目施文。	色調　暗オリーブ灰色。Ea2類。
230	ⅤB	95－2面まで	95－1S層	瓦	磚	長(14.0)	巾(8.9)	厚2.6	型作り成形。	削りの後、ナデ調整。	瓦磚。色調　暗灰色。
231	Ⅷ	95－2面まで	—	施釉陶器	皿	(12.9)	(2.5)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。	内外面とも灰釉施釉。灰褐色に発色。外面の体部下半以下露胎。	肥前系　唐津皿。17世紀前半。
232	—	95－1面SD52009南側掘割	汚れた灰色シルト灰色シルトまで	施釉陶器	香炉	—	(3.9)	(6.2)	平底。低い脚を3箇所貼り付け。体部は直立。	内外面とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色。底部外面　露胎。	瀬戸・美濃系。大窯期。16世紀代。
233	ⅤB	95－2面まで	—	施釉陶器	鉢	(29.9)	(5.8)	—	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。	内外面とも回転ナデ調整。内面に鉄釉?施釉。	華南産褐釉陶器。
234	Ⅰ	第1整地層より下	—	施釉陶器	鉢	(31.0)	11.5	(18.0)	平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は断面台形状の縁帯を形成する。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。底部外面　板ナデ調整。内外面とも上半部に薄く褐釉を施釉。内外面とも下半部は露胎。	焼成　良好。色調　にぶい赤褐色。華南産褐釉陶器。
235	ⅣD	95－2面上層	95－2K層上層	青磁	碗	(15.6)	(4.1)	—	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	体部外面に剣頭と身の一致しない蓮弁文を線描きで施文。内外面とも施釉。淡緑灰色に発色。	龍泉窯系青磁細蓮弁文碗。ⅠB2類。16世紀代。
236	Ⅰ	95－1整地層より下	—	青磁	碗	(15.6)	(4.7)	—	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	体部外面に剣頭と身の一致しない蓮弁文を線描きで施文。内外面とも施釉。淡緑灰色に発色。	龍泉窯系青磁細蓮弁文碗。ⅠB2類。16世紀代。
237	ⅨC	95－2面まで95－1整地層	—	青磁	碗	—	(3.7)	—	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	体部外面に剣頭と身の一致しない蓮弁文を線描きで施文。内外面とも施釉。淡緑灰色に発色。	龍泉窯系青磁細蓮弁文碗。ⅠB2類。16世紀代。
238	—	95－2面まで95－2面上層	95－2K中(東半)95－2K層上層	青磁	碗	—	(2.9)	(7.5)	底部の器壁は非常に厚い。高台は断面台形状で比較的高い。	内外面とも青磁釉施釉。淡黄緑色に発色。畳付まで施釉。高台裏は露胎。ツクの破片が附着。	龍泉窯系青磁碗。
239	Ⅳ	南側側溝95－1整地層より下	—	青磁	香炉	(9.8)	(4.0)	—	体部は直立。口縁端部は外方と内側の両側につまみ出す形。体部外面は竹節状に整形。	内外面とも青磁釉施釉。淡緑灰色に発色。体部内面は露胎。	龍泉窯系青磁。
240	ⅨDⅥ	95－2・95－3面SD52009南側掘割	—灰色シルトまで	白磁	皿	(11.7)	3.2	(6.2)	平底。高台は断面三角形状で低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。器面に虫喰い。高台畳付の釉かきとり。	華南産白磁。森田分類　E－2群。16世紀代。
241	Ⅷ	95－2面まで	—	白磁	皿	(11.7)	3.0	(6.3)	平底。高台は断面三角形状で低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。高台畳付の釉かきとり。畳付に砂附着。	華南産白磁。森田分類　E－2群。16世紀代。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
						口径	器高	底径			
242	Ⅴ Ⅲ	95－1整地層より下 流路①肩部	2Sまで	白磁	Ⅲ	11.6	3.1	6.6	高台は断面台形状で比較的低い。平底。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。高台畳付の釉は丁寧にかきとる。器面に虫喰いが見られる。	華南産白磁。森田分類　E－2群。16世紀代。
243	ⅦD	95－2面まで		白磁	Ⅲ	(12.0)	(2.2)	—	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。	華南産白磁。森田分類　E－2群。16世紀代。
244	Ⅰ	95－1整地層より下	—	白磁	Ⅲ	(11.9)	2.4	(6.7)	高台は比較的幅が広く低い。体部は緩やかに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。高台畳付の釉かきとり。	華南産白磁。森田分類　E－2群。16世紀代。
245	Ⅶ	95－1整地層より下	—	白磁	Ⅲ	—	(2.2)	(7.4)	平底。高台は断面三角形状で低い。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。高台畳付の釉かきとり。	華南産白磁。16世紀代。
246	Ⅳ	95－1整地層より下	—	白磁	Ⅲ	—	(1.5)	(9.9)	器壁は薄い。平底。高台は断面台形状で比較的細く高い。	内外面とも透明釉施釉。白色に発色。畳付の釉　拭き取り。	華南産白磁。16世紀代。
247	Ⅴ－Ⅶ	95－2a層	—	白磁	小碗	(6.2)	3.1	(2.5)	高台は断面逆台形状。底部の器壁は比較的厚い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。高台畳付の釉かきとり。	華南産白磁。小碗B類。16世紀代。
248	Ⅰ	95－1整地層より下	—	白磁	小碗	(7.7)	2.7	—	器壁は薄い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。	器面に虫喰いが目立つ。華南産白磁。小碗B類。　16世紀代。
249	Ⅶ	95－1整地層より下	—	白磁	(底部)	—	(0.6)	8.3	平底。	内面　透明釉施釉。灰白色に発色。外面　露胎。	華南産白磁。14世紀代か?。
250	ⅦA	95－1S?　下	腐植土中(濁灰シルト)	青花磁器	Ⅲ	(21.8)	(3.8)		体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	外面　呉須　界線2条・牡丹唐草文。内面　界線2・2条。色調　やや青味を帯びた灰白色。	明青花磁器。Ⅰ類。16世紀代。
251	ⅨC	95－2面まで 第1整地層	—	青花磁器	碗	—	(2.4)	—	器壁は非常に薄い。体部は僅かに内彎。口縁部は外方にひらく。口縁部は輪花状に成形。	外面　界線1条・宝相華文。口縁部内面　菱形文帯。	明青花磁器。Ⅱ類。16世紀代。
252	ⅣB	95－2面まで	—	色絵磁器	碗	—	(5.0)	—	器壁は薄い。高台は断面三角形状。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	外面　赤・緑彩で施文。	明色絵磁器?。
253	ⅧC	95－2面まで	—	青花磁器	杯	(6.3)	(2.6)	—	器壁は非常に薄い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	外面　呉須　界線1条・崩れた草花文。内面　界線1条。	明青花磁器。Ⅱ類。16世紀代。
254	ⅣD	95－2面まで	2K中(東半)	青花磁器	杯	(6.8)	(2.6)	—	器壁は非常に薄い。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	外面　呉須　界線1条・草花文。内面　界線1条。	明青花磁器。Ⅱ類。16世紀後半～17世紀初頭。
255	Ⅵ	SD52010周辺 95－2面検出時	—	青花磁器	Ⅲ	—	(1.6)	(5.0)	高台は細く比較的高い。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。	外面　呉須　唐草文・界線2条。内面　太い界線2条・牡丹文。	明青花磁器。16世紀代。
256	ⅧC	SD52011周辺	—	青花磁器	碗	—	(2.7)	(4.7)	高台は比較的細く高い。底部はやや上げ底風。	外面　呉須　草花文・界線4条。底部内面　界線2条・草花文?	明青花磁器。A類。饅頭心碗。16世紀代。
257	—	95－1面より下	—	青花磁器	碗(底部)	—	(1.9)	(4.8)	高台は比較的幅が狭く高い。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	底部内面　呉須　菊花文。高台裏くずれた「大明年製」銘。	明青花磁器。C類。16世紀代。
258	ⅣC	95－2面まで 95－2K	—	土師器	Ⅲ	8.1	2.8	—	非ロクロ成形。器形は大きく楕円形状に歪む。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。Aa1Ⅱ類。
259	ⅧA	95－2K中 95－2面まで	—	土師器	Ⅲ	8.3	2.1	—	非ロクロ成形。器壁は比較的厚い。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成良好。色調　灰黄色。Aa2Ⅱ類。
260	ⅣA	95－2面まで	95－2K層	土師器	Ⅲ	12.7	2.5	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。体部は直線的に外上方へ延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成良好。色調　浅黄色。京都系。Aa1Ⅳ類。
261	ⅣD	95－2面上層 95－2面まで 95－2K層	上層	白磁	Ⅲ	(11.5)	(2.1)	—	器壁は比較的薄い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも透明釉施釉。灰被りのためか、緑灰色に発色。	華南産白磁。森田分類　E－2群。16世紀代。
262	Ⅰ	95－2K焼土中	—	施釉陶器	塊	(11.6)	(7.2)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は屈曲して、僅かに外方にひらく。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。内外面とも鉄釉施釉。黒褐色に発色。外面の体部下半以下露胎。	瀬戸・美濃系天目茶碗。大窯Ⅰ期。16世紀前半代。
263	ⅣA	95－2面まで 95－2K層 95－5面まで	—	白磁	Ⅲ	11.3	2.8	6.3	平底。高台は断面三角形状で低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。器面に虫喰い。高台畳付の釉かきとり。	華南産白磁。森田分類　E－2群。16世紀代。
264	Ⅰ	—	2K層	青花磁器	Ⅲ	(12.1)	2.5	(6.5)	平底。高台は断面逆台形状。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	外面　滲んだ呉須　宝相華文・界線2章。内面　界線1・2条。底部内面　草花文	明青花磁器。ⅡB類。16世紀代。
265	Ⅰ	95－2K層	—	青磁	面子	—	(1.3)	(5.7)	高台は断面台形状で比較的低い。	内外とも青磁釉施釉。灰被りのため、灰白色に発色。円盤状に打ち欠く。	面子。原体は龍泉窯系青磁碗か?
266	Ⅷ	95－2面+1まで	—	土師器	Ⅲ	8.1	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部外面に端面をもつ。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　ややあまい。色調　にぶい黄橙色。
267	Ⅷ	95－2面+1まで	—	土師器	Ⅲ	8.2	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　ややあまい。色調　にぶい黄橙色。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
268	Ⅷ	95－2面+1まで	—	土師器	Ⅲ	8.8	1.7	—	非ロクロ成形。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	体部内外面に部分的に煤附着。焼成　良好。色調　灰黄色。
269	Ⅷ	95－2面+1まで	茶褐色腐植土 炭まじり細砂	土師器	Ⅲ	9.9	2.0	—	非ロクロ成形。平底。底部と体部の界は明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面　煤附着。焼成　良好。色調　にぶい黄色。
270	Ⅷ	95－2面+1まで	—	土師器	Ⅲ	12.6	2.1	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。やや上げ底気味。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab2Ⅳ類。
271	Ⅷ	95－2面+1まで	—	土師器	Ⅲ	12.9	2.1	—	非ロクロ成形。平底。底部と体部の界は明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。円圏が残る。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。
272	Ⅷ	95－2面+1まで	—	土師器	Ⅲ	16.9	(2.6)	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。
273	Ⅷ	95－2面+1まで	—	土師器	Ⅲ	(17.5)	2.5	—	非ロクロ成形。平底。底部と体部の界は明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　仕上げナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab2Ⅵ類。
274	ⅦA	95－2面+2	—	青花磁器	碗	—	(3.2)	(4.0)	底部の器壁は比較的厚い。高台は断面逆三角形状。体部は直線的に斜め上方に延びる。	外面　呉須　竹葉文?。底部内面　呉須　界線1条・「壽」文?焼成はややあまい。色調　黄色味を帯びた灰白色。	明青花磁器。C類。16世紀代。
275	Ⅰ	95－2整地層	(95－2a層)	無釉陶器	徳利	—	(15.0)	(10.9)	体部は大きく内彎する。底部と頸部から上を欠く。	内面　回転ナデ調整。外面　回転ヘラケズリの後、回転ナデ調整。	外面に胡麻状に灰被り。色調　暗茶褐色。胎土から見て、備前焼Ⅴ期。16世紀代。
276	Ⅰ	95－2整地層	(95－2a層)	施釉陶器	埦	(11.8)	(4.5)	—	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は屈曲して僅かに外方にひらく。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。内外面とも鉄釉施釉。暗茶褐色に発色。	瀬戸・美濃系天目茶碗。大窯Ⅲ期。16世紀後半代。
277	Ⅰ	95－2整地層	(95－2a層)	青花磁器	Ⅲ	—	(2.9)	(11.1)	平底。高台は断面三角形で細く高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。体部内外面を型打ちで花弁状に整形。	外面　呉須　幾何学文施文。内面　呉須　牡丹文施文。	明青花磁器。ⅠB類。16世紀代。
278	Ⅰ	95－2整地層	(95－2a層)	青花磁器	碗	—	(2.2)	4.7	底部の器壁は比較的厚い。高台は比較的高い。	底部内面　呉須　舟に乗る人物図。高台裏　呉須　「富貴長春」銘。	明青花磁器。A類。饅頭心碗。16世紀代。
279	—	礎石建物 95－3面	—	土師器	Ⅲ	12.3	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。器面に剥離・摩滅が見られる。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　円圏が微かに見られる。	焼成　ややあまい。色調　灰白色。Ab1Ⅳ類。
280	ⅥB	SK53001	—	土師器	Ⅲ	8.1	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部に煤附着。焼成　良好。色調　灰黄色。Aa2Ⅱ類。
281	ⅥB	SK53001	—	土師器	Ⅲ	(12.1)	2.4	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。器高は比較的高い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面全体が黒灰色に変色。焼成　良好。色調　灰黄色。Ab1Ⅳ類。
282	ⅥB	SK53001	—	瓦質土器	火鉢	(23.7)	(6.6)	—	体部は内彎。口縁部は短く直立。口縁端部は水平に端面をもつ。端部上面に薄い板状の粘土板を貼り付け。体部上面に透かし有り。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内面　横方向のヘラミガキ調整。	器面は平滑。色調　黒灰色。Ⅰ類。
283	ⅤA	95－3面	中央の土壙	土師器	Ⅲ	8.6	2.3		非ロクロ成形。器壁は比較的厚い。平底。丸底風。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　黄橙色。Aa2Ⅱ類。
284	ⅤA	大土壙中	—	青花磁器	碗・底部	—	(1.8)	(5.1)	高台は断面逆台形状。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	外面　呉須　芭蕉文。内面　呉須　草花文。	器面に虫喰い。明青花磁器。B類。蓮子碗。16世紀代。
285	ⅥB	SD53001	SD52009の溝底	土師器	Ⅲ	12.4	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に凹線1条。底部外面に爪形。	焼成　ややあまい。色調　浅黄色。Ab1Ⅳ類。
286	Ⅲ	SD530__	—	土師器	Ⅲ	8.3	1.9	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Aa2Ⅱ類。
287	ⅢB	95－2面 95－3面	SD5300内埋土	土師器	Ⅲ	9.8	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部に煤附着。焼成　良好。色調　にぶい黄色。Aa2Ⅱ類。
288	Ⅲ	SD53003	—	無釉陶器	擂鉢	(36.8)	(6.9)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁部外面　凹線2条。口縁部の1ヶ所を捻って片口を形成する。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　回転ナデ調整。体部内面　6条1単位の擂目施文。	焼成は非常に堅緻。口縁部内外面　胡麻状に灰被り。色調　にぶい暗赤褐色。備前焼Ⅴ期。16世紀代。
289	ⅢB	SD53003	95－4面対応の 可能性もある	無釉陶器	甕	(50.7)	(68.2)	(29.0)	粘土紐巻上げ成形。平底。体部は大きく内彎する。体部のほぼ中位で最大径をもつ。口縁部は外方にひらく。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。体部外面　指頭圧痕が残る。外面体部上半　自然釉が掛かる。灰被りのため、飴状に垂れる釉が白濁する。内面　一部自然釉が掛かる。底部外面　不調整。	焼成　堅緻。色調　灰褐色。越前焼Ⅴ期。16世紀代。
290	— —	SD53001 95－2面～3面 広範囲から出土	— (炭まじり暗灰シルト) 整地層直上	施釉陶器	徳利	—	(13.5)	(12.8)	粘土紐巻上げ成形。平底。体部は大きく内彎。頸部は欠損。	外面　ヨコナデ調整。内面　未調整　青海波状の当具痕が残る。外面　灰釉施釉。黄灰色に発色。	李朝陶器。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
291	ⅨD	95－3面 SD53002－05	—	青花磁器	碗	(13.9)	5.4	5.3	高台は断面逆台形状。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　やや滲んだ呉須で界線2条・草花文(葡萄文?)・界線2条。内面　界線1.2条。底部内面　草花文。色調　やや青味を帯びた灰白色。	明青花磁器。ⅠB類。蓮子碗。16世紀代。
292	Ⅷ	—	シルト(粘土)盛土中	土製品	塙	(7.6)	(2.7)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。	内外面　ナデ調整。	坩塙の破片か?
293	ⅧC	95－2面以下 95－3面間の 炭層	あじろ垣周辺	土師器	Ⅲ	8.4	2.2	—	非ロクロ成形。器形はかなり歪む。平底。底部と体部の界は比較的明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	底部　錐状工具で2ヶ所穿孔。焼成良好。色調　浅黄色。 Aa1Ⅱ類。
294	ⅢA	95－3面	暗褐色シルト	土師器	Ⅲ	8.6	1.6	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部に煤附着。焼成　良好。色調　灰黄色。 Ab1Ⅱ類。
295	ⅣA	95－3面	礎石タテモノ周辺	土師器	Ⅲ	8.7	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部外面に板状工具痕。	焼成　良好。胎土　精良。色調　浅黄色。京都系。 Ab1Ⅱ類。
296	ⅤA	95－3面	—	土師器	Ⅲ	8.7	2.2	—	非ロクロ成形。器形はかなり歪む。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅱ類。
297	Ⅷ	95－3面	—	土師器	Ⅲ	8.9	2.3	—	非ロクロ成形。器形は比較的高い。平底。体部と底部の界は明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部に煤附着。焼成　良好。色調　灰黄色。 Ab1Ⅱ類。
298	ⅣD	95－3面	—	土師器	Ⅲ	9.1	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部外面に板状圧痕が残る。	焼成　良好。色調　浅黄色。Ab2Ⅱ類。
299	ⅤB	95－2面より－15 cm 95－3面－1	火事かたづけ土	土師器	Ⅲ	9.6	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏。	焼成　良好。色調　浅黄色。Aa1Ⅲ類。
300	ⅤB	95－3面まで	暗青灰色中細砂	土師器	Ⅲ	12.0	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　全体にあまい。色調　浅黄橙色。Aa1Ⅳ類。
301	ⅤB	イロリ状石組より 下 95－3面検出時	—	土師器	Ⅲ	12.1	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Aa1Ⅳ類。
302	Ⅷ	95－3面	—	土師器	Ⅲ	12.4	2.5	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏。	口縁部に煤附着。焼成　良好。色調　灰黄色。 京都系。Aa1Ⅳ類。
303	ⅧC	95－2面 95－3面	—	土師器	Ⅲ	12.5	2.6	—	非ロクロ成形。器形はかなり歪む。器壁は比較的薄い。平底。底部と体部の界は明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。	焼成良好。色調　にぶい橙色。京都系。Ab1Ⅳ類。
304	Ⅷ	95－3面	—	土師器	Ⅲ	12.7	2.2	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部と底部の界は明瞭。体部は緩やかに、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内外面とも煤が多量に附着。焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。
305	ⅤB	95－3面	—	土師器	Ⅲ	12.8	2.1	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部と底部の界は明瞭。体部は緩やかに、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄橙色。京都系。Ab1Ⅳ類。
306	ⅤB	95－3面	—	土師器	Ⅲ	13.4	2.2	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は緩やかに、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に微かに円圏が残る。	焼成　良好。色調　浅黄橙色。京都系。Ab1Ⅳ類。
307	ⅨA	95－3面まで	(暗)灰色シルト直上 まで	土師器	Ⅲ	(13.6)	(2.5)	—	非ロクロ成形。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に微かに円圏が見られる。	焼成　良好。色調　黄灰色。京都系。Aa1Ⅳ類。
308	Ⅷ	95－3面	—	土師器	Ⅲ	14.0	2.3	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部と底部の界は明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に微かに円圏が残る。	焼成　良好。色調　浅黄橙色。京都系。Ab1Ⅳ類。
309	ⅢA	95－3面	—	土師器	Ⅲ	(17.8)	3.2	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は比較的明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。京都系。Aa1Ⅳ類。
310	ⅧA	砂利敷内	—	瓦質土器	壷	(18.1)	(14.3)	(21.0)	体部は内彎。口縁端部は尖り気味。	体部内面～口縁部外面　ヨコナデ調整。体部外面上半　縦方向の板ナデ調整。体部外面下半　横方向の削り調整。	色調　暗灰色。
311	ⅥD	95－2面 95－3面	SD?	瓦質土器	桶形容器	—	(19.4)	(30.4)	体部はほぼ直立。体部外面に桶の箍を模倣した凸帯を9条貼り付ける。	内外面ともミガキ調整の後、回転ナデ調整。	器面は平滑に仕上げられ、銀化する。おそらく茶器として使用。Ⅱ類。
312	Ⅳ	—	黄色整地層より上	瓦質土器	擂鉢	(20.7)	(5.6)	—	体部は僅かに内彎気味。口縁端部は尖り気味に収める。	内外面とも回転ナデ調整。体部外面に指頭圧痕が残る。体部内面　7条1単位の擂目施文。	色調　炭素が吸着せず浅黄橙色を呈す。Ca2類。
313	ⅨA	95－3面まで	(暗)灰色シルト直上 まで	瓦質土器	擂鉢	(21.2)	(7.9)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　回転ナデ調整。体部外面　縦方向のハケ目調整の後、指おさえ。指頭圧痕が残る。体部内面　横方向の粗いハケ目調整の後、7条1単位の擂目施文。	色調　暗灰色。16世紀代。Ab2類。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
						口径	器高	底径			
314	ⅤB	95－2面より下 95－3面－1	火事かたづけ土	瓦質土器	擂鉢	(20.8)	(5.7)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　回転ナデ調整。体部外面　縦方向のハケ目調整の後、指おさえ。指頭圧痕が残る。体部内面　横方向の粗いハケ目調整の後、6条1単位の擂目施文。	色調　黒褐色。16世紀代。Ab1類。
315	Ⅲ	掘状落ち	95－3面検出時	瓦質土器	擂鉢	—	(8.8)	(14.2)	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。	体部外面　指おさえの後、ハケ目調整。体部内面　8条1単位の擂目施文。横方向のハケ目調整。底部内面　8条単位の擂目を3方から交差して施文。底部外面　不調整。	色調　灰色。
316	ⅣB	95－3面検出時	—	瓦質土器	擂鉢	(30.6)	11.5	(11.3)	体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁部は若干肥厚、僅かに外方にひらく。口縁部の1ヶ所を捻って片口を作り出す。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　指ナデ調整。体部内面　11条1単位の擂目施文。	器面は摩滅する。色調　にぶい黄橙色。Ca1類。
317	ⅤA	95－3面まで	—	瓦質土器	擂鉢	(33.6)	(9.8)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。口縁部内面に凹部をもつ。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　指おさえの後、縦方向の粗いハケ目調整。指頭圧痕が残る。体部内面　9条1単位の擂目施文。	色調　にぶい黄橙色。Ca1類。
318	ⅥD	SD53001付近	3a層	無釉陶器	擂鉢	(27.8)	(6.8)	—	器壁は比較的厚い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は上面に水平に端面をもつ。口縁部内面に凹線1条。	内外面とも回転ナデ調整。体部内面　9条1単位の擂目施文。	色調　にぶい赤褐色。越前焼。B2類。16世紀代。
319	ⅤA	95－3面	—	無釉陶器	擂鉢	(36.5)	12.0	(16.6)	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。口縁部内面に凹線1条。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　回転ナデ調整。体部内面　9条1単位の擂目施文。底部外面　不調整。	色調　にぶい橙色。越前焼。C1類。　16世紀代。
320	ⅧD	中央サブトレ 2S以下	腐植土まで	無釉陶器	擂鉢	(33.6)	(11.2)	—	器壁は比較的厚い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。口縁部内面に凹線1条。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。体部内面　9条1単位の擂目施文。	色調　にぶい橙色。越前焼。B1類。16世紀代。
321	ⅨB	95－3面直上 まで	暗灰色シルト	施釉陶器	壷	—	(3.8)	—	口縁部は玉縁状に肥厚。	内外面とも回転ナデ調整。外面　褐釉施釉。茶褐色に発色。	華南産褐釉陶器壷片。
322	ⅨA	95－3面 南北溝	—	無釉陶器	甕	(57.3)	(13.5)	—	体部は内傾、口縁部はやや外方にひらく。口縁部は断面楕円形状に肥厚。口縁部外面　凹線が1条巡る。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　回転ヘラ削りの後、ナデ調整。	焼成は堅緻。備前焼Ⅴ期　16世紀代。
323	ⅨD	95－3面	南北溝付近	無釉陶器	甕	—	(12.1)	(31.0)	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。	体部外面　縦方向のヘラケズリ調整の後、回転ナデ調整。内面　回転ナデ調整。底部外面　不調整。	色調　暗赤褐色。備前焼。ⅣorⅤ期。15～16世紀代。
324	Ⅷ	95－3面まで	—	施釉陶器	Ⅲ	(11.8)	(1.9)	—	体部は若干外反気味に斜め上方に延びる。	口縁部外面に浅い沈線が3条巡る。内外面とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色。器面に貫入。	龍泉窯系青磁Ⅲの模倣。瀬戸・美濃系灰釉陶器Ⅲ。Ⅰ類。16世紀代。
325	ⅢA	95－3面まで	—	施釉陶器	Ⅲ?	(13.9)	(3.8)	—	体部は内彎。口縁部は丸味をもつ。	内外面とも白濁釉施釉。にぶい黄橙色に発色。	器面に虫喰い・貫入が目立つ。産地不明。
326	ⅥC	95－2・95－3面	下層	施釉陶器	埦	—	(1.2)	(4.4)	平高台。内反り高台。	内面　鉄釉施釉。暗褐色に発色。外面　露胎。	瀬戸・美濃系天目茶碗。大窯期。16世紀代。
327	Ⅷ Ⅷ	95－2面+1まで 95－3面まで	濁暗灰色腐色土	施釉陶器	Ⅲ	—	(1.9)	5.2	平底。高台は断面三角形状で細く低い。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	底部内面に印花で簡略化された花弁文施文。内外面とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色。器面に貫入が見られる。	高台裏にツクの痕跡が残る。瀬戸・美濃系灰釉陶器Ⅲ。ⅡA2類。大窯期。16世紀代。
328	ⅤA	95－3面まで	—	青磁	輪花Ⅲ	—	2.6	—	型作り成形。平底。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。型押しで花弁状に成形。	内外面とも青磁釉施釉。くすんだ青緑色に発色。底部外面　露胎。口縁端部　鉄釉施釉(口紅)。	2次的に被熱。龍泉窯系青磁。
329	ⅥD ⅦB	SD53001付近 95－2面以下 95－3面間	95－3a層 炭層まで	青磁	碗	(10.0)	(4.8)	—	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	体部外面に剣頭と身が不一致の線描きの蓮弁文を施文。内外面とも青磁釉施釉。くすんだオリーブ灰色に発色。器面に細かい貫入。	龍泉窯系青磁。ⅠB2類。16世紀代。
330	—	—	黒色腐植土より上	青磁	碗	(12.4)	4.7	6.1	底部の器壁は非常に厚い。高台は断面逆台形状で比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ	体部外面　沈線1条。底部内面　沈線1条。内外面とも青磁釉施釉。淡黄緑色に発色。器面に細かい貫入。畳付～高台裏　露胎。	龍泉窯系青磁無文碗。ⅠA類。
331	ⅨC ⅨD	95－3面	SD51005東側	青磁	香炉	(5.2)	(1.7)	—	体部はほぼ直立。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内面～体部外面　青磁釉施釉。淡青緑色に発色。体部内面　露胎。	龍泉窯系青磁。
332	ⅨD ⅨA	95－2・3面	— 西側のおちこみ内	白磁	Ⅲ	(11.6)	2.6	(6.2)	平底。高台は断面三角形状で低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。高台畳付の釉かきとり。畳付に砂少量附着。	華南産白磁　森田分類　E－2群。16世紀代。
333	ⅤB	95－2面より下 95－3面－1	火事かたづけ土	白磁	Ⅲ	(11.9)	3.2	(6.7)	高台は断面三角形状で畳付は尖る。平底。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁部は若干外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。高台畳付の釉かきとり。	華南産白磁。森田分類　E－2群。16世紀代。
334	ⅥC	第2・3面上層	—	白磁	Ⅲ	(12.8)	3.0	(7.5)	平底。高台は断面三角形状で低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。器面に虫喰い。高台畳付の釉かきとり。畳付に砂少量附着。	華南産白磁。森田分類　E－2群。16世紀代。
335	ⅧC ⅧD	95－3面 95－3面	— 根太セキ内	白磁	Ⅲ	(18.6)	3.4	(10.0)	器形は大きく歪む。平底。高台は断面三角形状で低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。高台畳付の釉は丁寧にかきとる。器面に虫喰いが見られる。	華南産白磁。森田分類　E－2群。16世紀代。
336	ⅥB	第2・3面上層	—	白磁	杯	—	(2.2)	(3.5)	平底。高台は断面三角形状で低い。体部は直線的にほぼ直上に延びる。	内外面とも透明釉施釉。白色に発色。畳付の釉かきとり。	華南産白磁。　16世紀代。
337	ⅨA	95－3面まで	(暗)灰色シルト直上 まで	白磁	杯	—	(3.5)	(3.4)	器壁は薄い。高台は細く比較的高い。平底。体部は僅かに外反気味にほぼ直上に延びる。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。高台畳付は露胎。	器面に虫喰い。華南産白磁。16世紀代。
338	ⅢD	—	石の下	青花磁器	杯	(6.8)	(3.0)	—	器壁は非常に薄い。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。口縁端部は尖り気味。	外面　呉須　界線1条・牡丹文。内面　界線1条・菱形文・界線2条。	明青花磁器。Ⅱ類。16世紀代。
339	Ⅲ	—	第3整地層より上	青花磁器	碗	—	(1.6)	(4.3)	高台は断面三角形状で比較的細く高い。	内面　呉須　人物文。底部外面　界線2条・「□□□春」銘。	明青花磁器。C類。16世紀代。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
						口径	器高	底径			
340	ⅨD	95－2面 95－3面	—	青花磁器	碗	—	(2.7)	(6.3)	高台は比較的細く高い。	内外面とも呉須で施文。畳付の釉はきれいにふき取る。	明青花磁器。C類。16世紀代。
341	Ⅷ	95－2 95－3面間整地下	シルト面肩部炭まじり層	青花磁器	碗	—	(3.5)	(5.6)	高台は細く高い。体部は内彎気味に斜め上方に立ち上がる。	外面　霊芝文・界線3条。内面　界線2条・牡丹文?	明青花磁器。C類。16世紀代。
342	ⅣD	95－3S	濁灰色粗砂まじり細砂	土師器	Ⅲ	5.6	1.6	—	非ロクロ成形。平底。体部は短く直立。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。外面の体部～底部　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。内面の体部～底部　布目圧痕が残る。	焼成　良好。色調　黄灰色。BⅠ類。
343	Ⅵ	95－3整地層中	—	土師器	Ⅲ	(7.8)	1.7	—	非ロクロ成形。底部の器壁は厚い。底部と体部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ハケ目調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。Aa2Ⅱ類。
344	ⅦC	95－3S中 (95－4aまで)	—	土師器	Ⅲ	8.1	1.9	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄橙色。Aa1Ⅱ類。
345	ⅤB	95－3S中	—	土師器	Ⅲ	8.3	1.9	—	非ロクロ成形。平底。やや上げ底気味。体部と底部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内面に煤附着。焼成　良好。色調　浅黄橙色。Aa2Ⅱ類。
346	ⅥB	95－3整地土中	—	土師器	Ⅲ	8.3	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Ab1Ⅱ類。
347	ⅦA	95－3S中	—	土師器	Ⅲ	8.4	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	底部外面に墨痕あり。焼成　良好。色調　浅黄橙色。Aa2Ⅱ類。
348	Ⅹ	サブトレ	—	土師器	Ⅲ	8.5	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に布目圧痕。	焼成　ややあまい。色調　灰黄色。Aa2Ⅱ類。
349	ⅦA	95－3S中	—	土師器	Ⅲ	8.7	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄橙色。Ab1Ⅱ類。
350	ⅣD	95－3S	濁灰色粗砂まじり細砂	土師器	Ⅲ	8.8	1.9	—	非ロクロ成形。平底。やや上げ底気味。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。Aa2Ⅱ類。
351	Ⅷ	SD52008大溝内	—	土師器	Ⅲ	8.8	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　ややあまい。色調　灰黄色。Ab1Ⅱ類。
352	ⅤB	95－3S中	—	土師器	Ⅲ	12.7	2.3	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部と底部の界は明瞭。体部は緩やかに、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。Ab1Ⅳ類。
353	ⅥA	95－3整地土中 95－3整地土下	— 腐植土中	土師器	Ⅲ	12.8	2.8	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄橙色。Ab1Ⅳ類。
354	ⅦA	95－3S中	—	土師器	大Ⅲ	(30.8)	(4.5)	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　横方向のハケ目調整。体部内面　粗いミガキ調整。	焼成　良好。色調　灰白色。Ab2Ⅷ類。
355	Ⅷ	粘土盛土部 95－3Sまで	—	土師器	耳Ⅲ	大6.2 小1.9	1.7	4.2	非ロクロ成形。体部～口縁部を2ヶ所内側に折り曲げて、耳Ⅲを成形。	口縁部～体部内外面　ヨコナデ調整。底部外面　不調整。	色調　灰黄色。底部内面に赤色顔料附着。紅Ⅲとして使用か?
356	ⅦA	95－3S中	—	施釉陶器	Ⅲ	8.9	2.8	5.2	平底。高台は断面台形状で比較的低い。体部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも灰釉施釉。淡緑灰色に発色。畳付の釉かきとり。器面に細かい貫入。	瀬戸・美濃系灰釉陶器Ⅲ。ⅡA1類。大窯Ⅰ期。16世紀前半代。
357	ⅣA	—	赤褐色粗砂(3S)	施釉陶器	椀	(12.2)	(5.8)	—	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも灰釉施釉。淡黄緑灰色に発色。器面に粗い貫入。	瀬戸・美濃系灰釉陶器丸椀。大窯期。16世紀代。
358	ⅤA	95－3S以下	—	青磁	碗	(13.0)	(4.2)	—	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも青磁釉施釉。淡暗緑灰色に発色。器面に細かい貫入。	龍泉窯系青磁無文碗。ⅠA類。
359	Ⅲ	95－1～95－3 整地層まで	—	青花磁器	碗	(12.0)	(2.8)	—	体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁部は大きく外方にひらく。	外面　やや濃い呉須で施文。口縁部上面　界線2条。	明青花磁器。Ⅱ類。16世紀代。
360	ⅣD	95－3S	濁灰色粗砂まじり細砂	青花磁器	碗	12.1	5.2	4.7	底部の器壁は厚い。高台は逆台形で低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	外面　薄い呉須で草花文帯・草花文。内面　界線1条。底部内面　草花文。色調　青味を帯びた灰白色。	粗製の明青花磁器。釉切れが顕著に見られる。ⅠB類。蓮子碗。16世紀代。文様構成は361と同じ。
361	ⅤB	95－3S以下	腐植土中	青花磁器	碗	(13.7)	6.1	(5.1)	底部の器壁は比較的厚い。高台は断面逆台形状で比較的高い。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。	外面　非常に薄い呉須で草花文帯・草花文。内面　界線1条。底部内面　草花文。色調　青味を帯びた灰白色。	粗製の明青花磁器。釉切れが顕著に見られる。ⅠB類。蓮子碗。16世紀代。文様構成は360と同じ。
362	ⅣA	95－3面+1	—	土師器	Ⅲ	8.5	2.2	—	非ロクロ成形。器壁は全体に厚い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部に煤附着。焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅱ類。
363	ⅣA	95－3面+1	—	土師器	Ⅲ	8.7	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　明黄褐色。京都系。Aa1Ⅱ類。
364	ⅣA	95－3面+1	—	土師器	Ⅲ	8.8	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面に煤附着。焼成　良好。色調　浅黄色。Ab1Ⅱ類。
365	ⅦC	95－3面+1 95－3S溝	盛土中	土師器	Ⅲ	8.8	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成　良好。色調　浅黄色。Ab1Ⅱ類。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
366	ⅦC	95－3+1面	焼土面中	土師器	Ⅲ	8.8	1.9	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成　良好。色調　浅黄色。Ab1Ⅱ類。
367	ⅣA	95－3+1面	—	土師器	Ⅲ	8.9	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部に煤附着。底部内面に2ヶ所青銅色の附着物あり。焼成　良好。色調　淡黄色。Aa2Ⅱ類。
368	ⅣA	95－3+1面	—	土師器	Ⅲ	9.0	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Aa1Ⅱ類。
369	ⅣA	95－3+1面	—	土師器	Ⅲ	9.1	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　黄橙色。Aa2Ⅱ類。
370	ⅣA	95－3+1面	—	土師器	Ⅲ	9.7	2.2	—	非ロクロ成形。器形は著しく歪む。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。体部内面に布目圧痕。	焼成　良好。胎土　精良。色調　にぶい黄橙色。京都系。Aa1Ⅲ類。
371	ⅣB	95－3+1面まで	(灰黒色シルト中)	土師器	Ⅲ	9.7	2.1	—	非ロクロ成形。器形は著しく歪む。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。体部内面に布目圧痕。底部内面に円圏。	口縁部～底部内面に煤附着。焼成　良好。色調　にぶい黄色。Aa1Ⅲ類。
372	ⅤA	95－3+1面まで	南半部中心	土師器	Ⅲ	10.3	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が微かに残る。	内面全面に煤附着。焼成　良好。色調　暗灰黄色。Ab1Ⅲ類。
373	ⅣB	95－3+1面まで	(灰黒色シルト中)	土師器	Ⅲ	10.3	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部外面に低い段をもつ。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に微かに円圏が残る。	内外面に部分的に煤附着。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。Ab2Ⅲ類。
374	ⅣB	95－3+1面まで	(灰黒色シルト中)	土師器	Ⅲ	10.6	2.0	—	非ロクロ成形。平底。やや上げ底気味。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成　良好。色調　灰黄色。Ab2Ⅲ類。
375	ⅦC	95－3+1面	焼土面中	土師器	Ⅲ	10.6	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成　良好。色調　浅黄色。体部外面に3箇所剥離痕（木製脚台の支え痕か?）。Aa1Ⅲ類。
376	Ⅲ	95－3+1面	土塁際コーナー	土師器	Ⅲ	10.9	2.8	—	非ロクロ成形。平底。器高は比較的高い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　灰黄色。Aa2Ⅲ類。
377	ⅣA	95－3+1面	—	土師器	Ⅲ	12.4	2.3	—	非ロクロ成形。器壁は全体に薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	口縁部に煤附着。焼成　良好。色調　灰黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。
378	ⅣA	95－3+1面	—	土師器	Ⅲ	12.6	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　明黄褐色。京都系。Ab1Ⅳ類。
379	ⅣA	95－3+1面	—	土師器	Ⅲ	12.7	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に微かに円圏が残る。	底部外面に毛髪状の圧痕?　焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。Ab1Ⅳ類。
380	ⅣB	95－3+1面まで	(灰黒色シルト中)	土師器	Ⅲ	14.1	2.5	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。
381	ⅣA	95－3+1面	—	土師器	Ⅲ	(14.2)	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に微かに円圏が残る。	焼成　良好。胎土　精良。色調　にぶい黄橙色。京都系。Ab1Ⅳ類。
382	Ⅷ	95－4面まで	主に3S下　3+1まで	土師器	Ⅲ	(14.5)	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　黄褐色。京都系。Ab1Ⅴ類。
383	ⅣB	95－3+1面まで	(灰黒色シルト中)	土師器	Ⅲ	14.8	2.7	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部外面に板状工具の痕跡。底部内面に円圏が微かに残る。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Aa1Ⅴ類。
384	ⅣB	95－3+1面まで	(灰黒色シルト中)	土師器	Ⅲ	15.0	2.4	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面にヘラ描き線あり。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅴ類。
385	Ⅰ	95－3+1面まで	—	瓦質土器	擂鉢	(25.7)	(10.3)	—	体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は外上方につまみ出す。口縁部の1ヶ所を捻って片口を作り出す。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　指おさえの後、回転ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　7条1単位の擂目施文。	色調　黒褐色。Ba1類。16世紀代。
386	Ⅰ	95－3+1面まで	—	瓦質土器	擂鉢	—	(2.6)	(11.0)	平底。	内外面とも器面の剥離が著しい。僅かに底部内面に擂目痕。	色調　にぶい黄橙色。
387	Ⅲ	土塁際 95－3+1面	濁褐灰色シルト	無釉陶器	擂鉢	(25.6)	10.5	9.2	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁部外面　凹線2条。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　回転ナデ調整。体部内面　11条1単位の擂目施文。	焼成は非常に堅緻。色調　暗赤褐色。備前焼Ⅴ期。16世紀代。
388	ⅧC	95－3+1面	—	施釉陶器	四耳壺	10.5	35.7	—	体部は大きく内彎して、ほぼ直上に延びる。体部上位に最大径をもつ。頸部は短く内傾して、口縁端部は尖り気味に収める。体部外面上位に横耳を4箇所貼り付ける。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。外面に薄く褐釉施釉。灰褐色に発色。	体部外面に胡麻状に灰被り。華南産褐釉四耳壺。いわゆる　呂宋壺。16世紀代。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
389	ⅥA	95－3整地層下	腐植土中(堀最上層)	施釉陶器	埦(天目)	(12.3)	6.6	4.5	内反り高台。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は屈曲して、僅かに外方にひらく。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。体部外面の下位に回転ヘラ削り痕が見られる。内外面とも鬼板塗布。内外面とも鉄釉施釉。暗茶褐色に発色。外面の体部下半以下露胎。	瀬戸・美濃系天目茶碗。大窯Ⅲ期。16世紀後半代。
390	ⅣA	95－3面+1	—	青磁	輪花皿	11.3	3.3	5.8	底部の器壁は非常に厚い。平底。高台は断面台形状で、低い。体部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。口縁部は輪花状に成形。	体部内面　浅い沈線を波状に施文。底部内面　ヘラ状工具でくずれた草花文施文。内外面とも青磁釉施釉。淡青灰色に発色。器面に粗い貫入。畳付まで施釉。高台裏の釉はかきとり。	龍泉窯系青磁。ⅡA類。16世紀代。
391	Ⅰ	95－3面+1まで	—	青磁	碗	—	(3.5)	5.2	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く、比較的高い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	体部外面に線描きの蓮弁文?施文。体部内面「壽□」を印花で施文。内外面とも青磁釉施釉。淡暗緑灰色に発色。畳付まで施釉。高台裏は露胎。	龍泉窯系青磁。15世紀代。
392	ⅤA	95－3面+1まで	—	青磁	碗	(11.6)	(3.5)	—	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	体部外面に剣頭と身が不一致の線描きの蓮弁文を施文。内外面とも青磁釉施釉。くすんだオリーブ灰色に発色。器面に細かい貫入。	龍泉窯系青磁。ⅠB2類。16世紀代。
393	ⅤA	95－3面+1まで	—	青磁	碗	—	(4.1)	(6.0)	高台は逆台形で比較的高い。体部は内彎して斜め上方に立ち上がる。	内外面とも青磁釉施釉。淡黄緑色に発色。畳付の釉はかきとり。器面に細かい貫入。	龍泉窯系青磁。
394	ⅣB	95－3面+1まで	95－3S中	青花磁器	皿	(10.5)	(1.9)	—	器壁は非常に薄い。口縁部若干外方にひらく。	外面　呉須　太い界線1条。草花文。内面　呉須　斜線文・界線1条。	明青花磁器。Ⅱ類。16世紀代。
395	ⅥA－Ⅸ	SD54001	コーナー部	土師器	皿	(10.2)	2.5		非ロクロ成形。平底。体部は短く直立。口縁端部は尖り気味。	体部～口縁部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部外面　不調整　指頭圧痕が残る。	色調　灰黄褐色。
396	ⅢB	SD54001最上層	(95－3S下腐植土)	土師器	皿	8.8	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成　良好。色調　浅黄色。Aa2Ⅱ類。
397	ⅢB	SD54001 コーナー	北側溝底	土師器	皿	8.4	1.9	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄色。Aa2Ⅱ類。
398	ⅥA ⅥD	SD54001	堀肩腐植土	土師器	皿	8.5	2.3	—	非ロクロ成形。器壁は比較的厚い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後布によるナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Aa2Ⅱ類。
399	ⅢB	SD54001最上層	(95－3S下腐植土)	土師器	皿	8.7	1.9	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa2Ⅱ類。
400	ⅢB	SD54001最上層	(95－3S下腐植土)	土師器	皿	8.7	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Aa1Ⅱ類。
401	ⅨA	SD54001	溝底	土師器	皿	9.2	2.1	—	非ロクロ成形。器壁は全体に比較的薄い。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面に円圏が認められる。色調　黒灰色。
402	ⅥA ⅥD	SD54001	堀肩腐植土	土師器	皿	8.8	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Aa1Ⅱ類。
403	ⅢB	SD54001 コーナー	北側溝底	土師器	皿	8.9	1.9	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成　良好。色調　浅黄色。Aa1Ⅱ類。
404	ⅨB ⅨC	SD54001	腐植物まじり濁灰シルト	土師器	皿	9.0	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰白色。Aa1Ⅱ類。
405	ⅨA	SD54001	—	土師器	皿	9.0	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅱ類。
406	ⅥA ⅥD	SD54001	堀肩腐植土	土師器	皿	8.3	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は外方にひらく。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅱ類。
407	ⅨA	SD54001	—	土師器	皿	9.4	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	口縁部内外面に煤若干附着。焼成　良好。色調　浅黄色。Ab1Ⅲ類。
408	ⅨB ⅨC	SD54001	腐植物まじり濁灰シルト	土師器	皿	9.4	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部外面に板状工具痕。	焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅲ類。
409	ⅢB	SD54001 コーナー	北側溝底	土師器	皿	9.9	2.1	—	非ロクロ整形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅲ類。
410	ⅥA ⅥD	SD54001	第3層	土師器	皿	9.4	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面全面に煤附着。色調　黒褐色。焼成　ややあまい。色調　浅黄橙色。Ab2Ⅲ類。
411	ⅢB	SD54001 コーナー	北側溝底	土師器	皿	12.7	2.9	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が微かに残る。	焼成　良好。色調　灰黄色。Ab1Ⅳ類。
412	ⅢB	SD54001 コーナー	北側溝底	土師器	皿	12.7	2.5	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が微かに残る。	焼成　良好。色調　浅黄色。Aa2Ⅳ類。
413	ⅨB ⅨC	SD54001	腐植物まじり濁灰シルト	土師器	皿	12.8	2.4	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が微かに残る。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab2Ⅳ類。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
414	ⅨA	SD54001	—	土師器	皿	12.7	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。内面の底部と体部の界に凹線1条。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。
415	ⅥA	SD54001	コーナー部	土師器	皿	13.2	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Ab1Ⅳ類。
416	ⅢB	SD54001最上層	(95－3S下腐植土)	土師器	皿	13.5	2.6	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　浅黄色。Ab2Ⅳ類。
417	ⅥA	SD54001	コーナー部	土師器	皿	14.6	2.3	—	非ロクロ成形。器壁は全体に比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　明黄褐色。京都系。Ab1Ⅴ類。
418	ⅥB ⅥC	SD54001	—	土師器	皿	14.8	2.7	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面は器面が摩滅する。	口縁部内面に煤点々と附着。焼成　ややあまい。色調　暗灰黄色。Aa1Ⅴ類。
419	ⅥD	SD54001西肩	—	土師器	皿	(16.5)	3.1	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　多方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅴ類。
420	ⅥA	SD54001	コーナー部溝底	土製品	土錘	長)5.3	巾)1.8	厚)1.6	棒状のものに粘土を巻きつけて成形。形状はほぼ円柱状。	外面ナデ調整。	焼成　堅緻。色調　灰黄色。
421	ⅥA	SD54001	コーナー部溝底	土製品	土錘	長)4.8	巾)1.7	厚)1.7	棒状のものに粘土を巻きつけて成形。形状はほぼ円柱状。一部欠損。	外面ナデ調整。	焼成　堅緻。色調　褐灰色。
422	ⅥA	SD54001	コーナー部溝底	土製品	土錘	長)4.6	巾)1.9	厚)1.8	棒状のものに粘土を巻きつけて成形。形状は歪な円柱状。	外面ナデ調整。	焼成　堅緻。色調　灰黄色。
423	ⅥA	SD54001	コーナー部溝底	土製品	土錘	長)4.5	巾)1.7	厚)1.6	棒状のものに粘土を巻きつけて成形。形状は歪な円柱状。	外面ナデ調整。	焼成　堅緻。色調　暗灰色。
424	ⅥA	SD54001	コーナー部溝底	土製品	土錘	長)(4.6)	巾)1.7	厚)1.6	棒状のものに粘土を巻きつけて成形。形状はほぼ円柱状。一部欠損。	外面ナデ調整。	焼成　堅緻。色調　暗灰色。
425	ⅥA	SD54001	コーナー部溝底	土製品	土錘	長)4.1	巾)1.7	厚)1.5	棒状のものに粘土を巻きつけて成形。形状はほぼ円柱状。一部欠損。	外面ナデ調整。	焼成　堅緻。色調　暗灰色。
426	ⅥA	SD54001	コーナー部溝底	土製品	土錘	長)4.1	巾)1.7	厚)1.6	棒状のものに粘土を巻きつけて成形。形状はほぼ円柱状。	外面ナデ調整。	焼成　堅緻。色調　暗灰色。
427	—	SD54001	—	瓦質土器	こね鉢	(30.9)	(10.6)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は水平に外方につまみ出す。口縁部内面　沈線1条。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　縦方向のハケ目調整の後、ナデ調整。	色調　暗灰色。Bc2類。
428	Ⅸ	SD54001	—	瓦質土器	擂鉢	(21.7)	(7.9)	(7.2)	体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　7条1単位の擂目施文。縦方向の擂目の上に4条1単位の波状文を施文。	色調　暗灰色。Ca2類。16世紀代。
429	Ⅵ	SD54001	—	瓦質土器	擂鉢	(22.4)	9.6	9.5	平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。口縁部の1ヶ所を捻って、小さい片口を作り出す。	口縁部から体部内外面　回転ナデ調整。底部外面　ナデ調整。体部内面　6条1単位の櫛描きの擂目を13単位施文。底部内面　擂目無し。	色調　灰～暗灰色。Ab1類。16世紀代。
430	Ⅵ	SD54001	腐植土層	瓦質土器	擂鉢	—	(5.3)	(10.4)	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。	体部外面　指おさえの後、縦方向の粗いハケ目調整。体部内面　7条1単位の擂目施文。	色調　黄灰色。
431	ⅣD Ⅸ	95－4面 SD54004主 SD54001	溝底	瓦質土器	擂鉢	(29.6)	12.6	(11.1)	底部は平高台。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指押さえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　7条1単位の擂目を櫛描き。底部内面　5条1単位の擂目を×状に交差して櫛描き。底部外面　ナデ調整。	色調　灰～暗灰色。Ca1類。16世紀代。
432	Ⅲ－Ⅵ	SD54001	主に腐植土中	無釉陶器	擂鉢	(31.6)	11.0	(14.3)	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。口縁部内面に沈線1条。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　回転ナデ調整。体部内面　9条1単位の擂目施文。底部外面　ナデ調整?	焼成は堅緻。色調　明褐灰色。越前焼。B1類。16世紀代。
433	Ⅲ	東掘肩 SD54001	杭レツ検出時	施釉陶器	塊	(11.7)	(5.1)	—	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は屈曲して僅かに外方にひらく。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。内外面とも鉄釉施釉。暗茶褐色に発色。	瀬戸・美濃系天目茶碗。大窯期。16世紀代。
434	Ⅲ－Ⅵ ⅦA ⅤB	Section SD54001 95－3S中 95－4面まで	— 整地土内 —	施釉陶器	皿	(11.0)	2.3	5.5	底部の器壁は非常に厚い。平底。高台は断面台形状の低い貼り付け高台。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	底部内面に印花で菊花文施文。内外面とも灰釉施釉。淡緑灰色に発色。器面に細かい貫入が見られる。畳付の釉はかきとり。	高台裏に目跡。瀬戸・美濃系灰釉陶器皿。ⅡA2類。大窯期。16世紀代。
435	Ⅲ	SD54001	—	青花磁器	皿	(10.0)	2.7	(3.0)	碁笥底。体部は緩やかに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面　界線2条・草花文(蘇鉄?)。外面　無文。底部外面　蛇の目状釉ハギ。	明青花磁器。ⅠA類。16世紀代。
436	Ⅵ	SD54001	腐植土層	青花磁器	碗	—	(3.2)	(7.2)	高台は断面台形状で高い。体部は内彎気味に斜め上方に立ち上がる。	外面　呉須　芭蕉文。底部内面　呉須　界線1条・草花文。	畳付に砂附着。C類。明青花磁器。16世紀代。
437	ⅨA ⅨD	SD54001 SD54001	—	青花磁器	青花碗	13.1	5.8	5.4	底部の器壁は非常に厚い。高台は断面方形状で低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	外面　呉須　唐草文。界線1条。内面　界線1条。底部内面　くずれた草花文。色調　黄色味を帯びた灰白色。畳付・高台裏は露胎。	粗製の明青花磁器。ⅠC類。16世紀代。
438	ⅨC	SD54002	上半	土師器	皿	8.3	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅱ類。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
						口径	器高	底径			
439	Ⅲ	SD54002b	越前スリ鉢共伴	土師器	皿	8.4	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅱ類。
440	Ⅲ	SD54002b	越前スリ鉢共伴	土師器	皿	8.7	2.2	—	非ロクロ成形。平底。器形は著しく歪む。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰白色。Aa1Ⅱ類。
441	Ⅲ	SD54002	堀外の可能性あり	土師器	皿	12.3	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。体部内面は器面の剥離が著しい。	焼成　ややあまい。色調　灰黄色。Aa1Ⅳ類。
442	Ⅲ	SD54002	—	土師器	皿	12.8	2.4	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　淡黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。
443	Ⅳ－X Ⅲ	SD54002b SD54002	— 越前スリ鉢共伴 掘外の可能性あり	無釉陶器	擂鉢	35.0	12.1	15.1	粘土紐巻上げ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。口縁端部は上面に水平に端面をもつ。口縁部内面に凹線1条。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。体部内面　9条1単位の櫛描きの擂目を施文。1ヶ所で斜め方向の擂目と交差する。底部内面　9条1単位の擂目を「×」状に交差させて施文。外面の体部下半～底部　ヘラ削り調整。	特に内面の下位が使用のため、摩滅が著しい。焼成　良好。色調　にぶい赤褐色。越前焼。B1類。16世紀代。
444	ⅥC	SD54002最上層	検出時	白磁	皿	(13.1)	2.5	(7.8)	平底。高台は断面三角形で細く低い。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。器面に細かい貫入が入る。高台畳付の釉は丁寧にかきとる。	華南産白磁。森田分類　E－1群。16世紀代。
445	Ⅲ	SD54002b	越前スリ鉢共伴	青花磁器	碗	(12.2)	6.1	(4.5)	底部はやや上げ底気味。高台は細く高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　呉須　雷文帯・牡丹唐草文・界線1・2条。底部外面　界線2条・「福□」銘。内面　界線2条。底部内面　界線2条・牡丹文。	色調　青味を帯びた灰白色。器面に虫喰い。明青花磁器。ⅠA類。饅頭心碗。16世紀代。
446	Ⅲ	SD54002b	越前スリ鉢共伴	青花磁器	碗	(11.7)	(5.0)	—	器壁は比較的薄い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　界線2条・水龍に牡丹唐草文。内面　界線2条。	明青花磁器。Ⅰ類。16世紀代。
447	Ⅲ	SD54002	—	青花磁器	碗	(11.8)	6.2	4.5	高台は細く高い。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面　界線1・1条。底部外面　「福」銘。内面　界線1条。底部内面　算木文・丸文。	明末～清初青花磁器。ⅠC類。17世紀前半。
448	ⅥB	SD54003	—	土師器	皿	12.7	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が微かに残る。	口縁部内外面に煤附着。焼成　ややあまい。色調　にぶい黄色。Ab2Ⅳ類。
449	ⅥA	95－5面まで SD54003	土鈴と共伴	土製品	土鈴	高)4.2	腹径) 4.1	玉φ 1.0	手づくね成形。もち手を作り出し、1ヶ所紐通しの孔を穿孔する。底部をヘラ状工具で切り、土玉を入れる。	外面　全面に指おさえの後、ナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄色。
450	ⅦA	95－4面 SD54004	—	土師器	皿	8.7	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Aa1Ⅱ類。
451	ⅦD	SD54004	土師皿集中部	土師器	皿	8.7	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅱ類。
452	ⅦD	SD54004	土師皿集中部	土師器	皿	8.7	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部に煤附着。底部外面に板状工具の当り痕。焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅱ類。
453	ⅦD	SD54004	土師皿集中部	土師器	皿	8.8	1.9	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄橙色。Aa1Ⅲ類。
454	ⅦD	SD54004	土師皿集中部	土師器	皿	8.9	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Aa1Ⅱ類。
455	ⅦD	SD54004	土師皿集中部	土師器	皿	8.9	1.9	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　黄灰色。Aa1Ⅱ類。
456	ⅦD	SD54004	土師皿集中部	土師器	皿	8.9	2.0	—	非ロクロ成形。平底。やや上げ底気味。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部に煤附着。焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅱ類。
457	ⅦD	SD54004	土師皿集中部	土師器	皿	9.0	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。所々に火ぶくれ。	焼成　良好。色調　浅黄色。Aa1Ⅱ類。
458	ⅦD	SD54004	土師皿集中部	土師器	皿	9.0	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部に若干煤附着。焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Aa1Ⅱ類。
459	ⅦD	SD54004	土師皿集中部	土師器	皿	9.1	1.9	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部に若干煤附着。体部外面にヘラ状工具痕。焼成　良好。色調　浅黄色。Aa1Ⅱ類。
460	ⅦA	95－4面 SD54004	—	土師器	皿	9.1	2.0	—	非ロクロ成形。器壁は比較的厚い。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部外面に板状工具痕。	焼成　良好。色調　灰黄色。Aa2Ⅱ類。
461	ⅦD	SD54004	土師皿集中部	土師器	皿	9.1	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Aa2Ⅱ類。
462	ⅦA	95－4面 SD54004	—	土師器	皿	9.3	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Aa1Ⅲ類。
463	ⅦA	SD54004	茶褐色腐植土中	土師器	皿	9.3	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　淡黄色。京都系。Aa1Ⅲ類。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
464	ⅦA	SD54004	茶褐色腐植土中	土師器	皿	10.7	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　浅黄色。
465	ⅦA	SD54004	茶褐色腐植土中	土師器	皿	11.0	2.6	—	非ロクロ成形。平底。器壁は比較的厚い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Ab2Ⅲ類。
466	ⅦD	SD54004	土師皿集中部	土師器	皿	12.4	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏あり。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。
467	ⅦD	SD54004	土師皿集中部	土師器	皿	12.4	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。京都系。
468	ⅦD	SD54004	土師皿集中部	土師器	皿	12.4	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏あり。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab2Ⅳ類。
469	ⅦD ⅦC	SD54004 95－4Sまで (95－4a，95－4k中)	土師皿集中部 —	土師器	皿	12.6	2.5	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏あり。	焼成　良好。色調　黄灰色。京都系。Ab1Ⅳ類。
470	ⅦD	SD54004	土師皿集中部	土師器	皿	12.8	2.4	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏あり。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab2Ⅳ類。
471	ⅥD	SD54004	—	土師器	皿	12.8	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　浅黄色。Ab1Ⅳ類。
472	ⅦD	SD54004	土師皿集中部	土師器	皿	12.9	2.5	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab2Ⅳ類。
473	ⅦA	SD54004	茶褐色腐植土中	土師器	皿	13.4	2.8	—	非ロクロ成形。平底。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。Ab1Ⅴ類。
474	ⅦA	SD54004	茶褐色腐植土中	土師器	皿	13.6	2.7	—	非ロクロ成形。平底。器壁は比較的薄い。。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Ab1Ⅴ類。
475	ⅦA	95－4面 SD54004	—	土師器	皿	13.6	2.7	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab2Ⅴ類。
476	ⅦD	SD54004	—	土師器	皿	13.9	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に細い円圏あり。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Aa1Ⅴ類。
477	ⅦD	SD54004	土師皿集中部	土師器	皿	14.0	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏あり。	焼成　良好。色調　淡黄色。京都系。Ab1Ⅴ類。
478	ⅦD	SD54004	土師皿集中部	土師器	皿	14.4	2.4	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏あり。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅴ類。
479	ⅦA	95－4面 SD54004	—	土師器	皿	14.6	3.0	—	非ロクロ成形。器壁は比較的厚い。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　黄灰色。京都系。Ab1Ⅴ類。
480	ⅦD	SD54004	土師皿集中部	土師器	皿	14.7	2.6	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏あり。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Aa1Ⅴ類。
481	ⅦD	SD54004	—	土師器	皿	14.7	2.7	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏あり。	焼成　良好。色調　灰黄色。京都系。Aa1Ⅴ類。
482	ⅦD	SD54004	土師皿集中部	土師器	皿	15.3	2.6	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏あり。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅴ類。
483	ⅥD	95－4面 SD54004主		土師器	皿	17.2	(2.8)	—	非ロクロ成形。平底。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　ナデ調整。体部内面　多方向のナデ調整。ヘラ状工具痕。	焼成　良好。色調　浅黄色。Ab1Ⅵ類。
484	ⅦD	95－4面まで	溝内主	土師器	皿	18.2	3.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　多方向のナデ調整。底部内面にヘラ状工具痕。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅵ類。
485	ⅦA	95－4面 SD54004	茶褐色腐植土中 —	施釉陶器	埦	(12.3)	(3.8)	—	体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。	内外面とも灰釉施釉。淡黄緑灰色に発色。器面に細かい貫入。	瀬戸・美濃系灰釉陶器丸椀。大窯期。16世紀代。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
486	ⅦA	SD54004	—	青磁	碗	(12.9)	(4.1)	—	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも青磁釉施釉。淡灰緑色に発色。口縁部に1ヶ所飛び青磁風に鉄釉附着。	龍泉窯系青磁無文碗。ⅠA類。
487	ⅣD	SD54004主 95－4面	—	白磁	Ⅲ	(9.7)	(1.5)	—	体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。外面の体部下半以下露胎。	華南産白磁。
488	ⅦC	集石部分	—	土師器	Ⅲ	(8.7)	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄褐色。Ab1Ⅱ類。
489	ⅦC	集石部分	—	土師器	Ⅲ	9.4	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄色。Aa1Ⅱ類。
490	ⅣA	集石部分	—	土師器	Ⅲ	(13.5)	2.2	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面全面に煤附着。焼成　良好。色調　灰黄色。Ab2Ⅲ類。京都系。
491	Ⅳ	集石部	—	土師器	Ⅲ	9.2	2.2	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は緩やかに、直線的に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。底部内面　1方向のナデ調整。体部外面に爪の痕。	口縁部内面に煤若干附着。焼成　良好。色調　灰黄色。Ab1Ⅱ類。
492	ⅣA	集石部分	—	土師器	Ⅲ	8.9	2.2	—	非ロクロ成形。器壁は比較的厚い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅱ類。
493	Ⅳ	集石部	—	施釉陶器	Ⅲ	—	(1.5)	—	底部の器壁は比較的厚い。高台は断面三角形状で低い。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	底部内面　菊花文を印花で施文。内外面とも灰釉施釉。高台裏まで施釉。淡黄緑色に発色。	高台裏にツク附着。瀬戸・美濃系灰釉陶器皿。ⅡA2類。大窯期。16世紀代。
494	ⅦA	95－4面まで (SD52008より 北)	—	土師器	Ⅲ	4.7	1.5	—	非ロクロ成形。体部は短く直立する。口縁端部は尖り気味。	底部内面～体部外面　ヨコナデ調整。底部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。	色調　浅黄橙色。蓋の可能性あり。BⅠ類。
495	ⅤA	95－4面まで 北半分中心	—	土師器	Ⅲ	4.9	1.7	—	非ロクロ成形。体部は短く直立する。口縁端部は丸みをもつ。	底部内面～体部外面　ヨコナデ調整。底部外面　不調整。指頭圧痕が残る。	色調　浅黄橙色。蓋の可能性あり。BⅠ類。
496	ⅦA	SD52008より南 3面下	灰黒色シルト 焼土まじり	土師器	Ⅲ	4.9	1.6	—	非ロクロ成形。平底。体部は短く直立。口縁端部は丸味をもつ。	底部内面～体部外面　ヨコナデ調整。底部外面　不調整。指頭圧痕が残る。	色調　橙色。蓋の可能性あり。BⅠ類。
497	ⅣA	95－4面まで	—	土師器	Ⅲ	(7.7)	(2.4)	—	非ロクロ成形。器壁は全体に比較的厚い。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　普通。色調　にぶい黄橙色。
498	ⅤB	95－4面まで	土間より南半部中心	土師器	Ⅲ	8.3	1.9	—	非ロクロ成形。器形はやや歪む。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。色調　灰黄色。京都系。Ab1Ⅱ類。
499	ⅣB	95－4面まで	—	土師器	Ⅲ	8.4	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部に煤若干附着。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅱ類。
500	Ⅷ	95－4面まで	主に3S下　3+1まで	土師器	Ⅲ	8.4	1.8	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄色。Aa1Ⅱ類。
501	Ⅰ	95－4面まで	4a内	土師器	Ⅲ	8.5	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。体部内面に布目圧痕。	口縁部内外面に煤附着。焼成　ややあまい。色調　灰黄色。Aa1Ⅱ類。
502	ⅤB	95－3S以下	腐植土中	土師器	Ⅲ	8.5	1.9	—	非ロクロ成形。器壁は全体に厚い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　淡黄色。Aa1Ⅱ類。
503	ⅤB	95－4面	土間まで南半部	土師器	Ⅲ	8.5	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部外面に板状工具痕?	口縁部に若干煤附着。焼成　良好。色調　浅黄色。Ab1Ⅱ類。
504	Ⅷ	95－4面まで	腐植土中	土師器	Ⅲ	(8.5)	1.9	—	非ロクロ成形。器形は若干歪む。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好　色調　浅黄橙色。Aa1Ⅱ類。
505	Ⅷ	95－4面まで	主に3S下　3+1まで	土師器	Ⅲ	8.5	1.8	—	非ロクロ成形。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は直線的に緩やかに外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。Ab1Ⅱ類。
506	Ⅳ	95－3整地層より 下 (95－4K)	—	土師器	Ⅲ	8.6	1.9	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　淡黄色。Aa1Ⅱ類。
507	ⅤB	95－4面まで	—	土師器	Ⅲ	8.7	1.9	—	非ロクロ成形。平底。やや上げ底気味。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内面に一部煤附着。焼成　良好。色調　灰黄色。Ab1Ⅱ類。
508	ⅣA	95－4面まで	濁灰色粗砂	土師器	Ⅲ	8.8	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成　良好。色調　灰黄褐色。Aa2Ⅱ類。
509	ⅦA	95－4面まで (SD52008より 北)	—	土師器	Ⅲ	8.8	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁端部に若干煤附着。焼成　良好。色調　浅黄色。Aa1Ⅱ類。
510	Ⅷ	95－4面まで	腐植土中	土師器	Ⅲ	8.8	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。体部内面に僅かに布目圧痕。底部外面に板状工具痕。	焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅱ類。
511	Ⅷ	95－4面まで	主に95－3S下 95－3+1まで	土師器	Ⅲ	8.9	2.2	—	非ロクロ成形。平底。やや上げ底気味。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	底部外面に墨痕。焼成　良好。色調　灰黄褐色。京都系。Aa1Ⅱ類。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
512	ⅣB	95－4面まで	—	土師器	Ⅲ	9.0	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面にミガキの痕跡?。底部外面　板状工具痕あり。	口縁部内外面　煤附着。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅱ類。
513	ⅦA	95－4面まで（SD52008より北）	—	土師器	Ⅲ	9.0	2.1	—	非ロクロ成形。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　不定方向のナデ調整。	口縁部に煤附着。底部内面に稲籾痕。焼成　ややあまい。色調　灰黄色。Aa1Ⅱ類。
514	ⅤB	95－3S以下	腐植土中	土師器	Ⅲ	9.0	2.0	—	非ロクロ成形。器壁は全体に厚い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄色。Ab1Ⅱ類。
515	Ⅷ	95－4面まで	腐植土中	土師器	Ⅲ	9.0	1.9	—	非ロクロ成形。平底。やや上げ底気味。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部に若干煤附着。焼成　ややあまい。色調　灰黄色。Ab2Ⅱ類。
516	Ⅷ	95－4面まで	腐植土中	土師器	Ⅲ	9.0	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内外面全面に煤附着。焼成　ややあまい。色調　灰黄色。Aa2Ⅱ類。
517	ⅥA	95－3整地層下	腐植土中 堀最上層ヵ	土師器	Ⅲ	9.1	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。色調　灰黄色。Aa1Ⅱ類。
518	ⅣC	95－4面上	黒褐色シルト	土師器	Ⅲ	9.1	2.0	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Aa1Ⅲ類。
519	Ⅶ－Ⅷ	—	黒色腐植土層	土師器	Ⅲ	9.1	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄色。Ab1Ⅲ類。
520	ⅣA	95－4面まで	濁灰色粗砂	土師器	Ⅲ	9.2	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Ab1Ⅲ類。
521	Ⅷ	95－4面まで	腐植土中	土師器	Ⅲ	9.5	1.8	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅲ類。
522	Ⅷ	95－4面まで	—	土師器	Ⅲ	9.6	2.3	—	非ロクロ成形。平底。やや上げ底気味。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab2Ⅲ類。
523	ⅦA	95－4面まで（SD52008より北）	—	土師器	Ⅲ	10.3	2.3	—	非ロクロ成形。器形はかなり歪む。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Ab1Ⅲ類。
524	Ⅷ	95－4面まで	茶色腐植土	土師器	Ⅲ	10.3	2.0	—	非ロクロ成形。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　不定方向のナデ調整。	焼成　良好。口縁部内外面に煤附着。色調　にぶい黄色。
525	Ⅷ	95－4面まで	—	土師器	Ⅲ	12.6	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Aa2Ⅳ類。
526	ⅣA	4面まで	3+1面以下	土師器	Ⅲ	12.6	2.0	—	非ロクロ成形。平底。。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に微かに円圏が残る。	焼成　良好。色調　灰黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。
527	ⅣC	95－4面上	黒褐シルト	土師器	Ⅲ	12.7	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Aa1Ⅳ類。
528	ⅢA	—	北側側溝	土師器	Ⅲ	12.9	2.3	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Ab2Ⅳ類。
529	ⅣC	95－4面	図に有	土師器	Ⅲ	12.9	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が微かに残る。	焼成　良好。色調　淡黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。
530	ⅦC	SD52008より北 95－4面まで	暗灰シルト中	土師器	Ⅲ	12.9	2.0	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　灰黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。
531	Ⅷ	95－4面まで	主に3S下　3+1まで	土師器	Ⅲ	(13.0)	(2.1)	—	非ロクロ成形。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。
532	Ⅷ	95－4面まで	腐植土中	土師器	Ⅲ	13.0	2.1	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab2Ⅳ類。
533	Ⅷ	95－4面まで	腐植土中	土師器	Ⅲ	13.1	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が微かに残る。	焼成　良好。口縁部内外面に煤附着。色調　灰黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。
534	ⅦA	4面まで	焼土下の腐植土	土師器	Ⅲ	13.5	2.7	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。口縁部内面　凹線1条。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。Ab1Ⅴ類。
535	Ⅷ	95－4面まで	茶色腐植土	土師器	Ⅲ	13.7	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　ややあまい。色調　暗灰黄色。Ab1Ⅴ類。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
						口径	器高	底径			
536	ⅤA	95－4面まで	—	土師器	皿	14.0	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　灰黄色。京都系。Ab1Ⅴ類。
537	ⅣD	95－4面まで	—	土師器	皿	(14.1)	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅴ類。
538	Ⅷ	95－4面まで	茶色腐植土	土師器	皿	14.1	2.1	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab2Ⅴ類。
539	ⅤA	95－4面まで	—	土師器	皿	14.2	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　灰黄色。京都系。Ab2Ⅴ類。
540	ⅦC	95－4a・95－4K	—	土師器	皿	(14.3)	2.8	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。口縁部内面　凹線1条。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Aa1Ⅴ類。
541	ⅣA	95－4面まで	濁灰色粗砂	土師器	皿	(14.4)	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　黄灰色。京都系。Aa2Ⅴ類。
542	ⅣA	95－4面まで	3S濁灰粗砂中	土師器	皿	14.4	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　明黄褐色。京都系。Ab1Ⅴ類。
543	ⅣB	—	暗灰色シルト粒砂まじり	土師器	皿	(16.9)	(1.9)	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。京都系。Aa1Ⅵ類。
544	Ⅶ－Ⅷ	95－4面上層	黒色腐植土層	土師器	皿	(18.8)	(2.8)	—	非ロクロ成形。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。	内外面とも煤が多量に附着。焼成　良好。色調　オリーブ黒色。京都系。Ab1Ⅵ類。
545	ⅥC	—	黄褐灰色粗砂まじりシルト	瓦質土器	蓋	(9.9)	3.2	—	体部の上面は扁平。中央部に切頭円錐状のつまみを貼り付け。かぶせ蓋。体部は斜め下方に延びる。	体部外面　不定方向のナデ調整。口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部内面　一方向のナデ調整。	色調　褐灰色。Ⅰ類。
546	Ⅳ	95－3整地層より下	—	土師器	小型壺	(8.6)	(5.3)	—	器壁は比較的厚い。体部は内彎。口縁部は短く直立。口縁端部は丸みをもつ。	内外面とも回転ナデ調整。器面を平滑に仕上げる。	焼成　堅緻。色調　にぶい黄橙色。
547	ⅦA	SD52008より南	95－4a (95－4面まで)	土製品	土錘	長4.0	巾1.4	厚1.3	棒状のものに粘土を巻きつけて成形。	外面　ナデ調整。	色調　オリーブ黒色。
548	ⅦA	95－4面まで SD52008より北	—	土製品	羽口	長 (5.7)	巾 (5.7)	厚 (2.4)	円柱状。	色調　外面　灰色。内面　にぶい橙色。	鞴の羽口。
549	Ⅷ	95－4面まで	腐植土中	瓦質土器	燭台	(9.3)	(6.5)	—	脚部は短く直立。皿部は緩やかに外上方に延びる。皿部の器壁は厚い。皿の中央部に脚部を貫いて穿孔1ヶ所。	外面　ヘラミガキ調整。内面　回転ナデ調整。煤附着。	色調　暗灰色。灯明皿を載せる燭台。中央の穿孔は釘穴か?
550	ⅦC ⅦA ⅦA	95－4面まで 95－4面 95－4面まで	段差より北SD4008より南 南半部中心 —	瓦質土器	火鉢	—	(8.0)	(16.1)	平底。体部は直線的に外上方に延びる。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面　指おさえ。指頭圧痕が全面に見られる。体部外面　縦方向及び横方向のヘラケズリ調整。	色調　暗灰色。火鉢あるいは火消し壷か?
551	ⅣD	95－4面まで	赤褐色粗砂 火事かたずけ土?	瓦質土器	桶形容器	—	(11.4)	(25.5)	平底。外縁部に断面台形状の低い高台を貼り付ける。体部は直立。体部外面の下部に箍を意識した小さい凸帯が1条巡る。	体部内面　ヨコナデ調整。底部内外面　不定方向のナデ調整。体部外面　ヨコナデ調整の後、縦及び横方向のミガキ調整。	ミガキにより器面は平滑に仕上げる。色調　炭素が附着せず淡黄色を呈する。木製の桶を模倣した桶状容器。火消し壷?　Ⅲ類。
552	ⅣA	95－4面まで	—	瓦質土器	火舎香炉	長4.9	巾8.0	厚3.3	火舎香炉の脚部。貼り付け。	ヘラ状工具による整形。	色調　黒褐色。
553	Ⅷ ⅦA	南側溝	—	瓦質土器	火鉢	(16.4)	9.3	(14.4)	平底。高台は比較的細い。体部は大きく内彎。口縁部外面に耳状の把手を貼り付け。	内外面とも横方向のヘラミガキ調整。器面を平滑に仕上げる。	色調　暗灰色。Ⅱ類。
554	Ⅵ	95－3面より下	灰色シルト	瓦質土器	火鉢	(20.6)	9.5	(16.1)	高台は比較的細く、高い。平底。体部は大きく内彎。口縁端部は丸みをもつ。	体部内外面　横方向の磨き調整。平行暗文が見られる。底部外面　不定方向のナデ調整。	焼成　堅緻。色調　褐灰色。Ⅱ類。
555	ⅤA	95－3S以下	—	瓦質土器	擂鉢	(24.8)	(8.1)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部の1ヶ所を捻って片口を作り出す。	口縁部内外面　回転ナデ調整。体部外面上位　横方向のハケ目　下位　縦方向のハケ目調整の後、指おさえ。体部内面　横方向のハケ目調整の後、5条1単位の擂目施文。	色調　黒褐色。16世紀代。Ab1類。
556	ⅣD ⅣC	95－3S 95－4面	濁灰色粗砂まじり細砂 上黒褐色シルト	瓦質土器	擂鉢	(24.7)	(8.9)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。口縁部の1ヶ所を捻って片口を作り出す。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　指おさえの後、縦方向のハケ目調整。指頭圧痕が残る。体部内面　横方向の粗いハケ目調整の後、6条1単位の擂目施文。	色調　オリーブ黒色。Bb1類。16世紀代。
557	ⅣC	95－3S中	(火事かたづけ土中)	瓦質土器	擂鉢	25.6	10.8	9.5	平底。底部の器壁は比較的厚い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は若干外方につまみ出す。口縁部の一部を捻って片口を作り出す。	口縁部～体部外面上半　回転ナデ調整。体部外面下半　縦方向のハケ目調整の後、ナデ。若干指頭圧痕が残る。底部内面　横方向のハケ目調整の後、6条1単位の擂目施文。底部外面　板ナデ調整。	色調　灰黒色。Bb1類。16世紀代。
558	Ⅲ	掘状落ち	95－3面検出中	瓦質土器	擂鉢	25.5	11.0	(9.7)	平底。底部の器壁は比較的厚い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は若干外方につまみ出す。	口縁部～体部外面上半　回転ナデ調整。体部外面下半　縦方向のハケ目調整の後、ナデ。若干指頭圧痕が残る。底部内面　横方向のハケ目調整の後、6条1単位の擂目施文。底部外面　不調整。	色調　灰～灰オリーブ黒色。Bb1類。16世紀代。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
559	Ⅷ	95－3面以下	—	瓦質土器	擂鉢	24.4	11.5	(8.9)	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部上面にほぼ水平に端面をもつ。口縁部の1ヶ所を捻って小さい片口を作り出す。	口縁部～体部内外面　回転ナデ調整。底部内外面　ナデ調整。体部内面に6条1単位の櫛描きの擂目を13単位にわたって施文。	焼成　良好。色調　暗灰色。越前焼擂鉢の模倣。Ba1類。16世紀代。
560	Ⅷ — ⅥB	95－2面まで 表採 95－3整地層より下	—	瓦質土器	擂鉢	(24.9)	11.8	(9.9)	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は若干外方につまみ出す。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　縦方向の粗いハケ目調整の後、指おさえ。体部内面　横方向の粗いハケ目調整の後、5条1単位の擂目施文。	色調　灰色。Bb1類。16世紀代。
561	ⅣA	95－4面まで 95－3+1面以下	—	瓦質土器	擂鉢	30.9	12.6	10.8	平高台。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は玉縁状に肥厚し、僅かに外方にひらく。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　指おさえの後、回転ナデ調整。指頭圧痕が残る。器面は著しく剥離。体部内面　9条1単位の擂目施文。底部外面　不調整　糸切痕が残る。	色調　灰白色。Ca1類。16世紀代。
562	ⅨA	95－3面以下 95－4面まで	—	瓦	磚	長 (8.2)	巾 (7.5)	厚 (2.7)	磚の細片。	外面は削り調整。	色調　にぶい黄橙色。やや軟質。
563	ⅥA	95－3面 整地土下	腐植土中	施釉陶器	鉢	(29.4)	(10.1)	—	器壁は比較的薄い。体部は内彎して、斜め上方に延びる。口縁部は断面長方形状に肥厚する。	内外面とも回転ナデ調整。体部内面以下に褐釉施釉。褐灰色に発色。	華南産褐釉陶器。16世紀代。
564	ⅣA	95－3+1面以下 95－4面まで	—	無釉陶器	甕	(38.6)	(6.9)	—	頸部はほぼ直立。口縁部は断面が扁平な楕円形状に肥厚する。	内外面とも回転ナデ調整。	焼成は堅緻。備前焼Ⅳ期。15世紀代。
565	ⅥB	95－3整地土層中	—	無釉陶器	甕	(32.4)	(59.1)	(30.0)	粘土紐巻上げ成形。平底。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。頸部は僅かに内傾。口縁部は断面楕円形状に肥厚する。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　ヘラ削り調整。底部外面　不調整。体部外面上位にヘラ描きの窯印を描く。	焼成　堅緻。色調　にぶい赤褐色。備前焼Ⅳ期。15世紀代。
566	ⅣD	95－4面集石部		施釉陶器	皿	9.0	2.8	4.1	平底。高台は幅が広く比較的低い。体部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	底部内面に草花文（かたばみ）を印花で施文。内外面とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色。畳付の釉はかきとり。器面に粗い貫入。	瀬戸・美濃系灰釉陶器Ⅲ。ⅡA2類。大窯期。16世紀代。
567	ⅦA	95－4面まで	SD52008より北	施釉陶器	皿	(9.8)	(2.0)	—	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも灰釉施釉。暗黄緑色に発色。器面に貫入。	瀬戸・美濃系灰釉陶器Ⅲ。Ⅱ類。大窯期。16世紀代。
568	ⅦA	95－4面まで	SD52008より北	施釉陶器	皿	(10.0)	2.3	(5.6)	底部の器壁は比較的厚い。高台は断面台形状で低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも灰釉施釉。淡緑灰色に発色。器面に細かい貫入が見られる。畳付の釉かきとり。	高台裏に輪トチン附着。瀬戸・美濃系灰釉陶器Ⅲ。ⅡA1類。大窯Ⅰ期。16世紀前半代。
569	Ⅶ－Ⅷ	95－4面上層	黒色腐植土層	施釉陶器	皿	(11.4)	2.5	5.9	底部の器壁は比較的厚い。平底。高台は断面三角形状で低い。体部はやや外反気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも灰釉施釉。淡緑灰色に発色。器面に細かい貫入が見られる。畳付の釉かきとり。	瀬戸・美濃系灰釉陶器Ⅲ。ⅡA1類。大窯Ⅰ期。16世紀前半代。
570	Ⅶ－Ⅷ	95－4面上層	黒色腐植土層	施釉陶器	皿	10.9	2.6	5.8	底部の器壁は厚い。高台は断面三角形状で低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	底部内面に印花で草花文施文（菊花文）。内外面とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色。器面に粗い貫入。畳付の釉かきとり。	瀬戸・美濃系灰釉陶器Ⅲ。ⅡA2類。大窯期。16世紀代。
571	ⅦA	95－4面まで	（SD52008より北）	施釉陶器	皿	(11.6)	(1.7)	—	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも灰釉施釉。淡緑灰色に発色。器面に細かい貫入。	瀬戸・美濃系灰釉陶器Ⅲ。大窯期。16世紀代。
572	ⅣA	95－3+1面以下 95－4面まで	—	施釉陶器	皿	(11.7)	2.5	(6.0)	平底。高台は断面方形で低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも灰釉施釉。淡黄緑灰色に発色。高台裏まで施釉。器面に細かい貫入。	瀬戸・美濃系灰釉陶器Ⅲ。Ⅲ類。大窯期。16世紀代。
573	ⅣA	95－3+1面以下 95－4面まで	—	施釉陶器	ひだ皿	(12.2)	2.6	5.8	平底。高台は断面台形状で低い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもち、口縁部は波状に捻りを加える。	内外面とも灰釉施釉。淡緑灰色に発色。器面に細かい貫入が見られる。畳付の釉かきとり。高台裏の釉層は薄い。	瀬戸・美濃系灰釉陶器。Ⅳ類。ひだ皿。大窯期。16世紀代。
574	ⅣA ⅣB	95－3+1面以下 95－4面まで	—	施釉陶器	皿	(11.5)	2.8	(6.5)	平底。底部の器壁は厚い。高台は断面三角形状で低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも灰釉施釉。淡緑灰色に発色。器面に細かい貫入が見られる。畳付の釉かきとり。	高台裏に目跡。瀬戸・美濃系灰釉陶器皿。ⅡA1類。大窯Ⅰ期。16世紀前半代。
575	ⅣC	95－4面まで	—	施釉陶器	皿	(12.7)	(1.4)	—	口縁部は外方にひらく。	内外面とも灰釉施釉。淡緑灰色に発色。器面に細かい貫入。	瀬戸・美濃系灰釉陶器Ⅲ。Ⅲ類。大窯期。16世紀代。
576	ⅦA	95－4面まで	SD52008より北	施釉陶器	埦	(11.7)	(2.4)	—	体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。	内外面とも灰釉施釉。淡黄緑灰色に発色。器面に細かい貫入。	瀬戸・美濃系灰釉陶器Ⅲ。Ⅲ類。大窯期。16世紀代。
577	ⅦC	95－4面まで	（4S）	施釉陶器	埦	(13.1)	(5.7)	—	体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は屈曲して、僅かに外方にひらく。	内外面とも回転ナデ調整。全面に鬼板を塗布。内外面とも鉄釉施釉。暗茶褐色に発色。外面の高台脇以下　未施釉。	瀬戸・美濃系天目茶碗。大窯期。16世紀代。
578	Ⅳ－Ⅴ	4面まで主 4～5面まで	—	施釉陶器	埦	(12.1)	5.8	5.8	高台は幅が広く低い。体部は内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	体部外面　線描きの蓮弁文施文。内外面とも施釉。淡黄緑色に発色。畳付・高台裏まで施釉。高台裏にツクの痕跡。器面に粗い貫入。	瀬戸・美濃系灰釉丸椀。16世紀代。龍泉窯系青磁細蓮弁文碗の模倣。
579	Ⅴ－Ⅷ	95－4面直上	黒色腐植土層	三彩	鳥形水滴	頭部 (2.4) 腹部 (1.7)	長 (2.4)	巾 (1.6) (2.8)	型作り成形。鳥形水滴の頭部のみ残存。	緑釉をベースに黄釉、褐釉を施釉。	華南三彩？　16世紀代。
580	ⅣA	95－4面まで	3S濁灰粗砂中	青磁	碗	(12.7)	7.0	4.7	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	体部外面に剣頭と身の一致しない線描きの細蓮弁文を施文。内外面とも青磁釉施釉。器面に粗い貫入。暗黄緑色に発色。畳付まで施釉。高台裏は露胎。内面　印花で草花文施文。	漆継の痕跡が見られる。龍泉窯系青磁細蓮弁文碗。ⅠB2類。16世紀代。
581	ⅦC	SD52008より 北半 95－4面まで	—	白磁	皿	—	(2.2)	(3.8)	底部の器壁は厚い。高台は比較的幅が広く低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。外面の高台脇以下露胎。	華南産白磁皿。16世紀代。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
						口径	器高	底径			
582	ⅤA	95－4面まで	—	白磁	Ⅲ	(11.5)	2.9	3.8	底部の器壁は厚い。高台は比較的幅が広く低い。高台脇にノミ目跡が見られる。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部はそのまま上方に引き上げる。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。外面の高台脇以下露胎。	華南産白磁。森田分類E－1群。16世紀代。
583	ⅦA	SD52008より南 95－3面下	焼土まじり 灰黒色シルト	白磁	杯	(11.6)	2.3	(6.0)	平底。高台は細く低い。体部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。	華南産白磁。森田分類杯E－2群。16世紀代。
584	ⅦA	95－4面まで	(SD52008より北)	白磁	Ⅲ	(12.5)	3.1	(7.1)	平底。高台は断面三角形状で低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。高台畳付の釉かきとり。	華南産白磁。森田分類　E－2群。16世紀代。
585	ⅤB	95－4面	土間の層 —	白磁	Ⅲ	(12.2)	3.0	(6.6)	平底。高台は断面三角形状で低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。高台畳付の釉は丁寧にかきとる。器面に虫喰いが見られる。	華南産白磁。森田分類　E－2群。16世紀代。
586	ⅦA	95－4面	溝カ	白磁	Ⅲ	(14.0)	(2.2)	—	体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は外方に折り曲げる。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。	華南産白磁。森田分類　E－2群。16世紀代。
587	ⅣA	4S面まで	—	白磁	碗	—	(2.3)	(5.2)	底部の器壁は厚い。高台は幅が広く低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	体部内面　線描きで草花文施文。内面　透明釉施釉。灰白色に発色。外面　露胎。	華南産白磁。森田分類　白磁B群。
588	ⅣD	95－4面まで 95－3S	赤褐色粗砂 火事かたづけ土カ	青花磁器	Ⅲ	—	(2.1)	(3.0)	碁笥底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	外面　呉須　鋸歯文。内面　草花文。底部外面の釉　蛇の目状釉ハギ。	明青花磁器。A類。16世紀代。
589	ⅣA	95－3+1面以下 95－4面まで	—	青花磁器	Ⅲ	(9.5)	2.5	(6.0)	平底。底部の器壁は比較的厚い。高台は断面三角形状で比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は大きく外方にひらく。	外面　呉須　界線1条・牡丹唐草文・太い界線1条。内面　界線1・2条。底部内面　草花文。	明青花磁器。ⅡB類。16世紀代。
590	ⅤA	95－4面まで	—	青花磁器	碗	—	3.5	—	器壁は非常に薄い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　呉須　施文(文様は不鮮明)。内面　界線1条。	粗製の明青花磁器。Ⅰ類。16世紀代。
591	Ⅲ－Ⅵ ⅥA ⅥD	95－2a以下主に 腐植土中 95－1面上層 シルト	— —	青花磁器	碗	(12.0)	(4.5)	—	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　呉須　界線2条・人物文。内面　呉須　界線2条。	明青花磁器。Ⅰ類。16世紀後半。
592	ⅤB	95－4面まで	土間より上 北半部中心	青花磁器	碗				高台は細く高い。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。	外面　呉須　草花文・界線3条。底部内面　界線2条。	色調　やや青味を帯びた灰白色。明青花磁器。C類。16世紀後半。
593	ⅦC	95－4面	4K層	青花磁器	碗	14.0	6.4	5.4	底部の器壁は厚い。高台は断面台形状。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。	外面　呉須　草花文。内面　界線1・1条。底部内面　草花文。畳付の釉は拭き取り。露胎部は赤褐色に発色。	焼成はあまい。釉切れ、虫喰いが目立つ。粗製の明青花磁器。ⅠB類。蓮子碗。16世紀代。
594	ⅦC	95－4K	95－3Sまじる	土師器	Ⅲ	9.0	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。内面は器面が剥離。	口縁部内外面に煤附着。焼成　ややあまい。色調　浅黄色。Ab2Ⅵ類。
595	ⅦA	95－4K中 95－4面まで	—	土師器	Ⅲ	17.6	3.0	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面全面に煤附着。焼成　良好。色調　にぶい黄色。京都系。Ab2Ⅵ類。
596	ⅦA	95－4K中	—	土師器	Ⅲ	9.4	1.6	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。	底部に両方向よりの穿孔1ヶ所。焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅱ類。
597	ⅦC	95－4K	95－3Sまじる	白磁	小碗	(7.1)	3.4	(2.4)	底部の器壁は厚い。高台は断面三角形状で低い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は僅かに外方にひらく。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。高台畳付の釉かきとり。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。	華南産白磁。小碗B類。16世紀代。
598	ⅣB	95－4面 95－4a	暗茶シルト	土師器	Ⅲ	8.4	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部外面　板状工具痕あり。	焼成　良好。色調　黄灰色。Aa1Ⅱ類。
599	ⅥA	95－4S面上 95－4a	土間より北半部中心	土師器	Ⅲ	8.5	1.8	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。色調　灰黄色。京都系。Ab2Ⅱ類。
600	ⅣB	95－4面 95－4a	暗茶シルト	土師器	Ⅲ	8.7	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部外面　板状工具痕あり。	焼成　良好。色調　灰黄色。Ab2Ⅱ類。
601	ⅦC	95－4a・95－4K	—	土師器	Ⅲ	8.8	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Aa1Ⅱ類。
602	ⅦC	95－4a・95－4K	—	土師器	Ⅲ	9.3	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄色。Aa1Ⅱ類。
603	—	95－4a・95－4K	—	土師器	Ⅲ	9.3	1.9	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤若干附着。焼成　良好。色調　浅黄色。Ab2Ⅲ類。
604	ⅤA	95－4a	土塁2より内側	土師器	Ⅲ	9.5	1.9	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅲ類。
605	ⅣB	95－4面 95－4a	暗茶シルト	土師器	Ⅲ	9.9	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面全面に煤附着。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Ab1Ⅲ類。
606	ⅣA	95－4S面上	黒褐色シルト	土師器	Ⅲ	10.0	2.2	—	非ロクロ成形。平底。若干上げ底気味。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅲ類。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
607	ⅦC	95－4a・95－4K	—	土師器	Ⅲ	10.4	2.7	—	非ロクロ成形。平底。やや上げ底気味。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	口縁部内外面に煤附着。焼成　良好。色調　灰黄色。京都系。Ab1Ⅲ類。
608	ⅣB	95－4面 (95－4a)	暗茶シルト	土師器	Ⅲ	11.9	2.2	—	非ロクロ成形。器壁は全体に比較的薄い。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部外面に凹部をもつ。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に微かに円圏が残る。	焼成　良好。色調　オリーブ黒色。Ab2Ⅳ類。
609	ⅣB	95－4面 (95－4a)	暗茶シルト	土師器	Ⅲ	12.0	2.0	—	非ロクロ成形。器壁は全体に薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Ab1Ⅳ類。
610	ⅦC	95－4a・95－4K	—	土師器	Ⅲ	12.6	2.1	—	非ロクロ成形。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　にぶい黄色。
611	ⅦA	95－4面まで 95－4a中	—	土師器	Ⅲ	12.9	2.5	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内外面とも煤多量に附着。焼成　良好。色調　黄灰色。京都系。Ab1Ⅳ類。
612	ⅣB	95－4面上 95－S面上	炭層	土師器	Ⅲ	13.6	2.6	—	非ロクロ成形。器壁は全体に比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が微かに残る。	口縁部内外面に煤若干附着。焼成　良好。色調　灰黄色。京都系。Ab2Ⅴ類。
613	ⅣB	95－4面上 95－S面上	炭層	土師器	Ⅲ	(15.6)	2.4	—	非ロクロ成形。器壁は全体に比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に微かに円圏が残る。	口縁部に煤若干附着。焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。
614	ⅣB	95－4面 95－4a	暗茶シルト	土師器	Ⅲ	(21.5)	2.7	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅵ類。
615	Ⅷ	95－4a中 95－4面まで	—	土師器	Ⅲ	(25.8)	2.6	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。内外面とも全面に黒班が見られる。色調　黒褐色。京都系。Ab2Ⅷ類。
616	ⅣD	95－4面整地面 直上まで	—	施釉陶器	Ⅲ	(10.9)	(2.9)	—	体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも薄く灰釉を施釉。淡黄緑に発色。	瀬戸・美濃系灰釉陶器。Ⅱ類。16世紀代。
617	ⅦA	SD52008より 北側 95－4a中	—	青磁	酒会壺蓋	(12.3)	(3.4)	—	かえりは内傾。口縁端部は外方につまみ出す。体部は内彎。	体部外面　縦方向の櫛描き施文・界線2条・縦方向の櫛描き施文。外面　青磁釉施釉。淡黄緑色に発色。内面　露胎。	龍泉窯系青磁壷蓋。酒会壷。14～15世紀代。
618	ⅣB ⅥB	95－4面 (95－4a) 第3整地土中	暗茶シルト 土塁の東側	青花磁器	Ⅲ	(11.9)	2.9	(3.3)	碁笥底。体部は緩やかに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面　呉須　界線1・1条・不明文。外面　無文。底部外面　蛇の目状釉ハギ。	器面に虫喰い。粗製の明青花磁器。ⅠA類。16世紀代。
619	ⅣB	95－4面 (95－4a)	暗茶シルト	青花磁器	Ⅲ	(11.7)	2.7	(6.3)	平底。高台は断面逆台形で比較的低い。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	外面　界線1条・草花文・界線2条。内面　界線2条。底部内面　界線2条・草花文。器面に虫喰い。	明青花磁器。ⅡB類。16世紀代。
620	Ⅲ ⅣB ⅣC	第1～3整地層まで 95－4面 (95－4a) 95－3S+1まで	— 暗茶シルト —	青花磁器	Ⅲ	(12.0)	2.3	6.5	平底。高台は台形で低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	外面　界線1条・牡丹唐草文・界線1条。内面　界線2条。底部内面　界線2条・草花文。色調　青味を帯びた灰白色。	器面に虫喰い。明青花磁器。ⅡB類。16世紀代。
621	ⅣA ⅣC	95－4面 (95－4a中) 95－3S中	— (火事かたづけ土中)	青花磁器	Ⅲ	(12.4)	2.7	(7.1)	底部の器壁は比較的厚い。高台は断面三角形状で低い。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	外面　滲んだ呉須で蓮弁文?施文。内面　　太い界線1・2条。底部内面　草花文。	明青花磁器。ⅡB類。16世紀代。
622	Ⅱ	95－4+1面まで	—	土師器	Ⅲ	8.5	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面に煤附着。焼成　ややあまい。色調　浅黄色。Ab2Ⅱ類。
623	Ⅰ	95－4+1面まで	—	青花磁器	碗	—	(1.8)	—	口縁部は外方にひらく。	内外面とも淡い呉須で施文。	明青花磁器。16世紀代。
624	ⅦA	95－5面まで SD5001	—	土師器	Ⅲ	(8.3)	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部外面に凹部を形成する。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Aa1Ⅱ類。
625	ⅦA	SD55001内	—	土師器	Ⅲ	8.4	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部外面に板状工具痕。	内外面とも煤が多量に附着。色調　灰黄色。Ab1Ⅱ類。
626	ⅦA	95－5面まで SD55001	—	土師器	Ⅲ	(8.5)	2.1	—	非ロクロ成形。器形は比較的深い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Aa2Ⅱ類。
627	ⅦA	SD55001内	—	土師器	Ⅲ	8.6	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成はあまい。色調　にぶい橙色。Aa1Ⅱ類。
628	ⅦA	95－5面まで SD55001	—	土師器	Ⅲ	(9.2)	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部外面に板状工具痕。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　黄褐色。Ab2Ⅲ類。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
629	ⅦA	95－5面まで SD55001	—	土師器	Ⅲ	10.0	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面に整形時の布目圧痕あり。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　黄灰色。Aa1Ⅲ類。
630	ⅦA	95－5面まで SD55001	—	土師器	Ⅲ	(12.5)	2.4	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　明黄褐色。Ab1Ⅳ類。
631	ⅦA	95－5面まで SD55001	—	土師器	Ⅲ	(15.8)	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅴ類。
632	Ⅶ	SD55001 95－5面まで	—	瓦質土器	擂鉢	(25.8)	11.4	(10.1)	平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は若干外方につまみ出す。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部　内面　上半に横方向のハケ目調整の後、6条1単位の擂目を櫛描き施文。底部外面　未調整。	色調　内面　にぶい黄橙色。外面　黒灰色。Bb1類。
633	ⅦA	SD55001内	—	青花磁器	Ⅲ	—	(1.7)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	外面　呉須　草花文。器面に虫喰い。	明青花磁器。16世紀代。
634	ⅦA	SD55001 95－5面まで	—	青花磁器	碗	—	(3.1)	—	器壁は非常に薄い。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。	外面　呉須　界線1条・幾何学文・界線2条。内面　呉須　界線1条。	明青花磁器。16世紀代。
635	ⅦA	SD55001 95－5面まで	—	青花磁器	杯	(6.7)	(3.2)	—	体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　呉須　界線2条・馬文・界線2条。内面　無文。	明青花磁器。Ⅰ類。16世紀代。
636	ⅣA	95－5面まで (溝)	—	土師器	Ⅲ	8.7	1.9	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成　良好。色調　黄灰色。Aa1Ⅱ類。
637	ⅣC	95－5面まで (溝)	—	土師器	Ⅲ	9.9	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Ab1Ⅲ類。
638	ⅣA	95－5面まで (溝)	—	土師器	Ⅲ	(13.2)	2.2	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。
639	ⅣA	95－5面まで (溝)	—	施釉陶器	塊	—	3.4	5.5	底部の器壁は厚い。高台は断面台形状で低い。体部は内彎気味に斜め上方に立ち上がる。	内外面とも灰釉施釉。畳付まで施釉。淡黄緑色に発色。	高台裏にツクの痕跡が残る。瀬戸・美濃系灰釉丸椀。16世紀代。
640	Ⅲ	土墨部精査	—	土師器	Ⅲ	(8.9)	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。体部内面に布目圧痕。	焼成　良好。色調　にぶい黄褐色。Ab1Ⅱ類。
641	Ⅲ	土墨－堀部－深掘	—	土師器	Ⅲ	8.8	1.9	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅱ類。
642	ⅣA	根太内5面	—	土師器	Ⅲ	8.8	1.9	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　黄褐色。
643	ⅣA	根太内95－5面	—	施釉陶器	Ⅲ	(11.7)	2.6	(6.5)	底部の器壁は厚い。高台は非常に低く、碁笥底状。体部は内彎気味に緩やかに斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色。器面に細かい貫入。	底部外面に輪トチン跡。瀬戸・美濃系灰釉陶器Ⅲ。ⅡB1類。16世紀代。
644	ⅣC	95－5面 南側の落ちこみ	—	土師器	Ⅲ	8.1	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅱ類。
645	ⅣC	95－5面 南側の落ちこみ	—	土師器	Ⅲ	9.0	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部外面に板状工具痕あり。	口縁部内外面に若干煤附着。焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Aa1Ⅱ類。
646	ⅣC	95－5面 南側の落ちこみ	—	青花磁器	Ⅲ	(9.6)	(2.0)	—	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は大きく外方にひらく。	外面　呉須　界線1条・牡丹唐草文。内面　呉須　界線2条。	明青花磁器。Ⅱ類。16世紀代。
647	ⅤC	95－5面まで	—	土師器	Ⅲ	5.0	1.2	—	非ロクロ成形。体部は短く、ほぼ直立。口縁端部は尖り気味。	体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。底部外面　ヘラ削り調整。	焼成堅緻。色調　浅黄色。BⅠ類。
648	ⅤA	95－5面まで	—	土師器	Ⅲ	5.3	1.7		非ロクロ成形。平底。体部は短くほぼ直立。	口縁部～体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面ナデ調整。底部外面　指おさえの後、ナデ調整。	部分的に煤附着。色調　黒褐色。BⅠ類。
649	ⅣA	95－5面まで	—	土師器	Ⅲ	(9.4)	2.4		非ロクロ成形。平底。体部はほぼ直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部～体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　器面の剥離が著しい。底部外面　不調整。指頭圧痕が残る。	色調　灰黄色。BⅢ類。
650	ⅣD	95－5面まで	黒褐色粗砂まじりシルト	土師器	Ⅲ	8.3	1.8	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に沈線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内外面に煤附着。焼成　良好。色調　灰黄色。Ab1Ⅱ類。
651	ⅣA	95－5面まで 東半部	3+1面以下　4面まで	土師器	Ⅲ	8.4	2.0	—	非ロクロ成形。器壁は比較的厚い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　明黄褐色。Aa1Ⅱ類。
652	ⅦA	95－5面	—	土師器	Ⅲ	8.5	1.9	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　ややあまい。色調　黄灰色。Ab1Ⅱ類。
653	Ⅸ	95－5面 (95－5S)まで	—	土師器	Ⅲ	8.6	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に沈線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。Ab1Ⅱ類。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
654	Ⅰ	95－5面 (95－5S)まで	—	土師器	Ⅲ	8.6	1.9	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　ややあまい。色調　灰白色。Aa1Ⅱ類。
655	ⅣA	95－5面まで	3+1面以下	土師器	Ⅲ	8.6	2.1	—	非ロクロ成形。器形は若干歪む。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内外面とも煤附着。焼成　良好。色調　にぶい黄色。Aa1Ⅱ類。
656	ⅣA	95－5面まで	集石部下層	土師器	Ⅲ	8.7	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成　良好。色調　浅黄色。Ab1Ⅱ類。
657	ⅣA	95－5面まで	3+1面以下	土師器	Ⅲ	8.8	1.8	—	非ロクロ成形。器形は若干歪む。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に若干煤附着。焼成　良好。色調　明黄褐色。Ab1Ⅱ類。
658	ⅦA	95－5面まで	—	土師器	Ⅲ	8.9	1.9	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	底部内面に煤附着。焼成　良好。色調　浅黄色。Aa1Ⅱ類。
659	Ⅰ	95－5面まで (95－5Sまで)	—	土師器	Ⅲ	8.9	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内面に若干煤附着。焼成　良好。色調　浅黄橙色。Ab1Ⅱ類。
660	ⅣA	95－5面まで 東半部	3+1面以下　4面まで	土師器	Ⅲ	9.1	1.9	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成　良好。色調　浅黄色。Ab1Ⅱ類。
661	ⅤA	95－5面まで	—	土師器	Ⅲ	9.2	1.8	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Ab1Ⅱ類。
662	ⅣA	95－5面まで	3+1面以下	土師器	Ⅲ	9.2	1.9	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい橙色。Ab1Ⅱ類。
663	ⅣD	95－5面まで	黒褐色粗砂まじりシルト	土師器	Ⅲ	9.7	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に沈線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面に煤附着。焼成　良好。色調　浅黄色。Aa1Ⅲ類。
664	ⅦA	95－5面まで	—	土師器	Ⅲ	9.9	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤若干附着。焼成　良好。色調　浅黄色。Ab1Ⅲ類。
665	ⅣA	95－5面まで 東半部	3+1面以下　4面まで	土師器	Ⅲ	10.4	1.8	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部～底部内面　調整不明。底部内面　籾殻が附着。器面は部分的に剥離。	焼成　ややあまい。色調　にぶい黄褐色。Aa1Ⅲ類。
666	ⅦA	95－5面まで	—	土師器	Ⅲ	10.4	2.5	—	非ロクロ成形。平底。やや上げ底気味。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に沈線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　不定方向のナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。内面の体部と底部の界に段。	焼成　良好。色調　黄橙色。京都系。Ab1Ⅲ類。
667	ⅣA	95－5面まで	3+1面以下　4面まで	土師器	Ⅲ	10.8	2.0	—	非ロクロ成形。平底。やや上げ底気味。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成　ややあまい。色調　灰黄色。Ab2Ⅲ類。
668	Ⅸ	95－5面 (95－5S)まで	—	土師器	Ⅲ	(12.4)	2.6	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部と底部の界は明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。Ab1Ⅳ類。
669	ⅣA	95－5面まで	3+1面以下	土師器	Ⅲ	(12.5)	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に微かに円圏が残る。	焼成　ややあまい。色調　橙色。Ab1Ⅳ類。
670	ⅣA	95－5面まで 東半部	3+1面以下　4面まで	土師器	Ⅲ	12.5	2.2	—	非ロクロ成形。器形は若干歪む。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Ab2Ⅳ類。
671	ⅣA	95－5面まで	3+1面以下	土師器	Ⅲ	12.8	2.2	—	非ロクロ成形。平底。若干上げ底気味。器壁は全体に比較的薄い。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　明褐色。
672	Ⅷ	95－5面まで	—	土師器	Ⅲ	12.9	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に沈線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面　円圏が残る。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。
673	ⅦA	95－5面	—	土師器	Ⅲ	13.2	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が微かに残る。	焼成　良好。色調　灰白色。京都系。Ab2Ⅳ類。
674	ⅥB	95－5面まで	SD4003より東	土師器	Ⅲ	13.7	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に沈線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。円圏が残る。底部外面　板状工具痕。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅴ類。
675	ⅣD	95－5面まで	黒褐色粗砂まじりシルト	土師器	Ⅲ	(13.7)	1.6	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Ab1Ⅴ類。
676	ⅣA	95－5面まで	集石部下層	土師器	Ⅲ	(13.7)	2.1	—	非ロクロ成形。平底。器壁は比較的薄い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。京都系。Ab1Ⅴ類。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
677	ⅤA	95－5面まで	—	土師器	皿	13.3	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	底部外面にヘラ描きで「上」の文字施文。焼成良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅴ類。
678	ⅦA	95－5面まで 95－4S主	—	土師器	皿	13.7	2.7	—	非ロクロ成形。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面全面に黒斑。黒褐色に発色。焼成　良好。色調　暗灰黄色。
679	ⅦA	95－5面	—	土師器	皿	14.5	2.6	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　黄色。Ab1Ⅴ類。
680	ⅣA	95－5面まで	3+1面以下	土師器	皿	14.6	2.6	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　明黄褐色。
681	ⅣA	95－5面まで	東半部 3+1面以下4面まで	土師器	皿	(14.7)	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に微かに円圏が残る。	焼成　良好。色調　橙色。京都系。Ab1Ⅴ類。
682	ⅤA	95－5面まで	—	土師器	皿	14.8	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅴ類。
683	ⅣA	5面まで	3+1面以下	土師器	皿	(14.8)	(2.6)	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　明黄褐色。
684	Ⅱ	95－5面まで	—	土師器	皿	15.5	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に沈線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。Ab2Ⅴ類。
685	ⅤC	95－5面まで	—	土師器	皿	16.3	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に沈線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　多方向のナデ調整。底部外面　板状工具によるナデ調整。	内外面とも全面に煤附着。焼成　良好。色調　黄灰色。京都系。Ab1Ⅴ類。
686	Ⅱ	95－5面まで	—	土師器	皿	17.1	2.9	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に沈線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　多方向のナデ調整。	口縁部内面に若干煤附着。焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅵ類。
687	ⅦA	95－5面まで	—	土師器	皿	17.7	2.6	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	赤外線透視の結果、内面に墨痕を確認。外面も墨痕？　焼成　良好。色調　淡黄色。京都系。Ab1Ⅵ類。
688	Ⅱ	95－5面まで	—	土師器	皿	(18.0)	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が僅かに残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面に煤附着。焼成　良好。色調　黄灰色。京都系。Ab1Ⅵ類。
689	ⅣA	95－5面まで	—	土師器	皿	(19.2)	2.4	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　ややあまい。色調　浅黄色。京都系。Ab1Ⅵ類。
690	Ⅰ	95－5面まで 95－5Sまで	—	土師器	皿	(17.2)	2.8	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に沈線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　黄灰色。京都系。Ab1Ⅵ類。
691	ⅤC	95－5面まで	—	瓦質土器	蓋	(9.7)	2.8	—	体部の上面は扁平。中央部に円柱状のつまみを貼り付け。かぶせ蓋。体部は垂直に下方に延びる。	内外面とも回転ナデ調整。底部内面中央部　一方向のナデ調整。	色調　暗灰色。Ⅱ類。
692	Ⅸ	95－5面 95－5Sまで	—	瓦質土器	蓋	(10.1)	2.8	—	体部の上面は扁平。中央部に切頭円錐状のつまみを貼り付け。かぶせ蓋。体部は斜め下方に延びる。	内外面とも回転ナデ調整。	色調　暗灰色。筒状容器の蓋。Ⅰ類。
693	ⅣB ⅣA	95－5面上 95－5面まで (溝)	— —	土師器	脚付皿	(11.0)	4.2	—	非ロクロ成形。断面逆台形状の脚を貼り付ける。体部は緩やかに僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　一方向のナデ調整。底部外面　不調整。	脚は三足ヵ。口縁部内外面に煤附着。色調　浅黄橙色。
694	ⅣA	95－5面まで	集石部下層	土師器	小壺	5.0	(4.8)	(3.1)	平底。体部は大きく内彎。口縁部は内傾。	手づくね成形。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。	器面は2次焼成を受け、一部剥落。色調　にぶい黄橙色。
695	ⅣA ⅤC ⅤC ⅣA	95－4面まで 95－5面まで 95－5面まで 95－5面まで	3+1面以下 — — 集石部下層	瓦質土器	桶形容器	(22.2)	19.7	(26.4)	平底。外縁部に断面台形状の低い高台を貼り付ける。体部は直立。口縁部は短く内傾する。体部外面の上・中・下部に鐘を意識した小さい凸帯が3条巡る。	体部内面　ヨコナデ調整。底部内外面　不定方向のナデ調整。体部外面　ヨコナデ調整の後、縦方向のミガキ調整。	ミガキにより器面を平滑に仕上げる。色調　黒灰色。木製の桶を模倣した桶状容器。火消し壺？Ⅲ類。
696	ⅣC	95－5面まで他	—	瓦質土器	火舎香炉(蓋)	(17.2)	(9.3)	—	形態は釣鐘形。体部中央に透かしあり。	粘土紐巻上げ成形。外面　ヨコナデの後、縦方向のミガキ調整。内面上位　不定方向の板ナデもしくは削り。内面下位　ヨコナデ調整。	器面は平滑。色調　にぶい赤褐色。697の蓋か？　Ⅲ類。
697	Ⅳ－Ⅴ	95－5面上		瓦質土器	火舎香炉(身)	(14.5)	8.7	(14.9)	断面長方形状の高い高台を貼り付ける。平底。体部は僅かに内彎して短く直上に延びる。口縁部は短く内傾。	体部外面　ヨコナデ調整の後、横方向のミガキ調整。高台外面　ヨコナデ調整の後、縦方向のミガキ調整。　体部・高台部内面　ヨコナデ調整。底部外面　不定方向のナデ調整。	器面は平滑。内面に彼熱の痕跡。色調　暗灰黄色～黒褐色。Ⅲ類。
698	Ⅱ	95－5面まで	—	瓦質土器	火舎香炉	—	(4.9)	15.7	断面長方形状で、高い高台を貼り付ける。平底。	高台外面　ナデ調整の後、縦方向のミガキ。高台内面　ヨコナデ調整。底部外面　一方向のナデ調整。	器面は平滑。色調　暗灰色。Ⅲ類。
699	ⅣA	95－5面まで 95－5面まで 95－5面まで (溝)	—	瓦質土器	鉢	(35.2)	(9.8)	—	体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸みをもつ。	内外面ともヨコナデ調整。体部内外面　横方向のミガキ調整。平行暗文が残る。器面を平滑に仕上げる。	色調　暗灰色。Ab1類。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
700	ⅦB	95－4面より下	—	瓦質土器	擂鉢	(24.2)	(5.4)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は若干外方につまみ出す。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　縦方向のハケ目調整の後、ナデ調整。口縁部内面　横方向のハケ目調整の後、8条1単位の擂目施文。	色調　オリーブ黒色。Bb1類。16世紀代。
701	Ⅷ	95－5面まで	—	瓦質土器	擂鉢	(29.0)	12.2	—	平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は若干玉縁状に肥厚する。1ヶ所、口縁部を捻って片口を作り出す。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。体部内面　体部内面　7～8条1単位の櫛描きの擂目を直角に交差して施文。底部内面　擂目を直角に交差して施文。底部外面　不調整。	焼成　良好。色調　暗灰色。Db1類。16世紀代。
702	Ⅶ	95－5面まで	—	瓦質土器	擂鉢	(25.5)	11.3	(10.0)	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は若干外方に引き出す。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕fが残る。体部内面　6条1単位の擂目施文。底部内面　6条1単位の擂目を×状に施文。底部外面　不調整。	色調　灰色。Ba1類。
703	Ⅰ ⅤA Ⅰ	95－4+1面まで 95－5面まで 95－5面まで	— — —	瓦質土器	擂鉢	(29.8)	(8.9)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は若干外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。口縁部の一部を捻って片口を作り出す。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　指押さえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。底部内面　9条1単位の擂目を櫛描きで施文。	色調　灰色。Ca1類。焼成　ややあまい。
704	ⅦA	95－5面 (5面層)	ポンプ坑部	瓦質土器	擂鉢	(30.1)	11.1	(11.5)	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。底部内面　ナデ調整。体部内面　9条1単位の擂目施文。	色調　浅黄橙色。Ca1類。
705	ⅦA	95－5面まで (95－4S中)主	—	瓦質土器	擂鉢	(31.7)	11.5	(12.2)	僅かに平高台を意識。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は若干外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が明瞭に残る。底部外面　ナデ調整。体部内面　11条1単位の擂目を櫛描きで施文。底部内面　8条1単位の擂目を×状に交差して施文。	色調　にぶい黄橙色。Ca1類。16世紀代。
706	ⅤC	95－5面まで	—	瓦質土器	擂鉢	(37.0)	(8.0)	—	体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は屈曲して僅かに外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　11条1単位の擂目施文。	色調　暗黄灰色。Ca1類。16世紀代。
707	Ⅳ－Ⅴ	95－4～5面まで	—	瓦質土器	擂鉢	(32.0)	11.3	(11.2)	平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。口縁部内面　凹線1条。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　指おさえの後、縦方向のハケ目調整。指頭圧痕が残る。体部内面　8条1単位の擂目施文。	色調　暗灰色。Db1類。16世紀代。
708	ⅤB	95－5面まで	—	無釉陶器	擂鉢	(35.0)	(7.8)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも回転ナデ調整。内面に縦方向に9条1単位の擂目を施文した後、横方向に同じく9条1単位の擂目を櫛描きで施文する。	色調　にぶい褐色。越前焼。A類。16世紀代。
709	ⅤB	95－5面まで	—	無釉陶器	擂鉢	(33.6)	(7.5)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。口縁部内面に凹線1条。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。体部内面　9条1単位の擂目施文。	色調　にぶい橙色。越前焼。A類。　16世紀代。
710	ⅦA	95－5面まで	—	無釉陶器	擂鉢	(33.7)	(3.4)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。口縁部内面に凹線1条。	内外面とも回転ナデ調整。体部内面　7条1単位の擂目を櫛描きで施文。	色調　にぶい橙色。越前焼。A類。16世紀代。
711	Ⅷ	95－5面まで	—	施釉陶器	皿	(11.2)	(2.5)		底部の器壁は厚い。碁笥底。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも施釉。底部外面も施釉。淡黄緑色に発色。器面に粗い貫入。	底部外面に煤附着。ツク附着。瀬戸・美濃系灰釉陶器皿。ⅡB2類。大窯期Ⅰ期。　16世紀前半代。
712	ⅣA	95－3+1面以下 95－5面まで	—	施釉陶器	皿	(9.6)	2.6	(5.2)	高台は断面三角形状で低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色。器面に粗い貫入。畳付の釉かきとり。	瀬戸・美濃系灰釉陶器皿。大窯期Ⅰ期。ⅡA1類。　16世紀前半代。
713	ⅤA	95－5面まで	下層	施釉陶器	皿	11.1	2.8	(6.3)	底部の器壁は厚い。高台は断面逆台形状で低い。体部は内彎して斜め上方に延びる。口縁部は若干外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも灰釉施釉。畳付・高台裏まで施釉。淡黄緑色に発色。粗い貫入が入る。	底部外面に煤附着。ツク附着。瀬戸・美濃系灰釉陶器皿。Ⅲ類。大窯期Ⅰ期。　16世紀前半代。
714	ⅤC	95－5面まで	—	施釉陶器	塊	(12.6)	(5.1)	—	体部は内彎して斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも灰釉施釉。2次焼成を受けたため、灰色に発色。器面に細かい貫入。	瀬戸・美濃系灰釉陶器丸碗。大窯Ⅰ期。16世紀前半。
715	Ⅷ	—	—	施釉陶器	塊	(11.6)	6.9	5.5	底部の器壁は非常に厚い。高台は断面逆台形状で低い。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。	体部外面　縦方向のハケ目調整。内外面とも灰釉施釉。淡黄緑に発色。器面に粗い貫入。畳付まで施釉。高台裏にツクの痕跡。	瀬戸・美濃系灰釉丸椀。大窯期。16世紀代。
716	ⅤA	95－5面まで	上層	施釉陶器	碗	(11.5)	5.9	5.2	底部の器壁は比較的厚い。高台は断面逆台形で低い。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	体部外面に櫛描きの縦線を施文。内外面とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色。畳付まで施釉。体部内面に粗い貫入。	高台裏にツクの痕跡が残る。瀬戸・美濃系灰釉丸椀。大窯期。16世紀代。
717	Ⅶ－Ⅷ ⅤC	95－4面上層 95－5面まで	黒色腐植土層 —	施釉陶器	塊	(11.6)	(3.9)	—	体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部外面に若干櫛描き施文。内外とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色。器面に細かい貫入。	瀬戸・美濃系灰釉丸椀。大窯Ⅰ期。16世紀前半。
718	ⅣA	95－3+1面以下 95－5面まで	—	施釉陶器	塊	(11.7)	(4.5)	—	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	体部外面に剣頭と身のほぼ一致する線描きの蓮弁文を施文。内外面とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色。器面に細かい貫入。	口縁部に灰被り。白濁する。瀬戸・美濃系灰釉蓮弁文碗。龍泉窯系細蓮弁文碗の模倣。16世紀代。
719	ⅣD	95－5面まで	黒褐色極砂まじりシルト	施釉陶器	塊				体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも灰釉施釉。内外面とも一部黒色に変色。淡黄緑色に発色。器面に粗い貫入。	瀬戸・美濃系灰釉丸椀。16世紀代。
720	Ⅷ	南東半 95－5面まで	—	施釉陶器	塊(底部)	—	(1.7)	5.5	底部の器壁は比較的厚い。高台は断面逆台形で低い。	内外面とも灰釉施釉。淡青緑色に発色。畳付の釉かきとり。器面に粗い貫入。	高台裏に目跡。瀬戸・美濃系灰釉丸椀。16世紀代。
721	ⅤC	95－5面まで	—	施釉陶器	塊	—	(4.8)	—	底部の器壁は非常に厚い。高台は断面逆台形で比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	内外面(高台裏を含む)　透明釉施釉。白濁色に発色。器面に細かい貫入と虫喰いが顕著に見られる。畳付の釉はかきとる。底部内面に砂目跡　4箇所。	朝鮮製陶器か?
722	ⅤC	95－5面まで	—	青磁	皿	8.7	2.9	5.1	底部の器壁は厚い。高台は台形状で比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも青磁釉施釉。畳付まで施釉。淡暗緑色に発色。高台裏は露胎。器面に粗い貫入。	龍泉窯系青磁。Ⅰ類。15世紀代。
723	ⅤC	95－5面まで	—	青磁	皿	(10.6)	3.0	(5.3)	底部の器壁は厚い。高台は断面逆台形状で低い。体部は内彎して斜め上方に延びる。口縁部は大きく外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	体部外面　浅いヘラ彫りの蓮弁文施文。底部内面　草花文を印花で施文。内外面とも青磁釉施釉。緑灰色に発色。畳付まで施釉。高台裏　露胎。	龍泉窯系青磁。ⅡB類。15世紀代。
724	ⅤC	95－5面まで	—	青磁	輪花皿	(13.0)	2.6	(5.8)	平底。高台は断面台形状で低い。体部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。口縁部は輪花状に成形。	口縁部内面に沈線。内外面とも青磁釉施釉。外面の畳付から高台裏は露胎。底部内面の釉はかきとる。	龍泉窯系青磁。ⅡA類。16世紀代。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
						口径	器高	底径			
725	Ⅷ	95－5面まで 南東半	—	青磁	輪花皿	13.4	3.9	6.8	底部の器壁は厚い。高台は幅が広く低い。体部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。口縁部は輪花状に成形。	口縁部内面　沈線3条を波状に施文。内外面とも青磁釉施釉。暗緑灰色に発色。高台裏は露胎。	龍泉窯系青磁。ⅡA類。16世紀代。焼き継痕あり。
726	ⅤC	95－5面まで	—	青磁	碗	(13.8)	(2.2)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	体部外面にヘラ描きでくずれた雷文帯施文。内外面とも青磁釉施釉。淡緑灰色に発色。	龍泉窯系青磁。ⅠC類。
727	ⅤB	95－5面まで	—	青磁	碗	(15.1)	(5.9)	—	体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも青磁釉を比較的厚く施釉。暗オリーブ灰色に発色。	龍泉窯系青磁無文碗。Ⅱ類。
728	Ⅱ	95－5面まで	—	施釉陶器	埦	(13.3)	(3.8)	—	体部は内彎気味に斜め上方に立ち上がる。口縁端部は丸味をもつ。	器面に簡略化された細蓮弁文を線描きする。内外面とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色。	瀬戸・美濃系蓮弁文碗。16世紀代。龍泉窯系青磁細蓮弁文碗の模倣。
729	ⅤC	95－5面まで	—	青磁	碗	(13.6)	(4.7)	—	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	体部外面に剣頭と身が一致する線描きの蓮弁文を施文。内外面とも青磁釉施釉。くすんだオリーブ灰色に発色。器面に虫喰い。	龍泉窯系青磁蓮弁文碗。ⅠB1類。15世紀後半～16世紀前半。
730	ⅤA	95－5面まで	上層	青磁	碗	—	(2.8)	—	底部片。底部の器壁は非常に厚い。	内外面とも青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。	龍泉窯系青磁。
731	ⅤA	95－5面まで	下層	青磁	碗	—	(3.0)	(5.8)	底部の器壁は非常に厚い。高台は台形。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	底部内面　くずれた草花文を印花で施文。体部外面に蓮弁文の痕跡が見られる。内外面とも青磁釉施釉。暗緑灰色に発色。畳付まで施釉。高台裏は蛇の目状に釉ハギする。	龍泉窯系青磁。15世紀代。
732	ⅤA	95－5面まで	下層	青磁	碗	13.2	6.4	4.8	底部の器壁は非常に厚い。高台は断面逆台形で比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	内外面とも青磁釉施釉。淡暗緑灰色に発色。器面に灰被り。畳付・高台裏は露胎。	龍泉窯系青磁無文碗。ⅠA類。
733	ⅤC	95－5面まで		青磁	碗	—	(4.3)	5.3	底部の器壁は非常に厚い。高台は逆台形で比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に立ち上がる。	底部内面　くずれた草花文を印花で施文。内外面とも青磁釉施釉。暗緑色に発色。畳付まで施釉。高台裏は蛇の目状に釉ハギする。器面に粗い貫入。	高台裏の露胎部は暗赤褐色に発色。龍泉窯系青磁。15世紀代。
734	ⅤB	95－5面まで		青磁	碗	—	(3.0)	(5.3)	底部の器壁は非常に厚い。	底部内面に印花文施文。内外面とも青磁釉施釉。明緑灰色に発色。高台裏　蛇の目状釉ハギ。露胎部は赤褐色に発色。	龍泉窯系青磁。15世紀代。
735	ⅤC	95－5面まで		青磁	碗	—	(3.5)	(5.3)	底部の器壁は非常に厚い。高台は逆台形で比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に立ち上がる。	底部内面　くずれた草花文を印花で施文。内外面とも青磁釉施釉。暗緑灰色に発色。畳付まで施釉。高台裏は蛇の目状に釉ハギする。	龍泉窯系青磁。15世紀代。
736	ⅤA	95－5面まで	上層	青磁	碗	13.1	7.4	5.0	底部の器壁は非常に厚い。高台は断面台形状で比較的高い。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。	体部内面　雷文帯・神獣文を印花で施文。文様は不鮮明。内外面とも青磁釉施釉。暗緑灰色に発色。畳付・高台裏は露胎。露胎部にぶい赤褐色に発色。	龍泉窯系青磁。14世紀後半～15世紀。ⅠD類。
737	Ⅰ	95－5面	—	白磁	小碗	(7.3)	3.1	2.3	底部の器壁は厚い。高台は断面三角形状で低い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は僅かに外方にひらく。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。高台畳付の釉かきとり。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。	華南産白磁。小碗B類。16世紀代。
738	ⅣA	95－5面まで	集石部下層	白磁	小碗	(6.6)	3.0	(2.5)	底部の器壁は厚い。高台は断面三角形状で低い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は僅かに外方にひらく。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。高台畳付の釉かきとり。底部内面　蛇ノ目状釉ハギ。	華南産白磁。小碗B類。16世紀代。
739	ⅤA	95－5面まで	—	青花磁器	皿	(7.7)	2.1	(3.4)	平底。高台は断面三角形状で細く低い。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は水平に外方に折り曲げ。	外面　呉須　界線1条・牡丹唐草文・界線2条。体部内面　太い界線1条・界線2条。底部内面　草花文。	明青花磁器。ⅡB類。16世紀代。
740	ⅣA	95－3+1面以下 95－5面まで	—	青花磁器	皿	—	(1.0)	(6.6)	平底。高台は断面三角形状で低い。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	底部内面　呉須　界線2条・獅子文。外面　草花文・界線2条。	高台裏に虫喰い。明青花磁器。16世紀代。
741	Ⅷ	95－5面まで	—	青花磁器	皿	(12.0)	2.7	(6.6)	平底。高台は逆台形。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	外面　やや滲んだ呉須　界線1条・牡丹唐草文・界線1条。内面　呉須　界線2条・草花文。畳付～高台裏　露胎。	粗製の明青花磁器。ⅡB類。16世紀代。
742	Ⅰ－Ⅳ	95－4面より下	—	青花磁器	皿	(12.1)	2.6	(6.0)	平底。高台は断面三角形状。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	外面　界線1条・宝相華文?。底部内面　宝相華文?	明青花磁器。Ⅱ類。16世紀代。
743	ⅤC	95－5面まで	—	青花磁器	皿	(14.5)	(1.9)	—	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	外面　呉須　太い界線1条・草花文。内面　太い界線1条。	明青花磁器。16世紀代。
744	ⅤC	95－5面まで	—	青花磁器	碗	(13.5)	5.7	(5.2)	高台は細く比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　呉須　不明文・芭蕉文。底部内面　界線1条・不明文。	明青花磁器。ⅠB類。蓮子碗。16世紀代。
745	ⅣA	95－5面まで 95－3+1面以下 4面まで	—	青花磁器	碗	(13.6)	6.1	5.0	底部の器壁は比較的厚い。高台は断面逆台形状で比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面　呉須　雲文・くずれた芭蕉文。底部内面　界線2条・雲文。畳付から高台裏は露胎。	粗製の明青花磁器。ⅠB類。蓮子碗。16世紀代。
746	ⅣA	95－3+1面以下 95－5面まで	—	青花磁器	碗	(13.5)	(3.2)	—	体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面　呉須　太い界線1条・草花文　内面　呉須　太い界線。	明青花磁器。16世紀代。
747	ⅣD	95－5面まで	—	青花磁器	碗	(12.8)	(4.5)	—	体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面　呉須　界線2条・草花文・界線1条。内面　太い界線1条。	内面に虫喰い。明青花磁器。Ⅰ類。16世紀代。
748	ⅣA	95－5面まで	—	青花磁器	碗	—	(4.3)	—	器壁は薄い。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。	外面　呉須　牡丹唐草文・界線2条。内面　無文。	明青花磁器。Ⅰ類。16世紀代。
749	ⅤA	95－5面まで	—	青花磁器	碗	—	(2.8)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。	外面　やや黒っぽい呉須で崩れた草花文施文。色調　やや褐色がかった灰白色。	明青花磁器。16世紀代。
750	ⅤC	95－5面まで	—	土製品	羽口	長 (10.1)	巾 (6.6)	厚 (3.2)	鞴の羽口の一部。	外面　　ナデ調整。被熱のためガラス質化する。	色調　にぶい橙色。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
751	ⅣB	95－5面上	—	土師器	Ⅲ	8.7	2.0	—	非ロクロ成形。器壁は比較的厚い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に沈線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　淡黄色。Aa1Ⅱ類。
752	ⅣB	95－5面上	—	土師器	Ⅲ	9.3	1.8	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅲ類。
753	ⅦA	95－5面上	—	土師器	Ⅲ	12.5	2.2	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　ややあまい。色調　浅黄色。Ab1Ⅳ類。
754	ⅣB	95－5面上	—	無釉陶器	擂鉢	(35.2)	11.7	(15.6)	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。口縁部内面に凹線1条。	内外面とも回転ナデ調整。底部外面　ナデ調整。体部内面　8条1単位の擂目を櫛描きで施文。	内面の体部下半～底部　使用による摩滅が著しい。擂目が消滅。色調　褐灰色。越前焼。A類。16世紀代。
755	ⅣB	95－5面上	—	青花磁器	Ⅲ	(10.6)	2.1	(6.2)	底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	外面　呉須　牡丹唐草文・界線1条。内面　界線2条・草花文。	高台裏　虫喰い。明青花磁器。ⅡB類。16世紀代。
756	ⅦB	95－5面より下	—	施釉陶器	Ⅲ	(11.0)	2.4	(6.3)	底部の器壁は厚い。高台は断面台形状で細く低い。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は外方にひらく。	内外面とも灰釉施釉。くすんだオリーブ黄色に発色。器面に粗い貫入。畳付の釉かきとり。高台裏一部施釉。	瀬戸・美濃系灰釉陶器Ⅲ。大窯期。16世紀代。
757	ⅦA	北サブトレ	5S以下ヵ 暗灰シルト中	施釉陶器	Ⅲ	—	(2.1)	(5.5)	底部の器壁は比較的厚い。高台は浅く削りだす内反り高台。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	内外面とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色。畳付の釉はかきとり。器面に粗い貫入。	瀬戸・美濃系灰釉陶器Ⅲ。大窯期。16世紀代。
758	Ⅳ－Ⅲ	— —	— 灰色粗砂まじりシルト	施釉陶器	塊	(11.5)	(4.7)	—	体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は屈曲して、僅かに外方にひらく。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。内外面とも鉄釉施釉。ガラス質の暗茶褐色に発色。	焼成堅緻。瀬戸・美濃系天目茶碗。大窯期。16世紀代。
759	Ⅳ－Ⅴ ⅤA	95－4・5面まで 95－3面+1まで	—	施釉陶器	塊	—	(2.5)	(3.7)	底部の器壁は比較的厚い。低い輪高台を浅く削りだす。	内外面とも鉄釉施釉。茶褐色に発色。外面の高台脇以下　露胎。	瀬戸・美濃系天目茶碗。大窯期。16世紀代。
760	Ⅵ－Ⅷ	—	95－1a以下	施釉陶器	塊	—	(3.9)	(3.1)	底部の器壁は比較的厚い。低い輪高台を浅く削りだす。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	内外面とも回転ナデ調整。全面に鬼板を塗布。内外面とも鉄釉施釉。暗茶褐色に発色。高台脇以下　未施釉。	瀬戸・美濃系天目茶碗。大窯期。16世紀代。
761	Ⅳ－Ⅶ	95－4～95－5面	—	施釉陶器	Ⅲ	(11.9)	2.8	6.0	底部の器壁は比較的厚い。平底。高台は低い。体部は内彎して斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	底部内面に印花で菊花文施文。内外面とも灰釉施釉。淡緑灰色に発色。器面に細かい貫入が見られる。	高台裏に目跡。瀬戸美濃系灰釉陶器Ⅲ。ⅡA2類。大窯期Ⅰ期。16世紀前半代。
762	—	表採	—	白磁	小碗	(7.5)	(2.8)	—	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。	華南産白磁。小碗A類。
763	Ⅳ－Ⅶ	深掘　95－4 ～95－5面	—	青花磁器	碗	—	(2.9)	(5.0)	高台は断面三角形状で高い。体部は内彎気味に斜め上方に立ち上がる。	外面　呉須　芭蕉文。底部内面　呉須　界線1条・草花文。	器面に釉切れ・虫喰い。明青花磁器。B類。蓮子碗。16世紀代。
764	Ⅶ	—	第1整地層より下	青花磁器	碗	(10.4)	(5.2)	—	体部は直線的にほぼ直上に延びる。	外面　呉須　崩れた草花文。	明青花磁器。
765	ⅧD ⅧA	—	—	青花磁器	碗	(13.9)	(2.4)	—	口縁端部は尖り気味。	外面　呉須　界線2条。内面　呉須　太い界線1条。	明青花磁器。Ⅰ類。16世紀代。
766	—	—	95－1面　整地面より上	青磁	香炉	(8.9)	(3.0)	—	体部は直立。口縁部は上面に水平に端面をもつ。	外面に浅い凹線施文。内外面とも青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。	龍泉窯系青磁。
767	ⅩⅡ	SD62001	暗灰色シルト	青白磁	杯	—	(3.5)	(8.8)	脚部は蛇の目高台風に畳付の幅が広い。体部は内彎気味に斜め上方に立ち上がる。	内外面とも全面に化粧土を刷毛塗りで塗布した後、透明釉を施釉。内面に刷毛塗りの線が明瞭に観察される。	畳付は露胎。景徳鎮窯系の青白磁杯か?　14世紀代。
768	ⅩⅣ	S D62001肩 より東	整地面	白磁	Ⅲ	—	(2.0)	(6.2)	高台は断面台形状で比較的低い。平底。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。畳付の釉はかきとり。	明代白磁。16世紀代。
769	ⅩⅣ	SD62001肩より東	整地面	青花磁器	碗	(13.4)	(3.1)	—	器壁は比較的薄い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　界線2条・細かい草花文?。内面　界線2条。色調　青味を帯びた灰白色。	明青花磁器。Ⅰ類。16世紀代。
770	ⅩⅡ	SD62001	下層	青花磁器	碗	—	(1.7)	(6.3)	高台は断面逆台形で比較的低い。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	内外面とも呉須で施文。色調　やや青味を帯びた白色。	明青花磁器。B類。蓮子碗。16世紀代。
771	ⅩⅡ	SD62001埋土	95－2面上	青花磁器	碗	—	(2.2)	—	器壁は比較的薄い。口縁部は外方にひらく。	外面　太い界線1条・草花文。内面　界線2条。	色調　やや青味を帯びた白色。明青花磁器。Ⅱ類。16世紀代。
772	ⅩⅣ区	SD62001肩より東	整地面	青花磁器	鉢	(16.2)	(3.7)	—	体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	体部外面　やや滲んだ釉で施文。内面　無文。色調　やや青味を帯びた灰白色。	口縁部の釉かきとり。漳州窯系。16世紀末～17世紀初頭。
773	ⅩⅢ ⅩⅠ－ⅩⅢ	96－4面まで3a 東西トレンチ西側	粗砂の上	瓦質土器	擂鉢	(23.0)	(7.5)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。口縁部の1ヶ所を捻って片口を作る。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　斜め方向のハケ目調整。体部内面　凹線1条・波状文4条・6条1単位の櫛描きの擂目施文。	焼成　良好。色調　灰黒色。Db2類。16世紀代。
774	ⅩⅢ ⅩⅠ－ⅩⅢ	96－3a茶灰シルト中	—	瓦質土器	火鉢	(20.1)	(5.4)	—	口縁部は短く直立。口縁端部は上面に水平に端面をもつ。	口縁部外面　回転ナデ調整。口縁部内面　ヘラミガキ調整。	色調　黒灰色。Ⅱ類。
775	ⅩⅢ ⅩⅠ－ⅩⅢ	96－3a（粗砂まで）	95－4面まで 茶灰シルト	青花磁器	碗	(14.2)	(3.9)	—	器壁は比較的薄い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　かすれた呉須で　界線2条・簡易な草花文施文。内面　界線1条。色調　黄灰色。	明青花磁器。16世紀代。
776	ⅩⅠ－ⅩⅡ ⅩⅠ	SD64001 —	下層 95－4面まで3a	無釉陶器	桶形容器	長 (6.2)	巾 (11.5)	—	体部は直立する。体部外面に断面三角形状の凸帯を貼り付ける。	内外面とも回転ナデ調整。	外面　胡麻状に灰被り。色調　暗赤褐色。備前焼　桶形容器(建水?)。16世紀代。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
777	—	東側側溝	95－4面までが主	瓦質土器	火舎香炉	—	(5.5)	—	体部は直立。口縁部は上面に水平に端面をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。体部外面に巴文を印花で施文。	炭素の吸着はほとんど見られない。色調　灰白色。Ⅱ類。
778	XⅡ	南北畦	洪水砂層直上	無釉陶器	擂鉢	(33.1)	(6.3)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖る。	内外面とも回転ナデ調整。体部内面　9条1単位の櫛描きの擂目を施文する。	焼成　良好。色調　にぶい橙色。越前焼。C2類。16世紀代。
779	XⅡ	北側側溝	95－4面までが主	無釉陶器	壺	(21.3)	(3.0)	—	頸部は短く直立。口縁部は玉縁状に僅かに肥厚する。	内外面とも強い回転ナデ調整。	内外面とも胡麻状に灰被り。色調　暗赤褐色。備前焼。
780	XⅡ	96－4面～5面		無釉陶器	甕	(54.3)	(14.3)	—	体部は内傾。頸部はほぼ直立。口縁部は断面楕円形状に肥厚する。	内外面とも回転ナデ調整。	色調　にぶい赤褐色。焼成　堅緻。備前焼Ⅳ期。15世紀代。
781	XⅣ－XX	SD65001 東側溝	(SD64001下層) 96－3面より下	瓦質土器	擂鉢	(33.3)	(8.5)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は若干外方にひらく。口縁端部は玉縁状に肥厚する。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　指おさえの後、縦方向の粗いハケ目調整。指頭圧痕が残る。体部内面に8条1単位の擂目を櫛描き施文。	色調　オリーブ黒色。Ca1類。16世紀代。
782	XⅣ	SD65001	(SD64001下層)	施釉陶器	埦	(11.8)	(4.4)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は一旦屈曲して、外方にひらく。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。内外面とも鉄釉施釉。ガラス質の強い極暗赤褐色に発色。体部外面の一部が大きく釉切れする。	釉はガラス質。瀬戸・美濃系天目茶碗。大窯Ⅰ期。16世紀前半代。
783	XⅣ	SD65001	(SD64001下層)	施釉陶器	埦	(11.9)	(3.5)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は一旦屈曲して、外方にひらく。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。内外面とも鉄釉施釉。ガラス質の強い黒褐色に発色。	瀬戸・美濃系天目茶碗。大窯Ⅱ期。16世紀中頃。
784	XⅡ	SD65001S	シルト層上半層	青花磁器	碗	(12.0)	4.0	—	体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。	内外面とも界線1条のみ施文。色調　白色。	明青花磁器。Ⅱ類。
785	XⅡ 南西半	杭列より南	96－5K層内	青花磁器	碗	(13.2)	(3.5)	—	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	器面は2次焼成を受ける。外面　淡い呉須で界線2条。内面　無文。	明青花磁器。Ⅰ類。　16世紀代。
786	XⅡ	96－5面まで 96－5K面まで	杭列より北　土塁より東	青花磁器	皿	(9.8)	2.5	(2.8)	碁笥底。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面　草花文帯・芭蕉文・界線。底部内面　界線　草花文。呉須の発色は悪い。色調　青味を帯びた灰色。	底部外面の釉　輪状にかきとり。明青花磁器。ⅠA類。　16世紀代。
787	XⅡ 東	タチワリ	96－5面整地層 (黄色)	青花磁器	碗	(12.0)	(2.0)	—	器壁は比較的薄い。口縁端部は尖り気味。	外面　界線2条・牡丹文?。内面　界線2条。	明青花磁器。16世紀代。
788	XⅢ XⅡ	96－4面まで SD66001最下層	—	瓦質土器	火鉢	—	(10.8)	—	平面形状は楕円形。体部は直立。口縁部は上面に水平に端面をもつ。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部外面　巴文を印花で連続して施文。体部内面　ナデ調整。	色調　暗灰色。Ⅲ類。
789	XⅡ	SD66001東側 肩部埋土	褐色粗砂	瓦質土器	鉢	(32.8)	(6.3)	—	体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　回転ナデ調整。体部外面　指おさえの後、回転ナデ調整。指頭圧痕が疎らに残る。体部内面　ヘラミガキ調整。	色調　暗灰色。Aa2類。
790	XⅡ	SD66001	暗灰色粗砂	無釉陶器	擂鉢	(35.9)	(5.1)	—	口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。口縁下端部を外方に引き出す。	内外面とも強い回転ナデ調整。内面に櫛描きの擂目施文。	口縁部外面に若干胡麻状に灰被り。色調　灰赤色。備前焼Ⅳ期。15世紀代。
791	XⅣ－XX	SD66001内か? 東側溝	'9695－3面より下	無釉陶器	擂鉢	(39.2)	15.1	(16.0)	平底。底部の器壁は厚い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖る。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。口縁部内面　僅かに窪む。体部内外面　回転ナデ調整。体部内面に12条1単位の擂目を櫛描き施文。底部外面　不調整。	外面に赤土部か?　焼成　ややあまい。色調　にぶい橙色。越前焼。C2類。16世紀代。
792	XⅡ	堀(東西方向)?	粗砂上フショク	無釉陶器	擂鉢	(29.5)	(5.4)	—	口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部外面に凹線3条。体部内面に櫛描きの擂目施文。	色調　黒褐色。焼成　堅緻。口縁部外面に若干灰被り。備前焼Ⅴ期。16世紀代。
793	XⅣ－XV	SD66001内か?	— —	施釉陶器	皿	(10.1)	3.4	4.7	碁笥底。底部外面中央はト巾状に削り残す。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも灰釉施釉。やや青味を帯びた灰白色に発色。外面の高台脇以下露胎。	器面に粗い貫入。朝鮮陶器?
794	XⅡ	SD66001東側肩部	洪水砂内	青磁	碗	(10.9)	5.4	(4.4)	高台は断面台形状で比較的高い。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも青磁釉施釉。淡黄緑色に発色。器面に細かい貫入。畳付・高台裏は露胎。	龍泉窯系青磁無文碗。ⅠA1類。13世紀代。
795	XⅡ	SD66001	暗灰色粗砂	白磁	皿	(8.9)	(2.9)	(3.4)	高台は断面台形状で比較的高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。口縁端部は尖り気味。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。	華南産白磁。森田分類　E－2群。16世紀代。
796	XⅡ XⅡ	SD67001(上半) SD66001	(A)の南粗砂中 暗灰色粗砂	白磁	皿	(12.0)	(2.3)	—	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は水平に外方にひらく。口縁端部は玉縁状に肥厚する。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。	華南産白磁。森田分類　E－2群。16世紀代。
797	XⅡ XⅡ	SD66001東側肩部 SD66001	褐色粗砂 暗灰色粗砂	青花磁器	碗	(3.6)	—	—	体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　呉須　雷文帯・草花文。内面　界線1条。	器面に虫喰い。明青花磁器。16世紀代。
798	XⅡ	SD66001東側肩部	洪水砂内	青花磁器	碗	(12.8)	5.7	(4.5)	高台は比較的細く高い。底部は饅頭心でやや上げ底気味。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。	外面　界線2条・牡丹文?・界線3条。内面　界線2条。底部内面　界線2条・牡丹文。底部外面　界線2条。	色調　やや青味を帯びた白色。明青花磁器。ⅠA類。饅頭心碗。16世紀代。
799	XⅣ	SD67001南端	墨書土器集中部	土師器	皿	7.7	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部外面に板状工具痕。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅱ類。
800	XⅣ	SD67001清掃時	'95年度旧SD4002埋土内	土師器	皿	8.1	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。内面に布目圧痕。底部外面に板状工具痕。	口縁部内外面に煤附着。焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅱ類。
801	XⅣ	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	8.2	2.2	—	非ロクロ成形。器形は大きく歪む。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁端部　一部打ち欠きか?　焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅱ類。
802	XⅣ	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	8.3	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部外面に板状圧痕。	焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅱ類。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
803	XIV	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	8.3	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Aa1Ⅱ類。
804	XIV	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	8.4	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄色。Ab1Ⅱ類。
805	XIV	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	8.4	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Ab1Ⅱ類。
806	XIV	SD67001南端	墨書土器F群共伴	土師器	皿	8.4	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部外面に一部布目圧痕。	焼成　良好。色調　灰黄色。Ab1Ⅱ類。
807	XIV	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	8.4	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅱ類。
808	XIV	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	8.4	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄橙色。Ab1Ⅱ類。
809	XIV	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	8.4	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部外面に板状工具痕あり。	焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅱ類。
810	XIV	SD67001南端	墨書土器F群共伴	土師器	皿	8.5	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Aa1Ⅱ類。
811	XIV	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	8.5	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄橙色。Aa1Ⅱ類。
812	XIV	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	8.5	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部外面に板状工具痕。	焼成　良好。色調　浅黄色。Aa1Ⅱ類。
813	XIV	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	8.4	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅱ類。
814	XIV	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	8.5	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　暗灰黄色。Aa1Ⅱ類。
815	XIV	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	8.5	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。	焼成　良好。色調　淡黄色。Aa1Ⅱ類。
816	XIV	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	8.6	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰白色。Aa1Ⅱ類。
817	XIV	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	8.7	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。	焼成　良好。色調　淡黄色。Aa1Ⅱ類。
818	XIV	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	8.7	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄橙色。Aa1Ⅱ類。
819	XIV	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	8.7	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅱ類。
820	XIV	SD67001南端	墨書土器F群共伴	土師器	皿	8.8	1.9	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Ab1Ⅱ類。
821	XIV	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	8.8	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部はゆるやかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。Ab1Ⅱ類。
822	XIV	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	8.8	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。
823	XIV	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	8.9	1.9	—	非ロクロ成形。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部外面に板状圧痕。	焼成　良好。色調　浅黄橙色。Aa1Ⅱ類。
824	XIV	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	9.0	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅱ類。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
825	XⅣ	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	9.6	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に微かに円圏が残る。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅱ類。
826	XⅣ	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	9.7	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が微かに残る。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅲ類。
827	XⅣ	SD67001南端	墨書土器F群共伴	土師器	皿	9.8	2.3	—	非ロクロ成形。平底。器壁は比較的薄い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	底部内面に黒斑。焼成　良好。色調　灰黄色。Aa2Ⅲ類。
828	XⅣ	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	9.9	2.3	—	非ロクロ成形。平底。やや上げ底気味。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Ab1Ⅲ類。
829	XⅣ	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	10.0	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　淡黄色。Aa1Ⅲ類。
830	XⅣ	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	11.8	2.8	—	非ロクロ成形。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅳ類。
831	XⅣ	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	12.3	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。Ab2Ⅳ類。
832	XⅣ	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	12.4	2.6	—	非ロクロ成形。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部1ヶ所打ち欠きか?。焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅳ類。
833	XⅣ	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	12.4	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄橙色。Aa1Ⅳ類。
834	XⅣ	SD67001	墨書土器F群共伴	土師器	皿	13.7	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Aa1Ⅴ類。
835	XⅣ	SD67001	墨書土器F群共伴	瓦質土器	擂鉢	27.4	(9.2)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部の1ヶ所を捻って片口を作り出す。	内外面とも回転ナデ調整。体部内面　6条1単位の櫛描きの擂目を施文。	色調　黒灰色。越前焼擂鉢の模倣形。Aa1類。16世紀代。
836	XⅡ	AB間 SD67001埋土	粗砂中	瓦質土器	火鉢	(15.1)	(7.9)	—	体部は大きく内彎する。体部外面に扁平な把手を貼り付ける。口縁部は内傾する。	内外面とも横方向の丁寧なミガキ調整。暗文が残る。	色調　オリーブ灰色。Ⅱ類。
837	XⅡ	SD67001粗砂中	(B)より南	瓦	磚	長 (7.8)	巾 (8.0)	厚 (2.8)	破片。	上面　板ナデ調整。	色調　灰色。瓦磚。
838	XⅣ	SD67001	墨書土器F群共伴	無釉陶器	擂鉢	(36.0)	(7.6)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上面に端面を持つ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部内面に10～12条1単位の擂目を櫛描き施文。	口縁部外面に重ね焼き痕。口縁部内面に煤附着。焼成はややあまい。色調　浅黄橙色。越前焼。B1類。16世紀代。
839	XⅣ	SD67001　埋土 (整地土)	(C)より北	施釉陶器	埦	(11.4)	(5.8)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は一旦屈曲して、外方にひらく。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。内面～外面の体部上半（高台脇附近まで）　鉄釉施釉。黒褐色に発色。体部下半以下　鬼板を塗布。	瀬戸・美濃系。窯窯期の製品。15世紀代。
840	XⅡ	SD67001b	下半主	施釉陶器	埦	—	(1.0)	(4.5)	天目茶碗の高台部。削りだしの浅い内反り高台。	内面　ガラス質の強い鉄釉施釉。黒褐色に発色。外面　赤土部塗布。暗茶褐色に発色。	瀬戸・美濃系。大窯期。16世紀代。
841	XⅣ	SD65001下半 SD67001南端	茶灰シルト 墨書土器F群共伴	施釉陶器	四耳壺?	長 (5.2)	巾 (7.7)	—	体部外面に横耳?貼り付け。	内面　鉄釉?を部分的に施釉。外面　鉄釉?を全面に施釉。オリーブ黒色に発色。	華南産の鉄釉四耳壺か?
842	XⅣ	SD67001下半	(C)より南	白磁	皿	(11.5)	3.5	(4.3)	底部の器壁は比較的厚い。高台は断面台形状で低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	底部外面はト巾状に削り残す。内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。底部外面(高台裏)　露胎。橙色に発色する。	焼成はあまい。釉のノリが悪く、釉ムラがある。森田分類　E－2群。明代の粗製の白磁。16世紀代。
843	XⅡ	SD67001粗砂		青花磁器	杯	(5.3)	3.3	(2.3)	器壁は比較的薄い。高台は断面三角形状。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　呉須　界線1条・草花文・界線2条。内面　界線1・2条。畳付の釉かきとり。露胎部は淡赤褐色に発色。	明青花磁器。16世紀代。
844	XⅣ	SD67001南端	墨書土器F群共伴	青花磁器	碗	—	(1.7)	(4.8)	高台は細く比較的高い。	外面　草花文。内面　界線2条・「富貴長春」銘施文。畳付の釉丁寧にかきとり。	色調　白色。明青花磁器。16世紀代。
845	XⅣ	SD67001下層	整地土より下のフショク土中	青花磁器	碗	—	(2.3)	4.4	高台は細く低い。平底。体部は内彎気味に斜め上方に立ち上がる。	底部内面　唐人文。底部外面　界線2条・「壽」字文。色調　灰白色。	明青花磁器。C類。16世紀代。
846	XⅣ	SD67001下半	墨書土器F群共伴	青花磁器	碗	(15.1)	(4.3)	—	体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　やや黒味を帯びた呉須で界線2条・唐草文施文。体部内面　界線1条。底部内面　界線2条。色調　灰色で青味を帯びる。	明青花磁器。Ⅰ類。16世紀代。
847	XⅡ	SD67002周辺	96－7面までのほり下げ	青磁	碗	—	(1.7)	—	体部は内彎気味に上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面に剣頭と体部が不一致の線描きの蓮弁文を施文する。内外面とも青磁釉施釉。淡緑灰色に発色。	龍泉窯系青磁細蓮弁文碗。ⅠB2類。16世紀代。
848	XⅡ	SD67002b	—	白磁	杯	(6.1)	3.4	(2.1)	高台は細く低い。平底。底部の器壁は比較的厚い。体部は外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。底部内面　蛇の目状釉ハギ。	華南産白磁。16世紀代。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
849	XⅣ	SD68001主	墨書土器F群共伴下層	土師器	皿	8.3	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅱ類。
850	XⅣ	SD67001より下層	第8面対応	土師器	皿	8.4	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　淡黄色。Aa1Ⅱ類。
851	XⅣ	SD68001底南端	—	土師器	皿	8.4	1.9	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄橙色。Ab1Ⅱ類。
852	XⅣ	SD68001	(C)より南	土師器	皿	8.5	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰オリーブ色。Aa1Ⅱ類。
853	XⅣ	SD68001底南端	—	土師器	皿	8.6	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部外面に板状工具痕。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Ab1Ⅱ類。
854	XⅣ	SD68001底南端	—	土師器	皿	8.7	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa2Ⅱ類。
855	XⅣ	SD68001底南端	—	土師器	皿	9.7	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に沈線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に微かに円圏が残る。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅲ類。
856	XⅣ	SD68001底南端	—	土師器	皿	9.9	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄色。Aa1Ⅲ類。
857	XⅣ	SD68001	(C)より南	土師器	皿	10.0	2.5	—	非ロクロ成形。平底。やや上げ底気味。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成　良好。色調　灰オリーブ色。Ab1Ⅲ類。
858	XⅡ	SD68001	—	土師器	皿	10.1	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅲ類。
859	XⅣ	SD68001底南端	—	土師器	皿	11.8	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に微かに円圏が残る。	焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅳ類。
860	XⅣ	SD68001底南端	—	土師器	皿	12.0	2.7	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。
861	XⅣ	SD68001	(C)より南	土師器	皿	12.2	2.1	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅳ類。
862	XⅡ	SD68001	(B)土手内	土師器	耳皿	2.8	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は大きく内傾する。口縁端部は尖り気味。	内外面ともヨコナデ調整。体部外面に指頭圧痕が残る。	赤外線透視の結果、内面に墨痕を確認。焼成　良好。色調　灰白色。
863	XⅣ	SD68001	(C)より南	無釉陶器	擂鉢	(39.8)	(5.1)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は内面に端面をもつ。	内外面とも回転ナデ調製。口縁部内面に凹線1条。体部内面に10条1単位の擂目を櫛描きで施文する。	焼成　良好。色調　明赤褐色。越前焼。B1類。16世紀代。
864	XⅡ	SD68001	—	青磁	碗	(11.9)	(5.0)	—	器壁は比較的薄い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも青磁釉施釉。暗緑灰色に発色。器面に粗い貫入。	断面に漆継ぎ痕。龍泉窯系青磁　無文碗。ⅠA類。
865	XⅡ	SD68002東	位牌出土地点	土師器	皿	8.6	1.9	—	非ロクロ成形。体部の器壁は比較的厚い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。底部外面に板状工具痕。	口縁部内外面に煤附着。焼成　良好。色調　黄橙色。Ab1Ⅱ類。
866	XⅡ	SD68002東	位牌出土地点	土師器	皿	8.9	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成　良好。色調　灰オリーブ色。Aa1Ⅲ類。
867	XⅡ	SD68002東	位牌出土地点	土師器	皿	12.8	2.5	—	非ロクロ成形。器壁は全体に比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　灰黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。
868	XⅡ	SD68002東	位牌出土地点	土師器	皿	12.8	2.9	—	非ロクロ成形。器壁は全体に比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄橙色。Aa1Ⅳ類。
869	XⅡ	SD68002東	位牌出土地点	土師器	皿	13.0	2.6	—	非ロクロ成形。器壁は全体に比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が微かに残る。	焼成　良好。色調　灰黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。
870	XⅡ	SD68002東	位牌出土地点	土師器	皿	13.3	2.4	—	非ロクロ成形。器壁は全体に比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。Ab1Ⅴ類。
871	XⅡ	SD68002	—	土師器	皿	8.3	1.8	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部外面に板状工具痕。	焼成　良好。色調　灰黄褐色。Ab1Ⅱ類。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
872	XⅣ	SD68002底	—	土師器	皿	8.5	1.9	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	焼成　良好。色調　灰白色。Ab1Ⅱ類。
873	XⅡ	SD68002東	—	土師器	皿	8.7	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	底部内面に黒斑。焼成　良好。色調　灰白色。
874	XⅡ	SD68202	灰黒シルト	土師器	皿	13.0	2.8	—	非ロクロ成形。器高は比較的低い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	底部内面に黒斑。焼成　良好。色調　灰黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。
875	XⅣ	SD68002底	—	瓦質土器	火舎香炉	—	(7.1)	(17.1)	体部は内傾する。外面に透かしあり。	外面は上から順に不定方向・横方向・縦方向のミガキ調整を加える。内面は横方向の板ナデ調整を加える。	色調　黒褐色。器面は平滑。Ⅳ類。
876	XⅣ	堀より東	第8面灰色シルト中	無釉陶器	擂鉢	(25.6)	(7.8)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張、縁帯を形成する。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部外面に凹線3条。体部内面に9条1単位の櫛描きの擂目施文。	焼成　ややあまい。色調　にぶい黄橙色。備前焼Ⅴ期。16世紀代。
877	XⅣ	SD68002	暗褐色粗砂	白磁	四耳壺	(10.5)	(6.6)	—	頸部は僅かに外反気味にほぼ直上に延びる。口縁部は外方に折り曲げ、端部は斜め下方に引き出す。	内外面とも透明釉施釉。暗灰緑色に発色。	白磁四耳壺。12世紀後半～13世紀前半代。
878	XⅣ	SD68002	暗褐色粗砂	青花磁器	碗	—	(2.7)	(5.2)	高台は断面三角形状で細く高い。体部は内彎気味に斜め上方に立ち上がる。	外面　界線2条。内面　界線1条・幾何学文・花文。	畳付の釉はかきとり。明青花磁器。16世紀代。
879	XⅡ	堀の内か?	整地土の下	青花磁器	碗	(12.1)	(3.4)	—	体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	外面　比較的鮮やかな呉須で界線1条・草花文。内面　菱形文。色調　白色。	明青花磁器。Ⅱ類。16世紀代。
880	XⅣ	SD68001底一括 SD69001の可能性	—	土師器	皿	7.9	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰白色。Aa1Ⅱ類。
881	XⅣ	SD68001底一括 SD69001の可能性	—	土師器	皿	7.9	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　褐灰色。Aa1Ⅱ類。
882	XⅣ	SD68001底一括 SD69001の可能性	—	土師器	皿	8.1	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰白色。Aa1Ⅱ類。
883	XⅣ	SD68001底一括 SD69001の可能性	—	土師器	皿	8.2	1.9	—	非ロクロ成形。平底（底部外面は一部剥離）。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Ab1Ⅱ類。
884	XⅣ	SD68001底一括 SD69001の可能性	—	土師器	皿	8.2	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。Ab1Ⅱ類。
885	XⅣ	SD68001底一括 SD69001の可能性	—	土師器	皿	8.3	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅱ類。
886	XⅣ	SD68001底一括 SD69001の可能性	—	土師器	皿	8.3	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。Ab1Ⅱ類。
887	XⅣ	SD68001底一括 SD69001の可能性	—	土師器	皿	8.4	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Ab1Ⅱ類。
888	XⅣ	SD68001底一括 SD69001の可能性	—	土師器	皿	8.4	1.9	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。Ab1Ⅱ類。
889	XⅣ	SD68001底一括 SD69001の可能性	—	土師器	皿	8.6	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部外面　板状工具痕。	焼成　良好。色調　灰黄色。Ab1Ⅱ類。
890	XⅣ	SD68001底一括 SD69001の可能性	—	土師器	皿	9.9	2.1	—	非ロクロ成形。平底。やや上げ底気味。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成　良好。色調　淡黄色。Ab1Ⅲ類。
891	XⅣ	SD68001底一括 SD69001の可能性	—	土師器	皿	11.9	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　良好。色調　浅黄色。Aa1Ⅳ類。
892	XⅣ	SD68001底一括 SD69001の可能性	—	土師器	皿	12.2	2.3	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。Ab1Ⅳ類。
893	XⅣ	SD68001底一括 SD69001の可能性	—	土師器	皿	12.3	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。Aa2Ⅳ類。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
894	XⅣ	SD68001底一括 SD69001の可能性	—	土師器	皿	12.4	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に沈線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅳ類。
895	XⅣ	SD68001底一括 SD69001の可能性	—	土師器	皿	12.5	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅳ類。
896	XⅣ	SD68001底一括 SD69001の可能性	—	土師器	皿	13.0	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅳ類。
897	XⅡ	SD69002	—	瓦質土器	擂鉢	(35.9)	(9.6)	—	体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は若干外方にひらく。口縁端部は玉縁状に肥厚する。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。口縁部の1ヶ所を捻って片口を作り出す。体部外面　指おさえの後、縦方向の粗いハケ目調製。指頭圧痕が残る。体部内面に8条1単位の擂目を櫛描き施文。	色調　灰黄褐色。Db1類。16世紀代。
898	XⅣ－XⅡ	SD54002内		施釉陶器	四耳壺?	長 (11.5)	巾 (12.1)	—	体部は内彎。体部外面に横耳貼り付け。	内外面とも鉄釉?施釉。黒褐色に発色。内面にロクロ目跡。	華南産の鉄釉四耳壺片か?
899	XⅣ	旧SD64002肩部	95－4面対応	青花磁器	碗	(11.9)	(2.2)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　非常に淡い呉須で○○文帯施文。内面　太い界線1条。やや青味を帯びた黄灰色。	焼成　ややあまい。器面に気泡が見られる。明青花磁器。
900	XⅡ	—	整地面下	瓦質土器	火鉢	(17.4)	(8.6)	—	体部は大きく内彎する。口縁端部は丸味をもつ。体部外面に把手を貼り付ける。	内外面とも横方向のミガキ調整。平行暗文が残る。	色調　オリーブ黒色。Ⅱ類。
901	XⅣ	土塁下	95－4面より下	瓦質土器	火鉢	(35.4)	(11.4)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は水平に外方に折り曲げる。口縁部の断面形状は長方形。	体部内面上半～口縁部外面　回転ナデの後、横方向のヘラミガキ調整。体部外面　回転ナデの後、斜め方向のヘラミガキ調整。体部内面下半　回転ナデ調整。	口縁部内面に煤附着。器面は平滑で炭素の吸着はほとんど見られず、色調は灰白色を呈する。Ⅳ類。
902	XⅡ－XⅣ	—	東西サブトレ東側	青磁	碗	(13.5)	8.1	5.7	高台は断面台形状で、太く比較的高い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも青磁釉施釉。灰オリーブ色に発色。全面に灰被りにより、白濁する、底部外面は輪状に釉をかきとる。	龍泉窯系青磁無文碗。ⅠA2類。15世紀代。
903	XⅣ	—	江戸耕土除去	青花磁器	杯	(6.6)	(2.0)	—	体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	外面　界線1条・草花文?。内面　界線1条。色調　白色。	明青花磁器。Ⅱ類。16世紀代。
904	XⅡ	—	—	無釉陶器	甕	(31.6)	(11.9)	—	頸部は若干外方にひらく。口縁部は断面楕円形状に肥厚する。口縁部外面に凹線2条。	内外面とも強い回転ナデ調整。	色調　灰褐色。焼成　堅緻。備前焼Ⅴ期。16世紀代。
905	XⅥ	97－1面整地層	—	無釉陶器	甕	—	(8.2)	—	口縁部は断面楕円形状に肥厚する。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部外面に凹線1条。	口縁部外面　胡麻状に灰被り。焼成　堅緻。色調　暗赤褐色。備前焼Ⅴ期。16世紀代。
906	XⅧ	SD72001東肩	石列清掃時	瓦質土器	火舎香炉	(9.4)	5.1	(7.7)	平底。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　回転ナデ調整。体部内面　回転ナデ調整。体部外面　縦方向のヘラミガキ調整。暗文が残る。	色調　暗灰色。Ⅰ類。
907	XⅥ	SD72001東半	上層	施釉陶器	皿	10.1	3.1	5.1	碁笥底。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも灰釉施釉。淡黄緑灰色に発色。外面の体部下半以下露胎。	器面に粗い貫入。瀬戸・美濃系灰釉陶器皿。ⅠB類。大窯Ⅱ～Ⅲ期。16世紀中頃～後半。
908	XⅥ	SD72001	上層	無釉陶器	甕 or 壷の底部	—	(5.6)	(13.2)	平底。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。	体部外面　回転ヘラ削り。体部～底部内面　回転ナデ調整。底部外面　不調整。	色調　にぶい褐色。備前焼。
909	XX	97－2面まで	—	瓦質土器	火鉢	(19.8)	9.2	13.7	高台は断面台形状で比較的高い。平底。体部は大きく内彎する。口縁端部は丸味をもつ。体部外面に把手を2ヶ所貼り付ける。	内面の口縁部～底部　粗いヘラミガキ調整。外面の口縁部～体部　回転ナデ調整の後、ヘラミガキ調整。底部外面　粗いナデ調整。	炭素の吸着はほとんど見られない。色調　浅黄色。Ⅱ類。
910	XX	97－2面まで	—	瓦質土器	擂鉢	(21.6)	(4.3)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。口縁部の1ヶ所を捻って片口を作り出す。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。口縁部内面に凹部をもつ。体部外面　縦方向のハケ目調整。体部内面　8条1単位の櫛描きの擂目を施文。口縁部内面　櫛描きの波状文を擂目の上に施文。	内面は器面の磨耗が著しい。焼成　やや軟質。色調　黒灰色。Db2類。16世紀代。
911	XⅥ	97－2面まで	粗砂まじり	瓦質土器	擂鉢	(26.9)	13.0	(10.4)	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は水平に外方につまみ出す。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　縦方向の粗いヘラミガキ調整。体部内面　横方向のヘラミガキ調整の後、5～6条1単位の櫛描きの擂目施文。	色調　外面　灰黄色。内面　暗灰色。焼成　やや軟質。Bc1類。
912	XX XX	東側溝 SD72005脇	— —	瓦質土器	擂鉢	(32.6)	(12.6)	(14.9)	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。口縁部内面　凹線1条。体部外面　縦方向のハケ目調整の後、指おさえ。指頭圧痕が残る。体部内面　9条1単位の櫛描きの擂目施文。	焼成　良好。色調は部分的に灰白色と黒色が入り混じる。Db1類。16世紀代。
913	XX	97－2面まで	—	瓦質土器	擂鉢	(36.6)	(11.8)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。口縁部外面に凹部をもつ。体部外面　縦方向のハケ目調整の後、指おさえ。体部内面　9条1単位の櫛描きの擂目施文。口縁部内面に凹線1条。	焼成　良好。色調は部分的に灰白色と黒色が入り混じる。Db1類。16世紀代。
914	XⅥ	—	'96年5面目堀の底	無釉陶器	擂鉢	(34.0)	(7.4)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。	口縁部内外面　強い回転ナデ調製。体部内外面　回転ナデ調整。体部内面　8条1単位の櫛描きの擂目施文。口縁部内面に凹線1条。	焼成　良好。色調　にぶい橙色。越前焼。C2類。16世紀代。
915	XX	97－2面まで	—	無釉陶器	甕	—	(4.6)	—	口縁部は断面楕円形状に肥厚する。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部外面に凹線1条。	口縁部外面　胡麻状に灰被り。焼成　堅緻。色調　にぶい赤褐色。備前焼Ⅴ期。16世紀代。
916	XⅧ	97－2面整地	黄褐色粗砂上	無釉陶器	甕	—	(12.2)	(34.8)	平底。体部は直線的に外上方に立ち上がる。	外面上位　ヨコナデ調整。外面下位　横方向のヘラ削り調整。底部外面　不調整。体部内面　指おさえの後、ヨコナデ調整。	焼成　ややあまい。色調　にぶい黄橙色。越前焼?
917	XⅥ	97－2面まで	—	施釉陶器	埦	(10.6)	(5.3)	—	体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は屈曲して僅かに外方にひらく。	内外面とも鉄釉施釉。暗茶褐色に発色。高台脇以下は未施釉で鬼板を塗布する。	瀬戸・美濃系天目茶碗。大窯Ⅰ期。16世紀前半代。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
918	XⅦ	石列より南 97－2面まで (上半)	—	青花磁器	碗	(11.7)	(6.0)	(3.9)	高台は比較的細く高い。平底。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　呉須　界線2条・草花文・界線3条。体部内面　界線2条。底部内面　界線2条・草花文。色調　やや青味を帯びた灰白色。	畳付の釉かきとり。漆継ぎ痕あり。明青花磁器。ⅠC類。16世紀代。
919	XⅧ	—	2面目直上の土壌層	青花磁器	碗	(12.3)	(4.4)	—	体部の器壁は薄い。口縁端部は尖り気味。	外面　比較的鮮やかな呉須で　幾何学文・馬文を施文。色調白色。	明青花磁器。Ⅰ類。16世紀末～17世紀初頭。やや高級品か?
920	XⅥ	97－3面整地層 SD73001肩部	—	無釉陶器	甕	(27.3)	(6.7)	—	体部は内傾。口縁部は大きく外方にひらく。口縁部内面に浅い凹線1条。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。	口縁部内面及び体部外面　灰被り。色調　にぶい赤褐色。丹波焼。16世紀代。
921	XⅥ	SD74001北半	溝底付近	土師器	Ⅲ	7.9	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部外面の一部剥離。	焼成　良好。色調　灰色。Aa1Ⅱ類。
922	XⅧ	SD74001	—	土師器	Ⅲ	8.4	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指押さえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　浅黄橙色。Aa1Ⅱ類。
923	XⅧ	SD74001	—	土師器	Ⅲ	8.6	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指押さえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅱ類。
924	XⅧ	SD74001	—	土師器	Ⅲ	8.6	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅱ類。
925	XⅥ	SD74001	墨書土器群周辺	土師器	Ⅲ	8.7	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面に凹部をもつ。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰白色。Aa1Ⅱ類。
926	XⅧ	SD74001	—	土師器	Ⅲ	8.8	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅱ類。
927	XⅥ－XⅧ	SD74001	—	土師器	Ⅲ	8.9	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅱ類。
928	XⅥ	SD74001肩	—	土師器	Ⅲ	9.7	2.6	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	口縁部外面～内面全面にかけて、煤がタール状に附着。焼成　良好。色調　灰オリーブ色。Aa1Ⅲ類。
929	XⅧ	SD74001	—	土師器	Ⅲ	10.4	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。底部外面　板状工具痕。	焼成　良好。色調　灰黄色。Ab1Ⅱ類。
930	XⅥ	SD74001	95－4面	土師器	Ⅲ	12.0	2.6	—	非ロクロ成形。器形は大きく歪む。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面に淡く墨痕か?。焼成　良好。色調　灰黄色。
931	XⅥ	SD74001	—	土師器	Ⅲ	12.5	2.6	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に微かに円圏が残る。	焼成　良好。色調　灰白色。Ab1Ⅳ類。
932	XⅥ	SD74001最下層	—	瓦質土器	火舎香炉	8.9	4.6	9.1	平面形状は楕円形。平底。体部は直上。口縁端部は上面に水平に端面をもつ。	型作り成形。口縁部～体部内外面　横方向のヘラミガキ調整。暗文が残る。底部内面　指おさえ。指頭圧痕が残る。底部外面　未調整。	器面は平滑に仕上げる。色調　黒色。Ⅱ類。
933	XⅧ	SD74001	—	瓦質土器	擂鉢	22.9	10.2	10.1	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は上面に端面をもつ。口縁部の1ヶ所を捻って片口を作り出す。	内外面とも回転ナデ調製。体部外面の下位に指頭圧痕が見られる。体部内面　8条1単位の櫛描きの擂目施文。	焼成　良好。色調　内面　黒灰色。外面　ほとんど炭素を吸着せず、灰白色。Aa1類。16世紀代。
934	XⅢ－XⅣ XⅣ XⅥ	サブトレ SD67001下半 SD74001	茶灰シルト (A)より南 茶灰シルト	無釉陶器	甕	—	(14.8)	(41.8)	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。	体部外面　板状工具による縦方向のナデ調整。体部内面　横方向のヘラケズリ調整の後、回転ナデ調整。	焼成　堅緻。色調　灰赤色。備前焼。
935	XⅥ XⅤ XⅡ－XⅣ	SD74001最下層 側溝 —	第3整地層直下 — 95－4面までが主	施釉陶器	埦	(11.9)	6.6	4.3	低い内反り高台を削り出す。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は屈曲して、外反気味に外方にひらく。	内外面とも鉄釉施釉。にぶい赤褐色に発色。外面の体部下半～底部　鬼板を塗布する。	焼成　良好。瀬戸・美濃系。大窯Ⅲ期。16世紀後半代。
936	XⅥ	SD74001肩～斜面	褐茶色粗砂	白磁	Ⅲ	—	(2.3)	(4.7)	碁笥底。底部の器壁は比較的厚い。体部は内彎気味に斜め上方に立ち上がる。	内外面とも透明釉施釉。青味を帯びた白色に発色。底部外面　未施釉。鬼板状のものを塗布か?　暗茶褐色に発色。	器面に細かい貫入。朝鮮製?
937	XⅧ	SD74001	茶灰色シルトコーナー部	青磁	碗	(10.9)	(4.0)	—	体部は内湾して斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　剣頭と身が不一致の線描きの蓮弁文を施文。内外面とも青磁釉施釉。暗緑灰色に発色。	龍泉窯系青磁細蓮弁文碗。ⅠB2類。16世紀代。
938	XⅧ	SD74001 土師Ⅲ集中部	灰色粗砂中	白磁	Ⅲ	(11.7)	2.9	(6.7)	高台は断面台形状。平底。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。畳付の釉かきとり。	華南産白磁。森田分類　E－2群。16世紀代。
939	XⅧ	SD74001肩部	褐茶灰粗砂	白磁	Ⅲ	(20.8)	(3.5)	—	体部は外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。	華南産白磁。森田分類　E－2群。16世紀代。
940	XⅧ	SD74001	—	青花磁器	Ⅲ	—	(2.9)	(12.8)	高台は比較的細い。平底。体部は内湾して斜め上方に立ち上がる。	外面　牡丹文・界線2・2条。内面　牡丹唐草文・界線2条・不明文。畳付の釉かきとり。やや青味を帯びた白色。	明青花磁器。16世紀後半。
941	XⅥ	SD74001	墨書土器群周辺	青花磁器	碗	(12.4)	(4.5)	—	器壁は比較的薄い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　呉須　太い界線1条・草花文。内面　太い界線1条。内面　草花文帯。呉須の発色は比較的濃く、やや滲む。	漆継ぎ痕あり。明青花磁器。Ⅰ類。16世紀末～17世紀初頭。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
942	XⅧ	SD74001肩部	褐茶灰粗砂	青花磁器	碗	(11.9)	(4.3)	—	器壁は比較的薄い。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は上面に端面をもつ。	外面　淡い呉須で　界線1条・草花文施文・界線1条施文。内面　界線1条。色調　やや青味を帯びた灰白色。	器面に虫喰い。明青花磁器。Ⅰ類。16世紀代。
943	XⅥ	97－4面以下	SD68001内墨書カ	白磁	杯	—	(2.3)	2.2	高台は断面三角形状で比較的幅が広く、低い。底部の器壁は比較的厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	内外面とも透明釉施釉。明緑灰色に発色。底部外面(畳付・高台裏)は露胎。	漆継ぎ痕あり。華南産白磁か?
944	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	8.1	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅱ類。
945	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	8.3	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部外面　板状工具痕。	焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅱ類。
946	XⅧ－XX	SD75001 コーナー	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	8.5	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰白色。Aa2Ⅱ類。
947	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	8.6	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰白色。Aa1Ⅱ類。
948	XⅧ－XX	SD75001	土器B群西周辺	土師器	Ⅲ	8.6	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅱ類。
949	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	8.7	1.9	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅱ類。
950	XⅧ	SD75001	墨書土器B群	土師器	Ⅲ	8.7	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面全面に黒斑。焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅱ類。
951	XⅧ	SD75001	墨書土器B群	土師器	Ⅲ	9.4	2.1	—	非ロクロ成形。平底。やや上げ底気味。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　ややあまい。色調　灰黄色。Aa1Ⅲ類。
952	XⅧ－XX	SD75001	墨書土器群E	土師器	Ⅲ	12.0	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	体部内面に煤附着。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅱ類。
953	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.1	2.5	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰白色。Aa1Ⅳ類。
954	XⅧ－XX	SD75001 コーナー	墨書土器C	土師器	Ⅲ	12.5	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	焼成　ややあまい。色調　灰黄色。京都系。Aa1Ⅱ類。
955	XⅧ－XX	SD75001 コーナー	墨書土器C	土師器	Ⅲ	14.6	2.6	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅴ類。
956	XⅥ－XⅧ	SD75001	土器A群西側周辺下層	土師器	蓋	(9.5)	3.6	—	山笠形。上面中央にナデ上げてつまみを貼り付ける。	内外面とも回転ナデ調整。内面の中央部　1方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　灰白色。瓦質土器?。
957	XⅧ－XX	SD75001 コーナー	土器C群	瓦質土製品	土鈴	長3.7	巾4.9	玉φ10.5mm	手づくね成形。上面に棒状工具で紐孔を穿孔。下面に切り込みを入れ、玉を挿入する。	外面に凹線1条。ナデ調整。	焼成　良好。色調　暗灰色。
958	XⅥ	SD75001	ブリッジより南	瓦質土器	擂鉢	(21.8)	9.3	10.0	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強い回転ナデ調製。体部外面　縦方向のハケ目調整の後、指おさえ。指頭圧痕が残る。体部内面　櫛描きで7条1単位の波状文・擂目を施文。体部外面に凹線状の窪み。	焼成　良好。色調　黒灰色。Ca2類。16世紀代。
959	XⅥ	SD75001	—	瓦質土器	擂鉢	(29.3)	(7.5)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は外方に引き出す。口縁部内面に沈線1条。	口縁部内外面　強い回転ナデ調製。体部外面　縦方向のハケ目調整の後、指おさえ。指頭圧痕が残る。体部内面　櫛描きで7条1単位の擂目を施文。口縁部外面に凹線状の窪み。	焼成　良好。色調　黒褐色。Bc1類。16世紀代。
960	XⅧ	SD75001 コーナー	墨書土器B群 コーナー側	青磁	碗	(12.5)	(5.0)	—	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも青磁釉施釉。淡黄緑灰色に発色。	漆継ぎの痕が見られる。龍泉窯系青磁。色調からいわゆる砧手か?。ⅠA類。13世紀代。
961	XV	97－5面まで	黄色粗砂及びその上面の土壌層	青磁	Ⅲ	—	(2.7)	—	体部は外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面に片切彫りで草花文施文。内外面とも青磁釉施釉。暗緑灰色に発色。	器面に細かい貫入。龍泉窯系青磁。ⅡA類。16世紀代。
962	XⅧ	SD75001	墨書土器B群	青花磁器	碗	(13.8)	5.9	(5.5)	高台は断面台形状で比較的低い。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　淡い呉須で　幾何学文帯・草花文・界線2条。体部内面　太い界線1条。底部内面　界線2条・草花文。色調　やや暗く青味を帯びた灰白色。呉須の発色も極端に淡い。	器面に細かい貫入。虫喰いが目立つ。明青花磁器。ⅠC類。16世紀代。
963	XⅥ	SD75001	墨書土器A群群北側	青花磁器	碗	—	(2.1)	(4.9)	高台は比較的細く高い。底部はやや上げ底気味。体部は斜め上方に立ち上がる。	外面　界線1条。底部内面　幾何学文・界線1条・草花文。底部外面　界線2条・「大□□□」銘。	明青花磁器。A類。饅頭心碗。16世紀後代。
964	XⅧ	S7D6001	—	青花磁器	碗	(13.9)	(4.5)	—	器壁は比較的薄い。口縁端部は丸味をもつ。	外面　界線1条。体部内面　界線1条。底部内面　界線1条・不明文。色調　灰白色。	明青花磁器。Ⅰ類。16世紀末～17世紀初頭。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
						口径	器高	底径			
965	XVI－XⅧ	SD76001他	—	青花磁器	碗	—	(3.4)	(5.8)	高台は断面台形状。底部外面はト巾状に中央部を削り残す。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	外面　不明文施文。内面　界線2条・不明文施文。器面は虫喰いが顕著に認められる。	明青花磁器。B類。蓮子碗。16世紀代。
966	XVI	97－6面	土壌層	瓦質土器	火鉢	(48.0)	(5.8)	—	体部は内彎。口縁端部は内側に引き出し、上面に水平に端面をもつ。	外面の口縁部～体部　ミガキ調整の後、ヨコナデ調整。体部内面　横方向のヘラミガキ調整。暗文が残る。	器面は比較的平滑に仕上げる。色調　黄灰色。Ⅴ類。
967	XVI —	—	堀内埋土 表採	瓦質土器	火鉢	(27.6)	(20.6)	(24.2)	平底。体部は直立。口縁部は上面に水平に端面をもつ。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。体部外面下位に印花で花文を連続施文。断面が方形と三角形の凸帯を3条貼り付ける。体部外面　縦方向のヘラミガキ調整。口縁部内面　横方向のヘラミガキ調整。指頭圧痕が残る。	口縁部外面に煤附着。炭素はほとんど吸着せず。色調　灰色。Ⅳ類。
968	XⅧ	—	97－4面以下鎌倉まで	青磁	碗	(13.8)	(2.6)	—	体部は斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面　剣頭と身が一致した線描きの蓮弁文を施文。内外面とも青磁釉施釉。暗緑灰色に発色。	龍泉窯系青磁細蓮弁文碗。ⅠB1類。15世紀代。
969	XⅢ	下層水田Ⅴ	—	弥生土器	壺	—	(17.5)	—	広口壺の体部上半から頸部の破片で、球形の体部から頸部は外反する。	体部外面は左上がりのハケ調整の後、頸体境までの間に三帯の棒先刺突を施文し、棒先刺突の間を三帯の櫛描直線文を描く。体部内面は横方向を中心としたハケ調整を行う。	
970	ⅣD	95－3S	赤褐色粗砂	弥生土器	器台	(31.2)	(6.4)	—	口頸部破片で、口縁端部を上方に摘み上げる。	口縁端面はヘラで、上向きの線鋸歯文を描き、左下がりの斜線を充填している。口縁下には磨滅のため不鮮明であるが、細い五条以上の凹線文を巡らしている。口縁部内面は横方向のハケ調整を行っている。	
971	XⅢ－XⅣ XIV XVI	—	褐色シルト層	弥生土器	甕	(14.0)	(6.2)	—	口縁部から体部上半の破片で、頸部は外反し、口縁部は屈折し上方に立ち上がる。	口縁部は面を作り、凹線を施す。体部は単位の短い縦方向のハケ調整を行う。体部内面は右から左方向にケズリを行う。	頸部にはススが付着する。
972	Ⅳ－A	95－4S面上	黒褐色シルト	弥生土器	甕	—	(8.4)	(5.3)	底部破片で、平底から体部は外方に直線的に開く。		底面から底部外面にかけて接地面黒斑が存在しており、やや横倒しに設置して焼成していたことが判る。内面は火回り不良の黒斑が存在する。
973	XV－XVI	鎌倉水田層	97－8面以下腐植土まで	弥生土器	甕	—	(6.8)	—	体部上半の破片で、口縁部を欠く。	外面は右上がりのタタキで仕上げる。	淡いススが付着する。
974	XIX－XX	—	97－8面水田土壌	土師器	甕	(11.9)	(4.8)	—	口縁部から体部上半の破片で、頸部は外反し、口縁部は屈折し上方に立ち上がる。	体部内面は左から右方向にケズリを行う。	口縁部内面にはコゲが存在し、口縁部外面から頸部にかけてはススが付着し、白い噴きこぼれ痕が存在する。
975	XV－XVI	東側整地層の下	97－8面以下腐植土まで	土師器	壷	—	(5.4)	—	体部の破片で球形を呈する。	内面は横方向のケズリを行っている。	外面は磨滅のため調整不明。
976	XIX－XX	—	奈良まで	土師器	甕	(16.8)	(12.5)	—	口縁部から体部上半の破片で、球形の体部から口頸部は屈曲し、外方に直線的に伸びる。	口縁部はヨコナデを行い、体部外面は不定方向のハケ調整、内面はハケ調整の後、横方向のケズリを行う。	体部から口縁部外面にかけてはススが付着し、白い噴きこぼれ痕が存在する。
977	Ⅱ	95－5面まで	—	須恵器	杯?	—	(2.2)	(丸底)	杯の底部を打ち欠いて作成。	内外面とも回転ナデ調整。	杯の底部を打ち欠いて作成。用途不明品。
978	VB	95－5面まで	—	須恵器	坏	(11.3)	5.6	(7.8)	高台は高く「ハ」の字状に外方にひらく。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。	内外面とも回転ナデ調整。	色調　灰色。
979	IXB IXC	95－2面より下	—	須恵器	埦?（底部）	—	(1.8)	(6.9)	底部の器壁は比較的厚い。高台は断面代形状で低い貼り付け高台。	内外面とも回転ナデ調整。底部外面　不調整。糸切痕が残る。	色調　灰色。古代の須恵器。
980	Ⅳ	95－3面+1	—	須恵器	甕	(57.8)	(9.2)	—	体部は大きく内彎。口縁部は大きく外反。口縁端部を若干直上につまみ上げる。	粘土紐巻上げ成形。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内面　回転ナデ調整。頸部及び体部外面　平行叩き目が残る。	色調　暗灰色。東播系須恵器。12世紀後半～13世紀前半代。
981	XIX	鎌倉水田層まで	—	青磁	碗	—	(1.5)	(5.5)	底部の器壁は厚い。	内外面とも青磁釉施釉。暗緑灰色に発色。高台裏は露胎。	龍泉窯系青磁碗の底部。13世紀代。
982	XIX	鎌倉水田土壌	—	無釉陶器	甕	—	(3.9)	—	口縁部は断面楕円形状に肥厚する。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部外面に凹線2条。	口縁部外面　胡麻状に灰被り。焼成　堅緻。色調　にぶい赤褐色。備前焼Ⅴ期。16世紀代。
983	XⅧ	95－5面より－60cm	褐灰茶シルト質極細砂	内黒土器	埦	—	(2.8)	(6.2)	平高台。高台側面はナデ調整。体部は内彎気味に斜め上方に立ち上がる。	体部外面　回転ナデ調製。体部内面　不定方向のヘラミガキ調整。暗文が残る。底部外面　不調整。糸切痕が残る。	色調　内面　暗灰色。外面　灰黄色。黒色土器A類。
984	XV－XVI	江戸洪水砂より下	1a 粗砂混り灰色極細砂	白磁	Ⅲ	—	(1.9)	4.4	高台は断面台形状で比較的幅が広く低い。器壁は全体に厚い。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも透明釉施釉。やや青味を帯びた灰白色に発色。	口縁部は全体に打ち欠く。畳付の釉丁寧に拭きとり。近世の国産白磁。
985	—	95－1洪水砂	—	白磁	杯	(3.8)	(3.3)	—	体部は直立。	内外面とも透明釉施釉。白色に発色。	器面に光沢がある。近世の肥前系白磁。
986	XⅧ	堀の凹部堆セキ	灰色粗砂まじりシルト	無釉陶器	擂鉢	(39.1)	(11.9)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は小さい玉縁状に若干肥厚する。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強い回転ナデ調製。体部内外面　回転ナデ調製。体部内面に12条1単位の櫛描きの擂目施文。内外面とも鬼板を塗布する。にぶい橙色に発色。	焼成　やや軟質。瀬戸・美濃系か?
987	XⅡ	95－1面まで	江戸耕土中	染付磁器	Ⅲ	—	(2.0)	(10.3)	高台は断面台形状で低い。平底。底部の器壁は比較的厚い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	内面　草花文・界線2条・五弁花文?。外面　界線1・1条・□渦福文。色調　やや青味を帯びた灰白色。	肥前系波佐見産。くらわんか手皿。18世紀後半。
988	—	96－1洪水砂－b	—	染付磁器	Ⅲ	(9.6)	2.0	5.2	高台は断面台形状で比較的低い。平底。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面　山水楼閣図。外面　無文。	底部内面に針支え痕。産地不明。19世紀前半以降。
989	X	カク乱	—	染付磁器	碗	(8.9)	5.6	(3.4)	高台は幅が狭く低い。体部は内彎してほぼ直上に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面　呉須　丸文・斜格子文。内面　呉須　界線2・2条。	肥前系。半球形碗。19世紀前半。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
990	—	北壁側	第1洪水砂	染付磁器	碗	—	(5.0)	5.1	高台は「ハ」の字状に外方にひらく。平底。体部は内彎気味に斜め上方に立ち上がる。	外面　草花文?・界線2条。底部内面　界線1条・草花文?施文。	瀬戸・美濃系。19世紀前半。
991	ⅣD	SD52006	—	青磁	碗	—	—	—	口縁部の破片。	外面　線描きの細蓮弁文を施文。内外面とも青磁釉施釉。淡灰緑色に発色。	龍泉窯系青磁細蓮弁文碗。15世紀～16世紀前半代。写真のみ掲載。
992	ⅤA	95－4面まで	—	瓦質土器	火消し壷	—	—	—	体部はほぼ直立。蓋の受部は短く直立。	内外面とも回転ナデ調整。	器面は平滑に仕上げる。色調　黒色。写真のみ掲載。
993	ⅦA	95－1面上層	灰色粗砂混じりシルト	瓦質土器	火鉢	—	—	—	平底。透かしの入った台形状の脚を貼り付ける。外面に籠状の細い凸帯を貼り付ける。	内外面とも回転ナデ調整。外面に印花で花文を連続して施文。	色調　暗灰色。木製の桶形容器を模倣。写真のみ掲載。
994	ⅦA	95－2面まで	—	華南産陶器	壷	—	—	—	施釉陶器の壷片	内外面とも回転ナデ調整。内外面とも灰釉施釉。暗茶褐色に発色。	中国華南産の灰釉(褐釉)陶器片か? 16世紀代。写真のみ掲載。
995	ⅤA	95－3面+1まで	—	青花磁器	碗	—	—	—	体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は僅かに外方にひらく。	外面　やや滲んだ呉須で崩れた草花文施文。内面　同様にやや滲んだ呉須で界線1・2条施文。	明代の粗製の青花磁器碗。16世紀代。写真のみ掲載。
996	ⅣD	95－2面上層 2K層上層	—	青花磁器	皿	—	—	—	断面三角形状の比較的低い高台をもつ。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	やや黒ずむ呉須で、内外面とも細かい草花文を施文。高台畳付の釉は丁寧に拭き取る。	明青花磁器皿。16世紀代。写真のみ掲載。
997	ⅦA	SD52008より南	3面下焼土混じり 灰黒色シルト	土師器	皿	—	—	—	体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。外面の体部～底部　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。	口縁部内面に煤附着。焼成　堅緻。色調　にぶい黄橙色。写真のみ掲載。
998	ⅩⅡ	SD68002内A より南	—	土師器	皿	9.7	1.9	—	器形はやや歪む。非ロクロ成形。平底。やや丸底気味。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。外面の体部～底部　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。写真のみ掲載。
999	ⅤC	95－5面まで	—	施釉陶器	埦	—	—	—	灰釉陶器埦の口縁部片。	内外面とも回転ナデ調整。内外面とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色。器面に粗い貫入。	外面に煤附着。瀬戸・美濃系丸椀片か?　写真のみ掲載。
1000	—	—	—	施釉陶器	埦	—	—	—	灰釉陶器埦の口縁部片。	内外面とも回転ナデ調整。内外面とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色。器面に粗い貫入。	瀬戸・美濃系丸椀片か?　写真のみ掲載。
1001	ⅦA	95－1面上層	汚れた黄灰色シルト	土師器	皿	—	(1.7)	—	土師器皿の体部～口縁部。口縁部の一部を捻って片口状に成形。	内外面ともヨコナデ調整。外面に指頭圧痕。	内面に墨痕。色調　灰黄色。
1002	ⅤB	95－1面上層	灰色粗砂まじりシルト	土師器	皿	(9.2)	(1.5)	—	土師器皿の体部。	内外面ともヨコナデ調整。	内面に墨書あり。色調　にぶい黄橙色。
1003	ⅣD	SD52002	—	土師器	皿	12.1	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。底部内面に円圏が残る。	底部外面に墨書。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅳ類。
1004	ⅣD	SD52002	—	土師器	皿	(13.9)	2.6	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め」上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	底部外面に墨書。焼成　良好。色調　灰黄色。Ab1Ⅴ類。京都系。
1005	ⅦA	SD52008下層	95－3面	土師器	小皿	8.4	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め」上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	底部外面に明瞭に墨書。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅱ類。京都系。
1006	ⅥD ⅥA	SD52009 SD52008	95－2面	白磁	皿	(14.6)	4.2	6.2	平底。底部の器壁は非常に厚い。高台は断面台形状で低い。底部と体部の界で大きく屈曲、体部は僅かに外反気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。器面に粗い貫入。高台裏は露胎。露胎部に「上」の文字を墨書。	華南産白磁。森田分類　白磁E群。
1007	Ⅷ	SD52008		土師器	皿	—	(1.3)	—	土師器皿の口縁部～体部	内外面ともヨコナデ調整。	内面に墨書あり。色調　にぶい黄橙色。
1008	Ⅷ	95－2面～整地土		土師器	皿	—	(0.6)	—	土師器皿の底部。	内面　1方向のナデ調整。	内面に墨書あり。色調　にぶい黄橙色。
1009	ⅦD	95－2面	黄色粗砂 (整地面直上)	土師器	?	長) (5.2)	巾) (6.2)	厚)0.4	土師器皿の底部。	内面　1方向のナデ調整。	内面に墨書。色調　黄灰色。
1010	ⅦA	95－2面+2	—	土師器	皿	(8.7)	1.5	—	型作り成形。平面形状は隅丸方形。平底。体部は短く斜め上方に延びる。	口縁部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。底部外面　指おさえ。指頭圧痕が残る。	底部内面に墨書。色調　灰色。瀬戸・美濃系陶器を模倣か?
1011	Ⅲ	SD53015	—	土師器	皿	(9.4)	(1.3)	—	土師器皿の体部～口縁部。	内外面ともヨコナデ調整。外面に指頭圧痕。	外面に墨痕。色調　浅黄橙色。
1012	ⅢA	95－3面	暗褐色シルト	土師器	皿	(12.5)	(2.6)	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部外面が凹線状に窪む。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	底部外面に墨書。焼成　良好。色調　暗灰黄色。Aa1Ⅳ類。
1013	ⅣC	95－3S+1まで	—	土師器	皿	(13.7)	2.0	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	底部外面に墨書。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。Ab1Ⅴ類。
1014	ⅣD	95－3S	濁灰色粗砂まじり細砂	土師器	皿	(16.4)	(2.3)	—	非ロクロ成形。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。	体部内面に墨書?　焼成　良好。色調　浅黄色。
1015	ⅦA	SD54004	—	土師器	皿	(14.1)	2.1	—	非ロクロ成形。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　2方向のナデ調整。	内面全体に黒斑。底部外面に墨痕あり。色調　にぶい黄色。Ab1Ⅴ類。
1016	ⅦA	95－4面まで		土師器	皿	(13.6)	2.1	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	底部外面に墨書。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Ab1Ⅴ類。
1017	ⅣB	95－4面(4a)	暗茶シルト	土師器	皿	—	(2.0)	—	土師器皿の体部。	内外面ともヨコナデ調整。	内面に墨書あり。色調　にぶい黄橙色。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
1018	ⅣB	95－4面(4a)	暗茶シルト	土師器	皿	—	(2.0)	—	土師器皿の体部。	内外面ともヨコナデ調整。	内面に墨書あり。色調　にぶい黄橙色。
1019	ⅨD	95－4面上?	粗砂層まで	土師器	皿	(16.7)	(2.0)	—	土師器皿の体部～口縁部。	内外面ともヨコナデ調整。	内面に墨書。色調　にぶい橙色。Ab1Ⅵ類。
1020	ⅦA	SD55001	—	土師器	皿	(14.4)	(1.9)	—	非ロクロ成形。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。	体部外面に墨書。焼成　良好。色調　灰黄色。
1021	ⅦA	95－5面	—	土師器	小皿	8.4	2.1	—	非ロクロ成形。器壁は比較的厚い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　ナデ調整。	底部外面に星形の墨書。(祭祀用か?)。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。Aa1Ⅱ類。
1022	ⅦA	95－5面まで	—	土師器	皿	(14.4)	2.6	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。底部と体部の界は明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部外面が凹線状に窪む。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	底部外面に墨書。焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。Aa1Ⅱ類。
1023	Ⅰ	95－5面まで 95－5Sまで	—	白磁	碗	—	(1.6)	4.5	底部の器壁は非常に厚い。高台は幅が広く、低い。体部は緩やかに斜め上方に延びる。	内外面とも透明釉施釉。黄灰色に発色。外面の高台脇以下露胎。	高台裏に「三」?墨書あり。華南産白磁。
1024	ⅣC	95－5面まで	—	土師器	皿	(14.9)	(1.9)	—	非ロクロ成形。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。	口縁部内面に墨書。焼成　良好。色調　にぶい橙色。京都系。
1025	ⅣC	95－5面	—	土師器	皿	(12.4)	2.0	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。	体部内面に墨書（絵画か?)。焼成　良好。色調　灰黄色。京都系。Aa1Ⅱ類。
1026	ⅩⅡ	SD62001	—	土師器	皿	12.3	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書複数名。焼成　良好。色調　浅黄橙色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1027	ⅩⅡ	SD66001	—	土師器	皿	12.2	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書。焼成良好。色調　灰黄色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1028	ⅩⅣ	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	8.5	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書。「ほうせい」。焼成良好。色調　浅黄橙色。京都系。Ab1Ⅱ類。
1029	ⅩⅣ	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	8.7	2.0	—	器形は若干歪む。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書。「ほうせい」。焼成良好。色調　浅黄橙色。京都系。Ab1Ⅱ類。
1030	ⅩⅣ	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	8.4	2.1	—	平底。体部は中位で若干屈曲して、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書。「ほうせい」。焼成普通。色調　浅黄橙色。京都系。Ab1Ⅱ類。
1031	ⅩⅣ	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	(8.9)	(2.0)	—	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。外面の体部下半　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書。「ほうせい」。焼成普通。色調　浅黄色。京都系。Aa2Ⅱ類。
1032	ⅩⅣ	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	12.2	2.3	—	丸底。体部と底部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書。「ほうせい」。焼成良好。色調　浅黄色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1033	ⅩⅣ	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	12.2	2.3	—	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書。「ほうせい」。焼成良好。色調　灰白色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1034	ⅩⅣ	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	12.0	2.4	—	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書。「ほうせい」。焼成普通。色調　にぶい橙色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1035	ⅩⅣ	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	8.7	2.2	—	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「そうけん」。焼成普通。色調　灰黄色。京都系。Aa1Ⅱ類。
1036	ⅩⅣ	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	8.6	2.4	—	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「そうけん」。焼成普通。色調　にぶい黄橙色。京都系。Aa1Ⅱ類。
1037	ⅩⅣ	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	8.5	2.3	—	平底。体部と底部の界はやや不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「そうけん」。焼成普通。色調　にぶい灰黄色。Aa1Ⅱ類。
1038	ⅩⅣ	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	12.2	2.6	—	丸底。器壁は全体に薄い。体部と底部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に緩め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「そうけん」。焼成普通。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅳ類。
1039	ⅩⅣ	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	12.1	2.5	—	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「そうけん」。焼成普通。色調　にぶい黄橙色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1040	ⅩⅣ	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	12.7	2.5	—	平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「そうけん」。焼成普通。色調　浅黄色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1041	ⅩⅣ	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	8.6	2.1	—	器壁は全体に比較的厚い。平底。体部は直線的に緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「ちよけい」。焼成普通。色調　浅黄橙色。京都系。Aa1Ⅱ類。
1042	ⅩⅣ	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	8.8	2.0	—	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「ちよけい」。焼成良好。色調　浅黄橙色。京都系。Aa1Ⅱ類。
1043	ⅩⅣ	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	8.8	2.2	—	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「ちよけい」。焼成良好。色調　浅黄橙色。京都系。Aa1Ⅱ類。
1044	ⅩⅣ	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	12.3	2.4	—	平底。体部と底部の界はやや不明瞭。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「ちよけい」。焼成良好。色調　浅黄橙色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1045	ⅩⅣ	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	13.0	2.3	—	器壁は全体に薄い。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「ちよけい」。焼成普通。色調　灰黄色。京都系。Aa1Ⅳ類。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
1046	XIV	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	12.1	2.4	—	丸底。体部と底部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「ちよ□□」。焼成良好。色調　灰黄色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1047	XIV	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	9.4	2.5	—	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「めうけん」。焼成良好。色調　浅黄橙色。京都系。Aa2Ⅲ類。
1048	XIV	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	10.1	2.3	—	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「めうけん」。焼成普通。色調　浅黄色。京都系。Aa1Ⅲ類。
1049	XIV	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	12.6	2.6	—	平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「めうけん」。焼成良好。色調　灰黄色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1050	XIV	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	12.3	2.6	—	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「めうけん」。焼成良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1051	XIV	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	10.0	2.3	—	器壁は薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「めうかう」。焼成良好。色調　浅黄色。京都系。Aa1Ⅲ類。
1052	XIV	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	10.0	2.4	—	平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「めうかう」。焼成良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。Aa1Ⅲ類。
1053	XIV	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	(13.3)	2.2	—	平底。器壁は全体に薄い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「めうかう」。焼成普通。色調　にぶい黄橙色。
1054	XIV	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	10.1	2.2	—	平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「たうゆう」。焼成普通。色調　にぶい黄橙色。京都系。Ab2Ⅲ類。
1055	XIV	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	9.9	1.2	—	平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「たうゆう」。焼成良好。色調　浅黄橙色。京都系。Aa2Ⅲ類。
1056	XIV	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	10.2	2.2	—	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「ちゆけい」。焼成良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。Ab2Ⅲ類。
1057	XIV	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	13.0	2.5	—	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「ちゆけい」。焼成良好。色調　浅黄橙色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1058	XIV	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	10.2	2.3	—	平底。やや上げ底気味。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「めうきん」。焼成良好。色調　浅黄色。京都系。Ab2Ⅲ類。
1059	XIV	SD67001最下層	墨書土器F群	土師器	皿	12.2	2.4	—	器形は全体にやや歪む。平底。体部と底部の界はやや不明瞭。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「めうきん」。焼成普通。色調　にぶい黄橙色。京都系。Aa2Ⅳ類。
1060	XIV	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	12.2	2.6	—	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「めうしゆん」。焼成良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅳ類。
1061	XIV	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	12.2	2.5	—	器壁は全体に薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「めうしゆん」。焼成良好。色調　灰黄色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1062	XIV	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	12.3	2.5	—	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「めうせん」。焼成良好。色調　灰黄色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1063	XIV	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	12.7	2.5	—	平底　体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「めうせん」。焼成普通。色調　浅黄色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1064	XIV	SD67001最下層	墨書土器F群	土師器	皿	12.3	2.4	—	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は僅かに外方にひらく。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「しゆけい」。焼成良好。色調　浅黄橙色。京都系。Ab1Ⅳ類。
1065	XIV	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	12.3	2.4	—	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「めうゑん」。焼成普通。色調　灰黄色。京都系。Ab2Ⅳ類。
1066	XIV	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	10.2	2.4	—	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「おこのへ」。焼成普通。色調　灰黄色。京都系。Aa1Ⅲ類。
1067	XIV	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	12.3	2.7	—	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「むゑん」。焼成良好。色調　灰黄色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1068	XIV	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	9.0	2.0	—	平底。やや上げ底気味。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「□せい」。焼成普通。色調　灰黄色。京都系。Ab1Ⅱ類。
1069	XIV	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	10.0	2.2	—	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「□□い」。焼成良好。色調　浅黄橙色。京都系。Aa2Ⅲ類。
1070	XIV	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	12.7	2.1	—	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「そう□□」。焼成良好。色調　浅黄橙色。京都系。Ab1Ⅳ類。
1071	XIV	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	12.6	2.3	—	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「ほ□かい」。焼成良好。色調　浅黄橙色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1072	XIV	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	12.4	2.4	—	丸底。底部と体部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「ち」。焼成良好。色調　浅黄橙色。京都系。Aa2Ⅳ類。
1073	XIV	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	12.8	2.3	—	平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「□う□」。焼成普通。色調　灰黄色。Aa1Ⅳ類。
1074	XIV	SD67001	墨書土器F群	土師器	皿	14.6	2.3	—	平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「ほん上はううつか」。焼成普通。色調　浅黄色。Aa1Ⅴ類。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
1075	XⅣ	SD67001	墨書土器F群	土師器	Ⅲ	12.3	2.2	—	平底。体部と底部の界はやや不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「ミツ□□　めうせん　めうゑん」。焼成普通。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅳ類。
1076	XⅣ	SD67001	墨書土器F群	土師器	Ⅲ	13.9	2.8	—	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「ゑむら　こせう　たうけ□　めうゑ□」。焼成普通。色調　浅黄色。京都系。Aa1Ⅴ類。
1077	XⅣ	SD67001	墨書土器F群	土師器	Ⅲ	14.1	2.7	—	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「とう二ら　又らく　こうはい　とうひやうへ」。焼成良好。色調　浅黄橙色。京都系。Aa1Ⅴ類。
1078	XⅣ	SD67001	墨書土器F群	土師器	Ⅲ	(12.2)	2.4	—	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「めう□　おもち　こせう」。焼成普通。色調　灰黄色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1079	XⅣ	SD67001	墨書土器F群	土師器	Ⅲ	11.6	2.4	—	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「ほん上はう　うつか　とうひやうへ　そうけい　とうちよ　ゑむら」。焼成良好。色調　浅黄橙色。京都系。Aa2Ⅳ類。
1080	XⅣ	SD67001	墨書土器F群	土師器	Ⅲ	12.2	2.3	—	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は僅かに外方にひらく。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「めうゑん　又六　とう二ら　たうゆう　めうきん　こうは□」。焼成良好。色調　浅黄橙色。京都系。Ab1Ⅳ類。
1081	XⅣ	SD67001	墨書土器F群	土師器	Ⅲ	12.5	2.8	—	器形は若干歪む。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は僅かに外方にひらく。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「お□のへ　おちこ　おと五れう　ほうしゆ　めう□い　おにう　おかめ」。焼成普通。色調　にぶい橙色。京都系。Ab1Ⅳ類。
1082	XⅣ	SD68001	—	土師器	Ⅲ	8.7	2.1	—	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「そうけん」。焼成普通。色調　浅黄橙色。京都系。Aa1Ⅱ類。
1083	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	12.6	2.1	—	平底。底部と体部の界はやや不明瞭。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「ほうせい」。焼成良好。色調　灰白色。京都系。Ab1Ⅳ類。
1084	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	12.7	3.0	—	丸底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「ほうせい」。焼成良好。色調　浅黄橙色。京都系。Ab1Ⅳ類。
1085	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	12.0	2.9	—	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	内面に墨書　「ほうせい」。焼成普通。色調　灰黄色。Aa1Ⅳ類。
1086	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	(13.0)	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	底部内面　墨書　「ほう」。焼成　良好。色調　浅黄色。Ab1Ⅳ類。
1087	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	12.7	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面に墨書　「そうけん」。焼成普通。色調　灰白色。京都系。Ab1Ⅳ類。
1088	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	12.6	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面に墨書　「そうけん」。焼成普通。色調　浅黄橙色。京都系。Ab1Ⅳ類。
1089	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	12.6	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界はやや不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面に墨書　「そうけん」。焼成普通。色調　灰白色。京都系。Ab1Ⅳ類。
1090	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	12.0	2.6	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面に墨書　「ちよけい」。焼成普通。色調　灰白色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1091	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	12.8	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面に墨書　「ちよけい」。焼成普通。色調　灰白色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1092	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	12.5	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面に墨書　「ちよけい」。焼成良好。色調　灰白色。京都系。Ab1Ⅳ類。
1093	XⅥ－XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	11.7	2.9	—	非ロクロ成形。丸底。底部と体部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面に墨書　「めうかう」。焼成良好。色調　浅黄橙色。Aa2Ⅳ類。
1094	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	12.2	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面に墨書　「めうかう」。焼成良好。色調　浅黄橙色。京都系。Aa2Ⅳ類。
1095	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	12.4	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面に墨書　「めうけん」。焼成良好。色調　浅黄橙色。京都系。Ab1Ⅳ類。
1096	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	－	(2.3)	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。	体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面に墨書　「□うけん」。焼成良好。色調　浅黄色。
1097	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	12.7	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界はやや不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面に墨書　「ちゆけい」。焼成良好。色調　灰白色。Aa1Ⅳ類。
1098	XⅥ－XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	13.0	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面に墨書　「めう□ん」。焼成良好。色調　灰白色。Aa1Ⅳ類。
1099	XⅧ－XX	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	13.0	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界はやや不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面に墨書　「よした殿　□□た殿」　焼成良好。色調　淡黄色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1100	XⅥ－XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	12.9	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面に墨書　「まこ七　とう二ら」。焼成良好。色調　灰白色。京都系。Ab1Ⅳ類。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
1101	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	12.5	2.6	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面に墨書「へや　めうきん　たうゆう　めうきん　たうゆう」焼成良好。色調　灰黄色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1102	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	(12.5)	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面に墨書「めうせん　めうせん　めうゑ□　□かミ□　お□」。焼成良好。色調　灰白色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1103	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	12.3	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面に墨書「こうは□　うミのかし　やくこれう　お□へ　□□は□」。焼成良好。色調　浅黄橙色。
1104	XⅧ XⅧ XⅥ－XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	12.5	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面に墨書「た　ま　たうゆふ　めうきん　めうきん　七ほうはは」。焼成良好。色調　淡黄色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1105	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	12.4	2.5	—	非ロクロ成形。やや丸底気味。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面に墨書「うつか　ほん上はう　こうはい　たうけい　廿八日ちい」。焼成良好。色調　灰白色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1106	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	12.7	2.3	—	非ロクロ成形。やや丸底気味。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面に墨書「おちこ　めうさい　ほうちゆ　こせう　おもち　こにう　おかめ」。焼成普通。色調　にぶい黄橙色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1107	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	(12.1)	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	底部内面　墨書「ほ　めう□」。焼成　良好。色調　灰黄色。Ab2Ⅳ類。
1108	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	(13.2)	(2.0)	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	底部内面　墨書複数有。焼成　良好。色調　明黄褐色。
1109	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	12.7	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	底部外面に煤附着。底部内面墨書「□むゑんほうかい」。焼成普通。色調　灰黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。
1110	XⅧ－XX	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	12.4	2.7	—	非ロクロ成形。やや丸底気味。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	内面に墨書「六しんけんそく」。焼成良好。色調　浅黄橙色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1111	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	8.5	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界はやや不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	底部内面　墨書。「□月五日」。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅱ類。
1112	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	13.4	2.5	—	非ロクロ成形。平底。器壁は全体に薄い。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	底部内面　墨書。「□□く　□□のおの　ひ□□」　焼成　良好。色調　浅黄橙色。Aa1Ⅳ類。
1113	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	(12.6)	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	底部内面　墨書。焼成　良好。色調　黄灰色。Aa1Ⅳ類。
1114	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	(13.0)	(1.5)	—	非ロクロ成形。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面ヨコナデ調整。	底部内面に僅かに墨痕。焼成　良好。色調　浅黄橙色。
1115	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	(11.9)	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部～底部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	底部内面に墨痕。焼成　良好。色調　灰黄色。
1116	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	(11.4)	(2.2)	—	非ロクロ成形。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。	底部内面に墨書。焼成　良好。色調　灰黄色。
1117	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	(12.0)	1.5	—	非ロクロ成形。平底。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	底部内面に墨書「め」。焼成　良好。色調　浅黄色。
1118	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	(13.2)	1.8	—	非ロクロ成形。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。	底部内面　墨書。焼成　良好。色調　灰黄色。
1119	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	(12.0)	(1.6)	—	非ロクロ成形。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部外面　ヨコナデ調整。	底部内面　墨書。焼成　良好。色調　灰黄色。
1120	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	Ⅲ	(11.8)	(2.0)	—	非ロクロ成形。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部外面　ヨコナデ調整。	底部内面　墨書。焼成　良好。色調　浅黄色。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
1121	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	皿	長(3.8)	巾(3.8)	—	皿の底部片。	内面　ヨコナデ調整。外面　不調整。	底部内面　墨書。焼成　良好。色調　浅黄色。
1122	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	皿	長(2.6)	巾(2.3)		皿の底部片。	内面　1方向のナデ調整。外面　不調整。	内面　墨書。色調　にぶい黄橙色。
1123	XⅥ	SD74001	墨書土器A群	土師器	皿	長(1.8)	巾(3.8)	—	皿の底部片。	内面　1方向のナデ調整。外面　不調整。	内面　墨書。焼成　良好。色調　灰黄色。
1124	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	皿	長(1.6)	巾(2.7)	—	皿の底部片。	内面　1方向のナデ調整。外面　不調整。	内面　墨書。焼成　良好。色調　淡黄色。
1125	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	皿	長(1.7)	巾(3.1)	—	皿の底部片。	内面　1方向のナデ調整。外面　不調整。	内面　墨書。焼成　良好。色調　黄橙色。
1126	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	皿	長(4.0)	巾(4.6)	厚(3.5)	土師器皿底部。器壁は比較的薄い。	内面　1方向のナデ調整。外面　不調整。	内面　墨書　「□うせ」。焼成　良好。色調　黄灰色。
1127	XⅧ	SD74001	墨書土器A群	土師器	皿	(11.9)	(1.8)	—	非ロクロ成形。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖りぎみ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　指おさえの後、ヨコナデ調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書。焼成　良好。色調　灰黄色。
1128	XⅧ	SD72001	墨書土器B群	土師器	皿	12.8	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。体部外面下半～底部外面　不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書。「こせう　本上はう」。焼成　良好。色調　浅黄橙色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1129	XⅧ	SD74001	墨書土器B群	土師器	皿	8.3	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。体部外面下半～底部外面　不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書。「又六」。焼成　普通。色調　明褐灰色。Aa1Ⅱ類。
1130	XⅧ	SD74001	墨書土器B群	土師器	皿	8.7	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。体部外面下半～底部外面　不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書。「おこう」。焼成　良好。色調　にぶい橙色。Aa1Ⅳ類。
1131	XⅧ	SD74001	墨書土器B群	土師器	皿	(8.0)	(1.4)	—	非ロクロ成形。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。	体部内面　墨書。焼成　良好。色調　灰黄色。
1132	XⅧ	SD74001	墨書土器B群	土師器	皿	(9.0)	(1.7)	—	非ロクロ成形。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。	体部内面　墨書。焼成　良好。色調　灰黄色。
1133	XⅧ	SD74001	墨書土器B群	土師器	皿	(13.0)	(2.3)	—	非ロクロ成形。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に沈線1条。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。底部内面　ヨコナデ調整。	底部内面　墨書。焼成　良好。色調　浅黄色。
1134	XⅧ	SD74001	墨書土器B群	土師器	皿	(13.0)	(1.8)	—	非ロクロ成形。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。	底部内面　墨書複数有。焼成　良好。色調　灰白～淡黄色。
1135	XⅧ	SD74001	墨書土器B群	土師器	皿	(11.0)	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに、僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部外面に凹部をもつ。体部～底部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。	底部内面　墨書　「ちやうて」。焼成　良好。色調　淡黄色。
1136	XⅧ	SD74001	墨書土器B群	土師器	皿	長(5.5)	巾(3.2)	—	非ロクロ成形。器壁は比較的薄い。	内面　1方向のナデ調整。外面　板状工具痕。	底部内面　墨書。焼成　良好。色調　浅黄色。
1137	XⅧ	SD74001	墨書土器B群	土師器	皿	(12.9)	(1.7)	—	非ロクロ成形。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹部をもつ。体部内面　ヨコナデ調整。体部外面　不調整。指頭圧痕が残る。	体部内面　墨書。焼成　良好。色調　灰黄色。
1138	XⅧ	SD74001	墨書土器B群	土師器	皿	(10.0)	(1.0)	—	皿の口縁部片。口縁端部は尖り気味。	内外面とも強いヨコナデ調整。	内面　墨書。焼成　良好。色調　灰黄色。
1139	XⅧ	SD74001	墨書土器B群	土師器	皿	(10.8)	(1.9)	—	非ロクロ成形。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。体部外面不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書。焼成　良好。色調　灰黄色。
1140	XⅧ	SD74001	墨書土器B群	土師器	皿	(11.9)	(1.1)	—	非ロクロ成形。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。体部外面不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書。焼成　良好。色調　灰黄色。
1141	XⅧ	SD74001	墨書土器B群	土師器	皿	長(4.5)	巾(3.4)	—	皿の底部片。	内面　ヨコナデ調整。外面　不調整。	内面　墨書。焼成　良好。色調　灰色。
1142	XⅧ	SD74001	墨書土器B群	土師器	皿	長(2.5)	巾(2.8)	—	皿の底部片。	内面　ヨコナデ調整。外面　不調整。	内面　墨書。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。
1143	XⅧ	SD74001	墨書土器B群	土師器	皿	長(5.1)	巾(1.8)	—	皿の底部片。	内面　ヨコナデ調整。外面　不調整。	内面　墨書。焼成　良好。色調　灰黄色。
1144	XⅧ	SD74001	墨書土器B群	土師器	皿	長(2.3)	巾(3.3)	—	皿の底部片。	内面　1方向のナデ調整。外面　不調整。	内面　墨書。焼成　良好。色調　灰白色。
1145	XⅧ	SD74001	墨書土器B群	土師器	皿	長(2.0)	巾(2.4)	—	皿の底部片。	内面　1方向のナデ調整。外面　不調整。	内面　墨書。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。
1146	XⅧ	SD74001	墨書土器B群	土師器	皿	長(2.1)	巾(1.9)	—	皿の底部片。	内面　1方向のナデ調整。外面　不調整。	内面　墨書。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。
1147	XⅧ	SD74001	墨書土器C群	土師器	皿	12.4	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	底部内面　墨書　「ほうせい」。焼成　良好。色調　浅黄橙色。Aa1Ⅳ類。
1148	XⅧ	SD74001	墨書土器C群	土師器	皿	12.8	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面　1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　不調整。指頭圧痕が残る。	底部内面　墨書　「道ゑい」。焼成　良好。色調　浅黄橙色。京都系。Aa1Ⅳ類。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
1149	XⅧ	SD74001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.1	2.3	—	非ロクロ成形。平底。やや上げ底気味。底部と体部の界はやや不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　　不調整。指頭圧痕が残る。	底部内面　墨書「めうしゆん」。焼成　普通。色調　にぶい黄橙色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1150	XⅧ	SD74001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	8.4	2.0	—	非ロクロ成形。器壁は全体に比較的厚い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部　　不調整。指頭圧痕が残る。	底部内面　墨書「やく」。焼成　普通。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅱ類。
1151	XⅧ	SD74001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	(9.9)	(1.7)	—	非ロクロ成形。体部は直線的に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。体部外面不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書。焼成　良好。色調　灰黄色。
1152	XⅧ	SD74001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	(13.8)	(1.5)	—	非ロクロ成形。体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。体部外面不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書。焼成　良好。色調　浅黄色。
1153	XⅧ	SD74001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	(11.8)	(1.7)	—	非ロクロ成形。体部は直線的に緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁部内面に凹線1条。体部外面に指頭圧痕が残る。	体部内面に墨痕。焼成　良好。色調　浅黄色。
1154	XⅧ	SD74001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	長(4.2)	巾(3.3)	—	土師器皿の底部。	内面　ヨコナデ調整。外面　不調整。	内面　墨書。色調　にぶい黄橙色。
1155	XⅧ	SD74001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	—	(0.8)	—	土師器皿底部。	内面　1方向のナデ調整。外面　不調整。	底部内面に墨書。焼成　良好。色調　灰黄色。
1156	XⅧ	SD74001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	長(2.4)	巾(3.4)	—	土師器皿の底部。	内面　1方向のナデ調整。外面　不調整。	内面　墨書。焼成　良好。色調　灰黄色。
1157	XⅧ	SD74001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	長(1.8)	巾(2.1)	—	土師器皿の破片。	内面　1方向のナデ調整。外面　不調整。	内面　墨書。焼成　良好。色調　灰黄色。
1158	XⅧ	SD74001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	長(2.0)	巾(3.6)	—	土師器皿の破片。	内面　1方向のナデ調整。外面　不調整。	内面　墨書。色調　灰黄褐色。
1159	XⅥ	SD74001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	(11.8)	(1.6)	—	非ロクロ成形。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。	体部内面に墨痕。焼成　良好。色調　灰白色。
1160	XⅧ	SD75001	墨書土器B群	土師器	Ⅲ	12.8	2.7	—	非ロクロ成形。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書。「めうけん」。焼成　良好。色調　灰白色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1161	XⅧ－XX	SD75001	墨書土器B群	土師器	Ⅲ	12.5	2.4	—	非ロクロ成形。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書。「めうけん」。焼成　良好。色調　浅黄橙色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1162	XⅧ	SD75001	墨書土器B群	土師器	Ⅲ	12.4	2.3	—	非ロクロ成形。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに、直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書。「めうち」。焼成　普通。色調　にぶい黄橙色。京都系。Ab1Ⅳ類。
1163	XⅧ	SD75001	墨書土器B群	土師器	Ⅲ	(11.9)	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書。「□うゆう」。焼成　良好。色調　浅黄橙色。京都系。Ab1Ⅳ類。
1164	XⅧ	SD75001	墨書土器B群	土師器	Ⅲ	12.1	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書。「ほうせい」。焼成　良好。色調　灰白色。京都系。Ab2Ⅳ類。
1165	XⅧ	SD75001	墨書土器B群	土師器	Ⅲ	12.4	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界はやや不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書。「めうさい」。焼成　普通。色調　灰黄色。京都系。Ab2Ⅳ類。
1166	XⅧ	SD75001	墨書土器B群	土師器	Ⅲ	13.0	2.8	—	非ロクロ成形。平底。やや丸底気味。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書。「めうこう」。焼成　良好。色調　浅黄橙色。Aa2Ⅳ類。
1167	XⅧ	SD75001	墨書土器B群	土師器	Ⅲ	8.8	2.3	—	非ロクロ成形。器壁は全体に比較的厚い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書。「うつか殿」。焼成　普通。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅱ類。
1168	XⅧ	SD75001	墨書土器B群	土師器	Ⅲ	12.9	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書　「しゆけい」。焼成　良好。色調　浅黄橙色。Ab1Ⅳ類。
1169	XⅧ	SD75001	墨書土器B群	土師器	Ⅲ	12.8	2.3	—	非ロクロ成形。平底。やや丸底気味。体部と底部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書　「そうせん」。焼成　普通。色調　浅黄色。Aa1Ⅳ類。
1170	XⅧ	SD75001	墨書土器B群	土師器	Ⅲ	(13.1)	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界はやや不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書　「そうけい」。焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅳ類。
1171	XⅧ	SD75001	墨書土器B群	土師器	Ⅲ	12.3	2.5	—	非ロクロ成形。平底。やや丸底気味。体部と底部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書　「けたのわか　しやうらう」。焼成良好。色調　浅黄橙色。Aa1Ⅳ類。
1172	XⅧ	SD75001	墨書土器B群	土師器	Ⅲ	(8.4)	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書　「□は　ち□」。焼成　良好。色調　灰色。Aa1Ⅱ類。
1173	XⅧ	SD75001	墨書土器B群	土師器	Ⅲ	(12.7)	2.8	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書　「おちこ　めうちん　おこう　□□□　□□と□」。焼成　良好。色調　浅黄橙色。Aa1Ⅳ類。
1174	XⅧ	SD75001	墨書土器B群	土師器	Ⅲ	12.4	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界はやや不明瞭。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書　「四月廿□　五□　ほ□」。焼成良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅳ類。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
1175	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.6	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「せんち」。焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅳ類。
1176	XⅧ－XX	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	11.9	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「せんち」。焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅳ類。
1177	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	(12.3)	2.3	—	非ロクロ成形。平底。やや丸底気味。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書。「せ□□」。焼成　良好。色調　浅黄橙色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1178	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	(12.2)	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「□□けい」。焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅳ類。
1179	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.7	2.6	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「そうけい」。焼成　良好。色調　浅黄色。Ab1Ⅳ類。
1180	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.3	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「そうかう」。焼成　良好。色調　浅黄橙色。京都系。Ab1Ⅳ類。
1181	XⅧ－XX	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.4	2.1	—	非ロクロ成形。平底。底部と体部の界はやや不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	底部内面　墨書「そうかう」。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Ab1Ⅳ類。
1182	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	11.6	2.4	—	非ロクロ成形。平底。底部と体部の界はやや不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	底部内面　墨書「たうゆう」。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Ab1Ⅳ類。
1183	XⅧ－XX	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.1	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	底部内面　墨書「たうゆう」。焼成　良好。色調　灰白色。Ab1Ⅳ類。
1184	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.0	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	底部内面　墨書「そうせん」。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Ab1Ⅳ類。
1185	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.0	2.5	—	非ロクロ成形。器壁は全体に比較的薄い。平底。やや丸底気味。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	底部内面　墨書「□□せん」。焼成　良好。色調　灰白色。
1186	XⅧ－XX	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.3	2.1	—	非ロクロ成形。器壁は全体に比較的薄い。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「□うかう」。焼成　良好。色調　灰白色。京都系。Ab1Ⅳ類。
1187	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.1	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「めうかう」。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅳ類。
1188	XⅧ－XX	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.2	2.1	—	非ロクロ成形。平底。器壁は全体に比較的薄い。体部と底部の界はやや不明瞭。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「ほうせい」。焼成　良好。色調　浅黄橙色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1189	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.1	2.4	—	非ロクロ成形。平底。器壁は全体に比較的薄い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「ほうせい」。焼成　良好。色調　灰黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。
1190	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.4	2.7	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「めうゑん」。焼成　良好。色調　浅黄橙色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1191	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	(12.4)	2.4	—	非ロクロ成形。平底。器壁は全体に比較的薄い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「めうゑん」。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅳ類。
1192	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.0	2.4	—	非ロクロ成形。平底。やや丸底気味。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「め□ち」。焼成　良好。色調　灰白色。Aa1Ⅳ類。
1193	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.3	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「めうち」。焼成　良好。色調　灰白色。Aa1Ⅳ類。
1194	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.6	2.6	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「□ゆけい」。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅳ類。
1195	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.2	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「ほうゐ□」。焼成　良好。色調　浅黄橙色。京都系。Aa1Ⅳ類。
1196	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.2	2.2	—	非ロクロ成形。平底。器壁は全体に比較的薄い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「めうきん」。焼成　良好。色調　灰黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。
1197	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	11.9	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界はやや不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「□う□ん」。焼成　良好。色調　灰黄色。Ab1Ⅳ類。
1198	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.1	2.2	—	非ロクロ成形。平底。器壁は全体に薄い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「めうけん」。焼成　良好。色調　灰黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。
1199	XⅧ－XX	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	11.8	2.2	—	非ロクロ成形。平底。やや丸底気味。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「めうこ」。焼成　良好。色調　灰白色。Aa1Ⅳ類。
1200	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	8.6	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界はやや不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「めうちん」。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅱ類。
1201	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	8.2	1.9	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「たうゑ」。焼成　良好。色調　浅黄橙色。京都系。Aa1Ⅱ類。
1202	XⅧ－XX	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.0	2.6	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「めうさい」。焼成　良好。色調　浅黄橙色。Aa1Ⅳ類。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
1203	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.1	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「め□□」。焼成　良好。色調　浅黄橙色。
1204	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	14.2	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「月けいせいうん」。焼成　良好。色調　淡黄色。京都系。Ab1Ⅴ類。
1205	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.4	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「八備」。焼成　良好。色調　灰白色。Ab1Ⅳ類。
1206	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.5	2.5	—	非ロクロ成形。平底。器壁は全体に薄い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「みやしまの　かミ」。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。Ab1Ⅳ類。
1207	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.2	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「おくり」。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅳ類。
1208	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.2	2.1	—	非ロクロ成形。平底。器壁は全体に薄い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「よね　おくり」。焼成　良好。色調　灰黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。
1209	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.1	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「とくしゆ　しゆとく」。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。Ab1Ⅳ類。
1210	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	8.8	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書。「おちこ」。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa1Ⅱ類。
1211	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.1	2.2	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界はやや不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書。「おこう　おちこ」。焼成　良好。色調　灰白色。京都系。Ab1Ⅳ類。
1212	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	13.0	2.6	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界はやや不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書。「又らく　あちや」。焼成　良好。色調　浅黄橙色。京都系。Ab1Ⅳ類。
1213	XⅧ－XX	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.2	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書。「□たわか　しゃうらう」 焼成　良好。色調　浅黄橙色。京都系。Ab1Ⅳ類。
1214	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	14.4	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書。「めうゑん　たかぬのかミ　こせう」 焼成　良好。色調　浅黄橙色。京都系。Ab1Ⅳ類。
1215	XⅧ	SD75001		土師器	Ⅲ	(12.8)	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「おきく　とらきく　□しちよ　□こう　□ちこ」。焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。Ab1Ⅳ類。
1216	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.3	2.3	—	非ロクロ成形。平底。底部と体部の界はやや不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「く」。焼成　良好。色調　浅黄橙色。Ab1Ⅳ類。
1217	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	14.0	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「御ほん□□」。焼成　良好。色調　灰白色。京都系。Ab1Ⅴ類。
1218	XⅧ－XX	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.4	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「六しん」 焼成　良好。色調　灰白色。京都系。Aa2Ⅳ類。
1219	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	8.6	2.0	—	非ロクロ成形。平底。器壁は比較的厚い。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「六しんけんそく」 焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。Aa2Ⅱ類。
1220	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.2	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「□月廿日　五月五日」 焼成　良好。色調　灰白色。京都系。Aa2Ⅳ類。
1221	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	8.7	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「四月廿日」。 焼成　良好。色調　浅黄橙色。京都系。Aa1Ⅱ類。
1222	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	8.5	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「廿六日の　うい」。 焼成　良好。色調　浅黄橙色。京都系。Aa1Ⅱ類。
1223	XⅧ－XX	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	12.5	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「上□□ちやうて　ん　下□□のむゑ□ほうかい」。 焼成　良好。色調　淡黄色。京都系。Ab1Ⅳ類。
1224	XⅧ	SD75001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	8.5	2.1	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界はやや不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「むゑん　ほうかい」。焼成　良好。色調　灰黄色。Aa2Ⅱ類。
1225	XⅧ	SD76001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	8.8	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界はやや不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「やく」。焼成　良好。色調　浅黄橙色。Aa2Ⅱ類。
1226	XⅧ	SD76001	墨書土器C群	土師器	Ⅲ	(12.3)	2.0	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「六しん□　七せの□」。焼成　良好。色調　浅黄橙色。京都系。Ab2Ⅳ類。
1227	XⅧ－XX	SD75001	墨書土器E群	土師器	Ⅲ	13.8	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「ひせん殿」。焼成　良好。色調　淡黄色。京都系。Ab1Ⅴ類。
1228	XⅧ－XX	SD75001	墨書土器E群	土師器	Ⅲ	13.4	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界はやや不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「めうこせつちや　うに」。焼成　良好。色調　浅黄橙色。Aa1Ⅴ類。
1229	XⅧ－XX	SD75001	墨書土器E群	土師器	Ⅲ	14.0	2.3	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「月けいせうん」。焼成　良好。色調　浅黄橙色。Ab1Ⅴ類。
1230	XⅧ－XX	SD75001	墨書土器E群	土師器	Ⅲ	(12.2)	2.4	—	非ロクロ成形。平底。やや上げ底気味。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「ほうせい」。焼成　良好。色調　浅黄橙色。Ab1Ⅳ類。

番号	出土地区	出土遺構	層　位	種別	器種	法量(cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　考
						口径	器高	底径			
1231	XⅧ－XX	SD75001	墨書土器E群	土師器	皿	13.4	2.5	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「本しやうは　ねいほうし　きくてう」。焼成　良好。色調　浅黄色。Aa2Ⅴ類。
1232	XⅧ－XX	SD75001	墨書土器E群	土師器	皿	11.8	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面に部分的に煤附着。内面　墨書「けたのわか　しやうらう　にやにや」。焼成　良好。色調　浅黄色。Aa1Ⅳ類。
1233	XⅧ－XX	SD75001	墨書土器E群	土師器	皿	13.8	2.7	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「めうちん　めうきん　めうゑん　ミやちまのかミ　ほんしやうはう」。焼成　良好。色調　灰黄色。Aa1Ⅴ類。
1234	XⅧ－XX	SD75001	墨書土器E群	土師器	皿	13.4	2.4	—	非ロクロ成形。平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内面　ヨコナデ調整。底部内面1方向のナデ調整。外面の体部下半～底部。不調整。指頭圧痕が残る。	内面　墨書「よね　おくり　ほちこやく　とうきく　うしちく　たんはのかミ　と□いまこ七　こ　□　□さ□□□　こ三郎　はくほう　「十」」。焼成　良好。色調　灰黄色。Ab1Ⅴ類。

第33表　出土石製品・石造品観察表

報告番号	器種	法量（cm）				出土地区	出土遺構	材質
		全長	幅	厚み	重さ（g）			
S1	碁石	2.1	1.2	0.5	1.7	XIV	第1洪水砂含む	硬質砂岩
S2	碁石	1.8	1.5	0.3	1.5	XVIII	SP72112	硬質砂岩
S3	碁石	1.6	1.3	0.4	1.4	XIV	南側側溝東側	硬質砂岩
S4	碁石	1.6	1.4	0.5	1.5	VIC	集石内SD52009	硬質砂岩
S5	碁石	1.7	1.3	0.6	1.7	VIID	1面上層	硬質砂岩
S6	碁石	1.7	1.6	0.6	2.4	VIII	SD52008	硬質砂岩
S7	碁石	1.8	1.7	0.5	2.4	VIID	SD52008	硬質砂岩
S8	碁石	1.8	1.7	0.8	3.3		SD7001	硬質砂岩
S9	碁石	1.8	1.8	0.7	3.3	IVA	2面上層	硬質砂岩
S10	碁石	2.1	1.7	0.6	3.4	VIIB	3面	硬質砂岩
S11	碁石	2.3	1.8	0.5	2.8	VIII	SD52008	硬質砂岩
S12	碁石	2.2	2.0	0.5	2.5	VIIA	2面まで	硬質砂岩
S13	碁石	1.9	1.3	0.5	2.0	IVD	2面まで	硬質砂岩
S14	碁石	1.9	1.5	0.7	3.0	IVD	2面まで	硬質砂岩
S15	碁石	2.1	1.3	0.6	2.6	XII	SD2001埋土	硬質砂岩
S16	碁石	2.1	1.6	0.7	3.2	VIID	1面上層	硬質砂岩
S17	碁石	2.1	1.9	0.9	4.6	XIV	SD67001	硬質砂岩
S18	碁石	2.3	1.8	0.9	5.0	VC	5面まで	硬質砂岩
S19	碁石	2.3	1.8	0.6	3.5	VIA	1面上層	硬質砂岩
S20	碁石	2.1	2.2	0.7	5.7	XVI	SD74001	硬質砂岩
S21	碁石？	2.8	1.4	0.8	3.8	XVIII	SD74001	硬質砂岩
S22	碁石orおはじき	1.6	1.4	1.1	3.2	XVI－XVIII	SD75001	硬質砂岩
S23	硯	7.2	2.6	1.0	30.6	VIA	4面まで	泥岩
S24	硯	7.0	3.3	0.9	－	VIIB	2S面	細粒砂岩
S25	硯	(6.4)	(3.0)	1.3	－	III	SD54002	細粒砂岩
S26	硯	9.1	4.9	1.0	－	IVB	4面	細粒砂岩
S27	硯	2.7	4.0	0.9	13.6	VIID	SD52008	細粒砂岩
S28	硯	12.6	4.6	1.5	84.0	VIID	SD52008	粘板岩
S29	石臼	径19.0	高15.8	幅11	1400.0	VII	5面まで	細粒砂岩
S30	茶臼	上径40.0	高10.8	底径(29.4)	7230.0	VA	5面まで	
S31	砥石	5.2	2.2	1.2	21.4	IVA	2面上層	凝灰質砂岩
S32	砥石	6.7	2.7	0.8	32.4	IVA	SD52002	細粒砂岩
S33	砥石	7.3	3.1	1.2	54.5	II	1面より下	凝灰質砂岩
S34	砥石	6.9	3.3	1.9	78.0	VB	5面まで	珪質頁岩
S35	砥石	10.8	2.8	2.2	84.5	IVA	根太内	珪質細粒砂岩
S36	砥石	9.2	4.3	2.6	160.0	I	5面	砂岩
S37	砥石	5.4	3.8	1.6	45.4	I	5面まで	細粒砂岩
S38	砥石	4.9	3.6	1.1	29.6	VIIA	2面＋1面まで	珪質細粒砂岩
S39	砥石	4.9	4.2	2.8	90.5	IV	—	細粒砂岩
S40	砥石	16.3	4.1	3.6	458.0	VIIA	3面	凝質細粒砂岩
S41	砥石	7.4	4.4	1.6	58.0	VIIA	1面上層	細粒砂岩
S42	砥石	7.9	4.5	2.8	155.0	IVA	5面まで	砂岩
S43	砥石	10.9	5.9	0.9	98.5	III	—	珪質頁岩
S44	砥石	11.0	6.0	2.7	265.0	V	5面まで	凝灰質砂岩
S45	砥石	20.5	7.8	5.9	—	V	1面洪水砂	流紋岩質凝灰岩

報告番号	器種	法量（cm）				出土地区	出土遺構	材質
		全長	幅	厚み	重さ（g）			
S46	砥石	3.3	2.3	1.4	12.6	ⅥA	SD52007	流紋岩質凝灰岩
S47	砥石	5.4	4.4	1.5	40.8	ⅣA	3面＋1	珪質細粒砂岩
S48	砥石	8.7	5.6	0.9	40.2	ⅦA	4面まで	珪質頁岩
S49	砥石	7.3	3.8	1.6	36.3	—	1面	粘土
S50	砥石	4.8	2.1	1.8	23.2	ⅦA	SD55001	砂岩
S51	砥石	3.4	1.8	5.3	40	XIV	5面上まで	砂岩
S52	砥石	8.4	5.3	3.8	255	XⅧ	SD75001	砂岩
S53	砥石	9.0	4.9	3.4	225	XIII	下層水田Ⅳまで	砂岩
S54	砥石	9.5	4.7	(3.3)	(225)	XⅧ	SD75001	砂岩
S55	砥石	11.6	5.6	3.8	385	ⅤC	5面まで	砂岩
S56	石斧	14.5	5.9	4.6	533	ⅤA	5面まで	細粒砂岩
S57	砥石	10.5	6.8	4.7	575	ⅣA	2面上層	砂岩
S58	砥石	7.1	6.9	1.6	118	ⅦD	SD52008	砂岩
S59	砥石	13.6	8.4	5.9	945	ⅦA	3～4面	砂岩
S60	砥石	16.8	7.6	5.7	1080	ⅦC	2～3面	流紋岩質凝灰岩
S61	砥石	8.0	6.9	5.9	295	ⅥC	SD54002	砂岩
S62	砥石	10.9	11.9	4.2	227	—	—	砂岩
S63	砥石	16.2	14	6.9	1800	ⅣA	4面	凝灰質細粒砂岩
S64	小型石斧	4.2	3.3	0.9	24.2	ⅣA	4面	
S65	不明品	5.2	4.6	1.6	50.5	ⅣC	SD52003	硬質砂岩
S66	石錘	8.5	4.7	1.7	82.5	XII	洪水砂層	
S67	打製石鏃	2.4	1.4	0.6	1.9	XIV	4面まで	石英
S68	剥片	4.5	5.1	0.9	8.9	—	表採	サヌカイト
S69	不明品	4.0	3.8	0.7	12.0	—	SD74001	硬質砂岩
S70	不明品	7.3	4.8	3.6	160.0	XI	水田層Ⅳまで	
S71	不明品	5.6	5.3	5.3	—	XII	1面まで	
S72	不明品	11.6	8.0	5.0	562.0	ⅥA・ⅥD	—	
S73	不明品	(3.6)	(8.7)	5.6	895.0	XⅧ	SD74001底	
S74	宝筐印塔	28.4	13.1	12.4	6,500.0	III	5面以下	石英粗面岩
S75	五輪塔水輪	上径9.6	高15.8	底径8.7	7,000.0	ⅥC	4面	砂岩
S76	墓石転用石臼	22.6	19.6	11.5	10,000.0	ⅥD	SD54002肩部	砂岩
S77	五輪塔地輪	22.5	24.5	21.5	—	ⅥB	5面	砂岩
S78	礎石	43.0	24.8	13.0	30,800.0	Ⅷ	—	玄武岩
S79	礎石	42.8	33.3	16.2	42,400.0	Ⅷ	2面	玄武岩

第34表　出土金属製品観察表

	品目	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	地　区	出土場所	面	層　位	備　考
M1	刀	32.5	2.5	0.4	ⅦC		95－2面		
M2	刀	33.8	1.8	0.3	Ⅴ区			第1整地層下層火事面	95年度調査
M3	刀	25.1	1.7	0.2	ⅦA		95－2面～3面		
M4	鏃	3.3	3.0	0.9	ⅣD	集石部	95－4面		
M5	切刃	4.2	2.3	0.1	Ⅶ－Ⅷ		95－4面上層	黒色腐蝕土層	
M6	鏃	6.6	0.6	0.4	Ⅻ	SD65001S	96－5面	シルト層上半層	
M7	鏃	11.6	1.0	0.3	Ⅺ	SD61002北	96－1面まで	水田層	
M8	鉄砲玉	1.3	1.3	1.3	Ⅻ	SD66001東側肩部	96－6面	褐色粗砂(洪水砂内)	
M9	鉄砲玉	1.5	1.5	1.5	Ⅻ－ⅩⅢ	サブトレ	96－1面上	江戸水田耕土下火事かたづけ面上	
M10	鉄砲玉	1.1	1.1	1.1	Ⅲ	流路①肩	95－1面	灰色粗砂中	
M11	小柄	23.4	1.2	0.2	Ⅻ	SD68001肩部	96－8面		
M12	小柄	20.2	1.3	0.6	Ⅳ－Ⅴ	南北サブトレンチ		整地層直上	95年度調査
M13	小柄	21.3	1.3	0.3	ⅩⅣ	SD67001	96－7面	最下層(墨書土器と同一層)	
M14	小柄	20.8	1.3	0.3	Ⅶ南東半		95－4面まで主に	3s下3＋1まで	
M15	小柄	20.5	1.2	0.2	ⅣA		95－4面	(4a中)	
M16	小柄	20.0	1.3	0.3	Ⅸ	SD54001　底	95－4面		
M17	小柄	16.3	1.2	0.2	ⅨB	SD54001	95－4面		
M18	小柄	19.3	1.5	0.3	ⅣA		95－5面上		
M19	小柄	14.8	1.2	0.3	ⅣC区南半		95－5面まで		
M20	小柄	12.5	1.1	0.3	ⅣB			(灰黒色シルト中)3＋1面まで	95年度調査
M21	小柄	12.3	1.4	0.3	ⅩⅧ	SD74001底	97－4面	最下層	土師皿集中部最下部
M22	小柄	13.5	1.4	0.3	ⅩⅢ	西側溝		茶灰シルト内(粗砂直上)(第4面直上)	96年度調査
M23	小柄の柄	9.8	1.4	0.5	ⅩⅢ			下層水田土上被覆黄色粗砂中	96年度調査
M24	小柄の柄	9.3	1.6	0.4	Ⅰ		95－5面まで(5Sまで)		
M25	小柄の柄	9.7	1.5	0.4	ⅣD		95－1面上	灰色粗砂混じり粒細砂	
M26	小柄の柄	4.2	1.3	0.4	ⅣB		95－1面	上層灰色粗砂混じりシルト	
M27	笄	11.9	1.1	0.2	ⅤC		95－5面まで		
M28	笄	21.1	1.3	0.3	ⅣA東半		95－5面まで		
M29	前立	7.0	2.6	0.1	ⅣA		95－2面	2K層	
M30	鍬形台	9.7	5.4	1.3	ⅦA		95－3面＋1まで	灰色レキ混じり極細砂	
M31	頭巻釘	16.5	0.9	0.4	ⅦC		95－4a	腐蝕土層中	
M32	頭巻釘	13.7	1.2	0.4	ⅦA		95－1面上層	灰色粗砂混じりシルト	
M33	頭巻釘	12.8	1.1	0.5	ⅣA		95－5面まで		
M34	頭巻釘	11.8	0.4	0.3	Ⅷ		95－2面まで		
M35	頭巻釘	11.9	0.5	0.6	ⅤA		95－5面まで	上層	
M36	頭巻釘	11.8	1.1	0.5	ⅣA		95－2面	2K層	
M37	頭巻釘	10.4	1.2	0.5	ⅣC		95－2面まで		
M38	頭巻釘	9.9	0.4	0.4	Ⅱ		95－2面まで	2k層又は溝埋土か？	
M39	頭巻釘	10.6	9.5	0.4	Ⅶ、Ⅷ区間	南北サブトレンチ	95－4面上層	黒色腐蝕土層	
M40	頭巻釘	9.5	1.1	0.3	ⅦA		95－1面上層	灰色粗砂混じりシルト	
M41	頭巻釘	8.8	1.4	0.5	ⅣD(西半)		95－2面まで		
M42	頭巻釘	9.2	1.0	0.4	Ⅷ		95－3面下層	黒色炭層	
M43	頭巻釘	9.1	1.1	0.5	Ⅻ	東半	96－2面上		
M44	頭巻釘	8.4	1.0	0.3	ⅦA		95－1面上層	灰色粗砂混じりシルト	
M45	頭巻釘	8.5	1.1	0.4	ⅣD		95－2面まで	2k中(東半)	
M46	頭巻釘	7.5	1.2	0.5	Ⅶ.Ⅷ	サブトレ①		2a以下？腐蝕土中40	95年度調査
M47	頭巻釘	7.4	0.9	0.4	ⅤB		95－5面まで		
M48	頭巻釘	7.4	1.2	0.4	Ⅵ		95－2面まで		
M49	頭巻釘	9.6	1.0	0.5	ⅩⅣ	SD62001　肩より東	96－整地面		
M50	頭巻釘	6.4	1.0	0.5	ⅩⅣ	SK67001	96－7面		
M51	頭巻釘	7.4	1.0	0.5	ⅣC		95－1面	汚れた黄灰色シルト	
M52	頭巻釘	7.3	0.8	0.5	ⅦD		95－2まで		遺構検出時
M53	頭巻釘	6.7	0.9	0.4	ⅦA		95－1面上層	灰色粗砂混じりシルト	
M54	頭巻釘	6.7	0.7	0.4	ⅦC		95－1整地面直上	濁灰色シルト及び整地面直上炭層	
M55	頭巻釘	6.7	0.8	0.3	ⅦA	SD55001南東部	95－5面まで		
M56	頭巻釘	6.0	0.4	0.3	ⅣA		95－1面上層	灰色粗砂混じりシルト	
M57	頭巻釘	5.9	1.0	0.4	ⅣD		95－2面上層	2k層上層	
M58	頭巻釘	5.2	0.9	0.3	ⅣB		95－4面	(4a)暗茶シルト	
M59	頭巻釘	5.3	0.8	0.4	ⅣC		95－5面	南側の落ち込み	
M60	頭巻釘	5.4	1.1	0.3	ⅩⅥ－ⅩⅧ	SD74001主	97－4面		
M61	頭巻釘	4.9	1.1	0.5	ⅦB		95－2面以下	第3面間の灰層まで	
M62	頭巻釘	5.3	0.7	0.3	ⅦD		95－2面まで	2k中	
M63	頭巻釘	4.9	1.0	0.4	Ⅵ	SD52009	95－2面		
M64	頭巻釘	4.9	0.6	0.3	ⅦD		95－2面まで	2k中	
M65	頭巻釘	4.9	0.8	0.4	ⅣA	SD52007	95－2面		
M66	頭巻釘	4.7	0.9	0.5	ⅣC,D区間		95－1面上層	灰色粗砂混じりシルト	
M67	頭巻釘	4.6	0.8	0.3	Ⅻ	SD69001　Bより南	96－6面		
M68	頭巻釘	4.4	0.6	0.3	Ⅲ		95－1面	上層シルト (灰色粗砂混じり)	
M69	頭巻釘	4.1	0.7	0.4	ⅩⅣ	南壁SD67001	96－7面		
M70	頭巻釘	3.9	1.1	0.5	Ⅶ	火葬墓状イコウ			95年度調査
M71	頭巻釘	3.7	0.8	0.6	Ⅶ	火葬墓状イコウ			95年度調査
M72	頭巻釘	3.7	0.5	0.3	ⅩⅧ		97－2面(整地面)上まで	1S、2a層中	
M73	頭巻釘	3.6	0.6	0.3	ⅣD			灰色粗砂混じり極細砂	95年度調査

	品目	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	地　区	出土場所	面	層　位	備　考
M74	頭巻釘	2.8	0.8	0.3	ⅦC		95－1面上層	汚れた黄灰色シルト	95年度調査
M75	巻頭釘	10.6	1.4	0.4	ⅦA		95－2面まで	面直上(炭層とS層の互層部)	
M76	巻頭釘	13.5	1.4	0.5	XⅧ北半	SD74001	97－4面	灰色粗砂中	土師器皿集中部
M77	巻頭釘	9.8	1.6	0.5	XVI	SD75001	97－5面		
M78	巻頭釘	9.1	1.2	0.6	ⅢD			石をはずした下	95年度調査
M79	巻頭釘	9.2	1.3	0.4	ⅦA		95－1面	上層　灰色粗砂混じりシルト	
M80	巻頭釘	8.3	1.5	0.5	ⅣB		95－2面まで		
M81	巻頭釘	9.3	1.2	0.4	Ⅷ	SD52008	95－2面	大溝内及び上部埋土(3Sまで)	
M82	巻頭釘	9.1	1.2	0.5	Ⅷ			汚れた黄灰色シルト	95年度調査
M83	巻頭釘	8.8	1.1	0.4	XⅧ	SD74001	97－4面	茶灰色シルト	
M84	巻頭釘	8.9	1.5	0.4	XIV	SD67001より下層	96－8面対応		
M85	巻頭釘	8.7	1.2	0.5	ⅦD	SD57008　東サブトレ	95－7面	断ち割り下層　腐蝕	
M86	巻頭釘	8.3	1.1	0.5	ⅦC		95－2面層まで	あじろ垣周辺	
M87	巻頭釘	8.3	1.2	0.4	ⅣB		95－1面	上層　灰色粗砂混じりシルト	
M88	巻頭釘	8.4	1.1	0.6	ⅦC		95－2面以下95－3面間	炭層まで　あじろ垣周辺	
M89	巻頭釘	7.7	1.3	0.4	Ⅷ		95－2面まで		
M90	巻頭釘	7.5	1.4	0.5	ⅦC		95－2面まで		
M91	巻頭釘	7.4	1.2	0.5	Ⅶ、Ⅷ区間		95－4面	上層　黒色腐蝕土層	
M92	巻頭釘	6.8	1.7	0.4	Ⅷ南半		95－2面以下	整地土中　溝2008より南	
M93	巻頭釘	6.8	0.9	0.4	XⅧ	SD74001	97－4面		墨書土器群
M94	巻頭釘	6.9	1.2	0.5	ⅥA		95－1面	上層シルト	
M95	巻頭釘	6.3	1.1	0.4	ⅤA	根太内			95年度調査
M96	巻頭釘	6.4	1.1	0.4	ⅤB		95－2面	イロリ状石組内	
M97	巻頭釘	6.1	1.2	0.4	ⅦA		95－1面上層	灰色粗砂混じりシルト	
M98	巻頭釘	6.8	1.2	0.4	XIV	南半中央	96－1面	第1洪水砂下江戸時代耕土	
M99	巻頭釘	5.8	0.9	0.4	XⅧ	SD74001底	97－4面		墨書土器集中部B
M100	巻頭釘	5.7	1.0	0.4	ⅤA		95－3面	焼土坑上面粘土中	
M101	巻頭釘	5.1	1.0	0.4	ⅦD	SD52008	95－2面	レキ混じり暗灰極細砂	
M102	巻頭釘	4.8	1.3	0.4	Ⅷ			汚れた黄灰色シルト	95年度調査
M103	巻頭釘	4.2	1.2	0.4	ⅣD	SD52006	95－2面		
M104	切釘	8.5	0.4	0.4	ⅦA		95－1面	上層　灰色粗砂混じりシルト	
M105	切釘	5.8	0.8	0.4	V、Ⅷ区間	東西サブトレ	95－4面	上層、黒色腐蝕土層	木に刺さっていた釘
M106	切釘	5.6	0.5	0.3	ⅦC		95－2面以下95－3面間	炭層まで	
M107	切釘	7.2	0.4	0.5	ⅣA		95－2面	2K層	
M108	切釘	6.0	0.4	0.4	ⅦC		95－1面	上層　灰色粗砂混じりシルト	
M109	折釘	5.6	0.7	0.2	ⅣD(西半)		95－2面まで		
M110	不明品	5.1	1.3	0.7	ⅤB		95－5面		
M111	皆折釘	11.6	0.5	0.6	ⅣA		95－2面	2K層	
M112	合釘	7.9	0.6	0.5	ⅤC		95－5面まで		
M113	合釘	6.8	0.6	0.4	Ⅶ、Ⅷ区間		95－4面上層	黒色腐蝕土層	南北サブトレンチ
M114	飾釘	7.3	0.9	0.4	XⅧ	SD72001	97－2面	中～下層	
M115	鎹	11.8	0.8	0.3	ⅦC		95－4面	4Sまで(4a,4の中)	
M116	飾金具	3.2	3.2	0.2	ⅣB		95－2面		検出時
M117	飾金具	2.6	1.3	0.5	ⅣA	SD200	95－2面		
M118	留め具	6.0	1.2	0.5	VI	SD52009南側掘削	95－2面	灰色シルトまで	
M119	煽り止め	6.4	0.4	0.5	XIV	SD62001石列	96－2面		清掃時
M120	肘坪	4.3	1.3	0.6	XIV	江戸水田畦下		耕土下第1面上	96年度調査
M121	毛抜き	8.2	2.2	0.5	Ⅷ		95－4面まで	北側中央付近	
M122	毛抜き	7.4	1.4	0.5	Ⅶ－A	SD55001南東部	95－5面まで		
M123	毛抜き	7.2	0.2	1.2	XⅧ	SD72009	97－2面		
M124	毛抜き	6.2	1.3	1.0	XⅧ北半	SD74001	97－4面	灰色粗砂中	土師器皿集中部
M125	二器	口径5.9	器高2.8	底径2.8	ⅦA		95－5面上	北東端落込み	
M126	五徳	—	器高3.3	底径8.0	ⅦC		95－1面	上層　灰色粗砂混じりシルト	清掃時
M127	紅皿	口径4.8	器高1.0	底径3.2	ⅣA		95－2面上	(2k内)第1第2整地土間	
M128	油差し	口径7.2	器高4.2	—	Ⅲ		95年調査	4k層東西サブトレ②	
M129	灰匙	15.7	2.8	0.2	ⅣD		95－4面		
M130	匙	14.7	1.7	0.3		表採			95年度調査
M131	火箸	41.5	0.6	0.7	I		95－4面まで	4a内（3面と4面の間）	
M131	火箸	16.4	0.6	0.6	I		95－4面まで	4a内（3面と4面の間）	
M131	火箸	9.4	1.0	0.4	I		95－4面まで	4a内（3面と4面の間）	
M132	火箸	37.8	0.6	0.6	Ⅷ	SD52008　大溝内	95－3面まで		
M133	火箸	37.8	0.6	0.6	Ⅷ	SD52008　大溝内	95－3面まで		
M134	火箸	35.9	0.5	0.5	Ⅶ、Ⅷ区間	南北サブトレンチ		黒色腐蝕土層　南北トレンチ	95年度調査
M135	火箸	33.2	0.6	0.6	ⅦA	SD　50－内	95－5面		
M136	火箸	36.1	0.7	0.7	XIV	東側溝			96年度調査
M137	火箸	37.5	0.6	0.6	ⅣC	SD52003　西コーナーより肩部	95－2面		
M138	火箸	31.6	0.6	0.6	Ⅷ区		95－5面まで		
M139	火箸	34.0	0.6	0.6	Ⅷ南東半		95－4面まで	主に3s下3＋1面まで	
M140	火箸	28.1	0.5	0.5	XI		96－4面		清掃時
M141	火箸	28.9	0.7	0.6	ⅥD		95－1面	上層シルト(江戸以降の溝か)	
M142	火箸	30.0	0.6	0.7	ⅦA	SD54004	95－4面		
M143	火箸	30.5	0.6	0.6	Ⅳ			第3整地層より下(第4面)南側側溝	95年度調査
M144	火箸	28.9	0.6	0.5	ⅤA		95－3面まで		

	品目	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	地　区	出土場所	面	層　位	備　考
M145	火箸	28.3	0.5	0.5	ⅦC		95－2面		
M146	火箸	26.8	0.6	0.6	ⅤC		95－5面まで		
M147	火箸	24.6	0.5	0.4	ⅣB		95－5面まで	中央東端	
M148	火箸	19.2	0.5	0.4	ⅥA	SD54004	95－4面		
M149	火箸	20.0	0.4	0.4	ⅣD		95－1面	上層汚れた黄灰色シルト	
M150	火箸	15.1	0.3	0.3	ⅤA		95－1面	上層火事かたづけ土	
M151	火箸	15.1	0.3	0.3	ⅤA		95－1面	上層火事かたづけ土	
M152	火箸	15.3	0.4	0.4	ⅩⅣ	江戸水田畦下	96－1面上	耕土下	
M153	鍋の取手	37.9	0.7	0.7	ⅣB		95－4面	(4a)暗茶シルト　50～60	
M154	鍋の耳	4.1	3.5	0.8	Ⅷ		95－4面まで	北側中央付近	
M155	鍋片	8.3	15.9	0.7	Ⅻ	東側溝		炭層下粗砂層	
M156	鍋片	8.7	3.5	0.4	ⅦC		95－1面	上層　灰色粗砂混じりシルト	清掃時
M157	鍋の一部	16.4	17.7	0.4	ⅣD	SD54004内	95－4面		
M158	鍋	11.4	10.7	0.5	ⅣA		95－1面	PIT－2	
M159	包丁	27.7	3.5	0.3	ⅦA		95－5面	(5a内)	
M160	包丁	22.6	3.1	0.1	ⅤA南半			4a	95年度調査
M161	火打金	6.1	2.3	0.4	ⅣB		95－3面＋1		
M162	錐	20.4	1.2	1.4	Ⅳ－Ⅴ	南北サブトレンチ		黒褐色腐植土層	95年度調査
M163	紡錘車	5.6	21.5		ⅤB		95－5面まで		
M164	紡錘車	5.1	1.4		ⅣB	SD52002	95－2面		
M165	鋏	14.2	2.8	0.5	ⅣA		95－5面まで	北東隅部	
M166	鍛状製品	9.9	4.7	0.2	ⅥB	SD54001－30	95－4面	腐蝕土直上	
M167	鍵？	31.1	0.8	1.2	ⅥA		95－3面	整地土中	
M168	鋤先	29.6	22.2	2.1	Ⅻ	SD68001	96－8面		
M169	鋤先	10.9	3.8	1.3	ⅩⅣ	江戸水田畦下		耕土下第1面上	96年度調査
M170	鎌	33.5	3.6	0.3	ⅩⅥ	SD74001	97－4面	最下層	
M171	環状製品	3.1	2.9	0.4	ⅤA		95－3面＋1まで	南半部中心	
M172	環状製品	3.2	2.7	1.4	ⅣC		95－1面上層	汚れた黄灰色シルト	
M173	釣針	7.4	0.4	0.4	ⅣD		95－1面	上層　汚れた黄灰色シルト	
M174	不明品	8.5	1.1	0.4	Ⅷ	SD52008　大溝	95－3面まで	(暗灰腐触土)	
M175	不明品	13.8	1.0	0.4	Ⅷ		95－2面＋1まで		
M176	不明品	12.4	1.6	0.4	ⅦA			(濁黄白色S)下腐蝕土中	東サブトレ1Sカ　95年調査
M177	針状製品	10.1	0.2	0.2	ⅣEが主		95－2面まで		あげ土内
M178	棒状製品	10.0	0.4	0.4	ⅦA	SA54004	95－4面	茶褐色腐植土中	鍍金有り
M179	棒状製品	28.2	0.6	0.6	ⅣD	SD52002　Sグループ中	95－2面		
M180	棒状製品	22.2	0.5	0.5	ⅣC	SD52003	95－2面		
M181	不明品	5.4	1.1	0.4	ⅣA	板太内	95－5面		
M182	楔状製品	4.0	2.0	0.3	Ⅵ	SD52010周辺	95－2面		第2面検出時
M183	不明品	7.6	4.0	0.4	ⅣD		95－1面	灰色粗砂混じり極細砂第1面まで	(第2火事かたづけ含む)
M184	不明品	20.1	0.6	0.5	ⅣA	板太内	95－5面		
M185	不明品	8.0	2.4	0.2	Ⅷ		95－1面上層	汚れた黄灰色シルト	95年調査
M186	不明品	5.4	1.1	0.1	ⅩⅧ	SD74001	97－4面		墨書土器集中部
M187	不明品	5.9	1.6	0.5	Ⅵ	SD52009南側掘削	95－2面	灰色シルトまで	
M188	管状製品	4.6	1.0	1.0	ⅦC	SD52001	95－2面	黒色腐蝕土層	
M189	飾り金具	6.4	1.5	0.1	ⅦC		95－2面	第1第2整地層間	
M190	不明品	17.0	1.0	0.1	ⅣC		第95－2面	黒色腐蝕土層	
M191	開元通寶	2.3	2.3	0.3	Ⅰ	北側溝		第1整地層より下	中ぐらい　95年調査
M192	開元通寶	2.4	2.4	0.3	Ⅴ		95－2面上	小型スズリ周辺	
M193	開元通寶	2.4	2.4	0.3	Ⅲ	流路①肩部	95－2面	2Sまで	
M194	開元通寶	2.5	2.5	0.3	Ⅵ	SD52009	95－2面		
M195	開元通寶	2.2	2.2	0.3	ⅦD	SD52008南溝	95－2面	埋土上層	
M196	開元通寶	2.5	2.5	0.3	ⅣB		95－4面		
M197	開元通寶	2.5	2.5	0.3	ⅥA			第3整地層中3面と4面の間	95年調査
M198	開元通寶	2.4	2.4	0.3	ⅤC		95－4面		
M199	開元通寶	2.4	2.4	0.3	Ⅵ	SD54001コーナー部溝底	95－4面		
M200	開元通寶	2.4	2.4	0.3	ⅩⅧ	SD74001コーナー部	95－4面		
M201	開元通寶	2.4	2.4	0.3	Ⅻ	SD68002	96－8面		
M202	開元通寶	2.4	2.4	0.3	ⅢⅣ南半	サブトレ②		2a以下	背上月　95年調査
M203	開元通寶	2.3	2.3	0.3		表採			背上月星　95年調査
M204	開元通寶	2.4	2.4	0.3	ⅣC	南側落込み	95－5面		背上月
M205	太平通寶	2.4	2.4	0.3	Ⅷ	火葬墓状遺構上		灰色シルト	95年調査
M206	大平通寶	2.4	2.4	0.3	ⅩⅧ	土師器皿集中部		灰色粗砂中	97年調査
M207	淳化元寶	2.4	2.4	0.3	Ⅻ	SD68002	96－8面		
M208	至道元豊	2.4	2.4	0.3	Ⅷ	95－1面上層		汚れた黄灰色シルト	95年調査
M209	至道元寶	2.4	2.4	0.3	ⅥA	SD52009	95－3面	下層　溝埋土	
M210	至道元豊	2.4	2.4	0.3	ⅣEが主		95－2面まで		あげ土内
M211	咸平元寶	2.4	2.4	0.3	Ⅵ		95－1～2面		
M212	祥符元寶	2.4	2.4	0.3	Ⅳ.Ⅴ	サブトレ	95－4～5面まで		
M213	祥符元寶	2.5	2.5	0.3	ⅤD	SD51001	95－1面		
M214	祥符元寶	2.5	2.5	0.3	Ⅷ		95－4～5面		
M215	祥符通寶	2.5	2.5	0.3	ⅦA	SD52008北側	95－2面		
M216	天禧通寶	2.4	2.4	0.3	ⅣA	SD54004主	95－4面		
M217	天聖元寶	2.4	2.4	0.3	ⅦA		95－1面上層	砂混じりシルト	

	品目	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	地　区	出土場所	面	層　位	備　考
M218	天聖元寶	2.5	2.5	0.3	XII		96－8＋2面上		
M219	天聖元寶	2.4	2.4	0.3	IX北半		95－5面まで		
M220	天聖元寶	2.5	2.5	0.3	VC		95－5面まで		
M221	天聖元寶	2.2	2.0	0.3	VB		95－2面上		
M222	明道元寶	2.4	2.4	0.3	IVB		95－3面＋1まで		3S中
M223	景祐元寶	2.5	2.5	0.3	VI(VIC)				SD52009検出時
M224	皇宋通寶	2.4	2.4	0.3	IVB		95－2面		清掃時
M225	皇宋通寶	2.4	2.4	0.3	IVA		95－5面まで		
M226	皇宋通寶	2.0	2.0	0.3	IVA		95－2面	集石部	
M227	皇宋通寶	2.5	2.5	0.3	XII	SD68002	96－8面		
M228	至和元寶	2.3	2.3	0.3	VII－B	砂利敷内	95－3面		
M229	至和元寶	2.4	2.4	0.3	IV,VII	東西サブトレ②		25以下	95年調査
M230	嘉祐通寶	2.5	2.5	0.3	VB		95－2面		清掃時
M231	嘉祐通寶	2.4	2.4	0.3	VC		95－5面まで		
M232	嘉祐通寶	2.4	2.4	0.3	XIV	SD62001肩より東	96－2面	整地面	
M233	嘉祐通寶	2.3	2.3	0.3	XII	SD68002	96－8面		
M234	治平元寶	2.4	2.4	0.3	VII	東端	95－1面上		
M235	治平元寶	2.4	2.4	0.3	VIB		95－2面	整地土まで	
M236	治平元寶	2.4	2.4	0.3	IVB		95－5面まで	中央東端	
M237	熙寧元寶	2.4	2.4	0.3	VII	火葬墓状遺構西側	95－1面上		
M238	熙寧元寶	2.5	2.5	0.3	IVB		95－4面上		
M239	熙寧元寶	2.4	2.4	0.3	XII	坑列より南	96－5面まで	粗砂(4S)及び茶灰シルト	
M240	熙寧元寶	2.4	2.4	0.3	VA		95－1面上層	粗砂混じりシルト	
M241	熙寧元寶	2.4	2.4	0.3		表採			95年調査
M242	元豊通寶	2.6	2.6	0.3	VIIC		95－2面まで		
M243	元豊通寶	2.4	2.4	0.3	III	流路①肩部	95－2面	2Sまで	
M244	元豊通寶	2.4	2.4	0.3	VIID		95－4面まで		
M245	元豊通寶	2.4	2.4	0.3	XVIII	タチワリ③SD74001内	97－4面		
M246	元豊通寶	2.4	2.4	0.3	VIIC		95－1面上層	汚れた黄灰色シルト(下半)	
M247	元豊通寶	2.5	2.5	0.3	VIIA	SD52008	95－2面		
M248	元豊通寶	2.4	2.4	0.3	VII	SD54004	95－4面		M148と一括
M249	元豊通寶	2.4	2.4	0.3	IVA		95－5面まで		
M250	元祐通寶	2.4	2.4	0.3	VIIC		95－5面まで		
M251	元祐通寶	2.4	2.4	0.3	III	土塁部	95－2面と3面の間		
M252	元祐通寶	2.5	2.5	0.3	VB		95－3面まで	暗青灰中細砂盛土面まで	
M253	元祐通寶	2.5	2.5	0.3		SD52009？	95－3面		
M254	元祐通寶	2.5	2.5	0.3	VIIA	SD55001南東部	95－5面まで		
M255	元祐通寶	2.4	2.4	0.3	XIV	SD67001南端墨書土器集中部	96－7面		
M256	元祐通寶	2.4	2.4	0.3	XIV		96－5面まで		
M257	元祐通寶	2.4	2.4	0.3	VB		95－2面上		
M258	紹聖元寶	2.4	2.4	0.1	III		95－1面	黒灰色シルト	
M259	紹聖元寶	2.4	2.4	0.3	XVII				97年調査
M260	紹聖元寶	2.4	2.4	0.3	XVII				97年調査
M261	元符通寶	2.3	2.3	0.3	IVEが主		95－2面まで		あげ土内
M262	聖宋元寶	2.3	2.3	0.3	VIIC	SD54008より南	95－4面まで	段差より北	
M263	聖宋元寶	2.4	2.4	0.3	IV	東側側溝			95年調査
M264	聖宋元寶	2.3	2.3	0.3	IVB		95－4面	(4a)暗茶シルト	第3+1面の可能性も有り
M265	政和通寶	2.4	2.4	0.3	IVC		95－2面まで	汚れた黄灰色シルト	
M266	政和通寶	2.5	2.5	0.3	VA		95－1面上層	汚れた黄灰色シルト	
M267	政和通寶	2.4	2.4	0.3	VB		95－1面上層	汚れた黄灰色シルト	
M268	政和通寶	2.5	2.5	0.3	IVA		95－5面まで		
M269	宣和通寶	2.1	2.5	0.3	XII	土塁上	96－7面		
M270	淳熙元寶	2.3	2.3	0.3	IVB		95－4面	(4a)暗茶シルト	第3+1面の可能性も有り M15、M264と一括
M271	紹熙元寶	2.4	2.4	0.3	III			流路①肩部　第2面　2Sまで	背下三　95年調査
M272	慶元通寶	2.3	2.3	0.3	II			流路①肩部　第2面　2Sまで	背下二　95年調査
M273	慶元通寶	2.3	2.3	0.3	VIIC		95－2面		背下五
M274	紹定通寶	2.4	2.4	0.3	IVA	根太内	95－5面		
M275	皇宋元寶	2.4	2.4	0.3	XVIII－XX	SD75001	97－5面	最下層　墨書土器群C下層	
M276	開慶通寶	2.4	2.4	0.3	XII	SD68002	96－8面		
M277	永楽通寶	2.4	2.4	0.3	IVB		95－4面上		
M278	永楽通寶	2.4	2.4	0.3	XII	SD68002	96－8面		
M279	永楽通寶	2.5	2.5	0.3	XII	SD68002	96－8面		
M280	永楽通寶	2.5	2.5	0.3	VC		95－5面まで		
M281	宣徳通寶	2.5	2.5	0.3	VC		95－5面まで		
M282	洪順通寶	2.4	2.4	0.3	VIIC				95年度調査
M283	寛永通寶	2.5	2.5	0.3	XIV	江戸水田畦畔下	96－1面上	粘土下	
M284	スラッグ	6.7	6.2	3.3		北側溝		95年第1整地層	
M285	スラッグ	5.4	5.3	2.5	I	北側溝		95年第2整地層	
M286	スラッグ	6.0	5.2	2.5	IV－V	サブトレンチ			95年度調査

第35表　出土木製器観察表

報告番号	種類	器種	長さ（口径）	幅（器高）	厚さ（底径）	出土地区	出土遺構	出土層位
W1	容器	漆杯	(9.2)	2.6	(6.3)	XⅧ	SD74001	
W2	容器	漆杯	(8.5)	(2.5)	(5.4)	Ⅺ	SD64002	
W3	容器	漆杯	9.5	3.5	6.0	ⅤB		95－5面
W4	容器	漆杯	(18.8)	3.0	(5.2)	ⅦA		95－4面まで
W5	容器	漆椀	13.6	4.9	6.7	ⅦA		95－5面
W6	容器	漆椀	(13.0)	5.0	(6.7)	Ⅹ		95－4面まで
W7	容器	漆椀	—	(2.0)	—	ⅣB		暗灰シルト粗砂まじり
W8	容器	漆椀	(14.3)	(7.0)	—	ⅨA	SD54001	
W9	容器	漆椀	(12.9)	2.9	(9.6)	ⅨB－C	SD54001	
W10	容器	漆椀	(13.8)	(3.8)	(6.0)	Ⅰ		95－4面まで
W11	容器	漆椀	—	(5.4)	(7.4)	XⅧ－XX	SD75001	
W12	容器	漆椀	(13.9)	(6.1)	(6.0)	Ⅸ	サブトレンチ南	
W13	容器	漆椀	(8.6)	(4.0)	—	ⅦA		95－4面
W14	容器	漆椀	(12.0)	(2.5)	—	ⅣD		95－3面
W15	容器	漆椀	13.9	(4.5)	—	Ⅻ	SD68001	
W16	容器	漆椀	(14.9)	7.3	8.1	ⅣB－C	SD54001	
W17	容器	漆椀	(15.2)	8.1	(8.0)	ⅥA	SD54002	
W18	容器	漆椀	(19.0)	(7.1)	7.7	Ⅲ		95－4面
W19	容器	漆椀	(14.2)	7.9	(7.6)	Ⅵ	SD54002	
W20	容器	漆椀	(18.7)	10.2	(10.3)	ⅣD	SD54004	95－4面
W21	容器	漆椀	—	(1.0)	—	Ⅷ		95－5面まで
W22	容器	漆杯	10.0	3.4	5.4	ⅦB		95－5面より下
W23	容器	漆椀	(13.2)	4.7	(5.6)	ⅨA	SD54001	
W24	容器	漆椀	(14.8)	4.5	(7.0)	Ⅳ		95－4K層
W25	容器	漆椀	—	(6.0)	7.7	ⅥA	SD54001	
W26	容器	漆椀	—	(6.3)	(6.0)	Ⅵ	SD54001	
W27	容器	漆椀	—	(5.8)	(6.5)	ⅥB		95－3面
W28	容器	漆椀	(9.5)	4.0	(6.4)	ⅥD	SD54001－54002間	
W29	容器	漆椀	(8.7)	6.0	(6.0)	ⅣD		95－5面まで
W30	容器	漆椀	(15.9)	(9.1)	(8.0)	Ⅵ	SD54001	
W31	容器	漆椀	(14.2)	4.9	(丸底)	ⅣC	SK55001	95－5面
W32	容器	漆杯	(11.7)	3.1	(7.8)	ⅣA	根太内	95－5面
W33	容器	漆椀	(17.2)	5.7	(7.2)	ⅢA	SD54001	
W34	容器	漆椀	—	(2.3)	(5.1)	ⅨD	SD54001－54002間	
W35	容器	漆椀	(14.4)	5.9	(7.8)	Ⅵ	SD54002	
W36	容器	漆椀	(15.8)	7.0	(7.6)	ⅥA	SD54001	
W37	容器	漆椀	(15.6)	7.3	(7.6)	ⅥC	SD54002	
W38	容器	漆杯	(10.3)	(2.5)	(6.0)	ⅨA－B	SD54002	
W39	容器	漆杯	(9.7)	3.2	(5.7)	XⅧ－XⅨ		97－2面まで
W40	容器	漆杯	9.5	3.2	(5.9)	ⅦC		95－5面石組部
W41	容器	漆杯	(11.3)	(3.2)	—	XⅥ	SD74001	
W42	容器	漆杯	(12.8)	3.7	(6.1)	ⅥA	SD54001	
W43	容器	漆椀	(11.9)	(4.0)	—	Ⅷ		95－2面より下
W44	容器	漆椀	(11.5)	(4.0)	—	Ⅻ	SD63001	
W45	容器	漆椀	(14.1)	5.5	7.2	Ⅷ	SD52008	
W46	容器	漆椀	(13.4)	4.8	(6.2)	ⅦA		95－4面
W47	容器	漆椀	(14.0)	4.4	(6.8)	XⅧ	SD72001	
W48	容器	漆椀	(13.4)	4.6	(7.2)	Ⅸ	SD54002	
W49	容器	漆椀	(13.8)	4.6	6.6	ⅢA	SD54001	
W50	容器	漆椀	(13.4)	4.1	(6.2)	Ⅳ－Ⅷ		95－3面より下
W51	容器	漆椀	(13.5)	(4.9)	(7.0)	ⅨA	SD54001	
W52	容器	漆椀	(14.4)	5.0	(7.2)	ⅥB	SD54001	
W53	容器	漆椀	(15.8)	5.4	(7.7)	XⅧ	SD75001	
W54	容器	漆椀	(14.9)	5.6	(6.9)	Ⅵ	SD54001	
W55	容器	漆椀	(16.3)	5.9	(8.9)	ⅦA		95－4面まで
W56	容器	漆椀	—	(3.6)	(6.6)	ⅥD	SD54002	
W57	容器	漆椀	(11.4)	4.6	(4.9)	Ⅷ		95－5面まで
W58	容器	漆椀	—	(3.4)	—	Ⅱ		95－3面より下
W59	容器	漆椀	(13.9)	5.4	(7.7)	ⅥD	SD54002	
W60	容器	漆椀	(14.4)	(5.5)	—	ⅥB	SD54001	
W61	容器	漆椀	(14.6)	5.8	(7.6)	ⅢD		95－2面
W62	容器	漆椀	(14.4)	(5.5)	(6.1)	ⅥB	SD54001	
W63	容器	漆椀	(14.4)	(5.5)	—	Ⅺ	SD64002	
W64	容器	漆椀	13.6	5.7	(6.6)	XⅥ	SD74001	
W65	容器	漆椀	(14.5)	5.1	—	XⅥ	SD74001	
W66	容器	漆椀	(14.8)	6.2	(7.3)	Ⅻ		96－4面まで
W67	容器	漆椀	15.4	6.0	8.2	Ⅺ－Ⅻ	SD64001	
W68	容器	漆椀	(15.6)	6.1	(7.1)	Ⅷ		95－4面まで
W69	容器	漆椀	(14.8)	6.6	(7.0)	ⅨA	SD54001	
W70	容器	漆椀	(14.8)	6.1	6.6	Ⅸ	SD54002	
W71	容器	漆椀	(15.2)	5.5	(8.8)	ⅣD		95－5面まで
W72	容器	漆椀	(14.7)	(5.7)	—	XⅧ	SD75001墨書土器C群	
W73	容器	漆椀	(15.6)	(5.3)	—	ⅦA		95－5面
W74	容器	漆椀	(15.2)	5.6	(6.5)	Ⅻ		SD69001
W75	容器	漆椀	(16.6)	6.2	(8.0)	ⅢA	95年度　北側側溝	
W76	容器	漆椀	(13.0)	6.3	(6.7)	XⅢ		96年度　第一洪水砂含む
W77	容器	漆椀	(13.8)	5.7	(6.9)	ⅥD	SD54001	
W78	容器	漆椀	(13.4)	6.1	—	ⅢA	95年度　北側側溝	
W79	容器	漆椀	(13.8)	(6.1)	—	ⅨC	SD54001	
W80	容器	漆椀	(13.3)	6.0	(6.2)	Ⅻ		96－1面
W81	容器	漆椀	(14.0)	6.2	7.5	Ⅵ	SD54001	
W82	容器	漆椀	(13.5)	(6.0)	(7.0)	ⅢD		95年度　暗灰色シルト
W83	容器	漆椀	(13.9)	5.9	7.4	ⅥD	SD54002	
W84	容器	漆椀	(13.5)	(4.4)	—	Ⅵ	SD54001	
W85	容器	漆椀	(13.0)	5.7	(6.3)	Ⅲ－Ⅵ	SD54001	
W86	容器	漆椀	(14.3)	(6.2)	—	XⅧ－XX	SD75001墨書土器E群	
W87	容器	漆椀	(13.8)	6.6	6.7	Ⅲ－Ⅵ	SD54001	
W88	容器	漆椀	(13.9)	6.0	(6.8)	ⅨB－C	SD54002－54001間	95－4面

報告番号	種類	器種	長さ(口径)	幅(器高)	厚さ(底径)	出土地区	出土遺構	出土層位
W89	容器	漆椀	(14.6)	(3.8)	—	ⅥA	SD54001	
W90	容器	漆椀	(14.5)	6.0	(6.2)	ⅣA		95－5面まで
W91	容器	漆椀	(14.5)	6.6	(7.2)	ⅥD	SD54002	
W92	容器	漆椀	(14.0)	6.2	(7.7)	ⅢA	SD54001	
W93	容器	漆椀	(14.5)	6.8	(6.8)	ⅨA		95－5面まで
W94	容器	漆椀	(15.9)	7.0	(7.2)	ⅥB－C	SD54001	
W95	容器	漆椀	(15.1)	(5.4)	—	ⅨA	SD54001	
W96	容器	漆椀	(15.7)	7.0	7.0	ⅥB	SD54001	
W97	容器	漆椀	(15.8)	7.0	(7.5)	ⅣD		95－5面まで
W98	容器	漆椀	—	(4.7)	(7.4)	ⅣD	SD54004	
W99	容器	漆椀	(13.8)	6.8	(7.2)	ⅣB		95年度　暗灰シルト粗砂まじり
W100	容器	漆椀	(13.5)	7.0	7.4	ⅥD	SD54002	
W101	容器	漆椀	—	(5.5)	—	ⅣC		95－5面まで
W102	容器	漆椀	—	(3.1)	(8.1)	ⅨC	SD54002	
W103	容器	漆椀	—	(2.4)	(6.6)	ⅨA	SD54001	
W104	容器	漆杯	(10.4)	3.4	(6.4)	ⅧC		95－5面石組部
W105	容器	漆杯	(10.1)	3.6	(6.2)	Ⅵ	SD54001	
W106	容器	漆杯	10.1	4.0	(5.9)	ⅩⅣ	SD67001	
W107	容器	漆杯	(9.8)	(3.6)	—	ⅦA		95－4面まで
W108	容器	漆椀	(14.8)	7.6	(7.4)	ⅨA	SD54001	
W109	容器	漆椀	(15.9)	7.1	(8.9)	ⅥB	SD54001	
W110	容器	漆椀	(17.6)	8.1	8.1	ⅨC	SD51005	
W111	容器	漆椀	(17.5)	8.5	7.8	ⅩⅣ	SD67001	
W112	容器	漆椀	(14.1)	(6.3)	—	Ⅵ	SD54002	
W113	容器	漆椀	(14.8)	8.0	(8.8)	ⅨA	SD54001	
W114	容器	漆椀	(15.0)	8.0	(8.4)	ⅨA	SD54001	
W115	容器	漆椀	(16.6)	7.7	—	ⅧA		95－5面
W116	容器	漆椀	(17.0)	8.6	(7.4)	ⅩⅢ		96－4面まで　3a層
W117	容器	漆椀	(16.7)	8.0	8.0	ⅨB－C	SD54001	
W118	容器	漆椀	(11.0)	6.1	(5.6)	ⅨA	SD54001	
W119	容器	漆椀	(13.7)	7.9	(7.5)	Ⅲ	SD54001	
W120	容器	漆椀	(13.1)	7.6	6.7	ⅩⅣ	SD68001	
W121	容器	漆椀	14.0	8.0	7.2	ⅫⅡ	SD65001	
W122	容器	漆椀	(14.4)	8.5	(8.1)	Ⅵ	SD54001	
W123	容器	漆椀	(14.9)	8.3	7.4	ⅨA	SD54001	
W124	容器	漆椀	(14.9)	8.0	(7.6)	Ⅵ	SD54001	
W125	容器	漆椀	(15.4)	9.0	7.2	ⅩⅣ	SD67001	
W126	容器	漆椀	(15.7)	7.0	7.3	ⅫⅡ	SD69002	
W127	容器	漆椀	(13.6)	7.8	(7.7)	ⅣC		95－5面
W128	容器	漆椀	(14.1)	8.7	7.2	ⅣB		95－4面集石部
W129	容器	漆椀	(15.6)	(6.7)	—	ⅫⅡ	SD68002	
W130	容器	漆椀	(15.3)	9.3	7.2	ⅥA－D	SD54001	
W131	容器	漆椀	(15.4)	8.9	8.0	Ⅷ		95年度　灰色シルト内
W132	容器	漆椀	(13.2)	9.5	(7.1)	ⅨC	SD54002	
W133	容器	漆杯	10.3	2.9	(6.3)	ⅧC		95－4面まで
W134	容器	漆椀	(9.6)	3.4	6.0	ⅫⅡ	SD68002	
W135	容器	漆椀	(14.9)	7.8	(7.4)	ⅥA	SD54001	
W136	容器	漆椀	(15.4)	(5.9)	—	ⅥA		95－4面まで
W137	容器	漆椀	(15.8)	(7.8)	—	Ⅱ		95－5面
W138	容器	漆椀	(15.7)	8.0	(8.5)	ⅨD	SD54002	
W139	容器	漆椀	(10.1)	6.3	(5.3)	ⅥD	SD54001	
W140	容器	漆椀	(10.6)	5.3	(7.0)	Ⅲ－Ⅵ		95－3面より下
W141	容器	漆椀	—	(5.2)	(6.3)	Ⅷ		95－4面まで
W142	容器	漆椀	—	(5.1)	5.8	ⅥD	SD54001－54002間	
W143	容器	漆椀	(13.5)	8.2	(6.2)	ⅩX	SD72005	
W144	容器	漆椀	(15.0)	8.2	(8.2)	Ⅲ－Ⅵ	SD54001	
W145	容器	漆椀	(15.1)	8.4	(8.5)	ⅣD		95－5面まで
W146	容器	漆椀	(14.2)	9.0	(8.7)	Ⅲ－Ⅵ	SD54001	
W147	容器	漆椀	(14.5)	9.0	(8.7)	ⅤB－Ⅷ		95－4面より下
W148	容器	漆椀	(13.5)	(6.8)	—	ⅩⅥ	SD74001	
W149	容器	漆椀	(14.2)	(9.0)	(7.9)	Ⅸ	SD54001	
W150	容器	漆椀	(14.9)	8.7	—	ⅢA	SD54001	
W151	容器	漆椀	(14.2)	9.4	(7.5)	ⅩⅢ		96－4面まで
W152	容器	漆椀	(14.0)	8.2	7.9	ⅩⅧ	SD75001墨書土器C群	
W153	容器	漆椀	(14.2)	(9.3)	—	ⅥC	SD54001	
W154	容器	漆椀	(11.0)	8.7	(7.2)	ⅩⅧ	SD75001	
W155	容器	漆椀	—	(6.6)	(6.5)	Ⅲ	SD53001	
W156	容器	漆椀	—	(5.5)	(7.8)	ⅣD		95－3S
W157	容器	漆椀	—	(6.2)	—	ⅣA		95－4面
W158	容器	漆椀	—	(6.8)	6.8	ⅩⅨ	SD72005	
W159	容器	漆椀	—	(7.8)	(8.2)	ⅣB		95－1面
W160	容器	漆椀	—	(6.2)	(6.9)	Ⅱ		95－5面まで
W161	容器	漆椀	—	(3.0)	(7.6)	ⅨA	SD54001	
W162	容器	漆椀	(5.1)	(7.2)	—	ⅣA		95－5面まで
W163	容器	漆椀	—	(5.7)	—	ⅥC	SD54002	
W164	容器	漆椀	—	(2.8)	(8.1)	ⅥD	SD54002	
W165	容器	漆椀	—	(5.0)	—	ⅣB	SD52002	
W166	容器	漆椀	—	(7.4)	(7.2)	ⅨA	SD54001	
W167	容器	漆椀	—	(8.3)	(7.9)	Ⅵ	SD54001	
W168	容器	漆椀	—	(6.2)	—	Ⅷ		95－4面
W169	容器	漆椀	—	(5.7)	(8.6)	ⅣD		95－3面
W170	容器	漆椀	—	(9.1)	(8.2)	Ⅵ	SD54002	
W171	容器	漆香合の蓋	3.1	1.3	2.1	Ⅲ－Ⅵ	SD54001	
W172	容器	柄杓	7.1	7.0	6.6	ⅨD	SD54002	
W173	遊戯具	柄杓	(6.0)	6.0	5.7	ⅩⅧ		97－2面まで
W174	容器	漆棗	(6.2)	6.0	(5.4)	ⅧC		95－4a
W175	容器	棗	(5.2)	5.3	(5.0)	ⅩⅧ	SD74001	墨書土器集中部南側
W176	容器	漆蓋置き	(6.1)	5.4	6.4	ⅥC	SD54001	

報告番号	種類	器種	長さ(口径)	幅(器高)	厚さ(底径)	出土地区	出土遺構	出土層位
W177	容器	漆杓子の注口	(3.4)	(6.1)	—	Ⅰ		95－3面まで
W178	容器	漆器	(2.4)	(6.3)	—	ⅣA		95－5面まで
W179	不明	漆器	9.9	5.0	1.1	ⅢD		95－3面まで
W180	食事具	漆杓子の先端	(14.6)	(11.6)	(3.8)	ⅤA		95－5面まで
W181	容器	漆桶の側板	(12.2)	4.6	(0.7)	ⅣC		95－5面まで
W182	容器	漆桶の底板	(19.4)	(6.0)	0.7	ⅤA		95－3面
W183	容器	漆桶の底板	30.2	9.7	1.0	Ⅷ		95－4面まで
W184	調度品	箱材	(16.7)	10.4	0.9	XIV	SD68001	
W185	容器	箱材	21.0	2.8	0.7	ⅤA		95－4面まで
W186	容器	箱材	(18.1)	6.5	0.7	ⅦB		95－5面
W187	容器	箱材	31.7	6.5	0.9	Ⅲ	SD54001	95－4面　越前擂鉢周辺
W188	工具	漆刷毛	13.1	1.4	0.4	ⅥC	SD54001	
W189	工具	漆刷毛	(9.1)	2.6	4.7	Ⅻ	96年度　東側側溝	
W190	工具	漆刷毛	15.6	(5.8)	0.7	Ⅻ	SD68001	
W191	工具	漆刷毛	16.9	(3.7)	0.5	Ⅻ		96－8・9面まで
W192	工具	漆刷毛	16.9	8.2	1.2	Ⅻ	SD75001	
W193	工具	漆刷毛	15.6	5.8	1.3	Ⅻ		96－1面
W194	工具	漆刷毛	16.5	9.5	0.8	Ⅻ		SD72001より下層
W195	工具	漆刷毛	15.7	9.8	0.7	ⅨD		95－4面まで
W196	工具	漆刷毛	16.5	10.0	1.0	XVI	SD75001	
W197	工具	漆刷毛	15.3	9.9	0.5	XⅧ	SD74001	
W198	工具	漆刷毛	16.9	10.1	1.1	XVI	SD75001	
W199	工具	漆刷毛	16.6	(6.9)	0.9	XVI	SD74001	
W200	工具	漆ヘラ	22.7	2.4	1.0	ⅥA	SD54001	
W201	工具	漉し紙	4.9	1.0	0.4	ⅣB	集石部	95－4面
W202	工具	ヘラ	(22.9)	4.1	0.5	Ⅻ	96年度　東側溝	SD67001ヵ
W203	工具	ヘラ	22.0	2.5	0.2	ⅧC		95－4面まで
W204	工具	ヘラ	14.9	2.3	3.2	ⅢA	SD54001	
W205	工具	ヘラ	21.4	3.7	0.3	XVI	SD72001	
W206	工具	ヘラ	17.7	1.8	0.3	Ⅷ	SD52008大溝内	
W207	工具	ヘラ	23.2	1.4	0.3	ⅨB－C	SD54001	
W208	工具	ヘラ	11.9	2.5	0.7	Ⅻ	SD68202	
W209	工具	ヘラ	17.1	3.0	0.9	Ⅷ		95－4面まで
W210	工具	ヘラ	19.5	1.4	1.6	ⅧD		95－4面まで
W211	工具	ヘラ	21.9	1.2	0.2	Ⅲ		95－4面より下
W212	工具	ヘラ	20.7	1.5	0.4	Ⅷ		95－4面まで
W213	工具	ヘラ	17.8	1.8	0.3	Ⅷ		95－4面まで
W214	工具	ヘラ	17.5	1.4	0.4	ⅥC	SD54002	直上
W215	工具	ヘラ	15.3	1.5	0.9	Ⅳ－ⅤA		95－4面より下
W216	工具	ヘラ	12.9	1.8	0.5	ⅣC		95－3面＋1まで
W217	工具	ヘラ	10.8	2.0	0.8	ⅨC	SD54001・54002間	
W218	工具	木槌or柄頭	2.8	9.4	3.4	ⅥC	SD54001	
W219	工具	木槌or柄頭	12.7	3.1	3.0	ⅣC		95－3面・4面間
W220	工具	工具or包丁の柄	11.0	3.8	2.0	Ⅻ	SD69002	
W221	工具	手斧の柄	41.9	4.0	2.9	ⅣA		95－3＋1面以下95－5面まで
W222	工具	太鼓の撥or拍子木ヵ	18.9	3.3	1.7	ⅥC	SD54002	
W223	工具	太鼓の撥or拍子木ヵ	20.7	3.5	2.7		SD54001	
W224	工具	刀子の柄	12.1	2.8	0.6	Ⅷ		95－2面＋1まで
W225	工具	刀子の鞘	11.8	2.7	0.7	ⅧA		95－4a　4面まで
W226	工具	刀子の鞘	(12.2)	1.8	0.3	ⅣC		95－5面まで
W227	工具	槍鉋の鞘	8.8	5.3	0.6	ⅧC		95－4面まで
W228	工具	砥石台ヵ	22.7	6.5	3.2	Ⅲ		95－3面＋1
W229	工具	鉦たたきの撞木の柄	19.4	3.1	0.6	Ⅷ		95－2面まで
W230	工具	鉦たたきの撞木の柄	19.4	3.0	0.6	ⅣC		95－2K層
W231	不明	不明	23.0	11.5	2.3	—	SD52008	
W232	調度具	灯明皿の台	5.0	6.8	0.9	ⅣB	SD54001	
W233	調度具	灯明皿の台	12.8	(4.1)	0.6	ⅣB		95－2面
W234	調度具	灯明皿の台	10.5	3.2	1.1	XIV	SD68001	
W235	調度具	灯明皿の台ヵ	11.8	4.2	1.7	Ⅲ	SD53012内	
W236	雑具	火錐臼	(23.8)	3.7	2.1	XⅧ	SD76001	
W237	農具	横槌	33.0	7.8	7.8	ⅥA－D	SD54001	
W238	農具	横槌	32.5	6.4	5.0	ⅨA	SD54001	
W239	農具	平鍬	15.9	11.1	4.1	ⅥA	SD54001	
W240	農具	平鍬	21.6	(13.4)	3.3	XX		97－2面まで
W241	農具	平鍬	20.2	(14.0)	4.2	Ⅻ	SD68002	
W242	農具	平鍬	23.7	16.9	4.2	Ⅷ		95－4面上
W243	農具？	馬鍬の頭	24.6	7.8	5.6	ⅣA		95－4面
W244	農具	馬鍬の頭	30.5	6.0	5.5	XIX		97－2面直上
W245	農具	鎌の柄	30.3	5.0	2.8	Ⅸ	95年度　サブトレンチ	
W246	農具	鎌の柄	31.3	3.3	2.0	Ⅵ	SD54002	
W247	農具	鎌等の柄ヵ	29.4	2.2	2.4	ⅥA		95－3面下
W248	農具	木錘	15.9	4.1	2.8	ⅢA	SD54001	
W249	農具	木錘	15.9	4.5	2.7	ⅢA	SD54001	
W250	農具	木錘	12.6	3.3	3.6	Ⅷ	SD54002	
W251	農具	木錘	14.0	4.1	3.5	ⅧA		95－4面
W252	農具	木錘	25.1	8.7	7.9	ⅧA	SD54001	
W253	農具	木錘	9.8	7.7	6.6	Ⅰ		95－4面＋1
W254	農具	たが状木製品	69.2	67.8	2.7	ⅥB	SD54001	
W255	農具	たが状木製品	70.3	15.2	2.2	ⅤB－Ⅶ		95－3面以下
W256	紡績具	綛の部材	29.4	2.3	2.3	—	—	97年度
W257	紡績具	綛の部材	(24.3)	3.8	2.0	ⅣD		95－4面直上まで
W258	紡績具	綛の部材	11.1	2.0	0.8	ⅥA－D	SD54001	
W259	紡績具	糸巻	5.9	4.3	4.1	—	96年度　北側溝	
W260	紡績具	紡錘車の一部	4.4	4.7	0.6	Ⅻ	SD68001	
W261	紡績具	紡錘車の一部	4.1	4.3	0.6	ⅣA		95－5面
W262	紡績具	紡錘車の一部	4.8	4.6	0.9	XIV	SD69001	
W263	紡績具	紡錘車の一部	6.2	6.1	1.2	XIV	SD68001	
W264	紡績具	紡錘車の一部	7.0	7.0	1.5	XⅢ		96－4面まで

報告番号	種類	器種	長さ (口径)	幅 (器高)	厚さ (底径)	出土地区	出土遺構	出土層位
W265	紡績具	紡錘車の一部	6.3	6.5	1.0	—		95－2･3面間
W266	紡績具	紡錘車の一部	9.0	(3.2)	2.5	Ⅰ		95－3面まで
W267	紡績具	紡錘車の一部	5.0	4.6	1.3	Ⅷ		95－5面まで
W268	紡績具	紡錘車の一部	5.8	6.3	0.8	ⅨD		95－3面
W269	紡績具	紡錘車状木製品	6.5	7.0	2.1	ⅨA	SD54001	
W270	紡績具	紡錘車状木製品	6.6	(3.4)	1.1	ⅥA		95－2面まで
W271	武具	腰刀の柄	15.1	(3.6)	(0.9)	—	95年度　東西サブトレンチ2	黒褐色腐植土より下層
W272	武具	腰刀の鞘	(22.8)	3.0	1.0	—		95－3面より下95－4S中か
W273	武具	鍬形状木製品	17.4	3.1	0.3	Ⅰ		95－5面まで（5Sまで）
W274	服飾具	解き櫛	8.1	4.3	1.4	ⅣA		95－3面＋1
W275	服飾具	解き櫛	(4.6)	4.6	1.3	XⅧ－XX	SD75001	
W276	服飾具	解き櫛	7.5	(2.8)	1.2	ⅥA	SD54001	
W277	服飾具	解き櫛	8.1	4.6	1.3	XⅥ－XⅧ	SD75001	
W278	服飾具	解き櫛	8.1	4.2	1.3	XⅥ		97－6面土壌層
W279	服飾具	梳き櫛	(5.8)	(1.9)	1.2	ⅣD		95－2K面
W280	服飾具	梳き櫛	8.2	(2.6)	1.4	ⅤC		95－5面まで
W281	服飾具	梳き櫛	8.0	4.6	1.1	ⅣA		95－3面＋1
W282	服飾具	梳き櫛	7.0	3.7	1.1	ⅣB		95－3＋1面まで
W283	服飾具	梳き櫛	7.7	4.5	0.9	Ⅱ		95－4＋1面まで
W284	服飾具	梳き櫛	(7.0)	4.7	1.2	Ⅲ	SD54001	
W285	服飾具	梳き櫛	8.2	(2.6)	1.4	ⅤC		95－5面まで
W286	服飾具	下駄	11.7	7.3	2.0	Ⅰ		95－4面まで
W287	服飾具	下駄	11.6	6.9	1.3	ⅥB	SD54002	
W288	服飾具	下駄	14.2	7.4	2.9	ⅦA		95－4面まで
W289	服飾具	下駄	14.4	(8.6)	3.3	Ⅺ		96－3面
W290	服飾具	下駄	17.6	9.7	2.0	Ⅷ		95－4面まで
W291	服飾具	下駄	(17.4)	9.6	3.7	ⅣA		95－5面まで
W292	服飾具	下駄	19.7	10.1	4.9	XⅢ		96－4面まで
W293	服飾具	下駄	18.6	7.9	3.1	ⅣA		95－4S面上
W294	服飾具	下駄	(20.4)	10.0	5.5	Ⅺ		96－4面まで
W295	服飾具	下駄	22.9	9.8	2.1	XⅧ	SD74001	
W296	服飾具	下駄	12.1	5.0	1.6	ⅣC		95－2面まで
W297	服飾具	下駄	18.1	9.4	3.5	ⅣC		95－5面まで
W298	服飾具	下駄	19.2	10.3	2.8	ⅥA	SD54001	
W299	服飾具	下駄	20.7	10.6	3.0	ⅣC		95－5面
W300	服飾具	下駄	17.5	11.6	1.3	Ⅺ	SD64002	
W301	服飾具	下駄	17.1	9.7	4.8	ⅥD	SD54002	
W302	服飾具	下駄	19.2	10.0	6.2	ⅤB		95－5面まで
W303	服飾具	下駄	22.4	11.1	6.0	ⅥA	SD54001	
W304	服飾具	下駄	(12.4)	6.5	2.6	Ⅻ		96－8面まで
W305	服飾具	下駄	(15.7)	8.7	3.6	—		97年度
W306	服飾具	下駄	20.1	8.5	9.6	ⅦD		95－2～4面
W307	服飾具	下駄	23.8	9.8	2.8	Ⅻ	SD69002	
W308	服飾具	下駄	20.1	13.6	9.3	Ⅷ	SD52008	
W309	服飾具	下駄	20.6	(11.4)	3.3	ⅢB	SD54001	
W310	服飾具	下駄	21.3	9.7	8.9	Ⅷ	東サブトレンチ	95－4a面
W311	服飾具	下駄	(15.2)	14.9	11.0	ⅥA	SD54001	
W312	服飾具	下駄	17.5	11.9	10.3	ⅣC	SK55001	
W313	服飾具	下駄	(16.6)	9.6	2.4	Ⅻ		96－8面まで
W314	服飾具	下駄	26.3	8.4	6.5	ⅣB		95－4S中
W315	服飾具	下駄	13.0	7.9	2.1	ⅦD		95－5面
W316	服飾具	下駄	14.2	9.6	1.5	ⅤC		95－5面まで
W317	服飾具	下駄	12.0	9.0	1.0	ⅨD	SD3006	
W318	服飾具	下駄	8.9	6.6	1.6	Ⅵ		95－4面まで
W319	服飾具	下駄	10.9	(5.3)	1.4	ⅥC	SD54002	
W320	服飾具	下駄	12.0	9.6	1.9	XⅧ	SD74001	
W321	服飾具	下駄	9.7	(9.1)	2.9	XⅣ	SD68001	
W322	服飾具	下駄	10.7	8.5	2.9	Ⅷ		95－4面まで
W323	服飾具	下駄	14.9	11.7	4.0	ⅦA		95－4面主　95－5面まで
W324	服飾具	下駄	13.5	11.5	6.3	ⅣA		95－4S面上
W325	服飾具	下駄	11.3	10.0	1.3	ⅦC		95－4面
W326	服飾具	下駄	10.3	8.2	2.6	XⅥ	SD74001	
W327	服飾具	下駄	10.6	9.3	1.9	Ⅷ		95－4面まで
W328	服飾具	下駄	10.5	8.9	1.9	XⅣ	SD68001	
W329	服飾具	下駄	11.9	9.3	2.6	ⅥC	SD54002	
W330	服飾具	下駄	10.4	8.5	2.4	XⅥ	SD74001	
W331	服飾具	下駄	12.7	8.7	3.4	Ⅷ西	SD52008	
W332	服飾具	下駄	11.5	9.3	5.0	ⅦA		95－4面まで
W333	服飾具	下駄	11.6	9.8	5.4	Ⅻ		96－8面
W334	服飾具	下駄	12.8	9.3	1.0	Ⅷ		95－3面まで
W335	服飾具	下駄	12.7	9.4	1.1	Ⅷ	SD52008	95－3面まで
W336	服飾具	下駄	12.8	(9.2)	1.4	Ⅻ	96年度　東側溝	
W337	服飾具	下駄	(7.7)	9.3	2.8	ⅨC	SD54001・SD54002間	
W338	服飾具	下駄	10.7	(4.0)	2.8	ⅢA	S54001	
W339	容器	Ⅲ	(20.2)	(3.2)	(3.8)	—		95年度　南側側溝
W340	容器	白木椀	(13.1)	6.4	6.6	Ⅲ		95年度　土塁下の堀部深掘
W341	容器	白木鉢	(14.7)	8.0	(8.0)	Ⅵ	SD54002	
W342	食事具	楊枝	10.0	0.8	0.3	ⅥA	SD52009	
W343	食事具	楊枝	11.1	0.5	0.4	Ⅸ	SD54001	
W344	食事具	楊枝	11.2	0.9	0.2	Ⅲ		95－4面より下
W345	食事具	楊枝	(13.4)	0.6	0.4	Ⅻ	SD69002	
W346	食事具	楊枝	(11.3)	0.9	0.4	Ⅵ	SD54001	
W347	食事具	楊枝	16.0	1.1	0.3	ⅨB－C	SD54001	
W348	食事具	箸	21.2	0.7	0.5	Ⅲ	SD54001	
W349	食事具	箸	21.5	0.7	0.6	XⅥ	SD75001	
W350	食事具	箸	21.6	0.7	0.6	ⅦC		95－4面
W351	食事具	箸	21.6	0.7	0.6	XⅨ	SD72005A	
W352	食事具	箸	21.2	1.0	0.5	ⅥA	SD54001	

報告番号	種類	器種	長さ (口径)	幅 (器高)	厚さ (底径)	出土地区	出土遺構	出土層位
W353	食事具	箸	21.6	0.7	3.6	XVI	SD76003	
W354	食事具	箸	21.4	0.8	0.8	Ⅲ		95－4面より下
W355	食事具	箸	21.9	0.7	0.6	ⅦA		95－4面まで
W356	食事具	箸	22.1	0.7	0.5	ⅢC		95－3面～95－4面
W357	食事具	箸	22.4	0.6	0.5	ⅦC		95－4面まで　95－4a･4k中
W358	食事具	箸	22.8	0.7	0.6	XI		96年度　西側溝
W359	食事具	箸	22.9	0.8	0.8	XI		96年度　西側溝
W360	食事具	箸	23.6	0.8	0.5	Ⅷ		95－4面まで
W361	食事具	箸	23.4	0.6	0.7	XII	SD69002	
W362	食事具	箸	23.1	0.7	0.5		SD54001	
W363	食事具	箸	23.2	0.8	0.4	XII	SD68001	
W364	食事具	箸	23.3	0.7	0.6	XII	SD69002	
W365	食事具	箸	23.2	0.7	0.5	Ⅲ－Ⅵ	SD54001	
W366	食事具	箸	23.9	1.1	1.0	ⅢA	SD54001	
W367	食事具	箸	25.0	0.8	0.4	IX		95－5面まで
W368	食事具	箸	25.0	0.7	0.6	ⅥA	SD54001	
W369	食事具	箸	21.6	0.7	0.5	XVI	SD72001	
W370	食事具	箸	25.4	0.9	0.8	ⅥD	SD54001	
W371	食事具	箸	25.0	0.8	0.4	IX		95－5面まで
W372	食事具	箸	26.1	0.7	0.6	—		95－4面まで
W373	食事具	箸	25.1	0.7	0.7	ⅧC	SD54001	
W374	食事具	箸	25.5	0.7	0.4	Ⅲ		95－4面まで
W375	食事具	箸	26.1	0.9	0.8	Ⅲ	SD54001	
W376	食事具	箸	26.1	0.7	0.6	—		96－4面まで
W377	食事具	箸	26.3	0.7	0.5	—		96－5面まで
W378	食事具	箸	27.5	0.7	0.7	XIX	SD72005	
W379	食事具	箸	26.8	0.8	0.5	ⅥC	SD54002	
W380	食事具	箸	27.9	0.9	0.6	XII	96年度　東側溝	
W381	食事具	箸	21.2	1.0	0.5	ⅥA	SD54001	
W382	食事具	箸	30.0	0.8	0.6	Ⅶ	SD68202	
W383	食事具	箸	28.8	1.0	0.8	ⅦD	SD52008	
W384	食事具	箸	26.5	1.3	0.8	ⅦA		95－4面
W385	食事具	小かまぼこ板	10.6	1.4	0.3	IX		95－5面（95－5S）まで
W386	食事具	小かまぼこ板	10.7	1.3	0.2	IX		95－5面（95－5S）まで
W387	食事具	小かまぼこ板	15.5	1.6	0.3	IX		95－5面（95－5S）まで
W388	食事具	小かまぼこ板	1.7	1.9	0.3	Ⅷ		95－4面まで
W389	食事具	小かまぼこ板	17.1	1.9	0.3	Ⅷ		95－2面＋1まで
W390	食事具	小かまぼこ板	17.1	1.7	0.2	Ⅷ		95－4面まで
W391	食事具	小かまぼこ板	18.0	1.8	0.3	ⅦC		95－4面まで
W392	食事具	小かまぼこ板	17.6	1.9	0.3	ⅦA		95－4a面
W393	食事具	小かまぼこ板	16.9	1.9	0.3	ⅦC		95－4面まで
W394	食事具	小かまぼこ板	16.2	1.8	0.3	ⅢD		95年度　北側側溝
W395	食事具	小かまぼこ板	17.3	1.8	0.2	Ⅶ	SD52008	
W396	食事具	小かまぼこ板	16.9	2.0	0.3	ⅢA	SD54001	
W397	食事具	小かまぼこ板	17.9	1.8	0.4	ⅣB		95年度　中央部断割り
W398	食事具	小かまぼこ板	16.8	2.0	0.3	Ⅷ		95－4面まで
W399	食事具	小かまぼこ板	17.2	1.9	0.2	Ⅷ		95－4面まで
W400	食事具	小かまぼこ板	17.2	2.0	0.3	ⅦC		95－4面まで
W401	食事具	小かまぼこ板	17.4	1.9	0.3	ⅦA		95－3面
W402	食事具	小かまぼこ板	17.0	1.9	0.2	Ⅷ		95－3面
W403	食事具	小かまぼこ板	17.4	1.9	0.3	ⅦA		95－3面
W404	食事具	小かまぼこ板	17.8	2.0	0.4	ⅦA		95－3面
W405	食事具	小かまぼこ板	17.2	2.0	0.2	Ⅶ－Ⅷ		95－4面
W406	食事具	小かまぼこ板	17.4	2.0	0.3	ⅦD		95－4面
W407	食事具	小かまぼこ板	17.5	1.9	0.2	Ⅶ－Ⅷ		95－4面
W408	食事具	小かまぼこ板	17.3	1.8	0.3	XVI	SD74001	
W409	食事具	小かまぼこ板	16.9	1.8	0.3	Ⅷ		95－4面まで
W410	食事具	小かまぼこ板	17.1	2.1	0.3	IX		95－5面まで
W411	食事具	小かまぼこ板	17.7	1.9	0.4	ⅥA	SD52008	
W412	食事具	小かまぼこ板	16.4	1.9	0.3	Ⅷ	粘土盛土部分	95年度
W413	工具	小かまぼこ板	17.7	1.8	0.3	Ⅷ		95－2面＋1まで
W414	食事具	小かまぼこ板	17.9	1.8	0.3	ⅦA		95－4面まで
W415	食事具	小かまぼこ板	18.7	2.2	0.3	ⅥD－A	SD54001	
W416	食事具	小かまぼこ板	14.8	1.9	0.3	Ⅶ－Ⅷ		95－4面
W417	食事具	小かまぼこ板	16.1	1.8	0.4	Ⅶ－Ⅷ		95－4面
W418	食事具	小かまぼこ板	14.5	1.6	0.3	ⅦA	SD52008下層	95－3面
W419	食事具	小かまぼこ板	14.2	1.8	0.4	ⅦA		95－3面
W420	食事具	小かまぼこ板	(13.2)	1.8	0.3	ⅦA	SD54004	
W421	食事具	小かまぼこ板	(10.6)	1.8	0.4	Ⅷ		95－4面まで
W422	食事具	杓子	(37.8)	11.1	1.7	XⅧ－XVI	SD74001・SD76003	
W423	食事具	切匙	14.9	1.9	0.3	ⅦC		95－4面まで
W424	食事具	切匙	14.0	2.2	0.3	Ⅷ		95－4面
W425	食事具	切匙	20.4	1.8	0.3	ⅥB		95－3面
W426	食事具	切匙	16.9	2.4	0.4	ⅧA		95－3・4面
W427	食事具	切匙	18.4	2.1	0.4	Ⅶ－Ⅷ		95－4面
W428	食事具	切匙	18.0	1.6	0.4	ⅦC		95－4面まで
W429	食事具	切匙	(18.5)	(2.9)	0.2	Ⅷ		95－5面まで
W430	食事具	切匙	31.0	3.3	0.2	Ⅶ－Ⅷ		95－4面
W431	食事具	切匙	28.2	3.3	0.3	ⅥA		95－3面
W432	食事具	切匙	28.4	3.4	0.6	Ⅶ－Ⅷ		95－4面
W433	食事具	切匙	31.7	2.7	0.4	IX		95－5面
W434	食事具	切匙	30.1	3.7	0.5	ⅦA		95－3面
W435	食事具	切匙	17.4	2.3	0.5	ⅦA		95－3面
W436	食事具	切匙	21.7	4.6	0.6	IXA		95－3面まで
W437	食事具	切匙	(18.5)	2.6	0.4	ⅦA		95－3面
W438	食事具	切匙	(21.0)	3.8	0.4	ⅦA	SD54004	
W439	食事具	切匙	(11.1)	2.6	0.2	Ⅷ	SD52008	95－3面まで
W440	食事具	切匙	18.0	2.5	0.4	ⅦA		95－4面まで

報告番号	種類	器種	長さ（口径）	幅（器高）	厚さ（底径）	出土地区	出土遺構	出土層位
W441	食事具	切匙	28.3	3.0	1.0	ⅦC		95－4面まで
W442	食事具	切匙	28.0	3.3	0.5	ⅦA		95－4面まで
W443	食事具	切匙	26.0	3.8	0.4	ⅦA	SD54004	
W444	食事具	切匙	30.8	3.9	0.5	ⅦA	SD52008	
W445	食事具	切匙	30.9	3.8	0.4	Ⅶ－Ⅷ	95年度	黒色腐植土中
W446	食事具	切匙	(29.8)	2.9	0.3	XⅧ－XX	SD75001	
W447	食事具	切匙	28.2	3.5	0.7	Ⅷ		95－4面まで
W448	食事具	切匙	32.3	3.3	0.4	ⅦA	SD52008	
W449	食事具	切匙	17.0	3.2	0.2	—	95年度	黒色腐植土中
W450	食事具	切匙	20.7	2.3	0.3	Ⅷ		95－4面まで
W451	食事具	切匙	30.0	3.0	0.3	ⅦA	SD54004	
W452	食事具	切匙	28.2	2.6	0.5	Ⅷ		95－4面まで
W453	食事具	切匙	29.4	3.7	0.3	ⅦA		95－3面
W454	食事具	切匙	28.2	3.8	0.5	ⅦA	SD54004	
W455	食事具	切匙	28.2	3.8	0.5	ⅦA		95－4面まで
W456	食事具	切匙	33.7	3.9	0.4	ⅢA	SD52008	
W457	食事具	切匙	28.6	3.9	0.8	ⅢA	SD54001	
W458	食事具	切匙	(14.6)	3.4	0.4	Ⅻ	SD69002	
W459	食事具	切匙	16.8	2.1	0.4	Ⅵ	SD54001	
W460	食事具	切匙	18.8	2.6	0.4	ⅤB		95－5面まで
W461	食事具	切匙	30.9	3.7	0.8	ⅢB	SD54001	
W462	食事具	切匙	28.0	3.5	0.6	ⅦA	SD54004	
W463	食事具	切匙	35.3	3.5	0.8	XⅧ－XX	SD75001	
W464	食事具	切匙	26.7	5.1	0.4	ⅦA		95－5面以下
W465	食事具	切匙	(13.2)	5.3	0.7	XⅣ	SD69002	
W466	食事具	切匙	32.5	5.0	1.0	Ⅶ南西半		95－3面
W467	食事具	切匙	22.4	4.4	0.3	Ⅷ		95－4面
W468	食事具	切匙	(9.7)	3.4	0.7	ⅣA		95－5面
W469	食事具	杓文字	8.2	2.6	0.3	ⅣA		95－5面まで
W470	食事具	杓文字	(10.1)	2.9	0.4	XIX		97－4面まで
W471	食事具	杓文字	11.7	3.3	0.3	ⅣC	SD52002	
W472	食事具	杓文字	13.8	3.5	0.3	Ⅰ		95－2面まで
W473	食事具	杓文字	13.6	3.8	0.4	ⅥA	SD54001	
W474	食事具	杓文字	23.2	7.0	0.7	X		95年度　撹乱
W475	食事具	杓文字	28.2	8.2	0.9	ⅣA	SD54001	
W476	食事具	杓文字	25.2	(6.1)	1.0	ⅧB		95－5面以下
W477	食事具	杓文字	16.6	6.1	1.0	ⅢC	SD51005下層	95－2～3面
W478	食事具	杓文字	13.0	5.6	0.7	ⅣC		95－5面
W479	食事具	杓文字	16.6	3.8	1.0	ⅥA	SD54001	
W480	食事具	杓文字	(13.4)	8.7	0.9	ⅦA		95－3面
W481	食事具	杓文字	14.5	7.7	0.5	Ⅷ		95－3面
W482	食事具	杓文字	27.7	6.5	0.7	ⅥC	SD54002	
W483	食事具	杓文字	30.3	9.0	0.8	ⅥC	SD54002	
W484	食事具	杓文字	40.4	15.4	1.2	ⅦA－D	95年度　土手除去時	
W485	食事具	杓文字	51.6	(12.5)	1.7	ⅣB		95－4面まで
W486	食事具	杓文字	55.9	8.3	1.2	—	95年度	
W487	食事具	俎板	27.9	23.3	1.5	ⅥB		95－4面まで
W488	食事具	俎板	34.0	(13.0)	1.2	Ⅷ		95－4面まで
W489	食事具	俎板	30.3	11.3	1.8	XⅧ	SD74001墨書土師器Ⅲ集中部	
W490	食事具	俎板	31.9	11.1	0.9	XV－XⅦ－IX		97年度2面まで
W491	容器	折敷	11.1	6.0	0.3	Ⅱ		95－5面まで
W492	容器	折敷	7.7	8.1	0.4	ⅦC	SD54001最上層	
W493	容器	折敷	10.1	(8.4)	0.3	ⅦC		95－4面まで
W494	容器	折敷	27.5	16.1	3.1	XⅧ	SD75001墨書土器C群	
W495	容器	折敷	34.2	14.9	0.7	Ⅱ		95－4面＋1
W496	容器	折敷	39.4	15.0	0.7	ⅥA		95－3面より下
W497	容器	折敷（亀甲）	(6.4)	12.9	0.2	ⅦC		95－4面まで
W498	容器	折敷（亀甲）	13.3	(10.5)	0.2	Ⅲ	SD54001	越前擂鉢周辺
W499	容器	折敷（亀甲）	(13.6)	12.2	0.3	Ⅸ	SD54001	
W500	容器	折敷（亀甲）	(8.2)	13.6	0.2	ⅦC		95－4面まで
W501	容器	折敷（亀甲）	12.9	(8.5)	0.2	Ⅷ		95－4面まで
W502	容器	折敷（亀甲）	12.8	(5.5)	0.2	Ⅷ		95－4面まで
W503	容器	折敷	10.0	8.5	0.2	ⅦC		95－4面まで
W504	容器	折敷	9.6	9.6	0.2	ⅢA	SD54001	95－4面まで
W505	容器	折敷	9.8	8.9	0.2	ⅥA	SD54001	
W506	容器	折敷	9.6	9.7	0.4	ⅦC		95－4面まで
W507	容器	折敷	10.1	(7.8)	0.2	Ⅷ		95－4面まで
W508	容器	折敷	10.2	(7.4)	0.2	Ⅷ		95－4面まで
W509	容器	折敷	9.8	9.7	0.2	Ⅲ－Ⅵ	SD54001	
W510	容器	折敷	10.6	10.0	0.2	ⅦC		95－4面まで
W511	容器	折敷	10.9	11.3	0.2	ⅦD	折敷群	95－4面
W512	容器	折敷	10.9	(8.0)	0.3	ⅦD	折敷群	95－4面
W513	容器	折敷	10.8	10.9	0.2	ⅦD	折敷群	95－4面
W514	容器	折敷	10.8	11.1	0.2	ⅦD	折敷群	95－4面
W515	容器	折敷	11.0	11.5	0.7	ⅦD	SD54004	95－4面
W516	容器	折敷	11.0	(7.8)	0.3	ⅣD	SD54004	
W517	容器	折敷	10.8	(10.2)	0.2	ⅦC		95－4面まで
W518	容器	折敷	10.8	(11.0)	0.2	ⅦD	折敷群	95－4面
W519	容器	折敷	11.1	(9.2)	0.2	ⅦD	折敷群	95－4面
W520	容器	折敷	17.2	(17.0)	0.5	ⅥD	SD54001	
W521	容器	折敷	22.3	12.1	0.3	ⅦC		95－4面まで
W522	容器	折敷	23.6	(13.6)	0.2	Ⅷ		95－4面まで
W523	容器	折敷	23.4	(8.0)	0.3	Ⅷ		95－2面
W524	容器	折敷	25.9	(6.8)	0.3	XIX	SD72004A	
W525	容器	折敷	26.0	(5.5)	0.2	XⅧ	SD74001　墨書土器B群	
W526	容器	折敷	26.0	(11.9)	0.5	ⅣB		95－4面
W527	容器	折敷	26.4	(7.9)	0.4	ⅢB	SD54001	
W528	容器	折敷	26.9	(13.3)	0.5	Ⅵ	SD54001	

報告番号	種類	器種	長さ (口径)	幅 (器高)	厚さ (底径)	出土地区	出土遺構	出土層位
W529	容器	折敷	26.8	(15.8)	0.4	Ⅵ	SD54001	
W530	容器	折敷	30.2	(19.7)	0.3	Ⅷ		95－4面まで
W531	容器	折敷	26.1	9.7	0.3	Ⅰ		95－5面まで
W532	容器	折敷	(12.4)	10.7	0.2	ⅣB		95－4面まで
W533	容器	折敷	30.6	(9.3)	0.7	ⅨC		95－3面～5面
W534	容器	折敷	31.7	(7.8)	0.7	ⅨC		95－3面～5面
W535	容器	折敷	31.9	(16.5)	0.6	Ⅸ		95－5面まで
W536	容器	折敷	32.4	(12.2)	0.5	ⅩⅧ	SD72001	
W537	容器	折敷	32.4	6.8	0.8	ⅥB	SD54002	
W538	容器	折敷	32.6	(10.9)	0.7	Ⅳ		95年度　サブトレ西
W539	容器	折敷	30.7	33.0	0.3	ⅧD		95－4面まで
W540	容器	折敷	(34.0)	33.1	0.6	ⅩⅥ	SD62001	
W541	容器	折敷	33.9	33.6	0.7	ⅩⅥ	SD52001	
W542	容器	折敷	33.9	(15.0)	0.7	ⅨB－C		95－4面以下
W543	容器	折敷	33.5	(6.3)	0.8	Ⅷ		95－4面まで
W544	容器	折敷	33.5	34.1	1.0	Ⅵ	SD54001	
W545	容器	折敷	(34.0)	34.0	0.7	ⅧA		95－4面まで
W546	容器	折敷	33.8	(19.5)	0.7	Ⅷ		95－4面まで
W547	容器	折敷	33.7	(18.2)	0.7	ⅧD	SD52008	
W548	容器	折敷脚部	7.7	3.3	0.3	ⅢB	SD54001	腐植土中
W549	容器	折敷脚部	8.3	3.8	0.6	ⅢB	SD54001	
W550	容器	折敷脚部	8.2	3.6	0.7	Ⅲ	SD54001	
W551	容器	折敷脚部	7.2	(2.0)	0.3	Ⅷ		95－4a層
W552	容器	折敷脚部	8.0	3.3	0.5	ⅥC	SD54002	
W553	容器	折敷脚部	12.8	4.4	1.5	Ⅲ－Ⅵ	SD54001	
W554	容器	折敷脚部	7.8	19.4	0.8	ⅤA		95－5面まで
W555	容器	折敷脚部	23.8	8.7	0.9	ⅨD	SD53010	95－3面まで
W556	容器	折敷脚部	23.8	8.8	0.8	ⅨD	SD53010	95－3面
W557	容器	折敷脚部	27.4	4.8	0.8	Ⅲ－Ⅵ		95－3面以下
W558	容器	折敷脚部	27.4	4.8	0.9	Ⅲ－Ⅵ		95－3面以下
W559	容器	折敷脚部	28.7	6.6	0.9	ⅢC	SD54002	
W560	容器	折敷脚部	28.8	5.4	0.7	Ⅸ		95－5面まで
W561	容器	折敷脚部	30.5	5.0	1.6	ⅦA		95－5面まで
W562	容器	折敷脚部	31.7	5.0	1.0	Ⅲ	SD54001	
W563	容器	折敷脚部	31.7	5.1	0.8	Ⅸ		95－5面まで
W564	容器	折敷脚部	32.7	6.4	1.7	ⅦA	SD52008	
W565	容器	折敷脚部	33.7	6.4	0.6	ⅥA		95－3面以下
W566	容器	折敷脚部	33.9	6.5	0.8	ⅥB		95－4面
W567	容器	折敷脚部	36.8	5.7	0.9	Ⅷ		95－4面まで
W568	容器	折敷脚部	34.0	6.5	0.6	ⅥB		95－3面より下
W569	容器	三宝脚部	16.2	16.5	16.4	ⅩⅧ－ⅩⅩ	SD75001　墨書土器E群周辺	
W570	容器	三宝脚部	(1.6)	(11.6)	0.2	ⅩⅥ－ⅩⅧ	SD65001	
W571	容器	三宝脚部	(7.6)	(18.0)	0.5	ⅩⅥ－ⅩⅧ	SD75001	
W572	容器	三宝脚部	12.0	17.9	0.4	ⅨA	SD54001	
W573	容器	三宝脚部	8.1	14.7	0.4	Ⅲ		95年度　西側側溝
W574	容器	三宝脚部	(14.8)	10.5	0.3	Ⅷ		95－4面まで
W575	容器	三宝脚部	14.9	12.9	0.2	ⅧA	SD52008	
W576	容器	曲物の蓋	8.4	4.6	0.7	ⅩⅧ	SD72001	
W577	容器	曲物の蓋	7.4	7.4	1.2	ⅢB	SD54001	
W578	容器	曲物の蓋	7.8	7.6	0.7	ⅢB	SD54001最上層	
W579	容器	曲物の蓋	6.1	6.1	0.3	ⅤA		96－5面まで
W580	容器	曲物の蓋	7.7	7.0	0.8	ⅫⅠ	SD68001	
W581	容器	曲物の蓋	(8.9)	11.9	0.7	ⅫⅣ	SD68001	
W582	容器	曲物の蓋	15.8	(5.4)	0.4	ⅤC		96－5面まで
W583	容器	曲物の蓋	17.6	(5.1)	0.5	ⅥB	SD54002	
W584	容器	曲物の蓋	17.7	10.9	0.2	ⅦA	SD54004	
W585	容器	曲物の蓋	19.9	10.6	1.8	Ⅲ		95年度　西側側溝
W586	容器	鍋類の蓋	12.0	11.6	0.9	ⅫⅢ		96－4面まで
W587	容器	鍋類の蓋	(15.1)	(4.1)	0.6	ⅫⅠ	96年度　土手除去時	
W588	容器	鍋類の蓋	32.2	(18.2)	1.3	Ⅸ－Ⅵ	96年度　東西サブトレ東側	
W589	容器	曲物の底板	4.2	4.3	0.5	ⅦA		95－4a面まで
W590	容器	曲物の底板	9.0	(5.1)	0.4	ⅦA	SD52008下層	95－3面
W591	容器	柄杓の身	(7.9)	5.4	7.9	Ⅵ	SD54001	
W592	容器	曲物の側板	7.4	3.6	7.4	ⅫⅠ	SD58002	96－8面まで
W593	容器	曲物の底板	9.4	9.2	1.0	ⅩⅤ	96年度	
W594	容器	曲物の底板	11.0	11.3	0.8	ⅣB		95－4～5面
W595	容器	曲物の底板	11.6	11.6	0.7	ⅫⅠ	SD68001	
W596	容器	曲物の底板	13.0	12.8	0.9	ⅣD	SD54004	
W597	容器	曲物の底板	13.8	13.8	0.8	ⅫⅣ	SD68001	
W598	容器	曲物	(14.7)	9.8	(14.7)	ⅥA	SD54001	
W599	容器	曲物	14.7	6.0	15.0	ⅫⅠ	SD68001	
W600	容器	曲物の底板	21.0	21.3	1.7	ⅥB		95－2～3面上層
W601	容器	曲物の底板	(28.7)	(5.8)	0.7	ⅪⅠ		96－4面
W602	容器	曲物	5.3	0.9	5.0	Ⅵ	SD54001	
W603	容器	曲物	5.4	4.8	5.4	ⅥA	SD54001	
W604	容器	曲物の底板	11.8	8.6	0.4	ⅤC		95－5面まで
W605	容器	曲物の底板	10.0	8.9	0.6	ⅣB		95－4面（95－4a）
W606	容器	曲物の身or蓋	44.6	(13.7)	1.1	ⅣB	SD52002	95－3＋1面まで
W607	容器	行器の底板	20.5	(7.0)	0.9	ⅤB		95－5面
W608	容器	行器の底板	(28.7)	(7.8)	1.0	ⅦA	SD52008	
W609	容器	蒸籠の底板	18.3	4.3	0.8	ⅨA	SD54001	
W610	容器	行器の脚	12.0	4.2	0.7	ⅩⅧ	SD72001	
W611	容器	行器の脚	32.8	6.4	1.7	Ⅷ		95－4面まで
W612	容器	柄杓	8.4 28.5	5.5 1.8	(8.9) 0.9	Ⅷ		95－4面まで
W613	容器	柄杓の身	13.3	10.9	13.2	ⅣA	95年度　集石部	
W614	容器	柄杓	11.6 (11.6)	5.2 1.3	11.6 1.3	Ⅷ		95－4面まで

報告番号	種類	器種	長さ (口径)	幅 (器高)	厚さ (底径)	出土地区	出土遺構	出土層位
W615	容器	柄杓の身	12.8	6.2	12.0	ⅥB	SD54003	
W616	容器	柄杓	15.0 (15.0)	10.2 2.2	14.7 1.3	Ⅻ	SD68002	
W617	容器	柄杓	13.5 55.7	10.8 2.8	13.5 1.4	ⅦA		96－3a層
W618	容器	柄杓の柄	55.0	2.0	1.5	Ⅻ		95－4面まで
W619	容器	柄杓の柄	57.8	2.9	1.5	Ⅻ	SD67002	
W620	容器	柄杓の柄	60.6	2.6	1.5	ⅣC		95－4面
W621	容器	柄杓の柄	61.4	2.3	1.2	ⅦA		95－4面まで　焼土下の腐植土
W622	容器	柄杓の柄	64.9	3.4	1.9	ⅣA	SD54004	
W623	容器	桶の側板	10.8	5.3	0.8	ⅣA		95－5面まで
W624	容器	桶の側板	(41.8)	12.9	(38.5)	ⅣA		95－3面＋1
W625	容器	桶の側板	69.0	15.9	62.0	ⅦA	95－4a層	95－4面まで
W626	容器	桶の側板	(30.0)	14.1	(24.4)	XX	SD72017	
W627	容器	桶の側板	(28.3)	15.9	(24.4)	ⅦA		97年度　南側の東西畦
W628	容器	桶の側板	15.3	4.3	0.8	ⅦA		97－4面
W629	容器	桶の側板	17.6	6.5	1.3	Ⅲ	SD54001	
W630	容器	桶の側板	15.1	7.7	1.2	XⅧ		95－2面まで
W631	容器	桶の側板	(39.8)	19.9	(32.1)	ⅤA		95－5面まで
W632	容器	桶の側板	25.0	9.5	1.5	ⅣC		95－4面まで
W633	容器	桶の側板	24.8	7.4	1.2	XⅧ		97－2面
W634	容器	桶の側板	25.1	6.2	1.1	XⅧ	SD72001	
W635	容器	桶の側板	24.1	5.9	1.3	ⅣC		95－4面
W636	容器	桶の側板	(40.8)	25.7	(32.1)	Ⅷ		95－4面まで
W637	容器	桶の側板	29.9	8.1	0.9	ⅢC	SD54002	
W638	容器	手桶の一部	(24.7)	7.3	0.8	XⅣ	SD67001	
W639	容器	手桶の一部	29.1	3.8	1.0	ⅦB		96－5面以下
W640	容器	桶の底板	29.6	(16.5)	1.6	ⅣC		95－4面まで
W641	容器	桶の底板	30.7	(8.9)	1.7	ⅥA	SD54001	
W642	容器	桶の底板	31.4	(14.8)	2.0	ⅣA		95－4面まで
W643	容器	桶の底板	44.7	(25.3)	1.8	Ⅷ		95－4面まで
W644	容器	桶の底板	64.7	6.8	2.0	ⅢC		95－4面まで
W645	食事具	鍋蓋の把手	24.7	2.7	1.1	ⅢC		95－4面まで
W646	容器	鍋蓋の把手	(10.9)	4.0	1.5	XⅧ－XX	SD75001墨書土器E群	
W647	容器	鍋蓋の把手	4.9	13.5	1.3	ⅥC	SD52009集石以下	
W648	容器	鍋蓋の把手	39.0	3.8	1.4	ⅥC	SD52009集石以下	
W649	容器	鍋蓋の把手	42.4	2.4	4.5	ⅥC	SD54002	
W650	容器	鍋蓋の把手	(13.8) 20.1	1.5 1.5	1.0 1.1	ⅥC		95－1面上層
W651	容器	手桶の把手	29.8	2.9	1.3	ⅢA		95－3面まで
W652	容器	手桶の把手	36.7	3.2	1.4	Ⅲ	SD54002	
W653	容器	手桶の把手	30.7	2.8	2.1	XⅨ	SD72005	
W654	容器	手桶の把手	40.1	4.8	1.5	Ⅳ		95－3面より上
W655	容器	手桶の把手	42.0	4.7	1.4	ⅦA		95－3面整地層中
W656	容器	栓	10.3	2.4	2.3	XⅧ	SD72001	
W657	容器	栓	11.5	2.7	2.4	ⅥA	SD54001	
W658	容器	栓	7.8	2.7	2.6	Ⅷ		95－4面まで
W659	容器	栓	9.3	2.5	2.5	ⅢB	SD54001	95－4面
W660	容器	栓	6.7	2.7	2.4	ⅦA	SD52008	
W661	容器	栓	11.2	3.3	2.5		SD52008	
W662	容器	栓	(13.1)	2.8	3.0	XⅢ		96－4面まで
W663	容器	箱物の部材	11.2	(2.4)	0.6	Ⅲ－Ⅵ	SD54001	
W664	容器	箱物の部材	12.3	3.9	0.5	ⅤA		95－3面まで
W665	容器	枡	13.6	14.3	6.3	Ⅷ		95－3～4面
W666	容器	枡	18.4	18.9	9.3	Ⅰ		95－5面まで
W667	容器	箱物の部材	19.6	8.3	0.9	Ⅵ	SD54001	
W668	容器	箱物の部材	18.2	5.7	0.8	Ⅸ		95－5面
W669	容器	箱物の部材	27.7	(8.7)	0.6	Ⅷ		95－5面まで
W670	容器	箱物の部材	33.1	(5.6)	0.7	ⅤB－Ⅷ		95－4面以下
W671	容器	箱物の部材	38.3	(8.0)	0.7	Ⅰ		95－4＋1面まで
W672	容器	箱物の部材	4.2	8.4	0.8	ⅨA		95－3面まで
W673	容器	箱物の部材	59.8	9.7	12.0	ⅦC	SD52008	
W674	容器	箱物の部材	13.9	4.4	4.6	ⅣD		95－3面
W675	容器	槽	65.5	13.3	32.1	—		96－8＋2面
W676	容器	槽	54.5	18.6	8.0	XⅥ	SD72001以下	
W677	容器	槽	(49.7)	11.3	(19.4)	ⅣB	SD74001	
W678	容器	槽	52.0	21.4	16.4	Ⅷ		95－3面
W679	容器	槽	(47.6)	(20.2)	12.1	ⅣA		95－4面
W680	容器	槽	44.0	25.2	9.0	ⅣA		95－5面
W681	籠編み物類	笊類	—	—	—	—	SD68001	
W682	籠編み物類	笊類	—	—	—	—	SD69001	
W683	籠編み物類	笊類	—	—	—	—		95－4面
W684	籠編み物類	笊類	—	—	—	—	SD64002	
W685	籠編み物類	笊類	—	—	—	—		96年度
W686	籠編み物類	笊類	—	—	—	—	SD64002	
W687	籠編み物類	笊類	—	—	—	—		95年度
W688	籠編み物類	箕類	—	—	—	—	SD54001	
W689	籠編み物類	箕類	—	—	—	—	SD54001	
W690	籠編み物類	箕類	—	—	—	ⅣB	SD54001	
W691	籠編み物類	籠類	—	—	—			95－4面
W692	籠編み物類	畳類	—	—	—			95－2面
W693	縄類	縄類	13.7	1.3	1.3	Ⅵ	SD54001	
W694	縄類	縄類	(8.3)	1.4	1.6	Ⅷ		95－3面以下
W695	縄類	縄類	(31.7)	1.3	1.1	Ⅷ		95年度　盛土（粘土）部内
W696	遊戯具	羽子板	20.9	7.7	0.8	Ⅵ	SD54002	
W697	遊戯具	羽子板	22.1	7.8	1.1	XⅨ		97－2面まで
W698	遊戯具	羽子板	23.0	(7.3)	0.7	Ⅷ	SD52008大溝	上層
W699	遊戯具	羽子板	24.2	8.5	0.9	ⅨC	SD51005	

報告番号	種類	器種	長さ (口径)	幅 (器高)	厚さ (底径)	出土地区	出土遺構	出土層位
W700	遊戯具	羽子板	23.1	8.6	1.0	ⅥC	SD54002下半	
W701	遊戯具	羽子板	18.3	10.8	0.7	ⅣA		95－4面まで
W702	遊戯具	羽子板	28.9	10.4	1.0	ⅥC	SD54002	
W703	遊戯具	羽子板	(26.8)	(11.4)	0.7	ⅥD	SD54001	
W704	遊戯具	羽子板	33.8	(5.7)	0.8	ⅥA	SD54001	
W705	遊戯具	羽子板	31.1	(7.7)	1.0	XX		97年度　下層堀内
W706	遊戯具	打杖球	(4.5)	4.8	3.8	Ⅱ		95－5面まで
W707	遊戯具	将棋駒	3.7	1.4	0.9	ⅣD	95－集石部	95－4面
W708	祭祀具	彩色木彫猿	6.0	2.4	2.1	ⅧA	SD52008	95－3面対応
W709	祭祀具	墨書絵馬	(3.2)	7.0	0.2	ⅥA－D	SD54001	
W710	祭祀具	墨書絵馬	(4.4)	(4.1)	0.2	Ⅲ－Ⅵ	SD54001	
W711	祭祀具	人形	24.8	1.8	1.6	Ⅻ	SD68002	96－8面
W712	祭祀具	人形	11.6	3.3	3.2	Ⅰ		95－1面以下
W713	祭祀具	人形	10.1	1.9	0.3	Ⅷ	SD52008	95－3面まで
W714	祭祀具	鳥形	(5.4)	(3.4)	0.3	ⅧD	SD52008	
W715	祭祀具	鳥形	12.1	1.8	0.3	ⅣD		95－3面
W716	祭祀具	鳥形	15.0	1.5	0.6	ⅤB		95－4面
W717	祭祀具	形代	11.9	1.2	0.1	Ⅰ		95－2a面まで
W718	祭祀具	形代	12.2	(1.9)	0.2	Ⅷ		95－3＋1～4面
W719	祭祀具	形代	(12.9)	2.2	0.2	Ⅷ		95－4面まで
W720	祭祀具	形代	(6.9)	2.8	0.3	ⅩⅢ－ⅩⅣ	SD54001	
W721	祭祀具	刀形	18.2	1.4	1.0	Ⅲ	SD54001	
W722	祭祀具	刀形	18.8	1.1	0.8	Ⅷ		95－3面まで
W723	祭祀具	刀形	(14.7)	(2.1)	0.5	ⅧA	SD54004	
W724	祭祀具	刀形	16.1	1.5	0.2	ⅧC		95－4a,95－4k
W725	祭祀具	刀形	17.3	1.2	0.2	ⅧA	SD54004	
W726	祭祀具	刀形	(16.4)	2.0	0.4	Ⅶ－Ⅷ		95－4a　腐植土中
W727	祭祀具	刀形	17.5	2.4	0.4	ⅢA	SD54001	
W728	祭祀具	刀形	17.9	2.1	0.2	Ⅷ		95－4面まで
W729	祭祀具	刀形	17.5	2.8	0.4	ⅢB	SD54001	
W730	祭祀具	刀形	21.6	2.1	0.4	Ⅲ	SD54001	
W731	祭祀具	刀形	19.7	1.9	0.3	ⅧA	SD54004	
W732	祭祀具	刀形	21.2	2.4	0.6	ⅧA	95年度　中央部断割り	
W733	祭祀具	刀形	25.5	2.0	0.3	ⅧC		95－4面まで
W734	祭祀具	刀形	28.9	2.6	0.6	ⅢA	SD54001	
W735	祭祀具	刀形	32.8	3.1	0.3	ⅥA		95－3面以下
W736	祭祀具	刀形	30.5	3.0	0.9	ⅧC		95－4面まで
W737	祭祀具	刀形	14.8	2.2	0.3	ⅢB	SD54001	
W738	祭祀具	陽物	35.1	4.3	2.4	ⅥD	SD54002	
W739	祭祀具	陽物	19.0	3.6	3.5	ⅧD－ⅧC		95－3面以下
W740	祭祀具	陽物	7.7	2.7	2.6	—		95－4面まで
W741	祭祀具	陽物	20.6	6.5	4.8	ⅩⅣ	SD68001	
W742	祭祀具	陽物	21.5	4.5	4.3	ⅧD	95年度　土手除去時	
W743	祭祀具	陽物	20.3	5.8	5.9	ⅥC	SD54002	
W744	祭祀具	陽物	21.5	4.6	4.5	ⅢA		95年度　北側側溝
W745	祭祀具	陽物	17.4	7.3	5.7	Ⅰ		95－5面まで
W746	祭祀具	斎串	20.2	0.3	0.3	ⅥA	SD54001	
W747	祭祀具	斎串	19.3	0.2	0.2	ⅥA	SD54001	
W748	祭祀具	斎串	(21.8)	0.2	0.2	ⅥA	SD54001	
W749	祭祀具	斎串	(19.8)	0.2	0.2	ⅥA	SD54001	
W750	祭祀具	斎串	31.2	0.2	0.2	ⅥA	SD54001	
W751	祭祀具	斎串	31.6	0.3	0.2	ⅥA	SD54001	
W752	祭祀具	斎串	31.8	0.3	0.2	ⅥA	SD54001	
W753	祭祀具	斎串	31.5	0.2	0.2	ⅥA	SD54001	
W754	建築部材	部材	(37.4)	11.9	7.7	ⅣA		95－3面
W755	建築部材	円柱	129.8	12.9	13.0	Ⅳ		95－3面
W756	建築部材	円柱	51.4	16.1	12.3	ⅤA		95－3面
W757	建築部材	円柱	62.0	14.0	13.7	ⅣA	SD52002	
W758	建築部材	円柱	71.5	23.3	20.5	Ⅱ		95－5面
W759	建築部材	円柱	77.4	13.3	13.3	ⅣA		95－5面
W760	建築部材	円桁材	90.5	10.5	9.2	ⅩⅧ	SD75001	
W761	建築部材	角柱	173.3	10.6	9.6			95－3面
W762	建築部材	角柱	55.5	11.3	9.2	ⅤB		95－2面
W763	建築部材	角柱	66.9	8.2	6.1	ⅧA		95－4面まで
W764	建築部材	角柱	(38.3)	6.3	3.9	Ⅸ		95－5面まで
W765	建築部材	角柱	52.3	13.7	13.6	Ⅵ		95－3面柱痕
W766	建築部材	角柱	34.6	13.7	12.2	ⅣA		95－3＋1面
W767	建築部材	根太	119.5 121.5	11.0 9.5	7.8 5.75	ⅧD	SB52002	95－2面
W768	建築部材	根太	70.9	12.8	4.3	ⅣA		95－3面濁灰粗砂中
W769	建築部材	根太	73.0	10.0	4.0		SD54001	
W770	建築部材	根太	76.7	9.9	4.1			95－5面まで
W771	建築部材	根太	120.2	10.6	4.0			95－4面まで
W772	建築部材	板材	53.6	12.1	3.2			95－3面
W773	建築部材	板材	111.8	12.3	2.4		SD54002	
W774	建築部材	板材	96.0	14.5	3.8		SD52008	
W775	建築部材	板材	85.9	18.9	0.9			95－4面
W776	建築部材	板材	64.8	22.5	61.0		SD65001	
W777	建築部材	板材	(38.6)	11.8	1.8	ⅥD		95－4面
W778	建築部材	板材	(41.3)	(8.8)	2.0	ⅩⅧ	SD74001墨書土師皿集中部	
W779	建築部材	板材	33.0	21.1	4.8	ⅥC	SD52009	
W780	建築部材	板材	29.3	8.7	4.4	ⅥA		95－4a面
W781	建築部材	板材	15.9	8.6	4.7	ⅨA	SD54001	
W782	建築部材	板材	(21.1)	6.9	4.5	ⅥD	SD54001	
W783	建築部材	板材	(26.5)	12.0	7.9	ⅥB		95－3面整地層中
W784	建築部材	板材	(18.7)	6.8	2.2	ⅧA	SD52008下層	95－3面対応
W785	建築部材	板材	(16.8)	6.3	6.8	ⅧD		95－4面まで
W786	建築部材	板材	16.9	4.8	4.2	Ⅻ	杭列	

報告番号	種類	器種	長さ(口径)	幅(器高)	厚さ(底径)	出土地区	出土遺構	出土層位
W787	建築部材	板材	23.3	6.6	5.2	ＸⅠ		96－3面
W788	建築部材	板材	14.9	5.1	2.3		SD54001	
W789	建築部材	板材	11.5	1.4	0.7	ⅥC	SD54002	
W790	建築部材	壁材	102.7	76.0	0.35		SD75001	
W791	建築部材	壁材	91.1	9.8	0.4		SD54001	
W792	建築部材	壁材	90.9	6.2	0.4			95－5面まで
W793	建築部材	壁材	75.1	3.0	0.3			95－4面まで
W794	建築部材	壁材	64.1	4.5	0.3			95－4面まで
W795	建築部材	建具	77.5	1.7	0.9			95－3面まで　3k層中
W796	建築部材	建具	59.6	1.4	0.8	ⅨB－C	SD54001	
W797	建築部材	建具	53.5	2.8	3.0	ⅣD		95－4面まで(95－3S)火事かたづけ土？
W798	建築部材	建具	13.6	2.5	1.8	ⅣB－C	SD52008	
W799	建築部材	建具	(15.0)	2.7	1.3	Ⅷ		95－4a中　95－4面まで
W800	建築部材	建具	(18.7)	2.2	0.8	ⅣD	SD54004	
W801	建築部材	建具	34.7	3.5	2.4	ⅣD	SD54002	
W802	建築部材	建具	(25.2)	4.3	2.8	ⅥC	SD54001	
W803	建築部材	建具	9.2	3.1	2.0	ⅧC		95－4～5面
W804	用途不明品	木札状木製品	14.0	3.3	0.2	ⅣC	SD52003	
W805	用途不明品	木札状木製品	15.5	3.2	0.3	ⅧA	SD52008下層	95－3面の溝
W806	用途不明品	木札状木製品	21.5	(12.3)	0.4	Ⅸ		95－5面（95－5S）まで
W807	用途不明品	木札状木製品	30.1	5.7	0.3	Ⅲ	SD54001	
W808	用途不明品	木札状木製品	(27.3)	4.7	0.5	Ⅲ	SD54002	
W809	用途不明品	木札状木製品	(8.1)	(2.5)	0.2	ⅥD	SD54001	
W810	用途不明品	木札状木製品	(21.3)	3.9	0.2	Ⅲ	SD54001	
W811	用途不明品	箱形加工品	7.8	5.6	5.7	ⅥA	SD52008	
W812	用途不明品	蛇尾状木製品	5.7	3.2	1.1	ⅣA		95－5面まで
W813	用途不明品	蓋状加工品	(4.8)	4.3	1.1	ⅤA		95－3面まで
W814	用途不明品	蓋状加工品	12.4	7.5	2.3	Ⅲ－Ⅵ	SD54001	
W815	用途不明品	方形加工板材	4.3	4.0	0.3	ⅥB		95－3面
W816	用途不明品	方形加工板材	5.2	5.0	0.4	ⅣB－ⅧC		95－4面・95－5面洪水砂層
W817	用途不明品	方形加工板材	6.4	6.9	0.5	ⅨA	SD54001	
W818	用途不明品	方形加工板材	2.7	1.8	0.5	ⅥC	SD54002	
W819	用途不明品	方形加工板材	6.2	4.5	0.6	Ⅻ	SD62001	
W820	用途不明品	方形加工板材	6.8	4.8	0.5	ⅧA		95－4k層
W821	用途不明品	方形加工板材	6.9	5.2	0.9	Ⅷ		95－4面まで
W822	用途不明品	方形加工板材	5.9	5.0	0.3	ⅤA		95－5面まで
W823	用途不明品	方形加工板材	7.7	5.1	0.9	95－4面まで		95－4面まで主に3面下3＋1面まで
W824	用途不明品	方形加工板材	(9.9)	(5.3)	0.6	ⅥA		95－3面
W825	用途不明品	方形加工板材	11.7	5.8	0.5	ⅥB－ⅧC		95－4面・95－5面洪水砂層
W826	用途不明品	模様をもつ加工品	37.9	1.8	0.2	ⅢB	SD53012	95－2～3面
W827	用途不明品	模様をもつ加工品	29.6	1.6	0.9	ⅣA	SD55002	95－5面
W828	用途不明品	模様をもつ加工品	22.6	(3.0)	1.4	ⅤB		95－4面
W829	用途不明品	自在形木製品	16.2	3.0	0.9	Ⅷ		95－4a中
W830	用途不明品	自在形木製品	21.2	5.3	0.8	ⅧD	SD52008	
W831	用途不明品	火処具用部材	11.6	8.0	4.5	ⅧA	SD54004	
W832	用途不明品	火処具用部材	10.6	6.9	3.7	ⅨC		95－4面まで
W833	用途不明品	火処具用部材	12.4	6.6	3.5	ⅥB		95－3面以下
W834	用途不明品	火処具用部材	22.4	15.8	5.7	ⅥC	SD54002直上	
W835	用途不明品	その他	14.7	8.0	3.5	ⅧA	SD52008	
W836	用途不明品	球状加工木片	11.8	9.6	9.3	ⅧA	SD54004	
W837	用途不明品	球状加工木片	7.2	4.7	3.1	ⅥA	SD54001	
W838	用途不明品	その他	9.5	9.0	3.2	ⅧA	SD54004	
W839	用途不明品	その他	15.7	14.4	7.0	ⅣA		95－3面＋1
W840	用途不明品	柄	160.5	5.8	3.9	ⅢD		95年度　東側側溝
W841	用途不明品	柄	138.4	3.9	3.5	ⅨA	SD54001	
W842	用途不明品	柄	66.3	1.9	1.9	Ⅸ	SD68001	
W843	用途不明品	柄	56.3	4.3	3.4	ⅣA		95－3面＋1
W844	用途不明品	柄	45.5	3.3	1.9	ⅢA	SD54001	
W845	用途不明品	柄	32.9	1.7	1.6	ⅥB	SD54001	
W846	用途不明品	柄	24.5	2.6	1.1	ⅥA－D	SD54001	
W847	用途不明品	柄	21.9	1.8	1.2	Ⅷ－Ⅷ		95年度　黒色腐植土
W848	用途不明品	柄	26.7	2.7	2.6	ⅣA		95－5面まで
W849	用途不明品	柄	(34.1)	(3.0)	1.1	ⅩⅧ		97－2面まで
W850	用途不明品	柄	10.2	2.6	1.4	ⅤB		95－3面以下　腐植土中
W851	用途不明品	柄	14.8	6.1	0.8	Ⅷ		95－4a層中
W852	用途不明品	不明	(2.8)	3.1	(2.6)	Ⅻ－ⅩⅣ	96年度　土手崩落部	
W853	用途不明品	不明	20.6	2.8	2.9	Ⅲ	SD54001	
W854	用途不明部材	用途不明	24.3	5.8	0.3	Ⅲ	95年度	
W855	用途不明部材	用途不明	22.3	5.0	0.5	Ⅺ	SD64002	
W856	用途不明部材	用途不明	22.0	5.0	0.5	Ⅺ	SD64002	
W857	用途不明部材	用途不明	23.9	4.5	0.8	Ⅷ		95－4面まで
W858	用途不明部材	用途不明	5.2	23.4	0.9	ⅥC	SD54002	
W859	用途不明部材	用途不明	16.1	7.8	5.0	ⅢA	SD54001	
W860	用途不明部材	用途不明	18.3	7.7	1.2	Ⅻ－ⅩⅣ		96－4面まで
W861	用途不明部材	用途不明	27.9	6.7	0.8	ⅢD		95年度　暗灰色シルト
W862	用途不明部材	用途不明	35.8	(4.0)	0.9	ⅨA	SD54001	
W863	用途不明部材	用途不明	20.5	6.4	1.7	ⅣD		95年度　東側溝
W864	用途不明部材	用途不明	6.6	5.2	0.7	ⅩⅣ	SD68002	
W865	用途不明部材	用途不明	16.8	6.7	0.9	Ⅲ	SD54002	
W866	用途不明部材	用途不明	31.7	8.6	1.5	Ⅵ		95－4面まで
W867	用途不明部材	用途不明	22.6	5.5	1.4	Ⅷ		95－3面下3＋1面まで
W868	用途不明部材	用途不明	(18.8)	4.1	1.2	ⅧA		95－3面　整地層中
W869	用途不明部材	用途不明	11.6	4.1	1.6	Ⅲ－Ⅳ	SD54001	
W870	用途不明部材	用途不明	15.3	11.0	1.2	Ⅵ	SD54002	
W871	用途不明部材	用途不明	26.2	5.1	2.0	ⅥA	SD54001	
W872	用途不明部材	用途不明	15.9	2.6	1.3	ⅩⅨ		97年度　腐植土直上
W873	用途不明部材	用途不明	16.5	2.7	1.3	ⅩⅧ		97年度　腐植土直上
W874	用途不明部材	用途不明	9.0	3.8	3.0	ⅧC		95－4K（95－3Sまじる）層

報告番号	種類	器種	長さ (口径)	幅 (器高)	厚さ (底径)	出土地区	出土遺構	出土層位
W875	用途不明部材	用途不明	22.9	3.9	2.3	ⅦD	SD52008	
W876	用途不明部材	用途不明	(12.7)	4.6	1.8	ⅦA	SD54002	
W877	用途不明部材	用途不明	13.9	5.8	3.4	ⅢC		
W878	用途不明部材	用途不明	(17.8)	6.1	2.8	Ⅵ	SD54001－54002間	
W879	用途不明部材	用途不明	(12.4)	7.4	3.0	Ⅷ		95－4面まで
W880	用途不明部材	用途不明	12.2	7.2	3.7	ⅥA		95－3面以下
W881	用途不明部材	用途不明	13.1	4.4	4.0	ⅦA		95－4a層中
W882	用途不明部材	用途不明	15.7	4.9	2.7	ⅥA－D	SD54001	
W883	用途不明部材	用途不明	25.5	6.0	3.7	ⅣA		95－3＋1～95－5面
W884	用途不明部材	用途不明	38.6	20.2	1.5	XⅧ－XX	SD75001	
W885	用途不明部材	用途不明	59.1	9.7	4.2	ⅣC		95－5面
W886	用途不明部材	用途不明	50.3	3.3	1.6	Ⅶ－Ⅷ		95－4面
W887	用途不明部材	用途不明	37.2	4.8	1.0	ⅤA		95－5面まで
W888	用途不明部材	用途不明	39.9	4.1	2.5	ⅦC	集石下	95－3面ヵ
W889	用途不明部材	用途不明	7.8	4.9	2.8	ⅨB－C	SD54001	
W890	用途不明部材	用途不明	(46.6)	2.6	3.7	ⅦA		95－3面　整地層中
W891	用途不明部材	用途不明	(20.1)	8.7	1.4	ⅥA		95－3面以下　腐植土中
W892	用途不明部材	用途不明	(29.3)	13.7	1.4	Ⅻ		96年度　東側溝
W893	用途不明部材	用途不明	25.9	14.1	1.1	ⅨD	SD54002	
W894	用途不明部材	用途不明	14.7	3.6	2.3	Ⅻ	SD68001	
W895	用途不明部材	用途不明	3.8	4.4	4.5	ⅦA	SD55001	
W896	用途不明部材	用途不明	63.0	53.7	—	Ⅲ	SD54001	
W897	竹製品	墨引き	15.4 14.7	1.4 0.8	1.6 0.7	ⅦA	SD54004	
W898	竹製品	竹篦	9.3	2.5	0.7	ⅦC		95－4面
W899	竹製品	刀子状竹製品	(16.0)	1.5	0.4	ⅦC		95－4面まで
W900	竹製品	不明（鳴子ヵ）	15.7	2.2	1.7	Ⅻ	SD68001	
W901	竹製品	不明	17.3	(3.3)	(0.8)	Ⅸ		95－5面まで
W902	竹製品	不明	24.9	(4.4)	(4.4)	XⅧ－XX	SD75001	
W903	竹製品	不明	(13.5)	(4.7)	3.8	Ⅷ		95－4a層中
W904	竹製品	不明	35.0	7.9	7.9	ⅣA		95－3面＋1
W960	容器	折敷の一部	14.9	(10.0)	0.5	Ⅻ	96年度　江戸時代水田面	
W961	容器	漆箱の側板	9.8	11.0	0.6			96年度　第一洪水砂
W962	祭祀具	馬形	22.2	(3.2)	0.8	XIX		97年度　奈良～古墳時代相当層
W963	祭祀具	人形	51.2	5.2	0.7	XⅢ		96年度　奈良水田土壌中
W964	祭祀具	人形の脚	31.0	2.0	0.3	ⅥA	SD54001	
W965	祭祀具	斎串	22.7	2.8	0.2	Ⅻ	SD54002	
W966	祭祀具	斎串	44.0	1.8	0.5	Ⅻ		96年度　下層水田Ⅴまで
W967	祭祀具	斎串	(14.9)	1.8	0.3	XI－XIV	96年度　下層水田Ⅴ	96－12面
W968	紡績具	紡錘車	(4.7)	(3.0)	(0.9)	XI－XII		96年度　奈良水田土壌
W969	容器	漆杯	(12.5)	5.1	(5.8)	XⅢ	96年度　下層水田	
W970	容器	柄杓	18.4 (23.5)	6.9 2.0	7.8 0.8	XⅦ	97年度　下層水田（鎌倉）	
W971	容器	大型曲物の底板	64.0	11.9	1.2	Ⅻ		96年度　下層水田Ⅴまで
W972	容器	大型曲物の底板	(49.4)	(10.9)	1.0	XV－XVII		97年度　奈良時代水田土壌中ヵ
W973	容器	曲物の蓋板	18.4	11.2	0.7	XⅧ		97年度　平安時代ヵ
W974	農具or漁具	籾掏いor閼伽掏いの柄	(17.7)	(6.4)	5.6	XIV		96年度　下層水田Ⅴまで
W975	農具	棒状木製品	70.2	4.1	2.9	XV－XVII		97年度　鎌倉～奈良
W976	農具	鍬等の柄ヵ	60.6	5.7	2.5	XIX－XX	鎌倉水田	97－8面
W977	農具	田下駄	32.9	20.4	1.9	XIX－XX	鎌倉水田	97－8面
W978	農具	田下駄	46.5	12.8	2.0	XIX－XX	鎌倉水田	97－8面
W979	農具	田下駄	54.6	11.6	1.8	XI	96－12面　木器群	下層水田Ⅴ
W980	農具	田下駄	88.9	55.9	6.0	XI－XIII		96－8面まで
W981	農具	田下駄	108.6	3.4	2.9	XI	96年度　下層水田Ⅴ	96－12面
W982	部材	腰掛けの座板	(51.3)	23.2	1.5	—		97年度
W983	部材	壁材or床板材ヵ	62.8	23.7	2.5	XIX－XX	鎌倉水田	97－8面
W984	部材	壁材ヵ	73.6	20.3	2.9	—	鎌倉水田	97－8面
W985	部材	壁材or床板材ヵ	102.3	15.0	4.8	—	鎌倉水田	97－8面
W986	部材	壁材ヵ	96.3	115.2	1.7	XI	96年度　下層水田Ⅴ	96－12面
W987	部材	壁材or床板材ヵ	78.3	20.8	3.3	—	鎌倉水田	97－8面
W988	部材	不明	53.8	10.8	1.3	XI	96年度　下層水田Ⅴ	96－12面
W989	部材	不明	73.1	11.3	8.5	XI	96年度　下層水田Ⅴ	96－12面
W990	部材	棟木ヵ	111.2	17.0	6.4	XIV	96年度　下層水田Ⅴ	96－12面
W991	部材	棒状木製品	111.9	3.9	3.3	XIV	96年度　下層水田Ⅴ	
W992	部材	棒状木製品	69.4	5.2	3.4	XI	96－12面　木器群	
W993	部材	棒状木製品	70.4	3.0	3.0	XⅢ	96年度　鎌倉畦畔	
W994	部材	札状木製品	49.2	3.7	1.3	XVI－XIX		97年度　奈良ヵ
W995	部材	付け札状木製品	26.2	5.0	1.1	XV-XVII		97年度　鎌倉～奈良
W996	縄類	縄類	—	—	—	ⅣC	SD52002	
W997	容器	折敷	38.0	2.3	0.3	Ⅲ	SD54001	

第36表　出土骨角製品観察表

報告番号	器種	法量（cm）		地区	面	出土遺構
		直径	厚み			
B1	双六駒石	1.5	0.35	—	—	北壁
B2	不明品	1.7	0.8	ⅣC	95－5面	

報告書抄録

ふりがな	みやうちほりわき遺跡
書名	宮内堀脇遺跡
副書名	(一) 町分久美浜線道路改良事業に伴う発掘調査報告書
巻次	Ⅰ
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第365冊
編著者名	西口圭介・岡田章一・篠宮　正・岡本一秀・岡　昌秀・鈴木敬二・松井　章・丸山真史・橋本裕子・伊東隆夫・北野信彦・古環境研究所・青木哲哉
編集機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675－0142　兵庫県加古郡播磨町大中500　　Tel　079－437－5589
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650－8567　神戸市中央区下山手通５丁目10－１　　Tel　078－341－7711
発行年月日	2009（平成21）年３月18日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
宮内堀脇遺跡	兵庫県豊岡市出石町宮内	28561	620383	35度29分９秒	134度52分５秒	確認調査 1994年12月12日 ～12月14日 本発掘調査 （１次～３次） 1995年８月23日 ～98年２月21日	確認調査 250㎡ 本発掘調査 （１次～３次） 3,313㎡	(一)県道町分久美浜線道路改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮内堀脇遺跡	武家屋敷・水田・畠	縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代 戦国時代	 水田 水田 水田 水田 水田 掘立柱建物跡・礎石建物跡・堀・土塁・区画溝	石英石鏃 弥生土器 土師器甕・農具・加工材 須恵器・農具・加工材 木製祭祀具 須恵器 墨書土師器皿群・貿易陶磁・越前焼・在地産土器・木簡・漆器・兜鍬形台ほか金属製品	山名氏に関連する武家屋敷遺構群

要約	弥生時代後期から幕末にかけての遺構面が調査されている。主な遺構は、但馬国守護山名氏に関連した武家屋敷遺構であり、15世紀末～16世紀末の100年間に形成されている。２本の紀年銘木簡を含む、多量の文字資料、木製品、金属製品、貿易陶磁が出土している。越前焼が多く持ち込まれており、日本海側を経由する物流の活発さが如実に分かる。 また、下層には律令祭祀具を含む包含層が存在する。

＊緯度・経度は平成14年４月１日施行の測量法改正による世界測地系にもとづく値である。

兵庫県文化財調査報告　第365冊

豊岡市出石町

宮内堀脇遺跡Ⅰ

（一）町分久美浜線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
（此隅山城下遺跡の発掘調査報告）

［本文編］

平成21（2009）年３月18日発行

編　集　兵庫県立考古博物館
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中500
発　行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10－１
印　刷　丸山印刷株式会社
〒676-8566　兵庫県高砂市神爪１－11－33